

市 原 市 稲 荷 台 遺 跡

(本 文 編)

2 0 0 3

財団法人 市原市文化財センター

市 原 市 ^い稲 ^{なり}荷 ^{だい}台 遺 跡

(本 文 編)

2 0 0 3

財団法人 市原市文化財センター



稲荷台遺跡E地区航空写真（北から）



稲荷台遺跡E地区航空写真（東から）



37号住居跡覆土
焼土検出状況
(南から)



37号住居跡
床面検出状況



G地区古代道（北から）



2002年調査古代道（竹林の奥がE地区）



1号土器埋納遺構検出状況



5号土器埋納遺構検出状況



5号集石遺構検出状況



2号土器埋納遺構検出状況



2号土器埋納遺構鹿歯検出状況



1号集石遺構検出状況



7号集石遺構上面検出状況



7号集石遺構検出状況



1号土器埋納遺構出土遺物



1号土器廃棄遺構出土遺物



3号土器廃棄遺構出土遺物



8世紀代の墨書土器（左上）「上□」：（右上）「京」：（左下）「市厨」：（右下）「道士」



「貞観十七年十一月廿四日」紀年銘墨書土器外面



同 内面



1号土器埋納遺構出土墨書土器

上



「主」を書く墨書土器



緑釉緑彩花文陶器



鍵型金銅製品



金銅製帯金具



金銅製飾り金具



銅製指輪

序 文

市原市の中央部を北流する養老川は、下流の西広あたりで台地に阻まれ、大きく西に向きを変えて東京湾に注いでいます。「国分寺台」と呼ばれるこの台地に、360ヘクタールにおよぶ大規模な土地区画整理事業が計画されたのは昭和45年のことで、これに伴って昭和47年から17年間にわたる発掘調査が実施されてきました。

調査の結果、数多くの遺跡や遺物が発見されました。中でも、昭和63年に公開された稲荷台1号墳出土の「王賜」銘鉄剣は、わが国で書かれた最古の文字資料として、今なお全国的に話題を提供しているところです。

今回報告する稲荷台遺跡は、昭和53～55年度に山田橋地区で行われた発掘調査です。調査では官衙的な施設を中心とする遺構群が検出され、資料整理の過程で国府所在地の解明に大きな一石を投じる成果を挙げることができました。また、平安時代の雅を物語る最高級の施釉陶器が祭祀遺構から多数発見されるなど、いにしえの人々の呪術的精神文化の解明などに欠かすことのできない多くの資料も、得ることができました。

本書は、これらの成果を纏めたものです。国分寺台地区の報告書としては、10遺跡目にあたります。

この報告書が、学術資料としてはもとより、市民の方々に広く活用され、市原市の古代史解明に役立つことを願ってやみません。

遺跡の発掘調査ならびに報告書刊行にあたって、多くの方々にご尽力いただきました。

文化庁文化財部記念物課・千葉県教育庁文化財課・市原市国分寺台土地区画整理組合・上総国分寺台遺跡調査団・（財）市原市文化財センターをはじめとする関係各位に対しまして、深く感謝するものでございます。

また、現場調査にあたって終始ご指導いただきました故滝口宏先生・故平野元三郎先生に謝意を表しますとともに、お名前をここに明記し、報告書の刊行をご報告する次第であります。

平成15年 3 月

市原市教育委員会

教育長 竹 下 徳 永

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市山田橋字稲荷台地先に所在した集落跡として調査を行った範囲の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、市原市教育委員会の委託を受け、市原市教育委員会の指導のもと、上総国分寺台遺跡調査会が実施し、整理・報告事業は財団法人市原市文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、上総国分寺台遺跡調査会団長滝口宏指導のもと、当時同調査団副団長であった平野元三郎が代表を務めていた平野考古学研究所が中心となり実施し、調査員に谷島一馬・對馬郁夫があたった。
4. 発掘調査期間および調査担当者は以下のとおりである。

発掘調査	昭和53年1月～昭和55年8月	平野元三郎・谷島一馬・對馬郁夫
整理作業	平成12年1月～平成15年12月	浅利幸一
5. 本書の編集は浅利幸一が行った。執筆は第3章「平安施釉陶器の編年」坂野和信氏（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査副部長）、「稲荷台遺跡の祭祀関連遺構について」笹生衛氏（千葉県立安房博物館学芸員）・「8世紀代の墨書土器から見た稲荷台遺跡」田所真氏（市原市教育委員会）が担当した。人骨所見は、聖マリアンナ医科大学解剖学研究室の平田和明・星野敬吾両氏に玉稿賜った。縄文土器解説は山田貴久・写真撮影は高橋康男と浅利が行った。
6. 遺跡の方位について。発掘調査は磁北の任意座標で行っていたが、E地区の調査途中より座標北とした。本書に示した方位は座標北に直し掲載した。本書に設定したグリッドは任意で組み、E地区は任意座標と公共座標値を示した。
7. 本書で使用した地形図は以下のとおりである。第1図は国土地理院発行1/25,000地形図「五井」・「蘇我」・「姉崎」「海士有木」、第2図は市原市都市計画図1/10,000（平成7年度）を使用した。第3図は市原市地形図1/3,000（昭和38年度）を元に一部修正した。第4図は千葉県地方方法務局市原出張所が保管する明治9年に千葉県が作成した「上総國市原郡市原村大字地図帳」を参考に国学院大学文学部教授木下良氏・吉田敏弘氏他の「上総国府推定地歴史地理学的調査団」が作成した図を使用した。
8. 本書に掲載した土器観察表のうち、灰釉陶器観察表は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の坂野和信氏、緑釉陶器観察表は財団法人京都市埋蔵文化財研究所平尾政幸氏等の両氏の作成した調査表を元に作成したものである。緑釉観察表の時期は、平安京土器編年による。また、第6表「年表」と第7表「上総国司任官表」は國學院大學大学院鴨居真純が作成した。
9. 遺構図面の縮尺は住居跡1/80・土坑1/50、それ以外は適宜とした。遺物に関しては、土器は1/3・鉄器1/2を原則とし、そのつど縮尺を明記した。
10. 発掘調査参加者名
補助員：山崎信明・渡辺 幸・山田秋江・山崎節子・松本英世（以上5名富津市上総湊）、鈴木英啓（千葉市）、永野康雄（上高根）、宮原寿子（総社）、鈴木きん・吉野よし・建石てる（以上3名郡本地区）、泉水ふみゑ・泉水 育・泉水千代・泉水俊江・泉水とみ子・吉野あき（以上6名藤井地区）、安藤定吉・安藤福太郎・安藤あさ・中村ふく・近藤美智・中村やす・中村八重子・

若菜たみ・若菜文(以上9名山田橋地区)、高橋シズヨ(根田)、野口博芳(教諭)・二見隆夫・小林伸一・三井浩二・佐藤 隆・本吉正美・池田智郁・溜英哲・伊藤英樹・村越 敦・成田信二・戸谷真治・山形延行・石井光雄・高橋昌弘・福原裕一(以上16名鶴舞高等学校郷土史クラブ)、浅利幸一(和光大学人文学部)。(参加者名簿は、当時の協力者から聞き取り調査したものである。)

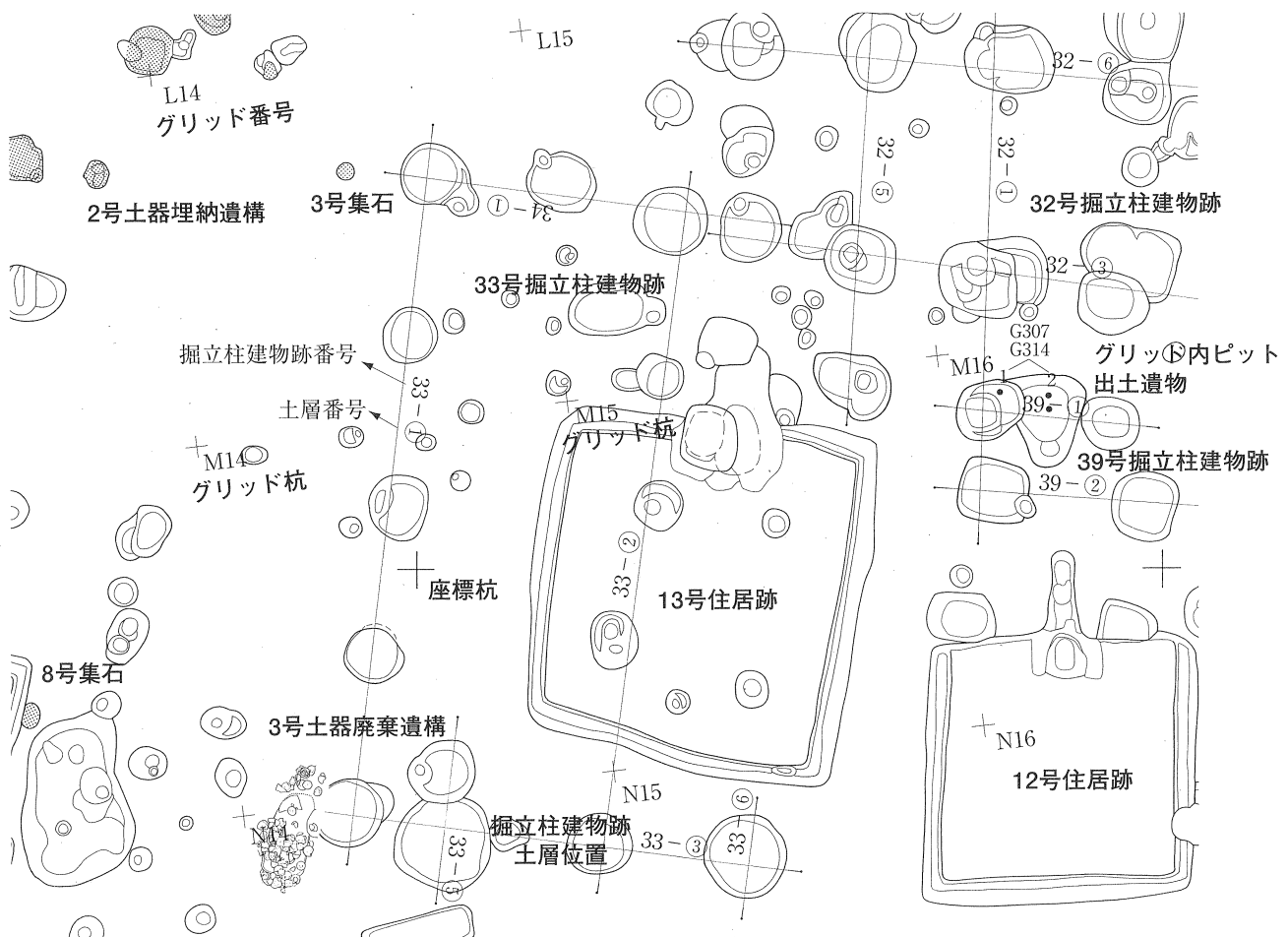
11. 整理作業は財団法人市原市文化財センター補助員が従事し、土器実測は水野陽子・近藤久美・清宮恵子、トレースは半沢敏子・林久美子、挿図組は細田裕子・安倍信代・熱海千里・大塚和美・坂村世紀、遺物等の観察表は清宮きよ子、図版組は細田裕子が主に行った。
12. 発掘調査にかかわる諸事項に関しては、体制がととのっていない時期であったこともあり、曖昧な部分もあり、上記各項目についても、遺漏のある可能性がある。その点については、原稿執筆者の責に帰すものである。

凡 例

1. 竪穴住居跡の本文中に記載した規模の計測値は、壁面下場を計測し、() 内は確認面(上場を表記した。

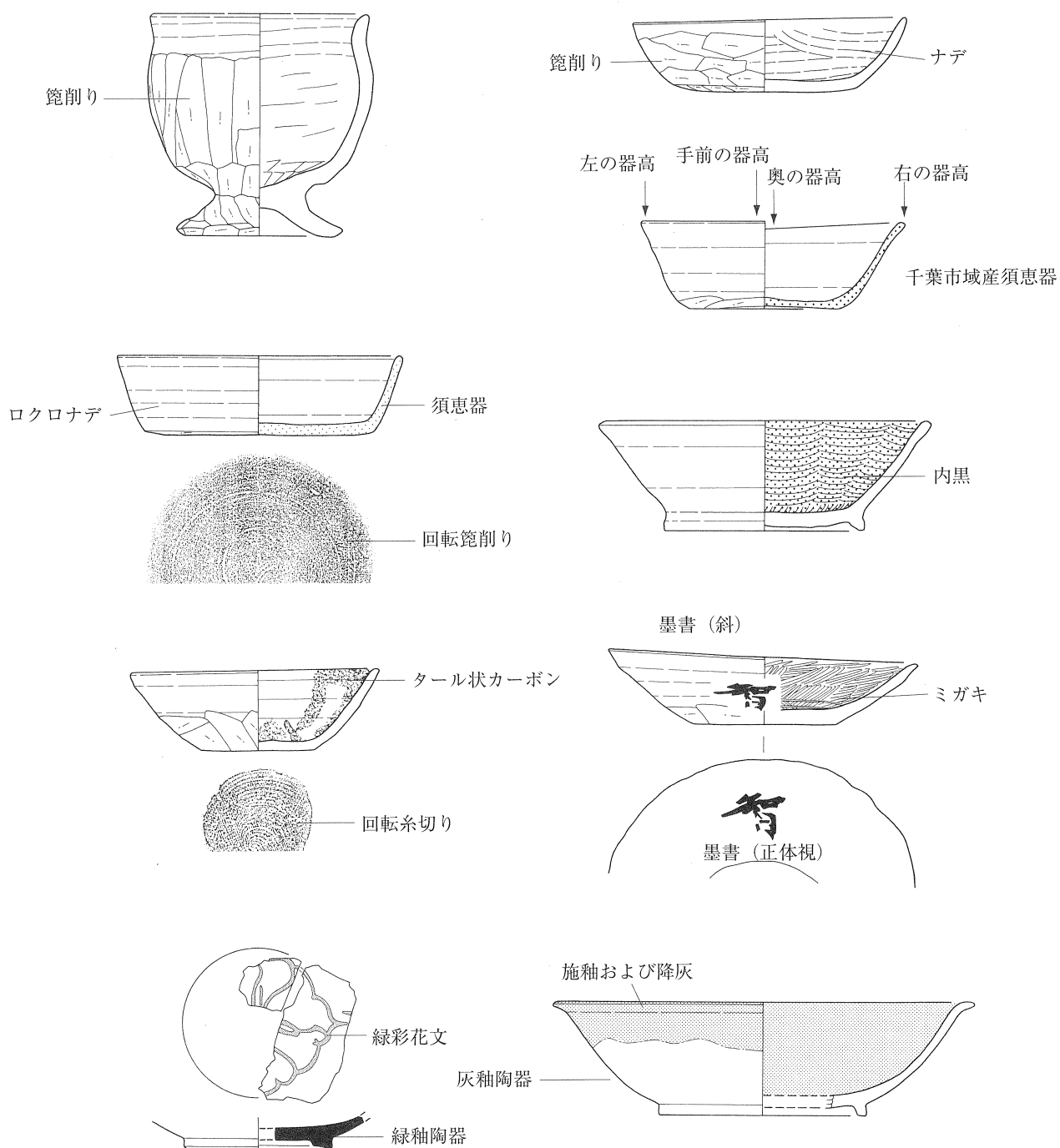
第1表竪穴住居跡一覧表の規模についても、確認面(上場)、床面(壁面下場)の計測値を記した。また、床面積は、縮尺40分の1の図面を元に壁面下場をプランメーターで計測した。

2. 竪穴住居跡床面の状況については、当時の調査員、谷島一馬氏の作業日誌を元にした。
3. 第2表掘立柱建物跡一覧表に記載した尺は、1尺を30cmとした。
4. 第14表～第20表の出土土器観察表の法量は、最大値のみを記載した。
5. 第19図～第27図のE地区詳細図は、下記による。



6. 土器実測（ロクロ土師器坏など）は、正位置に据付、左右・前後の器高を図面上に表現した。また、口縁の水平線は、2分の1以上の遺存であれば実線とし、それ以下の遺存の場合は、遺存の割合に応じ、中心線を基本に口縁の水平線を切り、口縁の遺存が少なければ短くし、多ければ長くした。

7. 土器実測図に示した表現およびスクリーン-tonは、以下のとおりである。



本文目次

稲荷台遺跡目次

第1章 はじめに

- 第1節 調査にいたる経緯
- 第2節 遺跡周辺の歴史的環境
- 第3節 調査方法
- 第4節 調査の概要

第2章 遺構と遺物

- 第1節 竪穴住居跡
- 第2節 掘立柱建物跡とグリッド出土遺物
- 第3節 祭祀遺構（集石・土器埋納・土器廃棄遺構）
- 第4節 溝と古官道
- 第5節 古墳
- 第6節 土坑と出土遺物
- 第7節 その他の出土遺物
- 第8節 稲荷台1～6号墳出土の平安時代の土器
- 第9節 施釉陶器

第3章 まとめ

- 第1節 墨書土器について
- 第2節 稲荷台遺跡時期区分と変遷
- 第3節 8世紀代の墨書土器から見た稲荷台遺跡……………田所 真
- 第4節 稲荷台遺跡の祭祀関連遺構について……………笹生 衛
- 第5節 平安施釉陶器の編年……………坂野和信

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (国土地理院2万5千分の1蘇我・姉崎・海士有木)	4	第51図	15号住居跡	82
第2図	市原台地の古代道と関連遺跡 (市原市計画図 平成7年)	5	第52図	15号住居跡出土遺物	83
第3図	国分寺台遺跡群主要遺跡分布図	7	第53図	16～18号住居跡と16号住居跡出土遺物	84
第4図	遺跡周辺の字切り図(明治9年頃) (「上総国府推定地歴史地理学的調査報告書」掲載)	10	第54図	17号住居跡出土遺物	85
第5図	遺跡周辺の現況図と字切り図 (「同上」:現況図は市原市地形図 平成7年)	11	第55図	19号住居跡と出土遺物	86
第6図	遺跡周辺の地形図と調査範囲 (国分寺台区画整理事業現況図 昭和44年測量)	12	第56図	20号住居跡と出土遺物	87
第7図	稲荷台遺跡全体図	15	第57図	21号住居跡と出土遺物	89
第8図	A地区グリッド配置図	22	第58図	21号住居跡出土遺物	90
第9図	A地区遺構配置図	23	第59図	21号住居跡出土遺物	91
第10図	B地区グリッド配置図	24	第60図	22号住居跡と出土遺物	92
第11図	B地区遺構配置図	25	第61図	23・24・25号住居跡	93
第12図	C地区グリッド配置図	26	第62図	23号住居跡出土遺物	94
第13図	C地区遺構配置図	27	第63図	24号住居跡と出土遺物	95
第14図	D地区グリッドと遺構配置図	28	第64図	24・25号住居跡出土遺物	97
第15図	F地区グリッドと遺構配置図	29	第65図	23・24・25号住居跡出土遺物	98
第16図	E地区詳細図区割図	30	第66図	23・24・25号住居跡出土遺物	99
第17図	E地区グリッド配置図	31	第67図	26号住居跡と出土遺物	100
第18図	E地区遺構配置図	33	第68図	27号住居跡	101
第19図	E地区詳細図(1)	35	第69図	27号住居跡出土遺物	103
第20図	E地区詳細図(2)	37	第70図	27号住居跡出土遺物	104
第21図	E地区詳細図(3)	39	第71図	28号住居跡	105
第22図	E地区詳細図(4)	41	第72図	28号住居跡出土遺物	106
第23図	E地区詳細図(5)	43	第73図	29号住居跡	108
第24図	E地区詳細図(6)	45	第74図	29号住居跡出土遺物	109
第25図	E地区詳細図(7)	47	第75図	29号住居跡出土遺物	110
第26図	E地区詳細図(8)	49	第76図	30号住居跡と出土遺物	111
第27図	E地区詳細図(9)	51	第77図	30号住居跡出土遺物	112
第28図	1号住居跡と出土遺物	56	第78図	31号住居跡	113
第29図	2号住居跡	57	第79図	31号住居跡出土遺物	114
第30図	2号住居跡出土遺物	58	第80図	31号住居跡出土遺物	115
第31図	2号住居跡出土遺物	59	第81図	32号住居跡	116
第32図	3号住居跡	60	第82図	32号住居跡出土遺物	117
第33図	3号住居跡出土遺物	61	第83図	33号住居跡と出土遺物	118
第34図	4号住居跡	62	第84図	33号住居跡出土遺物	119
第35図	4号住居跡出土遺物	63	第85図	33号住居跡出土遺物	120
第36図	5号住居跡と出土遺物	65	第86図	34号住居跡と出土遺物	121
第37図	6号住居跡	66	第87図	35号住居跡と出土遺物	122
第38図	6号住居跡出土遺物	67	第88図	36号住居跡と出土遺物	123
第39図	7・8号住居跡と出土遺物	68	第89図	36号住居跡出土遺物	124
第40図	9号住居跡	69	第90図	37号住居跡と遺物出土状況	126
第41図	10号住居跡	70	第91図	37号住居跡覆土遺物出土状況	127
第42図	10号住居跡出土遺物	71	第92図	37号住居跡出土遺物	128
第43図	11号住居跡	72	第93図	37号住居跡出土遺物	129
第44図	11号住居跡出土遺物	74	第94図	37号住居跡出土遺物	130
第45図	12号住居跡と出土遺物	75	第95図	37号住居跡出土遺物	131
第46図	12号住居跡出土遺物	76	第96図	37号住居跡出土遺物	132
第47図	13号住居跡	77	第97図	38・39号住居跡	134
第48図	13号住居跡出土遺物	79	第98図	38号住居跡出土遺物	135
第49図	13号住居跡出土遺物	80	第99図	38・39号住居跡出土遺物	136
第50図	14号住居跡と出土遺物	81	第100図	40号住居跡と出土遺物	138
			第101図	41・42・43・44号住居跡	139
			第102図	41号住居跡出土遺物	140
			第103図	42号住居跡出土遺物	141
			第104図	43号住居跡出土遺物	142
			第105図	44号住居跡出土遺物	143
			第106図	45号住居跡と出土遺物	144
			第107図	45号住居跡出土遺物	145
			第108図	46・47号住居跡	147
			第109図	46・47号住居跡出土遺物	148

第110図	47号住居跡出土遺物	149	第171図	43～45号掘立柱建物跡平面図	221
第111図	48号住居跡と出土遺物	150	第172図	43～45号掘立柱建物跡掘方断面と略図	222
第112図	49号住居跡と出土遺物	151	第173図	43～45号掘立柱建物跡出土遺物	223
第113図	49号住居跡出土遺物	152	第174図	E地区グリッド出土遺物 (1)	225
第114図	50号住居跡	152	第175図	E地区グリッド出土遺物 (2)	227
第115図	51号住居跡と出土遺物	153	第176図	E地区グリッド出土遺物 (3)	228
第116図	51号住居跡出土遺物	154	第177図	E地区グリッド出土遺物 (4)	229
第117図	52・53号住居跡と出土遺物	156	第178図	E地区グリッド出土遺物 (5)	231
第118図	54号住居跡と出土遺物	157	第179図	E地区グリッド出土遺物 (6)	232
第119図	55号住居跡と出土遺物	157	第180図	E地区グリッド出土遺物 (7)	233
第120図	56号住居跡	159	第181図	E地区グリッド出土遺物 (8)	234
第121図	56号住居跡出土遺物	160	第182図	E地区グリッド出土遺物 (9)	235
第122図	56号住居跡出土遺物	161	第183図	E地区グリッド出土遺物 (10)	237
第123図	57号住居跡と出土遺物	163	第184図	E地区グリッド出土遺物 (11)	238
第124図	58・59号住居跡と出土遺物	164	第185図	E地区グリッド出土遺物 (12)	239
第125図	58号住居跡出土遺物	165	第186図	E地区グリッド出土遺物 (13)	240
第126図	59号住居跡出土遺物	166	第187図	E地区グリッド出土遺物 (14)	241
第127図	60号住居跡と出土遺物	166	第188図	E地区グリッド出土遺物 (15)	243
第128図	61号住居跡と出土遺物	167	第189図	E地区グリッド出土遺物 (16)	244
第129図	62号住居跡	168	第190図	E地区グリッド出土遺物 (17)	245
第130図	62号住居跡出土遺物	169	第191図	E地区グリッド出土遺物 (18)	246
第131図	63号住居跡と出土遺物	170	第192図	E地区グリッド出土遺物 (19)	247
第132図	64号住居跡と出土遺物	171	第193図	E地区グリッド出土遺物 (20)	248
第133図	65・66号住居跡と出土遺物	172	第194図	E地区グリッド出土遺物 (21)	249
第134図	67・68号住居跡	174	第195図	E地区グリッド出土遺物 (22)	250
第135図	67号住居跡出土遺物	175	第196図	E地区祭祀遺構分布図	252
第136図	68号住居跡出土遺物	175	第197図	1号土器埋納遺構 (1)	253
第137図	69号住居跡と出土遺物	176	第198図	1号土器埋納遺構 (2)	254
第138図	70号住居跡と出土遺物	177	第199図	1号土器埋納遺構出土遺物 (1)	255
第139図	71号住居跡と出土遺物	178	第200図	1号土器埋納遺構出土遺物 (2)	256
第140図	71号住居跡出土遺物	179	第201図	1号土器埋納遺構出土遺物 (3)	257
第141図	72号住居跡と出土遺物	180	第202図	1号土器埋納遺構墨書 (4)	258
第142図	73号住居跡と出土遺物	181	第203図	2号土器埋納遺構	259
第143図	73号住居跡出土遺物	183	第204図	2号土器埋納遺構出土遺物	260
第144図	74号住居跡と出土遺物	184	第205図	3号土器埋納遺構と出土遺物	261
第145図	75号住居跡	185	第206図	4号土器埋納遺構と出土遺物	262
第146図	76号住居跡	185	第207図	5号土器埋納遺構と出土遺物	263
第147図	77号住居跡と出土遺物	187	第208図	1号集石遺構と出土遺物	264
第148図	78号住居跡と出土遺物	188	第209図	2号集石遺構	265
第149図	79号住居跡と出土遺物	189	第210図	3号集石遺構	265
第150図	E地区西側建物配置図	191	第211図	4号集石遺構と出土遺物	266
第151図	E地区東側建物配置図	193	第212図	5号集石遺構	267
第152図	1～2号掘立柱建物跡掘方断面と略図	196	第213図	5号集石遺構出土遺物	268
第153図	3～6号掘立柱建物跡掘方断面と略図	197	第214図	6号集石遺構と出土遺物	269
第154図	7～9号掘立柱建物跡掘方断面と略図	199	第215図	7号集石遺構	270
第155図	10～12号掘立柱建物跡掘方断面と略図	200	第216図	7号集石遺構出土遺物	271
第156図	13～15号掘立柱建物跡掘方断面と略図	201	第217図	8号集石遺構と出土遺物	272
第157図	16～18号掘立柱建物跡掘方断面と略図	203	第218図	1号土器廃棄遺構 (1)	274
第158図	19～21号掘立柱建物跡掘方断面と略図	204	第219図	1号土器廃棄遺構 (2)	275
第159図	22～24号掘立柱建物跡掘方断面と略図	205	第220図	1号土器廃棄遺構出土遺物 (1)	276
第160図	25～30号掘立柱建物跡	208	第221図	1号土器廃棄遺構出土遺物 (2)	277
第161図	25～26号掘立柱建物跡掘方断面と略図	209	第222図	1号土器廃棄遺構出土遺物 (3)	278
第162図	27号掘立柱建物跡掘方断面と略図	210	第223図	1号土器廃棄遺構出土遺物 (4)	279
第163図	28号掘立柱建物跡掘方断面と略図	211	第224図	1号土器廃棄遺構出土遺物 (5)	280
第164図	28～30号掘立柱建物跡掘方断面と略図	212	第225図	1号土器廃棄遺構出土遺物 (6)	281
第165図	31号掘立柱建物跡掘方断面と略図	213	第226図	2号土器廃棄遺構 (1)	283
第166図	32号掘立柱建物跡掘方断面と略図	214	第227図	2号土器廃棄遺構 (2)	284
第167図	33～34号掘立柱建物跡掘方断面と略図	216	第228図	2号土器廃棄遺構出土遺物 (1)	285
第168図	35～38号掘立柱建物跡掘方断面と略図	217	第229図	2号土器廃棄遺構出土遺物 (2)	286
第169図	39～41号掘立柱建物跡掘方断面と略図	218	第230図	3号土器廃棄遺構 (1)	287
第170図	42号掘立柱建物跡掘方断面と略図	220	第231図	3号土器廃棄遺構 (2)	288

第232図	3号土器廃棄遺構出土遺物(1)	289
第233図	3号土器廃棄遺構出土遺物(2)	290
第234図	3号土器廃棄遺構出土遺物(3)	291
第235図	3号土器廃棄遺構出土遺物(4)	292
第236図	3号土器廃棄遺構出土遺物(5)	293
第237図	4号土器廃棄遺構出土遺物	294
第238図	1号溝と土層断面	296
第239図	1号溝出土土器と古銭	297
第240図	2・3号溝(1)	299
第241図	2・3号溝(2)	300
第242図	2号溝出土遺物(1)	301
第243図	2号溝出土遺物(2)	302
第244図	5・6号溝	303
第245図	古代道(1)	305
第246図	古代道(2)	306
第247図	稲荷台7号墳	308
第248図	稲荷台8号墳	309
第249図	稲荷台9号墳	310
第250図	稲荷台10号墳	311
第251図	稲荷台10号墳出土遺物	312
第252図	土坑(1)	315
第253図	土坑(2)	316
第254図	土坑(3)	317
第255図	土坑(4)	318
第256図	土坑(5)	319
第257図	土坑(6)	320
第258図	土坑(7)	321
第259図	土坑(8)	322
第260図	土坑(9)	323
第261図	土坑(10)	324
第262図	土坑(11)	325
第263図	土坑(12)	326
第264図	土坑(13)	327
第265図	土坑(14)	328
第266図	土坑(15)	329
第267図	土坑(16)	331
第268図	稲荷台遺跡出土の縄文土器	334
第269図	A地区出土遺物と各地区の出土古銭	335
第270図	E地区出土遺物(1)	336
第271図	E地区出土遺物(2)	337
第272図	E地区出土遺物(3)	338
第273図	E地区出土遺物(4)	339
第274図	E地区出土遺物(5)	340
第275図	E地区出土遺物(6) 墨書	341
第276図	E地区出土遺物(7) 墨書	342
第277図	E地区出土遺物(8) 墨書	343
第278図	E地区出土遺物(9) 土錘	345
第279図	E地区出土遺物(10) 砥石	347
第280図	E地区出土遺物(11) 石器	348
第281図	E地区出土遺物(12) 金属製品1	350
第282図	E地区出土遺物(13) 金属製品2	351
第283図	E地区出土遺物(14) 金属製品3	355
第284図	E地区出土遺物(15) 金属製品4	356
第285図	E地区出土遺物(16) 金属製品5	357
第286図	E地区出土遺物(17) 金属製品6	358
第287図	E地区出土遺物(18) 金属製品7	359
第288図	E地区出土遺物(19) 線刻土器と特殊な土器	360
第289図	E地区出土遺物(20) 暗文花文土器1	362
第290図	E地区出土遺物(21) 暗文花文土器2	363
第291図	稲荷台出土瓦拓影図(1)	366
第292図	稲荷台出土瓦拓影図(2)	367

第293図	稲荷台出土瓦拓影図(3)	368
第294図	古墳群出土の平安時代の土器(1)	370
第295図	古墳群出土の平安時代の土器(2)	371
第296図	古墳群出土の平安時代の土器(3)	372
第297図	古墳群出土の平安時代の土器(4)	373
第298図	古墳群出土の平安時代の土器(5)	374
第299図	古墳群出土の平安時代の土器(6)	375
第300図	古墳群出土の平安時代の土器(7)	376
第301図	古墳群出土の平安時代の土器(8)	377
第302図	古墳群出土の平安時代の土器(9)	378
第303図	古墳群出土の平安時代の土器(10)	379
第304図	古墳群出土の平安時代の土器(11)	380
第305図	古墳群出土の平安時代の土器(12)	381
第306図	稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(1)	384
第307図	稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(2)	385
第308図	稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(3)	386
第309図	稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(4)	387
第310図	稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(5)	388
第311図	稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(6)	389
第312図	稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(7)	390
第313図	稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(8)	391
第314図	稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(9)	392
第315図	稲荷台遺跡出土の緑釉陶器(1)	393
第316図	稲荷台遺跡出土の緑釉陶器(2)	394
第317図	稲荷台遺跡出土の緑釉陶器(3)	395
第318図	稲荷台遺跡施釉陶器出土位置図	397
第319図	稲荷台遺跡E地区灰釉陶器出土位置図	399
第320図	稲荷台遺跡E地区緑釉陶器出土位置図	401
第321図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(1)	409
第322図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(2)	410
第323図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(3)	411
第324図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(4)	412
第325図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(5)	413
第326図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(6)	414
第327図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(7)	415
第328図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(8)	416
第329図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(9)	417
第330図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(10)	418
第331図	稲荷台遺跡出土の墨書土器(11)	419
第332図	稲荷台遺跡墨書土器出土位置図	421
第333図	稲荷台遺跡E地区墨書土器出土位置図	423
第334図	稲荷台遺跡E地区変遷図(A期・I期)	426
第335図	稲荷台遺跡E地区変遷図(Ⅱ期—a・Ⅱ期—b)	427
第336図	稲荷台遺跡E地区変遷図(Ⅲ期—a・Ⅲ期—b)	428
第337図	稲荷台遺跡E地区変遷図(Ⅳ期・Ⅴ期)	429

平安施釉陶器の編年

第1図	高台型の分類Ⅰ(碗類)	454
第2図	高台型の分類Ⅱ(皿類)	455
第3図	A期・B期須恵器	461
第4図	稲荷台Ⅰ期新相からⅡ期古相	462
第5図	稲荷台Ⅱ期古相	467
第6図	稲荷台Ⅱ期新相	468
第7図	稲荷台Ⅲ期古相	471
第8図	稲荷台Ⅲ期新相	472
第9図	稲荷台Ⅳ期古相	474
第10図	稲荷台Ⅳ期新相	475
第11図	稲荷台Ⅴ期古相	478
第12図	稲荷台遺跡住居跡出土の灰釉陶器Ⅰ	481
第13図	稲荷台遺跡住居跡出土の灰釉陶器Ⅱ	483
第14図	祭祀遺構出土の施釉陶器	485
第15図	施釉陶器編年Ⅰ	489

第16図	施釉陶器編年Ⅱ	490	第20図	緑彩花文類の出土例	506
第17図	消費地と生産地の施釉陶器Ⅰ	498	第21図	陰刻花文の分類Ⅰ	508
第18図	消費地と生産地の施釉陶器Ⅱ	500	第22図	陰刻花文の分類Ⅱ	509
第19図	緑彩花文のタイプ分類	505	第23図	陰刻花文の分類Ⅲ	510

表 目 次

第1表	竪穴住居跡一覧表	54	第11表	稲荷台遺跡E地区祭祀関連遺構一覧	440
第2表	掘立柱建物跡一覧表	195	第12表	年 表 (参考資料)	525
第3表	古銭一覧表	298	第13表	上総国司任官表 (参考資料)	528
第4表	古墳計測表	310	第14表	竪穴住居跡出土遺物観察表	530
第5表	土坑一覧表	314	第15表	掘立柱建物跡およびグリッド出土土器観察表	549
第6表	土製品観察表	344	第16表	祭祀遺構等出土遺物観察表	557
第7表	石器等観察表	346	第17表	溝・土坑・一括出土遺物観察表等	564
第8表	金属製品観察表	352	第18表	古墳群出土土器観察表	569
第9表	線刻・暗文土器観察表	364	第19表	施釉陶器観察表	574
第10表	墨書土器一覧表	406	第20表	緑釉陶器観察表	580

写真図版目次

巻頭カラー 1	上：稲荷台遺跡E地区航空写真（北から） 下：稲荷台遺跡E地区航空写真（東から）	巻頭カラー 5	上：1号土器埋納遺構出土遺物 中：1号土器廃棄遺構出土遺物 下：3号土器廃棄遺構出土遺物
巻頭カラー 2	上：37号住居跡覆土焼土検出状況 中：37号住居跡床面検出状況 下左：G地区古代道 下右：2002年度調査古代道	巻頭カラー 6	上：8世紀代の主な墨書土器 下左：「貞観十七年」紀年銘墨書土器外面 下右：同 内面
巻頭カラー 3	上：1号土器埋納遺構検出状況 中：5号土器埋納遺構検出状況 下：5号集石遺構検出状況	巻頭カラー 7	上：1号土器埋納遺構出土墨書土器 下：「土」を書く墨書土器
巻頭カラー 4	上左：2号土器埋納遺構 上右：2号土器埋納遺構鹿菌検出状況 中：1号集石遺構検出状況 下左：7号集石遺構上面検出状況 下右：7号集石遺構検出状況	巻頭カラー 8	上：緑釉陶器緑彩花文土器 中左：鍵型金銅製品 中右：金銅製帯金具 下左：金銅製飾り金具 下右：銅製指輪

(写真図版編)

図版 1	昭和22年市原台地航空写真	図版20	31～34号竪穴住居跡
図版 2	国分寺台地区航空写真	図版21	35～36号竪穴住居跡
図版 3	上：稲荷台遺跡E地区航空写真 下：稲荷台遺跡航空写真	図版22	37～39号竪穴住居跡
図版 4	上：A地区調査区全景 中：B地区南側調査区 下：B地区北側調査区	図版23	40～45号竪穴住居跡
図版 5	上：C地区調査区全景と10号墳 中：D地区北側調査区と45号掘立柱建物跡 中：D地区調査区全景 下：F地区調査区全景	図版24	46～49号竪穴住居跡
図版 6	E地区航空測量垂直写真 1	図版25	50～53号竪穴住居跡
図版 7	E地区航空測量垂直写真 2	図版26	54～56号竪穴住居跡
図版 8	E地区航空測量垂直写真 3	図版27	57～61号竪穴住居跡
図版 9	E地区航空測量垂直写真 4	図版28	62～64号竪穴住居跡
図版10	E地区航空測量垂直写真 5	図版29	65～68号竪穴住居跡
図版11	E地区航空測量垂直写真 6	図版30	69～72号竪穴住居跡
図版12	1～3号竪穴住居跡	図版31	73～77号竪穴住居跡
図版13	4～8号竪穴住居跡	図版32	78～79号竪穴住居跡
図版14	9～10号竪穴住居跡	図版33	上：E地区西側南北列掘立柱建物跡群 中：E地区西側南北列掘立柱建物跡群 下：12号掘立柱建物跡
図版15	11～12号竪穴住居跡	図版34	上左：21～24号掘立柱建物跡 上右：21～24号掘立柱建物跡 下：28～30号掘立柱建物跡
図版16	13～15号竪穴住居跡	図版35	上：E地区東側掘立柱建物跡群確認状況 中：E地区東側掘立柱建物跡群 下：E地区東側掘立柱建物跡群
図版17	16～21号竪穴住居跡	図版36	上：A地区42号掘立柱建物跡 中：43～45号掘立柱建物跡調査状況 下：43～45号掘立柱建物跡
図版18	22～28号竪穴住居跡		
図版19	29～30号竪穴住居跡		

図版37 1・2号土器埋納遺構
図版38 3・4号土器埋納遺構と1～4号集石遺構
図版39 5・6号集石遺構
図版40 7号集石遺構
図版41 1～3号土器廃棄遺構
図版42 1号溝と鳥居遺構
図版43 2・3号溝
図版44 稻荷台7・8号墳
図版45 稻荷台9号墳・1号土坑
図版46 2～8号土坑
図版47 9～16号土坑
図版48 16～24号土坑
図版49 25～28号土坑
図版50 29～35号土坑
図版51 36～43号土坑
図版52 44～54号土坑
図版53 55～59号土坑
図版54 1～2号住居跡出土遺物
図版55 3～5号住居跡出土遺物
図版56 6～10号住居跡出土遺物
図版57 10～12号住居跡出土遺物
図版58 12～13号住居跡出土遺物
図版59 13～15号住居跡出土遺物
図版60 15～17号住居跡出土遺物
図版61 17～20号住居跡出土遺物
図版62 21～22号住居跡出土遺物
図版63 23～24号住居跡出土遺物
図版64 24～27号住居跡出土遺物
図版65 27～28号住居跡出土遺物
図版66 29～30号住居跡出土遺物
図版67 30～32号住居跡出土遺物
図版68 32～35号住居跡出土遺物
図版69 35～37号住居跡出土遺物
図版70 37号住居跡出土遺物
図版71 37号住居跡出土遺物
図版72 37～40号住居跡出土遺物
図版73 40～42号住居跡出土遺物
図版74 43～46号住居跡出土遺物
図版75 46～48号住居跡出土遺物
図版76 48～51号住居跡出土遺物
図版77 51～55号住居跡出土遺物
図版78 56号住居跡出土遺物
図版79 56～58号住居跡出土遺物
図版80 59～64号住居跡出土遺物
図版81 66～71号住居跡出土遺物
図版82 71～74号住居跡出土遺物
図版83 77～79号住居跡出土遺物
図版84 1号土器埋納遺構出土遺物
図版85 1号土器埋納遺構出土遺物

図版86 2～5号土器埋納遺構出土遺物
図版87 4～7号集石遺構出土遺物
図版88 1号土器廃棄遺構出土遺物
図版89 1号土器廃棄遺構出土遺物
図版90 1号土器廃棄遺構出土遺物
図版91 1・2号土器廃棄遺構出土遺物
図版92 2号土器廃棄遺構出土遺物
図版93 3号土器廃棄遺構出土遺物
図版94 3号土器廃棄遺構出土遺物
図版95 3・4号土器廃棄遺構出土遺物
図版96 E地区グリッド出土土器(1) 1～39
図版97 E地区グリッド出土土器(2) 40～75
図版98 E地区グリッド出土土器(3) 83～132
図版99 E地区グリッド出土土器(4) 133～172
図版100 E地区グリッド出土土器(5) 176～211
図版101 E地区グリッド出土土器(6) 212～253
図版102 E地区グリッド出土土器(7) 257～346
図版103 2～31号住居跡出土鉄製品
図版104 33～71号住居跡出土鉄製品
図版105 紡錘車・帯金具・銅製品
図版106 グリッド等出土鉄製品
図版107 稻荷台古墳出土の平安時代の土器(1)
図版108 稻荷台古墳出土の平安時代の土器(2)
図版109 稻荷台古墳出土の平安時代の土器(3)
図版110 稻荷台古墳出土の平安時代の土器(4)
図版111 稻荷台古墳出土の平安時代の土器(5)
図版112 稻荷台古墳出土の平安時代の土器(6)
図版113 稻荷台古墳出土の平安時代の土器(7)
図版114 稻荷台古墳出土の平安時代の土器(8)
図版115 稻荷台出土の墨書土器(1) 1～5
図版116 稻荷台出土の墨書土器(2) 6～21
図版117 稻荷台出土の墨書土器(3) 24～72
図版118 稻荷台出土の墨書土器(4) 73～95
図版119 稻荷台出土の墨書土器(5) 96～119
図版120 稻荷台出土の墨書土器(6) 120～146
図版121 稻荷台出土の墨書土器(7) 147～203
図版122 灰釉陶器1～14
図版123 灰釉陶器15～28
図版124 灰釉陶器29～37
図版125 灰釉陶器38～45
図版126 灰釉陶器46～72
図版127 灰釉陶器71～97
図版128 灰釉陶器98～114
図版129 緑釉陶器33～50
図版130 緑釉陶器51～62
図版131 緑釉陶器63～86
図版132 緑釉陶器87～104
図版133 緑釉陶器105～128

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

第3節 調査方法

第4節 調査の概要

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

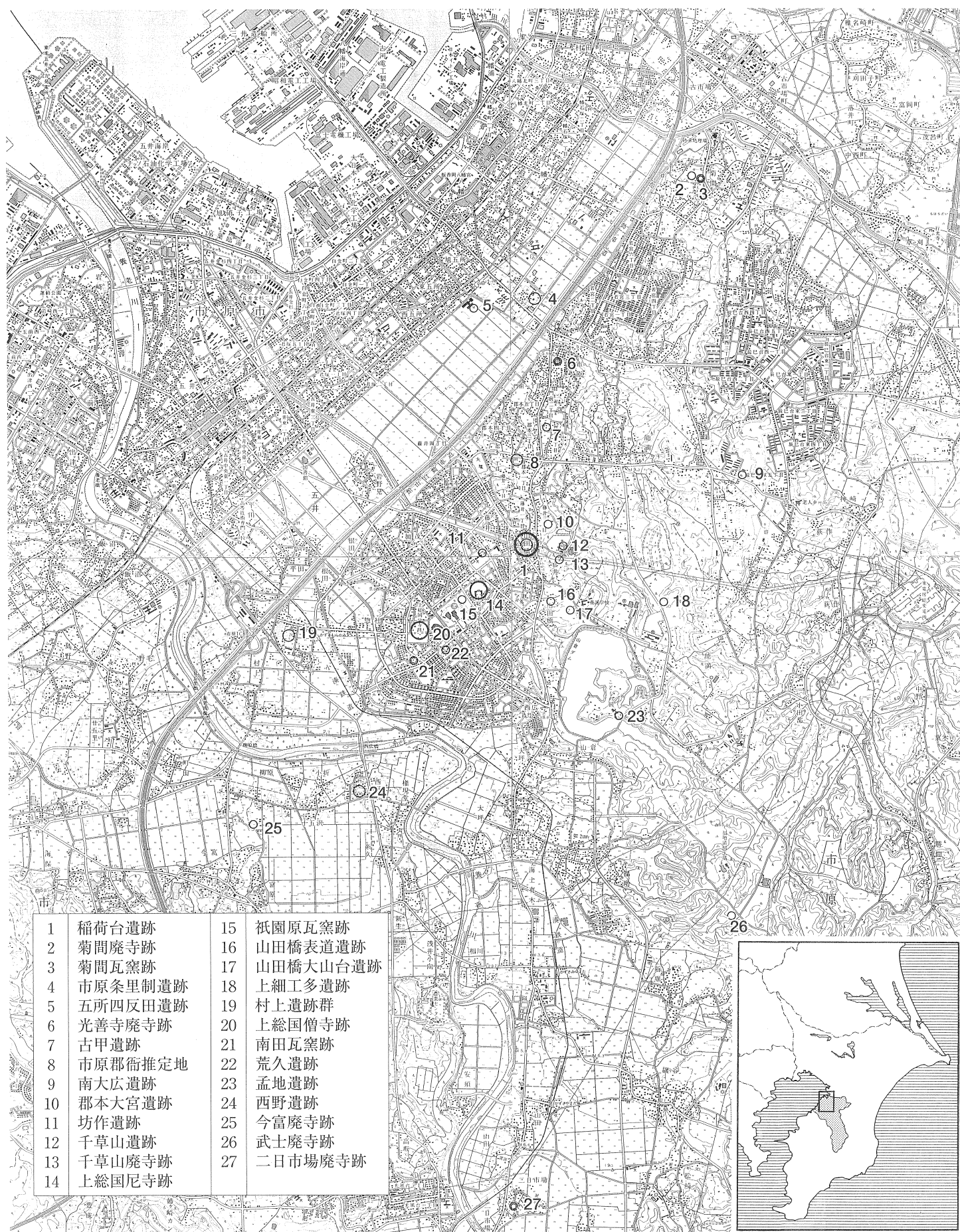
市原市は、昭和38年5月1日、市原町・五井町・三和町・姉崎町・市津町の5町が合併し、面積184.329km²・総人口10万2千人の県下19番目の市として誕生しました。更に、昭和42年10月1日に南総町・加茂村の一町一村が加わり、東西22km・南北36km・面積362,139km²・総人口13万4千人あまりとなり、現在の市域とほぼ同じになりました。平成14年10月1日現在の市の人口は280,800人余りです。

市原市は房総半島中央部の東京湾東岸に面し、海岸線には京葉工業地帯が形成され、昭和30年代から40年代にかけて首都圏や工業地帯のベッドタウンや大規模なゴルフ場などのレジャー施設の建設が展開され急速に発展しました。こうした状況の中、新市庁舎を中心とした新しい街づくりが市原台地南側一帯の国分寺台と呼称される地域に計画され、昭和45年に市原市国分寺台土地区画整理事業組合が設立され、土地造成が開始されました。「国分寺台」の名が示すようにこの台地上には、国分僧寺跡・国分尼寺跡の遺跡の存在が知られ、1250年前には天平の薨を連ねた七堂伽藍の景観が咲き誇っていた地域です。また、「和名類聚抄」には上総国府は市原郡にありと記述され、古来より上総国府跡や関連遺跡の存在が推定される上総国の中心地域でもあります。

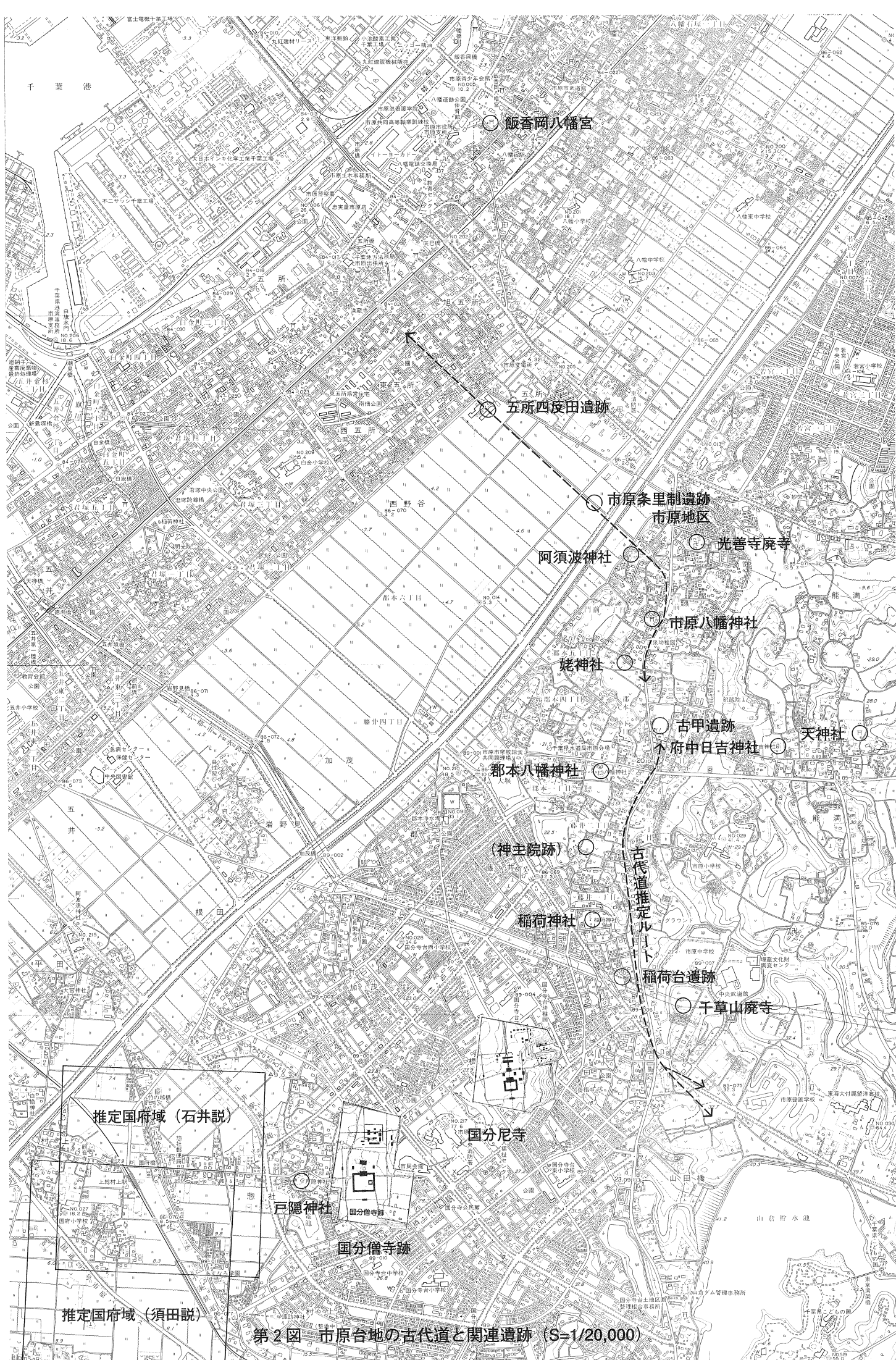
この区画整理事業地内の埋蔵文化財を保護調査するため、昭和46年12月27日付けで市原市文化財審議会切替尊文会長を理事長とする市原市国分寺台埋蔵文化財調査会が組織され、実際の調査を担当する機関として調査会の下に、早稲田大学滝口宏教授を団長に、平野元三郎千葉県知事文化財顧問と市毛勲早稲田実業学校教諭を副団長とした調査団が結成された。翌昭和47年6月24日に、市原市長と市原市国分寺台埋蔵文化財調査会理事長との間に、「市原市国分寺台埋蔵文化財発掘調査委託契約」が締結され、東間部多古墳群の発掘調査を皮切りに国分寺台遺跡群の発掘調査が開始された。

発掘調査は当初、昭和47～49年の3ヵ年で実施する計画で始められたが、調査の進捗に伴い、当初見込まれていた遺跡数が大幅に増加したことや、大規模開発要項の見直しなど当時の社会情勢から計画が大幅に変更され、昭和63年度までの17年間の長期におよぶことになった。調査は進捗する工事側と調査の遅れから難航を極め、調査員不足の解消から、昭和55年には千葉県教育庁の配慮により、専門職員に深澤克友氏・白井久美子氏、56年には永沼律老朗氏、57年には郷田良一氏・森本和男氏が携わった。後、調査には昭和58年度から前年に設立された（財）市原市文化財センターが新たに調査に加わり、調査団は昭和60年3月に解散した。調査団の解散後は（財）市原市文化財センターが調査を引き継ぎ、保存区域や現状換地以外の文化財調査は昭和63年に終了した。

その後、整理報告作業は費用の問題から進捗を見なかったが、文化庁文化財保護部記念物課ならび千葉県教育庁文化課の御配慮により、現地の発掘調査を補助事業で実施した遺跡を対象に整理作業を補助事業として実施する方針が決定した。平成6年度から本格的な補助事業による整理作業が開始することとなり、これを決起に、費用負担の問題が解決され、平成9年度からは、補助事業に加え、事業者負担分の事業が加わり本格的な整理報告作業が開始されている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)



第2図 市原台地の古代道と関連遺跡 (S=1/20,000)

第2節 遺跡の位置と歴史的環境

稲荷台遺跡は、千葉縣市原市山田橋30番地一帯の小字名稲荷台に所在する。同じ遺跡範囲には、我が国最古の文字資料の「王賜」銘鉄剣の出土で著名な稲荷台1号墳をはじめとする11基の稲荷台古墳群が所在している。

房総半島の中央部を北流して洪積台地に行く手を阻まれ西流して東京湾に注ぐ養老川と、嘗ての上総と下総のほぼ国境を西流して東京湾に注ぐ村田川とに挟まれた海岸平野に面する洪積台地は、市原台地とも呼称されている。市原台地は、南北6km、東西3.5km程の広大な地域で、この範囲には縄文時代から中近世に至る数多くの遺跡が分布している。そしてこの市原台地の南西一帯の南北2.7km・東西2.0kmの範囲は国分寺台と呼称されている。市原台地での主要遺跡は、最北端の村田川河口一帯を直接望む台地先端部に菊間国造代々の墓とされる菊間新皇塚古墳や菊間東関山古墳等の大形前方後円墳を主体とする菊間古墳群が形成されて、南西端の養老川河口ならび東京湾を一望する国分寺台地域には出現期古墳の神門古墳群や上総国分二寺を始めとする国分寺台遺跡群が所在し、縄文時代から古代までの数多くの遺跡が確認・調査されている。

稲荷台遺跡は、この市原台地の南西のやや奥まった台地上に所在し、台地を挟む養老川・村田川的主要二河川の水系には属さず、東京湾に直接面する海岸平野に開く小谷に属している。遺跡は、東京湾の旧海岸線より南東方向に直線距離にして約3.5km東に入った位置に在り、海岸平野を見下ろす台地縁辺からは最短距離で1.2kmを測る。遺跡の位置する台地は南に基部を有し、標高27～29.5mで南から北に向かって漸次低くなっている。小谷に挟まれた南北に長い台地平坦面の規模は、調査区のC地区で最小幅の130m、北側のE地点では200m、南北長は500mを計測する。台地は途中で枝分かれし更に北に連なっている。この北に延びる台地は稲荷台遺跡C地区を東西に走る溝を基部とした場合2.2km余りを測り、現在この台地中央には国道297号線が縦断し、北に向かい大字山田橋・藤井・郡本・門前・市原地区の市街地が広がっている。

この台地上には、稲荷台遺跡を始め市原郡衙推定地の郡本八幡神社を中心とした郡本遺跡群・国府推定地の古甲遺跡・国分寺建立以前の光善寺廃寺跡などが在り、郡衙や国衙に関連する遺跡が所在している。また、万葉集20巻には帳丁若麻績部諸人の歌「庭中の阿須波の神に小柴さし吾は斎はむ帰り来るまでに」と歌われた、阿須波の神が市原の阿須波神社に当たるとされ、郡衙に関連するものとして注目される。今ひとつ注目される事に、この台地先端から2km北の旧東京湾海岸線低地の八幡地区に鎮座する、飯香岡八幡宮との関係である。この大字市原の地は、国府八幡宮で総社を兼ねたとされる飯香岡八幡宮の秋大祭に、市原の字飯島の柳で調整された柳盾が用いられる「柳盾神事」の舞台でもある。柳盾は、市原八幡宮で奉告した後に阿須波神社に参って五所地区に向かい、一泊後飯香岡八幡宮に奉納され祭礼が開始される。この神事が国府に関係深いものとされてきた。しかし最近の研究では、本来は山田橋地区の北側の藤井に所在し、今は廃寺となった藤井村守公山楊柳寺神主院がもともとこの神事を司った「祭礼柳盾執事」であったことが明確となり、この神主院跡の存在も宮本氏によって稲荷台遺跡の北側に400mの小谷を隔てた台地上にあることが想定されている。

稲荷台遺跡と同時期の周辺遺跡には、国分寺台遺跡群中では僧寺跡・尼寺跡・荒久遺跡・坊作遺跡が代表する遺跡として上げられる。上総国分僧寺跡や尼寺跡では共に造寺や運営に関する遺跡が広範



第3図 国分寺台遺跡群主要遺跡分布図 (S=1/10,000)

囲に調査されている。

上総国分僧寺跡は南北480m（4.4町）・北辺東西236m（2.2町）・南辺東西299m（2.8町）と変則的な形をとる寺域外郭溝で区画された寺域が確認され、伽藍はA・B期の大きく2時期が確認されている。A期は中軸線方位N-5°30'-Eを指向し、僧寺が最初に造営された仮設的な国分寺で寺域外郭溝もA期に設けられている。B期の国分寺はA期の寺域外郭溝をそのままに踏襲し、中軸線方位N-3°-Wを指向する。主要伽藍は南大門・中門・回廊・塔・金堂で塔は回廊内に東塔の礎石が残っている。大官大寺に似た伽藍様式と考えられている。寺域北辺の調査では僧坊相当の施設が調査される他、「東院」・「西館」・「油菜所」などの墨書土器から造営に必要な諸施設が集約されていたことが指摘されている。

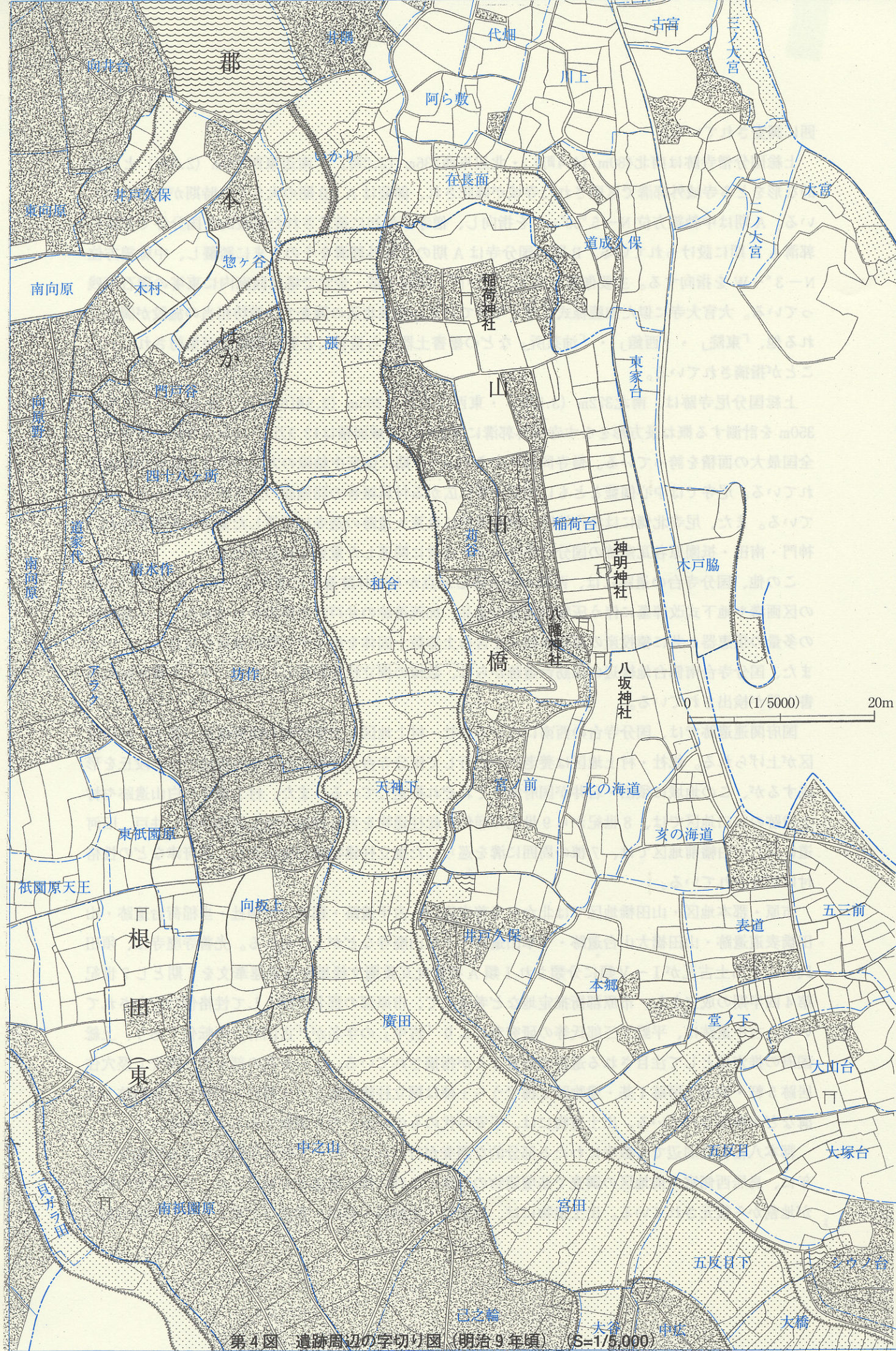
上総国分尼寺跡は、南北372m（3.5町）・東西は北辺で285m（2.5町60尺）・最も広いところで350mを計測する概ね長方形をなす寺域外郭溝に囲まれ、寺域面積は12.3万m²におよび国分尼寺では全国最大の面積を誇っている。僧寺同様に大きくA・B期に伽藍中軸線の方位の異なる伽藍が確認されている。尼寺では中心伽藍とともに北側一帯に広がる付属雑舎の諸施設の全容がほぼ明らかにされている。また、尼寺北側には坊作遺跡、僧寺東側には荒久遺跡の造寺に関連した集落跡が調査され、神門・南田・祇園原各瓦窯跡の国分二寺の造寺や運営に関連した重要な施設がある。

この他、国分寺台の遺跡には、西側の台遺跡C地点から御林跡遺跡に連なる一辺200m以上の方形の区画溝や地下式改葬墓に伴う灰釉短頸壺の優品、加茂遺跡の井戸状の竪穴からは永田・不入窯跡産の多量の須恵器と共に猿投産の長頸壺数点を含む土器数十固体を出土する祭祀遺構が確認されている。また、国分寺台南側台地縁辺の諏訪台遺跡からは、数棟の掘立柱建物跡とともに「寺」と書かれた墨書土器が検出されている。

国府関連遺跡では、国分寺台の西南に広がる総社・村上地区、市原台地の市原地区・郡本・能満地区が上げられる。総社・村上地区は養老川が蛇行して国分寺台との間に広大な洪積地の河岸段丘を形成するが、この地域に須田・石井が国府域をそれぞれ推定している。また、村上地区の白山遺跡や村上遺跡の後口地区では、8世紀から9世紀の廂付や総柱建物を含む18棟の掘立柱建物跡と井戸、旧河道に面した白幡前地区では、7棟の周囲に溝を巡らした掘立柱建物跡が検出され、国府津などの性格付けがなされている。

市原・郡本地区・山田橋地区では北から光善寺廃寺・古甲遺跡・郡本八幡神社・当稻荷台遺跡・山田橋表道遺跡・山田橋大山台遺跡・千草山遺跡・千草山廃寺などが上げられる。光善寺廃寺は、須田氏により出土古瓦がI～V類に分類されI類A種軒丸瓦重圈文縁単弁四葉蓮華文をI期とし7世紀第4四半期の成立とし、市原郡衙推定地など考慮して、市原郡の郡名寺院として性格付けがなされている。古甲遺跡は、平野元三郎氏等の研究者により「古甲」の字名が「古国府」の転化であり、上総国府の推定地として注目される遺跡であることが指摘されている。1～6次の部分的な調査で竪穴住居跡5軒・鍛冶工房跡1基・建物跡3棟のうち1棟は掘立柱建物跡3×4間の大形掘立柱建物跡・大溝などが検出されている。出土遺物には、平安時代のものが多いのも特徴であるとされる。

郡本八幡神社周辺でも数次にわたる部分的な調査が行われている。平野元三郎氏による昭和38～39年に、鳥居西側宮の前地区の調査で基壇建物の地業とこれに伴う溝などが検出され、1町四方の区画が地割から復元されている。出土遺物には、須恵器・土師器・青磁・常滑など有る。その後は昭和61



第4図 遺跡周辺の字切り図 (明治9年頃) (S=1/5,000)



第5図 遺跡周辺の現況字切り図 (S=1/5,000)



第6図 遺跡周辺の地形図と調査範囲 (S=1/2,000)

年以降に調査が行われ、奈良時代以降の竪穴住居15軒・掘立柱建物跡2棟・井戸1基、郡本八幡神社の境内地と同方向の区画溝の可能性が高い溝等が検出されている。出土遺物には、須恵器・土師器・ロクロ土師器の他、金銅製帯金具の巡方・墨書や線刻土器には「厨」・「得」・「吉」・「丈」なども検出され、時期は8世紀第2四半期から位置付けされている。現在も郡本八幡神社境内地に残る社の礎石に転用されたものや過去に鳥居に使用された礎石が、房州砂岩や蛇文岩で国分僧寺などの礎石と同種であることも指摘されている。また、特筆されることに、神社に伝えられてきたとされる懸仏の銘文などから国衙跡や郡衙跡に推定されている。懸仏については宮本氏の詳細な論考がある。

山田橋表道遺跡等では稲荷台遺跡の東で検出された古代道の延長が確認されている他、9世紀前半代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡4棟がある。同じ山田橋地区の本遺跡の東南側に小谷を挟んで隣接する千草山遺跡は、1次（昭和50～51年）～3次（昭和61年）の調査で古墳時代～平安時代の竪穴住居跡134軒を主体とする集落跡が調査されている。奈良～平安時代では21軒の竪穴住居跡・鍛冶遺構1基・掘立柱建物跡5棟、本遺跡の北北東に近接する郡本大宮遺跡では、奈良～平安時代の竪穴住居跡31軒と10世紀代前半の土師器窯2基が確認され、10世紀代の緑釉陶器が僅かに検出されている。千草山廃寺跡は昭和38年に平野元三郎氏がトレンチ調査を実施し、南北約7m・東西10m・高さ0.9mの土壇が確認され、凝灰質砂岩の径30cmの小礎石が3点検出されている。出土瓦は国分寺と同範の瓦で、土師器・須恵器の他、僅かな調査面積にもかかわらず多量の瓦が出土し、礎石や土壇状の基壇の存在を考え合わせると瓦葺建物が存在したことは疑う余地のない事であろう。

市原台地東側地域の能満地区では、上細工多遺跡・能満府中日吉神社周辺地域の能満遺跡群がある。上細工多遺跡は本遺跡から1.5km東の台地上に位置し、一部の調査であるが、施設の南辺を区画する大きくは4回の掘り直しが行われた溝と出入口の存在を示す、開口部や門ないし橋脚、目隠し塀と推定される複数の掘立柱遺構が認められ、門部に付属する宿直屋的な掘立柱建物跡の存在を明らかにしている。方形の区画溝は地形から1.5町四方面程度の広がりであることが復元され、9世紀後半から10世紀代にかけての、国衙に付属した細工所的な施設の可能性を指摘している。能満府中日吉神社一帯では発掘調査は行われていないものの、「府中」の名から国府推定地の有力地とされてきた。府中の地名は、現在は所在しないが、現在の能満にある釈蔵院には、慶長17（1612）年「関東八州真言宗連判留書案」（醍醐寺文書）に「府中釈蔵院」、寛永10（1633）年の「関東真言宗新義本末寺帳」には「市原庄府中釈蔵院」とあり、近世初頭に能満が府中と称されていたことが分かっている。

市原台地北側では、奈良～平安時代の調査例は僅かに過ぎない。台地北端の菊間遺跡は、弥生中期の集落跡の調査で、5軒の国分期の竪穴住居跡が検出されて、1枚造りの瓦が出土している。瓦は南500m程に推定される菊間廃寺のものとされている。菊間廃寺跡は未調査であるが表採資料に、成東町真行寺廃寺出土の素縁十三葉蓮華文に酷似する鍔瓦が有る。8世紀前半の創建とされている。

国分寺台遺跡群の養老川対岸の標高7～10mを計測する自然堤防上に立地する西野遺跡は、「倭名類聚抄」の上海上郡の郡衙推定地で、大字西野・小折・十五沢・柳原・今富地区にまたがる範囲で、数次にわたる調査が行なわれ、現在も実施されている。調査では、竪穴住居跡・井戸跡・溝・規則的に並ぶ掘立柱建物跡が確認され、時期も郡衙造営期とかさなる奈良～平安時代とされている。今富地区には出土古瓦から廃寺跡の存在が推定されている。鍔瓦に三重圈文縁単弁八葉蓮華文と二重圈文縁単弁八葉蓮華文、また武士廃寺と同範の有芯四重圈文がある。軒平瓦には上総国分寺と同系の均整唐

草文が有り、7世紀末から8世紀初頭の創建とされる。

他に周辺の寺院跡には、市原郡内の武士廃寺・二日市場廃寺・南大広遺跡・孟地遺跡や海上郡内の萩ノ原遺跡などがある。武士廃寺は、稲荷台遺跡の南南西4kmの台地上に所在し、寺院遺構は不明だが鋸歯文縁複弁八葉蓮華文・鋸歯文縁複々弁四葉蓮華文から8世紀第2四半期の創建とされる。二日市場廃寺は稲荷台遺跡の南6.6kmの養老川中流域の河岸段丘に位置し、確認調査で南北に走る溝や掘立柱建物跡の集中地点が検出され、創建期の古瓦は雷文縁複弁八葉蓮華文・三重圈文縁単弁八葉蓮華文で7世紀第4四半期とされている。南大広遺跡の調査では、基壇と方位の異なる掘立柱建物跡・小鍛冶跡・竪穴住居跡5軒が検出され、基壇中央には鎮壇具として埋納された蕨手太刀や「寺」「立カ」の墨書土器が出土している。孟地遺跡は、稲荷台の南南東1.9kmの現在は山倉湖に埋没した位置にあり、水が引いた湖底から表採された資料がある。瓦塔・瓦堂、須恵器坏類・土師器坏類が有り寺院跡と考えられる遺跡である。所属時期は一括資料の土師器坏類から8世紀代とされる。萩ノ原遺跡は、稲荷台遺跡の南9.6kmの養老川中流域左岸は海上郡に属し、基壇建物跡2棟・掘立柱建物跡3棟以上・瓦塔基壇1基・竪穴住居跡22軒・製鉄跡5箇所が確認され、基壇に鎮壇具に直刀や坏に入れられた鉄釘がある。また、瓦塔・瓦堂・青銅製匙・鉄製風鐸、墨書土器には「寺」・「入」・「佛」・「寺塔」・「桑原」・「酒」・「及不用」・「方」・「工」・「大」・「飯」が有る。寺院遺構は仏堂を中心に、北に僧坊、西に倉庫、南に瓦塔を配し、簡略化された構成で、寺の性格を端的に表しているものであろうとされ、8世紀第4半世紀から9世紀末頃に比定されている。

今一つ重要な遺跡に、市原台地の北西に広がる標高5m程の沖積平野上に立地する一帯は、市原条里制遺跡として知られていることにある。市原条里制遺跡の存在は、古くから周知された。昭和63年から平成5年にかけて館山自動車道路建設に伴い、実信地区他5箇所で調査が実施されている。明治9年に千葉県が作成した「上総国市原郡市原村大字地図帳」等によると、長地型の坪内地割を基本とする条里地割が確認でき、「一の坪」「二の坪」「三條町」「四ノ瀬」「一ノ町」「二ノ町」「三ノ町」といった坪の数に由来する字名が台地側から海岸線に向かい整然と並んで残されている。特に、字市原・郡本・藤井地区の台地下に顕著であることは重要視される。調査によると水田面は大きくⅠ層とⅡ1層～Ⅱ3層までの4面とこれに伴う畦畔や水路が確認され、最下層のⅡ3層が9世紀後半から11世紀代の水田面であることが判明している。Ⅱ3層が条里制の成立時期としている。笹生氏は『この坪の名詞に「梶給」「時シ免」「番匠給」「福久給」「加茂給」「於局給」の給免田に由来する字名が有るとし、この内でも「梶（鍛冶）給」・「時シ（土師器）免」「番匠給」は、応安5（1372）年5月「市原八幡宮五月会馬野郡四村配分帳」（覚園寺文書）で、御目代・国庁・田所・調所・検非違使所などの上総国衙諸機関とともに名を連ねる、鍛冶・土師器・番匠など上総国衙工人の給免田であったと推定できる。』とし、更に、『これらの字名が残る「市原条里制遺跡内の市原・郡本地区周辺は・・・遺跡の東側の台地上に拠点をもっていた上総国衙在帳庁層の所領となっていた可能性が高い。』とし暗に条里制遺構成立期の国府の存在を示唆している。

この他市内の奈良～平安時代の特質する遺跡には、草刈遺跡、川焼瓦窯跡、菊間瓦窯跡、永田・不入窯跡・奉面上原台遺跡・五所四反田遺跡などが知られている。



第7図 稲荷台遺跡全体図 (S=1/1,000)

【遺跡参考文献】

〔菊間廃寺〕・〔菊間瓦窯跡〕

須田 勉 「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』早稲田大学出版部 1980年

須田 勉 「菊間廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年

〔市原条里制遺跡〕

大谷弘幸・笹生 衛 「関東地方の条里」『考古学ジャーナル』310 1989年

大谷 弘幸 「市原条里制遺跡」『木簡研究』第13号 1991年

大谷 弘幸 「市原条里制遺跡検出の古道跡について」『第6回市原市文化財センター遺跡発表会』（財）市原市文化財センター 1991年

大谷 弘幸 「発掘された市原付近の古代道」『古代交通研究』創刊号 古代交通史研究会 1992年

大谷 弘幸 「茂原街道に隣接した溝跡について」『研究連絡誌』第38号（財）千葉県文化財センター 1993年

大谷 弘幸 「市原条里制遺跡の調査」『条理制研究』第10号 条理制研究会 1994年

小出 紳夫 「市原条里制遺跡」『平成8年度市原市内遺跡発掘調査報告書』市原市教育委員会 1997年

田中 清美 「市原市条理制遺跡（八幡砂田地区）」『平成9年度市原市内遺跡発掘調査報告書』市原市教育委員会 1997年

大谷 弘幸 「市原条里制遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年

笹生 衛 「市原条里制遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世Ⅰ 考古資料』千葉県 1998年

〔五所四反田遺跡〕

近藤 敏 「五所四反田遺跡」『第6回市原市文化財センター遺跡発表会』（財）市原市文化財センター 1991年

田所 真 「市原古道遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年

〔光善寺廃寺〕

須田 勉 「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』早稲田大学出版部1980年

山路 直充 「下総上総国分寺創建期鎧瓦の製作技法と千葉寺廃寺の事例」『千葉県の歴史』45 千葉県 1993年

須田 勉 「国分寺造営期にみる中央と在地—上総国分寺改作期の造瓦から—」『古代』第97号 早稲田大学出版会1994

宮本 敬一 「上総国分寺成立—尼寺の造寺過程を中心に—」『東海道の国分寺』栃木県教育委員会 1994年

須田 勉 「光善寺廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年

宮本 敬一 「光善寺廃寺」『市原市能満周辺の遺跡と文化財』市原市地方史連絡協議会 2000年

〔古甲遺跡〕

須田 勉 「上総国府関連遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年

田所 真 「幻の国府を求めて 安房国・上総国」『幻の国府を掘る 古代東国の歩みから』雄山閣 1999年

〔市原郡衙推定地〕・〔郡本遺跡群（市原郡衙関連遺跡）〕

平野元三郎ほか 「市原市上総国府関連遺跡」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会 1965年

木對 和紀 『市原市郡本遺跡』（財）市原市文化財センター 1987年

田中 清美 『市原市郡本遺跡（第2次）』（財）市原市文化財センター 1995年

田中 広明 「官衙及び関連遺跡と腰帯」『地歩官衙とその周辺』日本考古学協会大会発表資料 1995年

田所 真 「市原郡衙関連遺跡（郡本遺跡）」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年

小川 浩一 「郡本遺跡（第3次）」『平成9年度市原市遺跡発掘調査報告書』市原市教育委員会 1998年

小川 浩一 「郡本遺跡（第4次）」『平成9年度市原市遺跡発掘調査報告書』市原市教育委員会 1998年

鶴岡 英一 『市原市郡本遺跡（第4次）』（財）市原市文化財センター 1999年

木下 良・吉田敏弘・島田 潔・中嶋宏子・中村太一 『上総国府推定地歴史地理学的調査報告書』市原市教育委員会 1999年

宮本 敬一 「郡本遺跡は郡衙跡か」『市原市郡本周辺の遺跡と文化財・文化財シリーズ第四輯』市原市地方史連絡協議会1999.

宮本 敬一 「忘れ去られた社寺・守公神と神主院」『同上』市原市地方史連絡協議1999.年

〔稲荷台遺跡〕

對馬 郁夫・谷島 一馬 『宮前遺跡第1次・第2次調査報告書』平野考古学研究所 1976年

谷島 一馬 「稲荷台遺跡第2次調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺遺跡調査団 1980年

浅利 幸一 「市原市稲荷台遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総工学協会 1987年

田所 真 「市原市坊作遺跡」『房総における歴史時代土器の研究』房総工学協会 1987年

笹生 衛 「古代の信仰」『房総考古学ライブラリー7歴史時代(1)』(財)千葉県文化財センター 1993年
 滝口 宏監修 『「王賜」銘鉄剣概要』市原市教育委員会・(財)市原市文化財センター 1988年
 浅利 幸一・高橋 照彦「稲荷台遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 1998年
 田所 真 「幻の国府を求めて 安房国・上総国」『幻の国府を掘る 古代東国の歩みから』雄山閣 1999年
 [千草遺跡]・[千草山廃寺]
 平野元三郎ほか「市原市上総国府関連遺跡」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会 1965年
 安藤 鴻基 『千葉県市原市千草山遺跡発掘調査報告書』千草山遺跡発掘調査団 1979年
 田中 清美ほか『千葉県市原市千草山遺跡・東千草山遺跡』(財)市原市文化財センター 1989年
 田中 清美 「謎の千草山廃寺(予察)」『市原市文化財センター研究紀要Ⅲ』(財)市原市文化財センター 1989年
 田中 清美 「千草山遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 1998年
 [郡本大宮遺跡]
 浅利 幸一 『市原市郡本大宮遺跡』(財)市原市文化財センター 1991年
 [南大広遺跡]
 市毛 勲ほか 『南大広遺跡・海保古墳群』市原市教育委員会 1968年
 浅利 幸一 「南大広遺跡(B地区)」『第7回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター 1992年
 高橋 康夫 「南大広遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 1998年
 [上細工多遺跡]
 宮本 敬一 「能満上細工多遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和59年度』(財)市原市文化財センター 1985年
 宮本 敬一ほか『能満上細工多遺跡・能満番面台遺跡・能満旧三山塚遺跡』(財)市原市文化財センター 1999年
 宮本 敬一 「上細工多遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 1998年
 [上総国分僧寺跡]
 住田 正一 「上総国分寺古瓦考」『考古学雑誌』9-4 1918年
 ・ 「上総国分寺址」『千葉県史蹟天然記念物調査2輯』 1926年
 三輪 善之助 「上総の国分寺」『房総研究』1-4 1929年
 谷木 光乃介 「上総国分寺の遺跡と遺物」『房総研究』1-4 1929年
 太田 静六 「上総国分寺塔婆の一考察」『考古学雑誌』29-9・10 1939年
 滝口 宏 「上総国分寺」『千葉県史蹟天然記念物調査報告書(1)』千葉県教育委員会 1949年
 滝口 宏 『上総国分寺調査報告』上総国分寺調査団 1968年
 滝口 宏 『上総国分寺』早稲田大学出版部 1973年
 須田 勉 「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』早稲田大学出版部 1980年
 須田 勉 「上総国分僧寺一寺域東南部における調査」『上総国分寺台発掘調査概報(9)』上総国分寺台遺跡調査団 1981年
 須田 勉 「上総国分僧寺一寺域北辺部における調査」『上総国分寺台発掘調査概要』上総国分寺台遺跡調査団 1981年
 須田 勉 『図説日本の史跡』古代2 同朋舎出版 1991年
 滝口 宏 「上総」『新修国分寺の研究 2 畿内と東海道』吉川弘文館 1991年
 須田 勉 「国分寺造営期にみる中央と在地ー上総国分寺改作期の造瓦からー」『古代』第97号 早稲田大学出版部 1994年
 宮本 敬一 「上総国分寺成立ー尼寺の造寺過程を中心にー」『東海道の国分寺』栃木県教育委員会 1994年
 須田 勉 「国分寺造営勅の評価」『古代探叢Ⅳ』早稲田大学出版部 1995年
 須田 勉 「上総国分僧寺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 1998年
 高橋 康男 「上総国分寺」『聖武天皇と上総国分寺ー在地から見た関東国分寺の造営』雄山閣 1998年
 [上総国分尼寺跡]
 三輪 善之助 「上総の国分寺」『房総研究』1-4 1929年
 平野 元三郎 「房総の古寺址(1) 国分寺に就いて」『千葉県青年処女』10-11 千葉県連合青年団 1935年
 平野元三郎・滝口宏「上代仏教遺跡予報」『史蹟名勝天然記念物調査』14 千葉県 1937年
 角田 文次 「上総国分寺」『国分寺の研究』上巻 考古学研究会 1938年
 渡辺 保忠 「上総国分尼寺址」『千葉県史蹟天然記念物調査報告書 第1輯 市原遺跡発掘調査概報』千葉県教育委員会 1949年

- 阿坂 潔 「尼寺址」『昭和四十五年度 上総国分尼寺址調査報告』上総国分寺址調査団 1969年
- 滝口 宏 『昭和四十五年度 上総国分尼寺址調査報告』私家版 1971年
- 滝口 宏 『上総国分寺』早稲田大学出版部 1973年
- 宮本 敬一 「上総国分尼寺」『仏教芸術』103 毎日新聞社 1975年
- 宮本 敬一 「上総国分尼寺跡北辺部の調査－尼坊・軒廊・講堂址一郭を中心とする発掘調査概報」
『上総国分寺台遺跡調査概報Ⅱ 南向原』早稲田大学出版部 1976年
- 宮本 敬一 「上総国分尼寺の調査－寺域東北部における附属雑舎群の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 1980年
- 宮本 敬一 「最近の調査成果から見た上総国分尼寺の伽藍と附属諸院」『月刊歴史教育』30～33 東京法令出版 1981年
- 辻 誠一郎 「井戸内堆積物の季節性」『古文化財の自然科学的研究』同朋社 1984年
- 宮本 敬一 「史跡 上総国分尼寺跡」『第4回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』（財）市原市文化財センター 1989年
- 宮本 敬一 「史跡 上総国分尼寺跡」『平成元年度千葉県遺跡調査発表会要旨』千葉県文化財法人連絡協議会 1990年
- 宮本 敬一 「史跡 上総国分尼寺跡」『第5回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』（財）市原市文化財センター 1990年
- 滝口 宏 「上総」『新修国分寺の研究 2 畿内と東海道』吉川弘文館 1991年
- 宮本 敬一 「上総国分寺成立－尼寺の造寺過程を中心に－」『東海道の国分寺』栃木県教育委員会 1994年
- 田中 清美 「史跡 上総国分尼寺跡」『市原市文化財センター年報 平成3年度』（財）市原市文化財センター 1995年
- 宮本 敬一 「墨書土器から見た国分寺の講師院と読師院」『岩波講座日本歴史月報』22 岩波書店 1995年
- 南木睦彦・辻誠一郎「上総国分尼寺遺跡の井戸堆積物から産した植物化石群」『植生史研究』4－1 植生史研究会 1996年
- 宮本 敬一 「上総国分尼寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年
- 高橋 康男 「上総国分寺」『聖武天皇と上総国分寺－在地から見た関東国分寺の造営』雄山閣 1998年
- 宮本 敬一ほか『史跡上総国分尼寺跡 中門・回廊復元事業報告書』市原市教育委員会 1998年
- [荒久遺跡]
- 須田 勉 「上総国分僧寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年
- [坊作遺跡]
- 須田 勉 『坊作遺跡発掘調査概要』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 1976年
- 須田 勉 『上総国分寺発掘調査概報Ⅳ 坊作遺跡の調査』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 1977年
- 宮本 敬一 『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年
- 小出 紳夫 『坊作遺跡』（財）市原市文化財センター 2002年
- [南田瓦窯跡]
- 須田 勉 「上総国分僧寺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年
- [山田橋表通遺跡]
- 蜂屋 孝之ほか『山田橋表通遺跡』（財）市原市文化財センター 1999年
- [山田橋亥の海道遺跡]
- 田所 真 「山田橋亥の海道遺跡」『第12回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』（財）市原市文化財センター 1997年
- [山田橋大山台遺跡]
- 近藤 敏 「山田橋大山台遺跡」『第13回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』（財）市原市文化財センター 1998年
- [村上遺跡群]
- 平野元三郎ほか「市原市上総国府関連遺跡」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会 1965年
- 今泉 潔 『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター 1989年
- 笹生 衛 「市原市村上遺跡（村上遺跡群）」『千葉県文化財センター年報No16』（財）千葉県文化財センター 1991年
- 田所 真 「11. 村上遺跡群（確認調査）」『市原市文化財センター年報 平成2年度』（財）市原市文化財センター 1991年
- 須田 勉 「上総国府関連遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県 1998年
- 田所 真 「幻の国府を求めて 安房国・上総国」『幻の国府を掘る 古代東国の歩みから』雄山閣 1999年
- [孟地遺跡]
- 滝口 宏ほか『市原市山倉貝塚調査報告書（住居址・遺構編）』山倉貝塚調査団 1969年
- 永沼 律郎 「(5) 瓦塔」『佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会 1987年

- ・ 『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 北部編』市原市教育委員会 1988年
- ・ 「(28) 子どもの国施設整備」『千葉県文化財センター年報 No16』(財)千葉県文化財センター 1991年
- ・ 「(34) 子どもの国施設整備」『千葉県文化財センター年報 No17』(財)千葉県文化財センター 1992年
- 田所 真 「孟地遺跡の坏」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』(財)市原市文化財センター 1993年
- 加藤 正信ほか『市原市南青野遺跡』(財)千葉県文化財センター 1994年
- 紺野 敏文 『市原市内仏教彫刻所在調査報告書ー北部編ー』市原市教育委員会
- 池田 敏文 「瓦塔屋蓋部表現手法の検討」『土曜考古』第19号 土曜考古学研究会 1995年
- 田中 広明 「官衙及び関連遺跡と腰帯」『地歩官衙とその周辺』日本考古学協会大会発表資料 1995年
- ・ 『山武郡市文化財センター年報 No11 平成6年度』(財)山武郡市文化財センター 1996年
- 田所 真 「孟地遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県 1998年
- [今富廃寺]
- 鈴木 美成ほか『千葉県市原市 今富地区遺跡発掘調査報告書』市原市今富地区遺跡調査会 1982年
- [西野遺跡]
- 今泉 潔 『市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター 1989年
- 高梨 俊夫 『市原市西野遺跡第1次発掘調査報告書』千葉県教育委員会 1996年
- 渡邊 高弘 『市原市西野遺跡第2次発掘調査報告書』千葉県教育委員会 1997年
- 渡邊 高弘 「西野遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県 1998年
- [武士遺跡]・[武士廃寺]
- 平野元三郎・滝口宏「上代仏教遺跡予報」『史蹟名勝天然記念物調査』14 千葉県 1937年
- 石田 茂作 「千葉県市原郡西村寺院址」『日本考古学年報』1 (覆刻版) 日本考古学協会編 1951年
- 滝口 宏 『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団 1976年
- 武田 宗久 「王朝時代」『千葉市史』千葉市 1976年
- 須田 勉 「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』早稲田大学出版部 1980年
- ・ 『第6回 関東古瓦研究会資料 上総安房編』関東古瓦研究会 1983年
- 神野信・笹生衛「武士遺跡におけるいわゆる「方形周溝遺構について」『研究連絡誌』29 (財)千葉県文化財センター 1990年
- 岡本 東三 「下総竜角寺の山田式軒瓦についてーその分析の意味するものー」『千葉史学』第22号 千葉歴史学会 1993年
- 山路 直充 「下総国分寺創建期鏡瓦の製作技法と千葉寺廃寺の事例」『千葉県の歴史』45 千葉県 1993年
- 辻 史郎 「武士遺跡出土瓦について」『武士遺跡発掘調査報告概報』(財)千葉県文化財センター 1996年
- 辻 史郎 「武士遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県 1998年
- [二日市場廃寺]
- 須田 勉 「房総の古瓦に関する覚書(1)」『古代』第64号 早稲田大学考古学会 1978年
- 郷堀 英司 『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』(財)千葉県文化財センター 1984年
- 笹生 衛 『房総考古学ライブラリー7 歴史時代(1)』(財)千葉県文化財センター 1993年
- 郷堀 英司 「二日市場廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県 1998年
- [草刈遺跡]
- 小久貫 隆史 『千原台ニュータウンⅠー野馬堀遺跡・ばあ山遺跡・他ー』(財)千葉県文化財センター1980年
- 小久貫 隆史 『千原台ニュータウンⅡー草刈遺跡A地区(第一次調査)・鶴牧古墳・人形塚ー』(財)千葉県文化財センター1983
- ・ 「草刈遺跡G地区(千原台ニュータウン)」『千葉県文化財センター年報 No13』 1983年
- 高橋 康男 『千葉県市原市草刈遺跡』(財)市原市文化財センター 1985年
- 高田 博ほか 『千原台ニュータウンⅢー草刈遺跡(B地区)』(財)千葉県文化財センター 1986年
- 小林 清隆ほか『千葉県市原市草刈貝塚ー千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳー』(財)千葉県文化財センター 1990年
- 白井久美子ほか『千原台ニュータウンⅣー草刈六之台遺跡ー』(財)千葉県文化財センター 1994年
- 田形 孝一ほか「出土文字資料と地名ーⅢ草刈に寺はあったのか」『千葉県史研究』第2号 千葉県 1995年
- ・ 「市原市草刈遺跡L地区(千原台地区)」『千葉県文化財センター年報 No20』(財)千葉県文化財センター 1995年
- 田形孝一・立和名明美「草刈遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3 (奈良・平安時代)』千葉県 1998年
- 牧野 光隆 『市原市草刈遺跡Ⅱ』(財)市原市文化財センター 2000年

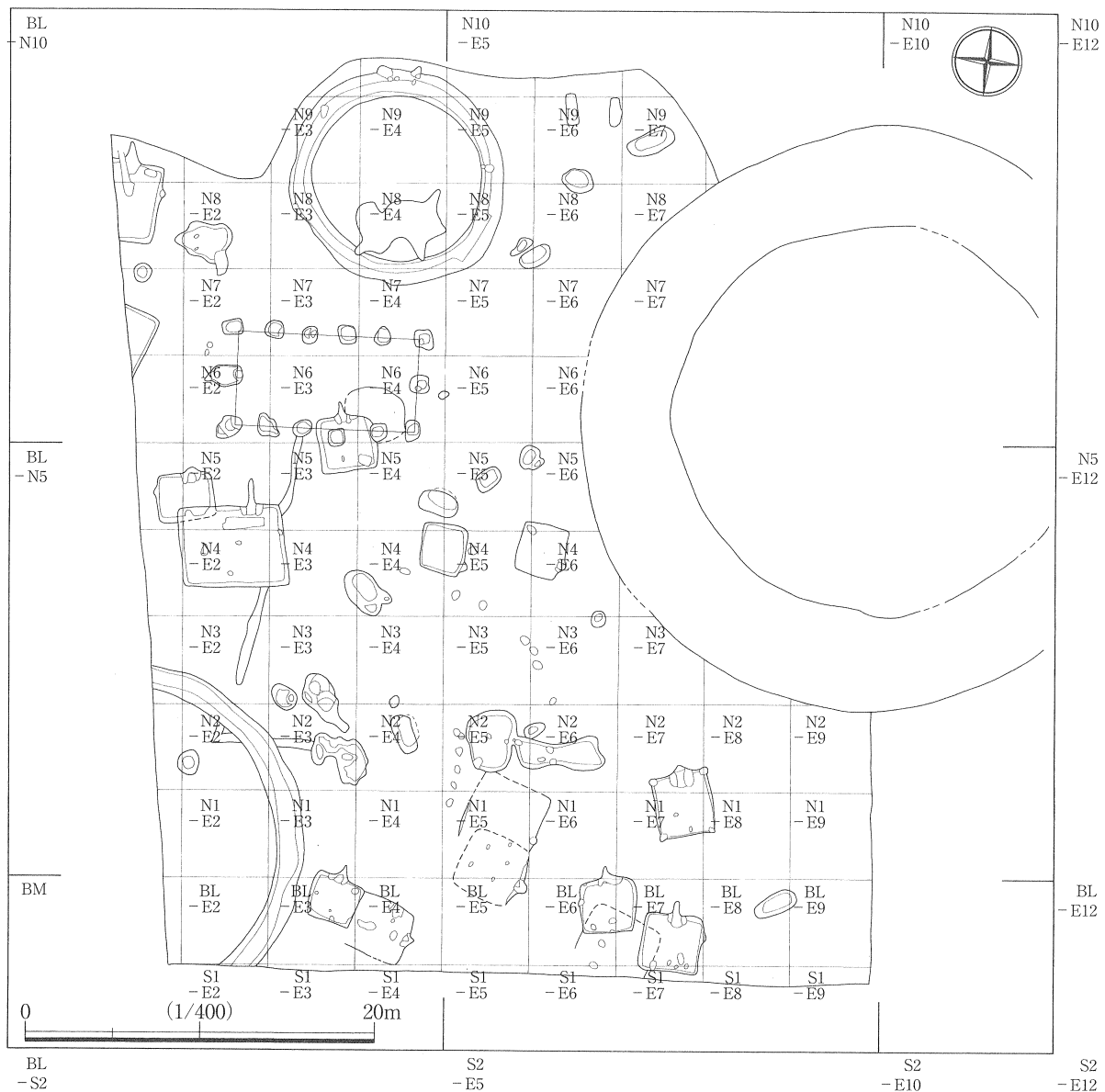
第3節 調査方法

稲荷台遺跡の所在する台地上には稲荷台古墳群が存在し、高塚として現況で確認されていた国分寺台207号墳（稲荷台1号墳）・208号墳（3号墳）・209号墳（4号墳）の他、トレンチ調査で確認された226号墳（2号墳で327の塚番号有り）・223号墳（5号墳）・227号墳（6号墳）が集落の調査に先行して実施されている。今回報告する集落部分の調査は古墳調査終了後の昭和53年1月から55年8月まで断続的に行なわれたものである。

調査範囲の表土剥ぎは、これまで実施してきた集落部分の調査同様に大型ブルドーザーやバックホーンの機械力を使用して実施された。このことは、E地区の調査において致命的なミスともなったが、当時の遺跡調査費や大規模調査に恒常的に使用されていた状況からは当然のこととも言える。測量は公共座標ではなく、磁北方向に任意で5m方眼の測量杭を設定しグリッドとし、水準測量も297号線沿いに存在した、水準点から移動して行った。但し、水準点については、E地区の調査途中で公共座標による測量を行なうことができ、先に行ったA～D地区も正確な水準を記録することができた。グリッドは任意座標に従いB地区南側に基準となるBMを設け、東西南北5m毎に北方向にはN1から、南にはS1から、東にはE1から、西にはW1から設定し、北西の杭の交点をもってA・B・C・D・F地区のグリッドとした。E地区は、調査区外の西北隅のBL・N24を基準に西から東に1～21・北から南方向にa・A・B～Sとし、東西は1・2・・・としグリッドを設定し、報告書は調査時のとおり記載した。

発掘調査の遺構番号は、通し番号ではなく調査区域毎に住居跡はHの記号で表し、例えば1号住居跡はH1とし記録されていた。この報告書ではこれを通し番号に改め、調査時の遺構番号は旧番号として住居跡一覧表に記載した。土坑番号も住居跡と同様に処理したが、調査時に土坑番号を付けたものであっても、整理作業の中で攪乱などと判断したものについては省略した。遺構内遺物の取り上げは、床面やカマドから出土した遺物は記録図面上に記載されるが、覆土遺物は形状をとどめる遺物は記載されるが、多くが一括遺物として取り上げられているため出土位置を明記することができない遺物が多く存在する。また、遺物の中には既に水洗・注記作業が終了したものがあったが、年月の経過により消えてしまったものや判読不明となった遺物も存在する。

遺構以外の遺物取り上げと記載については、A・B・C・D・F地区は近接する遺構の一括遺物として取り上げられている為グリッドでの記載ができない。E地区については、5m四方のグリッド内の一括遺物として記載した。また、掘立柱建物跡の柱掘方内から出土した遺物については、各グリッド毎にピット番号を付け処理したため、ここの掘立柱建物跡毎のまとまった表示はしていない。但し、柱掘方を含めたピット内から出土したグリッド一括遺物の番号を第19～27図のE地区詳細図に土器番号をG100などと記載した。A地区以外の掘立柱建物跡の出土遺物はそのつど記載し出土位置を示した。E地区の表土剥ぎを重機で行ったことは、前述したとおりであるが、廃土の山に緑釉・灰釉陶器などが含まれていたため、可能なかぎりフルイ作業を行ない、廃土の山から遺物の拾いだしを行ったが表土剥ぎ中に区域外に搬出した土砂が多く、実際にフルイの対象とした土砂は2割程に過ぎない。拾い出した遺物は、INE・盛土・フルイ（E地区内）・INEW（E地区西側）・INEE（E地区東側）と記載され、観察表に記載した。

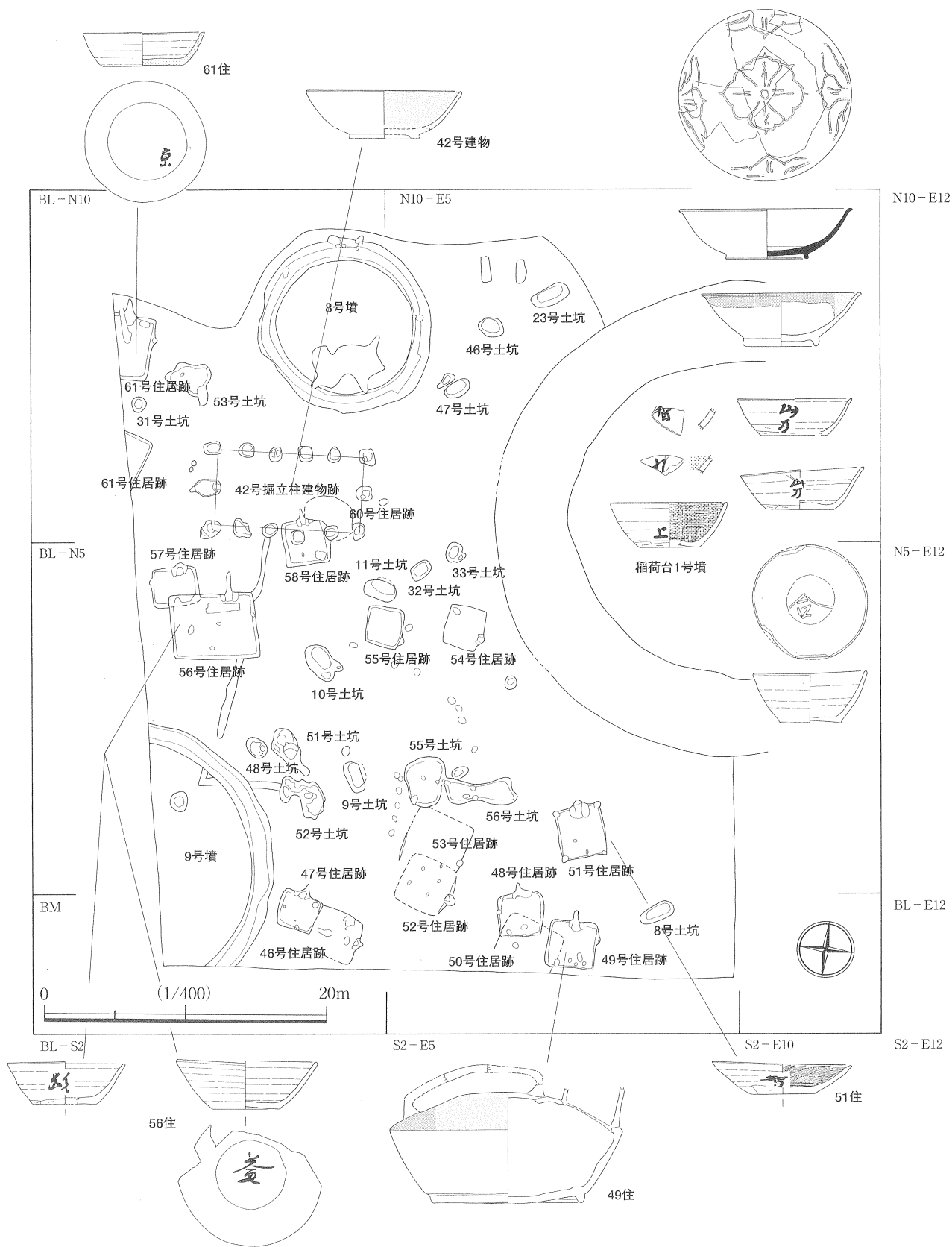


第8図 A地区グリッド配置図 (S=1/400)

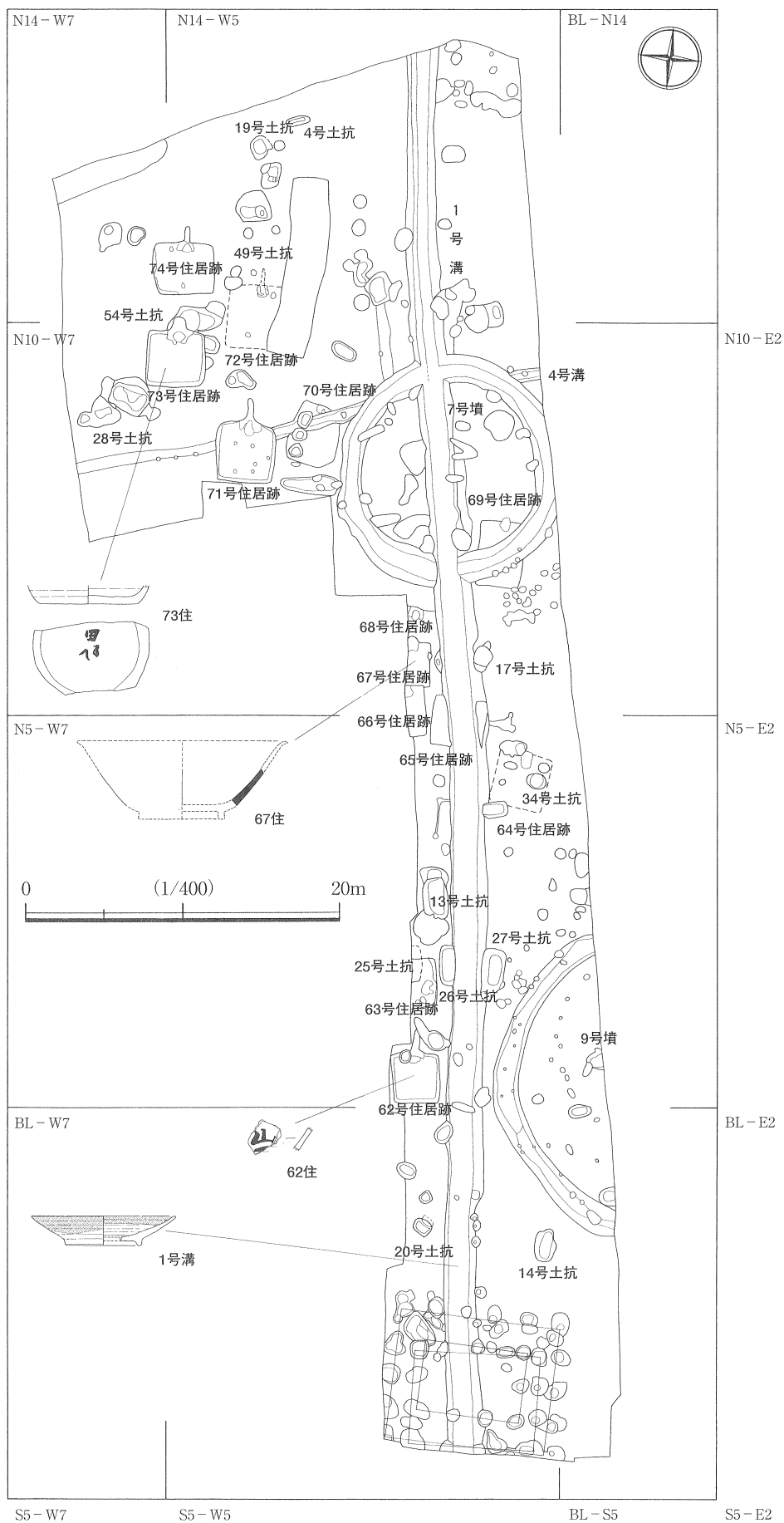
第4節 調査概要

発掘調査範囲は、これまでの国分寺台遺跡群の慣例に習い、同地区全域を対象とはせず、現道・既存宅地、地権者了解の得られない不同意地域、高压線下の現状換地区域を除外した範囲を対象とした。

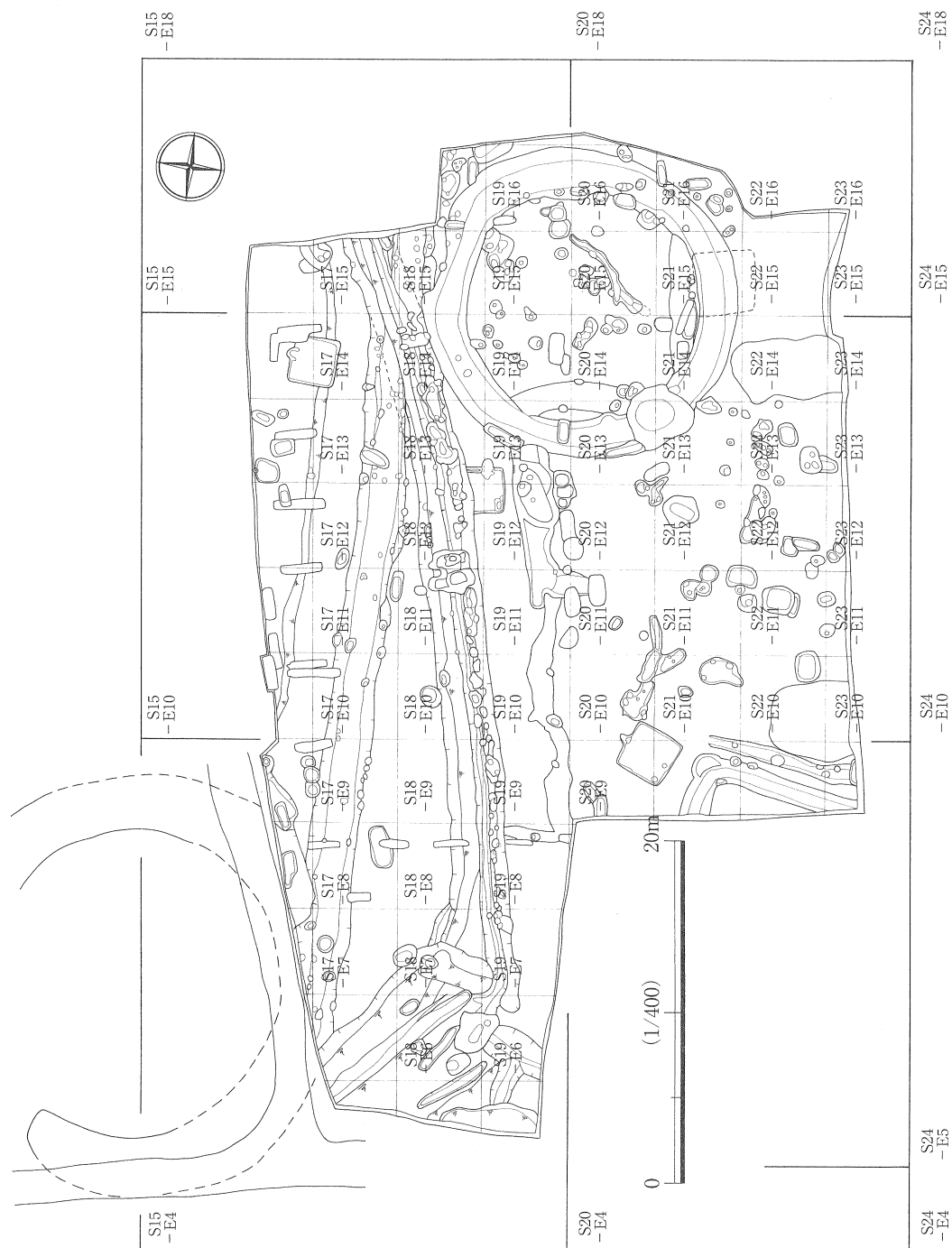
A地区の調査は、東西44m・南北53mの1,640m²で実施した。調査区の東には先行して調査を行なった稲荷台1号墳（国分寺台207号墳）が所在する。検出された遺構は、墳丘を削平され周溝だけ検出した8号墳と9号墳の円墳2基・竪穴住居跡46住～61住の16軒・掘立柱建物跡1棟・土坑や性格不明な落ち込みなど32基を検出した。土坑は有天井土坑8～11号、木棺墓23号、性格等不明な31～33・46～48・51～53・55・56号の計14基の土坑を記載した。特筆するものでは、42号掘立柱建物跡は桁行5間・梁行2軒の東西棟で、柱掘方から灰釉碗が検出され坂野編年のⅡ期古相に当たり、時期が明確でない掘立柱建物跡の中にあっては、時期をほぼ明らかにすることができた数少ない1例である。



第9図 A地区遺構配置図 (S=1/400)



第11図 B地区遺構配置図 (S=1/400)

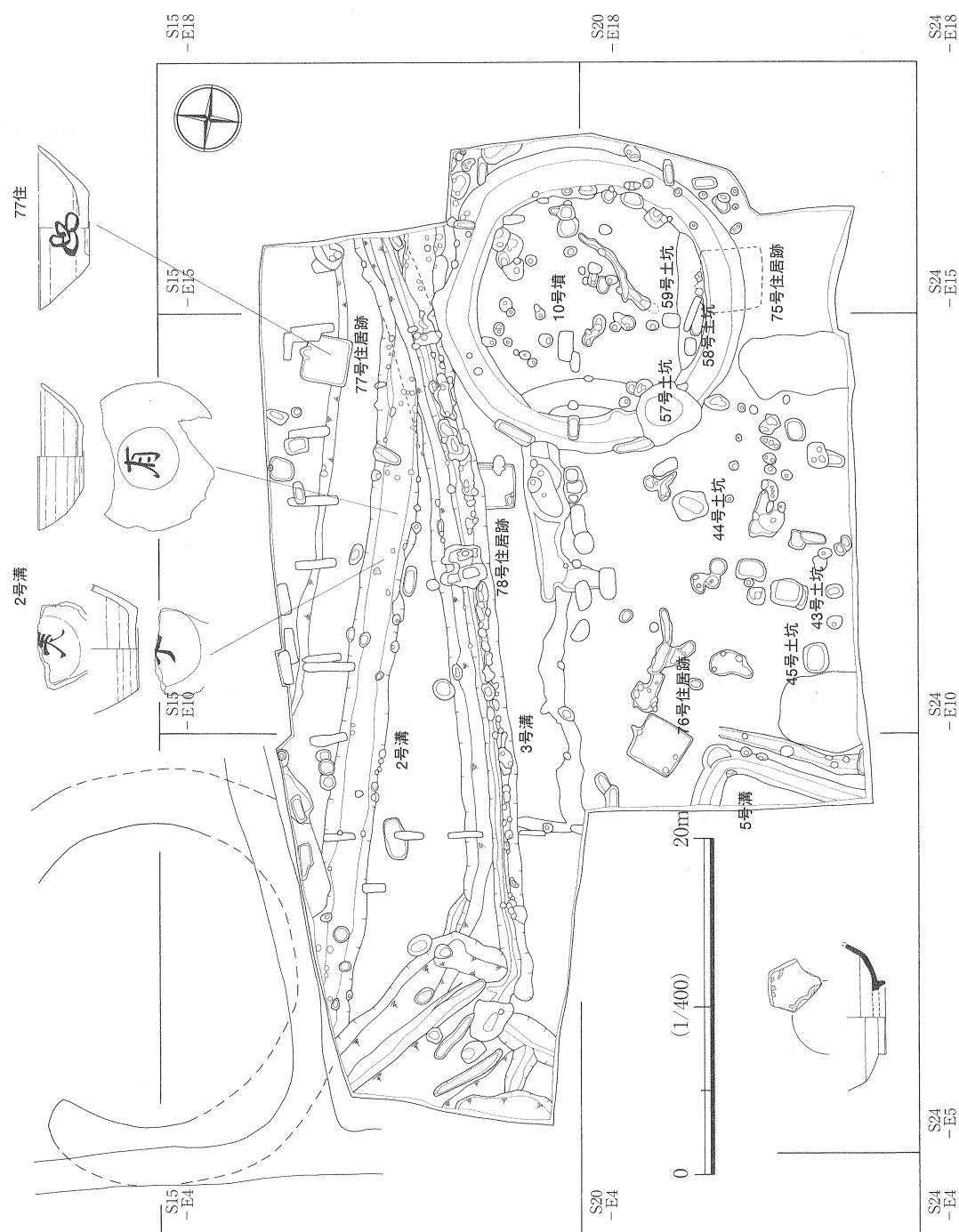


第12図 C地区グリッド配置図 (S=1/400)

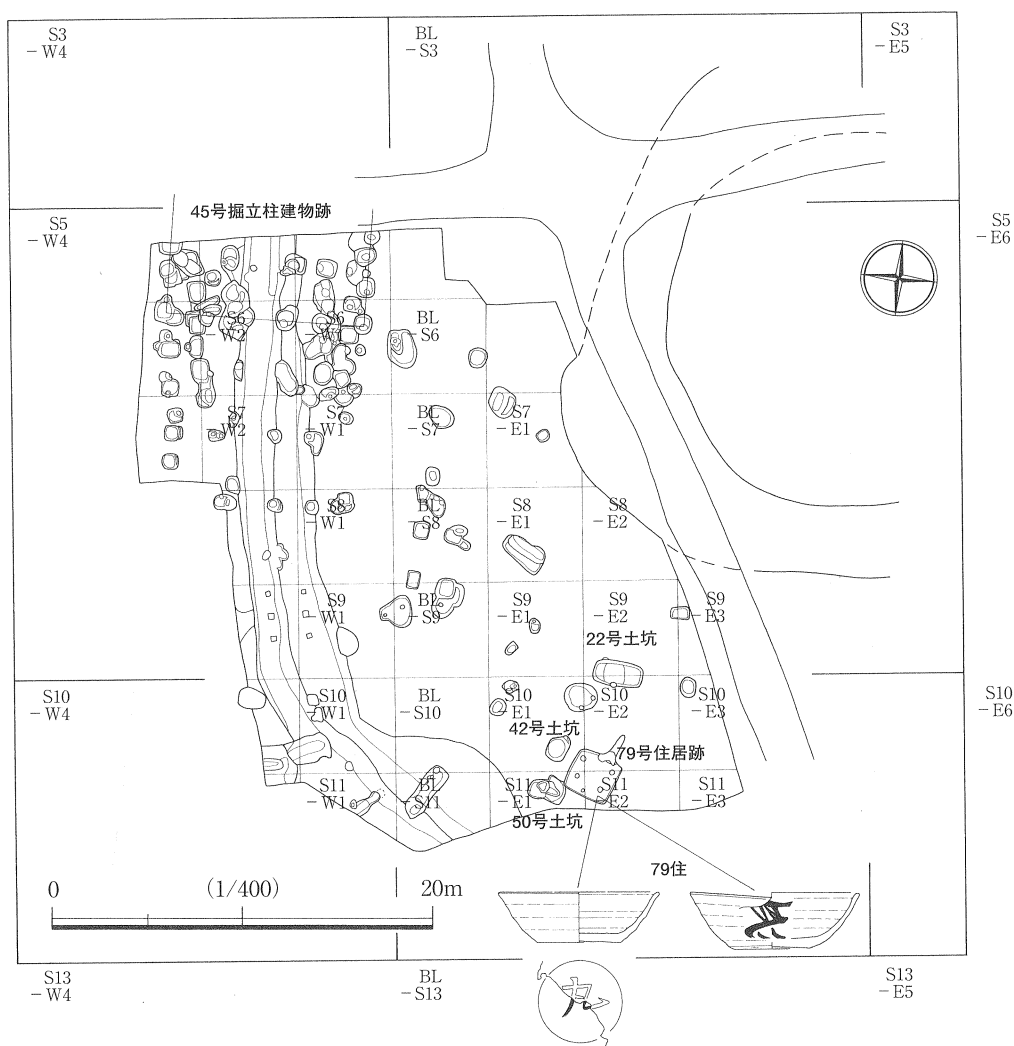
出土遺物では、61号住から8世紀第3～4四半世紀代の須恵器坏底部に「京」(みやこ)と墨書されたものがある他、9世紀代の竪穴住居跡から「益」・「智」・「□」梵字カの墨書土器がある。隣接する稲荷台1号墳の調査時に、「山万」・「智」・「上」・「丸カ」の墨書他、底部内面に「合」焼成前の線刻されたロクロ土師器坏がある。1号墳出土の緑釉緑彩花文土器は40mほど離れたE地点のN14グリッド出土片と接合関係に有る。1号墳でのこの種の土器の出土状況が不明だが、1号墳の築造年代は5世紀後半でも中頃に近い時期とされ、緑釉陶器などが用いられて祭祀が行なわれた9世紀中葉には、昭和51年の調査時に墳丘が残されていた1号墳を始めとする3・4号墳は、築山の様に遺跡内に存在し、この墳丘上で何らかの祭祀を行なった形跡があるとするならば非常に興味深いこ

とである。

B地区の調査は、東西15～30m・南北90mの調査面積1,540m²で実施した。検出遺構は、竪穴住居跡62～74住の13軒、調査区域を南北に貫く1号溝と東西方向の4号溝、南側でD地区に連続する掘立柱建物跡群2棟以上が在る他、土坑や性格不明な落ち込みなど53基を検出したが、縄文時代の陥し穴1基、有天井土壇5基、土壇墓3基、地下式改葬墓1基、性格等不明な2基など13基の土坑を記載した。特筆する遺構は、8世紀後半代の28号地下式改葬墓、灯明用に用いられたロクロ土師器坏を多量に出土し、拝殿・本殿を思わせる神社建築に似た南側の掘立柱建物跡群などがある。遺物では67号住居跡覆土から中国製青磁片などを検出している。



第13図 C地区遺構配置図 (S=1/400)

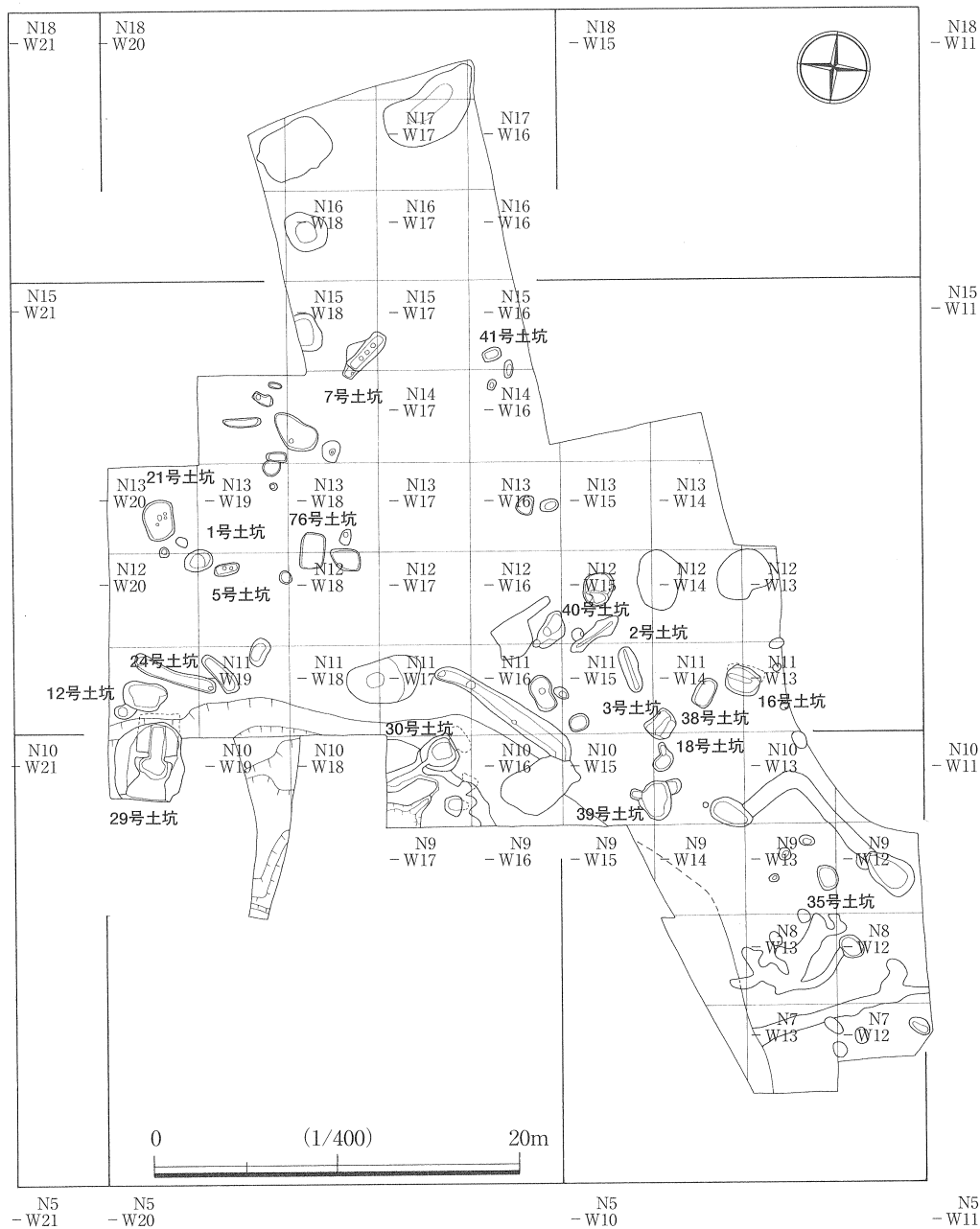


第14図 D地区グリッドと遺構配置図 (S=1/400)

C地区の調査は、東西59m・南北35mの調査面積1,500m²で実施した。検出遺構は、竪穴住居跡75～78住の4軒、調査区を東西に貫く2・3号溝、東端で10号墳の円墳1基を検出した。他に、土坑や性格不明な落ち込みなど35基の遺構を検出したが、57～59号の人骨を検出した土坑など6基の土坑を記載した。特筆する遺構は、9世紀代の2号溝やこれより後出する3号溝などの稲荷台遺跡の南を区画すると思われる溝の存在がある。溝からは「有」・「奉カ」などの墨書土器を出土している。3号溝は3回の掘り直しが行なわれ、溝底面に古道の硬化面や不連続な柱痕跡が残り柵列の存在を思わせるものである。

D地区の調査は、東西31m・南北33mの調査面積700m²で実施した。検出遺構は、竪穴住居跡79住の1軒、調査区を南北に貫き台地縁辺を通り、C地区の2・3号溝に連なるとされる1号溝と鳥居遺構、B地区から連続する掘立柱建物跡群である。他には、土坑や性格不明な落ち込みなど28基の遺構を検出したが、4基の土坑を記載した。

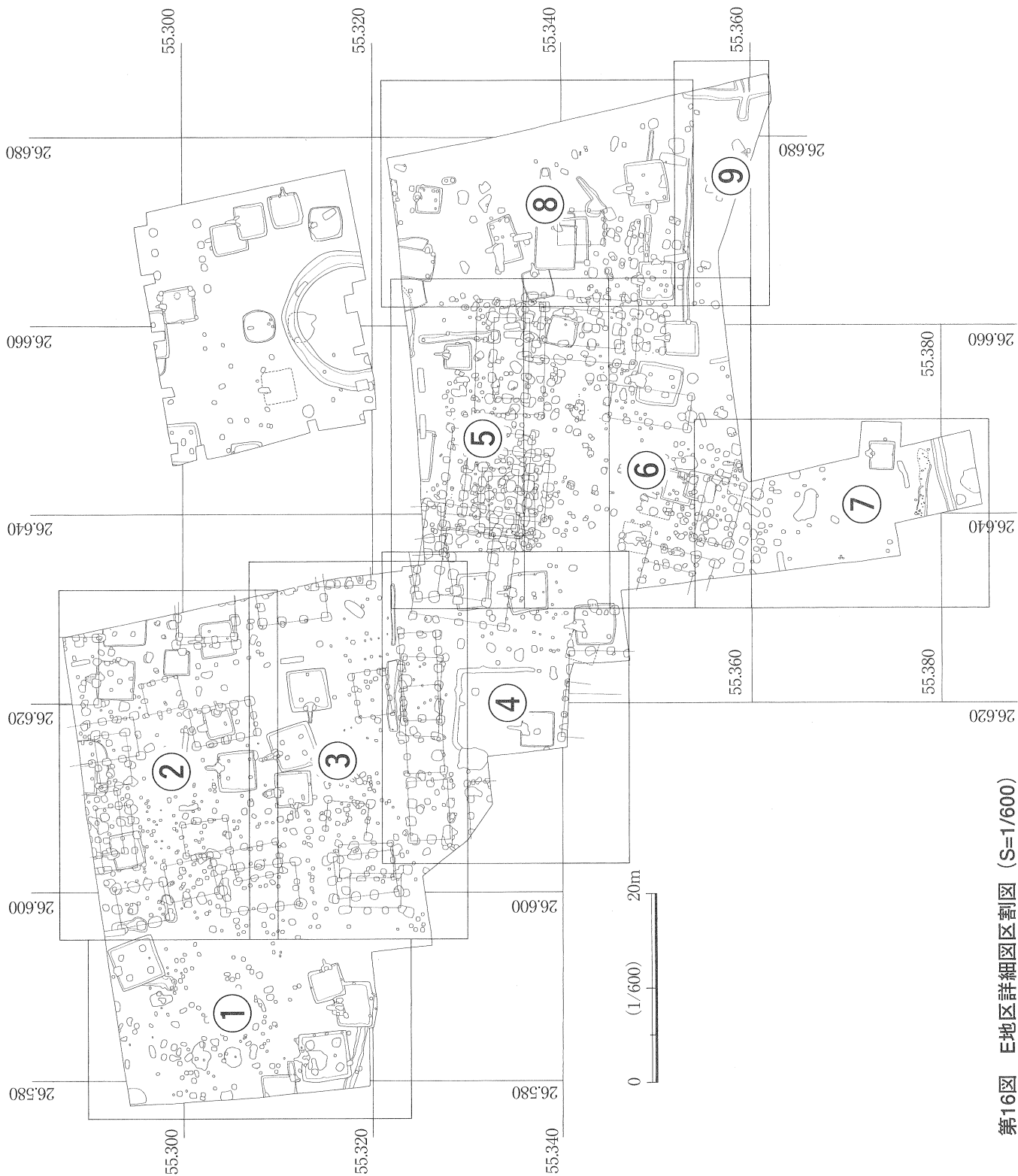
F地区の調査は、東西45m・南北57mの調査面積1,200m²で実施した。検出遺構は、性格不明の土坑42基を検出するが、うち縄文中期の炉跡状遺構1基、陥し穴4基、有天井土壇2基、木棺墓2基、



第15図 F地区グリッドと遺構配置図 (S=1/400)

地下式土壙2基、性格不明土坑7基の18遺構について記載した。特筆する遺構は、地下式土坑の29号土坑からロクロ土師器坏を出土し、この種の遺構では遺物の出土する例が少なく、時期を明確にする好資料を得た。

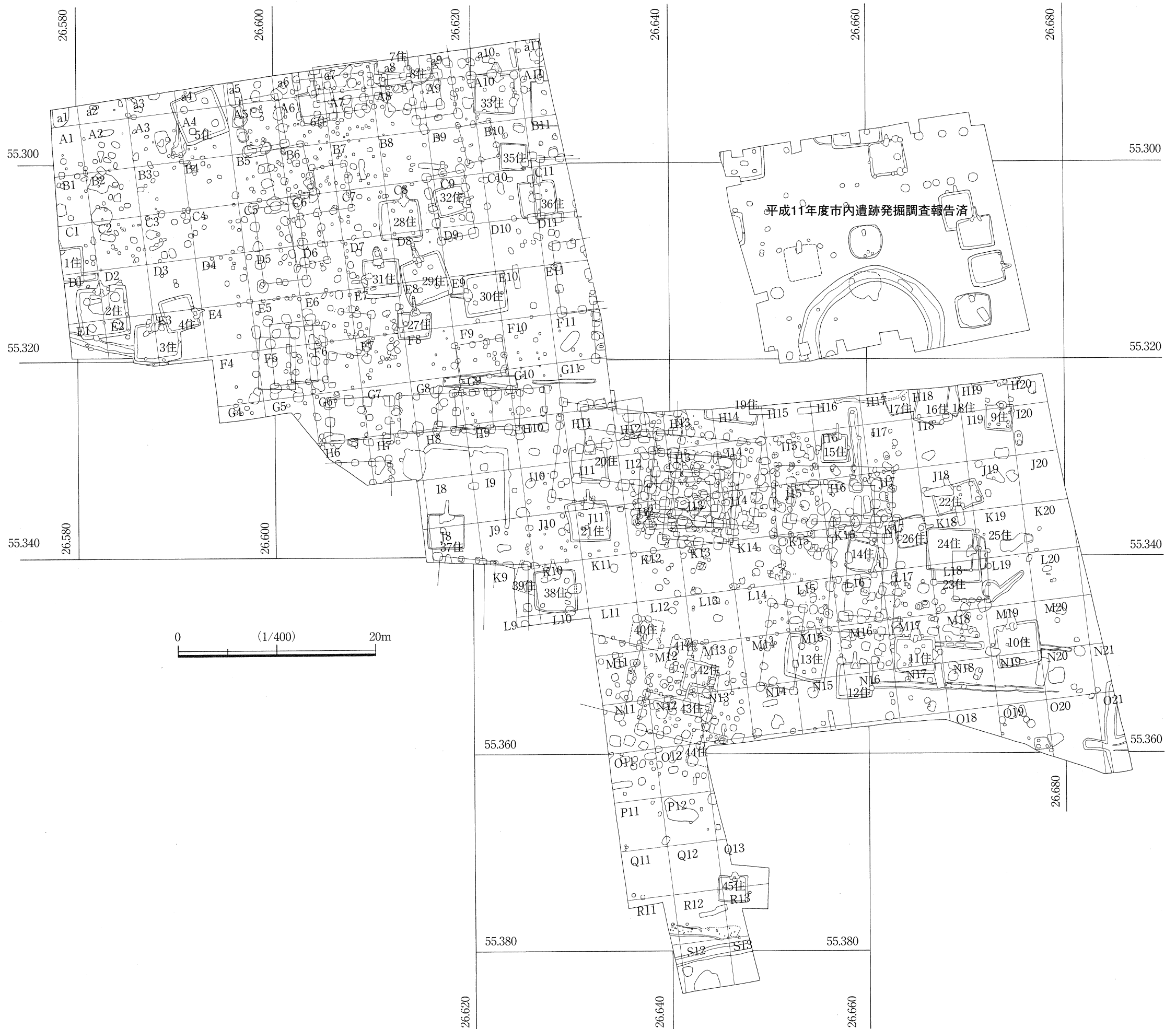
E地区の調査は、東西109m・南北98mの調査面積4,560m²で実施した。検出遺構は、竪穴住居跡45軒・掘立柱建物跡41棟、祭祀遺構に集石遺構8基・土器埋納遺構5基・土器廃棄遺構3箇所などの他、護摩を焚いたと思われる焼土堆積箇所4箇所を検出した。竪穴住居跡は45軒のうち16軒が8世紀後半～9世紀第1四半期で、掘立柱建物跡が建ち並ぶ時期の9世紀第2四半期～10世紀中頃にあたる39軒の住居跡が確認され、竪穴住居跡と掘立柱建物跡が共存する状況が確認された。また、出土遺物には多量の緑釉・灰釉などの施釉陶器、墨書土器、緑釉花文などを模倣した内黒暗文土器、



第16図 E地区詳細図区割図 (S=1/600)

金銅製帯金具、金銅製鍵？、錠前など一般の集落跡では見られない特異な遺物が豊富に出土している。

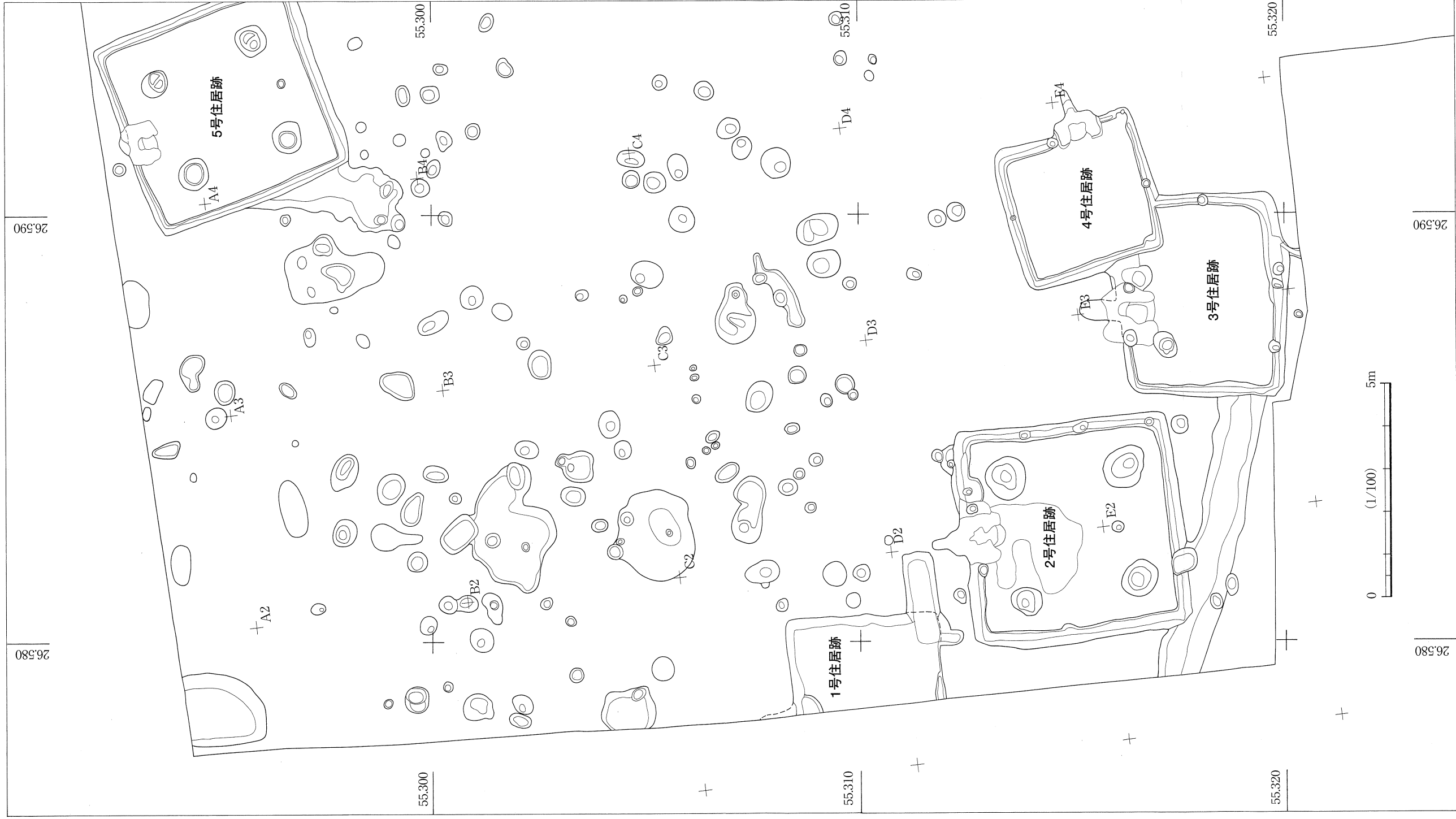
掘立柱建物跡は、2間×3間が25棟・2間×4間が4棟・2間×5間が4棟・3間×4間が2棟・3間×5間が1棟・2間×3間の四面廂付建物が4棟・2間×4間の四面廂付建物1棟・4間×4間の四面廂付建物1棟の他、規模が不明ながら建物存在を思わせる数箇所を合わせると45棟以上が確認できる。建物の配置は、複数の建物が柱筋を通し規則的な配置を呈する個所や四面廂付建物跡がほぼ同じ位置で建て替えが行なわれている個所が確認されるが、調査区の西側と東側で配置状況が大きく



第17図 E地区グリッド配置図 (S=1/400)



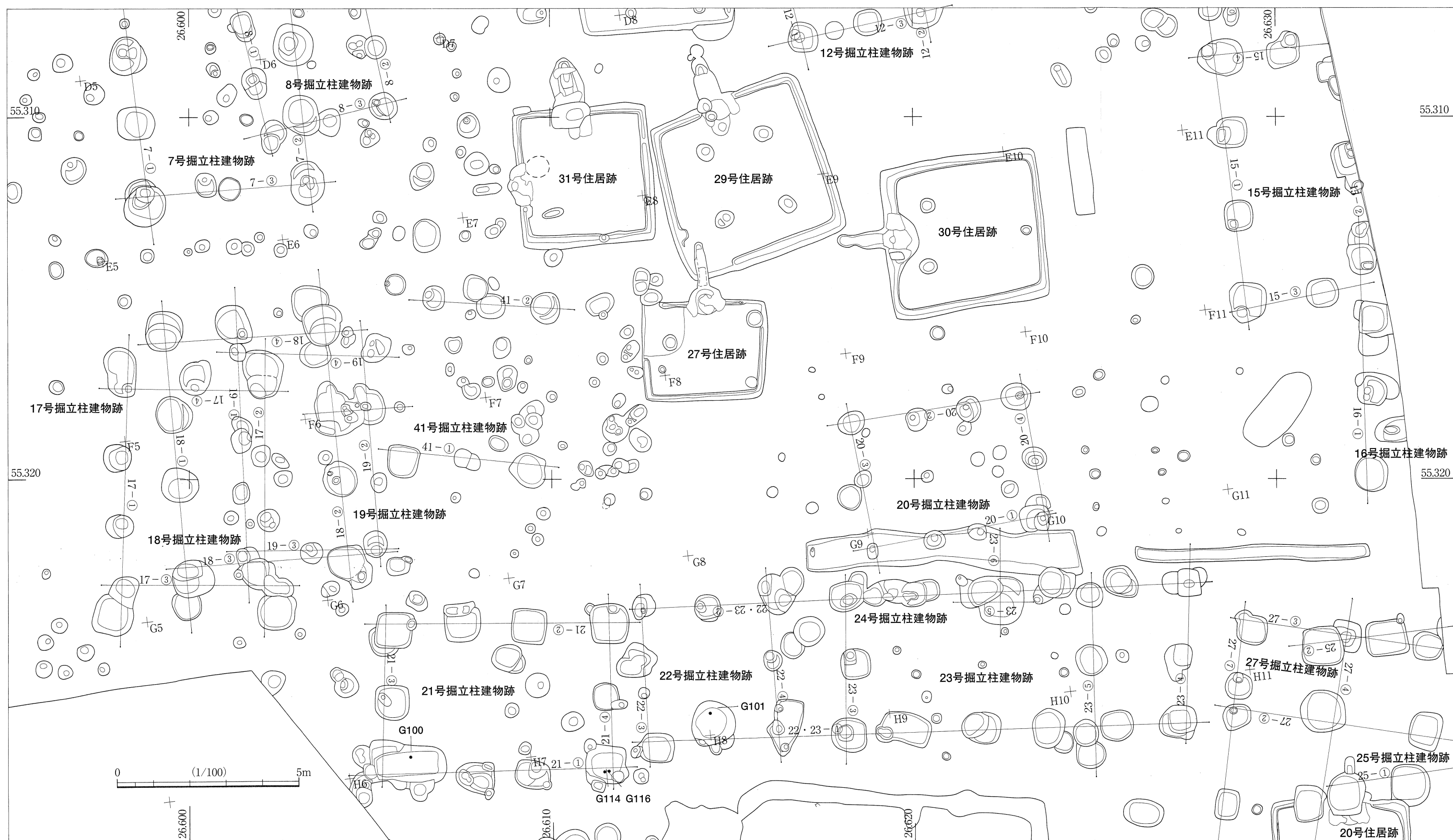
第18図 E地区遺構配置図 (S=1/400)



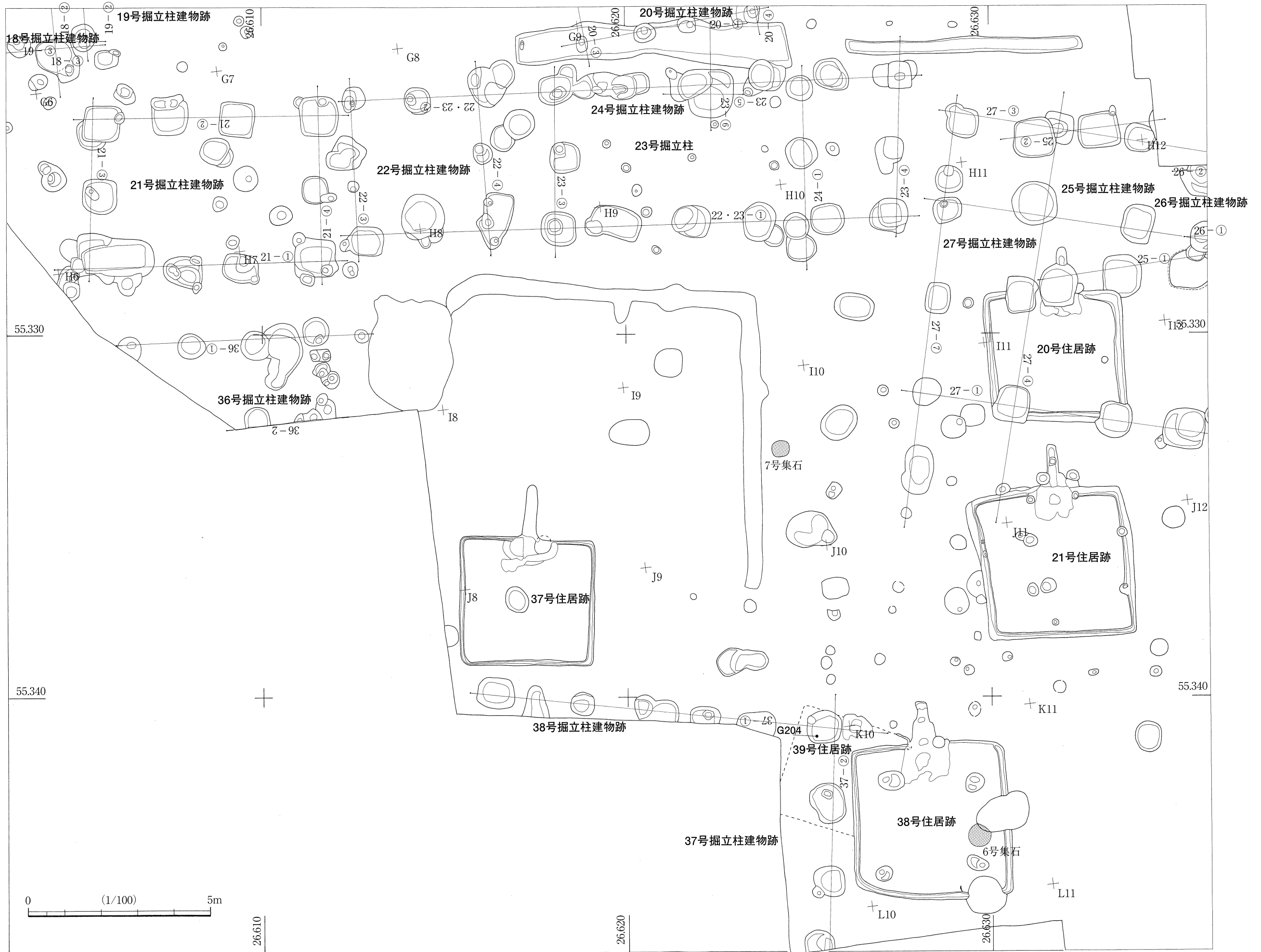
第19図 E地区詳細図(1) (S=1/100)



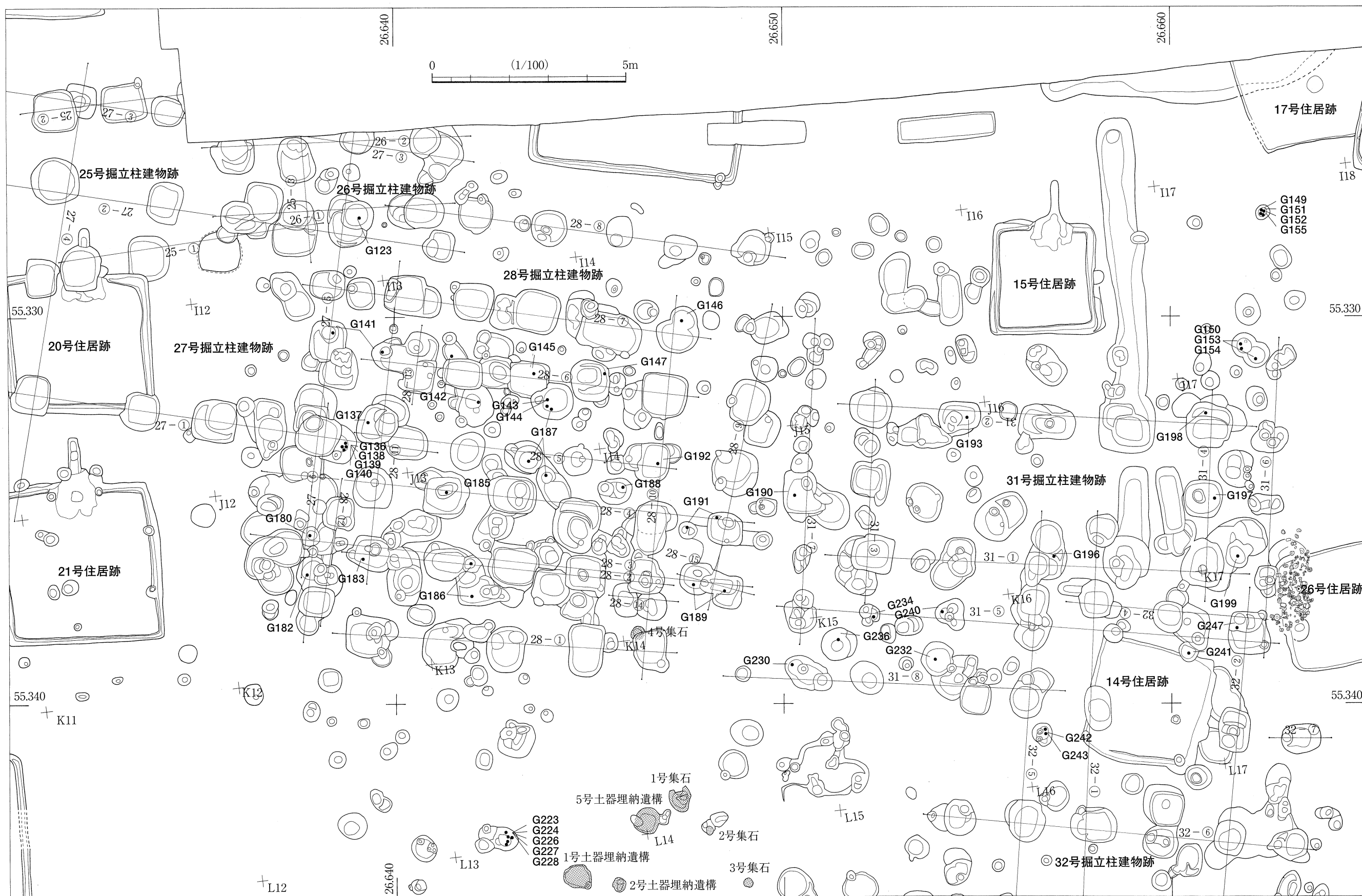
第20図 E地区詳細図(2) (S=1/100)



第21図 E地区詳細図(3) (S=1/100)



第22図 E地区詳細図(4) (S=1/100)



第23図 E地区詳細図(5) (S=1/100)



第24図 E地区詳細図 (6) (S=1/100)



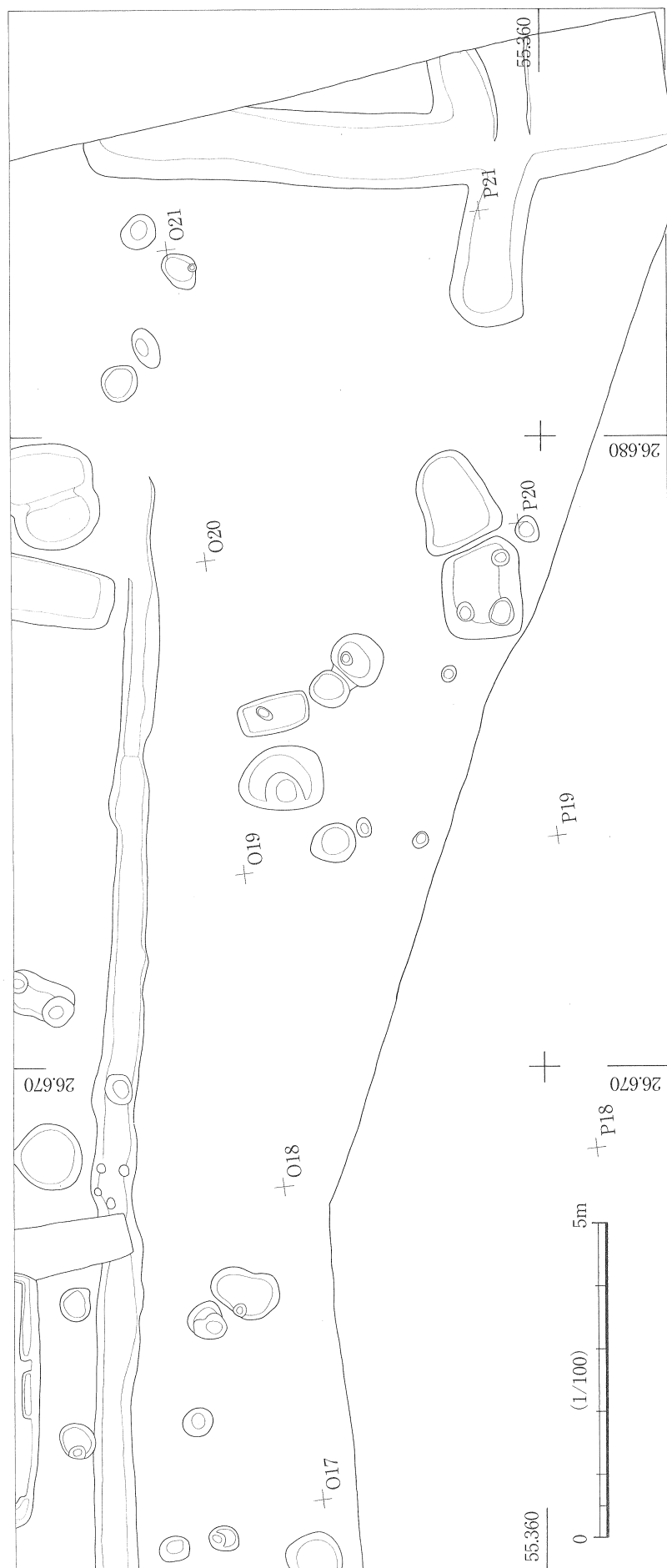
第25図 E地区詳細図(7) (S=1/100)



第26図 E地区詳細図(8) (S=1/100)

異なっている。掘立柱
建物跡の時期につい
ては、出土遺物や複
合関係を元に、建物
方位が西から東向き
に変遷する状況から
、大きく6時期の変
遷が想定される。

墨書土器には、「国
厨」・「市厨」・「京」
・「道士」・「丸」・
「九上」・「主」・「山
万」・「八万」・「定
万」・「有」・「上」・
「国」・「萩」・「井」・
「永」・「千」・「智」
や「貞観十七年十一
月廿四日」紀年銘墨
書土器などが検出さ
れている。



第27図 E地区詳細図(9) (S=1/100)

第2章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡

第2節 掘立柱建物跡とグリッド出土遺物

第3節 祭祀遺構（集石・土器埋納・土器廃棄遺構）

第4節 溝と古代道

第5節 古墳

第6節 土坑と出土遺物

第7節 その他の出土遺物

第8節 稻荷台1～6号墳出土の平安時代の土器

第9節 稻荷台遺跡出土の施釉陶器

第1節 竪穴住居跡

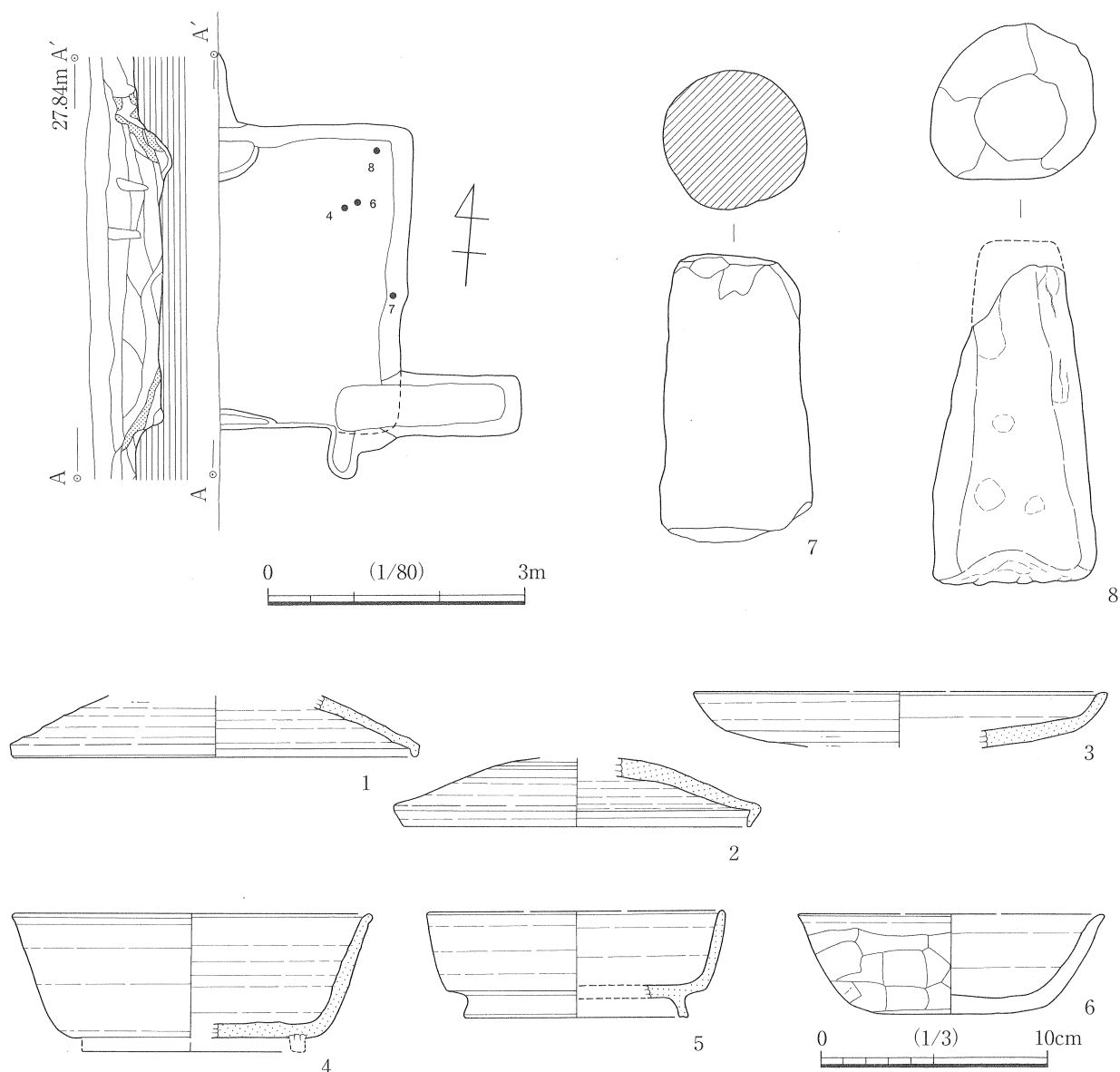
今回の調査で検出された、竪穴住居跡は79軒である。内訳は弥生時代1軒、8世紀後半16軒、9～10世紀代58軒、時期不明4軒である。この他の当台地上で検出された竪穴住居跡は、今回の報告範囲より先行して実施された1～6号墳の調査で10数軒が調査されている。また、平成11年度のE地区北東部の調査で弥生後期2軒・奈良～平安時代が10軒の計12軒と、平成14年度に更に北側100m地点で行なわれた調査で奈良～平安時代が4軒の計105軒が検出されている。

第1表 竪穴住居跡一覧表—①

住居番号	位置	平面形	カマド等の有無	主軸方向	規模 (m) 確認面 主軸長×副軸長 床 面 主軸長×副軸長	床面積 (m ²)	床面標高 (m)	主柱穴	備考	時期	旧住居番号
1	C1・D1	方形?	北壁	N -6°-W	3.55 × 3.34		26.86	無	西側半分未調査	A期	E地区1住
2	D1・D2 E1・E2	方形	北壁中央	N -7°-W	5.24 × 4.82	22.88	26.68	有4	A期標準資料	A期	E地区2住
3	E2・E3	横一長方形	北壁西寄	N -2°-W	4.02 × 3.68	15.90	26.78	無	3住→4住	A期	E地区3住
4	D3・E3	ほぼ方形	東壁南寄	N -74°-E	3.43 × 3.12	10.30	26.84	無	4住←3住	A期	E地区4住
5	a4・A4	方形	北壁中央	N -22°-W	4.96 × 4.62	20.79	26.75	有		A期	E地区5住
6	a6・a7 A6・A7	ほぼ方形	北壁中央	N -11°-W	3.37 × 3.24	10.77	26.75	無	5住→2・3号掘立柱	A期	E地区6住
7	a8	方形?	不明	N -7°-E	× 3.38 × 3.22		26.76	無?	8住→7住	I期	E地区7住
8	a8・a9 A8	楕円形?		N -2°-W	(5.45) ×		26.70	不明	→7住→4・5号掘立柱	弥生?	E地区8住
9	H19・H20 I19・I20	ほぼ方形	北壁東寄	N -4°-E	2.66 × 2.54	6.76	27.38	無?		9世紀代	E地区9住
10	M19・N19	方形	北壁西寄	N -6°-W	4.43 × 4.27	17.82	27.56	有2	A期標準資料	A期	E地区10住
11	M17・N17	横長方形	北壁中央 東壁中央	N -1°-E	3.72 × 3.46	13.33	27.35	有4		A期	E地区11住
12	M15・M16 N15・N16	方形	北壁中央	N -1°-E	3.62 × 3.32	10.94	27.20	無		Ⅱ期—a	E地区12住
13	M14・M15 N15	縦長方形	北壁中央	N -10°-E	4.68 × 4.40	17.32	27.00	有4	13住→33号掘立柱	A期	E地区13住
14	K16	ほぼ方形	東壁南寄	N -106°-E	3.00 × 2.76	7.82	27.28	無	14住→32号掘立柱	I期～ Ⅱ期—a	E地区14住
15	I16	ほぼ方形	北壁中央	N -1°-W	2.86 × 2.68	6.56	27.12	無		A期	E地区15住
16	H18・I18	横一長方形	東壁南隅寄	N -100°-E	3.18 × 3.07		27.40	不明		Ⅳ期—b	E地区16住
17	H17・H18	方形?	不明	不明	不明		27.41	不明	17住→16	住Ⅳ期—b	E地区21住
18	H18・I18	不整形	不明	不明	不明		27.40	不明	18住→16住	V期?	E地区22住
19	H13・H14	方形?	不明	N -6°-E?	×5.42 ×5.24		27.10	無?		Ⅳ期—a	E地区17住
20	H11・I11	ほぼ方形	北壁中央	N -3°-W	3.62 × 3.35	12.09	26.43	無	25掘立柱→27掘立柱	Ⅱ期—a	E地区18住
21	I10・I11 J10・J11	方形	北壁中央	N -4°-W	4.18 × 3.90	15.14	26.56	有 変則4?		Ⅱ期—a	E地区19住
22	J18・J19	横一長方形	北壁西寄	N -18°-W	2.76 × 2.58	11.56	27.08	4 変則4		Ⅱ期—a	E地区20住
23	K18・L18	方形	東壁中央 南西隅	N -89°-E 4.64×4.78	4.69×4.84	22.56	27.50	不明	23住→24住→25住 40号掘立柱→23住	Ⅲ期—b	E地区23住
24	K17・K18 L17・L18	ほぼ方形	東壁中央	N -92°-E	4.76 × 4.61	19.30	27.40	無		Ⅲ期—b	E地区24住
25	K18・K19 L18・L19	不整形方形	不明	不明	南北3.40× 3.25×		27.50	不明		Ⅳ期—b V 期	E地区25住
26	J17・K17	方形	東壁中央	N -77°-E	3.10 × 2.89	7.94	27.32	無	26住→24住	I期	E地区38住
27	E7・E8	横一長方形	北壁中央	N -2°-W	2.74 × 2.58	8.31	26.74	無?	27住←29住	Ⅲ期—a	E地区26住
28	C7・C8 D7・D8	ほぼ方形	北壁東寄	N -4°-W	3.92 × 3.68	14.46	26.64	有4		I期	E地区27住
29	D8・D9 E8・E9	方形	北壁中央	N -19°-W	4.63 × 4.35	18.87	26.58	有4	29住→27住	I期	E地区28住
30	E9・E10	方形	西壁中央	N -95°-W	4.37 × 4.12	15.86	26.68	有		Ⅱ期—a— b	E地区29住
31	D7・D8 E7・E8	方形	北壁西寄 西壁南寄	N -5°-W	3.81 × 3.56	12.31	26.68	無		I期	E地区30住
32	C8・C9	方形	北壁中央 東壁中央	N -15°-W	2.94 × 2.80	7.79	26.80	無	32住→12号掘立柱	Ⅱ期—a	E地区31住
33	A10	方形	北壁中央	N -1°-E	4.06 × 4.00	15.72	26.80	有	33住→6号掘立柱	I期～Ⅱ期 —a	E地区33住
34	A11・B11	方形?	不明	N -2°-W?	4.59× 4.45×		26.80	有4?	34住→6号掘立柱	Ⅱ期—a	E地区34住
35	B10・C10	方形	東壁南隅寄	N -92°-E	2.79 × 2.66	6.72	26.86	無	35住←13号掘立柱	Ⅳ期—b	E地区35住
36	C10・C11	方形	北壁	N -7°-W	3.56 × 3.44	12.24	26.76	有	13掘立柱→14掘立柱	Ⅱ期—a	E地区36住
37	I7・I8 J7・J8	ほぼ方形	北壁中央	N -0°	3.52 × 3.40	12.28	26.74	無		Ⅲ期—a	E地区37住

第1表 竪穴住居跡一覧表—②

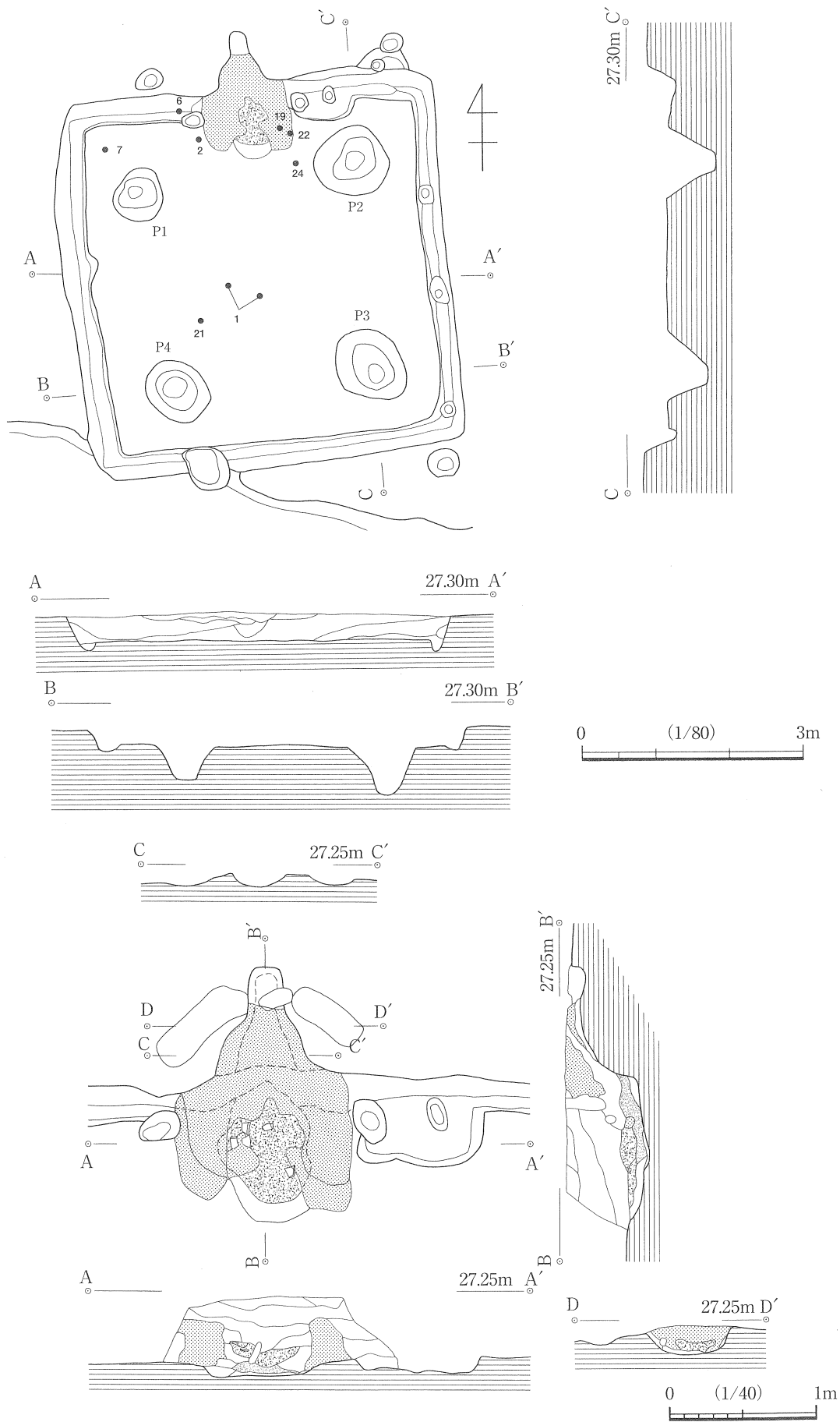
住居 番号	位 置	平 面 形	カマド等 の有無	主軸方向	規模 (m)		床面積 (m ²)	床面標高 (m)	主柱穴	備 考	時 期	旧 住居番号
					確認面 床 面	主軸長×副軸長 主軸長×副軸長						
38	K9・K10	方形	北壁中央	N -3°-W	4.37 × 4.30 4.22 × 4.16	(3.06×3.04)	16.87	26.48	有	38住→39住	A期	E地区39住
39	K9・K10	方形?	北壁中央?	N -18°-E		(3.06×3.04)	(9.27)	26.84	無		Ⅳ期 - a	E地区46住
40	L11・L12	方形?	北壁中央?	N -11°-E		(3.00×2.98)	(8.90)	27.10	不明		Ⅳ期 - a	E地区40住
41	L12・L13 M12・M13	方形?	北壁中央?	N -14°-E		(3.29×3.28)	(10.78)	27.10	不明		Ⅳ期 - b	E地区41住
42	M12・M13	方形	東壁中央	N -105°-E	3.31 × 3.28 3.18 × 3.10		9.78	27.00	不明		Ⅳ期 - b	E地区42住
43	M12・M13 N12・N13	方形	不明	N -105°-E	2.97 × 3.10 2.88 × 2.90		8.62	27.02	不明	43住→34号掘立柱	Ⅳ期 - b	E地区43住
44	N12・N13 O12・O13	方形?	北壁	N -14°-E	(3.54×3.62) 稀		(12.66)	削平	不明		Ⅳ期 - b	E地区44住
45	Q12・Q13 R12・R13	やや横長方	北壁中央	N -3°-E	2.63 × 3.00 2.53 × 2.84		7.03	27.26	無		A期	E地区32住
46	BL-E4	横一長方形	北壁東寄 東壁中央	N -16°-E	3.34 × (3.45) 3.23 × (3.32)		(10.22)	27.94	無		Ⅳ期 - b	A地区1住
47	BL-E3・BL-E4 N1-E3	やや横長方	北壁中央	N -14°-E	2.58 × 2.86 2.40 × 2.75		6.42	27.72	無	47住→46住	Ⅱ期 - b	A地区2住
48	BL-E6・BL-E7	ほぼ方形	北壁中央	N -11°-W	3.14 × 3.00 3.04 × 2.82		8.26	27.86	無	48住→50住	Ⅱ期 - a	A地区3住
49	BL-E7 S1-E7	方形	北壁中央	N -1°-E	3.35 × 3.40 3.14 × 3.28		10.06	27.90	無	49住→50住	Ⅱ期 - a	A地区4住
50	BL-E6・BL-E7	方形?	不明	不明	(4.46) × (4.40) ×			28.16	不明	53住←52住	不明	A地区5住
51	N2-E7・N2-E8 N1-E7・N1-E8	縦一長方形	北壁中央	N -18°-W	3.70 × 3.30 3.58 × 3.14		10.71	27.78	有		Ⅱ期 - a	A地区6住
52	N1-E5	方形	東壁中央	N -107°-E	3.75 × 3.64		12.28	28.02	有	52住←53住	Ⅳ期 - b	A地区7住
53	N2-E5・N2-E6 N1-E5・N1-E6	方形	東壁?	N -106°-E	4.34 × 4.30		(18.19)	28.08	不明	53住→52住	Ⅳ期 - b	A地区8住
54	N5-E5・N5-E6 N4-E5・N4-E6	やや横長方	東壁南寄	N -99°-E	2.66 × 3.02 2.54 × 2.94		6.94	27.96	無		Ⅳ期	A地区9住
55	N5-E4・N5-E5 N4-E4・N4-E5	ほぼ方形	無	N -4°-E 長軸方向	2.81 × 2.60 2.66 × 2.43		6.22	27.82	無		Ⅲ期 - a	A地区10住
56	N5-E2・N5-E3 N4-E2・N4-E3	横一長方形	北壁東寄	N -9°-W	4.60 × 5.90 4.42 × 5.80		25.70	27.75	有 2?		Ⅱ期 - b	A地区11住
57	N5-E1・N5-E2	やや横長方	北壁東寄	N -12°-W	2.80 × 3.32 2.62 × 3.08		7.62	27.46	無		Ⅱ期 - a	A地区12住
58	N6-E3・N6-E4 N5-E3・N5-E4	方形	北壁	N -15°-W	3.16 × 3.12 3.06 × 3.00		8.88	27.70	無	58住→42建物→59 住	Ⅱ期 - a ~ b	A地区13A 住
59	N6-E3・N6-E4	不整形円形	無	不明	径3.4m		不明	27.90	無	59住←58住	V期	A地区13B 住
60	N7-E1 N6-E1	方形?	不明	N -25°-E	一辺3.7m			27.70	不明		V期	A地区14住
61	N9-E1 N8-E1	方形?	北壁	N -2°-E	4.52 × 4.38 ×			27.32	無		A期	A地区15住
62	N1-W3・N1-W2	ほぼ方形	北壁中央	N -7°-W	3.14 × 3.02 2.92 × 2.74		8.02	27.04	無		Ⅱ期 - b	B地区2住
63	N2-W2	方形?	北壁	N -11°-W	3.16 × 2.98 ×			27.08	無		Ⅳ期 - a	B地区1住
64	N5-W11 N4-W10	方形?	北壁	N -6°-E	(3.54 × 3.37)		(11.77)	27.72	無		Ⅳ期 - a	B地区3住
65	N6-W2・N6-W1	方形	不明	N -2°-E	(3.17) × 3.34 (2.89) × 3.20		9.32	27.35	無		Ⅱ期 - Ⅲ	B地区4住
66	N6-W2 N5-W2	方形?	北壁	N -9°-W	3.36 × 3.21 ×			27.34	有 2?	66住→67住	A期	B地区5住
67	N6-W2	方形?	北壁	N -7°-W	2.67 × 2.58 ×			27.45	無	67住→68住	Ⅳ期 ~ V	B地区6住
68	N7-W2	方形?	北壁	N -3°-E	不明			27.50	無	68住→69住	Ⅵ期 - b	B地区7住
69	N8-W1 N7-W1	縦一長方形	北壁	N -1°-W	4.26 × 2.92 4.16 × 2.84		11.28	27.61	無?		Ⅵ期	B地区8住
70	N9-W4・N9-W3	縦一長方形	北壁	N -11°-W	3.96 × 3.13 3.62 × 2.81		9.34	27.10	無?		V期	B地区9住
71	N9-W5・N9-W4	方形	北壁中央	N -1°-W	3.80 × 3.76 3.58 × 3.62		12.54	27.13	有 4		Ⅱ期 - a	B地区10住
72	N11-W5・N11-W4 N10-W5・N11-W4	方形?	北壁	N -3°-W	4.06 ×		11.7	27.35	無		V期	B地区11住
73	N10-W6・N10-W5	ほぼ方形	北壁	N -9°-E	3.48 × 3.76 3.24 × 3.56		11.18	26.90	無		A期	B地区12住
74	N11-W6・N11-W5	横一長方形	北壁	N -10°-E	3.26 × 3.86 3.10 × 3.72		11.27	27.18	無		A期	B地区13住
75	S21-E15	方形?	北壁	N -11°-E	(3.61 × 3.68)		(12.85)	29.22	無		不明	C地区1住
76	S20-E9・S20-E10 S21-E9・S21-E10	方形	北壁	N -21°-E	3.02 × 2.90 2.90 × 2.78		7.93	29.08	無		不明	C地区4住
77	S16-E14 S17-E14	方形	北壁	N -3°-E	2.78 × 2.80 2.66 × 2.70		6.84	28.84	無		Ⅲ期 - b	C地区2住
78	S18-E12・S18-E13 S19-E12・S19-E13	方形?	東壁	N -84°-E	2.80 × 2.62 ×			29.14	不明		Ⅳ期 - a	C地区3住
79	S10-E1・S10-E2 S11-E1・S11-E2	方形	北壁	N -21°-E	2.44 × 2.52 2.32 × 2.40		5.22	28.20	有 4		Ⅱ期 - a	D地区1住



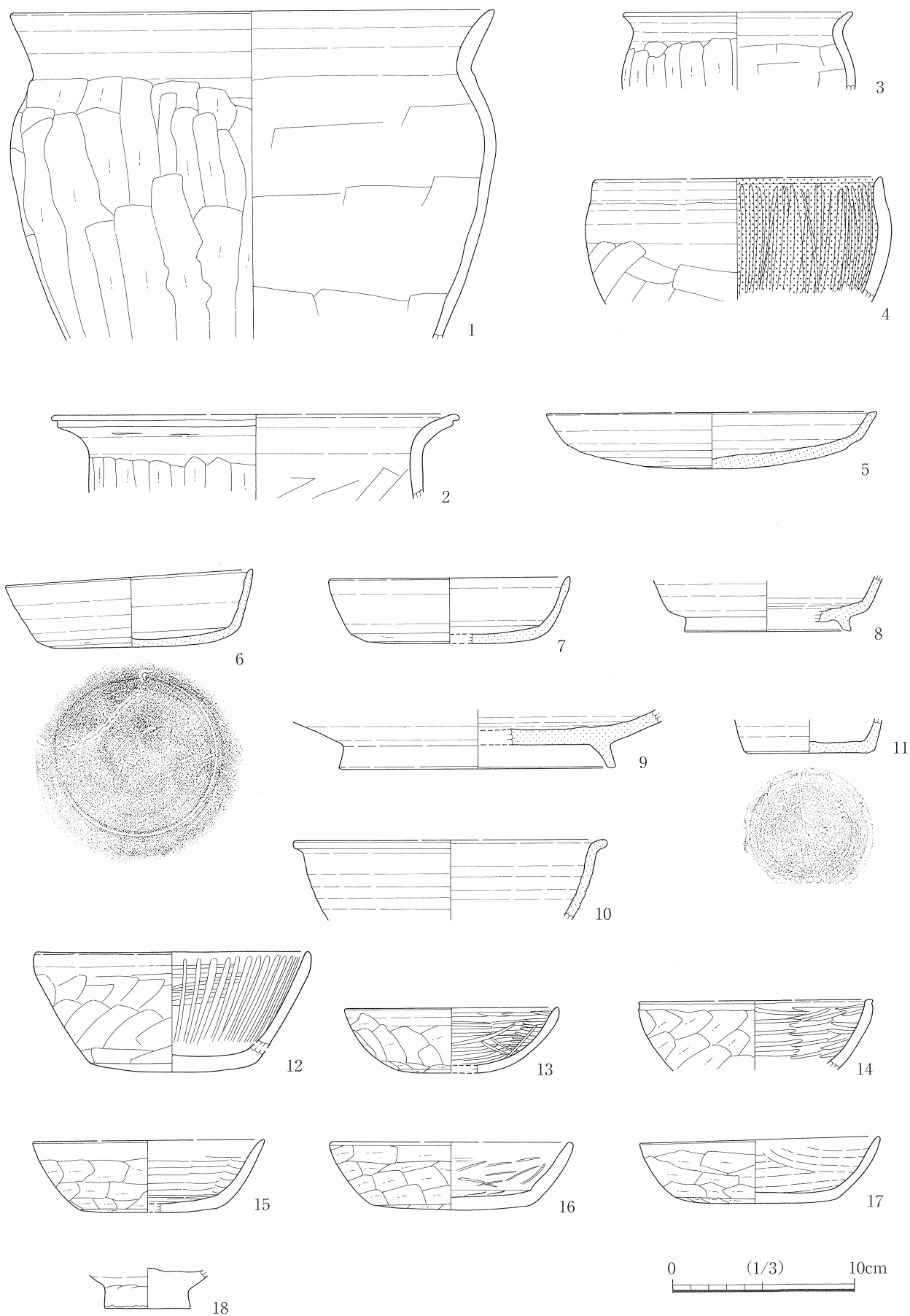
第28図 1号住居跡と出土遺物

1号住居跡（第28図）

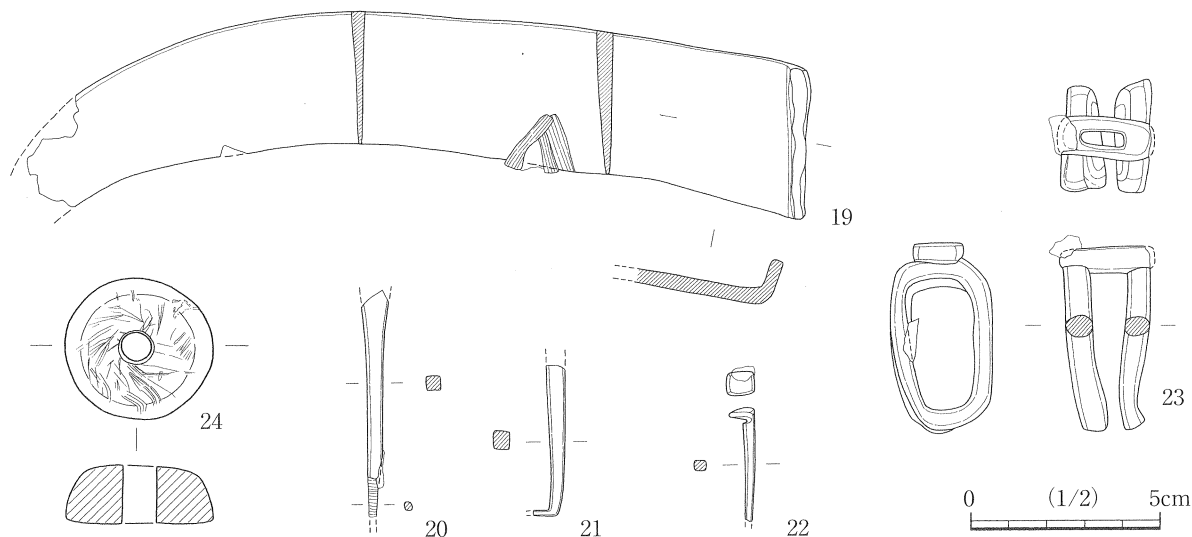
E地区西側西端C1・D1区に西半分を調査区域外に置き、南西隅をイモ穴に攪乱され検出する。規模は、主軸長3.34m（3.55）m・副軸長は計測できない。主軸方位はN-6°-Wを指向する。平面形は、東半分が未調査であるが均整の取れた方形を呈す。カマドは、北壁の中央に設けられているが全掘していない。床面標高は26.86mで、確認面からの深さ35cm程を測る。主柱穴は検出できない。壁溝は南壁に部分的に設けられるだけである。床面は凹凸があるものの堅緻である。土製支脚がカマド燃烧部内ではなく床面北東隅と東壁直下から出土し、元位置をとどめていない。これは住居覆土堆積が自然堆積ではなく人為的に埋め戻された状況を示すことと関連し、埋め戻し時にカマドが人為的に破壊された状況を示している。床面は凹凸が有るものの硬く踏みしめられている。



第29図 2号住居跡



第30図 2号住居跡出土遺物



第31図 2号住居跡出土遺物

出土遺物は、1・2は須恵器蓋、3は市原産の須恵器盤か、4は須恵器高台付坏、5は焼成の甘い高台付坏、6は非ロクロ土師器坏、7・8は土製支脚である。住居跡と共伴が明確な遺物は、6・7・8などが床面や床面近くから出土し、他の遺物も覆土中の検出であるが共伴遺物と見て差し支えないものであろう。これらの出土遺物から本住居跡は、稲荷台A期の8世紀第3四半期の所産であろう。

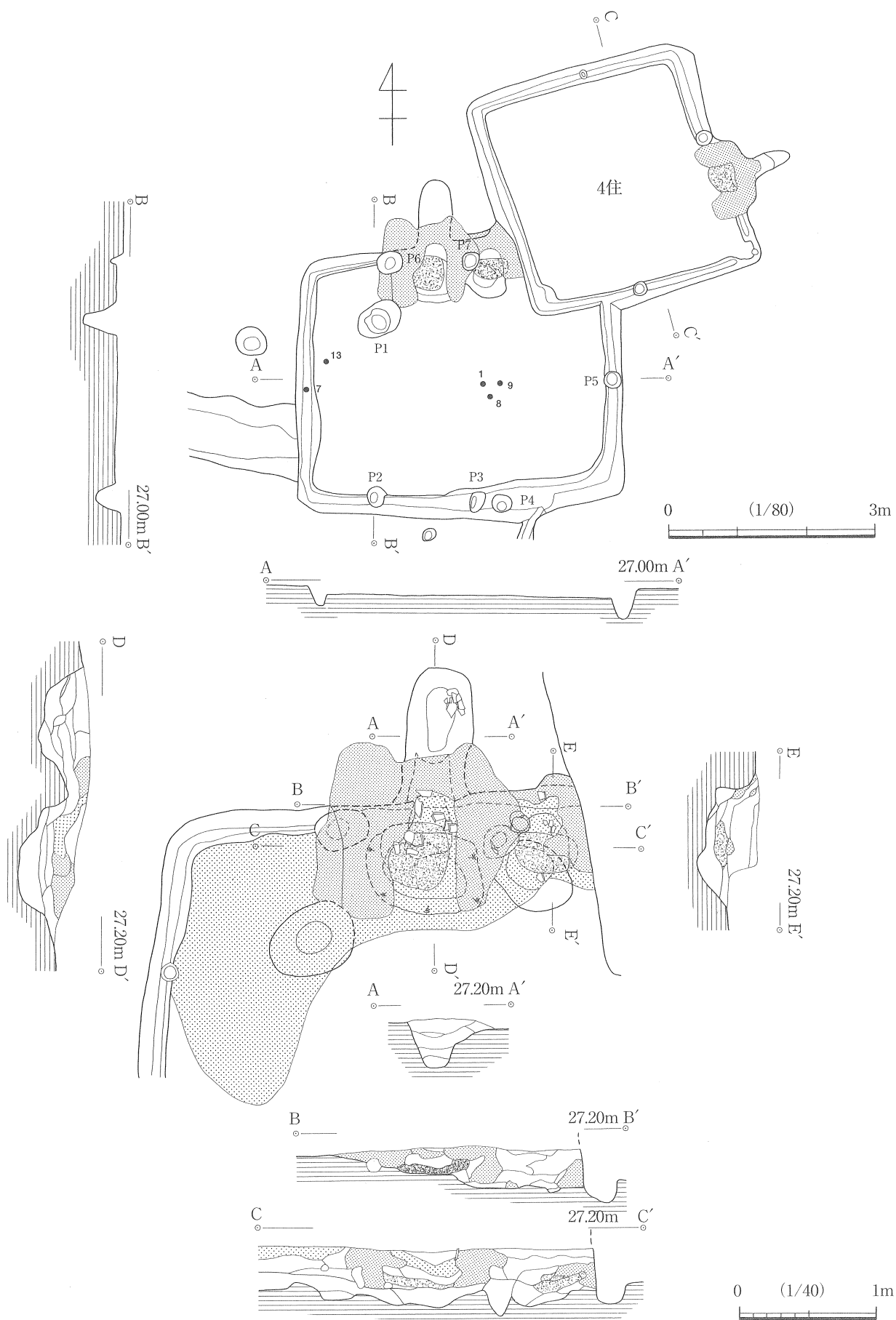
2号住居跡（第29図）

E地区西側南西端D1・D2・E1・E2区から検出する。北西1mに1号住、南東には3号住が至近距離にある。規模は、主軸長4.82m（5.24m）・副軸長4.82m（5.16m）と壁直下では共に4.8mほどを計測し、平面形は均整の取れた方形を呈する。主軸方位はN-7°-Wを指向する。カマドは北壁の中央に設けられ、カマド構築材には下末吉の白色粘土を使用している。床面標高は26.68mで、確認面からの深さ25cm程を測る。主柱穴は4穴を検出し、深さP1-65cm・P2-50cm・P3-65cm・P4-45cmを測る。壁溝は四周する。床面はカマドから主柱穴の内側が堅緻である。プラン北側の覆土上層に焼土が堆積する。床面はカマドから主柱穴間の内側が硬く踏みしめられている。

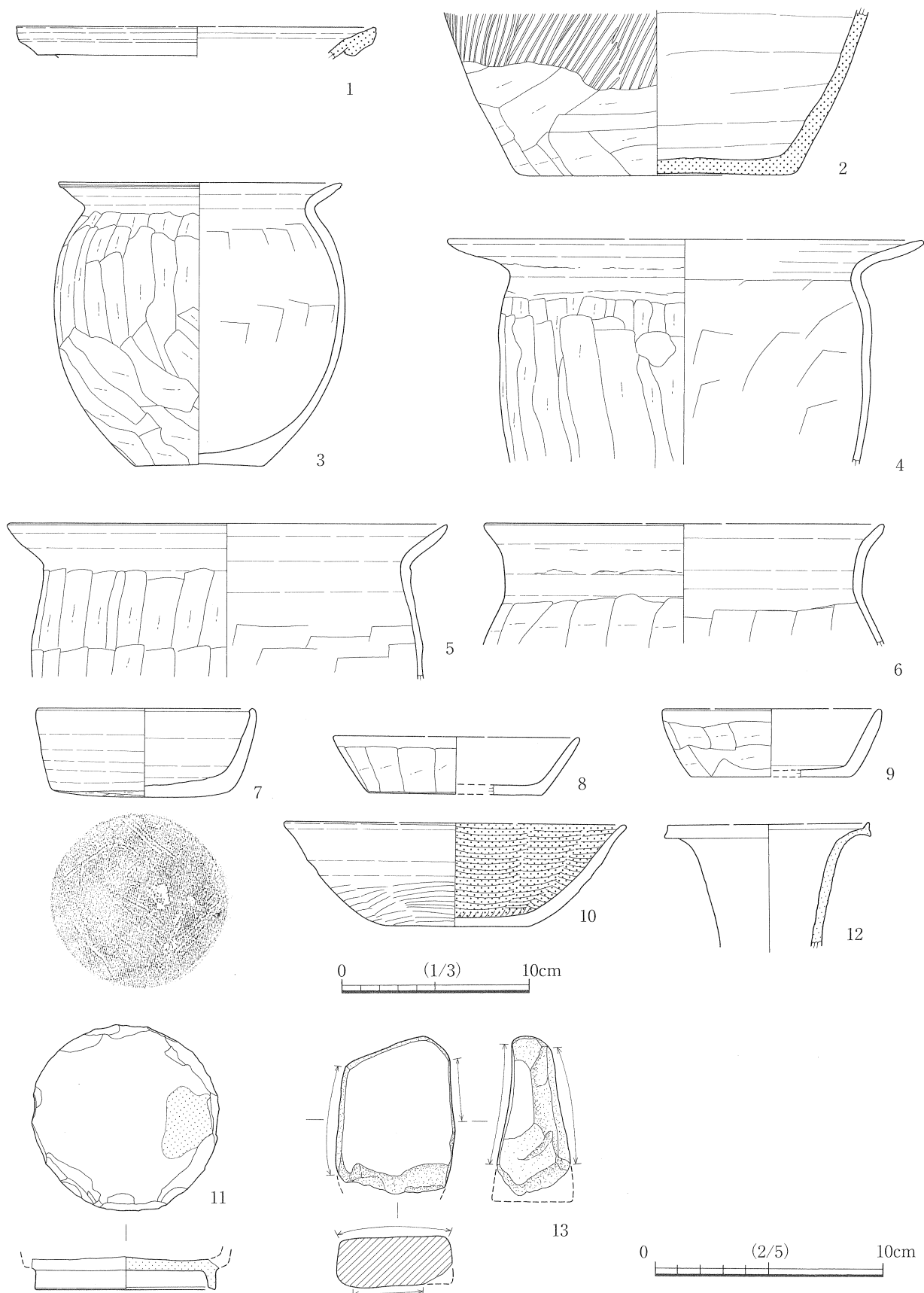
出土遺物は、1が土師器甕で床面中央、2が土師器甕でカマド左、6が須恵器坏でカマド西の壁溝内・7の須恵器坏が北西隅の床面、13・14の非ロクロ土師器坏がカマド燃焼部からの出土である。4は内黒土師器鉢、12・16・17の非ロクロ土師器坏が覆土上層の焼土中から出土し、他の5の須恵器皿・8と10の須恵器高台付坏・9の須恵器高台付盤・11の須恵器コップが覆土からの出土である。また、19の鎌と22の釘がカマド右袖上層、21の釘は床中央付近よりやや浮いて、23の金具はカマド燃焼部、24の紡錘車はカマド右袖の床面からそれぞれ出土している。これらの出土遺物から本住居跡の時期は、稲荷台A期の8世紀第3四半期の所産と看取される。

3号住居跡（第32・33図）

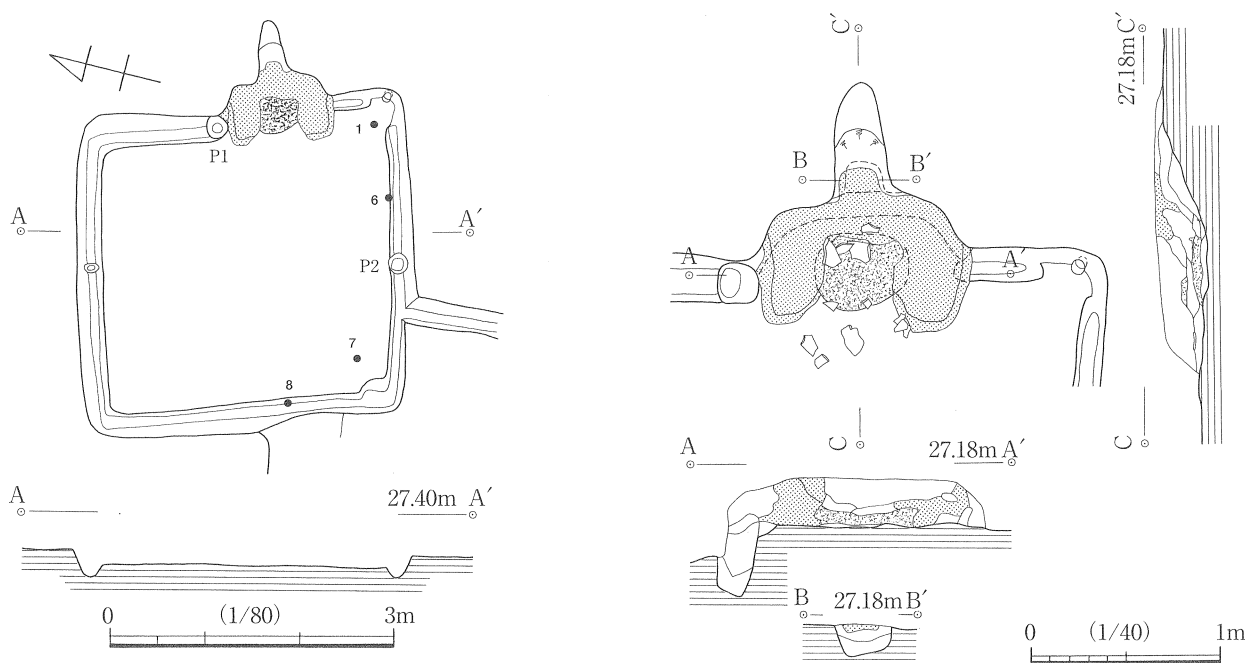
E地区西側西南E2・E3区に検出し、西側に2号住居跡が近接し、東北隅を4号住居跡に大きく掘り込まれ検出する。規模は、主軸長3.68m（4.02m）・副軸長4.54m（4.77m）を計測する。主軸方位はN-2°-Wを指向する。平面形は、副軸がやや長い横長の方形を呈する。カマドは北壁に2基設けられている。東側カマドは4号住居跡に掘り込まれ遺存するが、カマド土層C-C'の状況では、



第32図 3号住居跡



第33图 3号住居跡出土遺物



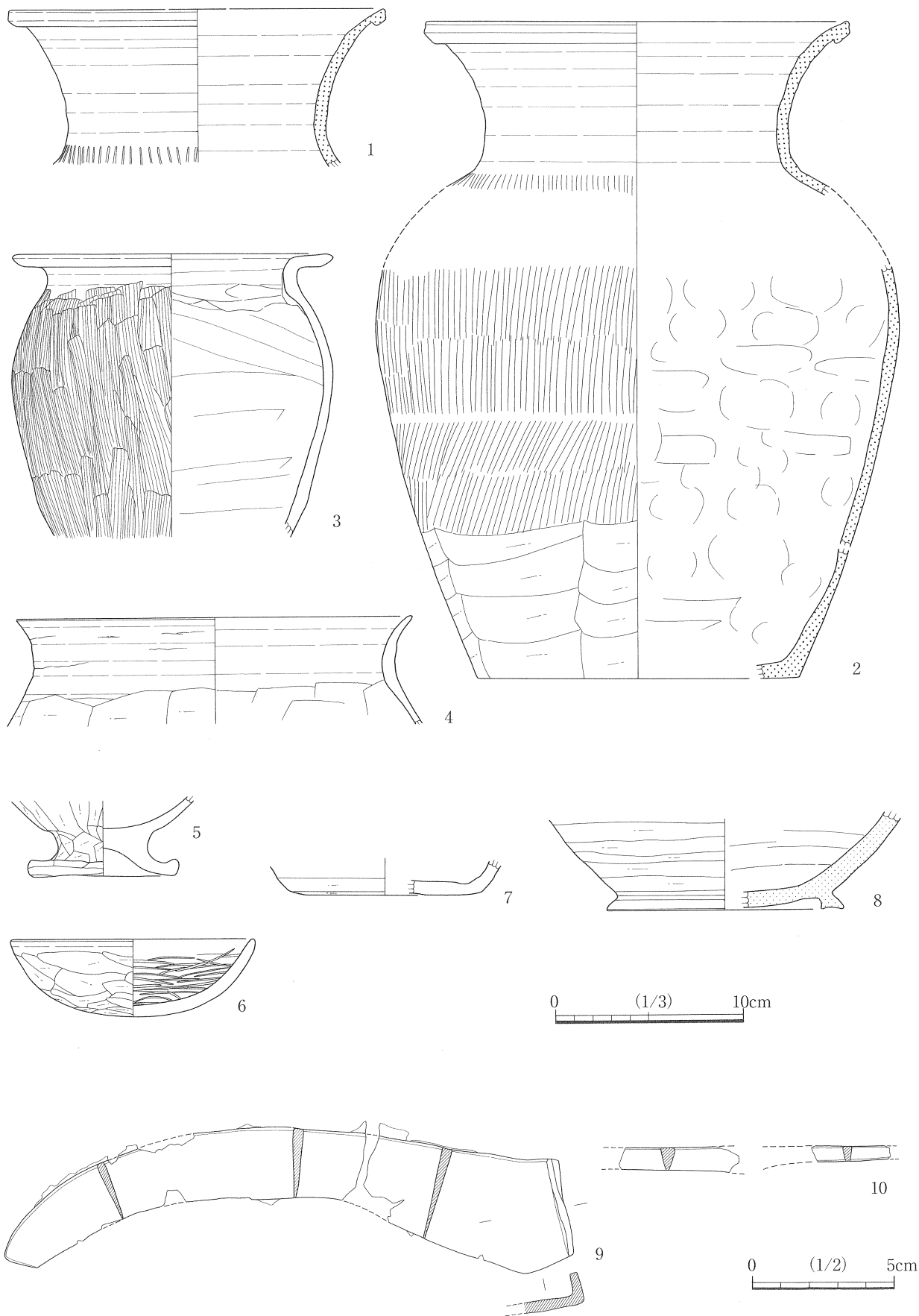
第34図 4号住居跡

袖部を共有し、同時に使用された状況が観察される。床面標高は26.78mで、確認面からの深さ20cm程を測る。ピットの深さは、P1－50cm・P2－25cm・P3－20cm・P4－36cm・P5－30cm程を測る。支柱穴は不明であるが、西側カマドの左右袖下から検出したP6・P7と南壁溝のP2・P3の位置関係から4柱穴が考えられるが、この場合東側のカマドが使用されると柱が燃えてしまうことになる。壁溝は四周する。北西隅の覆土に下末吉の白色粘土が広く張られているが、北西隅の状況から住居の施設に伴うものとは考えにくい。床面は白色粘土を混合して張り床され硬く踏まれている。

出土遺物、1・2は千葉市域産の須恵器甕、3～6は在地系の土師器甕、7は箱型のロクロ土師器坏、8・9は非ロクロ土師器坏で8は非在地系である、10は内黒ミガキのロクロ土師器坏、11は須恵器高台付坏で内面に僅かに朱墨の痕跡をとどめている。12は須恵器長頸壺、13は砥石である。住居跡と明確に共伴する遺物は、2・3・4・5・6がカマド燃焼部、1・7・8・9・13が床面からそれぞれ検出されている。これらの出土遺物から、本住居跡は稲荷台A期の8世紀第3～4四半期の所産と看取される。

4号住居跡（第34・35図）

E地区西側東南D3・D4区に検出し、西南隅で3号住居跡を大きく掘り込み検出する。規模は、主軸長3.12m（3.43m）・副軸長3.32m（3.55m）を計測する。主軸方位はN－74°－Eを指向する。平面形は、副軸が僅かに長い均整の取れた方形を呈する。カマドは東壁のやや南側に設けられ、燃焼部および袖部は壁より外側に突出して設けられ、煙道部先端では壁から0.65m突出している。床面標高は26.84mで、確認面からの深さ20cm程を測る。ピットの深さは、P1－40cm・P2－20cm程を測るが、支柱穴は検出されない。壁溝はカマド右の西南隅で途切れるがほぼ四周する。床面に顕著な凹凸面を有するが全体に硬く踏みしめられている。



第35图 4号住居跡出土遺物

出土遺物、1・2は千葉市域産の須恵器甕、3は外面刷毛目整形の土師器甕、4は武蔵型の土師器甕、5は台付甕、6は丸底の土師器坏、7は回転篋削りのロクロ土師器坏、8は猿投産須恵器長頸壺底部、9は鎌、10は刀子である。5の台付甕・鎌・刀子は覆土中の出土である。住居跡と明確に共伴する遺物は、2・3・4がカマド燃焼部、1・6・7・8が床面からそれぞれ検出されている。これらの出土遺物や3号住居跡との複合関係から、3号住居跡より後出する、稲荷台A期の8世紀第3～4四半期の所産であろうか。

5号住居跡（第36図）

E地区北辺の西側a4・A4区に単独で検出する。規模は、主軸長4.62m（4.96m）・副軸長4.59m（4.77m）を計測する。主軸方位はN-22°-Wを指向する。平面形は、均整の取れた方形を呈する。カマドは北壁の中央に設けられ、袖部や燃焼部は床面側でおさまり設けられている。床面標高は26.75mで、確認面からの深さ35cm前後を測る。ピットの深さは、P1-34cm・P2-50cm・P3-47cm・P4-32cm・P5-23cmを測り、主柱穴は4柱穴を検出し、P5は出入り口の階段ピットであろう。壁溝は四周する。床面は全体に張り床され余り踏みしめられた状況がない。

出土遺物、1は須恵器蓋、2は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、3は回転篋削りのロクロ土師器坏、4は底部外面に「土カ」の墨書を有する。何れも覆土からの出土であるが、ロクロ土師器は混入遺物と考えると、須恵器蓋から本住居跡は、A期の8世紀第4四半期を中心とした時期であろう。

6号住居跡（第37・38図）

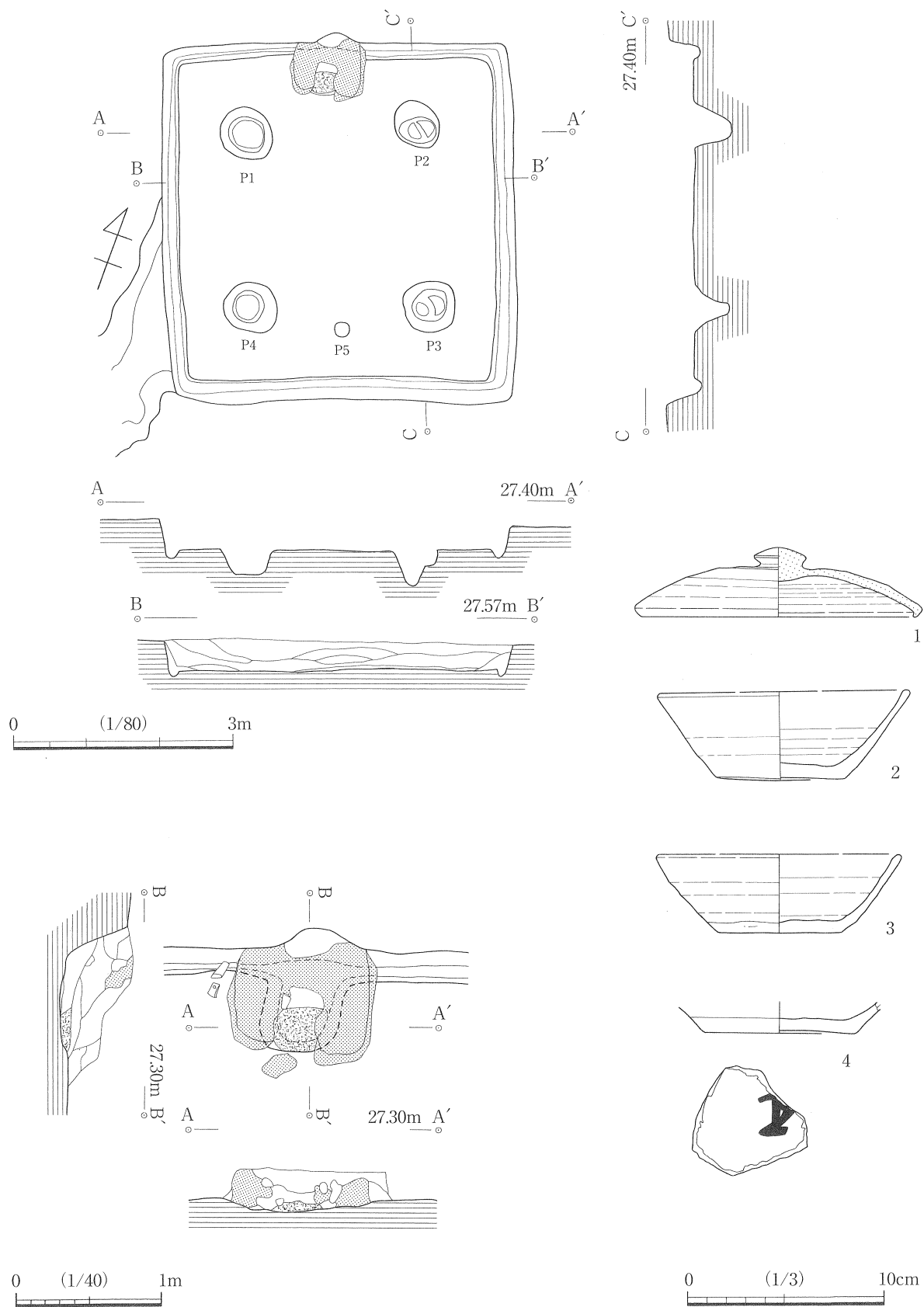
E地区西側北辺部中央a6・a7・A6・A7区に2・3号掘立柱建物跡に掘り込まれ検出する。規模は、主軸長3.24m（3.37m）・副軸長3.48m（3.69m）を計測する。主軸方位はN-11°-Wを指向する。平面形は、副軸が僅かに長い均整の取れた方形を呈する。カマドは北壁の中央に設けられている。床面標高は26.75mで、確認面からの深さ40cm前後を測る。主柱穴は検出できない。壁溝は、南西隅で大きく途切れるがほぼ周る。床面は凹凸が目立つものの堅緻ある。

出土遺物、1～5は土師器甕、6は台付甕、7は市原産須恵器坏、8は千葉市域産の須恵器坏、9・10は非ロクロ土師器坏、11は内面ミガキを施したロクロ土師器皿、12・13は刀子、14は金具、15は釘断片である。住居共伴遺物は、1・13・14が床面、2～6・8がカマド燃焼部、11がほぼ床面からそれぞれ出土し、他は覆土からの出土である。出土遺物から8世紀第4四半期の所産と思われるが、11のロクロ土師器皿は内面にミガキ、底体部に回転篋削りを施し手慣れた作りである。共伴関係を明確にできないが、この種の土器としては古式な存在となり注意したい。これらの出土遺物から本住居跡は、稲荷台A期の8世紀第4四半期～9世紀初頭であろう。

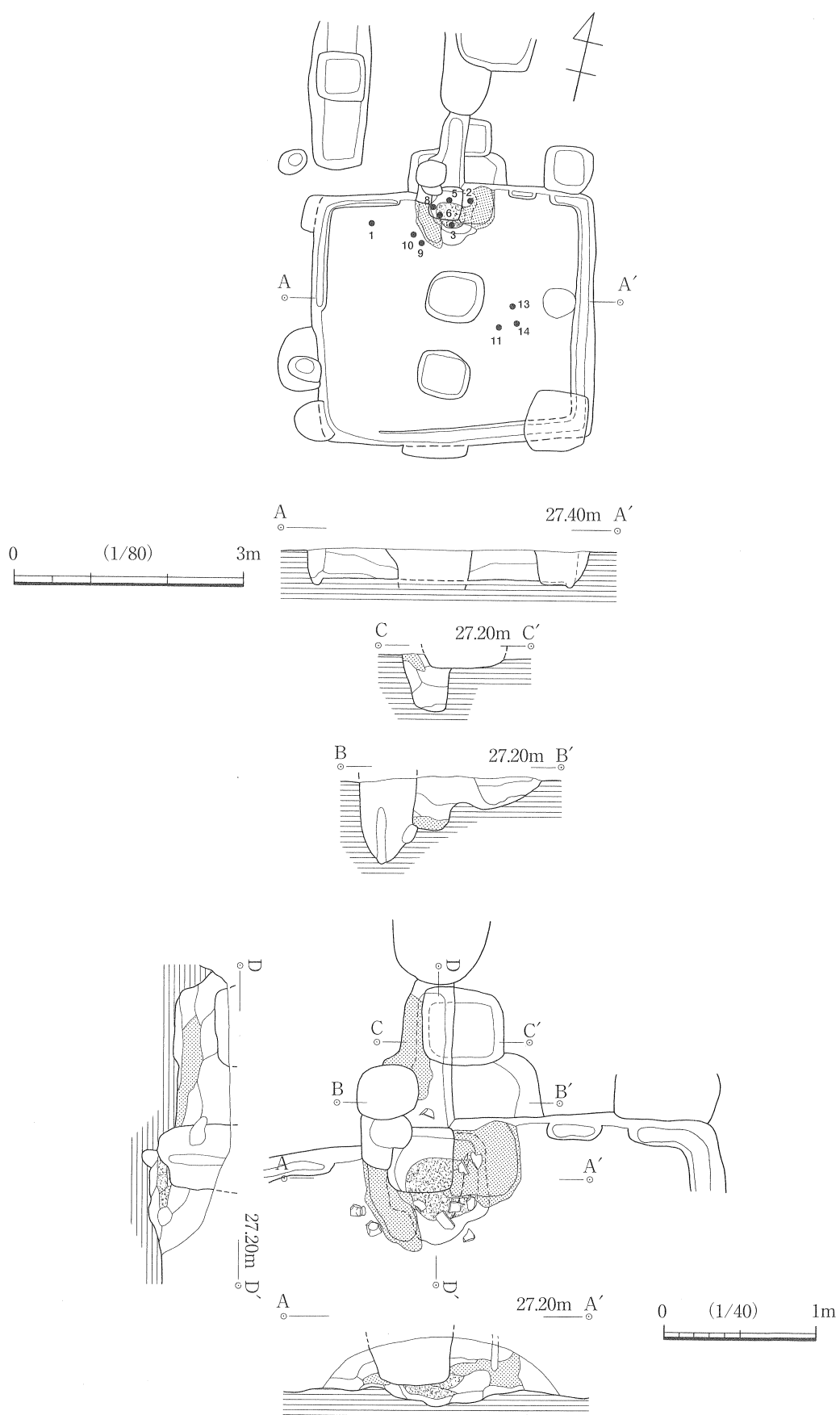
7号住居跡（第39図）

E地区西側北辺部a8に北側半分を調査区域外に置き検出し、4・5号掘立柱建物跡に掘り込まれ、8号住を掘り込んで検出する。規模は、北カマドと考えられることから主軸長は不明、副軸長3.22m（3.38m）を計測する。平面形は方形で、主軸方位はN-7°-Eを指向する。床面標高は26.76mで、確認面からの深さ25cm程を測る。主柱穴は確認できない。床面は平坦で堅緻である。

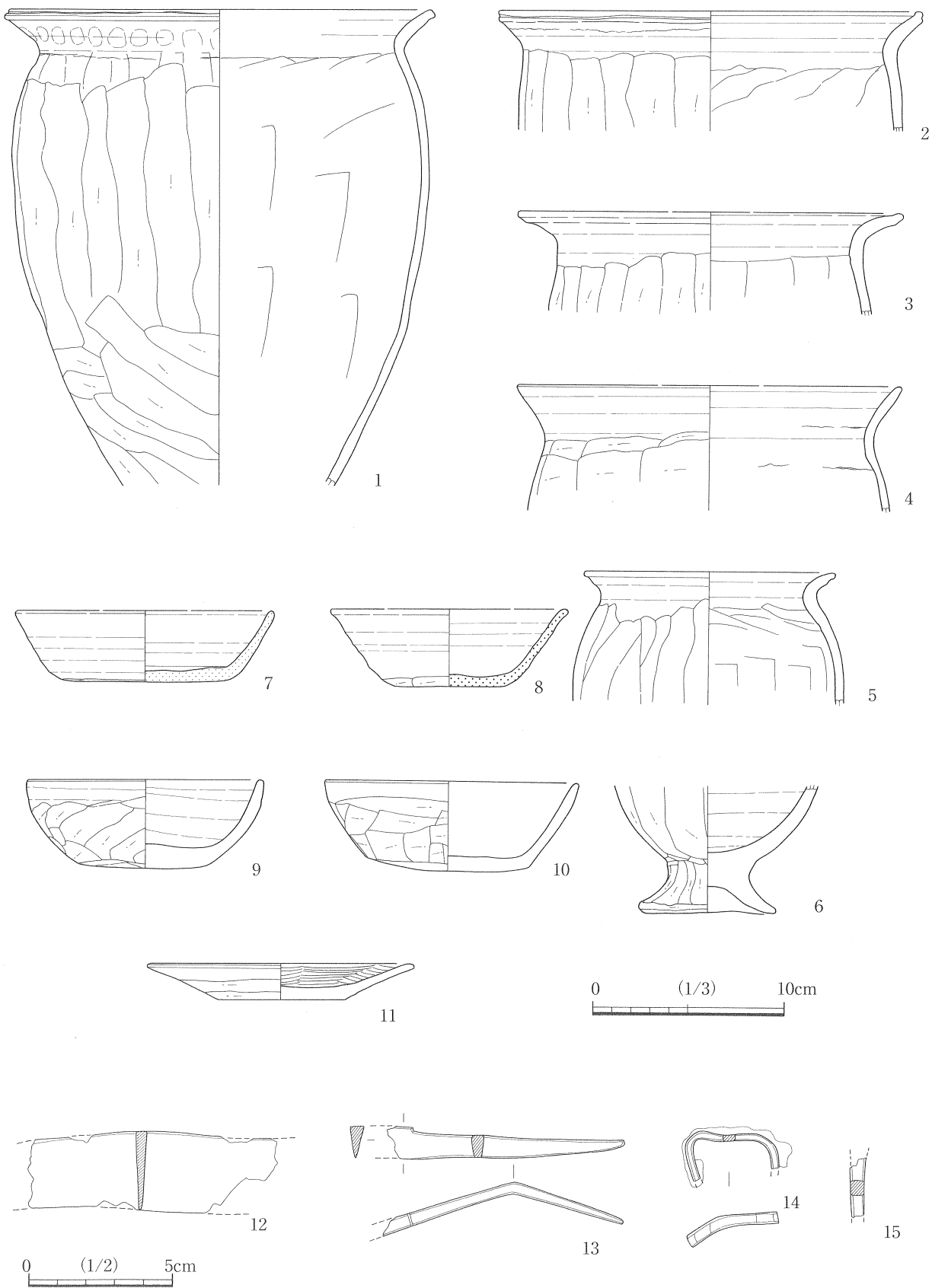
出土遺物、1は下総産須恵器甕、2・3はロクロ土師器坏、4～6は釘・鉄鏃・刀子等の鉄製品である。遺物は全て覆土中からである。出土遺物から住居跡の所属は明確にできないが、稲荷台I期の9世紀第1四半期と看取される。



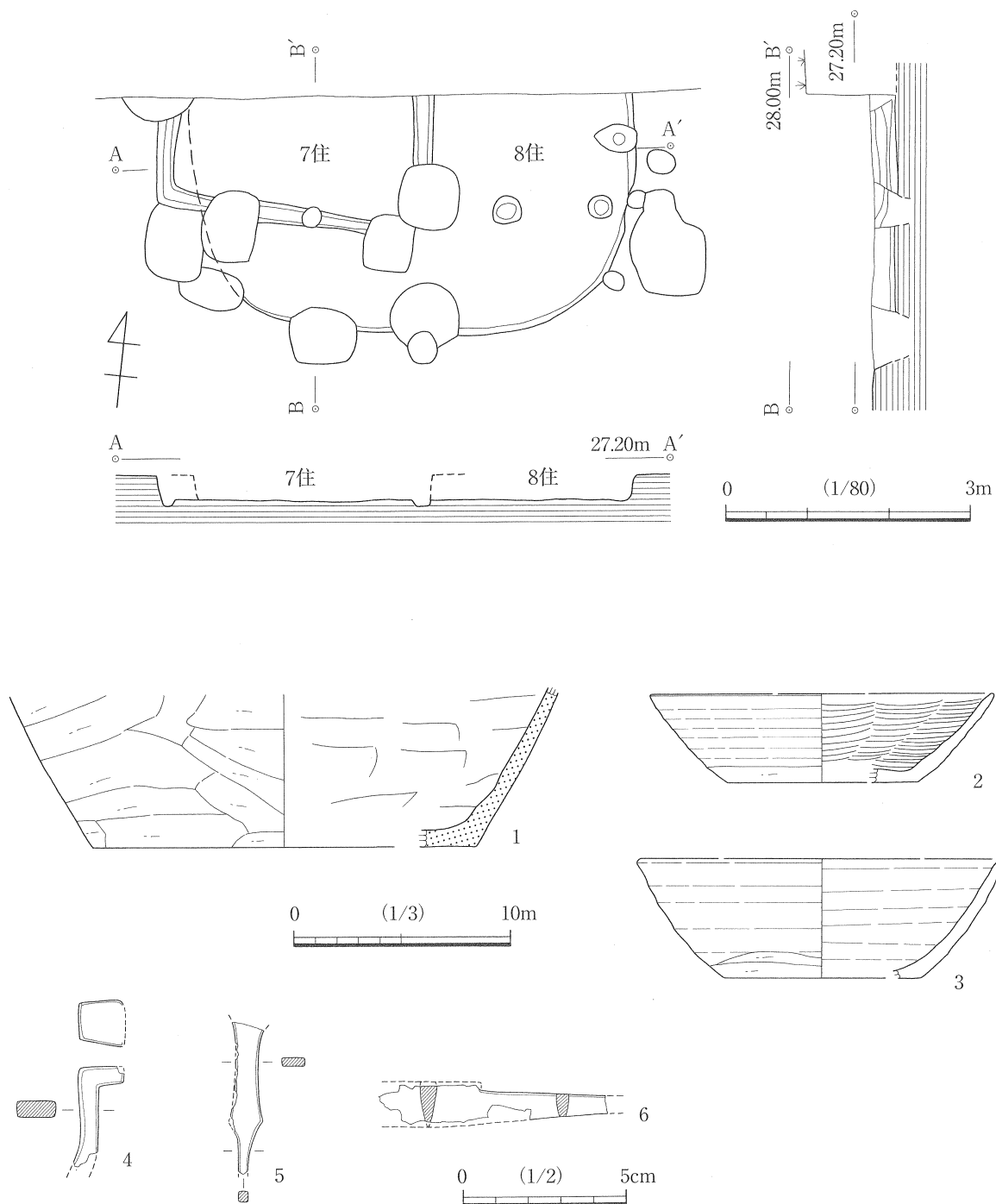
第36図 5号住居跡と出土遺物



第37図 6号住居跡



第38図 6号住居跡出土遺物



第39図 7・8号住居跡と出土遺物

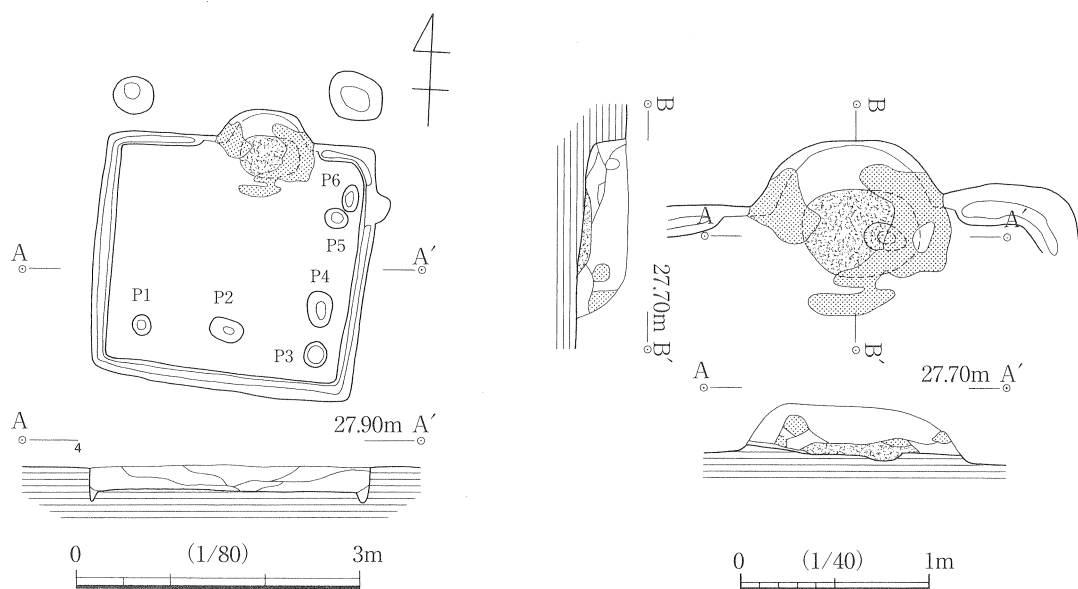
8号住居跡（第39図）

7号住居跡と4・5号掘立柱建物跡に掘り込まれ、北半分を調査区域外に置き検出する。規模は、主軸長は不明、副軸長5.45m程を計測する。平面形は楕円形であろう。主軸方位はN-2°-Wを指向する。床面標高は26.70mで、確認面からの深さ25cm程を測る。主柱穴も不明である。

出土遺物が無く住居跡の所属時期を明確にできないが、弥生時代後期と思われる。

9号住居跡（第40図）

E地区東側調査区の北東隅付近H19・H20・I19・I20に単独で検出する。規模は、主軸長2.54m（2.66m）・副軸長2.75m（2.86m）を計測する。主軸方位はN-4°-Eを指向する。平面形は、各壁



第40図 9号住居跡

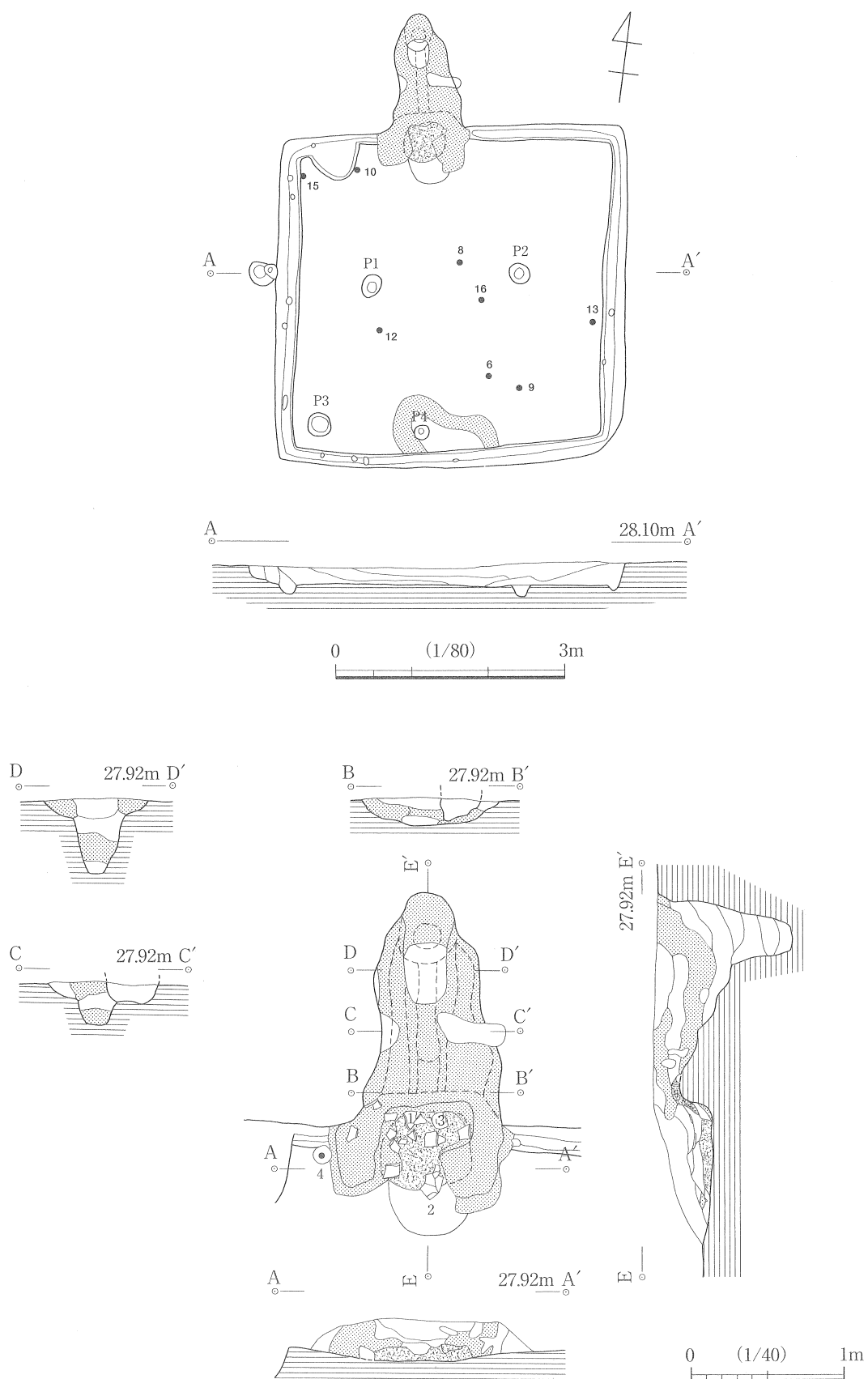
長が微妙に異なり、副軸が僅かに長い方形を呈する。カマドは北壁の中央よりやや東側に設けられ、袖部および燃烧部が壁から突出気味である。床面標高は27.38mで、確認面からの深さ25cm前後を測る。ピットの深さは、P1-14cm・P2-21cm・P3-19cm・P4-13cm・P5-10cm・P6-8cmを測るものの支柱穴は確認できない。壁溝は、東辺部に一部途切れる個所を認めるがほぼ完周する。床面は、中央がやや高く凹凸が目立ち堅緻である。

出土遺物は、記録ではカマド左袖壁溝内より円盤型土製品出土とあるが詳細は不明で、他に出土が無く住居跡の所属時期を明確にできないが9世紀代と看取される。

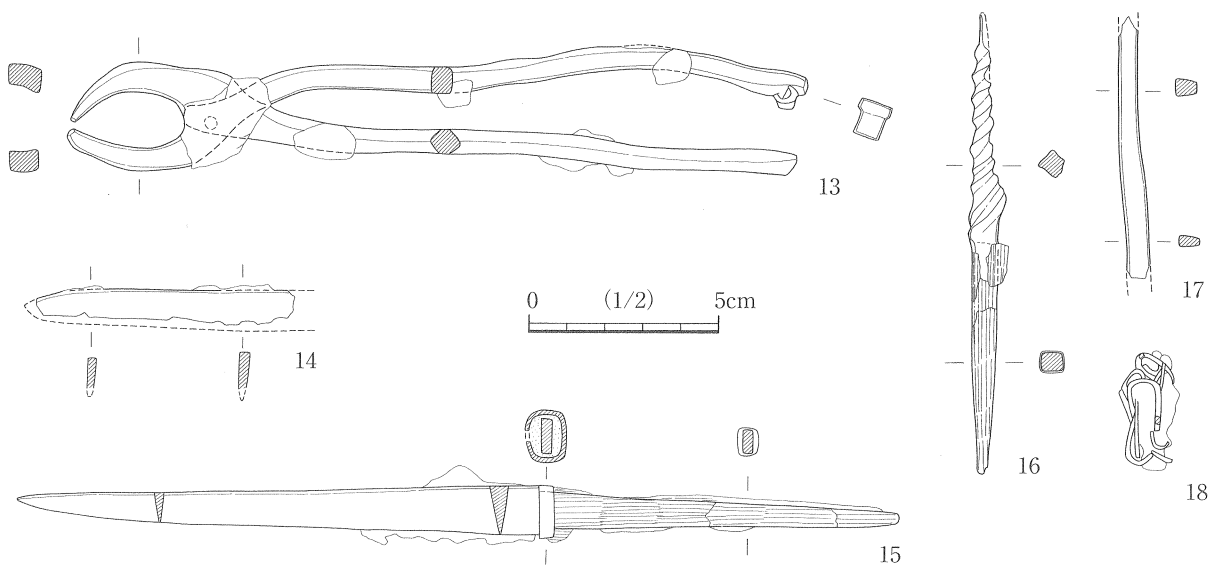
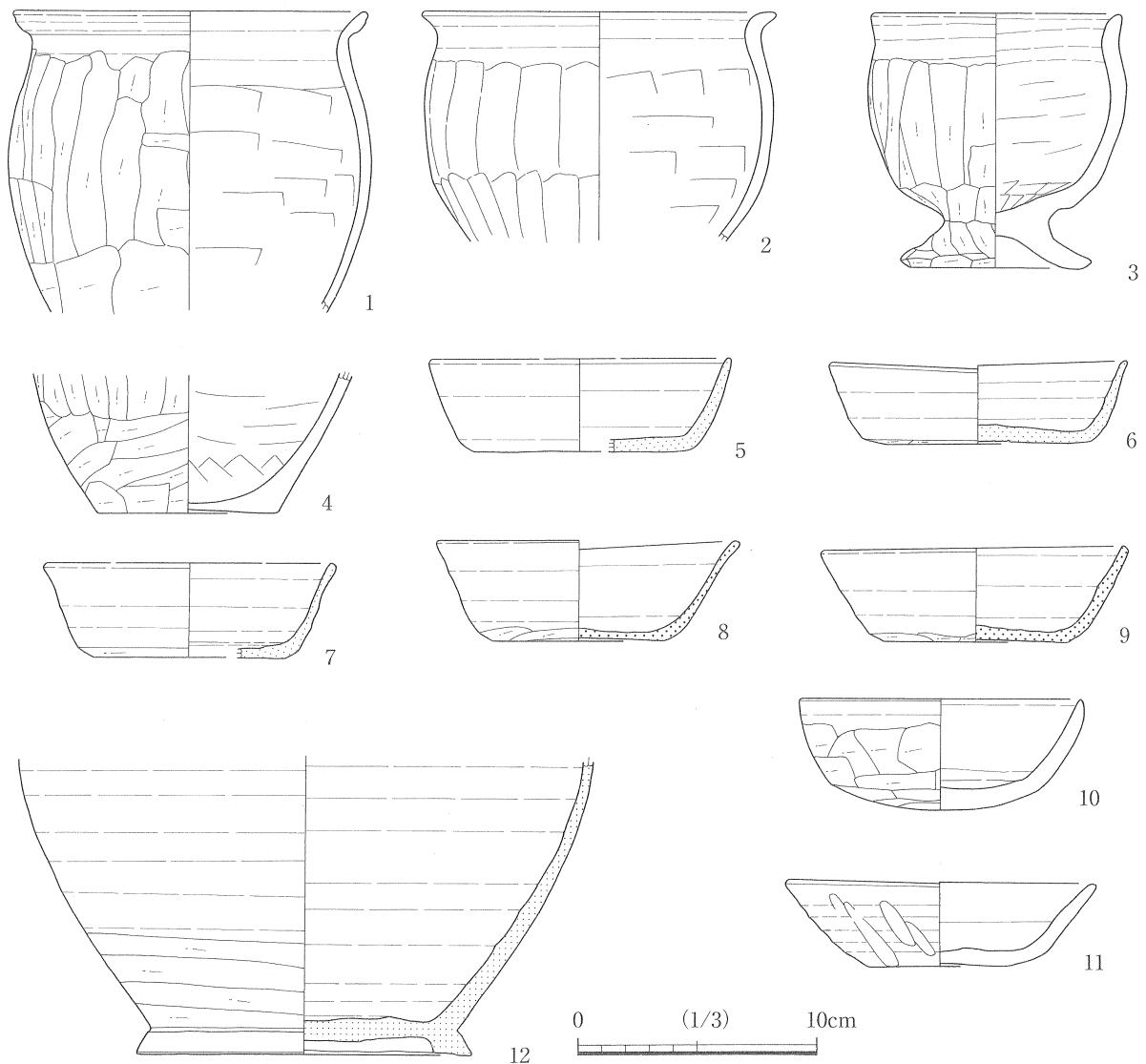
10号住居跡 (第41・42図)

E地区東側西南M19・N19区に単独で検出する。規模は、主軸長4.27m (4.43m)・副軸長4.25m (4.56m)を計測する。主軸方位はN-6°-Wを指向する。平面形は概ね均整の取れた方形を呈する。カマドは北壁の中央からやや西に寄って設けられ、袖部および燃烧部は壁より突出する構造で、カマド主要構築土には下末吉層の白色粘土が多量に用いられている。床面標高は27.56mで、確認面からの深さ20~30cm前後を測る。ピットの深さは、P1-15cm・P2-20cm・P3-20cm・P4-8cmを測り、支柱穴はP1・P2の2穴を検出する。壁溝は四周する。南壁床面に粘土で不整形に囲われる範囲が観察され、出入口関連施設のように看取される。床面は中央で凹凸が目立つが全体に堅緻である。

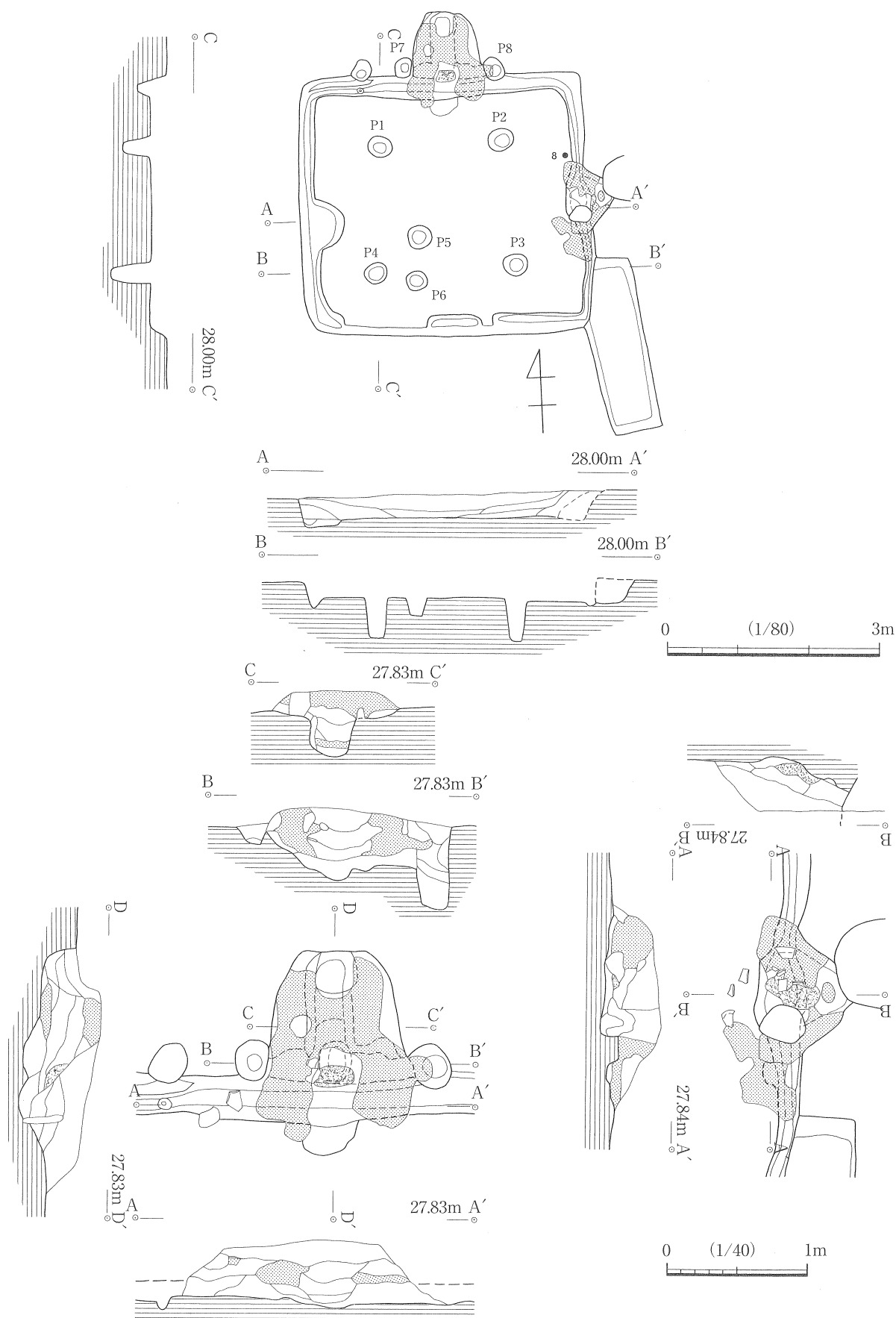
出土遺物、1~4は土師器甕、5・6は市原産須恵器坏、7は下総産須恵器坏、8・9は千葉市域産須恵器坏、10は底部丸底気味の非ロクロ坏、11は胎土・焼成が異なり非在地系ロクロ土師器坏、13はヤットコ、14は刀子断片、15は刀子、16は釘、17は釘断片?、18は断面丸状の針金状のものである。住居と相伴する遺物は、1・2・3・4・18がカマド燃烧部、6・8・9・10・12・13・15・16・17が床面からそれぞれ出土し、他は覆土からである。出土遺物から、稻荷台A期の8世紀第4四半期を中心とした時期であろう。



第41图 10号住居跡



第42図 10号住居跡出土遺物



第43图 11号住居跡

11号住居跡（第43・44図）

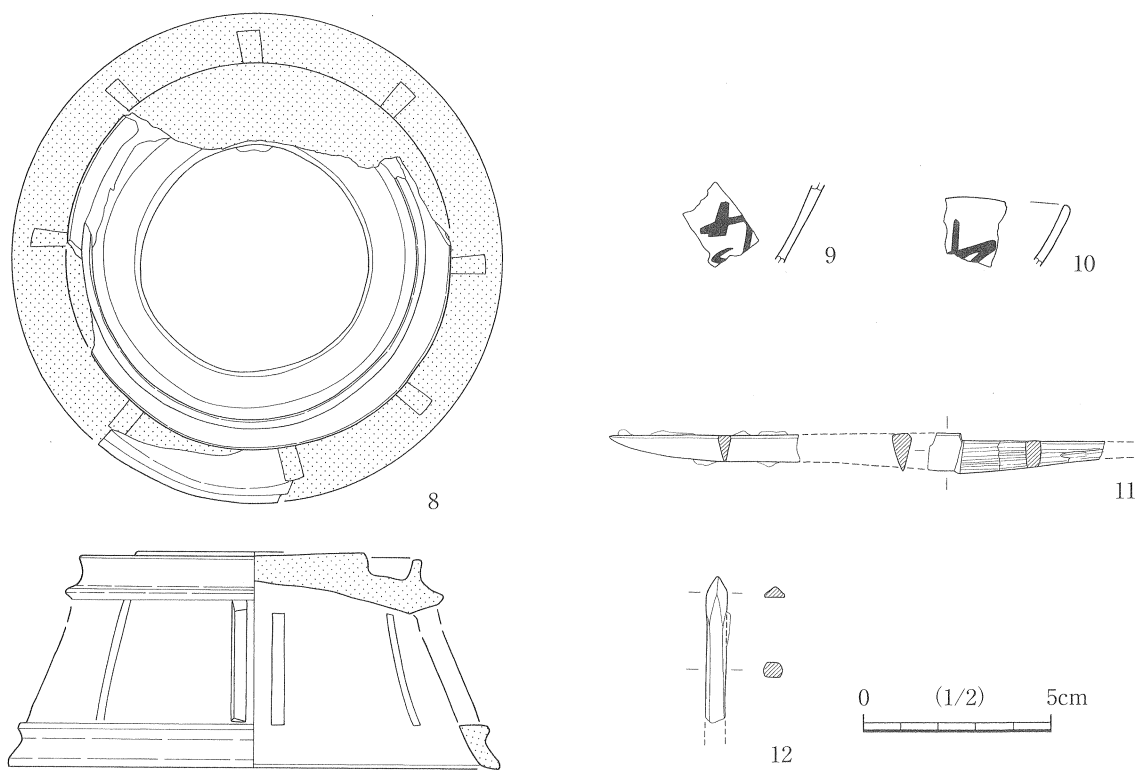
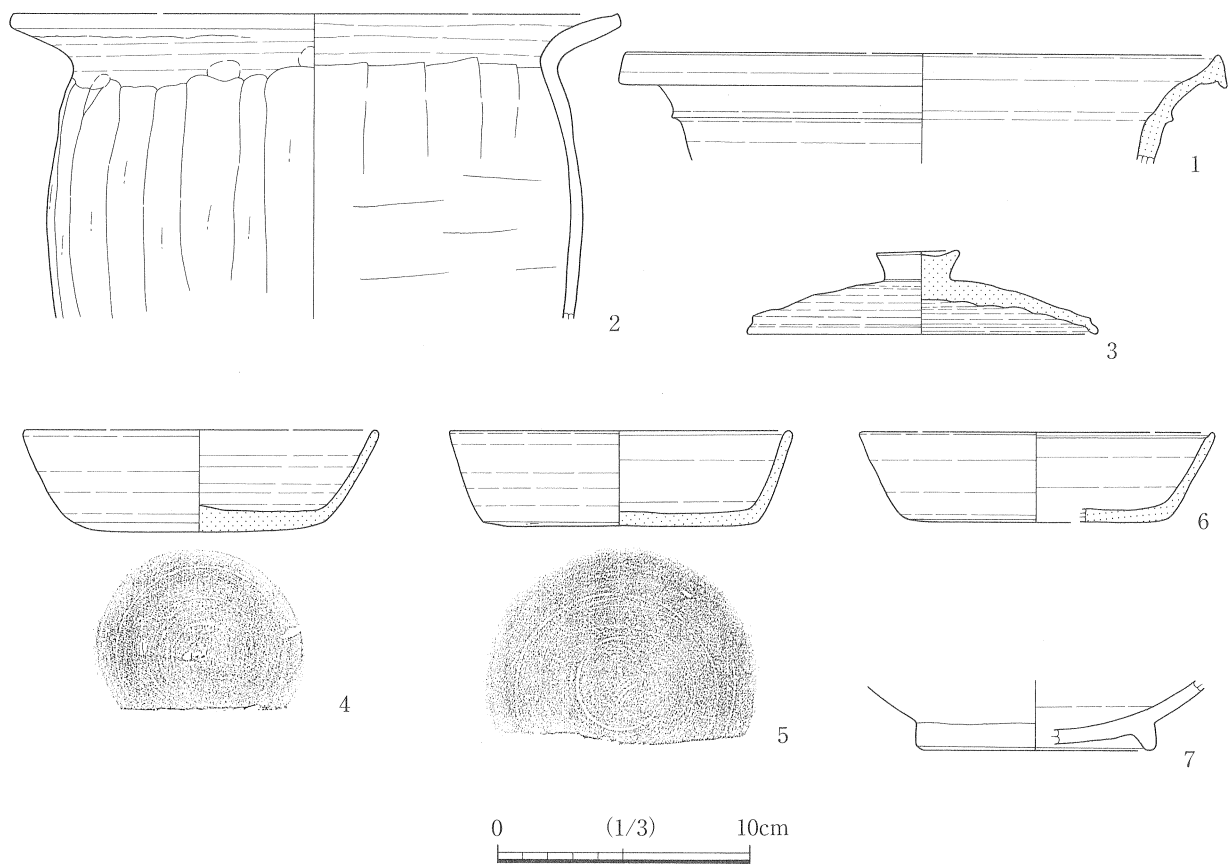
E 地区東側西南の M17・N17区に単独で検出する。規模は、主軸長3.46m（3.72m）・副軸長3.88m（4.06m）を計測する。主軸方位はN-1°-Eを指向する。平面形は概ね均整の取れた方形を呈する。カマドは北壁中央と東壁中央の2箇所に設けられ、袖部および燃焼部は壁より突出する構造である。北カマドは逆U字形で、東カマドは三角形でその形状が大きく異なっている。床面標高は27.35mで、確認面からの深さ40cm前後を測る。ピットの深さはP1-43cm・P2-55cm・P3-55cm・P4-56cm・P5-23cm・P6-22cmを測り、主柱穴はP1・P2・P3・P4の4穴を検出する。また、北カマド両袖部の住居壁外側に接して2穴を有し、カマド設置の構造的な柱穴となろう。壁溝は南側西半分が途切れるがほぼ四周する。床面は中央で凹凸が目立つものの比較的堅緻である。

主な出土遺物、1は須恵器甕口縁破片、2は土師器甕、3は常陸産と思われる須恵器蓋坏、4～6は市原産須恵器坏、7は灰釉陶器碗、8は湖西産と思われる須恵器円面硯、9・10はロクロ土師器坏墨書土器片、11は刀子、12は槍鉋である。住居に伴うものは2・3・4・5が東カマド燃焼部から、8の円面硯は東カマドの左袖の床面、11が床面、他は覆土中からの出土である。円面硯は、上部が本住居跡からの出土であるが、直接接合しない脚部破片3点は、詳細な出土状況は不明であるが南南西方向50mに位置する稲荷台1号墳調査時に検出されている。図のトーン部分は復元で、推定計測値は口径14.9cm・器高8.5cm・脚径19.4cm・陸径9.0cm・海径12.7cmと復元でき、透かし孔は接合しない破片に僅かに残るだけであるが、8箇所と推定できる。この円面硯の脚が出土した稲荷台1号墳は、調査前に墳丘を残していたことから、当然のことながら稲荷台遺跡が存在した8～10世紀代に、掘立柱建物跡が建ち並ぶ景観に築山の様に墳丘が残存し、この墳丘上から9世紀代の緑釉緑彩花文土器などの祭祀関連遺物が出土し、また、8世紀後半の円面硯が見られることは興味深いことである。墨書土器9は判読できない、10は「丸」であろうか。出土遺物から、稲荷台A期の8世紀第3～4四半期を中心とした時期であろう。

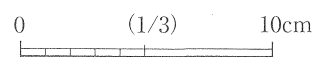
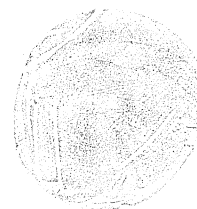
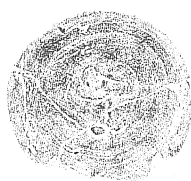
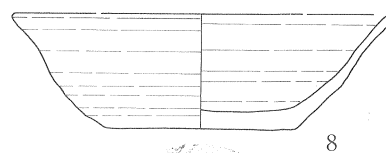
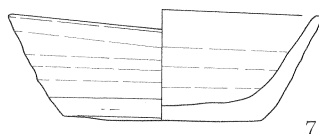
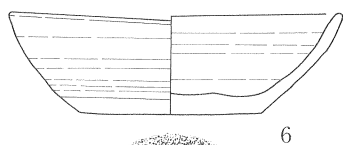
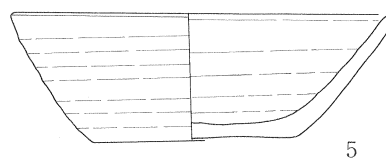
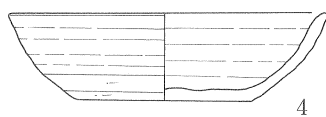
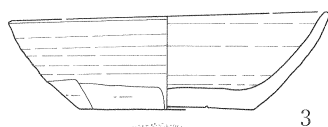
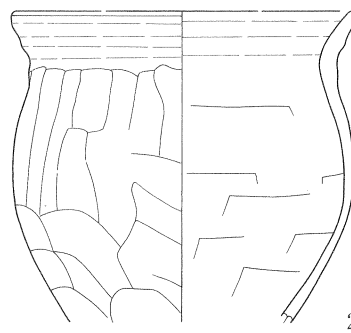
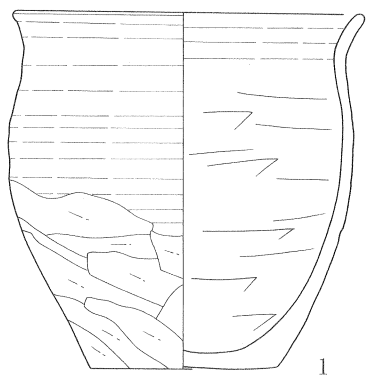
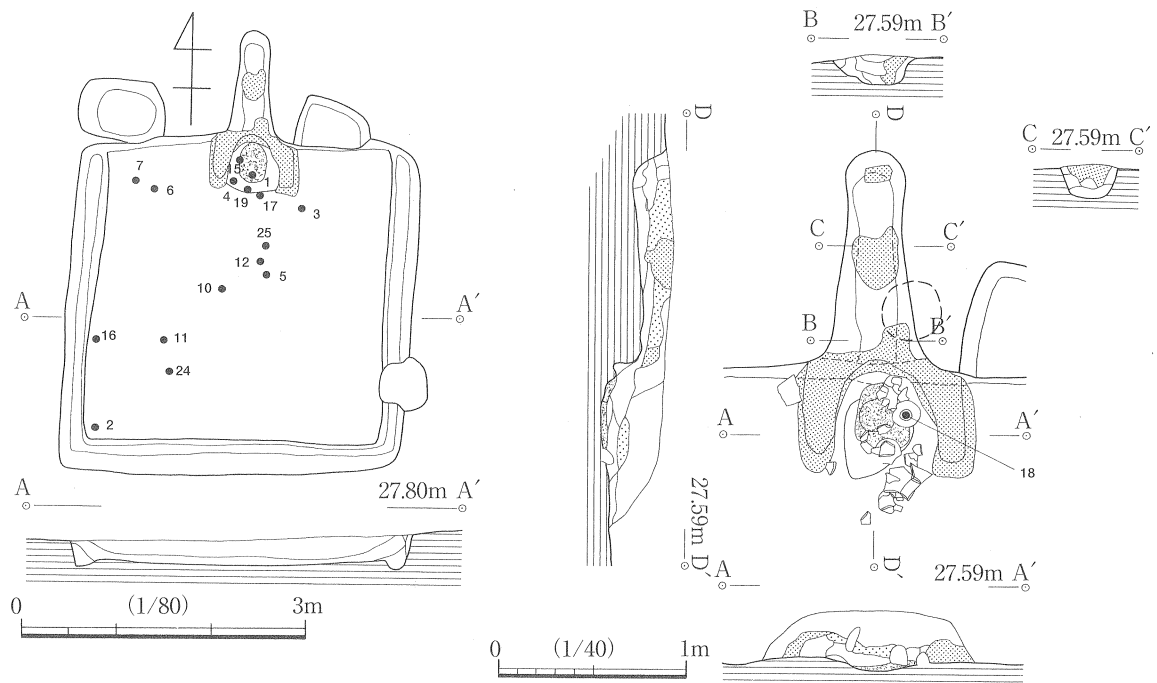
12号住居跡（第45・46図）

E 地区東側南の M15・M16・N15・N16区に単独で検出する。規模は、主軸長3.32m（3.62m）・副軸長3.37m（3.60m）を計測する。主軸方位はN-1°-Eを指向する。平面形は均整の取れた正方形を呈する。カマドは北壁中央に設けられ、煙道は長く、袖部および燃焼部は壁より内側にある。床面標高は27.20mで、確認面からの深さ20～30cmを測る。ピットは検出されない。壁溝は東・南・西壁にコの字状に廻り北壁には設けられない。

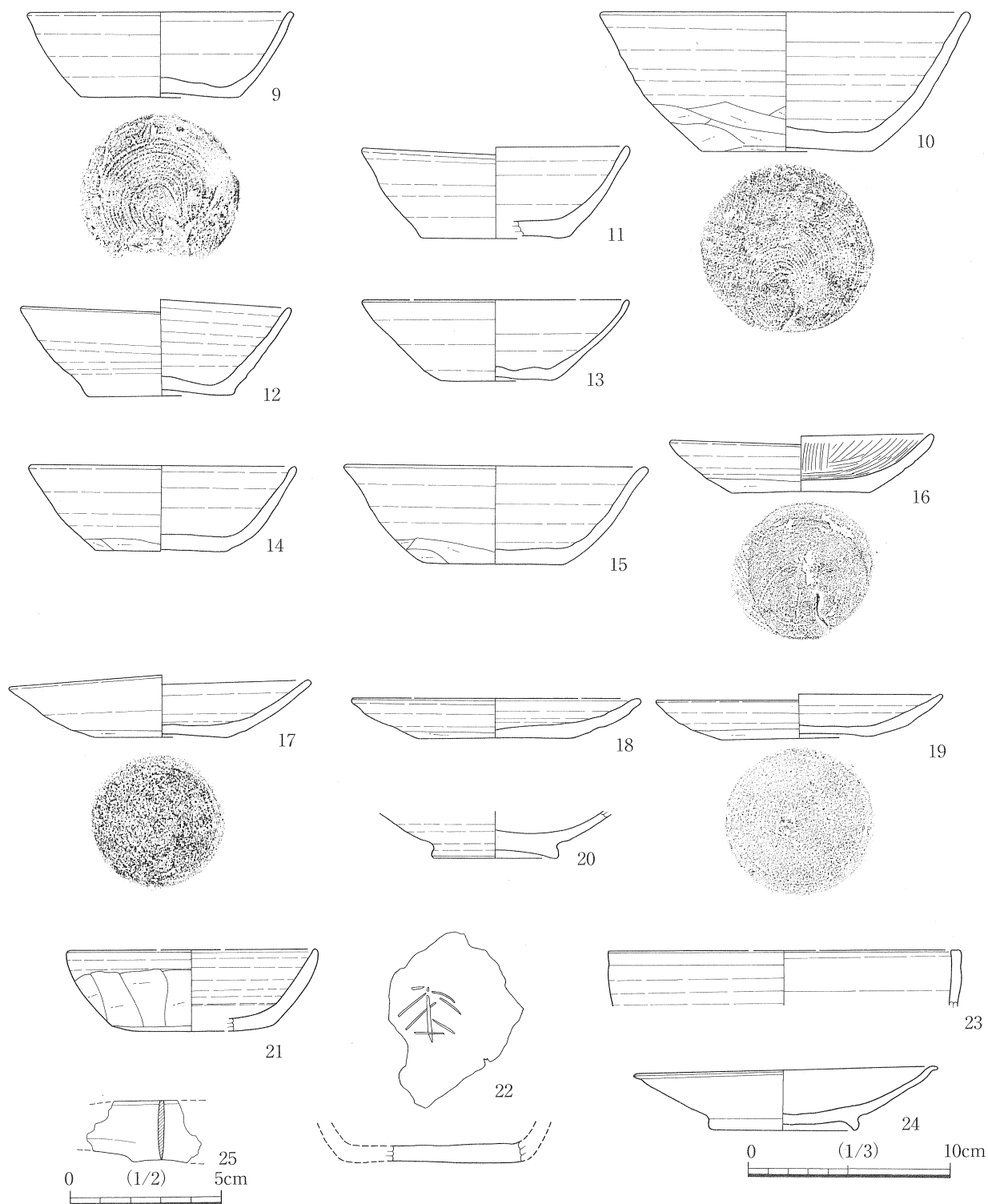
主な出土遺物、1はロクロ土師器甕、2は土師器甕、3・4・5・6・7は回転斲削りのロクロ土師器坏、9・10・11・12・13は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、8・14・15は手持ち斲削りのロクロ土師器坏、10の体部下端は手持ち斲削りである。16～19は回転斲削りのロクロ土師器皿、20はロクロ土師器高台付坏、21は非ロクロ土師器坏、23はロクロ土師器鉢か、24は灰釉陶器皿、22はやや底径の大きいロクロ土師坏の底部外面に「本カ」を刻んだ焼成後の線刻土器、25は刀子断片である。住居跡に共伴する遺物はカマド燃焼部から1・4・15・17・18・19が、ほぼ床面から2・3が検出され、他は覆土からの出土である。ロクロ土師器皿がカマドや床から検出されるが、いずれも回転斲削りを施し、16・18の口縁内外面には灰釉陶器皿の整形を意識したと思われる強いロクロナデの痕跡がある。23の土師器鉢は小片であるが、一見して他のロクロ土師器と作りが異なるシャープな仕上がり



第44图 11号住居跡出土遺物



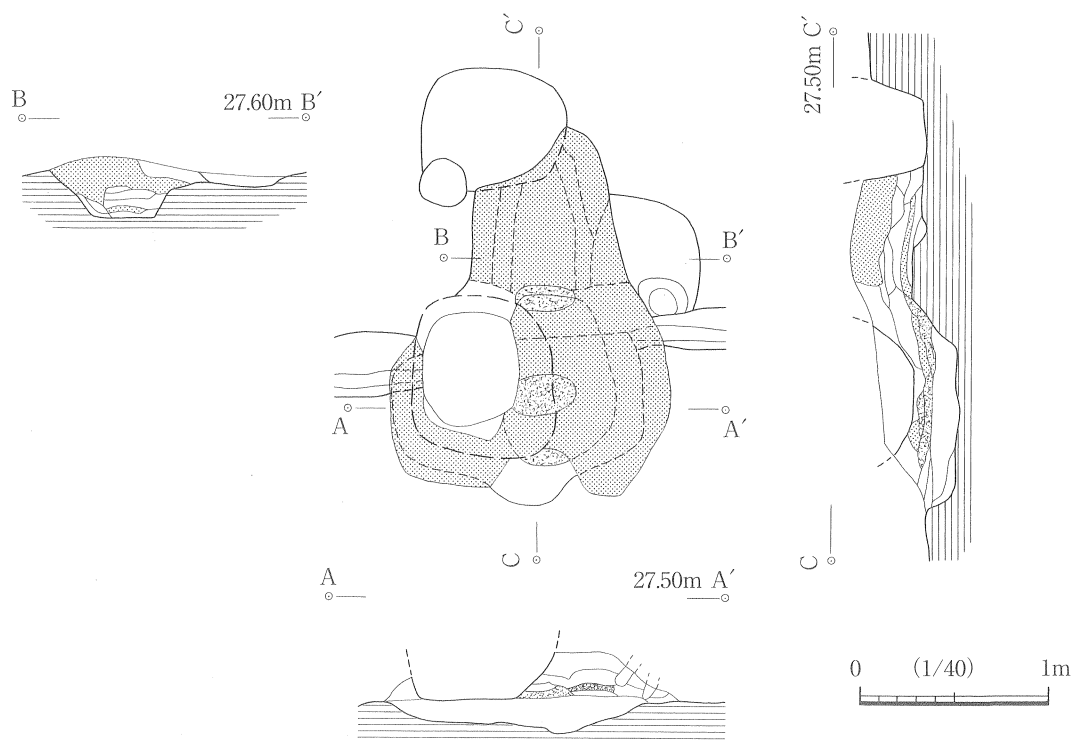
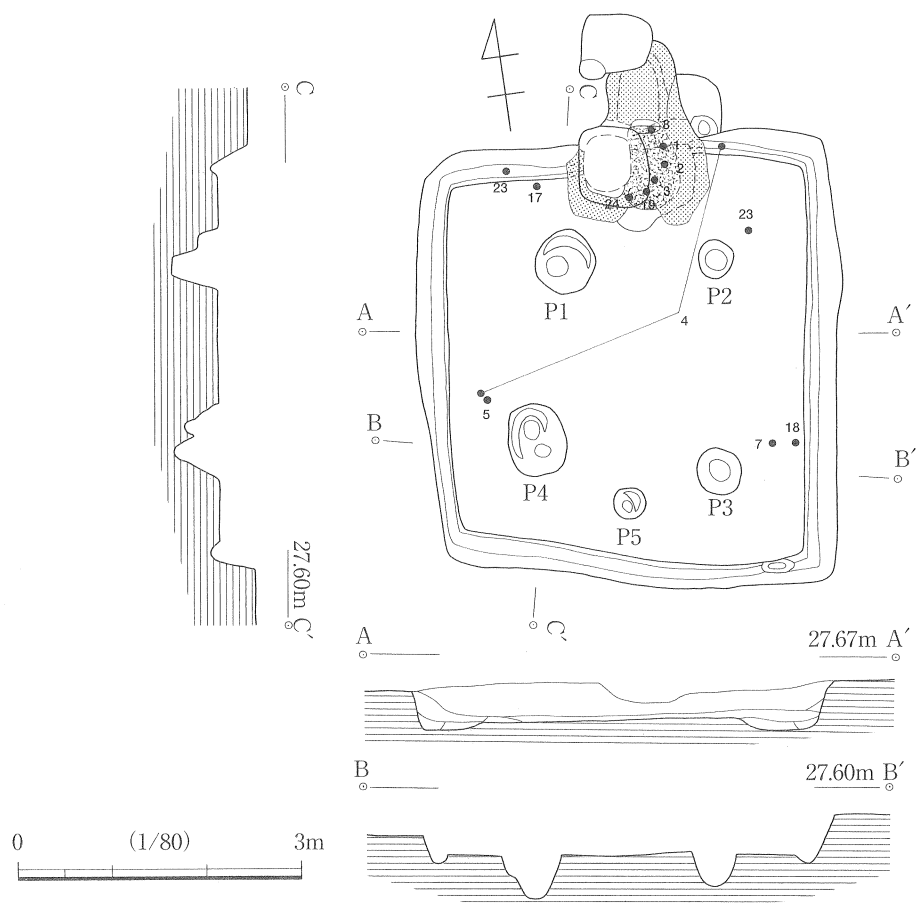
第45図 12号住居跡と出土遺物



第46図 12号住居跡出土遺物

で胡銅器碗の模造とも看取される。24灰釉皿は覆土中の検出で遺構には伴わないものである、坂野Ⅳ期古相に比定される。

本住居跡の出土遺物は、稲荷台Ⅱ期-aの9世紀第2四半期を中心とした時期と看取され、遺構に伴う共伴遺物も豊富でⅡ期-aの標準資料となる。1のロクロ甕は本遺跡で最古のロクロ土師器甕で



第47図 13号住居跡

縦長の胴部と胴部中位までの篋削り整形を特徴とする。ロクロ土師器坏は、回転篋削りを特徴とし、底径のやや大きめな手持ち篋削りを施す存在も見逃せない。また、須恵器坏が見られないことも留意する点である。

13号住居跡（第47・48・49図）

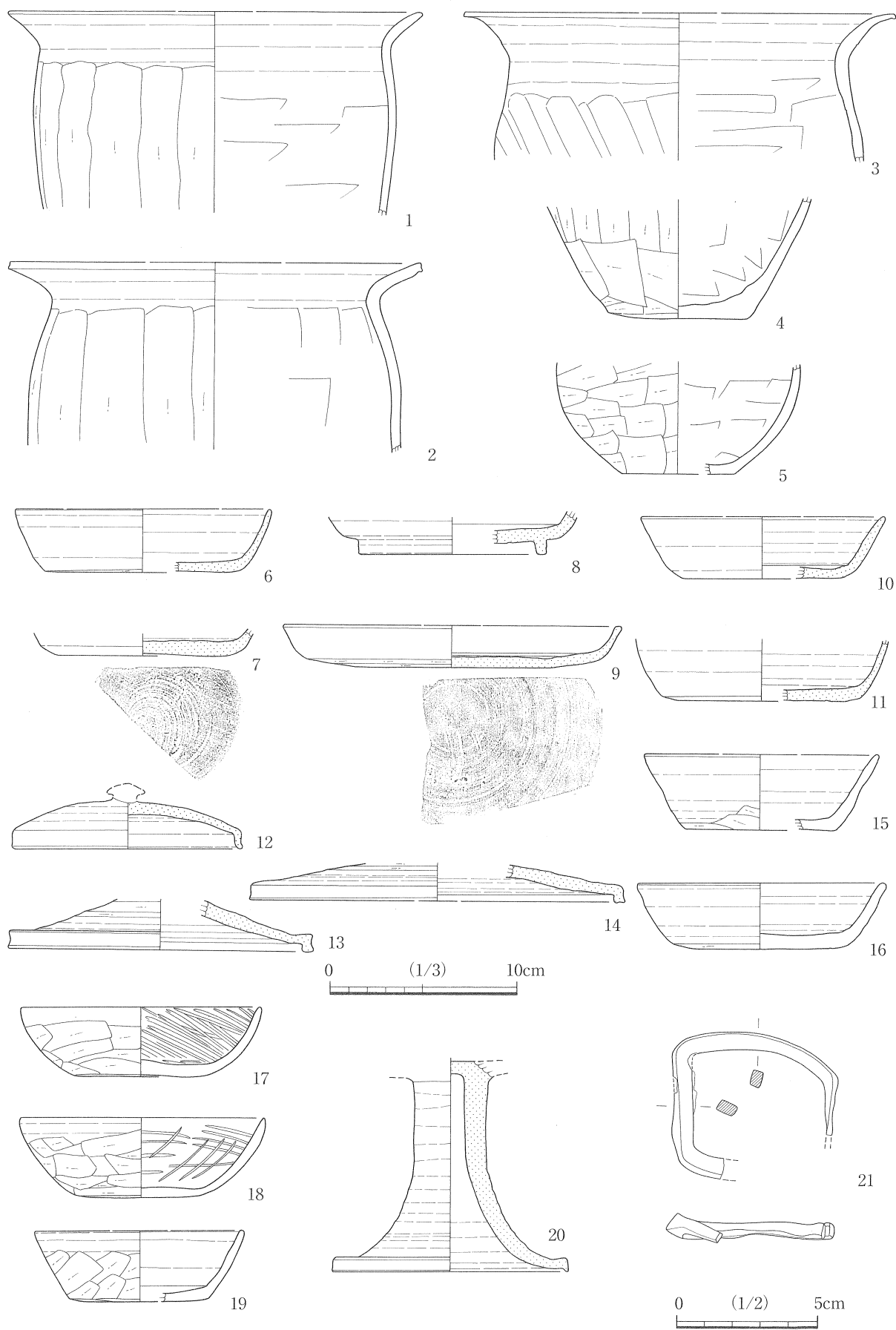
E 地区東側南の M14・M15・N14・N15区に単独で検出する。規模は、主軸長4.40m（4.68m）・副軸長4.08m（4.42m）を計測する。主軸方位は N-10°-E を指向する。平面形は東壁長と西壁長がやや異なり均整を欠くやや縦長の方形を呈する。カマドは北壁中央に設けられ、主要構築土に下末吉層の白色粘土が多量に用いられている。煙道はやや長く、袖部および燃焼部は壁の外側にやや突出するものと看取される。床面標高は27.00m で、確認面からの深さ35cm前後を測る。ピットの深さは P1-47cm・P2-43cm・P3-31cm・P4-40cm・P5-11cm を測り、支柱穴は P1・P2・P3・P4 の4穴を検出し、P5 は出入り口の階段ピットである。壁溝は四周する。床面は中央で凹凸が目立つものの比較的堅緻である。

主な出土遺物、1～5は土師器甕、6・7・10・11は市原産永田・不入窯須恵器坏、8は須恵器高台付坏、9は須恵器盤、12・13・14は須恵器蓋、17・18・19は非ロクロ土師器坏、20は須恵器脚、21は金具状鉄製品で断面長方形を呈し、形状から判断してクルル鉤の可能性はある。22・23は砥石である。住居跡と共伴する遺物は、1・3・8・19・20はカマド燃焼部から、4は床面からそれぞれ検出している。他の土器は覆土から出土しているが、6・7・9～11の土器も時期的には同時期の遺物と判断できよう。カマド出土の20須恵器長脚部はカマド支脚に転用された遺物で、元は古墳供献用土器であろう。17～19の非ロクロ土師器坏には、バリエーションがみられ、17・18の古相から19の新相が見られる。16のロクロ土師器坏は回転篋削りを施し、器形も10の須恵器坏と同形を呈し、ロクロ土師器坏では古相を呈するものである。出土遺物から、稲荷台A期の8世紀第3四半期を中心とした時期であろう。

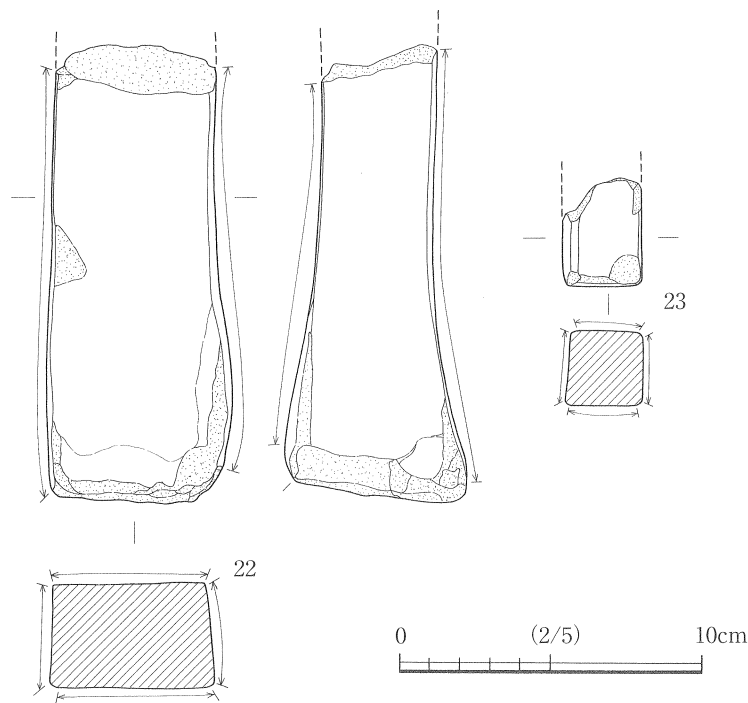
14号住居跡（第50図）

E 地区東側中央の K16区に検出する。規模は、主軸長2.76m（3.0m）・副軸長2.96m（3.08m）を計測する。主軸方位は N-106°-E を指向する。平面形は南壁が胴張りし、僅かに横長のやや均整に欠く方形を呈する。カマドは東壁中央より南に設けられている。煙道部が第32号掘立柱建物跡柱掘方によって掘り込まれ、袖部および燃焼部は壁の外側に設けられる構造である。床面標高は27.28m で、確認面からの深さ15cm 前後を測る。ピットの深さは P1-17cm で支柱穴は検出されない。壁溝は、東と南に検出するだけである。床面はプラン南側では顕著な踏み跡が観察されるが、北側は踏み跡が認められない。土層の記録が無く詳細は不明であるが、床面に遺物がほとんど見られないことなどから、埋め戻された可能性が指摘できる。

主な出土遺物、1～6はロクロ土師器坏で、2は体部下端ナデを施し底部回転糸切り無調整、4は回転糸きり無調整のロクロ土師器坏で外面体部に「主」の墨書が書かれる。7はロクロ土師器坏か、皿にしてはやや器高があり口縁が強いロクロナデで外反気味となる。8・9は内黒ロクロ土師器高台付坏で、10は灰釉段皿（Ⅲ期古相）、11灰釉陶器碗（Ⅲ期新相）、12は鎌の断片である。遺構と共伴する遺物は鎌が床面から出土するだけで、他は遺構外の検出である。住居跡の時期を明確に判断する遺物が無いが、カマドが壁より突出する構造であることや、1～7のロクロ土師器が覆土から出土した遺物であることや、Ⅲ期-a以降の所産と考えられる32号掘立柱建物柱跡掘方にカマド煙道部や西側



第48図 13号住居跡出土遺物



第49図 13号住居跡出土遺物

床面が掘り込まれることを考慮すると、稲荷台Ⅱ期－a以前の所産となろうか。

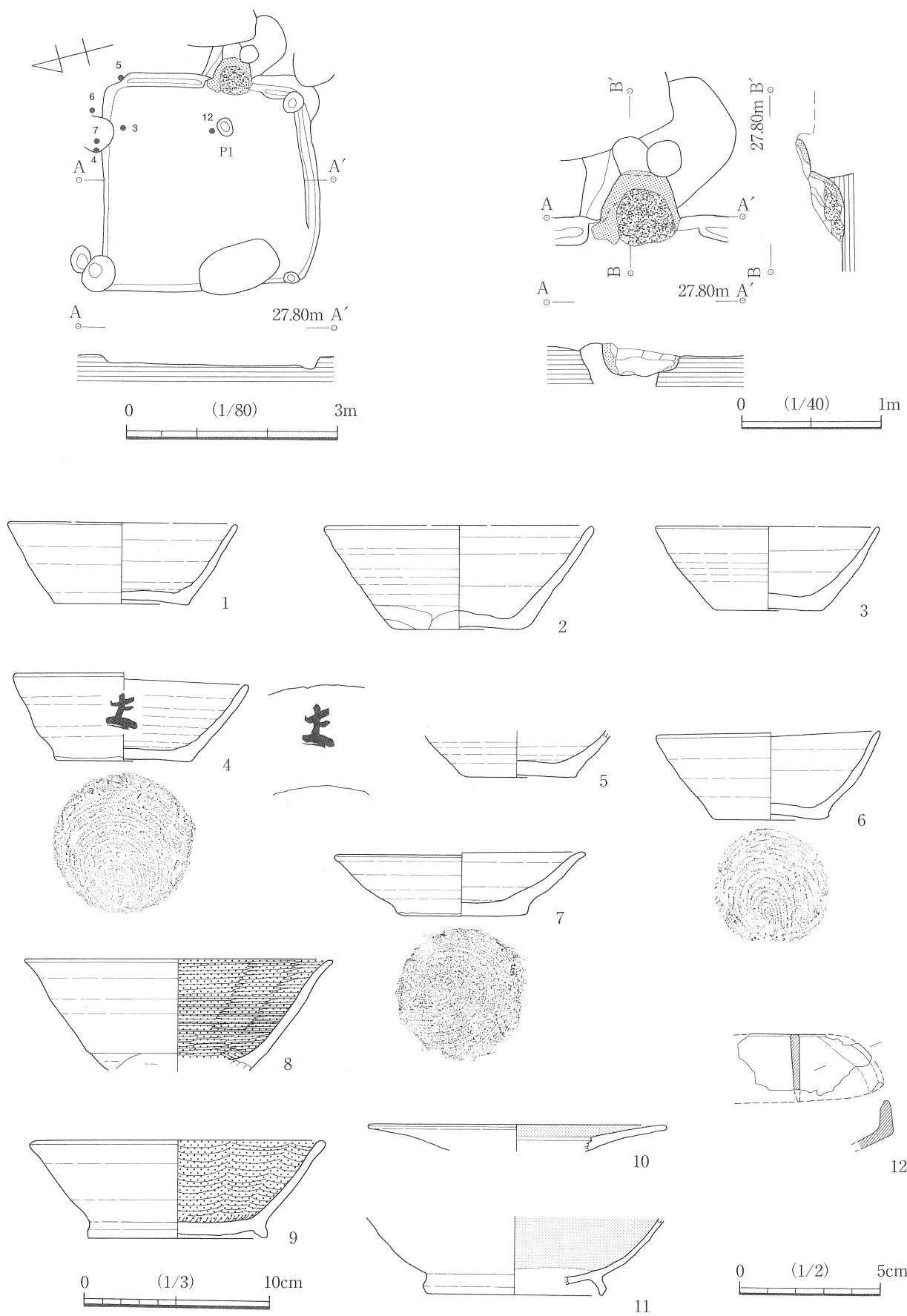
15号住居跡（第51図）

E地区東側中央北のI16区に単独で検出する。規模は、主軸長2.68m（2.86m）・副軸長2.45m（2.72m）を計測する。主軸方位はN－1°－Wを指向する。平面形は、やや均整を欠く縦長の方形を呈する。カマドは北壁中央より僅かに東に設けられ、袖部や煙道部天井には主要構築土に下末吉層の白色粘土が多量に用いられている。煙道は長く、袖部および燃焼部は壁の外側にやや突出気味に構築される。床面標高は27.12mで、確認面からの深さ35cm前後を測る。ピットは検出されない。壁溝はカマド両袖から出て四周する。床面は、カマドから南壁直下が堅緻である。

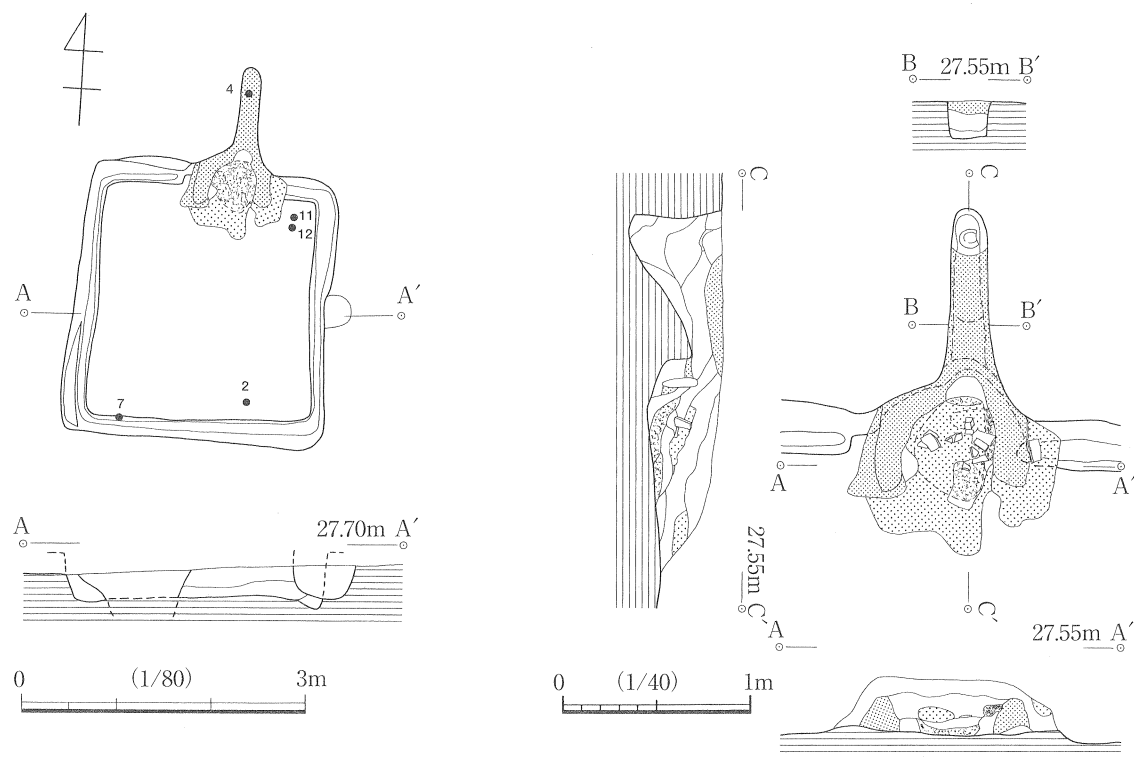
主な出土遺物、1は土師器甕、2・3は底部手持ち篋削りの千葉市域産須恵器杯、4は回転篋削りの市原産須恵器杯、5は小片であるが永田・不入窯産須恵器コップ、6・7は非ロクロ土師器杯、8は回転系きり無調整のロクロ土師器杯、9は断面角状を呈する土製支脚、11・12は刀子断片である。出土状況から8以外の遺物は住居跡に共伴する遺物である。6のロクロ土師器杯は、内面の体部と底部境にく字状の強い稜線を有し、古相の様相を呈している。出土遺物から、稲荷台A期の8世紀第3～4四半期を中心とした時期であろう。

16号住居跡（第53図）

E地区東側北辺のH18・I18区にプラン北側の一部を調査区域外に置き、東側で18住、西側で17住を掘り込んで検出する。主軸方位はN－100°－Eを指向する。規模は、プラン北端が調査区域外に有るが、主軸長3.07m（3.18m）・副軸長は4.1m以上を計測する。平面形は、横長の各隅が丸身を有する長方形を呈するものであろう。カマドは東壁の東南隅に接するように設けられ、袖部および燃焼部は壁外に突出気味に構築される。床面標高は27.40mで、確認面からの深さ20cm前後を測る。ピットの深さはP1－10cm・P2－8cm・P3－8cm程で浅く、検出位置などを考慮しても支柱穴にはな



第50図 14号住居跡と出土遺物



第51図 15号住居跡

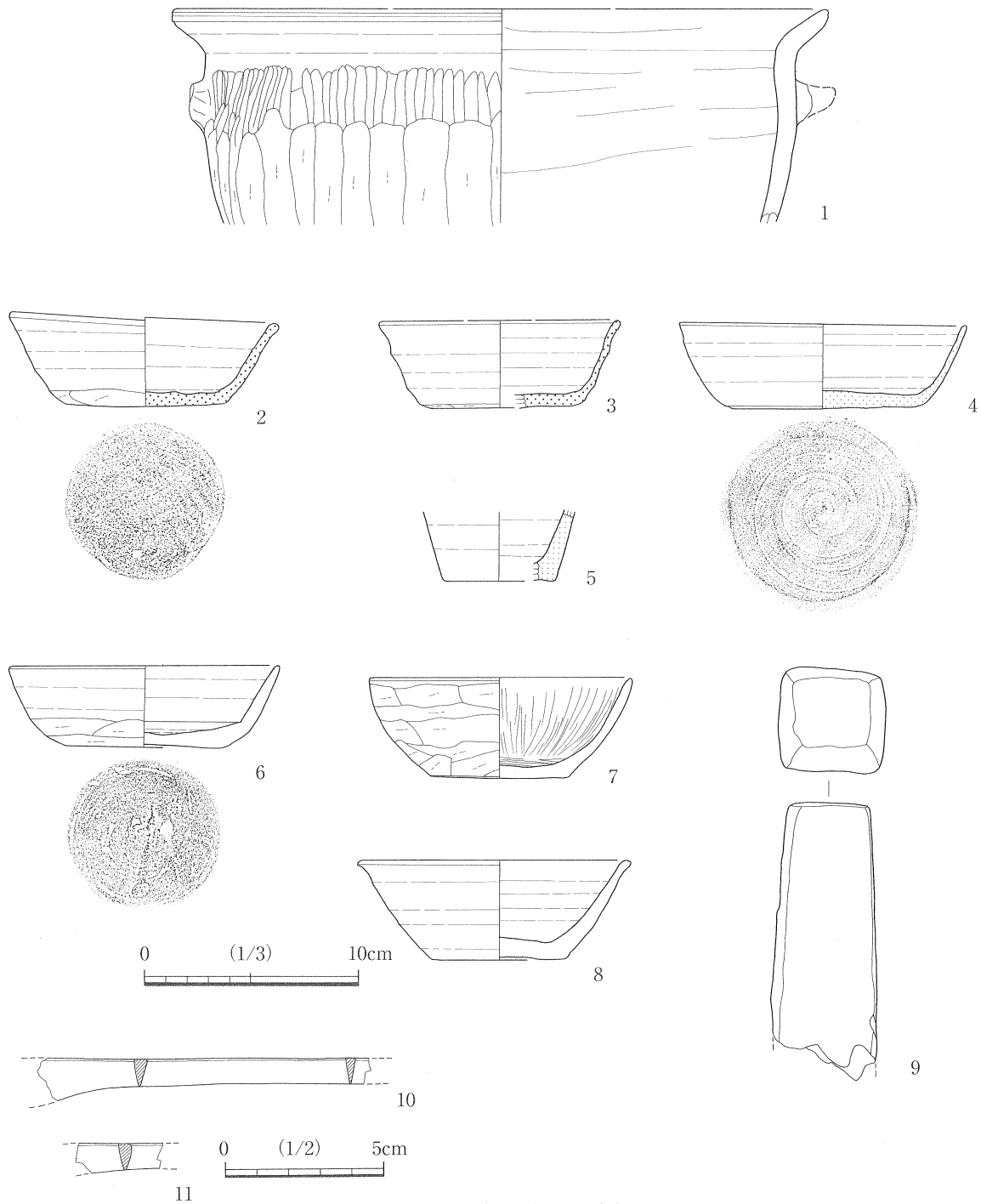
らない。壁溝はカマド右袖から南壁東半分が途切れるが他は四周する。床面は凹凸があるが比較的堅緻である。

出土遺物、全てがロクロ土師器で、1～9が回転糸切り無調整の坏、10・11・12が高台付坏で、12は内黒でミガキを施すが光沢がない。住居跡に共伴する遺物は3・8・9・11がカマド燃焼部で、1・4・5がピット1（P1）内、6が床面で、他は床面からやや浮いて検出されている。やや浮いて出土する遺物も住居跡の帰属を示す資料として損傷ないものと看取される。出土遺物から、稲荷台Ⅳ期－bの10世紀第2四半期を中心とした時期であろう。

17号住居跡（第53・54図）

E地区東側北辺のH17・H18区にプラン北側を調査区域外に東側を16号住居跡に大きく掘り込まれ、北側で古墳周溝上に張り床し検出する。規模は、南壁現存長2.1m・西壁現存長2.5mを計測するだけで全体プランの形状や主軸方位共に不明で、カマド・壁溝および主柱穴も検出できない。床面の中ほどに床面と一連となる深さ10cm程の窪み状のP1がある。床面標高は27.41mで、確認面からの深さ20cm前後を測る。

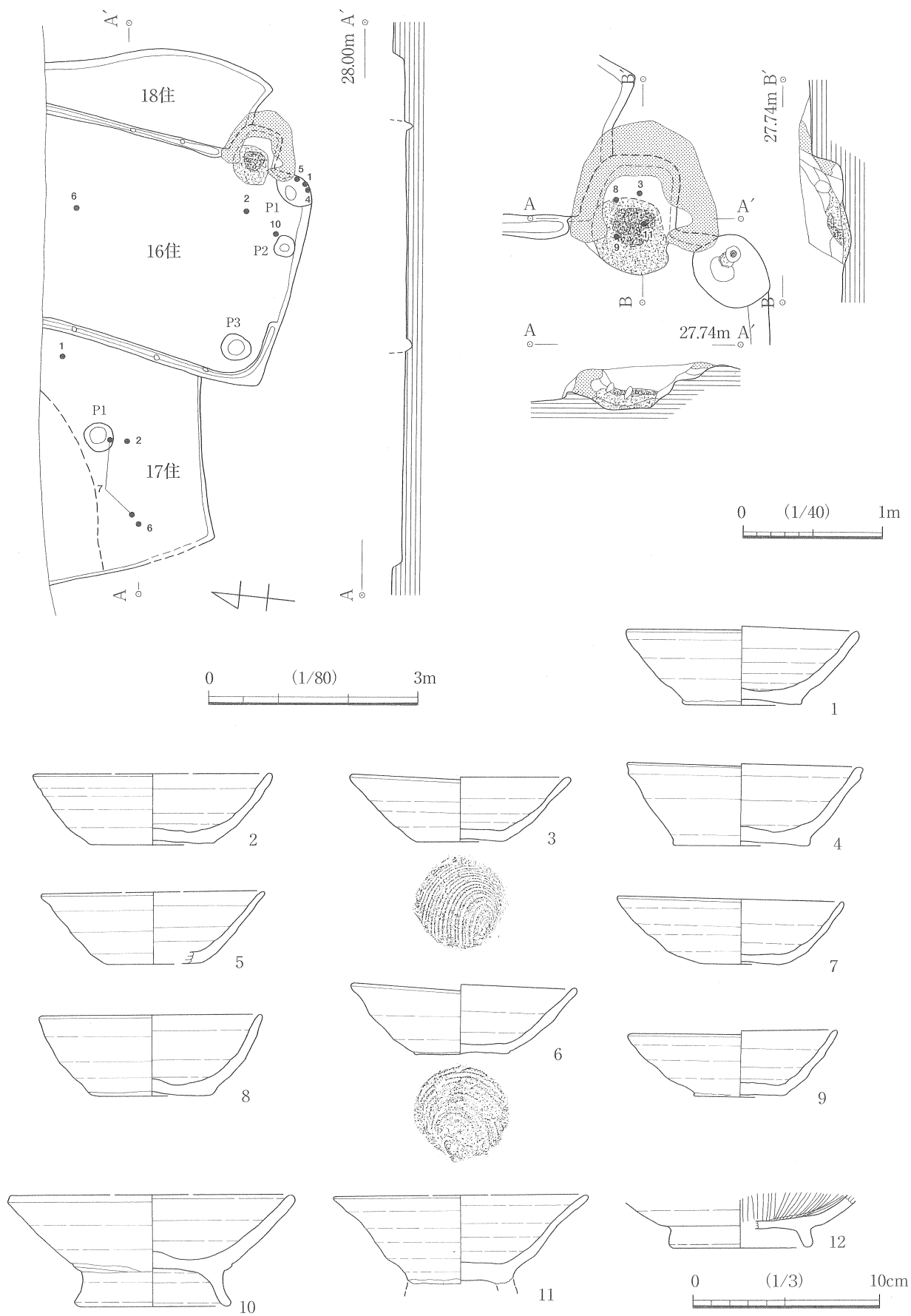
出土遺物、1・2は土師器甕、3は手持ち篋削りのロクロ土師器坏、4・5は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、6はロクロ土師器高台付坏、7は土師器大型台付鉢である。住居跡に共伴する遺物は1・2・3・4・5・7が床面などから出土している。7の土師器大型台付鉢は、遺跡内から出土した同器種の中で最も復元ができたもので台端部を欠損するだけで口縁30cm弱、台基部径11cm・鉢部高10cm程を計測し、同器種の器形復元の根拠となる資料で、本土器は同種の中でも小型の製品で、中には口径50cmを超えるものもある。出土遺物や16号住居跡の複合関係から、稲荷台Ⅳ期－bの10世紀第2四半期を中心とした時期であろう。



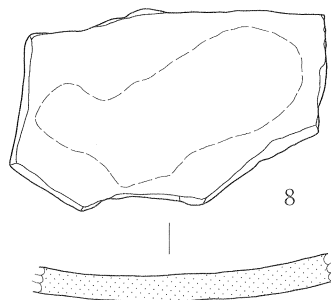
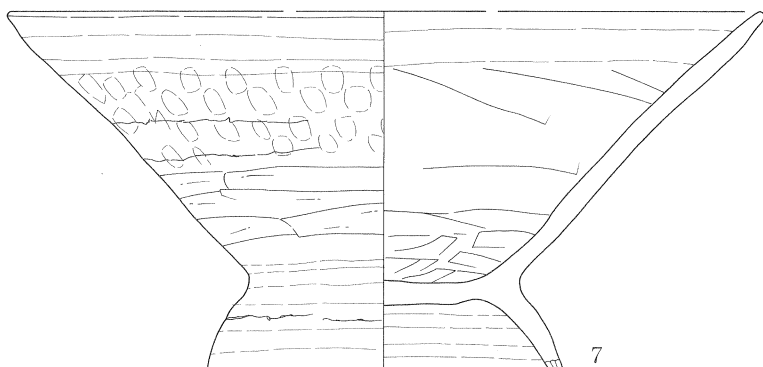
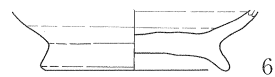
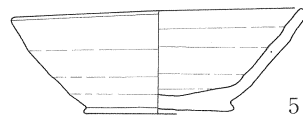
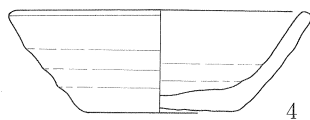
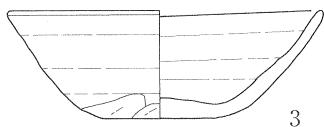
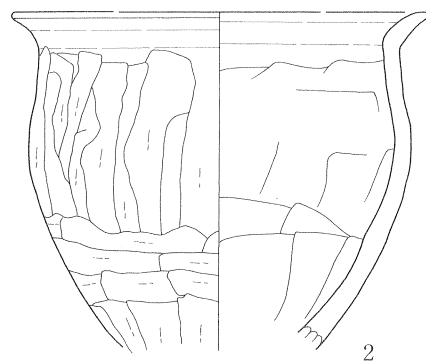
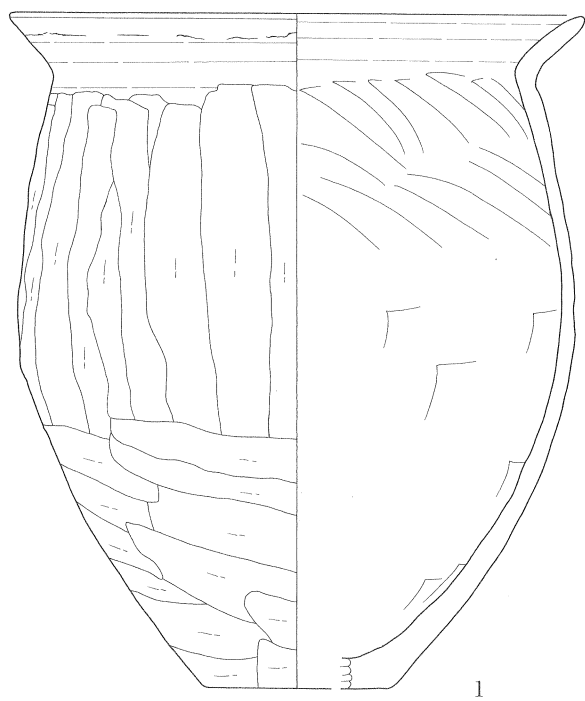
第52図 15号住居跡出土遺物

18号住居跡（第53図）

E 地区東側北辺の H18・I18区にプラン北側を調査区域外に西側を16号住居跡に大きく掘り込まれ、プランの一部を検出するだけである。規模は、東壁現存長3.0m・南壁現存長1.2m 程を計測するだけで全体プランの形状や主軸方位共に不明で、カマド・壁溝および主柱穴も検出できない。床面標高は27.40m で、確認面からの深さ15cm 前後を測る。床面は比較的硬く踏みしめられている。しかし、検出された東壁も不規則で住居跡のプランを示さない。出土遺物も無く所属時期の判断が困難であるが、16号住居跡に掘り込まれことから稻荷台Ⅳ期－b の10世紀第2 四半期が上限となる。

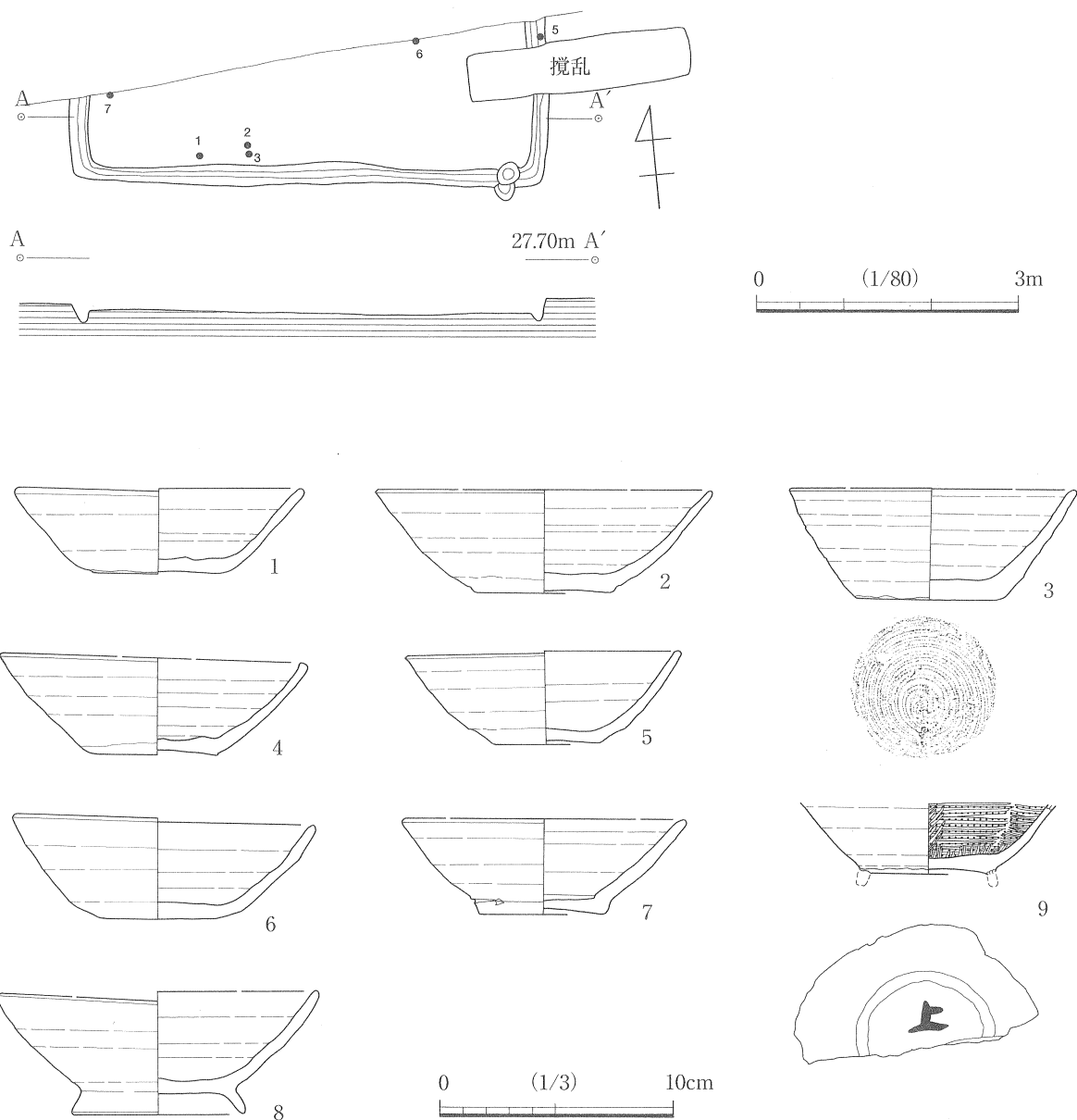


第53図 16・17・18号住居跡と16号住居跡出土遺物



0 (1/3) 10cm

第54図 17号住居跡出土遺物

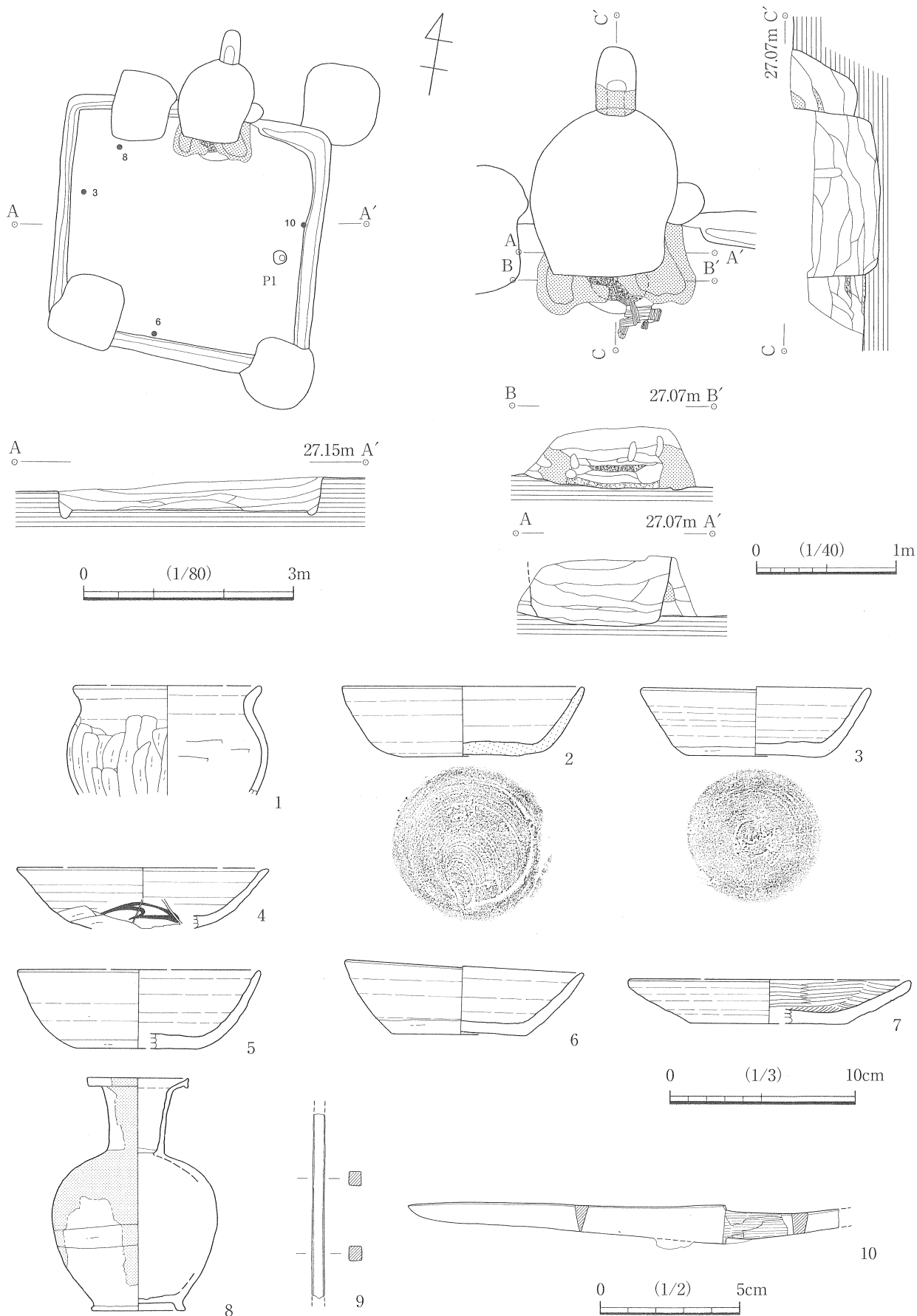


第55図 19号住居跡と出土遺物

19号住居跡（第55図）

E 地区東側北辺の H13・H14区にプラン北側 3 分の 2 を調査区域外に置き検出する。規模は南壁長 5.24m（5.42m）を計測するにとどまる。カマド位置が不明だが、北カマドと仮定すると主軸方位は N-6°-E を指向する。壁溝は検出範囲で周り確認される。主柱穴は検出できない。床面標高は 27.10m で、確認面からの深さ 10~20 cm 前後を測る。床面はやや凹凸があるものの堅緻である。

出土遺物、1~7 は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、8 はロクロ土師器高台付坏、9 は底部外面に「上」の字がある墨書土器の内黒ロクロ土師器高台付坏である。住居跡共伴遺物は、1・2・3・4・5・7 が床面や壁溝内から出土している。これらの出土遺物から、本住居跡は稻荷台Ⅳ期-a の10世紀第1四半期を中心とした時期と考える。



第56図 20号住居跡と出土遺物

20号住居跡（第56図）

E 地区中央の H11・I11区に25・27号掘立柱建物跡柱掘方に掘り込まれて検出する。規模は、主軸長3.35m（3.62m）・副軸長3.62（3.76m）を計測する。主軸方位はN-3°-Wを指向する。北壁長3.65m・東壁長3.4m・南壁長3.6m・西壁長3.3m程を計測し、各壁長が異なりやや均整を欠く方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、柱掘方に大きく掘り込まれ遺存するが、カマド袖部と燃烧部は床面寄りに設置され、煙道部は1.2m程と長い構造となる。床面標高は26.43mで、確認面からの深さ30～50cmを測る。ピットはP1で15cmを計測するが、主柱穴は検出されない。壁溝は、柱掘り方で失われた個所以外では検出されることから本来は四周するものであろう。床面は全体に踏みしめられている。覆土は、レンズ状の堆積を示すものの多層にわけられた土層にはロームブロックを含み、埋め戻された遺構である。

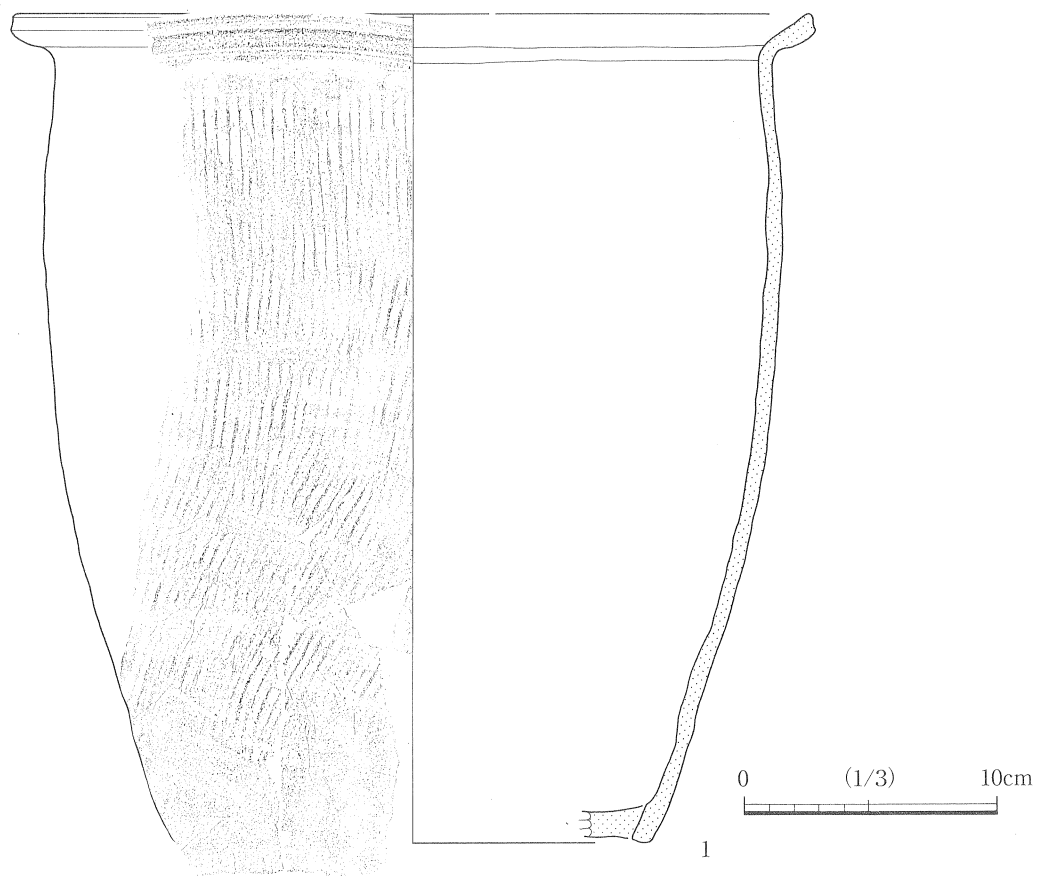
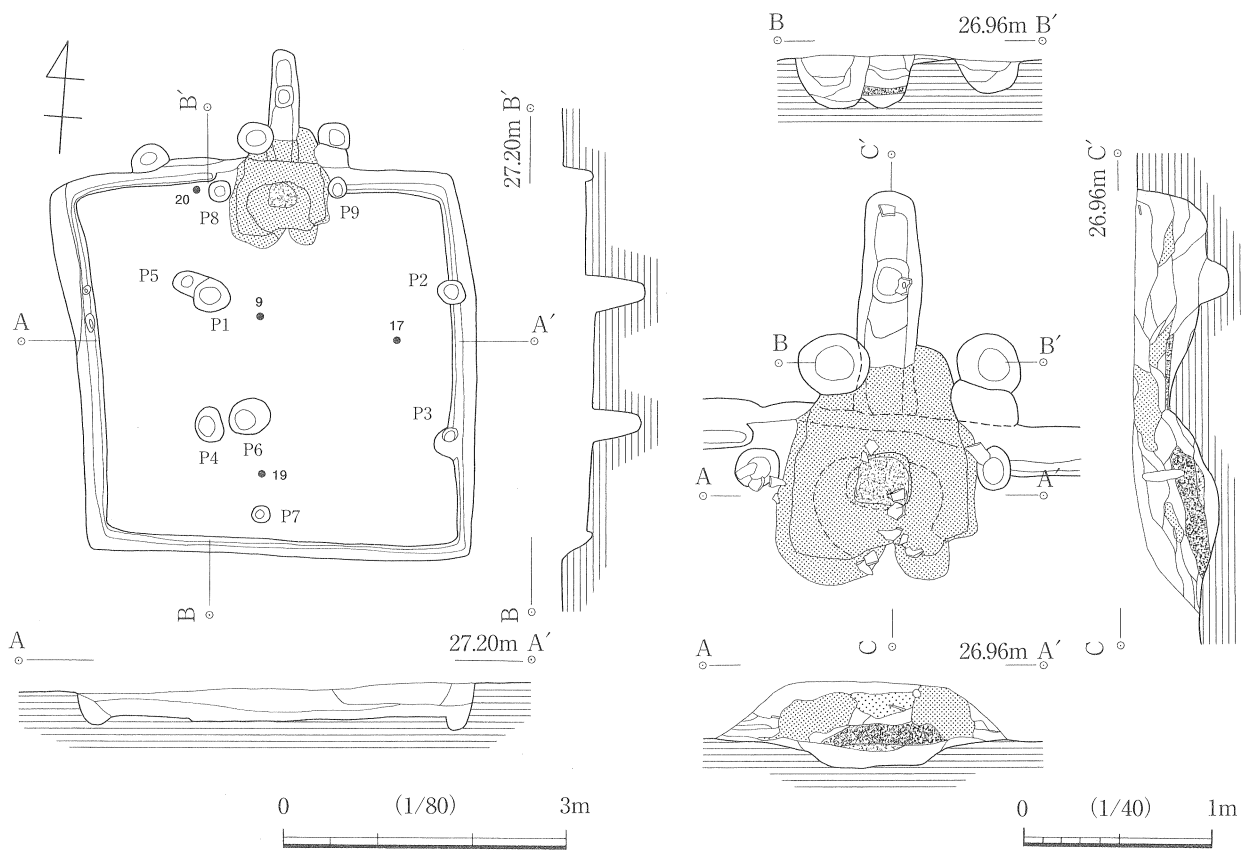
出土遺物、1は小形土師器甕、2は市原産須恵器杯、3・5・6は底部部回転篋削りのロクロ土師器杯、7は回転篋削りのロクロ土師器皿、4は体部下端に手持ち篋削りを施す墨書土器である。8の灰釉小形長頸壺は2段構成で口縁部を僅かに欠損し、坂野試案ではⅡ期古相である。9は釘断片、10は両関の刀子で刃部全長11.5cmを計り茎を僅かに欠損するだけである。2の須恵器杯は底部回転糸切りで暗灰色を呈し市原産でも石川窯産である。3・6・8が床面直上から出土し住居跡に共伴する遺物で、2・9・10の須恵器杯や釘と刀子もやや床面より浮いて出土するが住居跡に共伴するものであろう。本住居跡の出土遺物には、2の須恵器杯や3・5・6のロクロ杯、また小型灰釉長頸壺が共伴しⅡ期-aの基準資料と言える。本住居跡の所属時期は、Ⅱ期-aの9世紀第2四半世紀でも前半に位置付けられると看取される。

本住居跡は、灰釉小型長頸壺から時期が比定できるもので、住居の位置が規則的に並ぶ建物跡の南側に近接することや本遺構が埋め戻しされたことを考慮すると、計画的な掘立柱建物を建てる際に、排除された竪穴住居跡と言える。

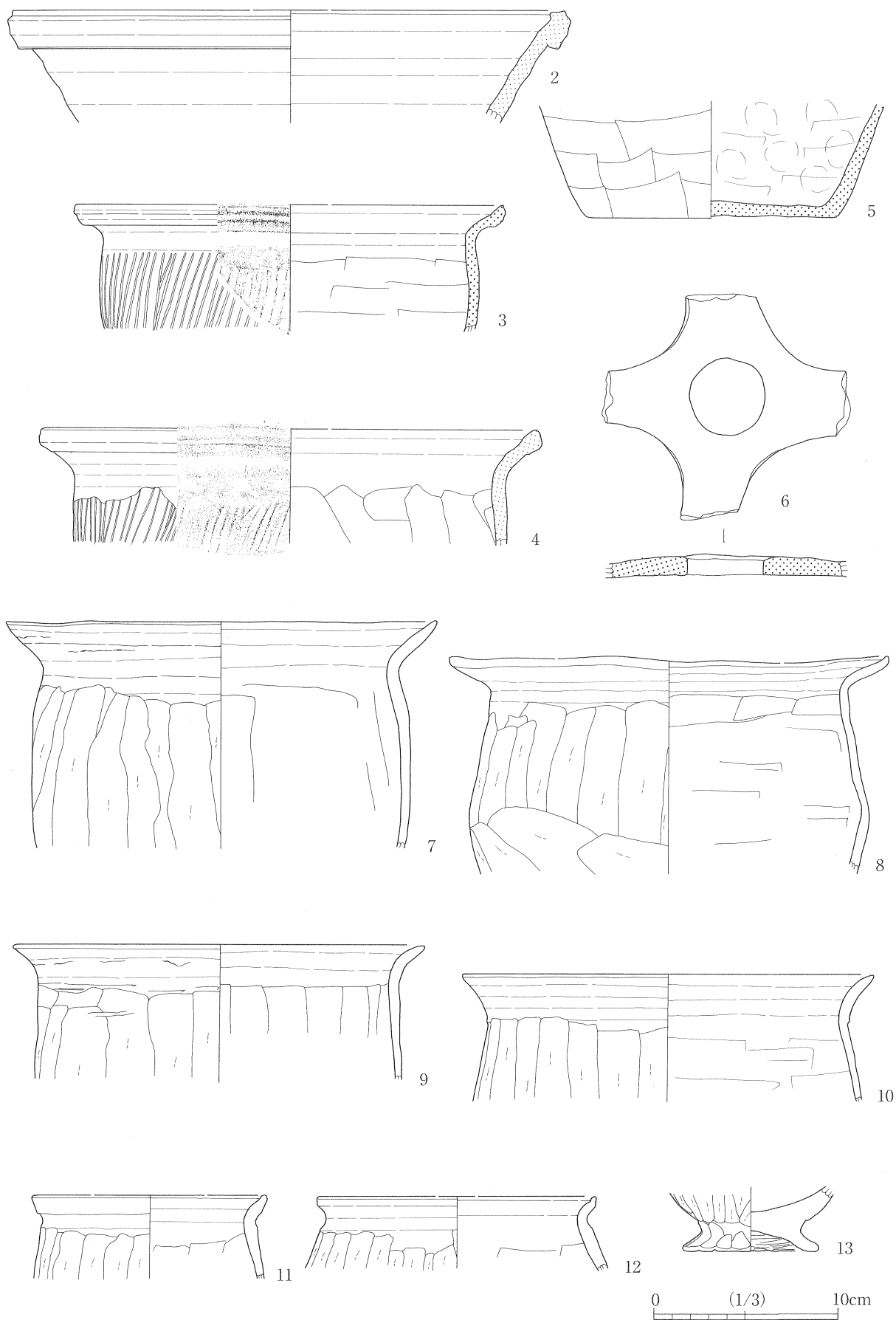
21号住居跡（第57・58・59図）

E 地区中央の I10・I11・J10・J11区単独で検出する。規模は、主軸長3.90m（4.18）m・副軸長3.93（4.18m）を計測する。主軸方位はN-4°-Wを指向する。北壁が他の壁よりも長く北西隅がやや突出気味となり、平面形はやや均整を欠く正方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、カマド袖部や煙道の天井には主要構築土に下末吉層の白色粘土が多量に用いられ、カマド袖部と燃烧部は床面寄りに設置され、煙道部は1.2m程で長い構造となる。床面標高は26.56mで、確認面からの深さ40cm前後を測る。ピットの深さはP1-51cm・P2-27cm・P3-46cm・P4-62cm・P5-39cm・P6-14cm・P7-10cm・P8-34cm・P-17cmを測り、主柱穴は変則的なP1・P2・P3・P4の4穴を想定でき、P7は出入り口の階段ピットで、カマド袖両側にあるP8・P9も建物構造の主要な柱穴と看取される。壁溝は、カマド両袖から出て四周する。

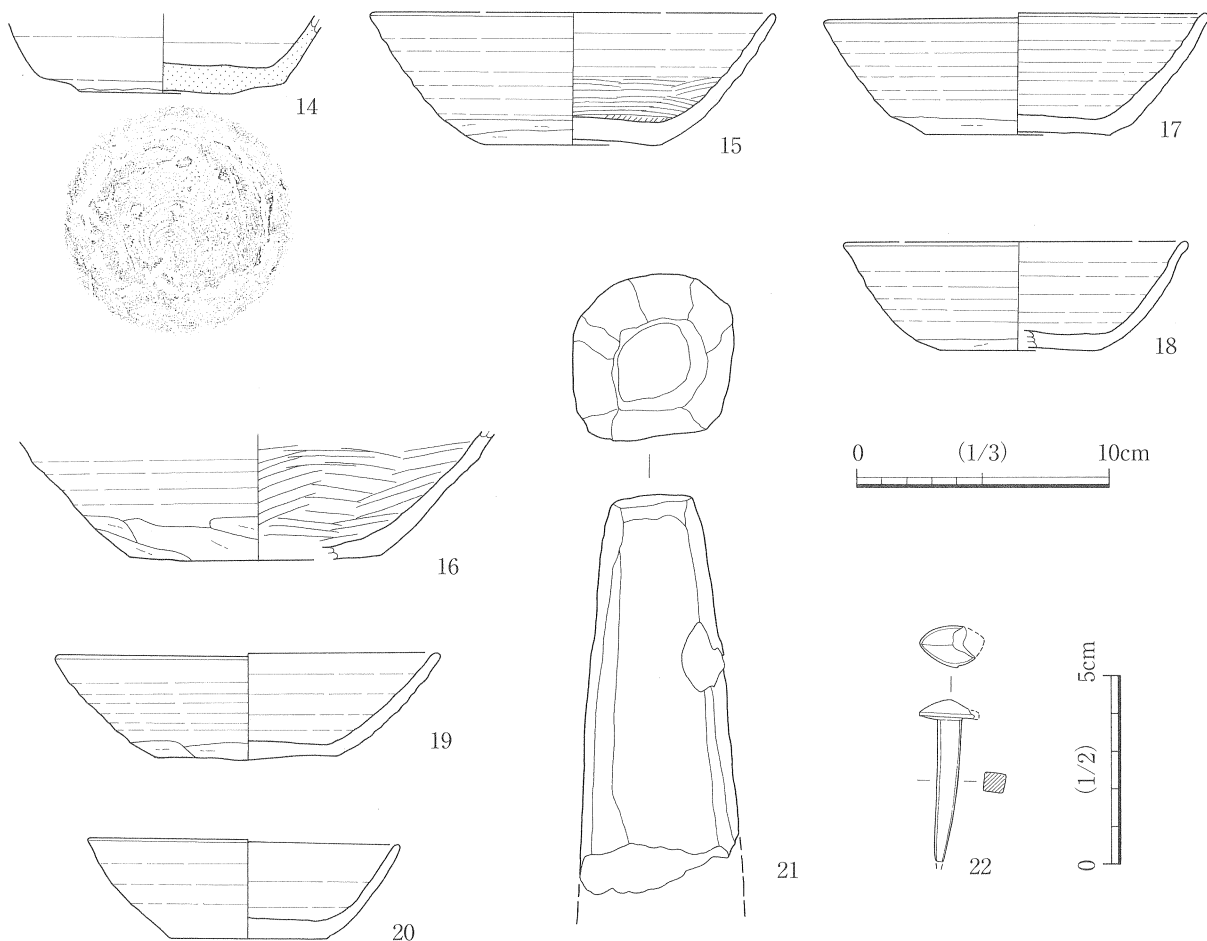
主な出土遺物は、1は須恵器甕、3～6は千葉市域産須恵器甕類、7～13は土師器甕で13が台付甕、14は底部回転糸きりで粗雑な成形の須恵器杯で市原産でも石川窯産の製品であらう。15・17・18・19は回転篋削りのロクロ土師器杯、16は体部下端手持ち篋削りで底部篋ミガキを施すロクロ土師器杯。20は底部ミガキ状の篋ナデのロクロ土師器杯。21は土製支脚、22は頭部を残す釘である。共伴遺物は、5・6・7・8・10・11・12・15・22がカマド燃烧部、20が床直上から検出される。他の覆土中から



第57図 21号住居跡と出土遺物



第58図 21号住居跡出土遺物



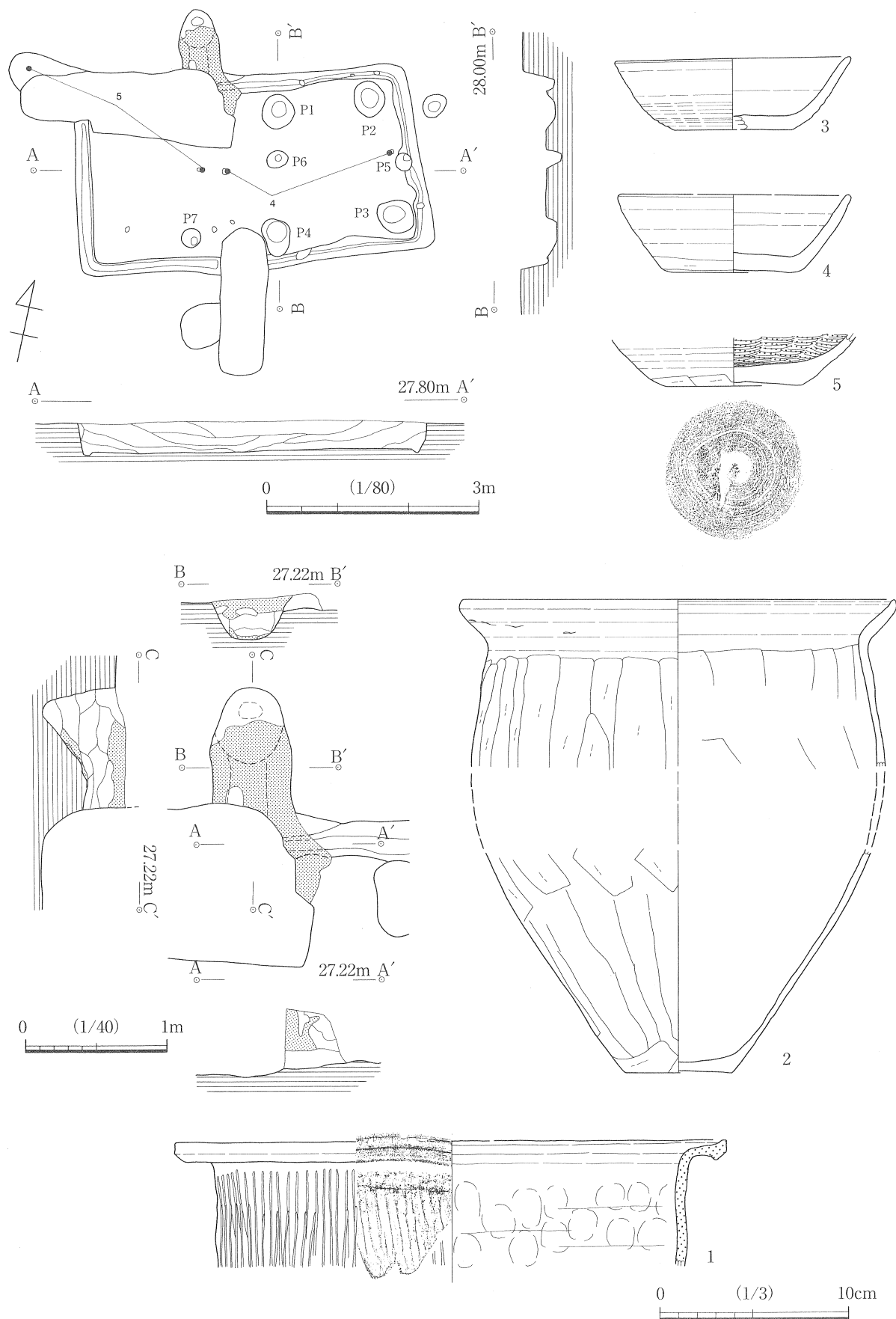
第59図 21号住居跡出土遺物

検出した遺物も本跡に伴うと見て差し支えない物であろう。14の須恵器坏は20住の2より粗雑感がありより後出するもので、15・17・18・19のロクロ坏も20住と比較すると器高が増している。これらの出土遺物の特徴から、本住居跡は稲荷台Ⅱ期-aの9世紀第2四半期と看取される。

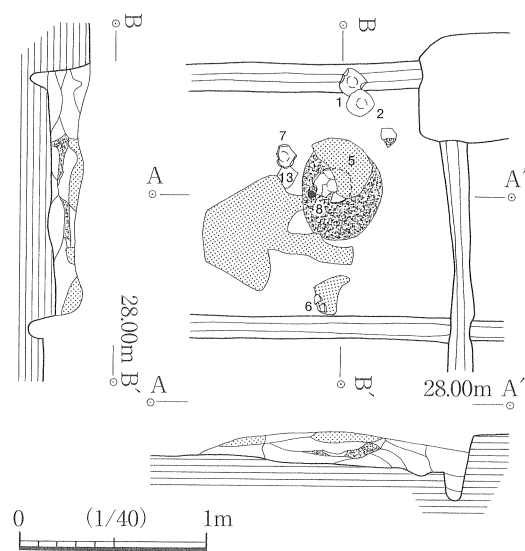
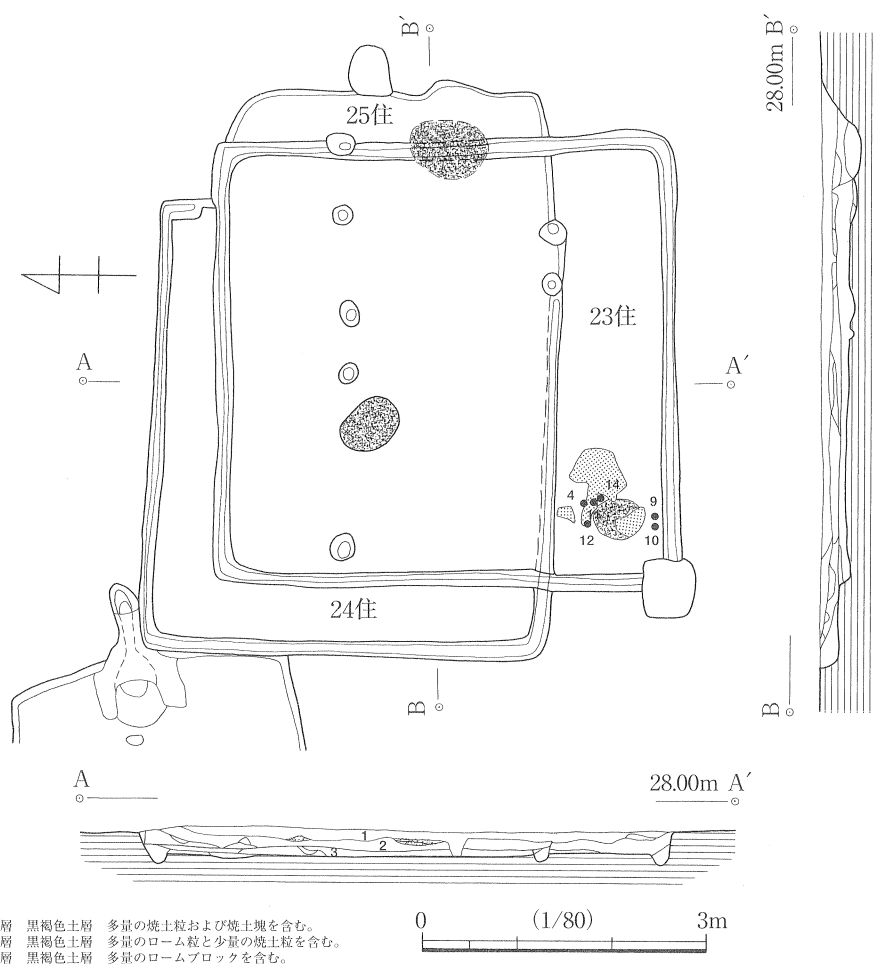
22号住居跡（第60図）

E地区東側のJ18・19区単独で検出、北壁西と南壁中央をイモ穴に攪乱される。規模は、主軸長2.58m（2.76m）・副軸長4.62（4.82m）を計測する。主軸方位はN-18°-Wを指向する。平面形は、横長の長方形を呈する。カマドは北壁の中央より西側に設けられ、カマド袖部や燃烧部は大きく攪乱されている。煙道部長は1m程を測り長い。床面標高は27.08mで、確認面からの深さ45cm前後を測る。ピットの深さはP1-11cm・P2-25cm・P3-20cm・P4-16cm・P5-40cm・P6-21cm・P7-21cmを測り、主柱穴はプラン東半分を意識した変則的なP1・P2・P3・P4の4穴を想定できるが、北西隅と南西隅に柱痕跡を意識すると6本柱、またP7を意識するならば8本柱の主柱穴構造が想定される。壁溝は、攪乱によって失われた個所以外で確認できることから本来は四周するものである。

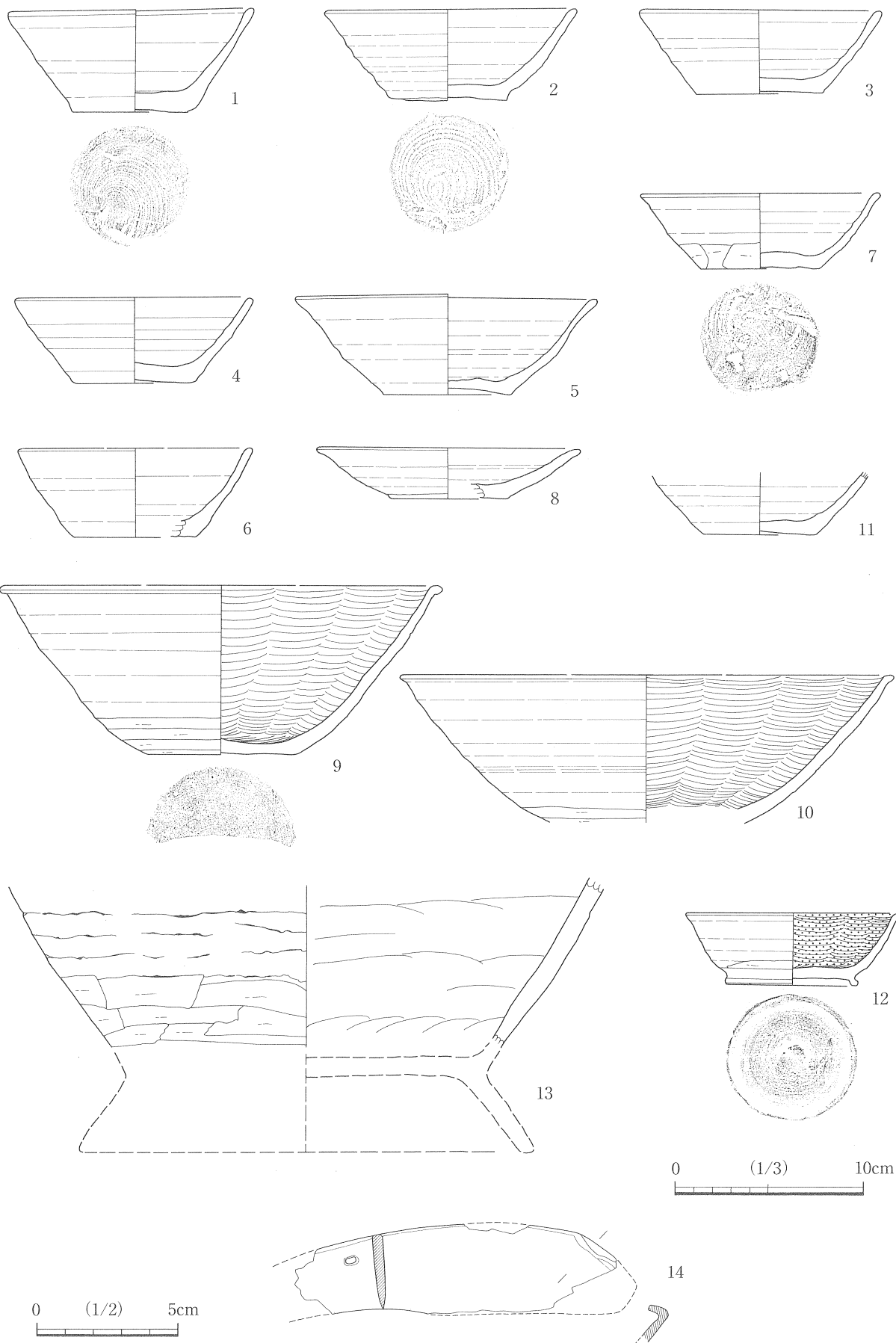
主な出土遺物は、1は千葉市域産須恵器甕か、2は土師器甕、3・4は回転篋削りのロクロ土師器坏、5は内黒のロクロ土師器坏である。4が床直上より検出され住居跡の時期を示す資料となり、他



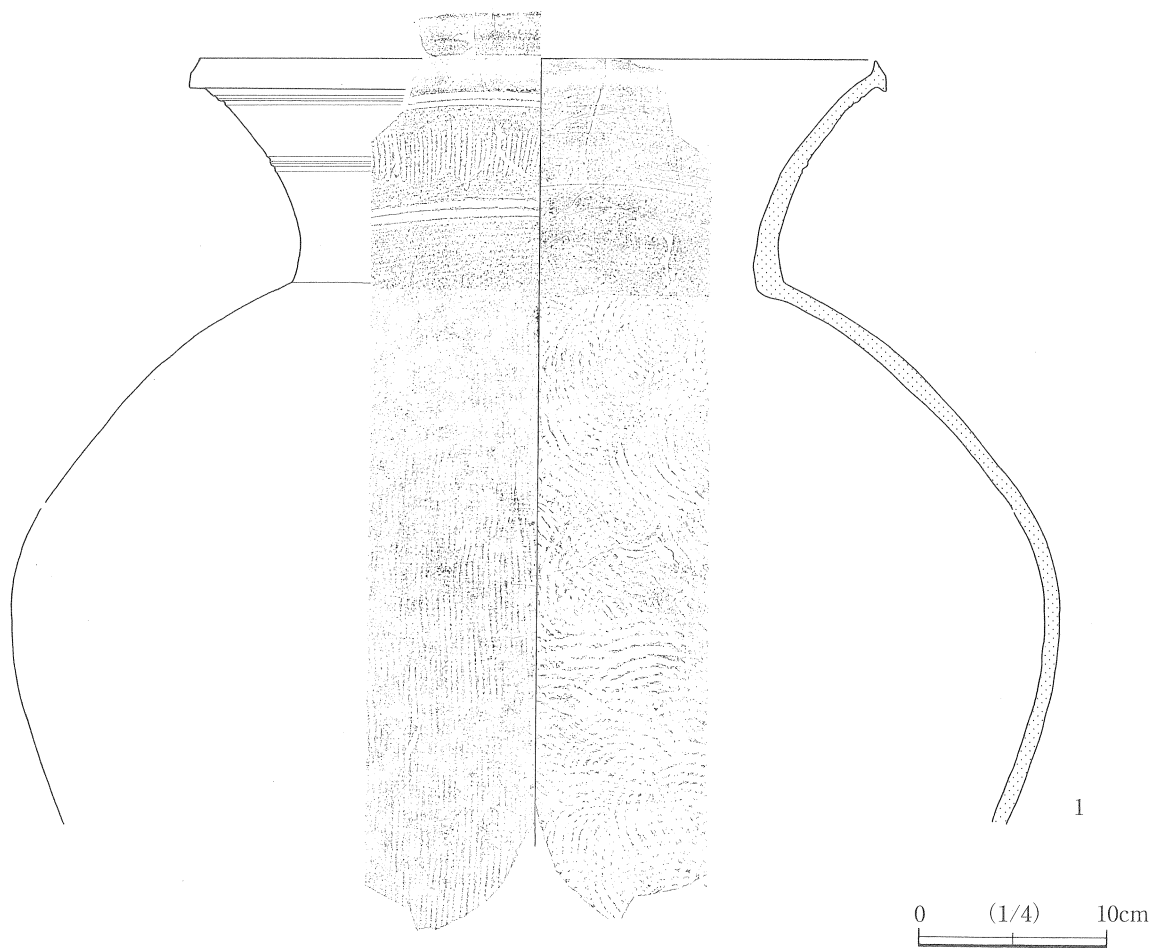
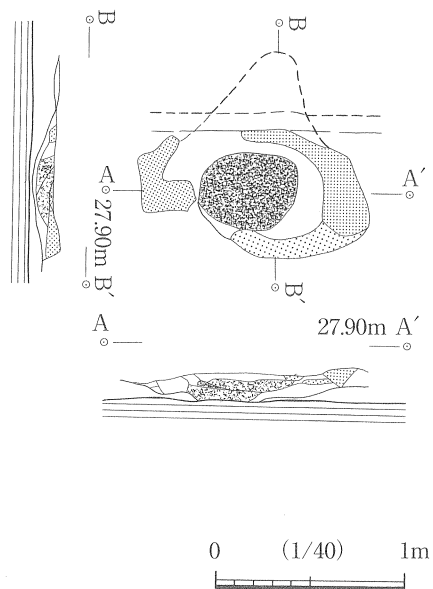
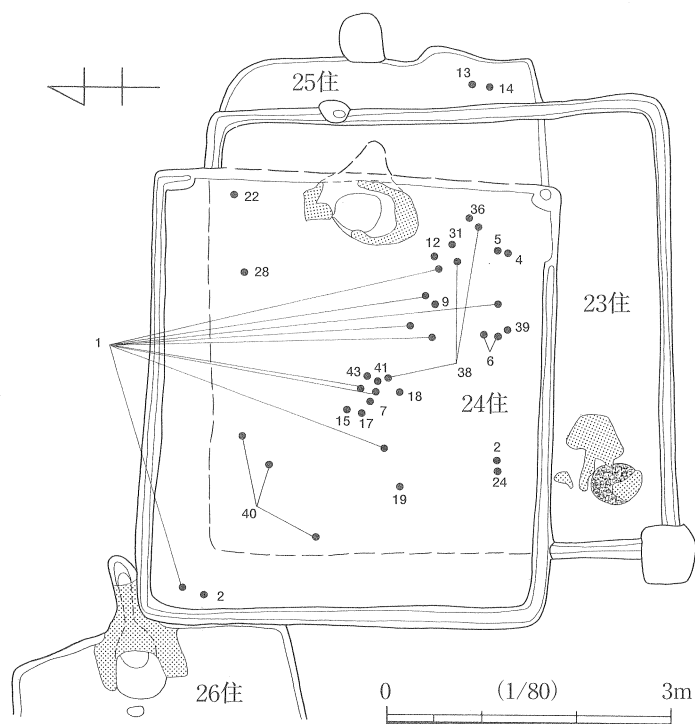
第60図 22号住居跡と出土遺物



第61図 23・24・25号住居跡



第62図 23号住居跡出土遺物



第63図 24号住居跡と出土遺物

の遺物は覆土中の検出だが、2・3も共伴遺物と見なして差し支えないものであろう。4のロクロ坏と20・21住居跡の同種を比較すると20住居跡とほぼ酷似し、本住居跡は稻荷台Ⅱ期-aの9世紀第2四半期に帰属するものと看取される。

23号住居跡（第61・62図）

E地区東側西中央のK18・L18区に24・25号住居跡と40号掘立柱建物跡に掘り込まれて検出する。規模は、主軸長4.64m（4.69）m・副軸長4.78（4.84m）を計測する。主軸方位はN-89°-Eを指向する。平面形は、均整なほぼ正方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央と南壁の西南隅の2基が確認された。東カマドは後出遺構の25住居跡に削平され、僅かに燃焼部床を確認するだけである。南カマドも燃焼部とそれを覆い囲む様な袖部残骸の下末吉層の白色粘土が確認されているが、煙道部の存在を窺わせる痕跡がなく、置きカマドを設置した状況を窺わせるものである。床面標高は27.50m前後で、確認面からの深さ25cm前後を測る。柱穴は無く、壁溝は四周して検出する。

出土遺物は、1～12のロクロ土師器を主に、13の土師器大型台付鉢片、14の鎌がある。9・10は大型の土器で内面ミガキ底体部に回転篋削りを施す。12は口径11.3cmの小型の内黒ロクロ土師器高台付坏は内面丁寧なミガキを施し、低くシャープな高台を有している。図示した遺物は、全てがカマド燃焼部やその周辺から検出され住居跡の帰属時期を示す資料である。出土遺物から、稻荷台Ⅲ期-bを中心とした9世紀第4四半期～10世紀第1四半期に帰属するものと看取される。

24号住居跡（第63図）

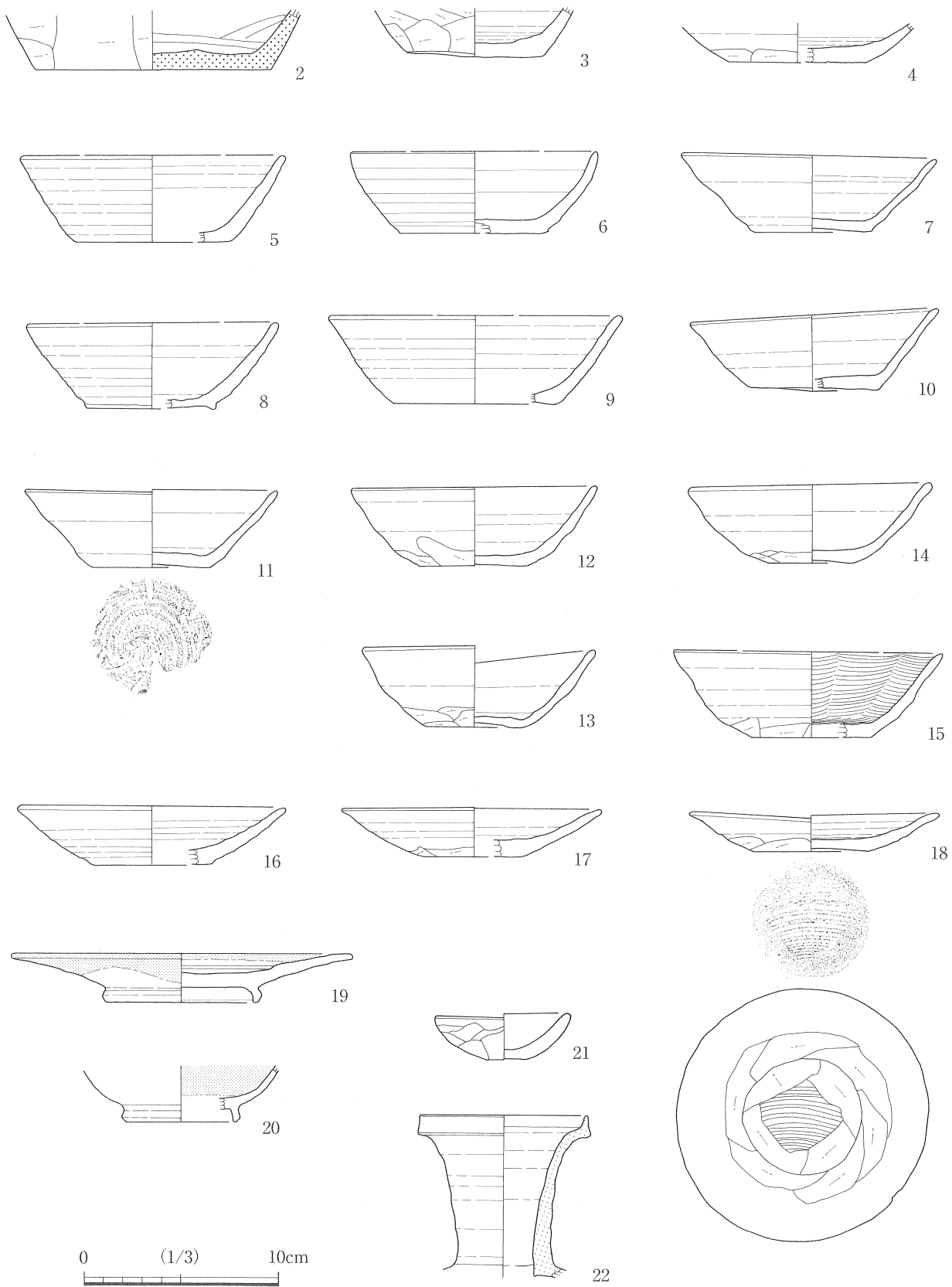
E地区東側西中央のK18・L18区に23号住居跡と40号掘立柱建物跡を、また北西隅で26号住居跡をそれぞれ掘り込んで、また、25号住居跡に東壁・カマドと覆土上層を掘り込まれて検出する。規模は、主軸長4.61m（4.76）m・副軸長4.20（4.28m）を計測し、平面形はやや縦長の方形を呈する。主軸方位はN-92°-Eを指向する。カマドは東壁のほぼ中央に確認されるが、遺存はよくない。床面標高は27.40m前後で、確認面からの深さ30cm程を測る。本住居跡に伴う明確な柱穴は確認できない。壁溝は、東壁直下に検出されたただけである。

25号住居跡（第63・64図）

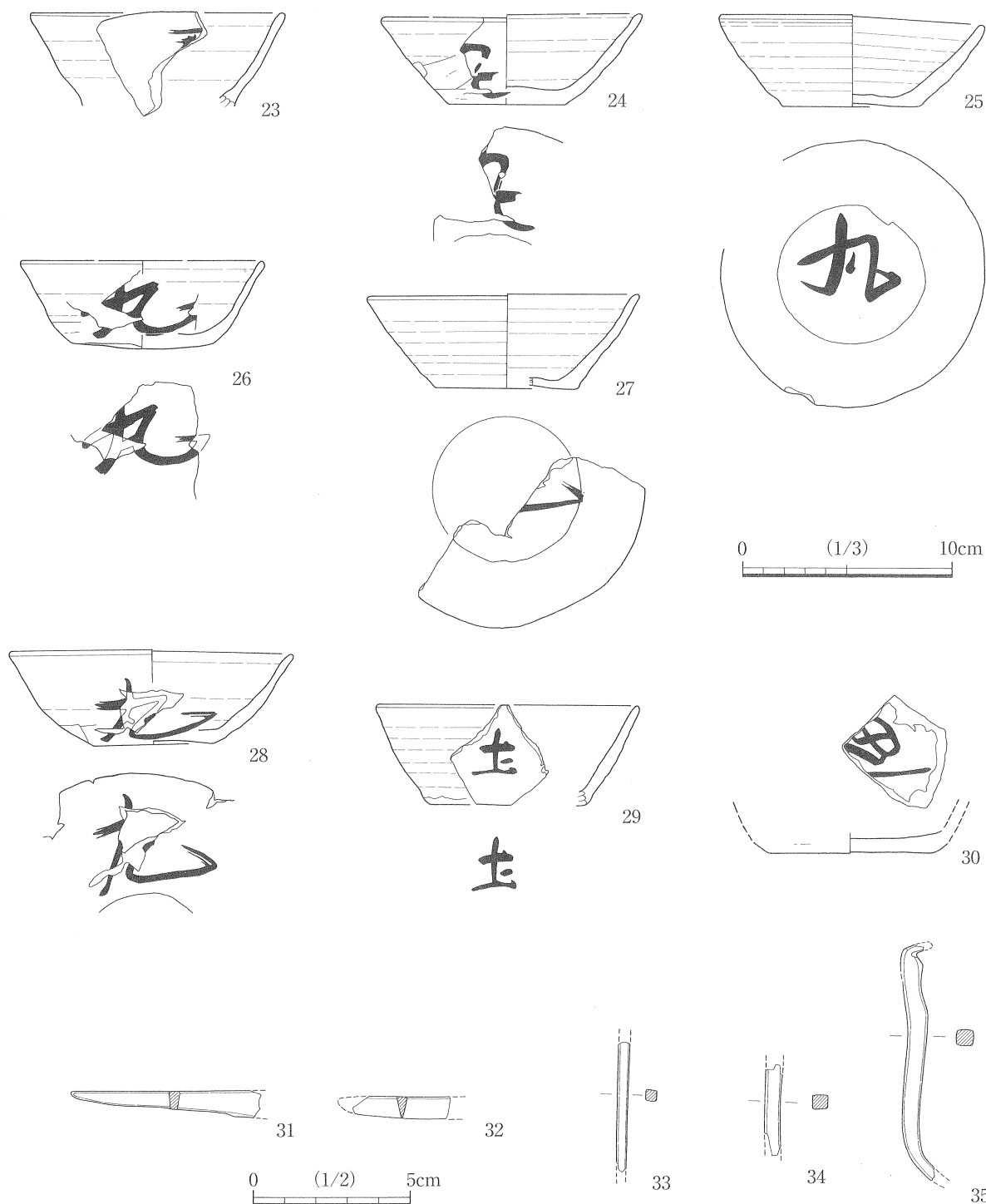
23と24号住居跡と40号掘立柱建物跡プランの上層に検出する。プランは東辺壁と北東隅、南西隅を確認するだけである。規模は、南北長3.25m（3.4m）を計測し東西長は不明である。平面形は、北東隅が丸く南西隅が鈍角なL字状を呈し、不規則な方形を呈する。カマドや壁溝は検出されず、床面も不鮮明で24号住居跡覆土中に形成される床面も僅かにその存在を思わせるのに留まり、住居跡ではなく堅穴状の落ち込みとも思われる。

24・25号住居跡出土遺物（第64・65・66図）

24住と25住の出土遺物が明瞭に分けられない為、一緒に取り扱う。1は大型須恵器甕で遺構内に散在して検出される。2は千葉市域産須恵器甕底部片、3は非ロクロ土師器坏片、何れも覆土上層に混入する遺物である。4・5・6・7・8・9・12・15のロクロ土師器坏は、24住居跡プラン内の床面ないしほぼ床面から出土する。4は底体部回転篋削りを施すも底体部2分の1ほどの破片、12は底体部手持ち篋削りを施す。15は底体部手持ち篋削りで内黒である。16～18がロクロ土師器皿で17・18の底体部手持ち篋削りを施し、18には静止糸切りが残る。18が床面から出土する。19の灰釉段皿と20の灰釉碗は猿投産で何れも覆土の出土である。21は小型の手づくね土師器坏で完形品で24住カマド燃焼

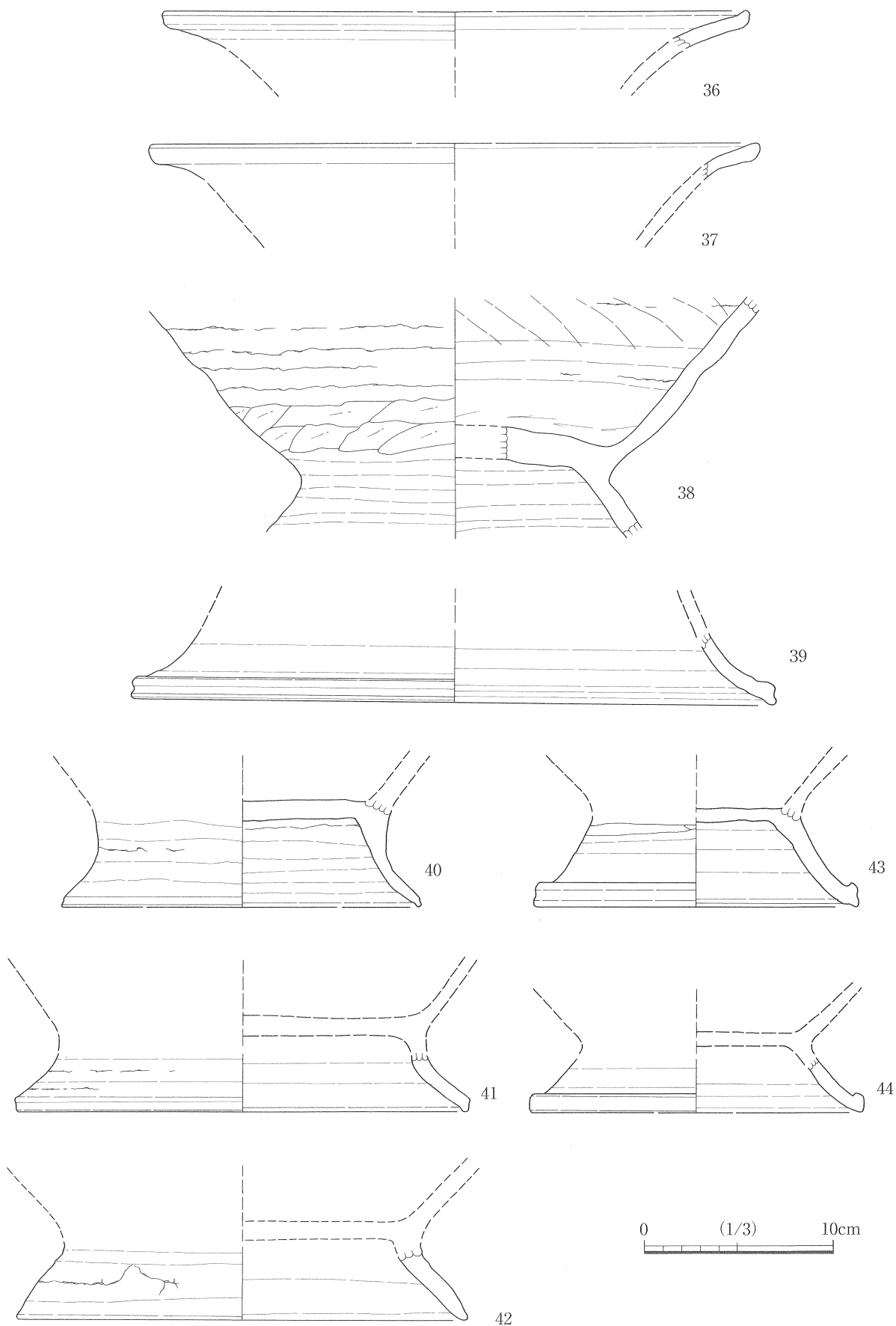


第64図 24・25号住居跡出土遺物

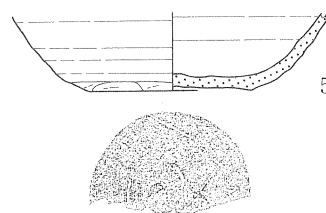
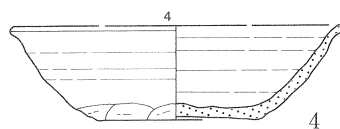
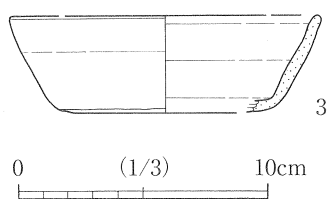
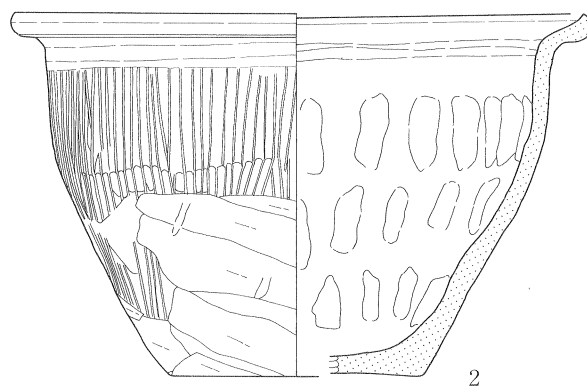
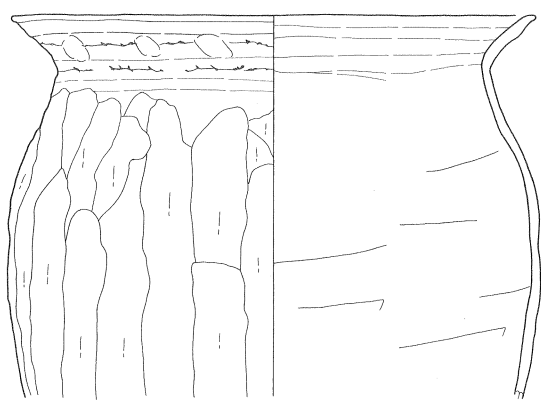
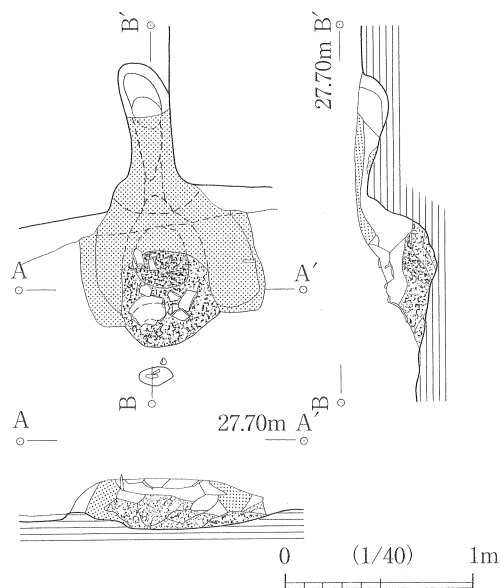
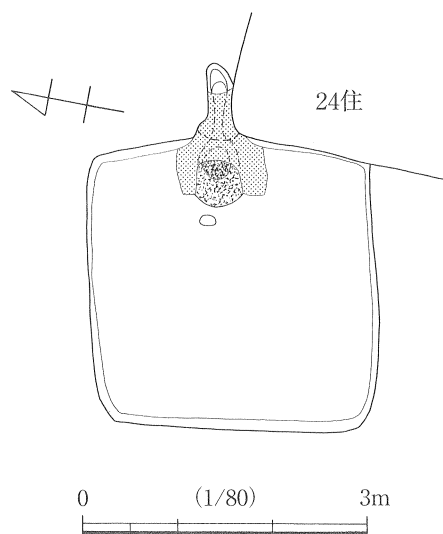


第65図 23・24・25号住居跡出土遺物

部から出土する。22は須恵器長頸壺で床面出土である。13・14のロクロ土師器坏は底体部手持ち篋削りを施し25住に伴う遺物である。23～30は墨書土器で25～28が「丸」、29が「土」、他は判読できない。30のロクロ土師器坏底部は、底径7.6cm程の底体部回転篋削りを施し、他の墨書土器とは時期が異なる。31・32の刀子は床面や24号住居跡カマド内、33～35の釘は住居覆土からそれぞれ出土している。36～44は土師器大型台付鉢で、38と40が接合資料であるが、他は破片資料である。1・2の



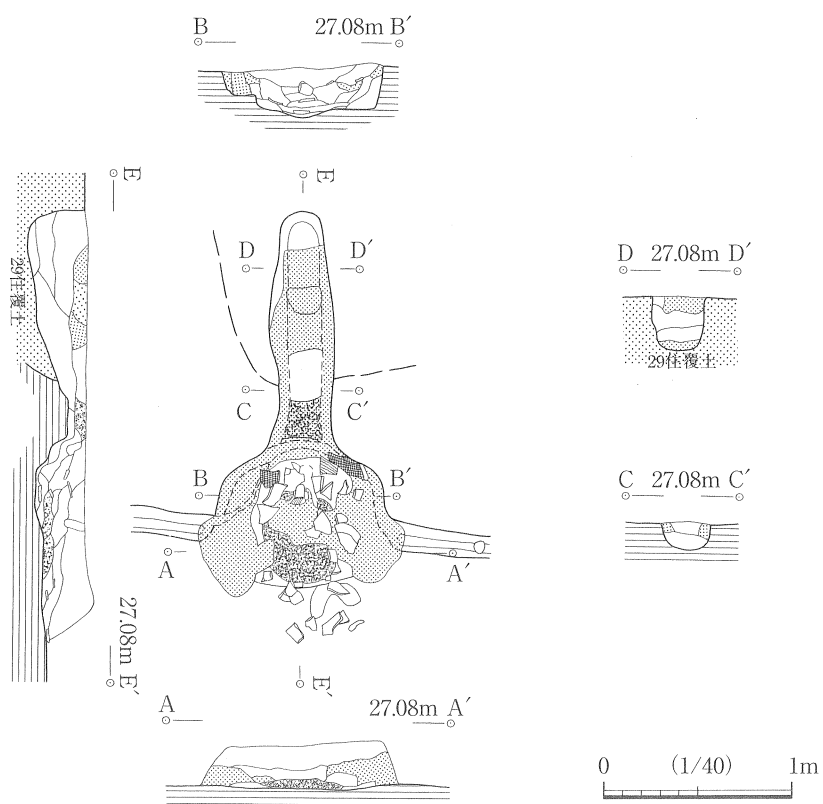
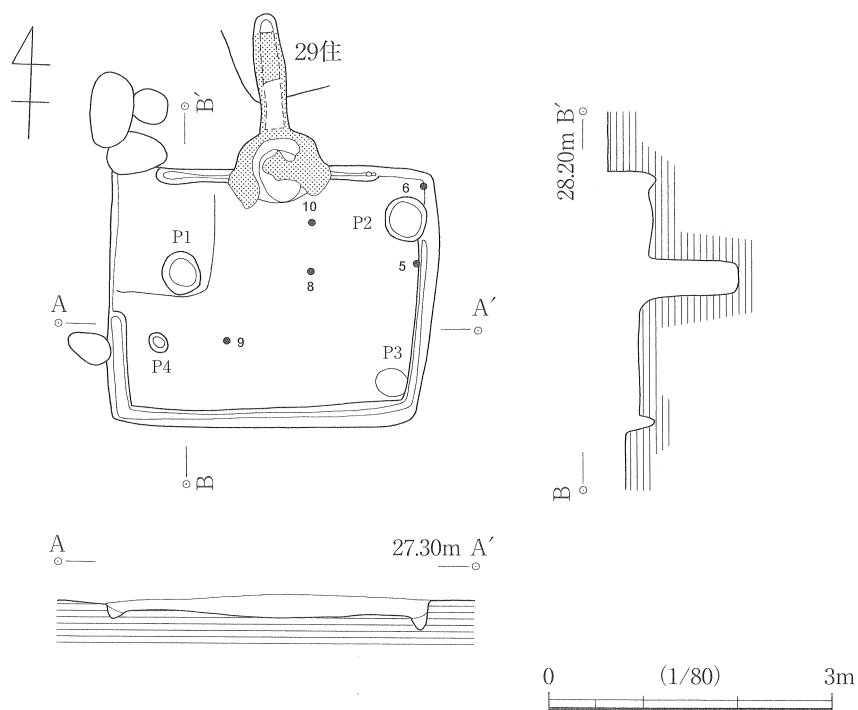
第66図 23・24・25号住居跡出土遺物



第67図 26号住居跡と出土遺物

口縁端部がやや上方に摘み出した物や37の丸くおさめる物がある。脚端部では下方に摘み出した40・42、端部を折り返し状にした43・44、端部をそのままおさめた41などバリエーションの多い器形である。36・38・40・41・43が床面から出土している。

24号住居跡と25号住居跡は、遺構の切り合いや遺物から24住→25住の変遷が可能となるが、24号住居跡覆土上層（25住覆土）出土土器と25号住居跡下層（24住覆土）出土土器が接合し、25号住居跡覆土も24号住居跡覆土と一体となり、25号住居跡が住居跡ではなく、落ち込み状の堅穴遺構である可能性を強く示唆している。但し、ロクロ土師器坏12・13・14は他のロクロ土師器より後出する器形であり疑問点が残る。出土遺物から、24号住居跡は稲荷台Ⅲ期－b、25号住居跡はⅣ～Ⅴ期の10世紀第2～3四半期に帰属するものと看取される。



第68図 27号住居跡

26号住居跡（第67図）

E 地区中央の J17・K17区に32号掘立柱建物跡柱掘方と24号住居跡に東壁の一部を掘り込まれて検出する。規模は、主軸長2.89m（3.10）m・副軸長2.92m（3.05m）を計測する。主軸方位はN-77°-Eを指向する。平面形は、各隅が丸身を有することやカマドが設けられる東壁がカマドを頂点に突出気味になり、やや均整を欠く正方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央に設けられ、カマド袖部と燃焼部は床面側に設置され、煙道部は壁から0.75m程突出している。床面標高は27.32mで、確認面からの深さ30cm程を測る。ピットは無く、カマド前面に浅い落ち込みを認めるだけで主柱穴は検出されない。壁溝もない。本住居跡西側覆土上層には1号土器廃棄遺構を検出する。

主な出土遺物は、1は土師器甕、2は千葉市域産須恵器甕？、3は市原産須恵器坏、4・5は千葉市域産須恵器坏である。何れの遺物もカマド燃焼部からの出土で住居跡の帰属を示す資料となり、稲荷台Ⅰ期の9世紀第1四半期に帰属するものと看取される。

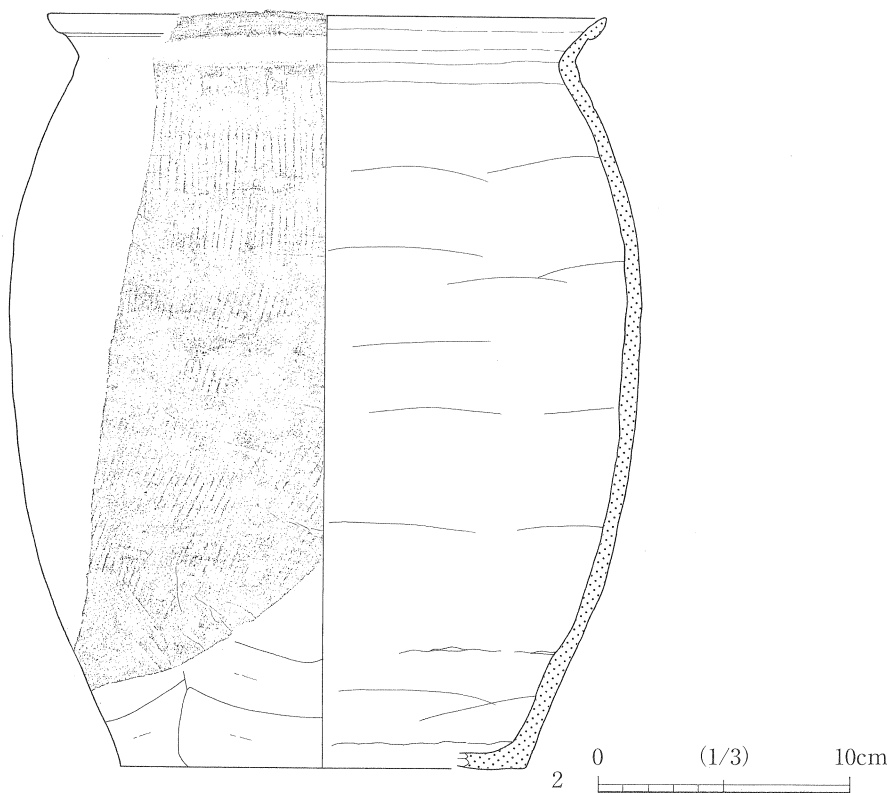
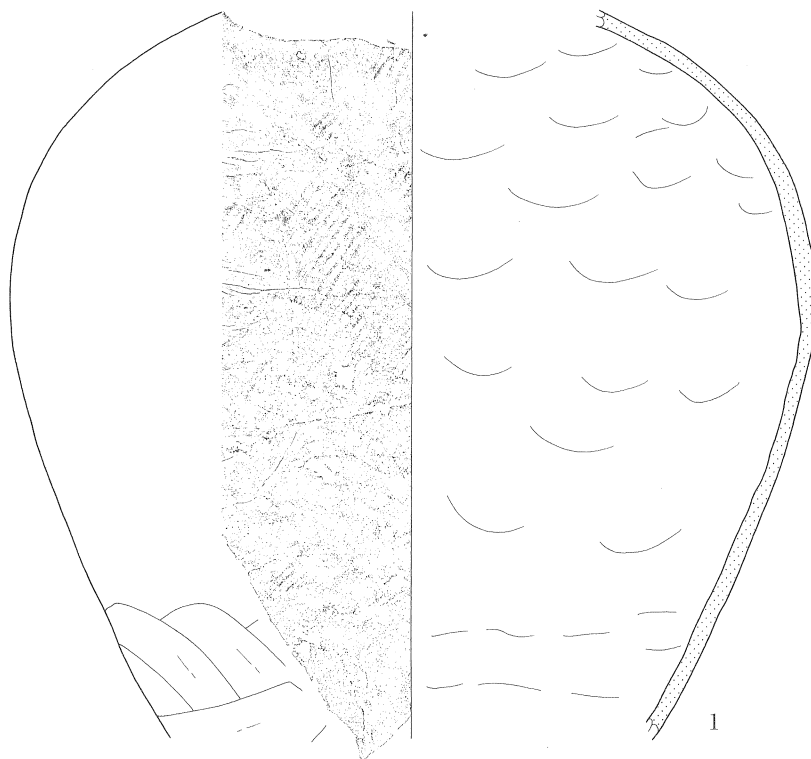
27号住居跡（第68・69・70図）

E 地区西側中央の E7・E8区に、カマド煙道部が29号住居跡覆土中に構築して検出する。規模は、主軸長2.58m（2.74m）・副軸長3.32m（3.42m）を計測する。主軸方位はN-2°-Wを指向する。平面形は、横長の方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、カマド袖部と燃焼部は壁外に大きく突出し設置され、壁からの突出長1.6m、煙道部長1.2mを測り、カマド構築材に瓦や須恵器を使用している。床面標高は26.74mで、確認面からの深さ35cm程を測る。ピットの深さはP1-11cm・P2-12cm・P3-6cm・P4-16cmを測るものの主柱穴は不明である。壁溝は、北壁の北東隅と北西隅で途切れ、西壁北半分は大きく途切れている。また、床面北西隅一体は、中央床面より10cm前後の段差で低くより堅緻である。

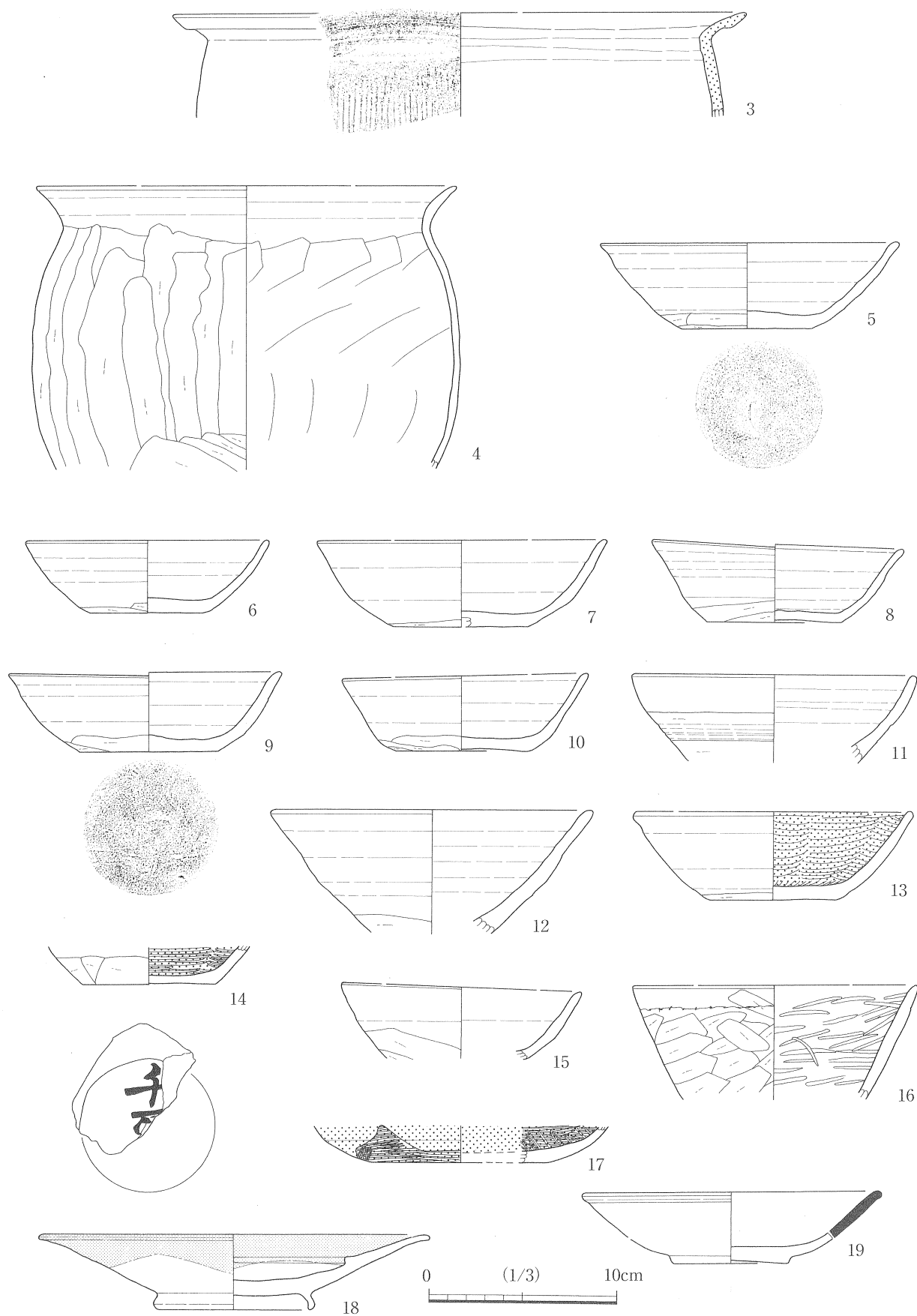
主な出土遺物は、1・2・3は千葉市域産須恵器甕、4は土師器甕、5～15のロクロ土師器坏、16は土師器鉢、17は内外面黒色の土師器坏片、18は坂野Ⅲ期古相の灰釉段皿、19の山城産の緑釉陶器碗がある。遺構に伴う遺物は、1・2・3・4・12・18がカマド内、5・8・9・10が床面、6・19が床面よりやや浮いて検出され、他は覆土中の出土である。住居跡の帰属を示す資料はカマド燃焼部内や床面出土の遺物があるが、1～3の須恵器はカマド構築の補強材として瓦などと同様に二次転用されたものと見ることができる。従って、ここでは床面から出土した回転篋削りにより底径が縮小するロクロ土師器坏や20の灰釉陶器段皿、19の緑釉陶器碗などの存在から、稲荷台Ⅲ期-a 9世紀第3四半期に帰属するものと看取される。

28号住居跡（第71・72図）

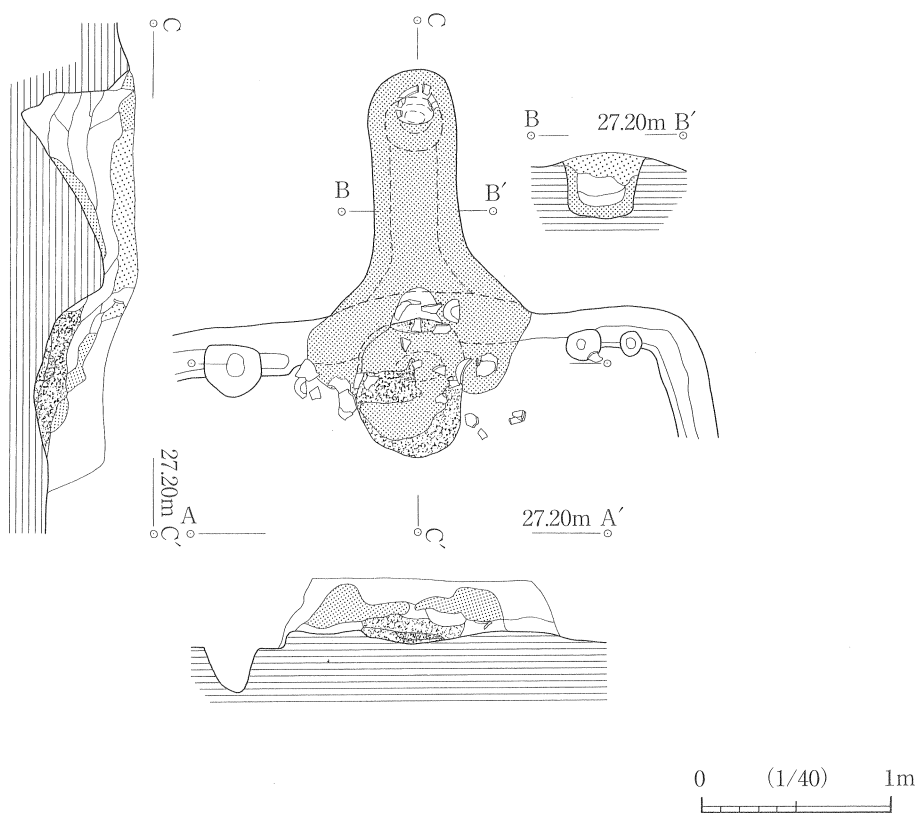
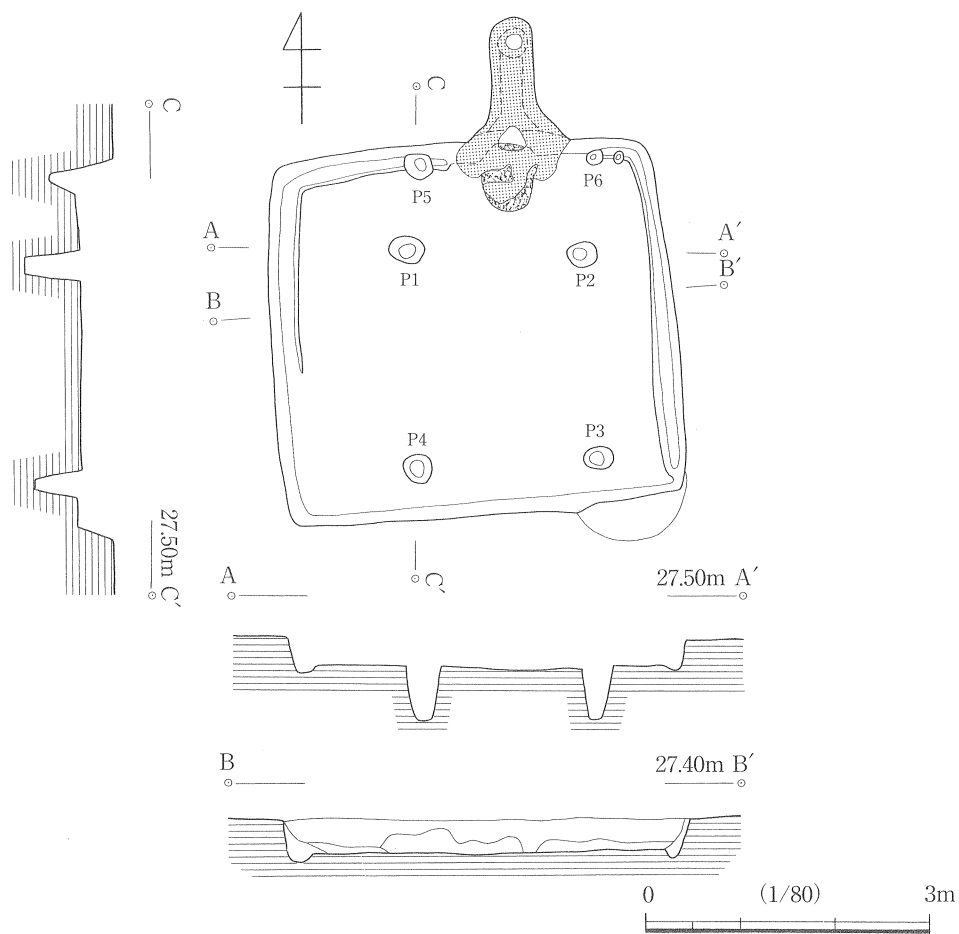
E 地区西側中央の C7・C8・D7・D8区に検出する。規模は、主軸長3.68m（3.92m）・副軸長4.04m（4.26m）を計測する。主軸方位はN-4°-Wを指向する。平面形は、僅かに横長の方形を呈する。カマドは北壁中央より西側に寄って設けられ、カマド袖部と燃焼部は壁外にやや突出気味に設置され、突出長1.25mを測り、カマド構築材には下末吉層の白色粘土を多量に使用している。床面標高は26.64mで、確認面からの深さ40cm程を測る。ピットの深さはP1-54cm・P2-52cm・P3-30cm・P4-45cm・P5-24cm・P6-23cmを測り主柱穴はP1・P2・P3・P4の4柱穴で、カマド両袖に検出したP5・P6もカマド設置個所の主要な柱穴になろう。壁溝は、南壁では無く、西壁南半分には設けられない。床面北西隅一体は、中央床面より10cm前後の段差で低くより堅緻で、



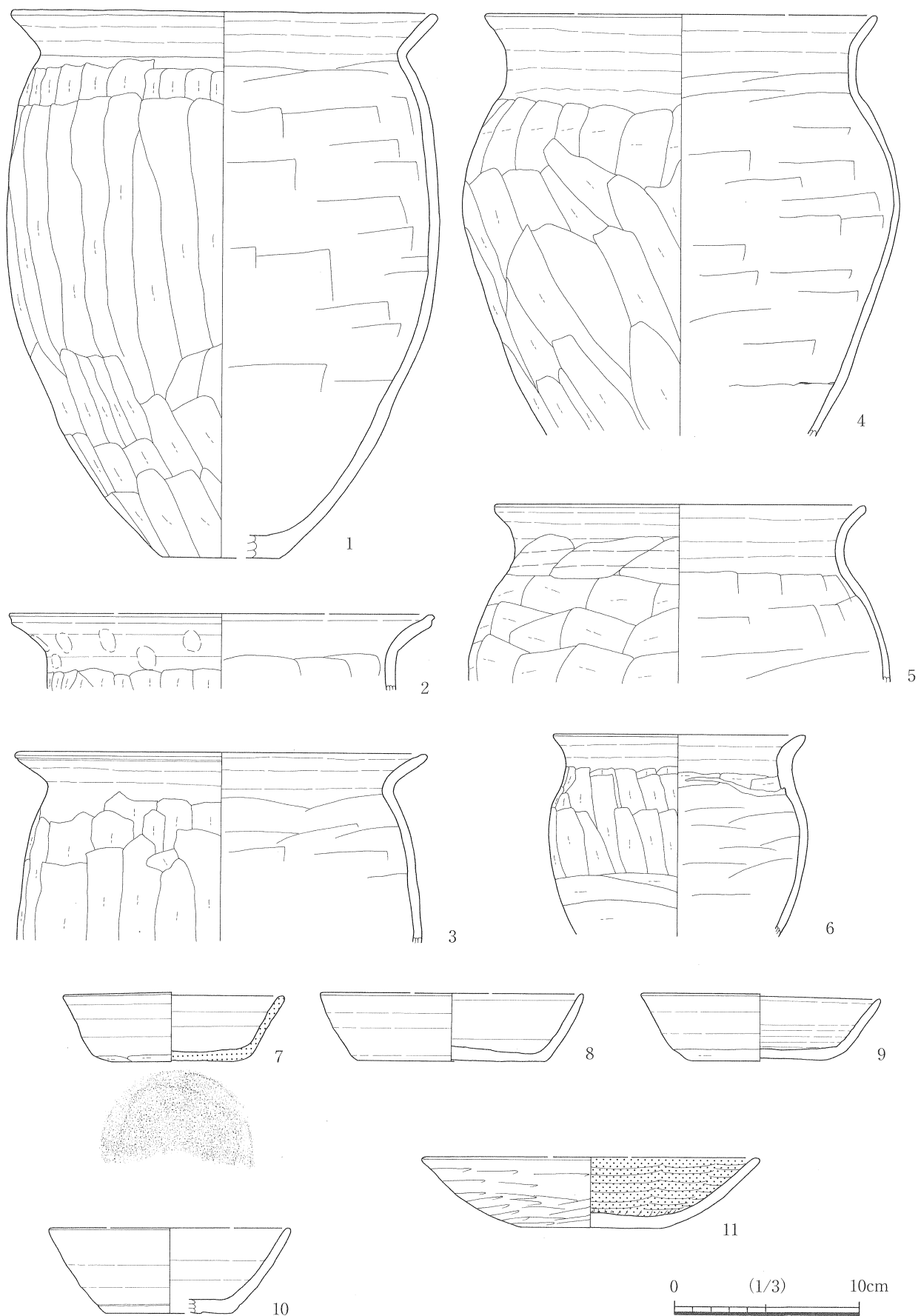
第69図 27号住居跡出土遺物



第70図 27号住居跡出土遺物



第71図 28号住居跡



第72図 28号住居跡出土遺物

土間を連想させる。

主な出土遺物は、1～6は土師器甕、7は千葉市域産須恵器坏、8は永田・不入窯産須恵器坏と同様な技法で成形されたロクロ土師器坏である。9は体部下端と底部回転篋削りを施したロクロ土師器坏、10は回転糸切り、11は内黒で外面にも磨きを施す皿状のロクロ土師器坏である。1～9がカマド燃焼部からの出土で10・11は覆土からの検出である。本住居跡の所属時期は、7・8・9の坏類から稲荷台Ⅰ期の9世紀第1四半期に帰属するものと看取される。

29号住居跡（第73・74・75図）

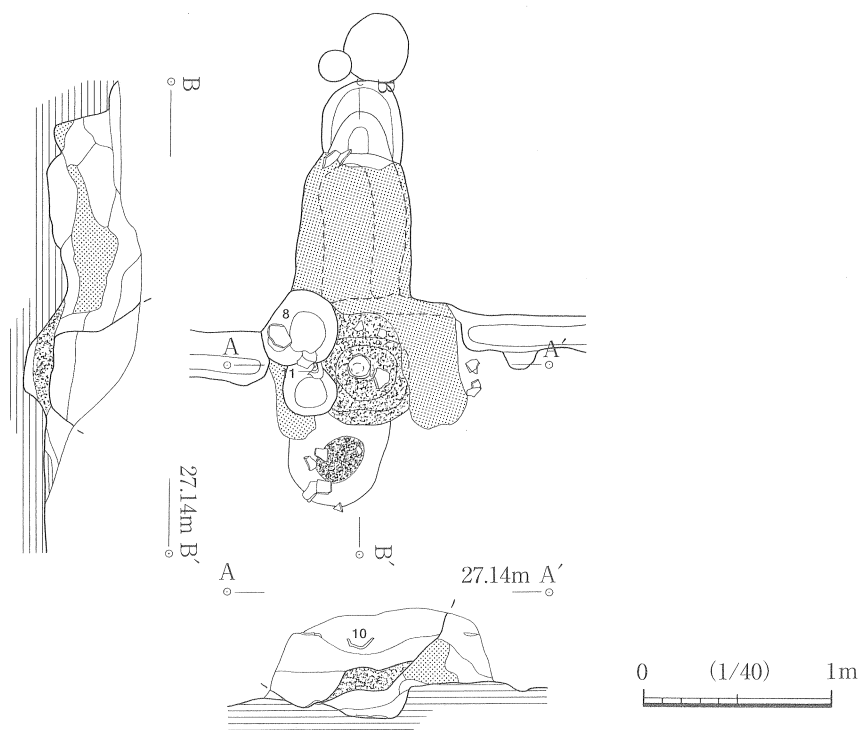
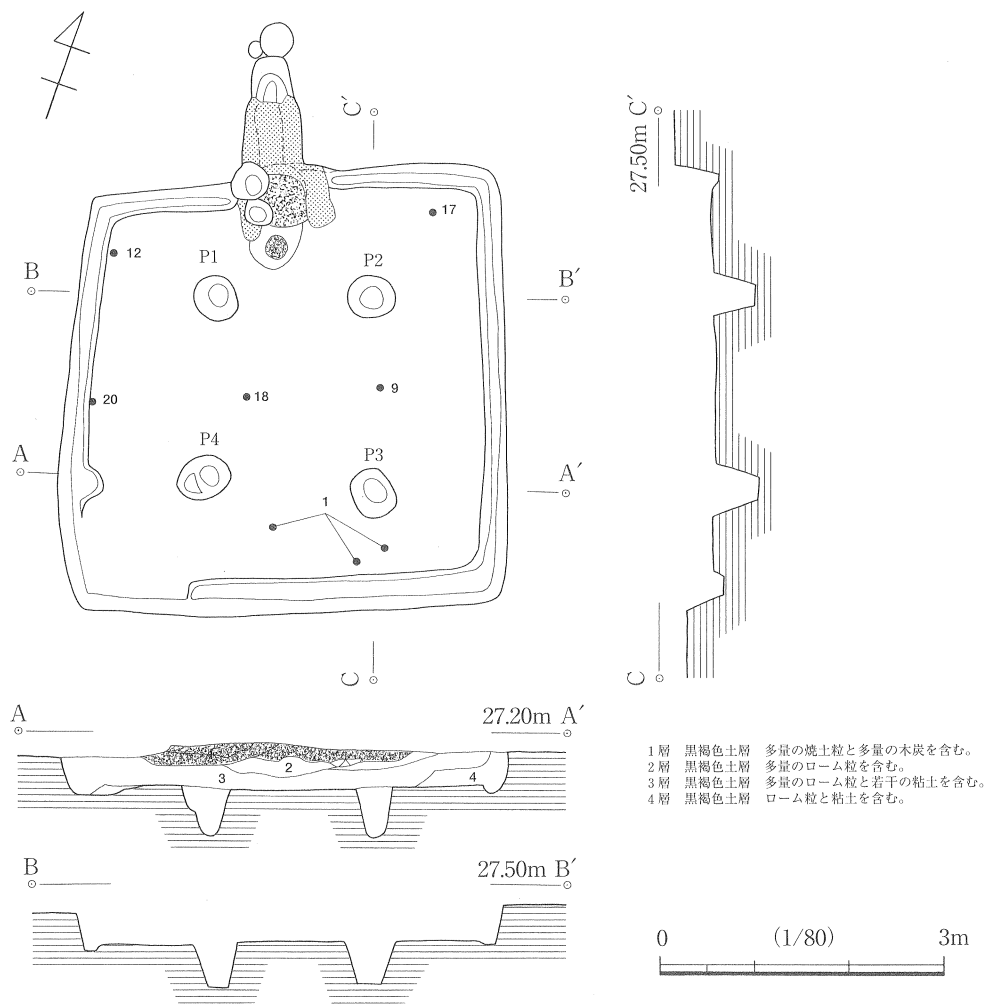
E地区西側中央のD8・E8区に、住居跡南側覆土中に27号住居跡カマド煙道部が構築される。規模は、主軸長4.35m（4.63m）・副軸長4.44m（4.66m）を計測する。主軸方位はN-19°-Wを指向する。平面形は、ほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央より僅かに西側に寄って設けられ、カマド袖部と燃焼部は壁外にやや突出気味に設置され、突出長1.12mを測り、カマド左袖部を後世のピットに掘り込まれ遺存し、カマド構築材には下末吉層の白色粘土を多量に使用している。床面標高は26.58mで、確認面からの深さ40cm程を測る。ピットの深さはP1-48cm・P2-45cm・P3-48cm・P4-48cmを測り、主柱穴はP1・P2・P3・P4の4柱穴である。壁溝は、南西隅で確認できない。覆土上層に焼土を多量に含む人為的に埋め戻された層位が確認できる。

出土遺物は、1は千葉市域産須恵器甕、2は須恵器小型長頸壺、3はロクロ土師器甕、4・5は土師器甕、6は土師器台付甕脚部、7は市原産須恵器坏、8・10・11は糸切りのロクロ土師器坏、9・12は底体部回転篋削りのロクロ土師器坏、13は土師器大型台付鉢の脚部破片、14は内黒ロクロ土師器高台付坏である。15・16は線刻土器で内面底部に「×」を刻む。17は窪み石、18は叩き石である。住居跡の帰属を示す資料は1・9で、2の須恵器小型長頸壺や19の鎌や20の紡錘車などの鉄製品も本跡に伴う遺物であろう。これらの遺物から本住居跡は、稲荷台Ⅰ期の9世紀第1四半期に帰属するものと看取される。

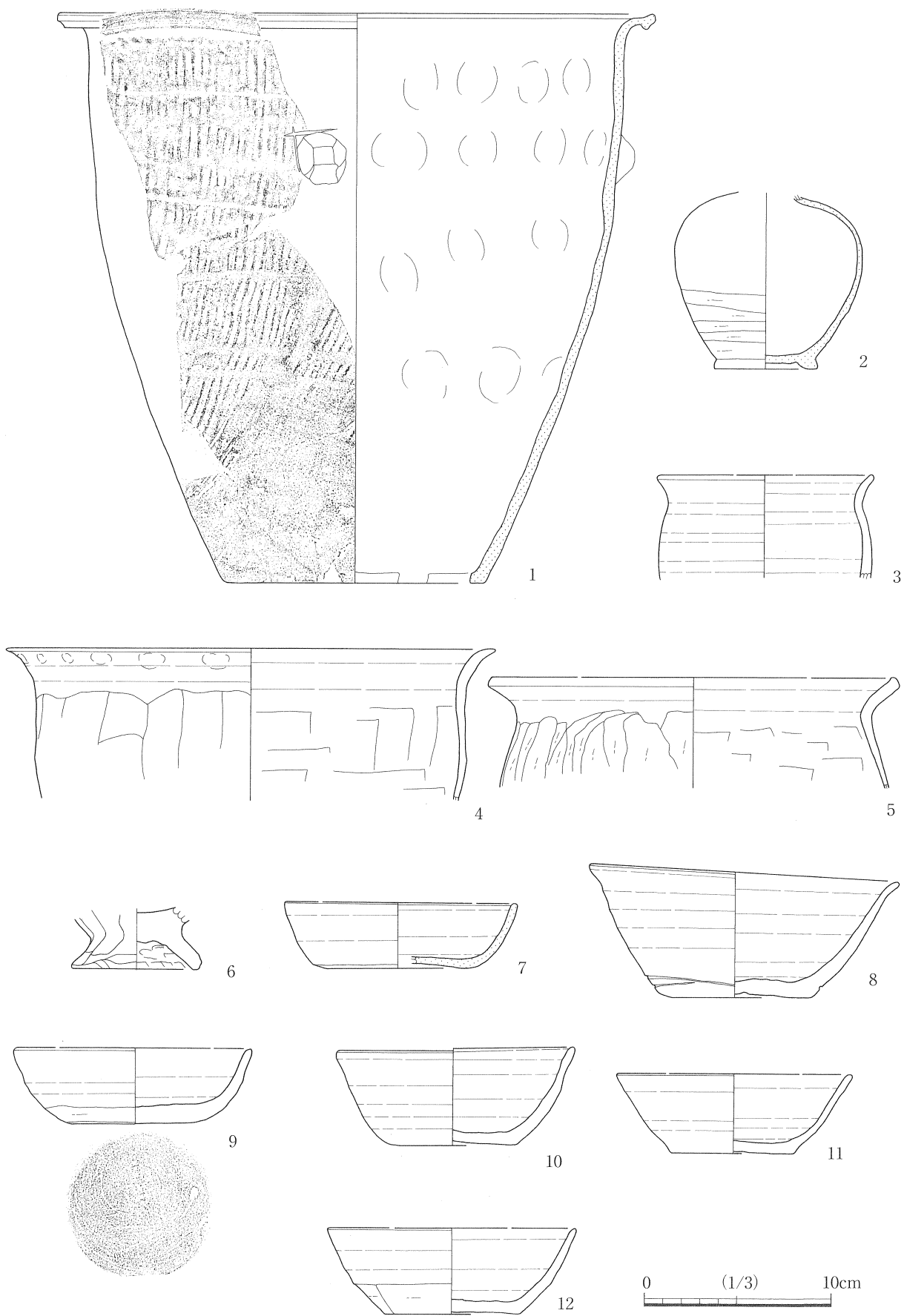
30号住居跡（第76・77図）

E地区西側中央の西E9・E10区に、プラン西側に29号住居跡を隣接して単独で検出する。規模は、主軸長4.12m（4.37m）・副軸長3.94m（4.20m）を計測する。主軸方位はN-95°-Wを指向する。平面形は、僅かに縦長の方形を呈する。カマドは西壁の中央に設けられ、カマド袖部と燃焼部は壁内側に設置され、煙道部突出長1.3mを測り、カマド左袖部を後世のピットによって掘り込まれ遺存し、カマド袖部構築材には下末吉層の白色粘土を使用している。床面標高は26.68mで、確認面からの深さ40cm弱を測る。ピットの深さはP1-50cm・P2-54cm・P3-31cmを測り、主柱穴はP1・P2の2柱穴で、P3は階段ピットであろう。壁溝は、カマド袖下層にも確認でき四周する。覆土中央に焼土と下末吉層の白色粘土を含む人為的に埋め戻された層位が確認できる。

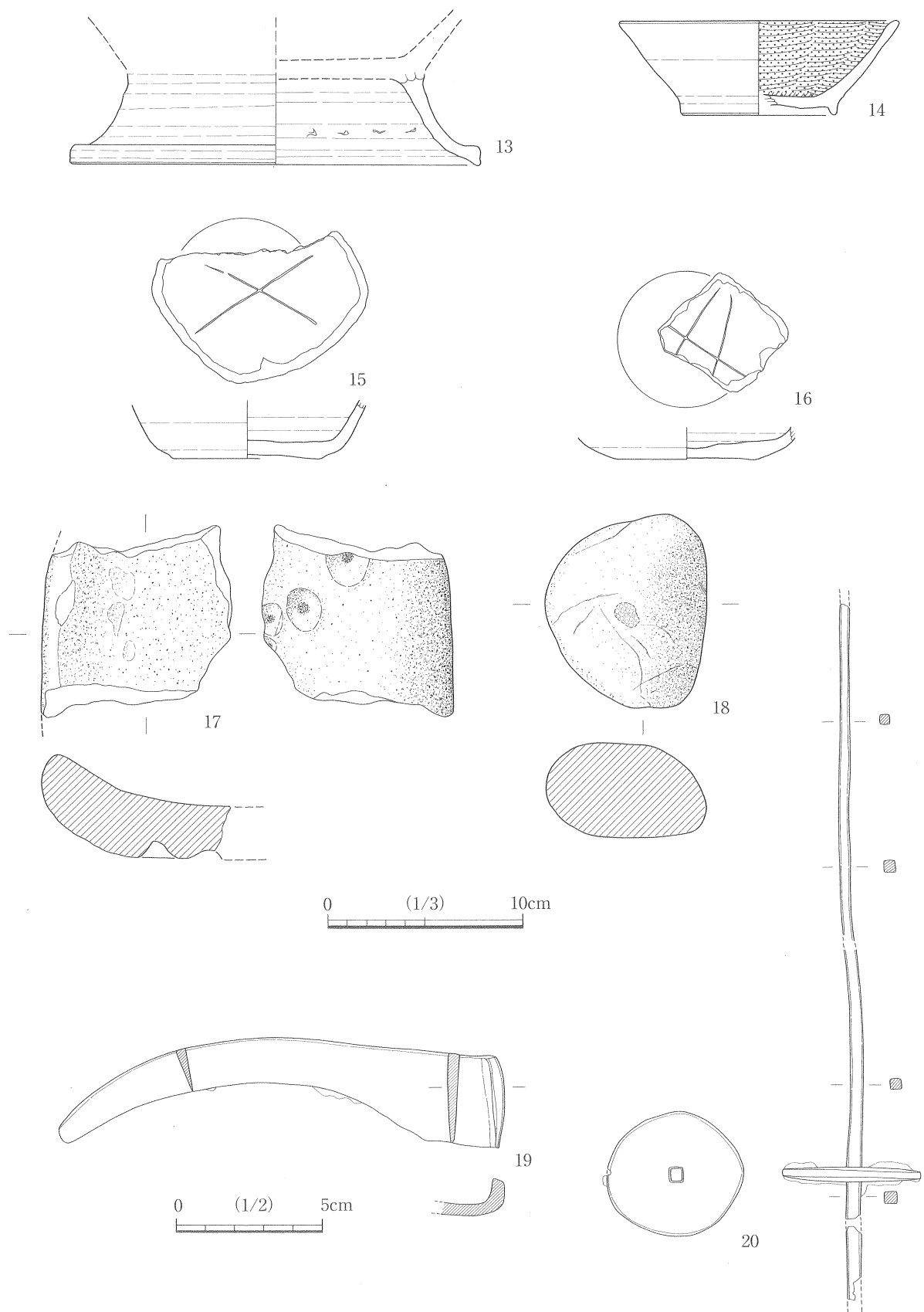
出土遺物は、1は下総産須恵器甕か、2・3は土師器甕、4～13はロクロ土師器、4～9は底体部回転篋削り、10は非在地系（下総産？）で堅く焼き締まった底体部手持ち篋削りのロクロ土師器、11は在地系の底体部手持ち篋削りロクロ土師器坏、12は内黒のロクロ土師器高台付皿で高台は削り出し、回転糸切り→回転篋削りで整形している。13は底体部手持ち篋削り内面ミガキを施し、底部外面に「主」を行書体で書く。14は加工痕跡のある緑泥片岩で床面から出土している。住居跡の帰属を示す明確な資料は、床面やカマド燃焼部から出土した1・5・6・8・9・10・12で覆土中の4・7のロ



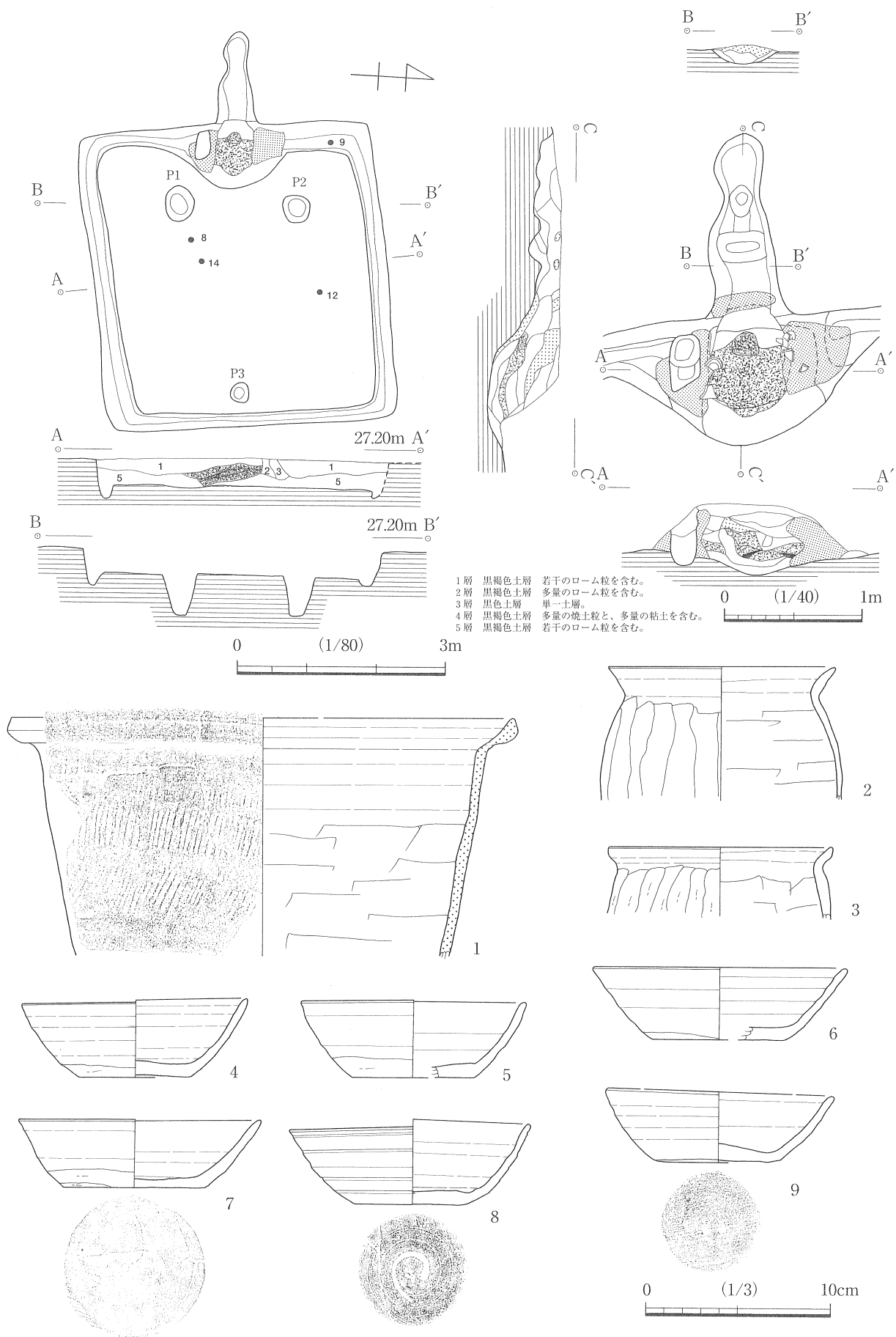
第73図 29号住居跡



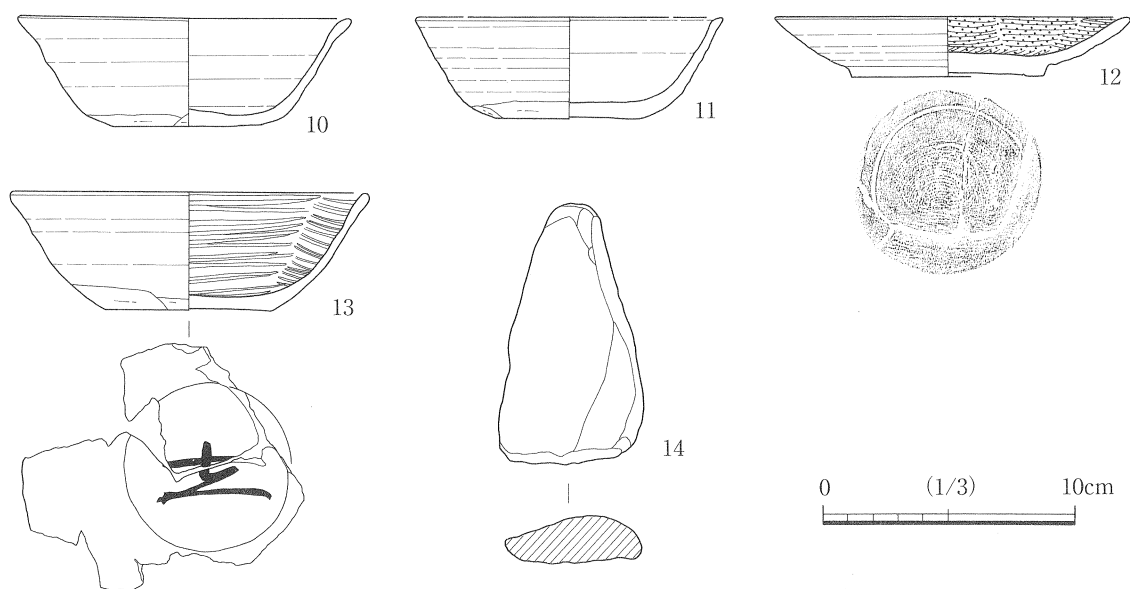
第74図 29号住居跡出土遺物



第75図 29号住居跡出土遺物



第76図 30号住居跡と出土遺物



第77図 30号住居跡出土遺物

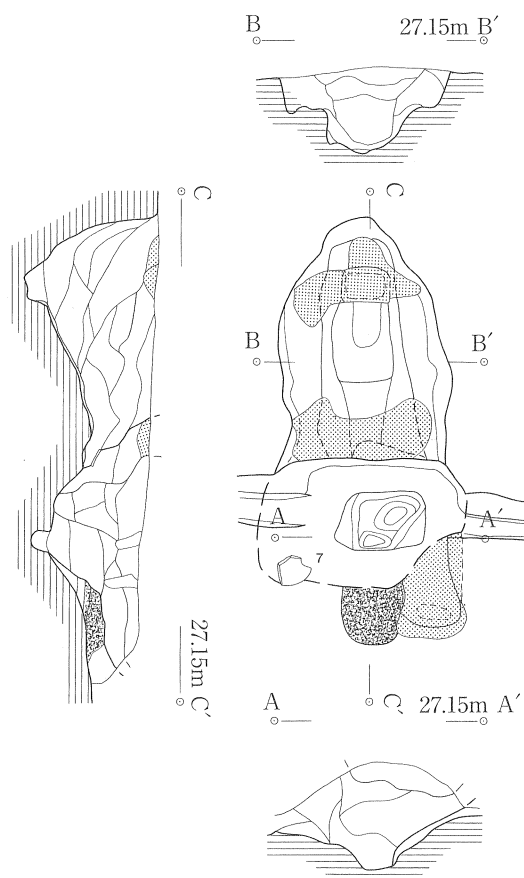
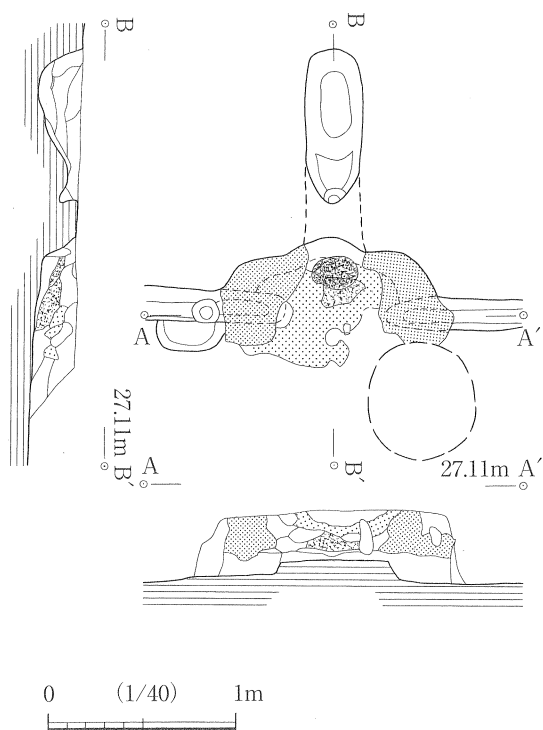
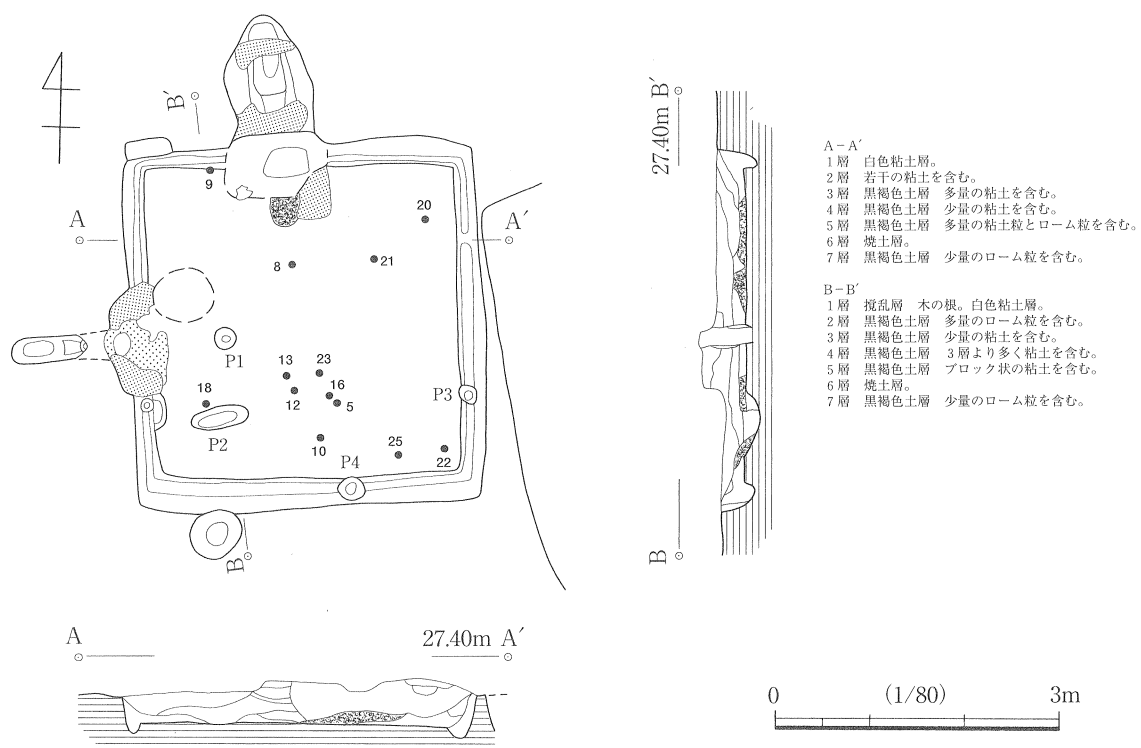
クロ土師器も帰属を示す資料として差し支えないものであろう。これらの出土遺物から本住居跡は、稲荷台Ⅱ期-a~bの9世紀第2~3四半期に帰属するものと看取される。

本住居跡は、計画的な掘立柱建物群の中庭とも言える場所に位置し、掘立柱建物跡と、ある一時期共存関係にあるものと判断される。また、覆土には、焼土堆積層が確認され、遺物は伴なわないものの37号住居跡覆土焼土と同様な祭祀関連に伴うものとも思われる。

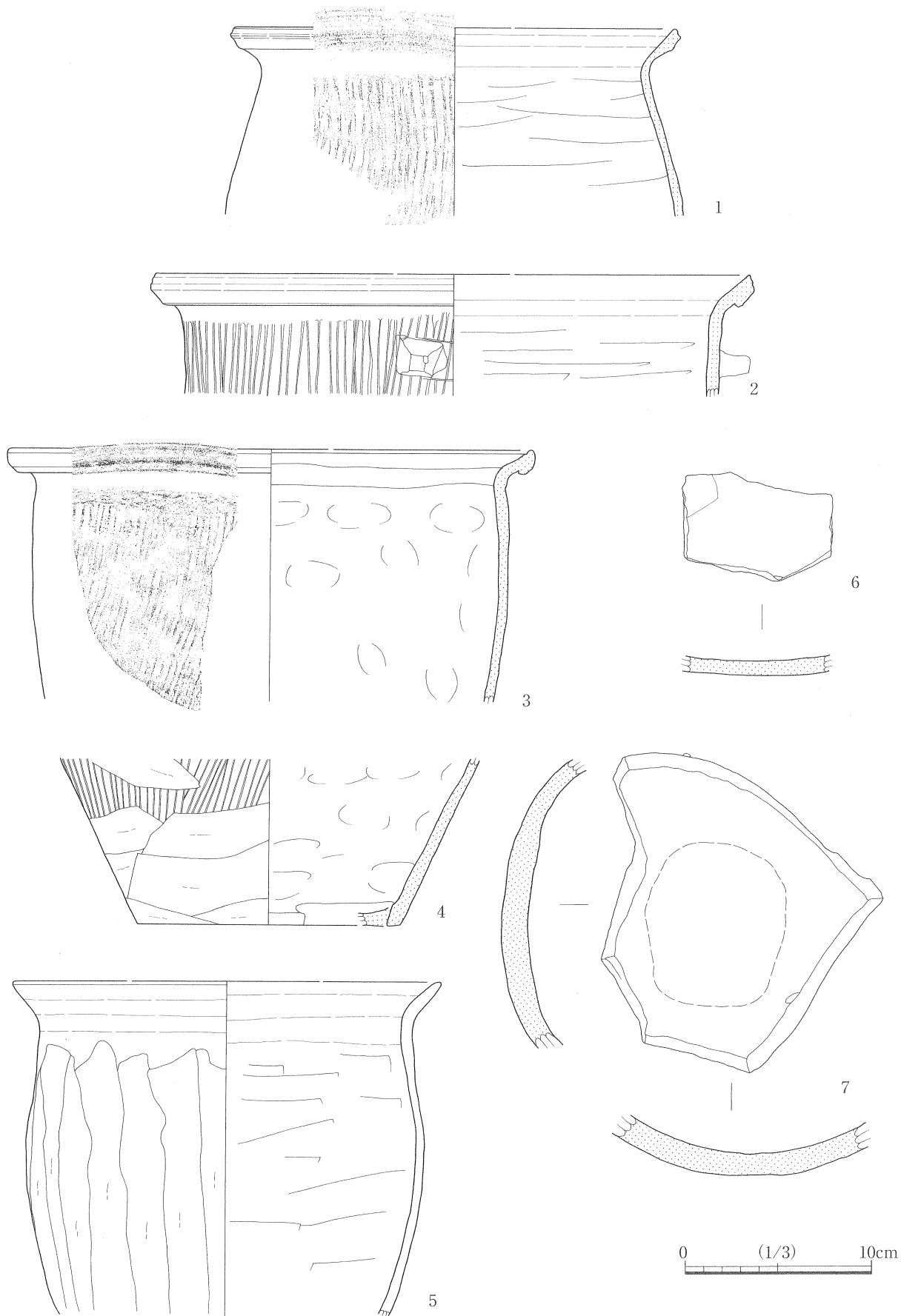
31号住居跡 (第78・79・80図)

E地区西側中央のD7・D8・E7・E8区に、東側に29号住居跡を接して検出する。規模は、主軸長3.56m (3.81m)・副軸長3.53m (3.72m)を計測する。床面積は12.31m²を測る。カマドは北・西の2箇所に設置されるが、北カマドを規準にすると主軸方位はN-5°-Wを指向する。平面形は、均整な正方形を呈する。カマドは北壁の中央よりやや西寄りと西壁中央よりやや南寄りの2基が設けられている。北カマドは燃烧部中央に後世のピットによって掘り込まれ遺存状態が極めて悪いが、燃烧部や袖部は壁の内側でおさまるように設置されている。これに対して西カマドは、袖部や燃烧部が壁外に突出して設けられている。床面標高は26.68mで、確認面からの深さ40cm程を測る。ピットの深さはP1-38cm・P2-15cm・P3-25cm・P4-27cmを測るが、カマド前面のP1は後世のピットであり主柱穴は確認できない。壁溝は、四周して確認される。床面直上から覆土下層に焼土堆積が確認でき火災住居である。また、覆土には人為的な埋め戻しと掘り返しが行われている。

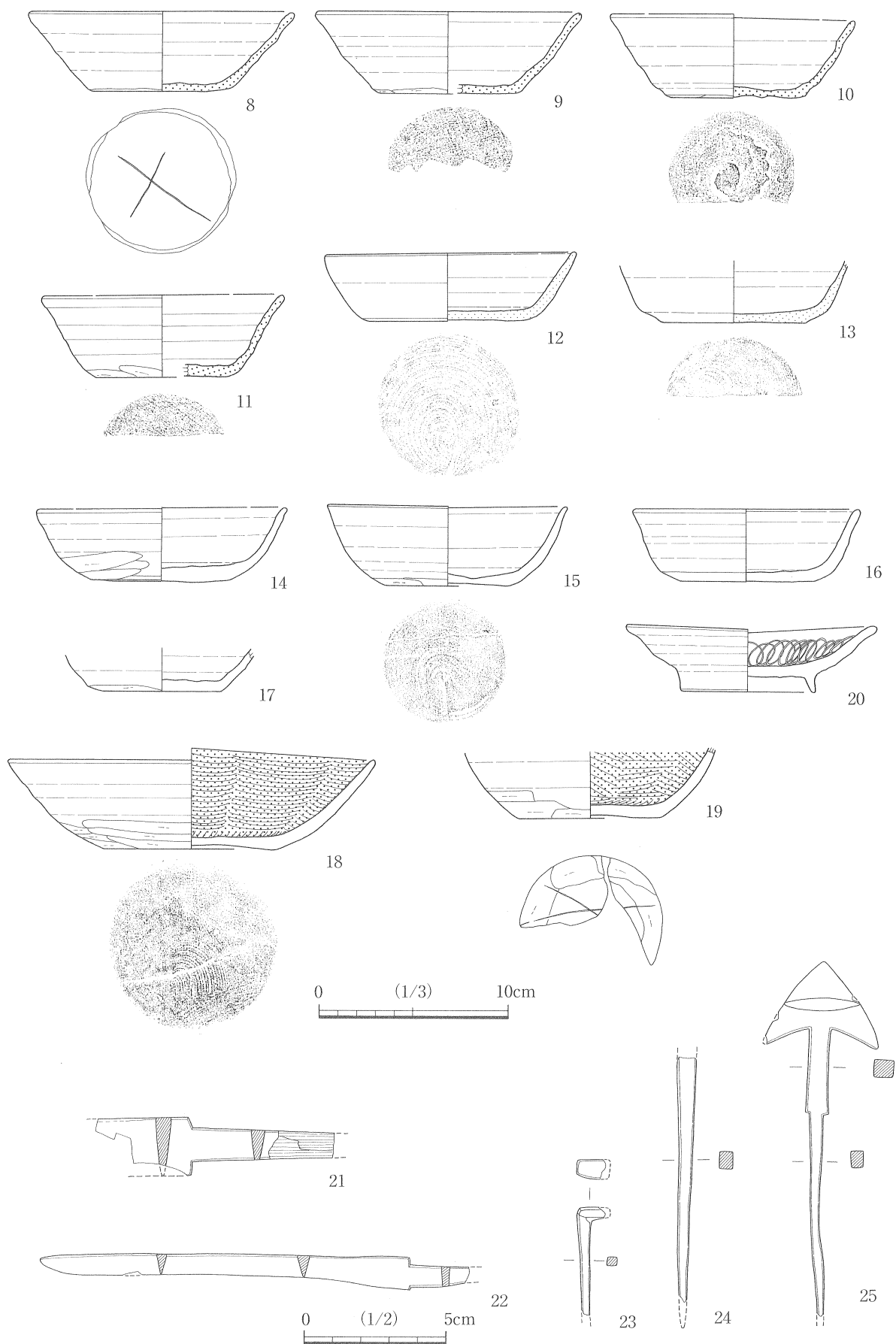
出土遺物は、1は千葉市域産須恵器甕、2・3・4は千葉市域産須恵器甕か、5は土師器甕、6・7は須恵器甕片で中央に研磨痕跡があり転用硯か、8~11は下総産須恵器坏か、12・13は底部回転糸切りの市原産の石川窯須恵器坏、14は手持ち篋削りロクロ土師器坏、15・16・17は回転篋削りロクロ土師器坏。18・19は内黒のロクロ土師器坏である。20はロクロ土師器高台付皿で内面に不規則な螺旋状暗文のミガキを施している。21・22は刀子、23・24は釘、25は鉄鏝である。住居跡と共伴する遺物は、4と15が西カマド燃烧部、9・12・16・22・25が床面もしくはほぼ床面から検出されている。8・10・11・13・14の坏類も共伴する同時期とみなして良い。これらの出土遺物から本跡は、稲荷台Ⅰ



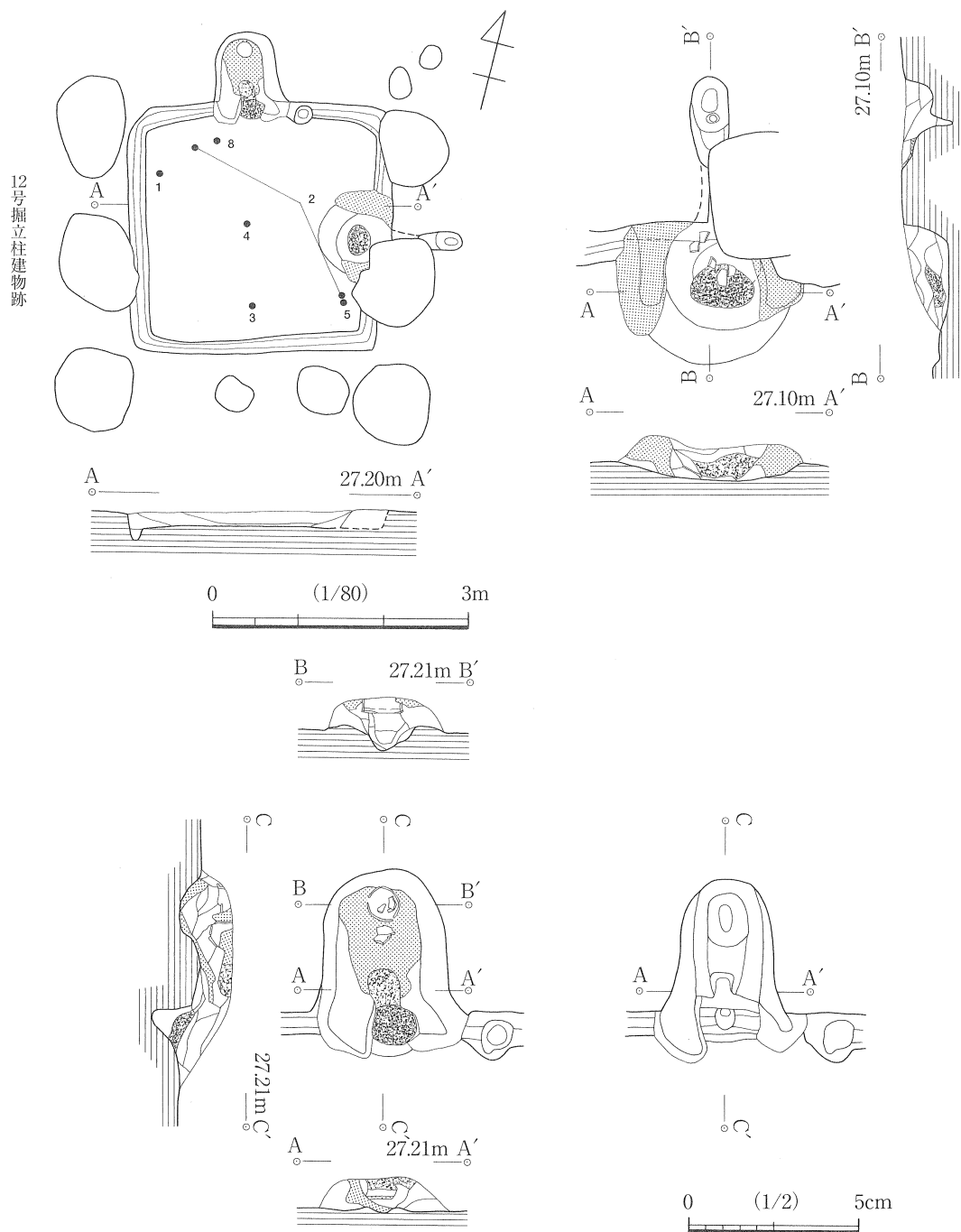
第78図 31号住居跡



第79图 31号住居跡出土遺物



第80図 31号住居跡出土遺物

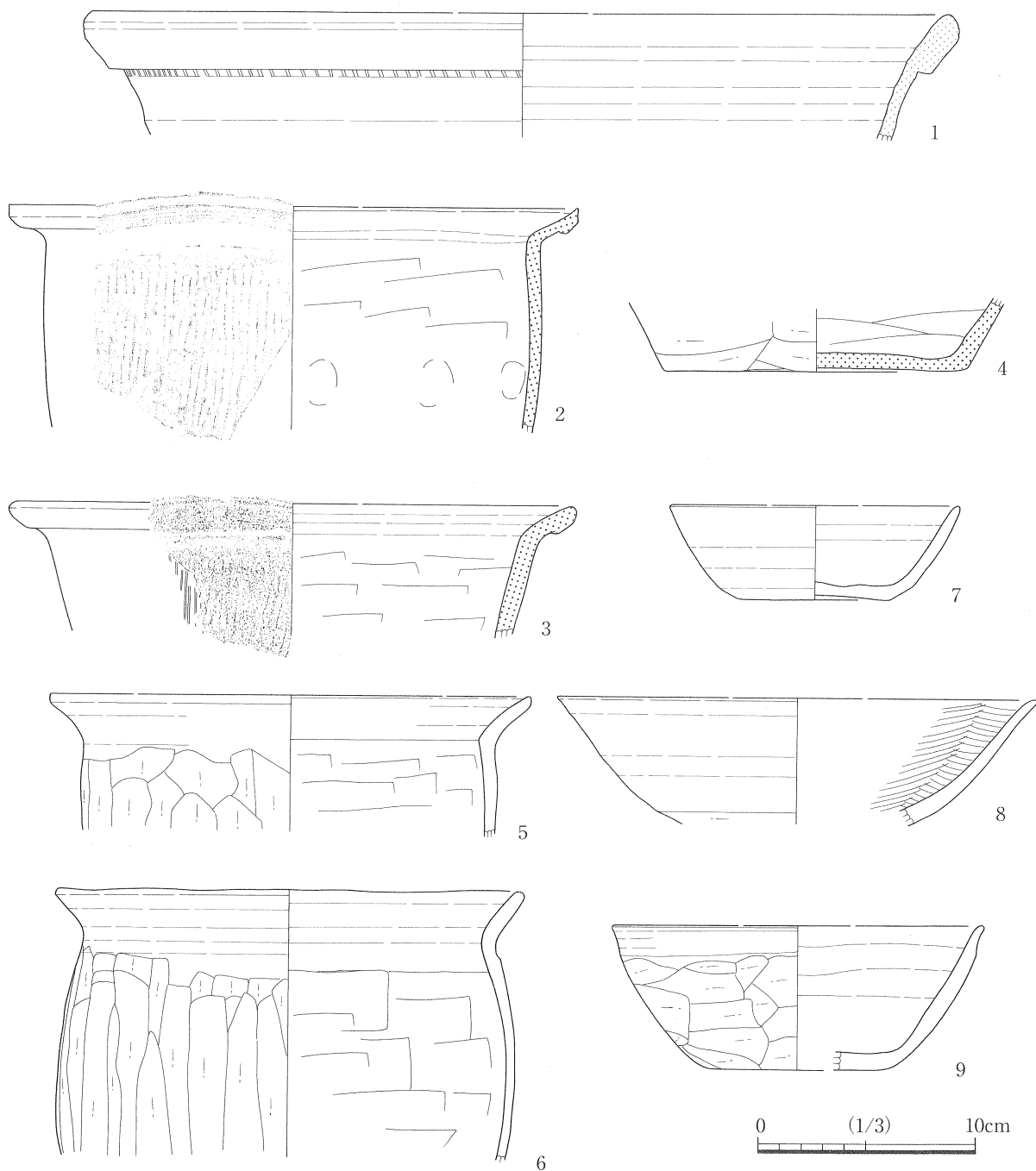


第81図 32号住居跡

期の9世紀第1四半期に帰属するものと看取される。

32号住居跡（第81・82図）

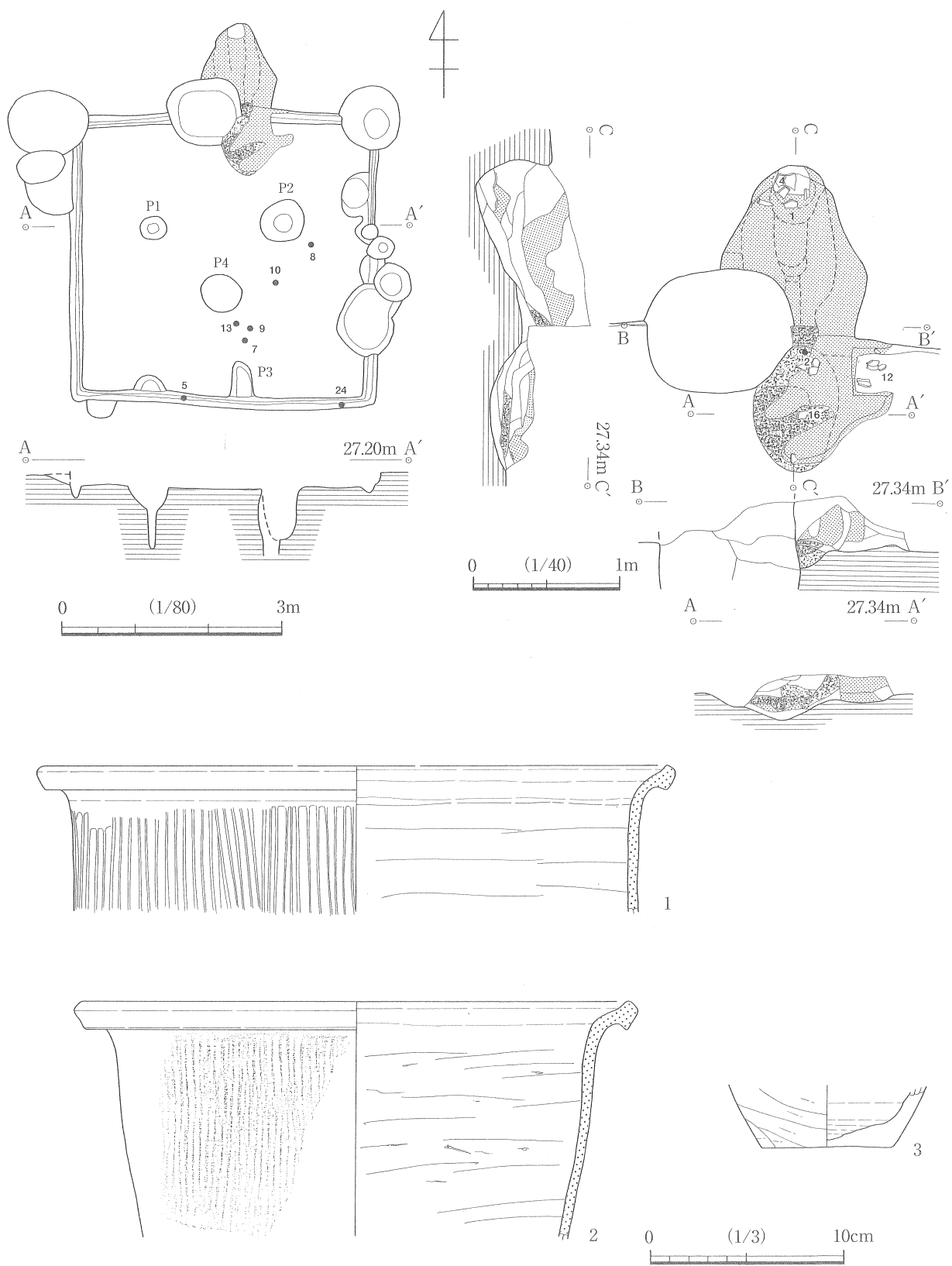
E地区西側中央よりやや東のC8・C9区に、12号掘立柱建物跡プラン内にはほぼ重複し、掘立柱建物跡や覆土南側で5号集石遺構にそれぞれ掘り込まれ検出する。規模は、主軸長2.80m（2.94m）・副軸長2.86m（3.06m）を計測する。床面積は7.79m²を測る。カマドが北・東の2箇所を設置されるが、北カマドを規準にすると主軸方位はN-15°-Wを指向する。平面形は北壁辺がやや張り気味であるが、ほぼ均整な正方形を呈する。カマドは北壁中央よりやや西寄りと東壁中央よりやや南寄りの2基が設けられている。北カマドは煙道部が逆U字形に突出し、袖部はロームを掘り残し燃焼部は壁



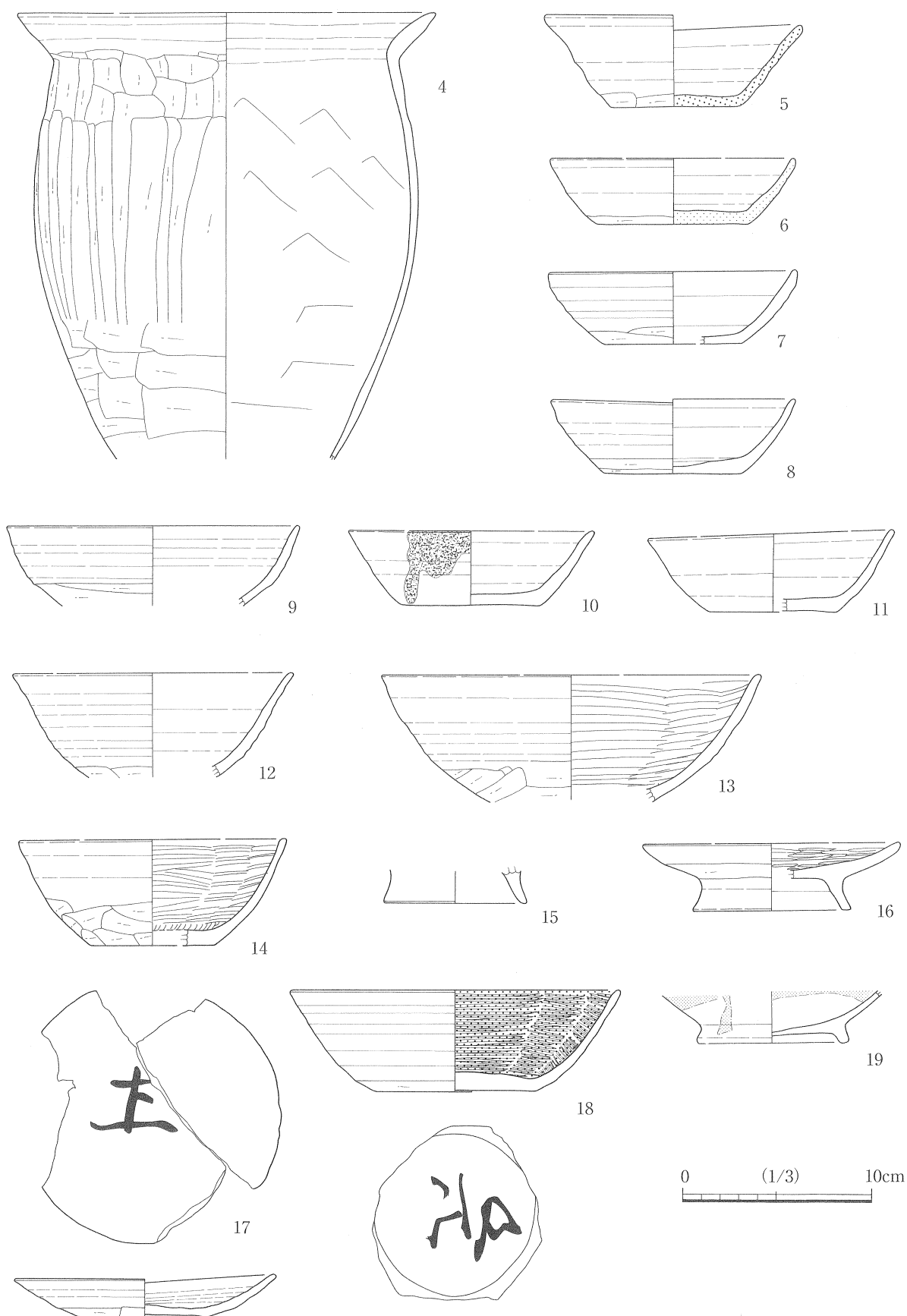
第82図 32号住居跡出土遺物

寄りに寄って構築されている。東カマドは煙道部と左袖部を12号掘立柱建物跡掘方に掘り込まれ遺存し、袖部と燃烧部は床面におさめて構築される。床面標高は26.80mで、確認面からの深さ20cm程を測る。床面にはピットは無く支柱穴は確認できない。壁溝は、四周して確認される。覆土はレンズ状の堆積を示すが上面にはロームブロックを含み人為的に埋め戻された状況を示すものである。

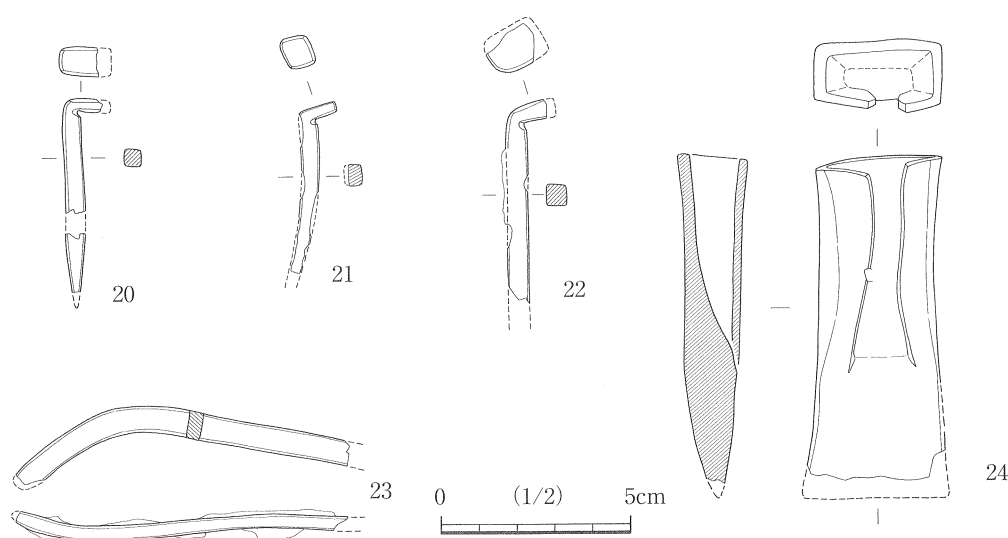
出土遺物は、1は須恵器甕口縁破片、2・3・4は千葉市域産須恵器甕か、5・6は土師器甕、7はロクロ土師器坏、8は硬く焼締まり内面光沢のある洗練されたミガキを施したロクロ土師器大形坏である。9は体部および底面手持ち篋削りの土師器坏である。住居跡と共伴する遺物は、6が北カマド煙道部補強材に使用され、5・8は床面から出土している。これらの出土遺物から本跡は、稲荷台



第83図 33号住居跡と出土遺物



第84図 33号住居跡出土遺物



第85図 33号住居跡出土遺物

I期～II期-aの9世紀第1～2四半期に帰属するものと看取される。

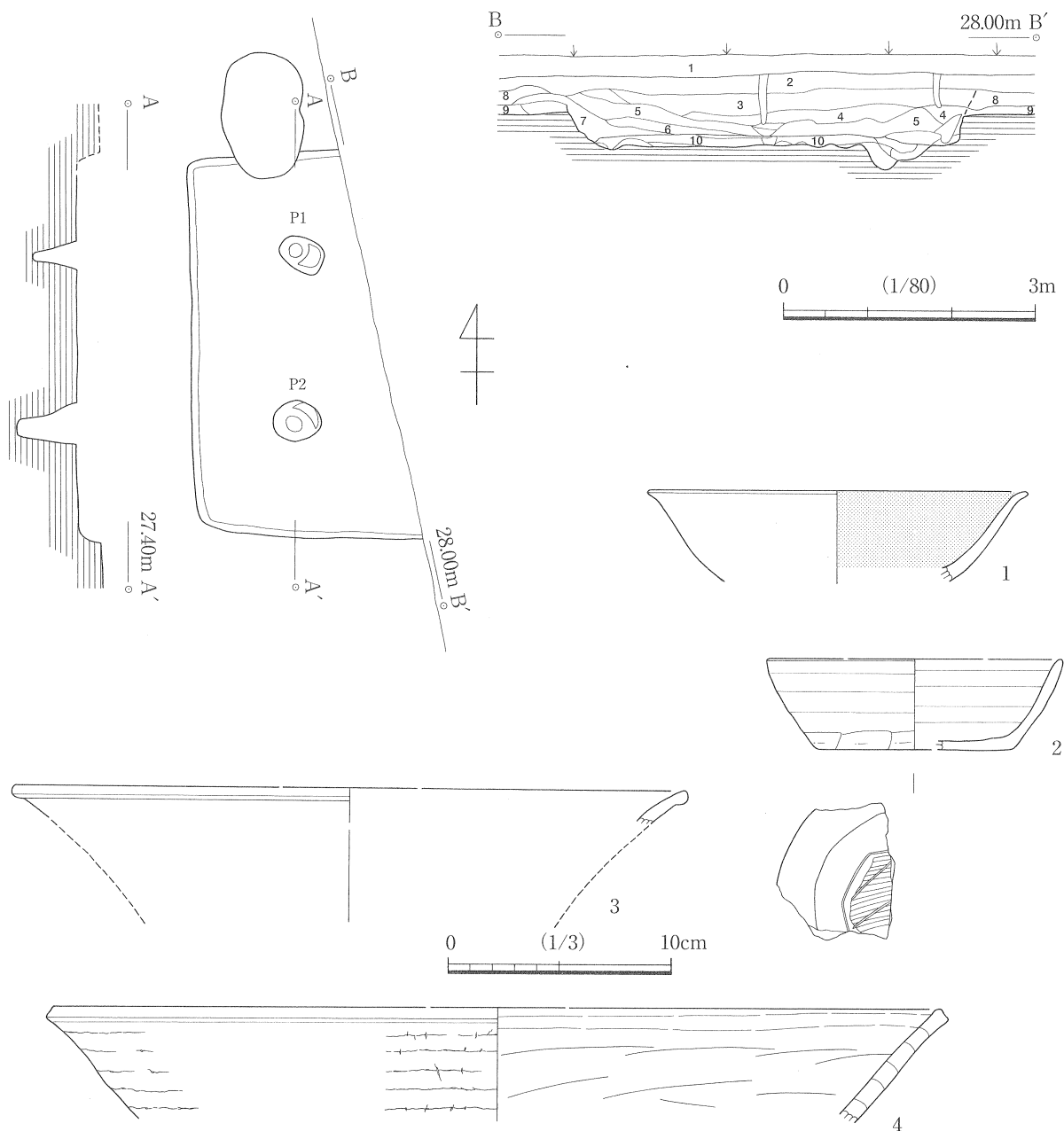
33号住居跡（第83・84・85図）

E地区西側北東端のA10区に6号掘立柱建物跡に掘り込まれ検出する。規模は、主軸長4.0m（4.06m）・副軸長4.04m（4.16m）を計測する。床面積は15.72m²を測る。カマドが北壁中央に設置されるが、左袖を大きく柱掘方に掘り込まれ遺存し、煙道部突出長1.25mで、煙道部天井は下末吉層の白色粘土に覆われている。主軸方位はN-1°-Eを指向する。平面形は均整な正方形を呈している。床面標高は26.80mで、確認面からの深さ20cm程を測る。ピットの深さは、P1-78cm・P2-68cm・P3-27cm・P4-30cmを測り、支柱穴P1とP2の2柱穴で、南壁溝から伸びる溝状のP3は階段ピットのように看取され、P4は後世のピットである。壁溝は、四周して確認できる。

出土遺物は、1・2は千葉市域産須恵器甕か、3はロクロ土師器甕底部片、4は土師器甕、5は千葉市域産須恵器杯、6は市原産須恵器杯、7～10は回転篋削りのロクロ土師器杯、11は糸切りロクロ土師器杯、12～13は底部部手持ち篋削りで13・14は内面ミガキを施す。15・16は高台付皿、17は回転篋削りのロクロ土師器皿で内面に「主」の墨書がある。18は底部に「□」字か記号の墨書がある。19は猿投産灰釉陶器碗で施釉は漬け掛けである。20・21・22は釘、23はクサビ状製品かクルルであろうか。24は袋状鉄斧である。住居跡と共伴する遺物は、1・2・4がカマド煙道部や燃焼部で、5・7・8・9・10・24が床面直上やほぼ床面から出土している。これらの出土遺物から本住居跡は、稻荷台I～II期-aの9世紀第1～2四半期に帰属するものと看取される。

34号住居跡（第86図）

E地区西側北東端のA11・B11区に、北壁を6号掘立柱建物跡に掘り込まれ、プラン東側半分を調査区域外に大きく置いて検出する。カマド位置が不明であるが北カマドと想定すると主軸方位はN-2°-Wを指向し、主軸長4.45m（4.59m）を測り副軸長は不明となる。平面形は均整な方形を呈するものであろう。床面標高は26.80mで、確認面からの深さ35cm程を測る。ピットの深さは、P1-55cm・P2-70cmを測り何れも支柱穴となり、本来の支柱穴は4柱穴であろう。壁溝は、調査箇所では明確に確認できないが、土層B-B'では僅かに確認できる。床は張り床である。

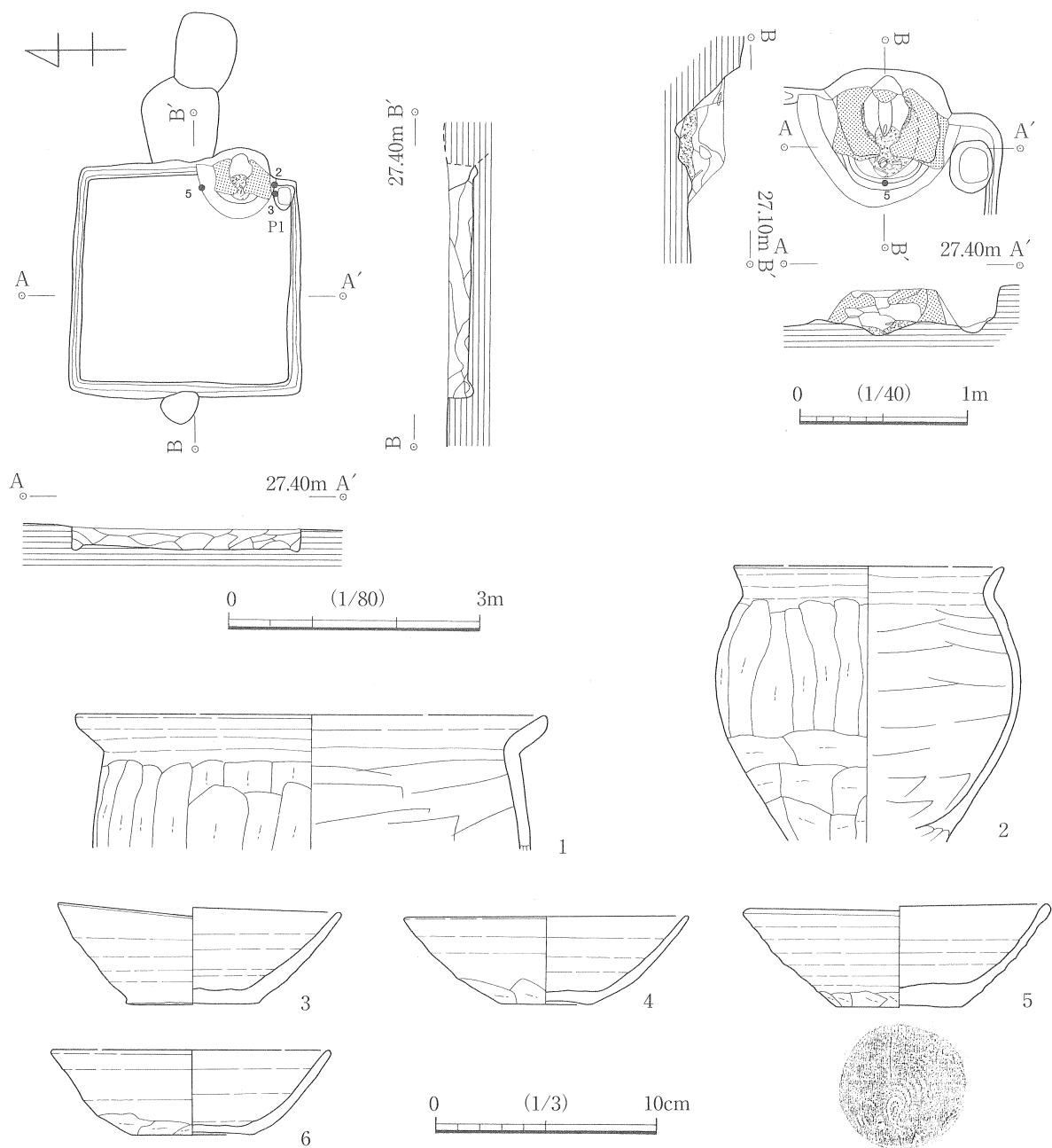


第86図 34号住居跡と出土遺物

土層 B-B' は表土からの土層図であるが、地表面標高は27.80m、住居跡掘り込み標高は27.40m、床面標高は26.80m で張り床下部の住居跡当初の掘り込み標高は10cm 程低く26.70m である。

1 層－表土層。2 層－黒褐色土層。3 層－暗黒褐色土層。4 層－黒色土層で若干のローム粒を含む。5 層－黒色土層でローム粒を多量に含む。6 層－暗灰褐色土層で焼土粒や木炭を含む。7 層－黒色土層で褐色土ブロックを含む。8 層－黒褐色土層。9 層－暗茶褐色土層でソフトローム直上土層。10 層－暗褐色土層でロームブロックを含み硬質土で張り床部土層。

本住居からの出土遺物は僅かで、住居に共伴する明確な遺物は無い。1 は猿投産灰釉陶器埵口縁部で内面釉は厚く、腰部は篋削りを布ナデで消し坂野Ⅱ期古相を呈するものである。2 はロクロ土師器坏で底体部手持ち篋削りされた底外面は静止糸切り痕を残し焼成後の線刻がある。3・4 は土師器大形台付鉢の口縁の破片で4 の口縁推定径は40cm を計る。何れの遺物も覆土上層で時期を極めるもの



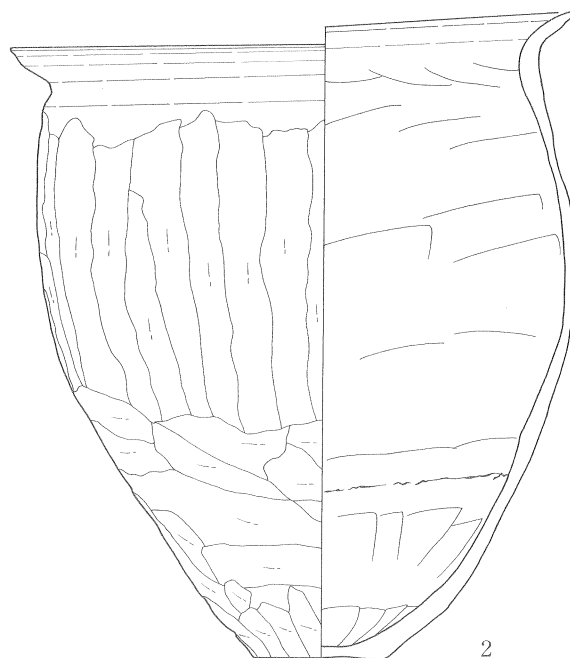
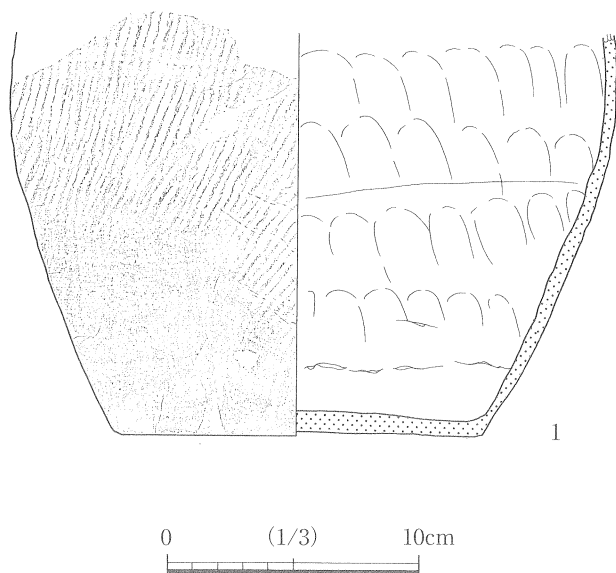
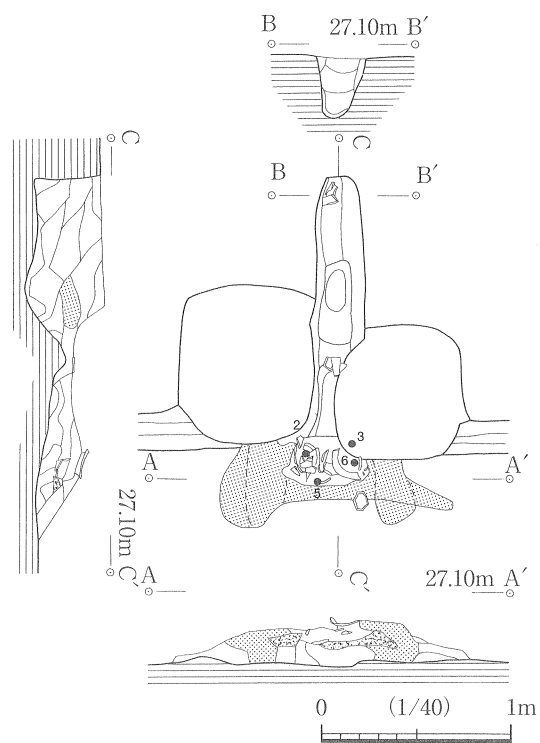
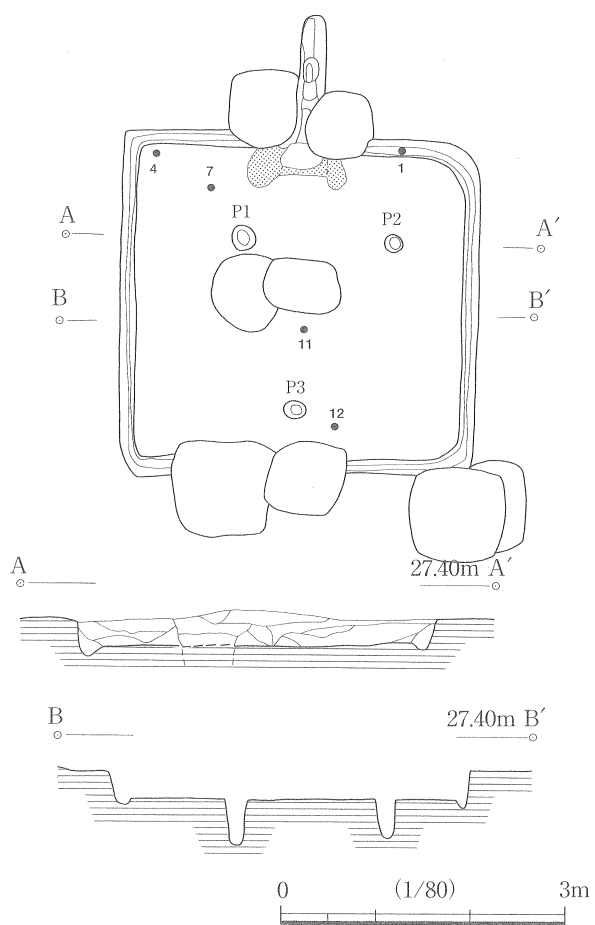
第87図 35号住居跡と出土遺物

ではないが、稲荷台Ⅱ期-aの9世紀第2四半期の所産と思われる。

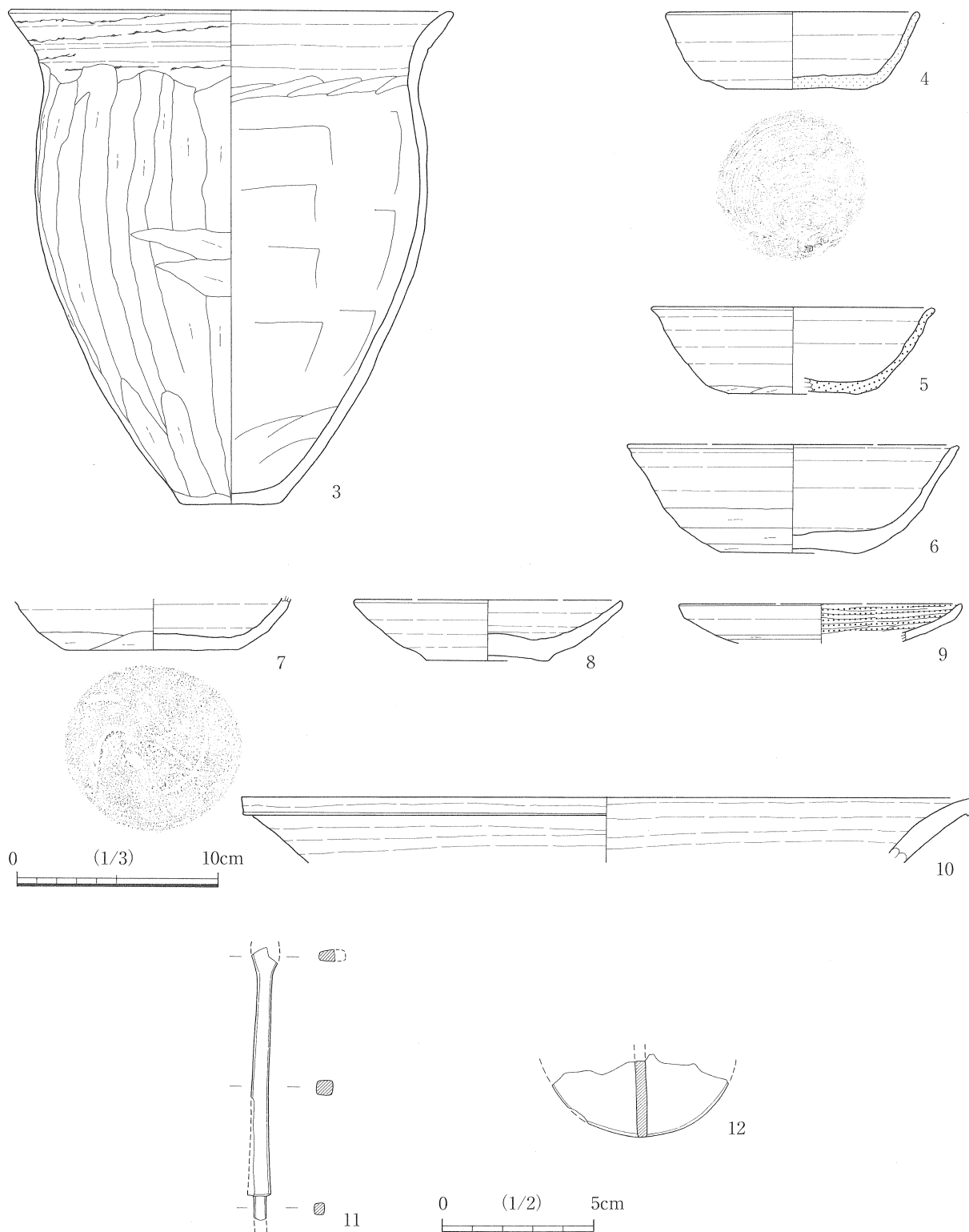
35号住居跡（第87図）

E地区西側北東端のB10・C10区に、東壁にⅡ期-bの13号掘立柱建物跡柱掘方が接して検出する。規模は、主軸長2.66m（2.79m）・副軸長2.6m（2.70m）を計測する。床面積は6.72m²を測る。カマドは東壁の南東隅に接して設置され、袖部や燃焼部は床面内でおさまり、煙道部は僅かに突出するだけである。主軸方位はN-92°-Eを指向する。平面形は西壁長と東壁長が20cm程異なるためやや均整を欠く正方形を呈している。床面標高は26.86m、確認面からの深さ20cm程を測る。ピットはP1で10cm程を測るだけで無柱穴である。壁溝はカマド左袖から出て南東隅まではほぼ四周する。

出土遺物は、1・2は土師器甕、3～6はロクロ土師器坏である。ロクロ土師器は3が回転糸切り、



第88図 36号住居跡と出土遺物



第89図 36号住居跡出土遺物

4・5・6は底体部手持ち笥削りを施し、底径の縮小傾向がよりいっそう進んでいる。住居跡に明確に共伴する遺物は、2・3が床面、5がカマド燃焼部と床面直上から出土している。これらの遺物から本住居跡は、稻荷台Ⅳ期の10世紀第2四半期に帰属するものと看取される。また、13・14号掘立柱

建物跡と接して検出されることは、本住居跡の機能する時期には13・14号掘立柱建物跡はその機能を果たしていないこととなり、このことはⅡ期-a～bの西側に規則的に配列された掘立柱建物跡群もその機能を終えていることが指摘できる。

36号住居跡（第88・89図）

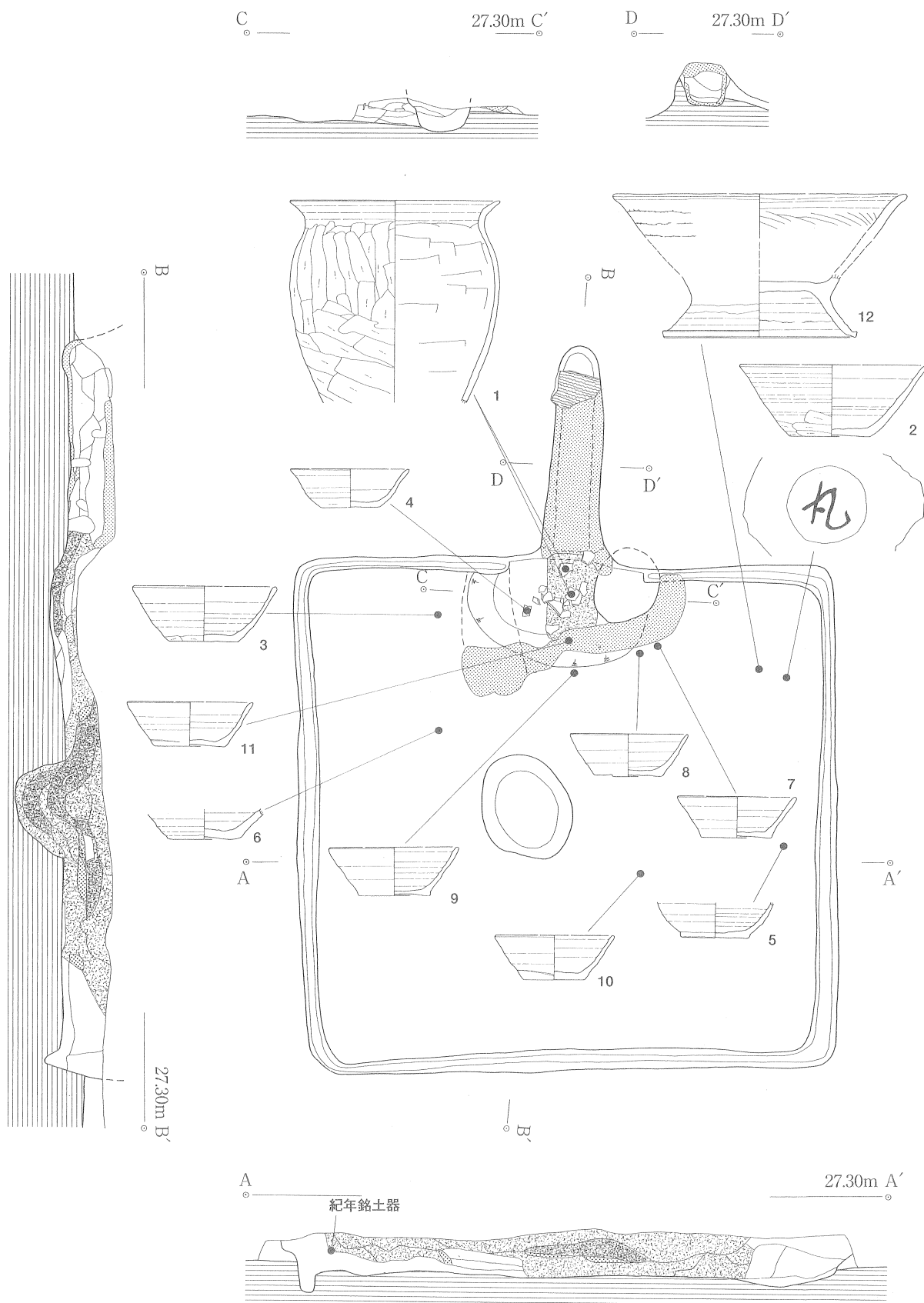
E地区西側東端のC10・C11区に、13号→14号の両掘立柱建物跡に掘り込まれ検出する。規模は、主軸長3.44m（3.56m）・副軸長3.61m（3.75m）を計測する。床面積は12.24m²を測る。カマドは北壁中央に設置されるが、袖と煙道の一部を柱掘方に掘り込まれ遺存する。煙道部突出長1.30mで、袖部は下末吉層の白色粘土で覆われている。主軸方位はN-7°-Wを指向する。平面形は北東隅が他の隅より丸身を有し僅かに横長の均整な方形を呈している。床面標高は26.76mで、確認面からの深さ30cm程を測る。ピットの深さは、P1-50cm・P2-45cm・P3-48cm・P4-50cm程を測り、主柱穴はP1とP2の2柱穴で、P3は階段ピットであろう。壁溝は、四周して確認できる。覆土は埋め戻された状況を示すものである。

出土遺物は、1は千葉市域産須恵器甕、2・3は土師器甕、4は市原産でも石川産須恵器坏、5は千葉市域産須恵器坏、6は体部上方まで回転篋削りを施したロクロ土師器坏、7は底径8.7cmのロクロ土師器坏、8は糸切りロクロ土師器坏、9は内黒のロクロ土師器皿であろうか。10はシャープなコの字状口縁の土師器大型台付鉢口縁破片、11は鉄鏃、12は円盤状の鉄製品。住居跡と共伴する遺物は、2・3・5・6がカマド燃焼部で、1・7が床面直上から出土し、4の須恵器坏も同等に扱って差し支えない物であろう。これらの出土遺物から本住居跡は、稲荷台Ⅰ～Ⅱ期-aの9世紀第1～2四半期に帰属するものと看取される。

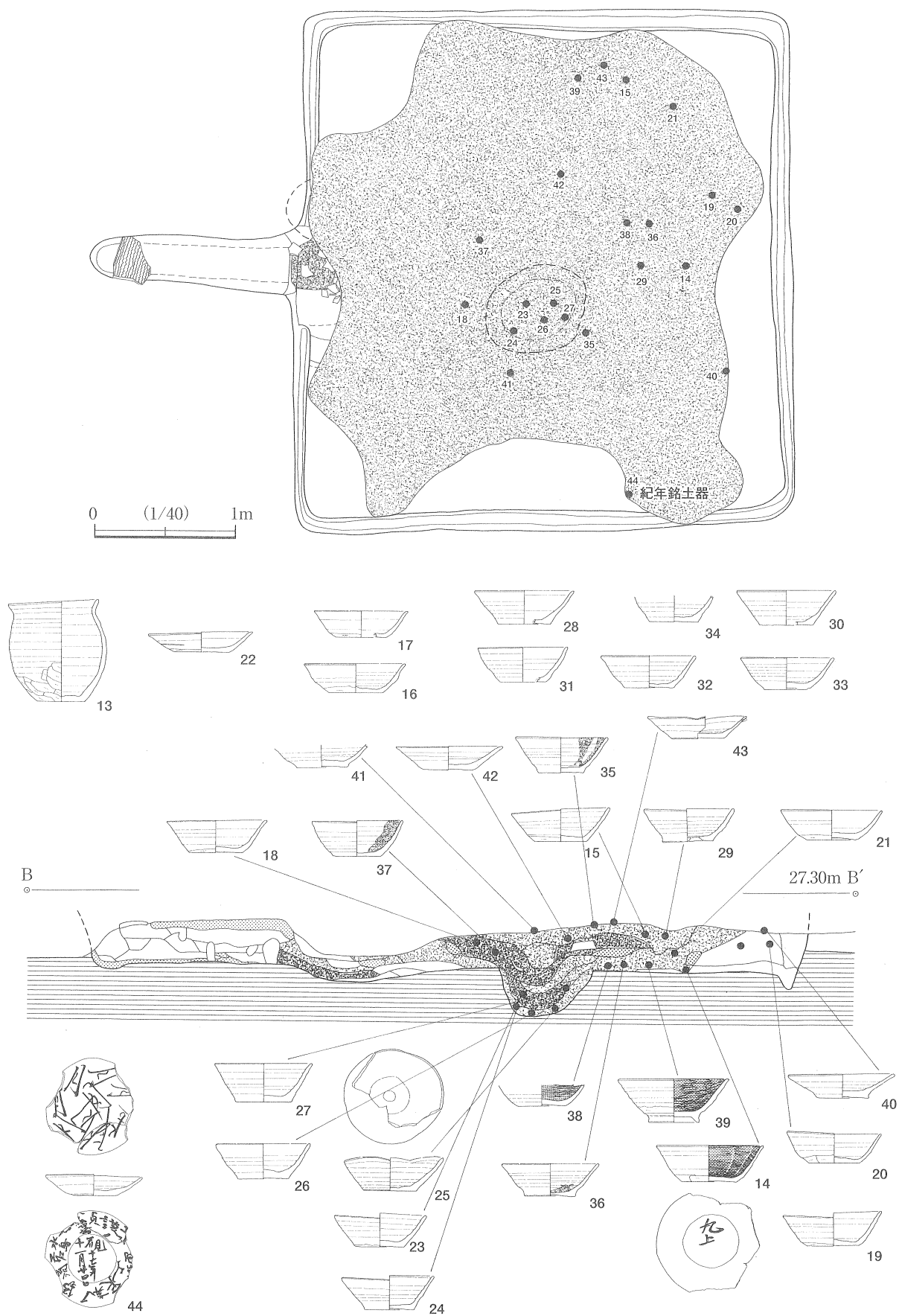
37号住居跡（第90～96図）

E地区西側南端のI7・I8・J7・J8区に単独で検出する。規模は、主軸長3.40m（3.52m）・副軸長3.62m（3.70m）を計測する。床面積は12.28m²を測る。カマドは北壁中央に設置されるが、左右の袖部が住居廃絶直後に壊されている。煙道部は長く突出し突出長1.50mを測り、煙道部天井は下末吉層の白色粘土で覆われ、先端は平瓦で補強している。主軸方位はN-0°を指向する。平面形は、北壁長3.72m・東壁長3.45m・南壁長3.63m・西壁長3.58mと各壁長が異なるが僅かに横長の方形を呈している。床面標高は26.74mで、確認面からの深さ30cm程を測るが、ソフトロームへの掘り込みは10cm程を測るだけである。主柱穴は無く、壁溝はカマド両袖から出て四周する。覆土は層を成す多量の焼土と灰によって形成され、ロクロ土師器坏を主体に100固体ほどの遺物が検出された。この覆土の焼土層は住居跡廃絶後の窪みを利用したのでは無く、新たに火を焚くために人為的に掘りこまれたものと看取される。これは土層A-A'の東と西の焼土堆積の壁面が垂直に近い壁面を有することから言える。この焼土の堆積は、住居跡プラン内全体に厚さ30cm以上の堆積があり尋常なあり方では無く、連続して火を焚くこと（護摩）によって生じたものであろうか。また、この焼土は住居跡床面のほぼ中央に75cm×60cm、深さ35cmのピットを伴い、ピット中にも焼土が層を成して充満し、中からは土器も検出され、ただ火を焚くためでないことが察せられる。この焼土が堆積する掘りこみの西南壁面から「貞観十七年十一月廿四日」銘の紀年銘墨書土器が出土している。

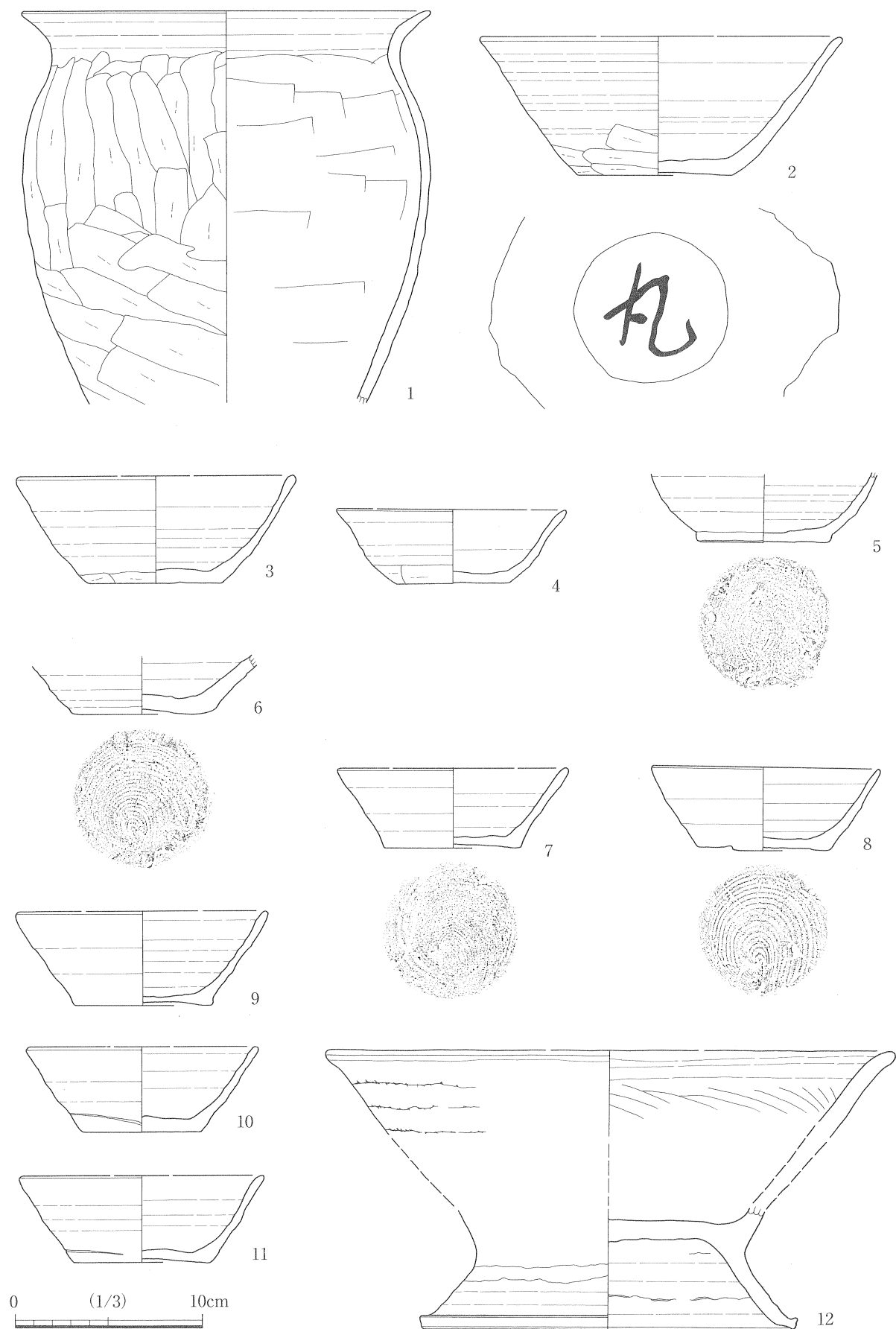
住居跡に共伴する遺物は、1～12で床面直上やほぼ床面から出土するものと判断される遺物で覆土の遺物とは分けられるものである。1は土師器甕、2は推定口径19.2cm、高さ8.1cm、底径7.4cmの



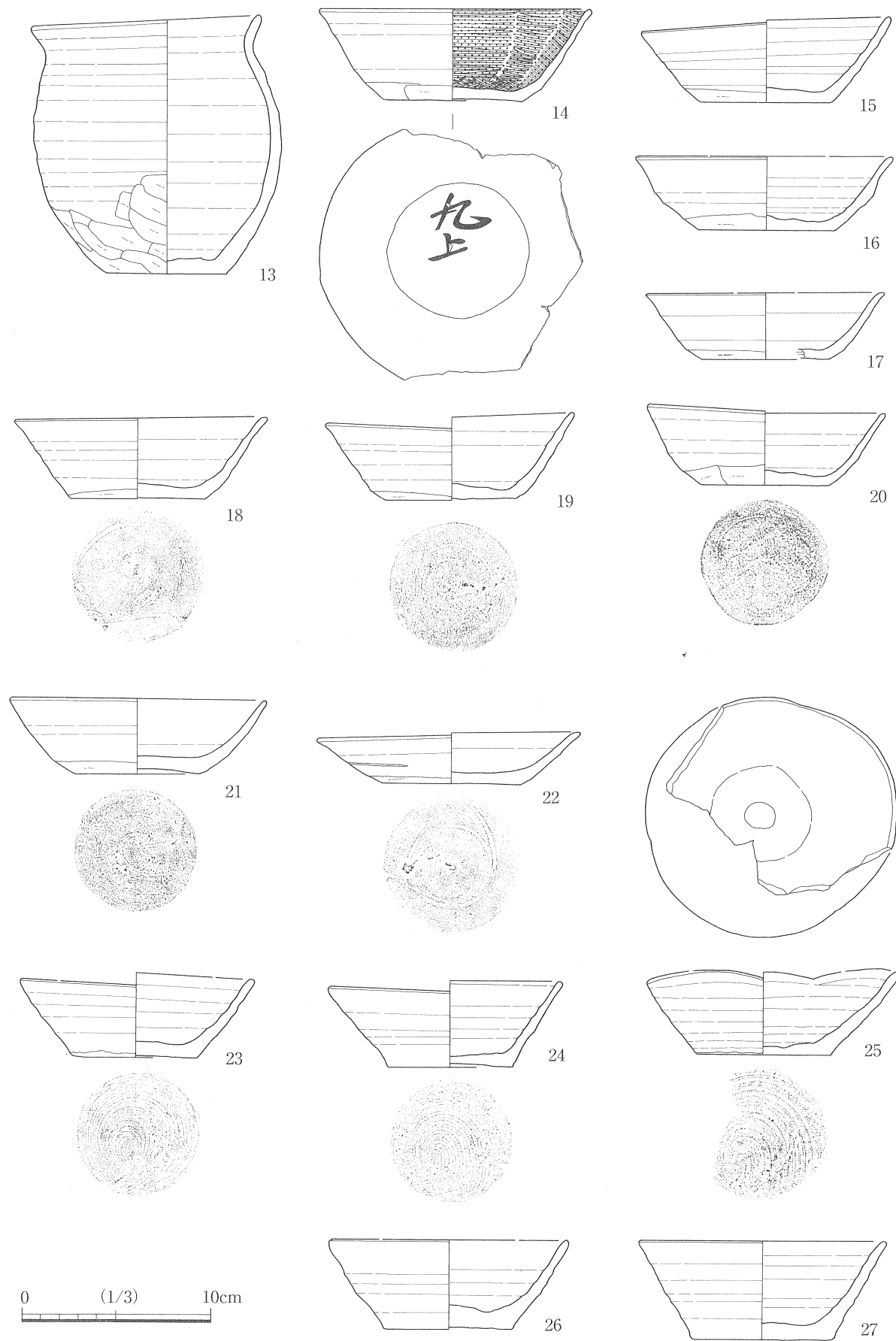
第90図 37号住居跡と遺物出土状況



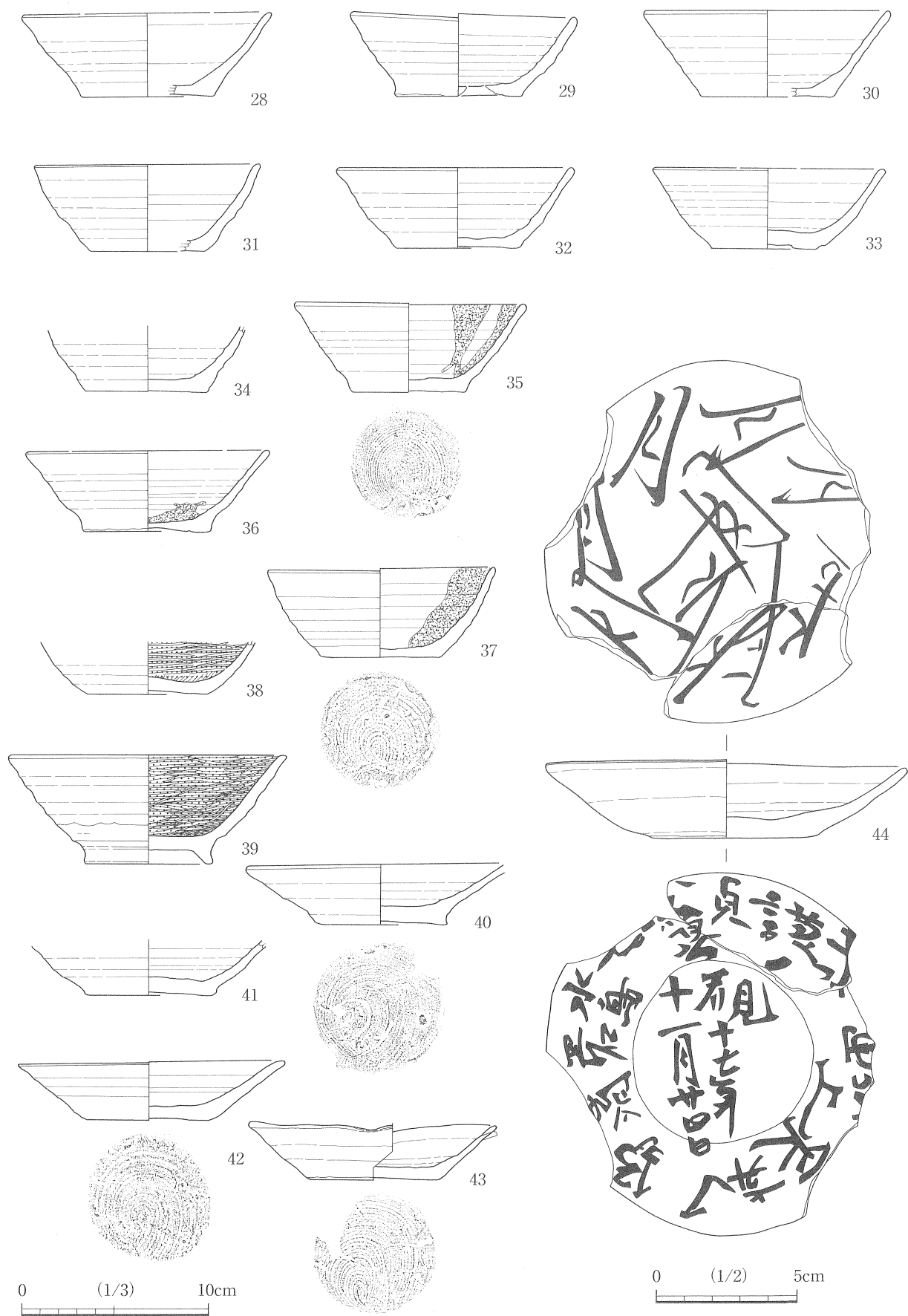
第91図 37号住居跡覆土遺物出土状況



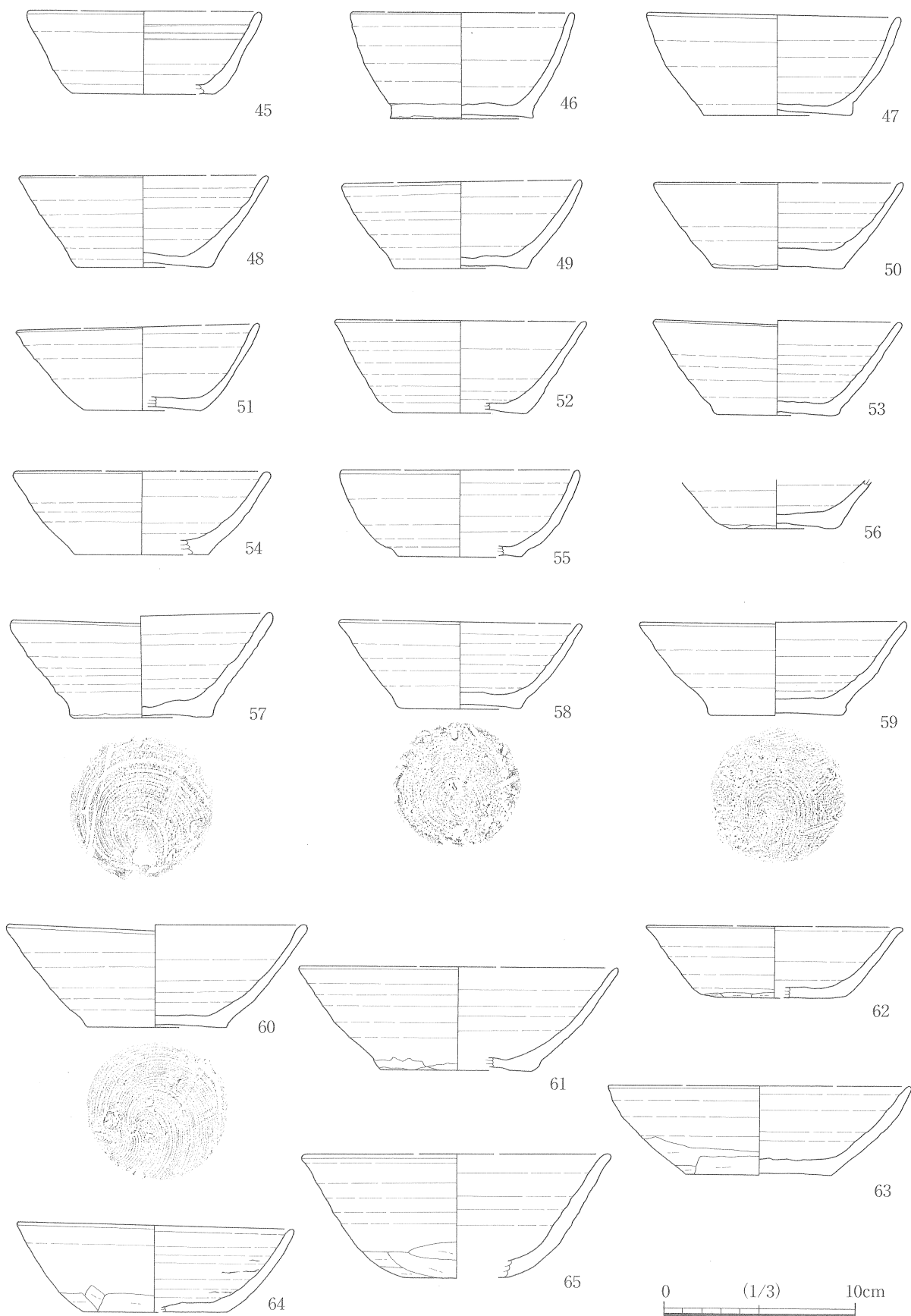
第92図 37号住居跡出土遺物



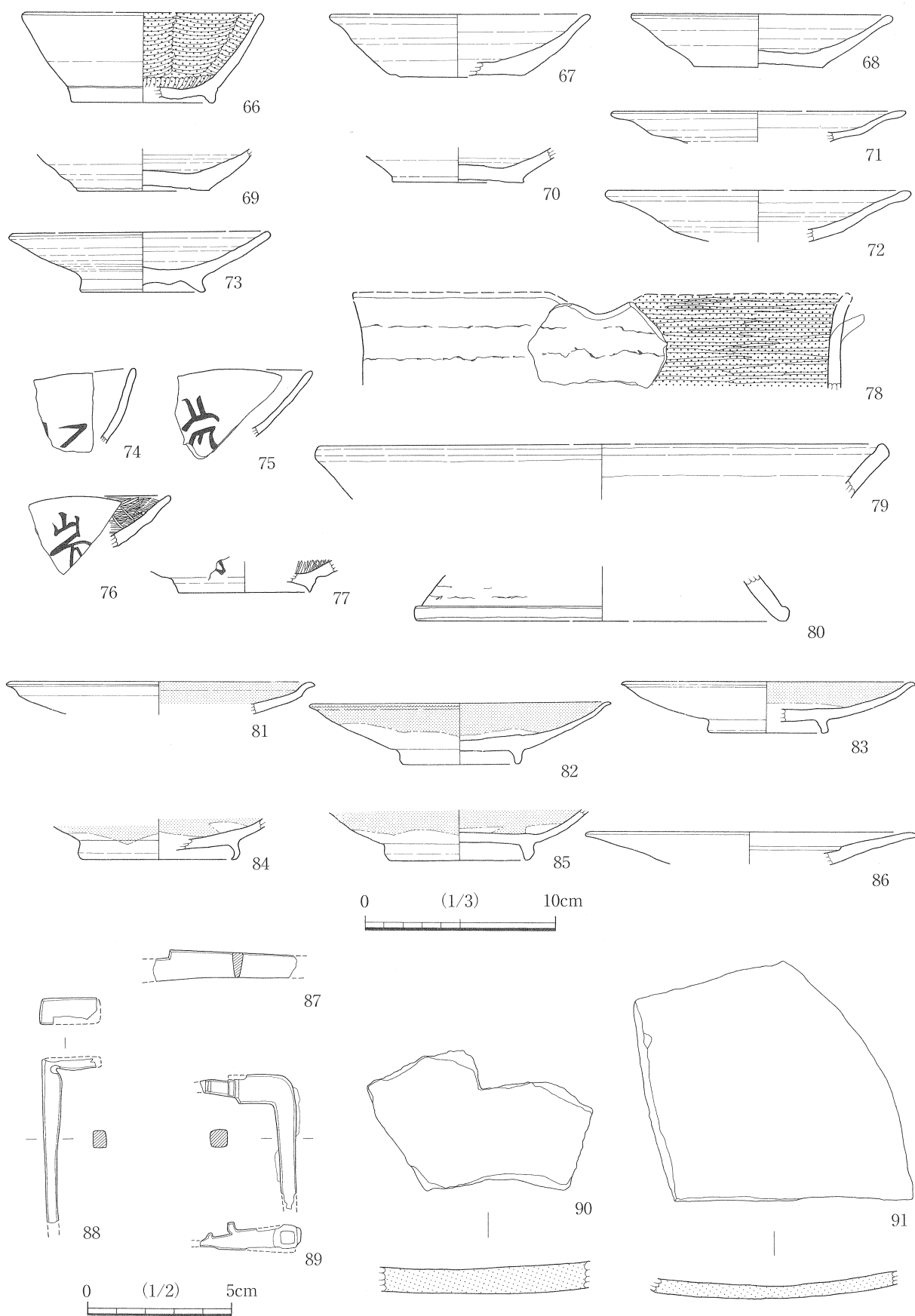
第93図 37号住居跡出土遺物



第94图 37号住居跡出土遺物



第95図 37号住居跡出土遺物



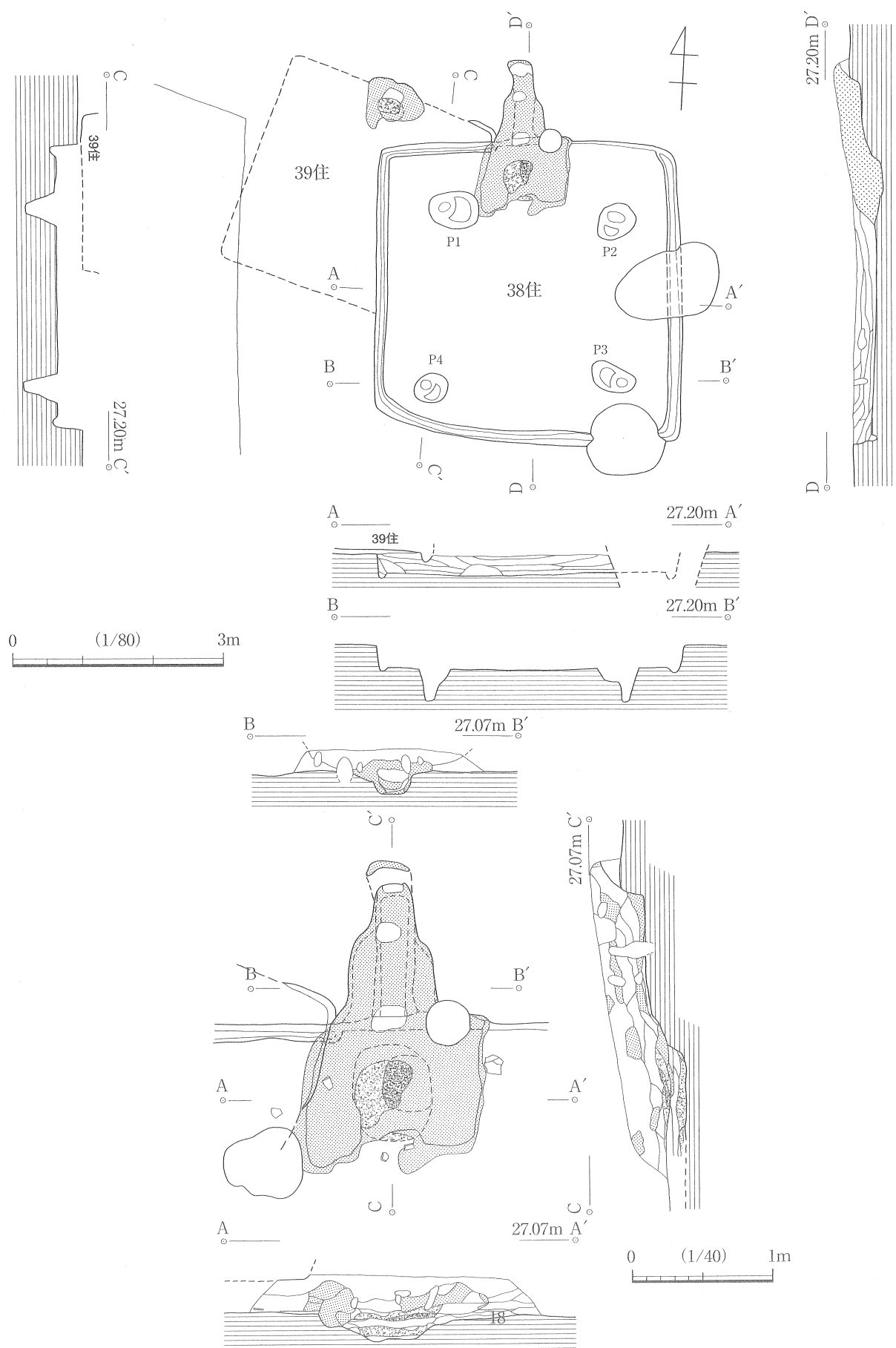
第96图 37号住居跡出土遺物

大形のロクロ土師器坏で体部下端と底部に手持ち篋削りを施し、底部外面に「丸」の墨書が書かれている。3・4は体部下端および底部に手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏、5は底部が僅かに柱状に立ち内湾気味の体部で底径7.1cmを計る。6は回転糸切りでやや大ぶりのロクロ土師器坏である。7～11は糸切りのロクロ土師器坏で外方に直線的に開く口縁を特長とする。12の土師器大型台付鉢は、脚部と口縁が接合しないが、脚端は上下両方向に摘み出す角状を呈し脚基部径14.2cm・推定口径30cm以上を計る。4は手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏で、カマド左袖の攪乱範囲から検出され、出土状況に問題があり、検討を有するが紀年銘墨書土器より先行する37号住居跡の帰属を示す資料であることを否定もできない。ここで留意する点は、37号住居跡床面から出土したロクロ土師器坏の中に回転篋削り調整を施す一群が見られないことである。

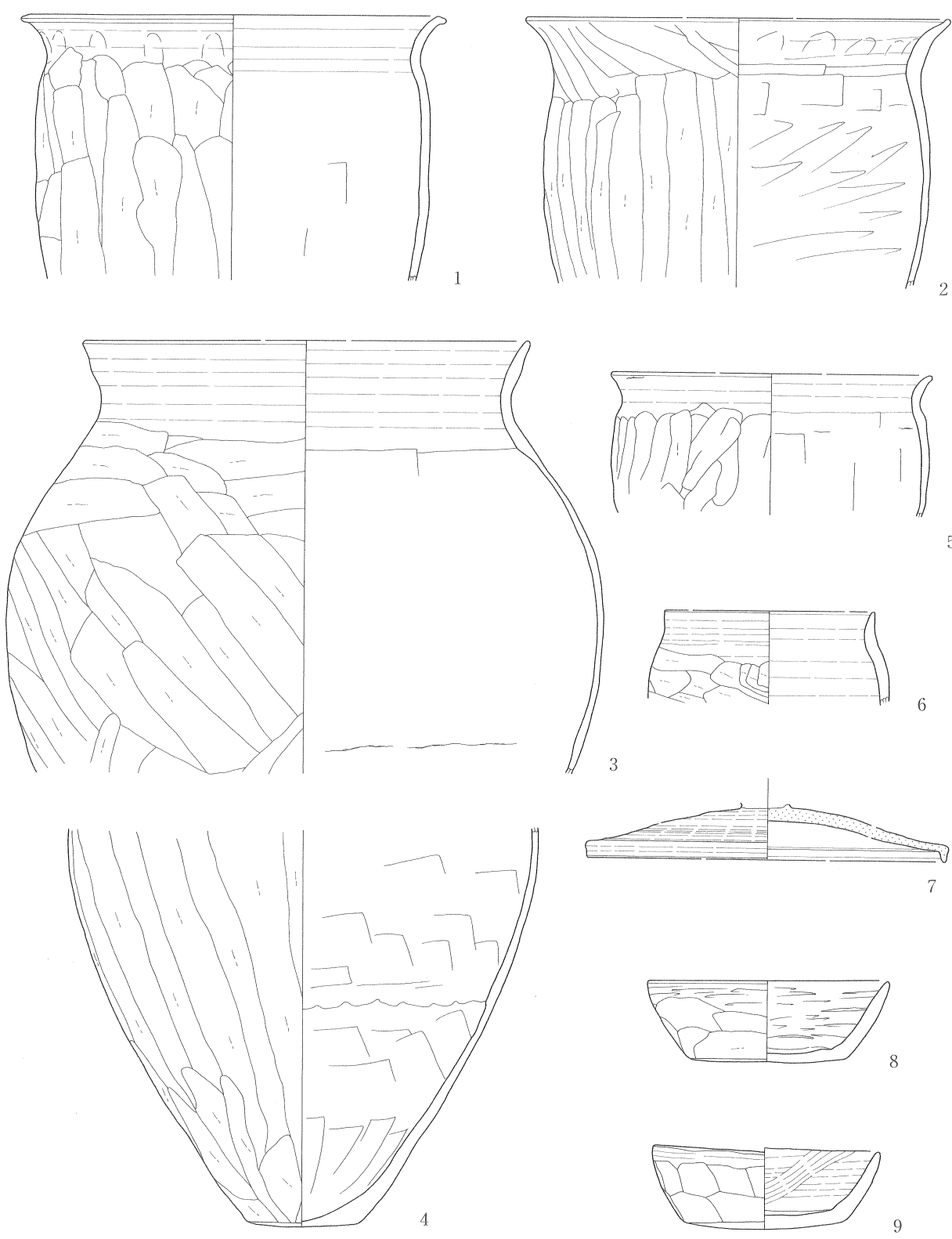
覆土焼土中の主な遺物は、13～44が上げられる。13はロクロ甕で内面ロクロナデ外面胴部下端と底部に手持ち篋削りを施している。ロクロ甕は、9世紀第2四半世紀の12住居跡と本遺構、そして6号集石遺構を比較すると、胴長から胴丸の器形変化が明白である。14は内黒の回転篋削りを施すロクロ土師器で底部外面に「丸カ上」の墨書を書いている。15～21は回転篋削りのロクロ土師器である。22は回転篋削りを施したロクロ土師器皿である。23・24・25は焼土の充満するピット最下層から検出され、いずれも回転糸切り無調整で、25は口縁が部大きな花びらを連想させる様に波をうつ。26・27の回転糸切りのロクロ土師器坏もピット中層から出土する。28～34は回転糸切りロクロ土師器坏で焼土中から出土する。35・36・37も糸切りロクロ土師器坏で内面にカーボン状のタールが付着し、灯明用の坏であろう。38・39は内黒ロクロ土師器で39は高台付坏である。40～43が糸切り無調整のロクロ土師器皿で、43には3方に片口がある。44が「貞観十七年十一月廿四日」紀年銘墨書土器である。「貞」の字が口縁から体部に書かれ「観十七年」と底部に書かれ、行を変え「十一月廿四日」とある。貞の字の右から「謹」「以カ」「□」「謹カ」「□」「□」「上」「□」「□」「水」「□」「□」「□」「酒」「宜カ」「名」「水」「鳥」「□」「□」「□」と読める。内面には不規則に「月」が10文字書かれ「月輪」を連想する。紀年銘墨書土器については、第3章第2節で笹生衛氏がくわしく論じている。

45～91は、37号住居跡覆土上層のグリッドI8・J8として調査した範囲から出土し、直接本遺構に伴うものではないが、中には覆土焼土中に共伴する土器が存在するものと思われる。45～61は底部回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、62～65は底体部手持ち篋削りロクロ土師器坏、66は内黒ロクロ土師器高台付坏、67～72が回転糸切り無調整のロクロ土師器皿、73はロクロ土師器高台付皿。74はロクロ土師器小片で墨書「丸カ」、75・76はロクロ土師器小片で墨書「山万カ」、77の内黒ロクロ土師器高台付坏の墨書は不明。78は小片で全体は不明であるが内黒土師器で片口の鉢状を呈する器形であろう。79・80は土師器大型台付鉢の口縁や脚の端部である。81～86は猿投産の灰釉陶器で81～83が皿、84・85は椀、86は段皿である。坂野編年では、82・83・86がⅡ期新相の9世紀第3四半期に、81がⅢ期古相の9世紀第4四半期、85がⅢ期新相の9世紀末から10世紀初頭に、84がⅣ期新相の10世紀第2四半期にそれぞれ比定される。89は刀子断片、88は釘、89は金具状の釘か、90・91は須恵器甕片で研磨痕跡があり転用硯と思われる。

37号住居跡の所属時期は、1～12の土器を当てることができ「貞観十七年」（西暦875年）紀年銘墨書土器以前の9世紀第3四半期後半に位置付けられ、覆土焼土内土器の13～44は西暦875年の頃の土器である。何れも稲荷台Ⅲ期-aの所産である。

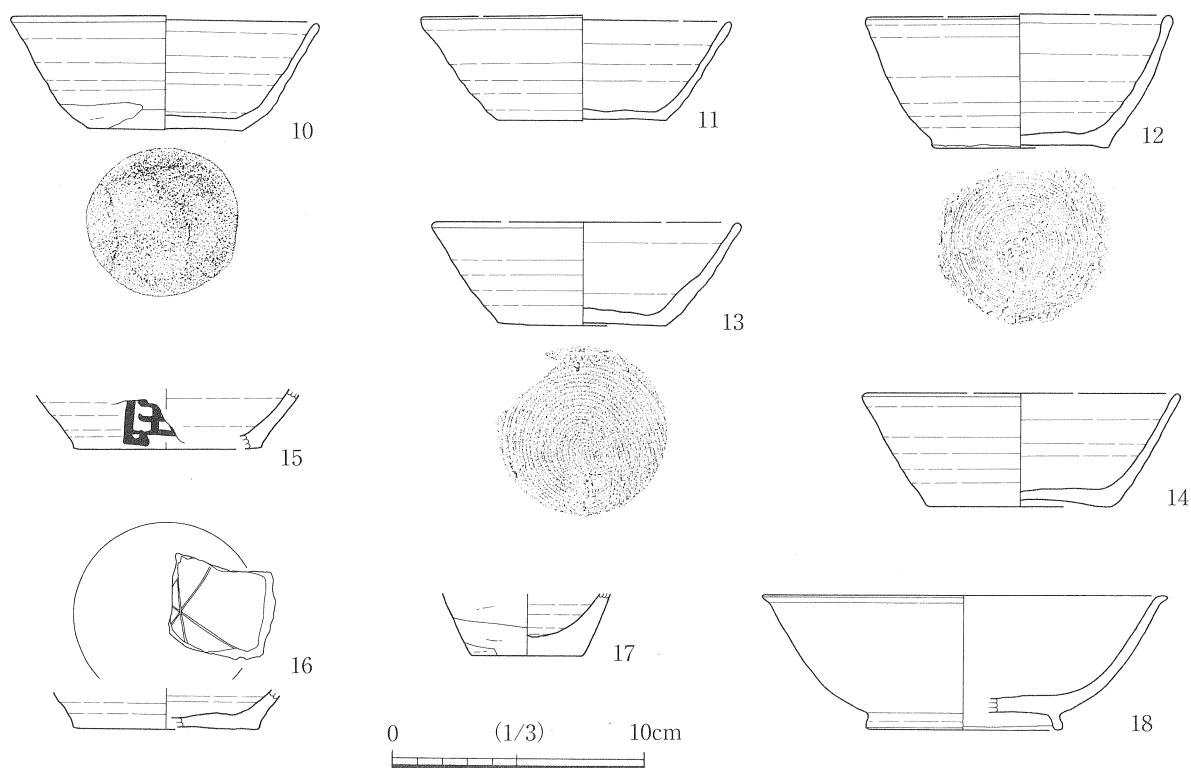


第97図 38・39号住居跡

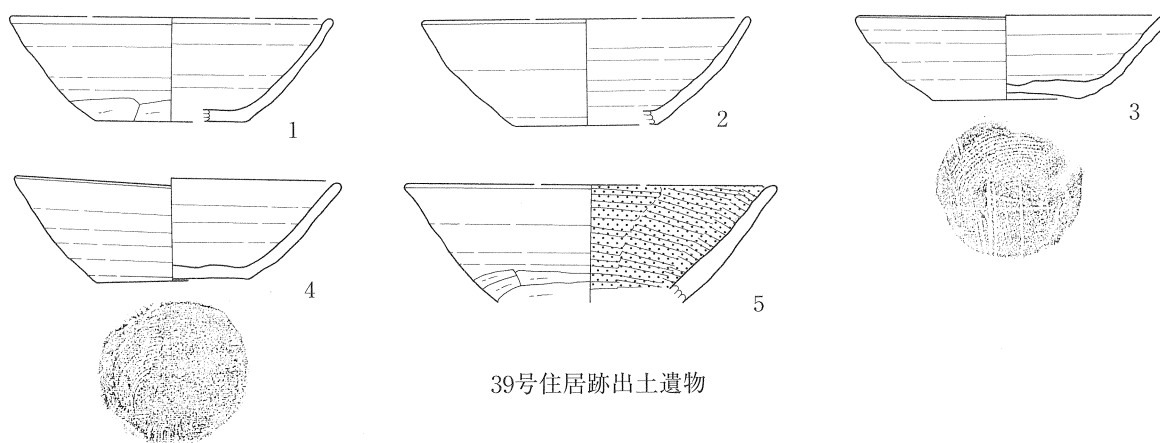


0 (1/3) 10cm

第98図 38号住居跡出土遺物



38・39号住居跡上層出土遺物



39号住居跡出土遺物

第99図 38・39号住居跡出土遺物

37号住居跡および37号住居跡覆土出土の土器は、「貞観十七年」紀年銘墨書土器を伴っていることから、土器の年代決定の根拠となる希薄資料であると同時に、覆土焼土は祭祀行為によって堆積したもので、その祭祀を復元できる好材料でもある。

38号住居跡（第97・98・99図）

E 地区中央の K 9・K10区に、西側プラン上層に39号住居跡が複合して検出する。規模は、主軸長4.22m（4.37m）・副軸長4.16m（4.30m）を計測する。床面積は16.87m²を測る。カマドは北壁中央に設置され煙道部突出長0.95mで、燃烧部は床面内でおさまっている。袖部および煙道部天井部は下末吉層の白色粘土で覆われている。主軸方位はN-3°-Wを指向する。平面形は、北壁長4.20m・東壁長4.20m・南壁長4.35m・西壁長3.80mと西壁が各壁長より短く、均整を欠く方形を呈している。

床面標高は26.48mで、確認面からの深さ35cm程を測る。ピットの深さは、P1-44cm・P2-30cm・P3-47cm・P4-48cm程を測り、支柱穴はP1・P2・P3・P4の4柱穴である。壁溝は、北壁東半分には無く、覆土は埋め戻された状況を示すものである。

出土遺物は、1～6は土師器甕、7は須恵器蓋、8・9は非ロクロ土師器坏、10・11は手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏、12～16は回転糸切りのロクロ土師器坏である、15の体部には「国」と判読できる墨書が書かれている。16の内面底部に記号が焼成後に線刻されている。17は小形のロクロ甕で、外面篋削り内面ロクロナデを明瞭に残している。18は猿投産の灰釉陶器壺で坂野Ⅱ期新相である。住居跡と共伴する遺物は、1が床面、2～7のカマド燃焼部から出土した土師器甕と7の須恵器蓋があり、覆土から検出された8・9の非ロクロ土師器坏も同等に扱って差し支えない物であろう。10～18は38号住居跡と39号住居跡の上層から出土している。これらの出土遺物から本住居跡は、稲荷台A期の8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の所産であろう。

39号住居跡（第97・99図）

E地区中央のK9・K10区に、38号住居跡西側プラン上層に複合して検出する。プランの検出はカマドと北東隅の床面で全体は不明である。但し、カマド位置が北壁中央に設置されたと仮定するならば北東隅の床面範囲関係から、一辺3m程の方形で、主軸方位はN-18°-Eを指向するものと考えられる。床面標高は26.84m前後を計測する。

出土遺物は、1～5のロクロ土師器がカマド燃焼部から検出され整形は手持ち篋削りを施すものである。これらの出土遺物から本住居跡は、稲荷台Ⅳ期-aを中心とする所産であろう。

40号住居跡（第100図）

E地区中央のL11・L12区に位置し、住居跡の推定プラン南西側に35号掘立柱建物跡柱掘方に掘り込まれ、カマドと床面を検出する。壁が検出されないためプラン全体の詳細は不明であるが、カマド位置が北壁中央に設置されたと仮定するならば残存床面との関係から、一辺3m程の方形で、主軸方位はN-11°-Eを指向するものと考えられる。床面標高は27.10mを測る。

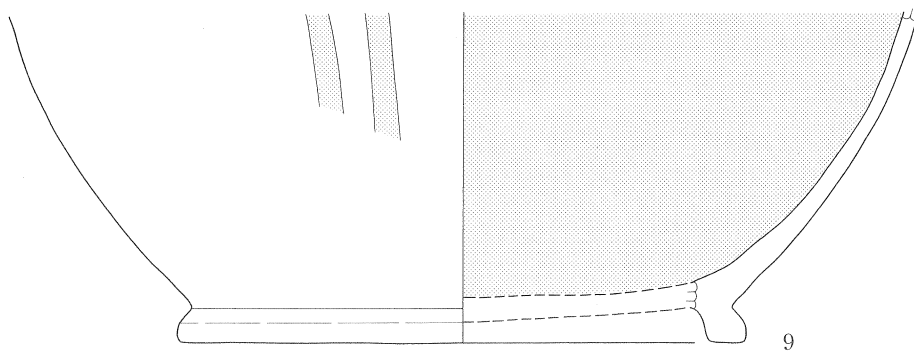
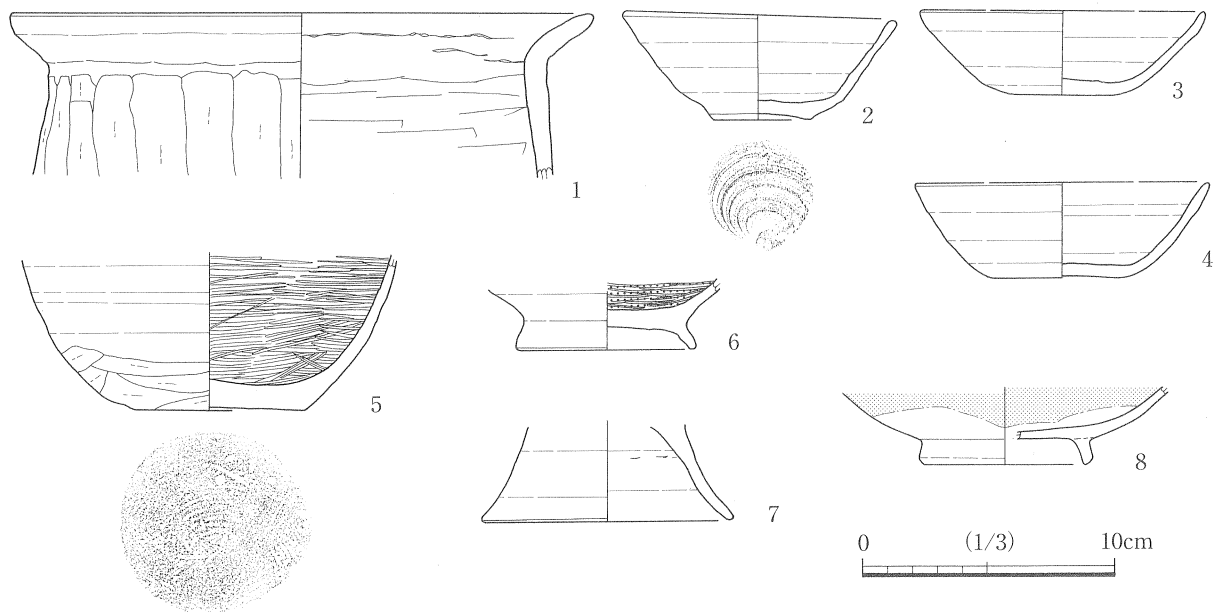
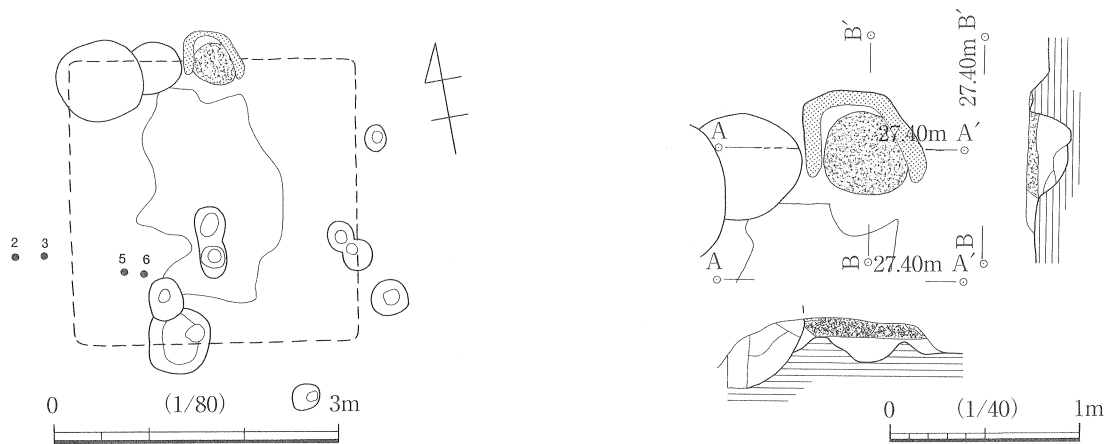
出土遺物は、1は土師器甕、2～4は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、5は内黒ミガキロクロ土師器で壺状を呈する。6は内黒ミガキのロクロ土師器高台付坏、7は脚高3.5cmの脚高高台の脚部、8は灰釉壺で坂野Ⅳ期古相、9は灰釉大型短頸壺小片で坂野Ⅱ期新相にあたる。

遺構と共伴する遺物と考えられるものは5と6が床面から検出されるが、2・3のロクロ土師器坏はほぼ床面と同じレベルから出土するもののプランの推定範囲外となり、他は周辺からの検出である。帰属時期は明確にできないが、本住居跡はⅣ期の所産と看取される。

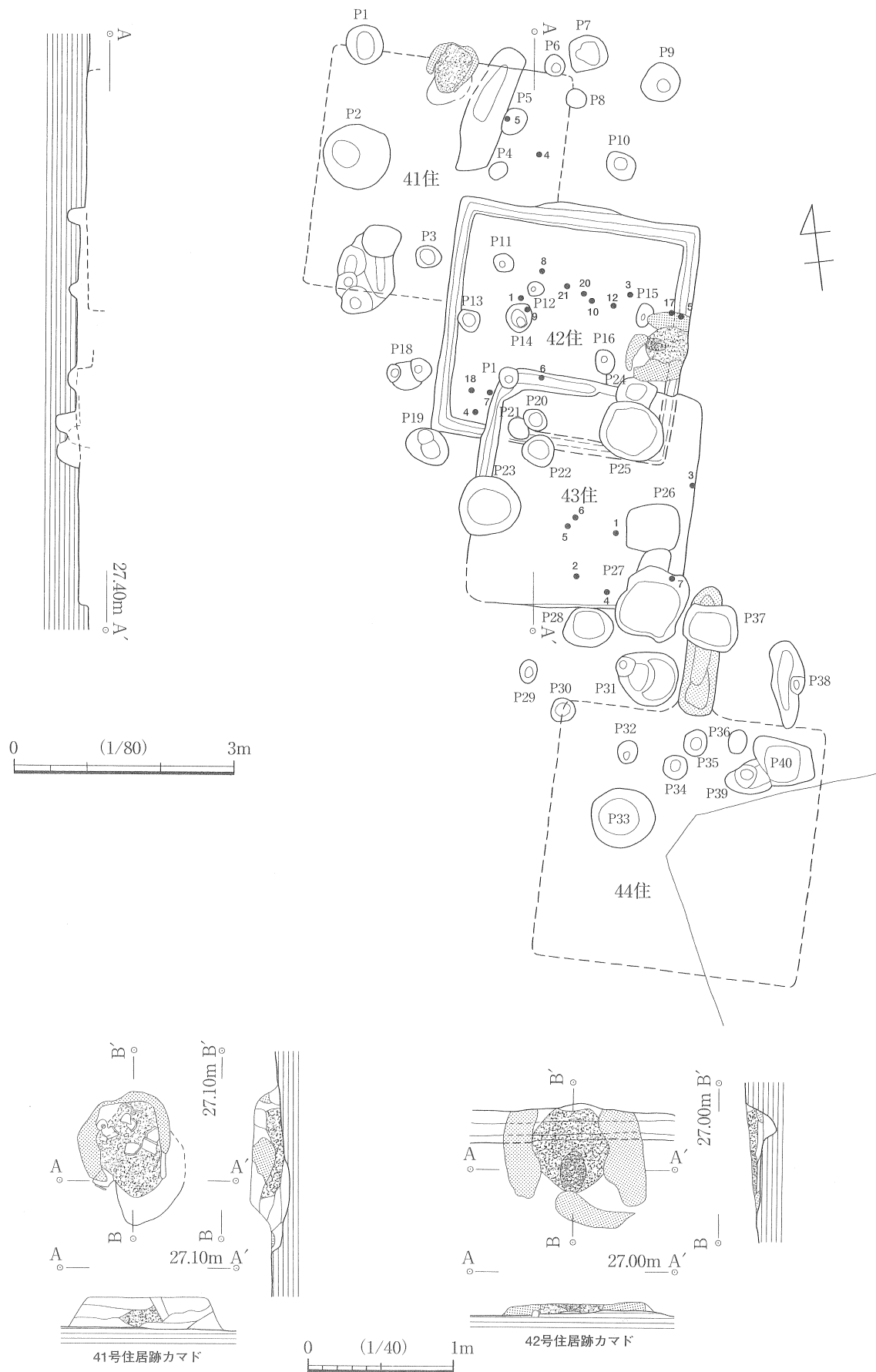
41号住居跡（第101・102図）

E地区中央のL12・M12区に、42号住居跡と推定プラン南東で複合して検出する。壁が検出されないためプラン全体の詳細は不明であるが、カマド位置が北壁中央に設置されたと仮定するならば一辺3.3m程の方形で、主軸方位はN-14°-Eを指向するものと考えられる。床面標高は27.1m程を測る。ピットの深さは、P1-14cm・P2-52cm・P3-15cm・P4-36cm・P7-28cm・P8-23cm・P9-37cm・P10-30cmを測るが支柱穴は不明である。

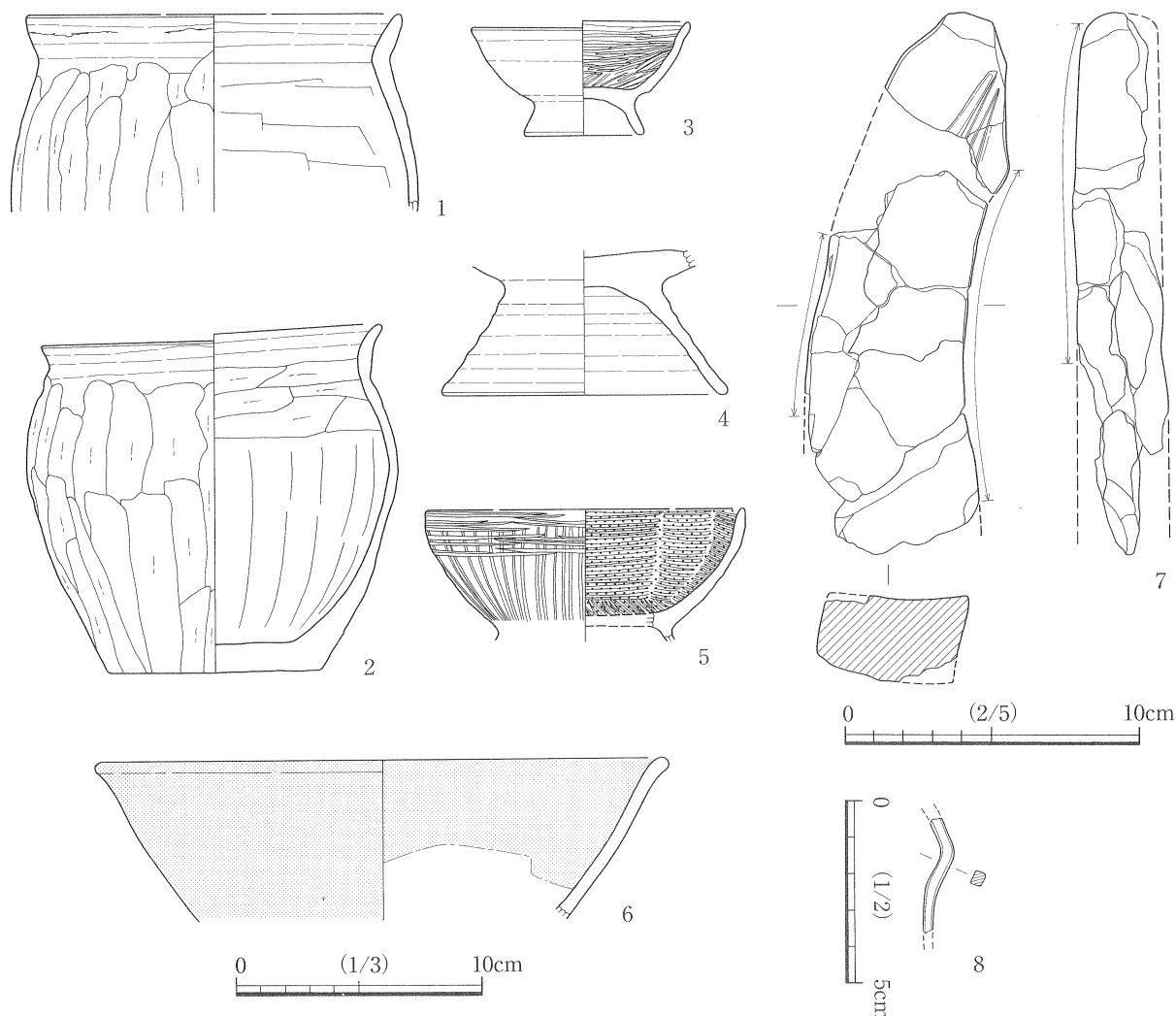
出土遺物は、1・2は土師器甕、3は内面ミガキロクロ土師器高台付坏、4は脚高台坏、5は内黒土師器台付壺で内面ミガキと外面に規則的な縦方向の放射状暗文を思わせるミガキを施している。6



第100図 40号住居跡と出土遺物



第101図 41・42・43・44号住居跡



第102図 41号住居跡出土遺物

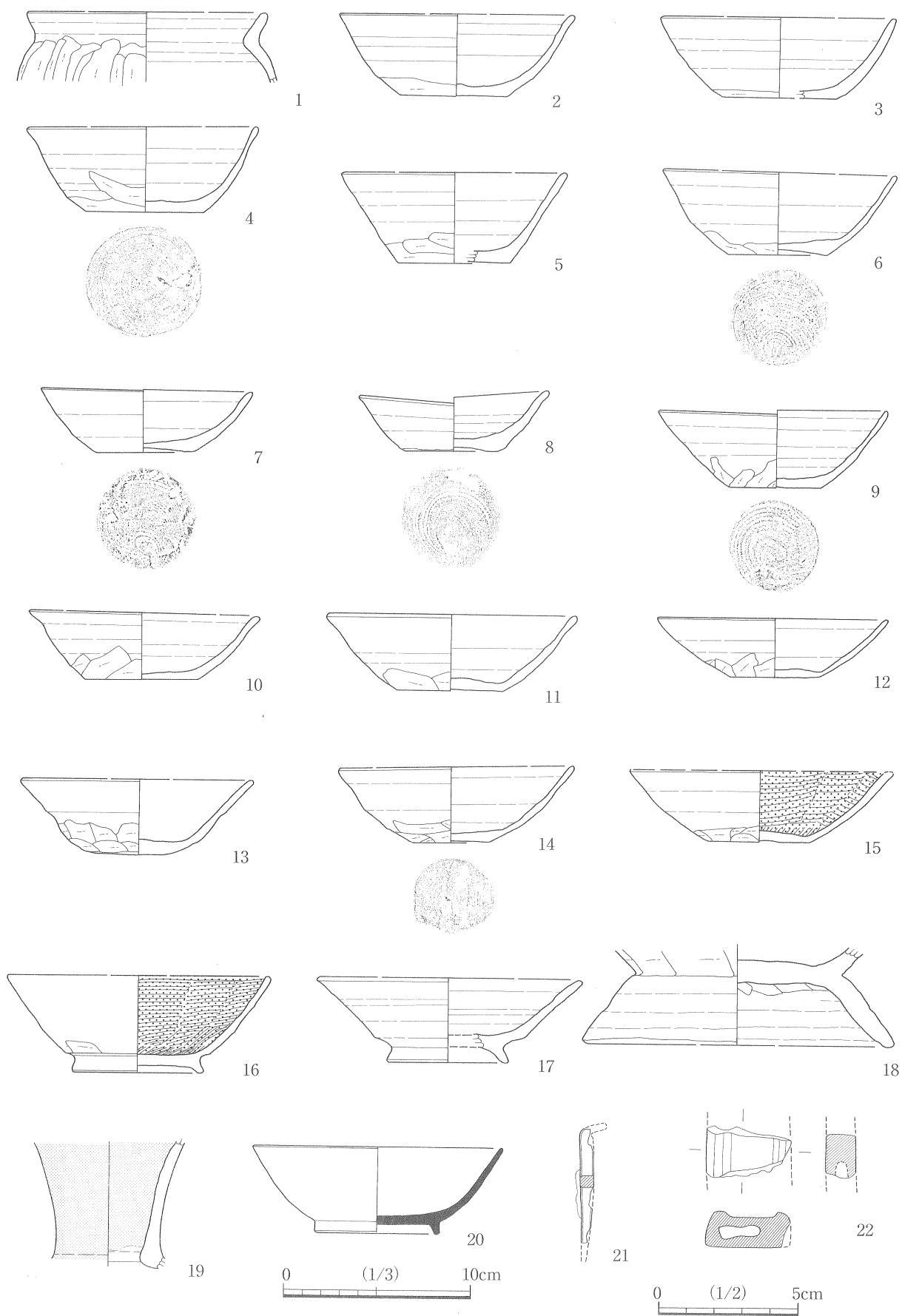
は灰釉陶器碗で刷毛塗りである。7は砥石、8は釘の断片であろう。

遺構と明確に伴伴する遺物は、1・2・3・8がカマド燃烧部、5が床面直上、4がほぼ床面から検出され、他の遺物は覆土からである。これらの出土遺物から本住居跡はIV～V期の10世紀第2～3四半期の所産と看取できる。

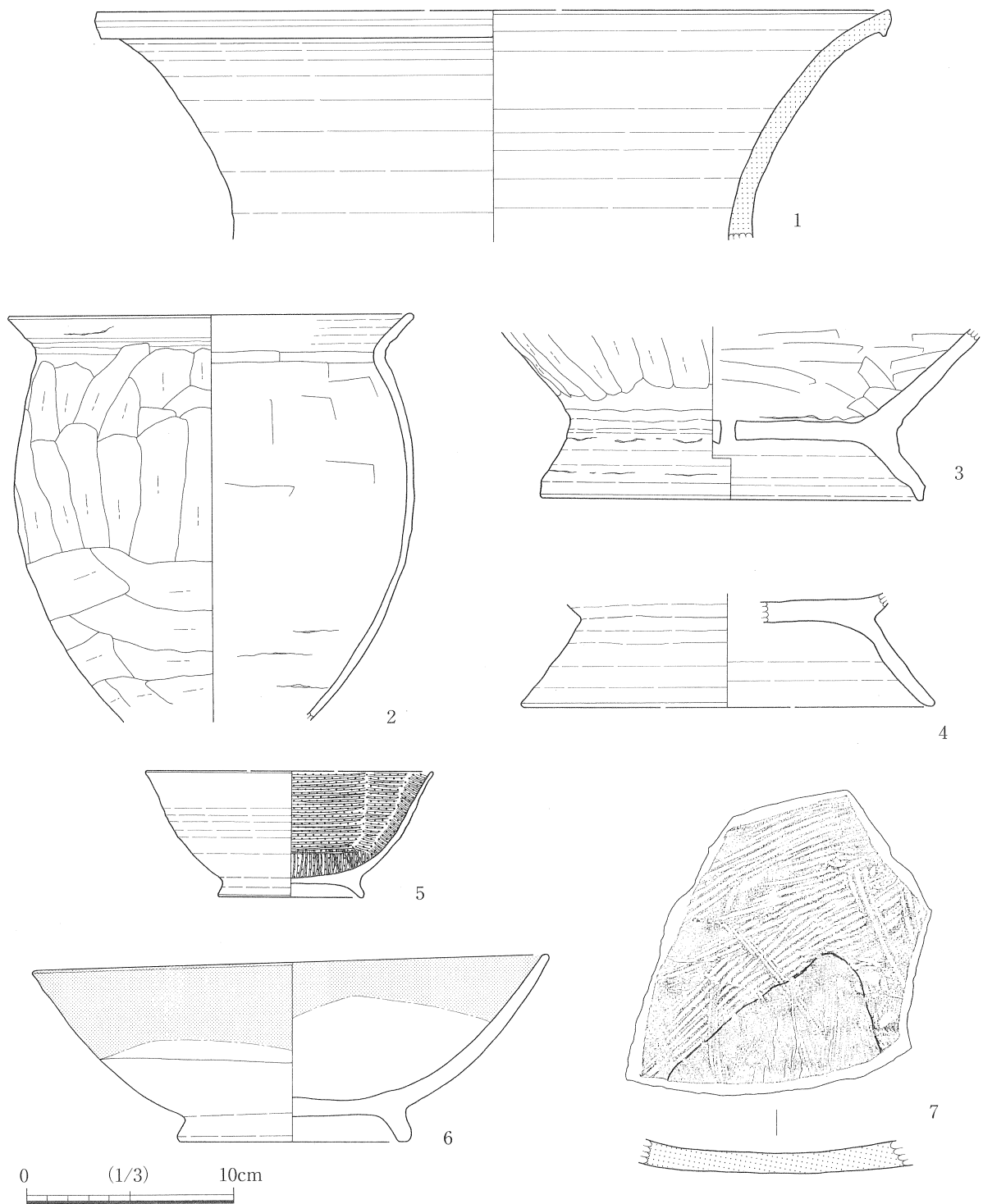
42号住居跡（第101・103図）

E地区中央のM12・M13区に位置し、北側に41号住居跡が南側で43号住居跡と複合して検出する。規模は、主軸長3.18m（3.31m）・副軸長3.10m（3.28m）を計測する。床面積は 9.78m^2 を測る。カマドは東壁中央に設置されるが煙道部構造は不明である。袖部は下末吉層の白色粘土で覆われている。主軸方位は $N-105^\circ-E$ を指向する。平面形は、43号住居跡との複合範囲が不明であるが比較的均整のある正方形を呈するものと看取される。床面標高は27.0m前後で、確認面からの深さ0～10cm程を測る。ピットの深さは、P11-20cm・P12-15cm・P13-15cm・P14-37cm・P15-38cm・P16-37cm・P17-15cm・P18-50cm・P19-43cmを測る、支柱穴構造は不明である。壁溝は、43号住居跡との複合個所が不明瞭だが本来は四周するものであろう。

出土遺物は、1は土師器甕、2～5は回転篋削りのロクロ土師器坏、6～14は回転糸切り無調整と



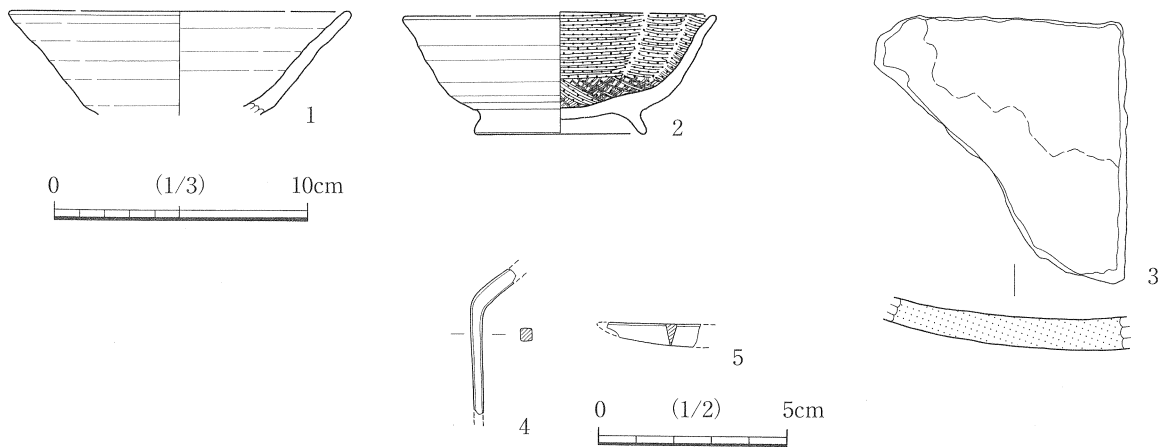
第103図 42号住居跡出土遺物



第104図 43号住居跡出土遺物

手持ち篋削りのロクロ土師器坏、15は内黒ロクロ土師器坏、16は内黒ロクロ土師器高台付坏、17はロクロ土師器高台付坏、18は土師器大型台付鉢、19は灰釉陶器長頸壺、20は緑釉陶器碗、22は釘、23は不明鉄製品である。

遺構と明確に共伴する遺物は、1・9・12が床面直上、14がカマド燃焼部から出土し、他の遺物は覆土中からの出土である。2～5のロクロ土師器坏は回転篋削りを施し床面から7～11cmほど浮い



第105図 44号住居跡出土遺物

て出土する一群と6・7・8・10・11・13の手持ち篋削りを施す一群が同じ覆土から検出されるが前者は小片が多く混入遺物として理解したい。住居と共伴する遺物から本住居跡はⅣ期－bの10世紀第2四半期頃の所産と看取できる。

43号住居跡（第101・104図）

E地区中央のM12・M13・N12・N13区に位置し、北側に42号住居跡が切り込んで複合して検出する。規模は、主軸長2.88m（2.97m）・副軸長2.90m（3.10m）を計測する。床面積は8.63m²を測る。カマド位置は不明である。東カマドと仮定すると主軸方位はN-105°-Eを指向する。平面形は、42号住居跡と複合する北西隅や南壁の状況から比較的均整の取れた正方形を呈するものと看取される。床面標高は27.02m程で42号住居跡より僅かに低い。確認面からの深さ0～10cm程を測る。ピットの深さは、P20-31cm・P21-36cm・P22-29cm・P23-29cm・P24-15cm・P25-30cm・P26-7cm・P27-42cm・P28-28cmを測る、主柱穴構造は不明である。壁溝は、42号住居跡の複合する北西隅周辺で確認できるが他の個所は不明である。

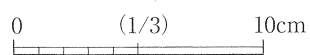
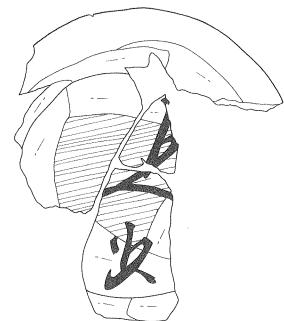
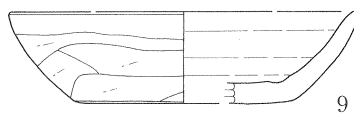
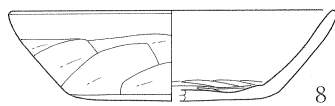
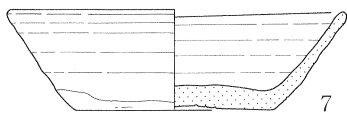
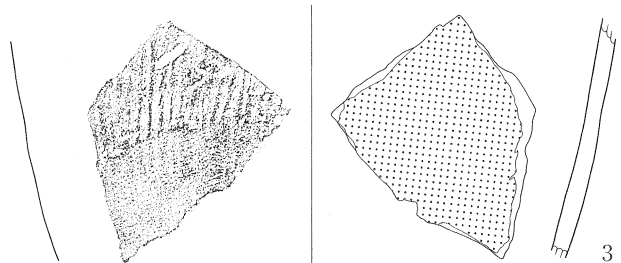
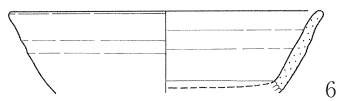
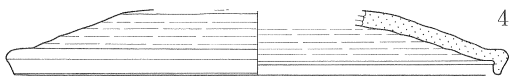
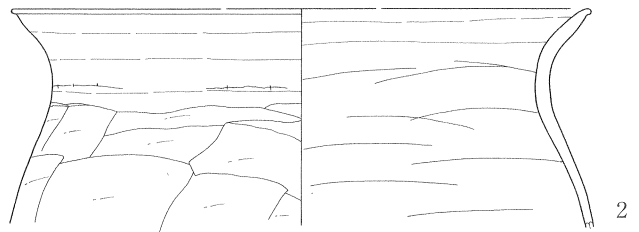
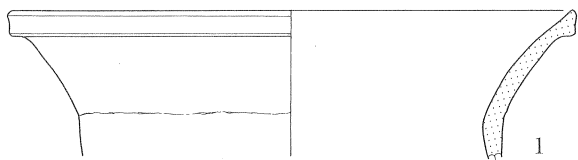
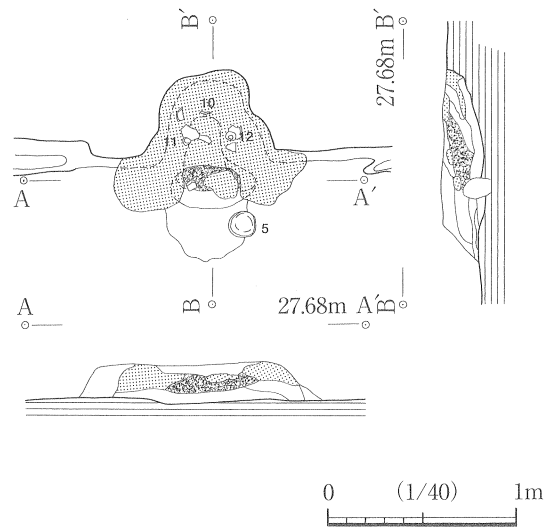
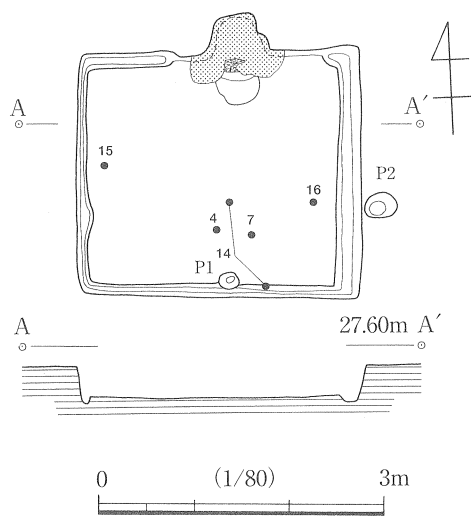
出土遺物は、1は大型須恵器甕、2は土師器甕、3・4は土師器大型台付鉢、5は内黒ミガキクロ土師器高台付坏、6は灰釉陶器碗で坂野Ⅳ期新相にあたる。7は須恵器甕片の転用硯である。

遺構と共伴する遺物は、2・3・4・6が床面直上、1も床面から10cm以内の覆土からの出土である。6の灰釉陶器碗は坂野編年ではⅣ期新相であることから、本住居跡は稻荷台Ⅳ期－bの10世紀第2四半期を中心とした時期であろう。

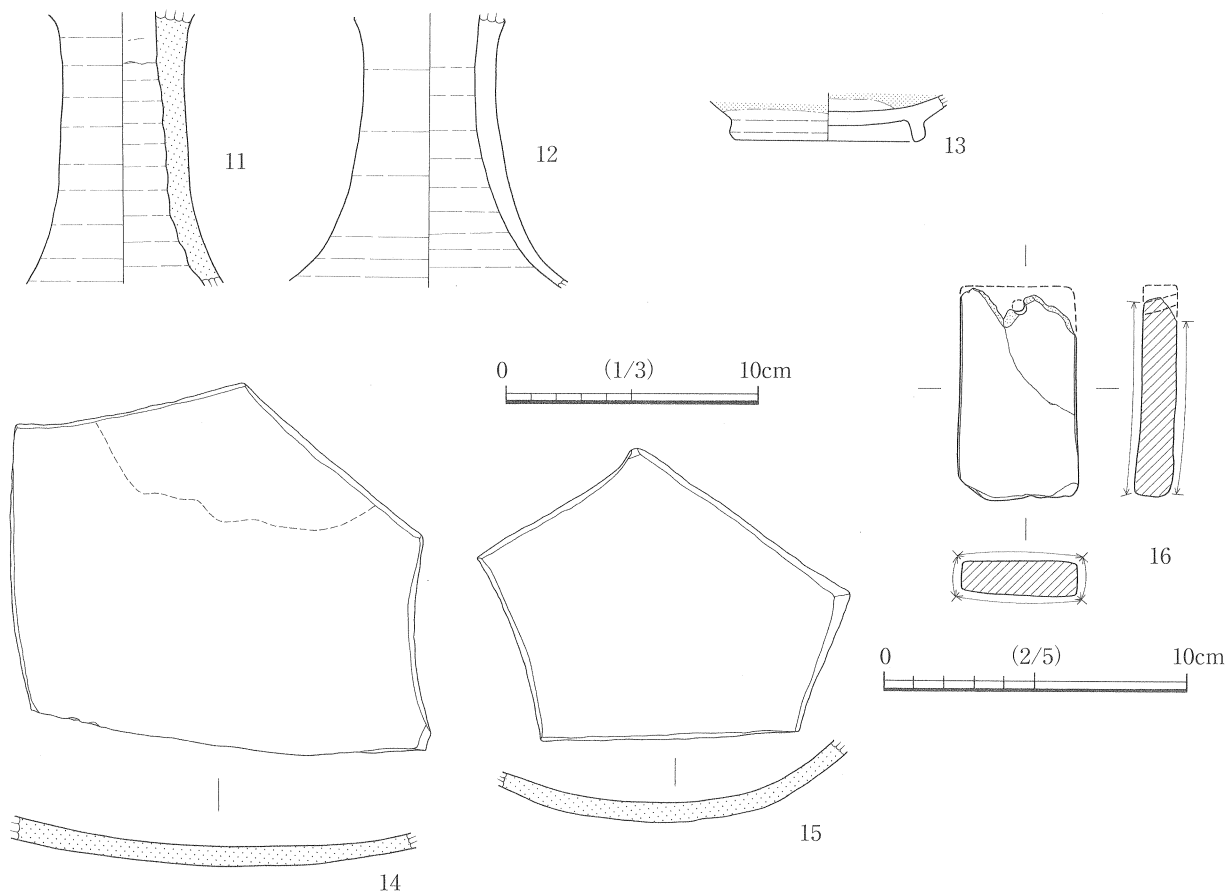
44号住居跡（第101・105図）

E地区東側南西のN12・N13・O12区から検出し、プランの4分の1の東南範囲を大きく調査区域外に置く。壁・床面・壁溝・主柱穴は検出できず、カマド煙道部だけの遺存で平面プラン等是不明であるが、カマド煙道部の方向から北カマドで、主軸方位はN-14°-Eを指向すると看取される。ピットの深さは、P29-50cm・P30-30cm・P31-44cm・P32-29cm・P33-40cm・P34-21cm・P35-10cm・P36-10cm・P37-39cm・P38-25cm・P39-31cm・P40-25cmを測り、主柱穴は明確に出来ない。P23・P26・P31・P33は34号掘立柱建物跡柱掘方である。

出土遺物、1はロクロ土師器坏、2は内黒ロクロ土師器高台付坏、3は須恵器甕片で転用硯、4は



第106図 45号住居跡と出土遺物



第107図 45号住居跡出土遺物

釘断片、5は刀子の切っ先である。出土遺物から本住居跡の帰属時期は、稻荷台IV期-b～V期の10世紀第2～3四半世紀と思われる。

45号住居跡（第106図）

E地区南端のQ12・Q13・R12・R13区に単独で検出する。規模は、主軸長2.53m（2.63m）・副軸長2.84m（3.00m）を計測する。床面積は7.03m²を測る。カマドは北壁中央に設置され煙道部突出長0.5mで、燃烧部と袖部は突出気味に設置されている。袖部および煙道部天井部は下末吉層の白色粘土で覆われている。主軸方位はN-3°-Eを指向する。平面形は、北壁長2.90m・東壁長2.70m・南壁長2.95m・西壁長2.55mと各壁長が異なり、やや均整を欠く横長の方を呈している。床面標高は27.26mで、確認面からの深さ35cm程を測る。ピットの深さは、P1-15cm・P2-43cmを測り、主柱穴は検出できない。P1は出入り口の階段ピットであろうか。壁溝は、北壁のカマド両袖に検出されないがほぼ四周する。

出土遺物、1は須恵器甕片、2は土師器甕、3は外面平行叩きで内黒の土師器鉢であろうか。4は市原産須恵器蓋、5・6は市原産須恵器坏、7は下総産須恵器坏、8～10は非ロクロ土師器坏、10は底部静止糸切り痕を残し底部に「□火カ」の墨書がある。11・12は須恵器高盤の脚部でカマド燃烧部からの出土で支脚に転用されていた。13は灰釉陶器碗で施釉は刷毛塗りである。14・15は須恵器甕片で転用碗である。16は頭部に穿孔のある砥石である。住居跡に共伴する遺物は、2・10・11・12がカ

マド燃焼部からの出土で、4・5・7・14・15・16が床面から出土している。これらの出土遺物から本住居跡は、稻荷台A期の8世紀第4四半期の所産であろう。

46号住居跡（第108・109図）

A地区南西側のBL-E4区に位置し、プラン西側で47号住居跡覆土上層に床面を置いて検出する。カマドが北側と東側2箇所にて設けられるが北カマドを規準にした場合、主軸方位はN-16°-Eを指向する。規模は、主軸長3.23m（3.34m）・推定副軸長3.30m程を計測する。床面積は10.22m²程を測る。北カマドは北壁の東に大きく寄り設置され、袖部と燃焼部は床面側でおさまり、煙道部は残存していない。東カマドは東壁のほぼ中央に設置され、袖部、燃焼部ともほぼ床面側でおまっており、煙道部は僅かに突出して残っている。平面形は、西壁が明確でないが横長のやや均整を欠く方形を呈する。床面標高は27.94mで、確認面からの深さ15cm程を測る。ピット1は床面下に検出し、深さP1-23cm程を測る。主柱穴は無く、壁溝も確認できない。

出土遺物、1は土師器甕、2・3は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、4～7は手持ち篋削りを施す。8はロクロ土師器高台付の口縁が大きく開く坏、9・10は内黒ロクロ土師器高台付坏、11は灰釉陶器平瓶、12は穿孔の有る板状鉄製品である。住居跡に共伴する遺物は、5がカマド燃焼部内から出土で他の遺物は床面より浮いて出土するが5の遺物と時期的には11の灰釉平瓶以外は整合性があるものであろう。これらの遺物から本住居跡は、稻荷台IV期-bの10世紀第2四半期を中心とした時期と看取される。

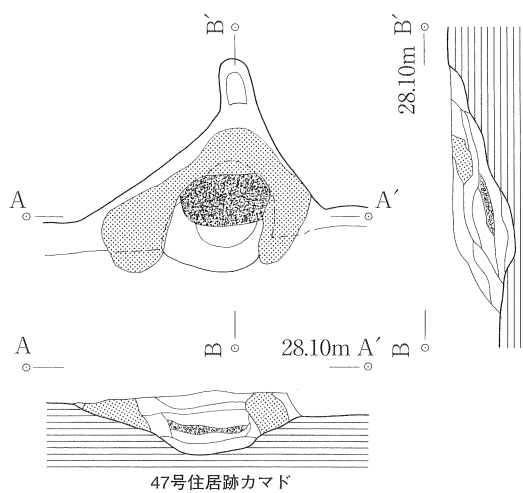
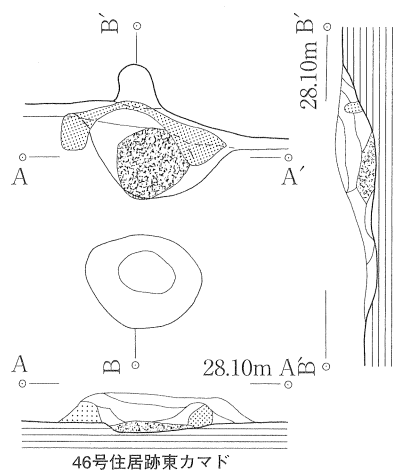
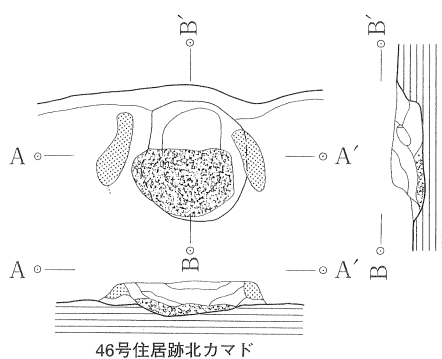
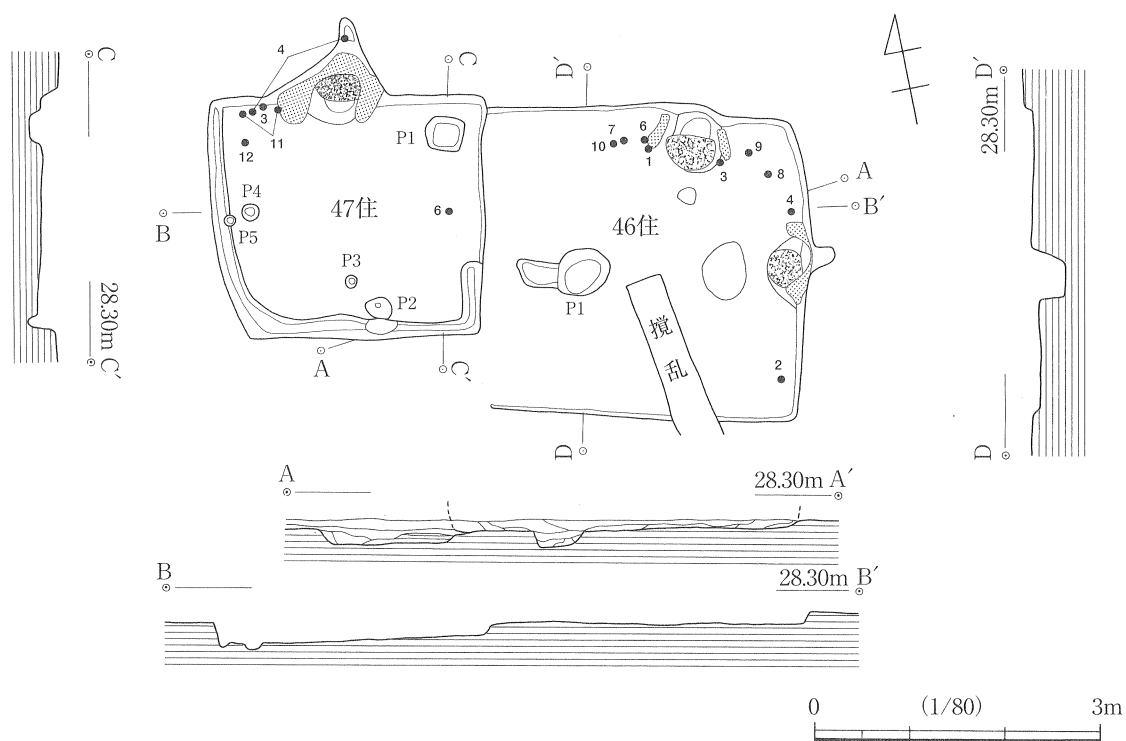
47号住居跡（第108・109図）

A地区南西側のBL-E3区に位置し、プラン東側で46号住居跡に壁を掘り込まれ検出する。規模は、主軸長2.40m（2.58m）・副軸長2.75m（2.86m）を計測する。床面積は6.42m²を測る。カマドは北壁中央よりやや西に寄り設置される。袖部および燃焼部は突出して設けられ、突出長0.7mを測る。主軸方位はN-14°-Eを指向する。平面形は、北壁長2.80m、東壁長2.57m、南壁長2.45m、北壁長2.60mと各壁長が異なり、均整を欠く方形を呈している。床面標高は27.72mで、確認面からの深さ25cm程を測る。ピットの深さは、P1-10cm・P2-17cm・P3-10cm・P4-8cm・P5-14cm程を測り、主柱穴は不明で、P3は階段ピットであろう。壁溝は、南壁と西壁では確認できる。床面は中央から南壁にかけて堅緻であるが、壁寄りには軟弱である。

出土遺物は、1～4は土師器甕、5～9は回転篋削りのロクロ土師器坏、10は回転篋削りロクロ土師器皿、11は須恵器甕で、12は底部糸切り無調整の須恵器小瓶、13は釘の断片であろう。住居跡と共伴する遺物は、1・2・3・8・9・10・11がカマド袖や煙道部補強材に使用され出土し、6・12もほぼ床面から検出されている。これらの出土遺物から本住居跡は、稻荷台II期の9世紀第2～3四半期に帰属するものと看取される。

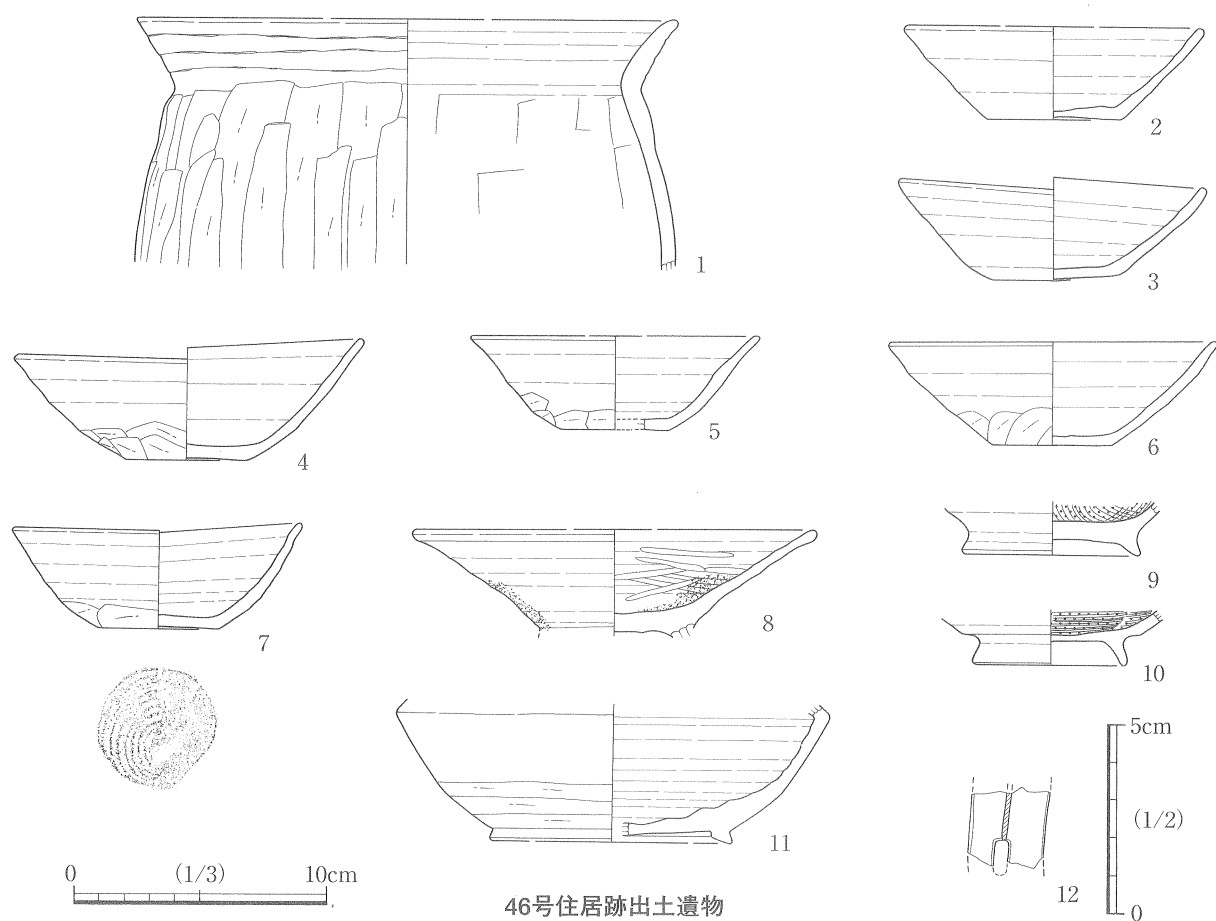
48号住居跡（第111図）

A地区南西側のBL-E6・E7区に、プラン南側で50号住居跡と複合して検出する。規模は、主軸長3.04m（3.14m）・副軸長2.82m（3.0m）を計測する。床面積は8.26m²を測る。カマドは北壁中央に設置される。袖部および燃焼部は突出して設けられ、突出長0.75mである。主軸方位はN-11°-Wを指向する。平面形は、各壁長が僅かに異なり、均整を欠く方形を呈している。床面標高は27.86mで、確認面からの深さ20cm程を測る。ピットの深さは、P1-15cm・P2-19cm・P3-26cm・P4

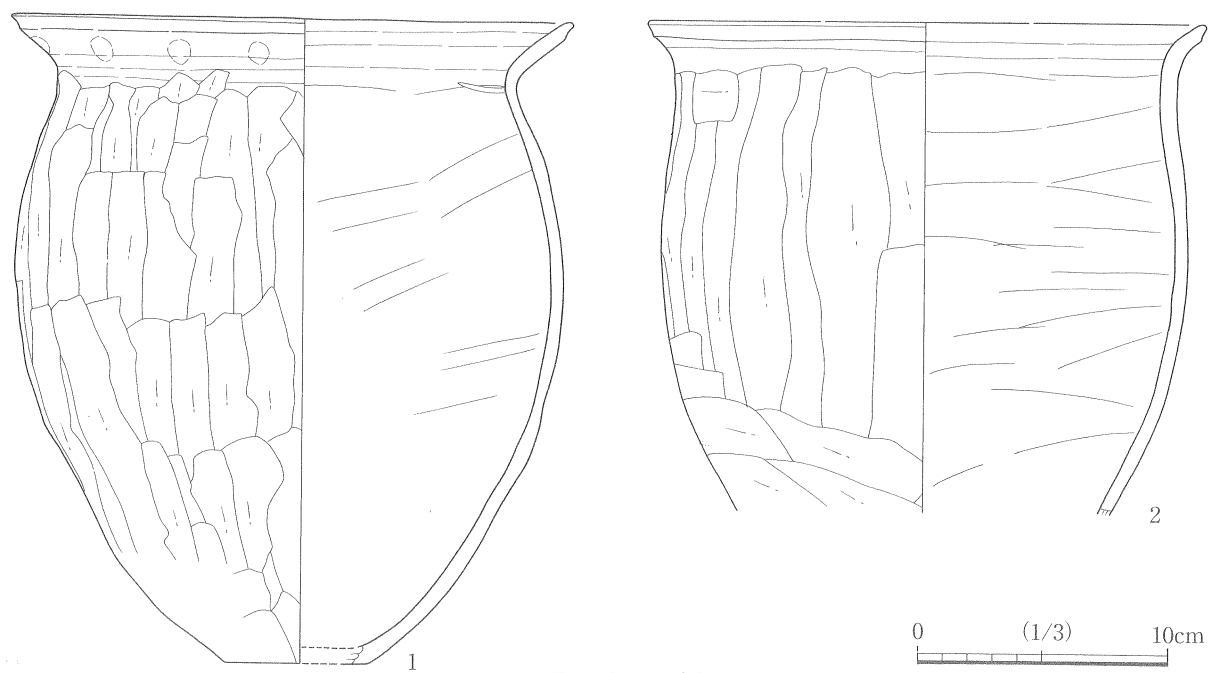


0 (1/40) 1m

第108図 46・47号住居跡

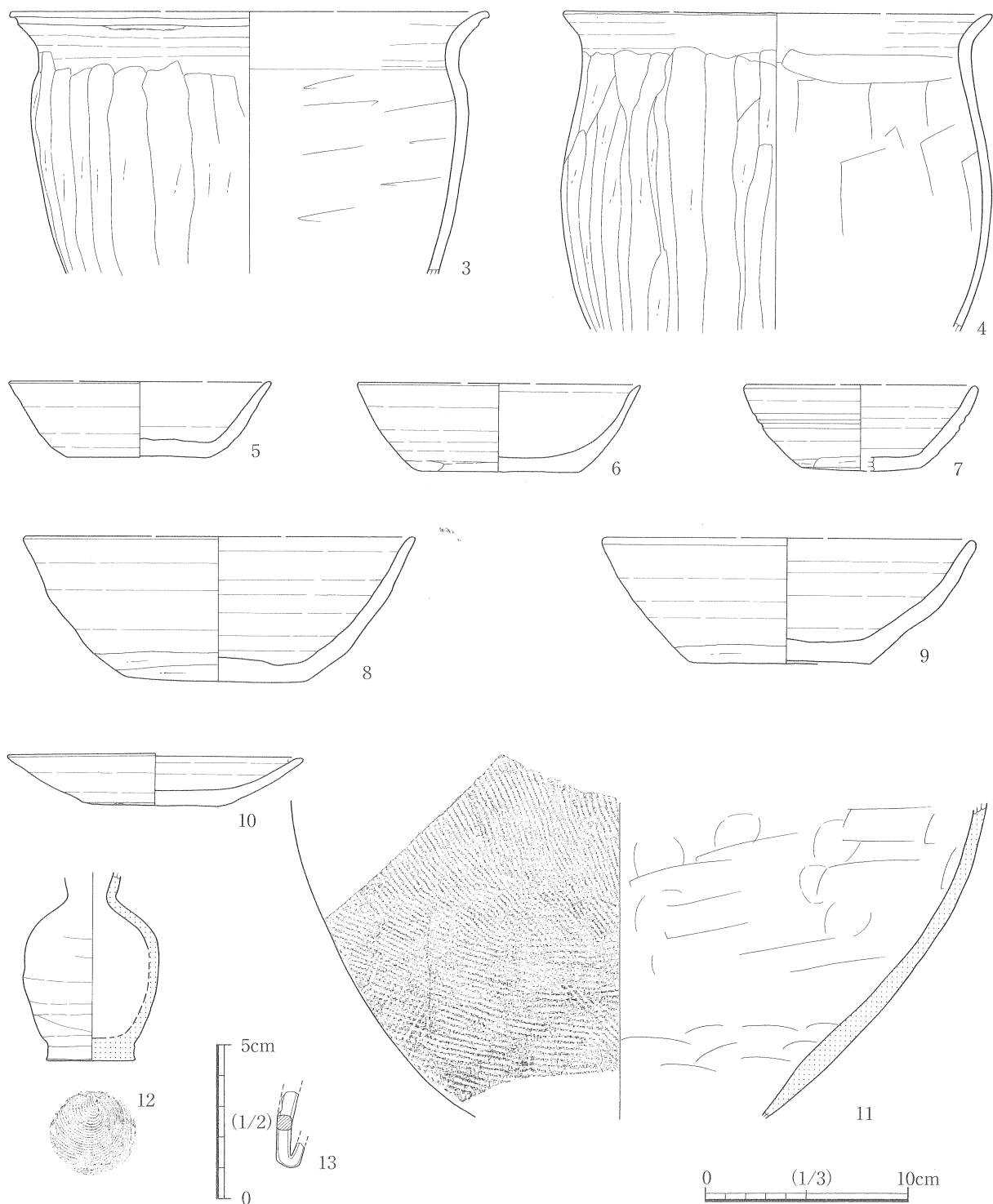


46号住居跡出土遺物



47号住居跡出土遺物

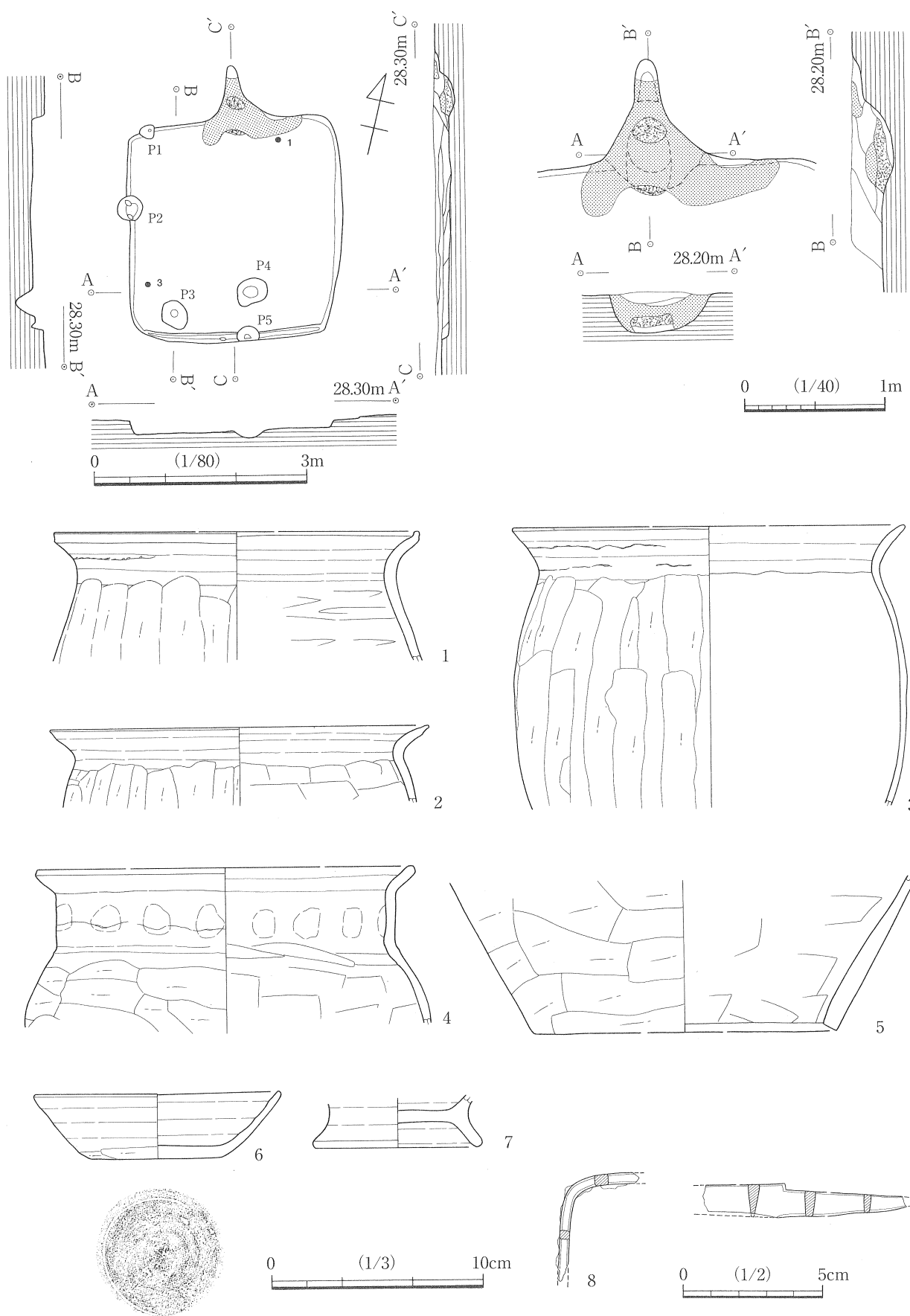
第109図 46・47号住居跡出土遺物



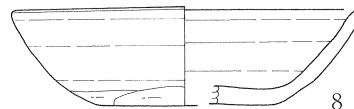
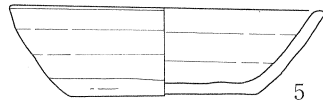
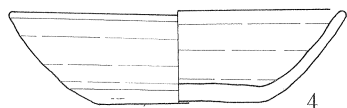
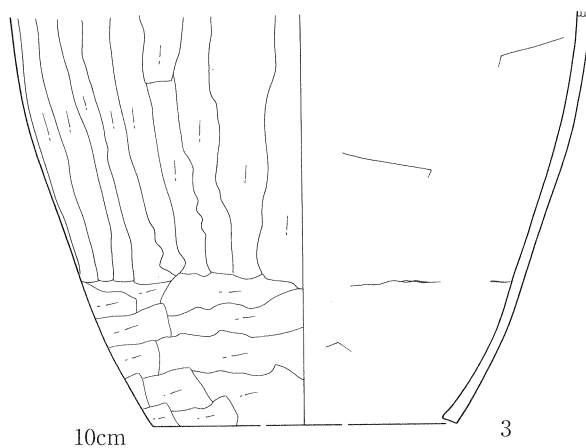
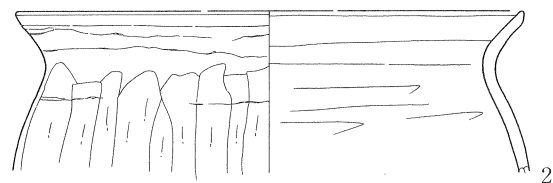
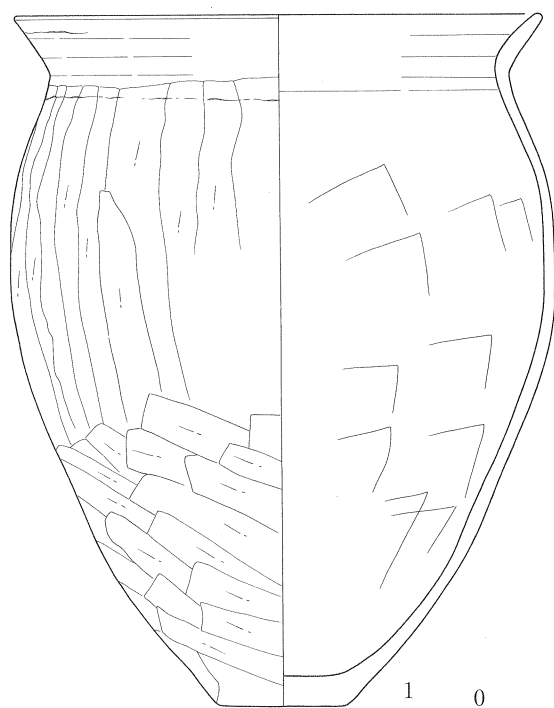
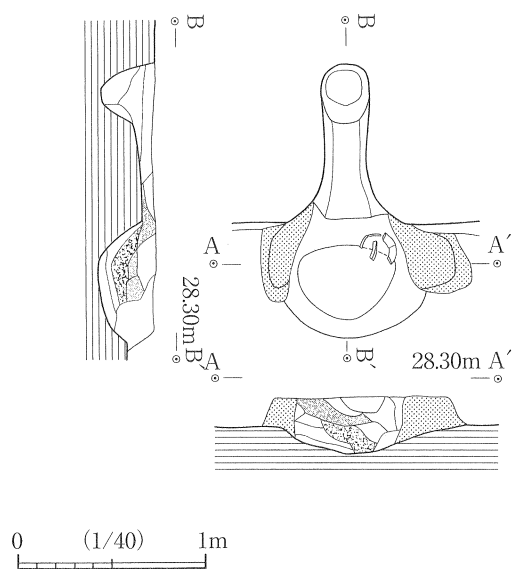
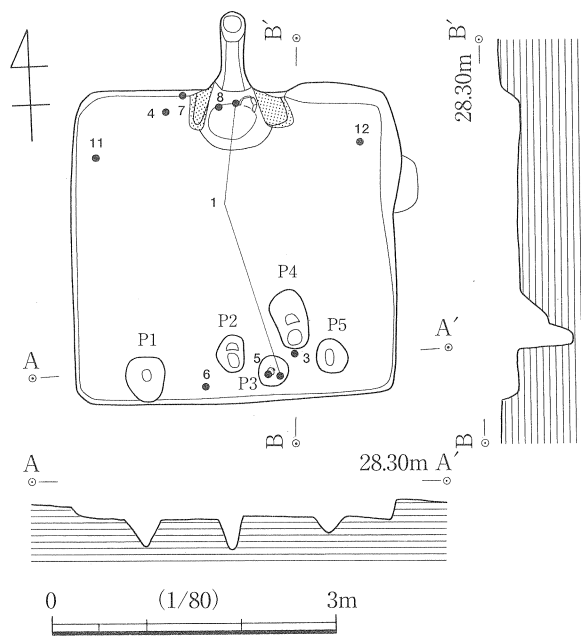
第110図 47号住居跡出土遺物

—11cm・P5—16cm 程を測り、支柱穴は不明である。壁溝は、南壁で確認するだけである。床面は中央に凹凸があるものの堅緻で、壁寄りには軟弱である。

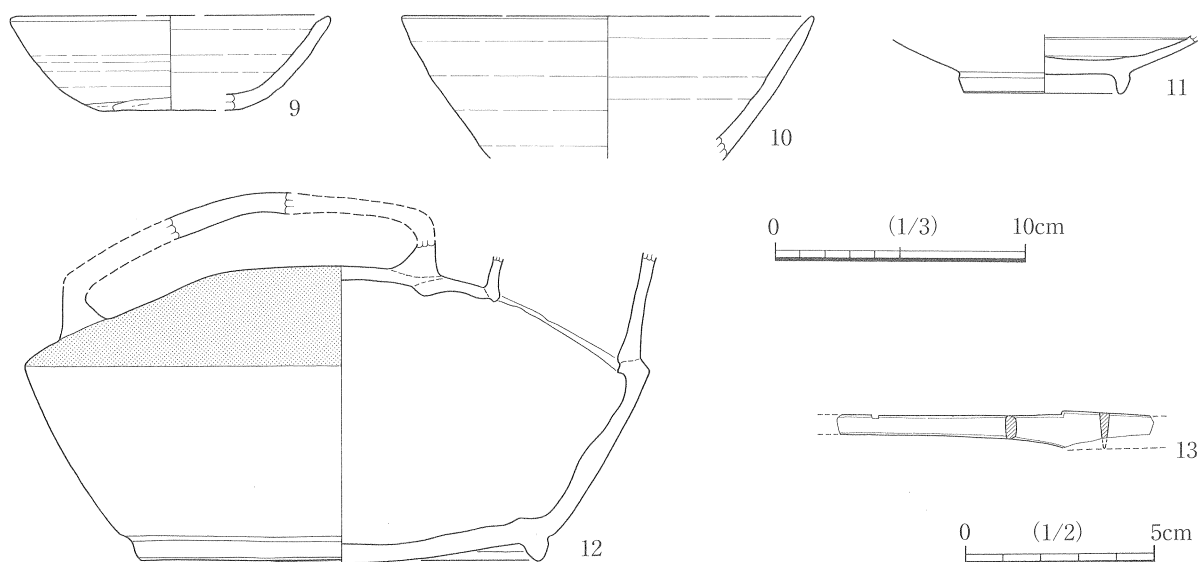
出土遺物は、1～4は土師器甕、5は土師器甑片、6は回転篋削りのロクロ土師器坏、7はロクロ



第111図 48号住居跡と出土遺物



第112図 49号住居跡と出土遺物

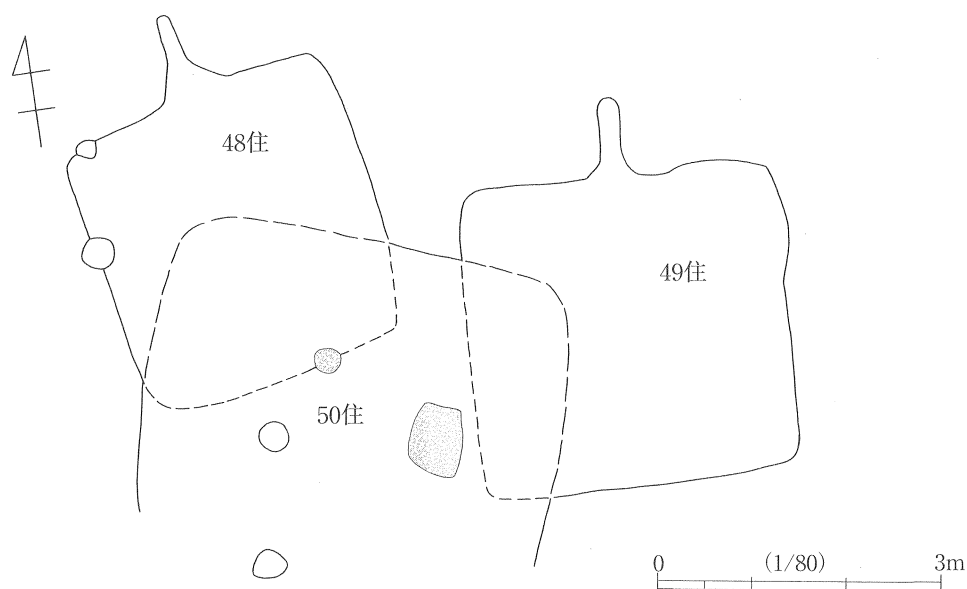


第113図 49号住居跡出土遺物

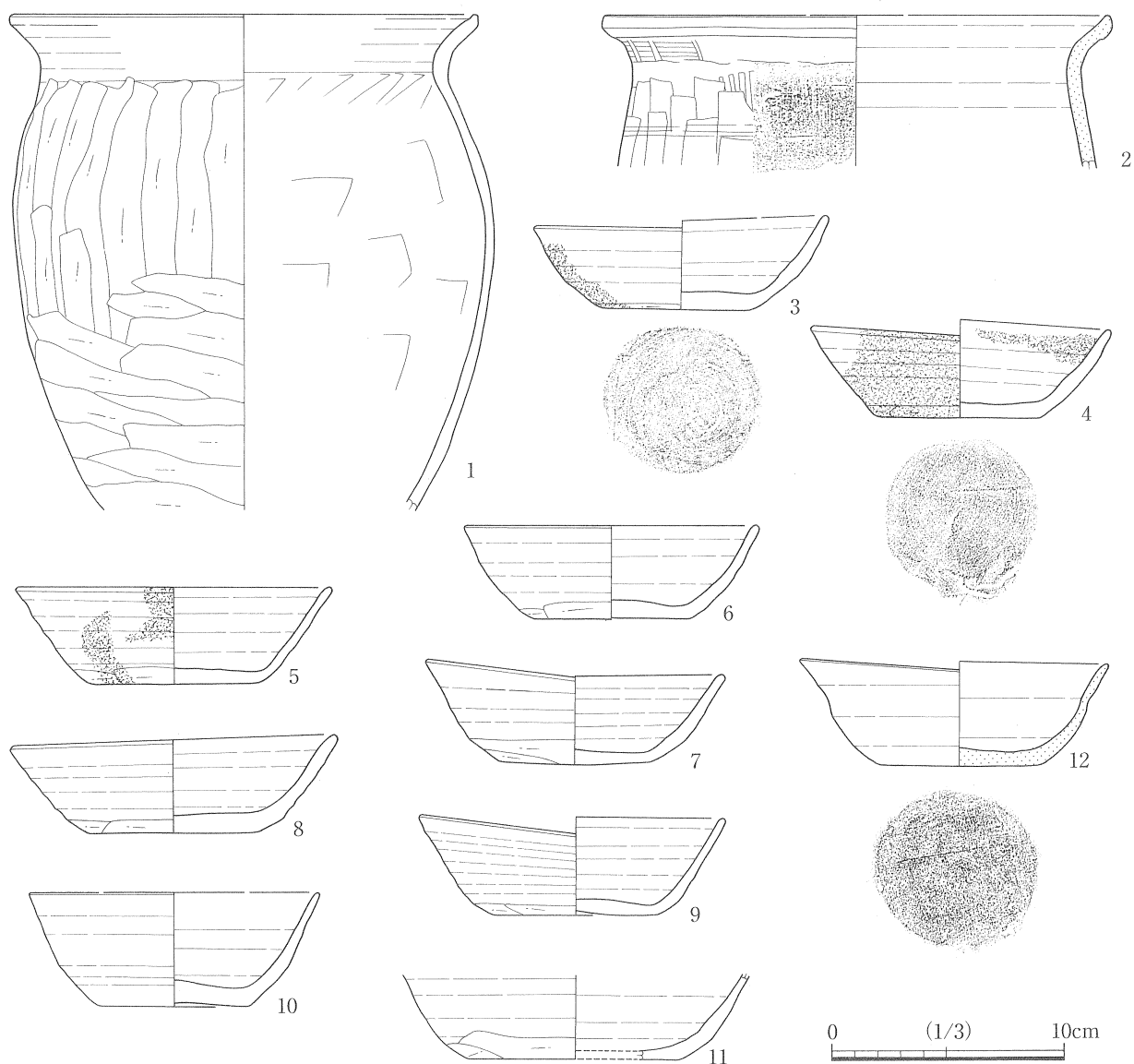
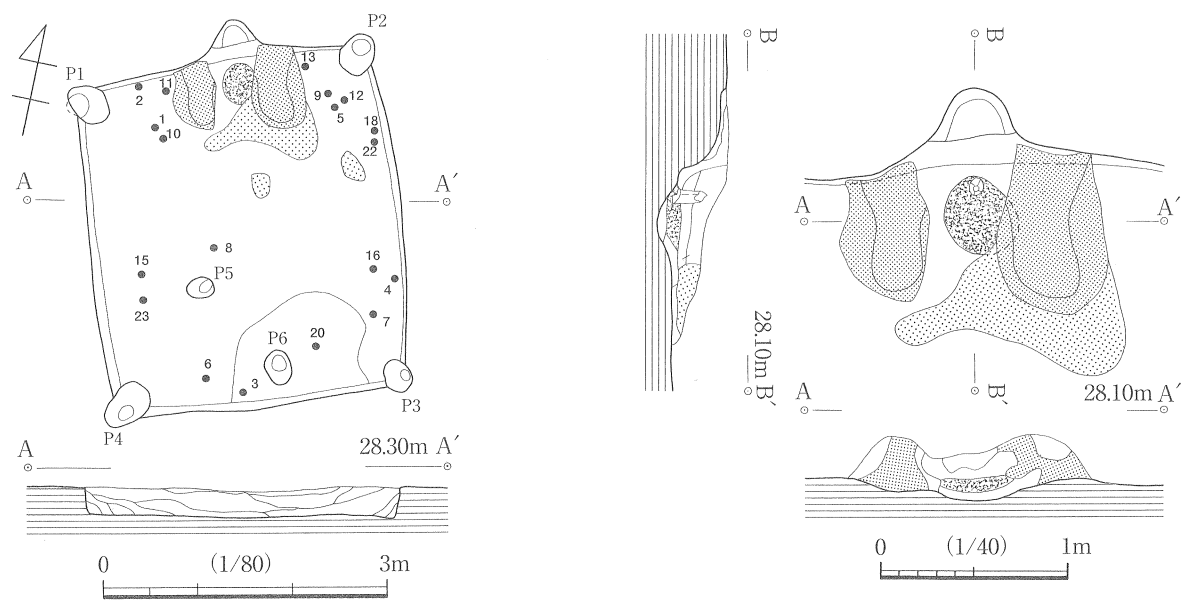
土師器高台付坏、8は釘断片か、9は刀子である。住居跡に共伴する遺物は、1・2・3・5・6・8・9がカマド袖や煙道部補強材に使用され出土し、4の土師器甕もほぼ床面から検出されている。これらの出土遺物から本住居跡は、稻荷台Ⅱ期-aの9世紀2四半期に帰属するものと看取される。

49号住居跡（第112・113図）

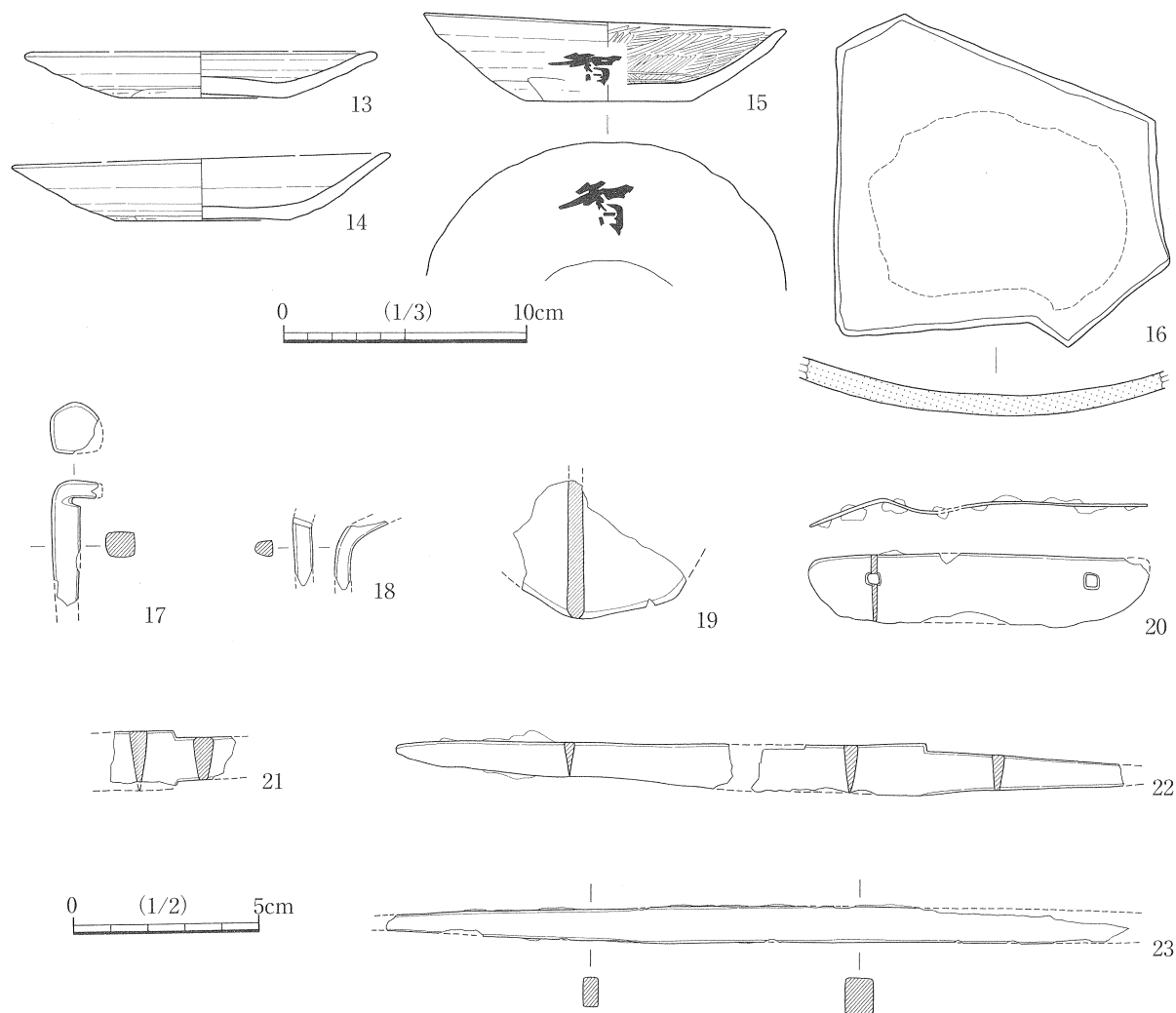
A地区南西側のBL-E7区に、プラン西側で50号住居跡と複合して検出する。規模は、主軸長3.14m（3.35m）・副軸長3.28m（3.40m）を計測する。床面積は 10.06m^2 を測る。カマドが北壁中央に設置され、袖や燃烧部は床面側でおさまり、袖部は下末吉層の白色粘土でしっかり覆われている。煙道部はやや長く突出長0.85mを測る。主軸方位はN-1°-Eを指向する。平面形は、北東隅側がやや乱れるがほぼ均整な方形を呈している。床面標高は27.90mで、確認面からの深さ20cm程を測る。



第114図 50号住居跡



第115図 51号住居跡と出土遺物



第116図 51号住居跡出土遺物

ピットの深さは、P1－31cm・P2－34cm・P3－18cm・P4－58cm・P5－17cmを測るが、主柱穴は不明で、P2は階段ピットであろう。壁溝は検出されない。床面はカマド周辺から南壁にかけて凹凸を伴いながらも比較的堅緻である。

出土遺物は、1・2は土師器甕、3は土師器甕、4～9は回転篋削りロクロ土師器坏、10はロクロ土師器坏、11は猿投産灰釉陶器碗、12は猿投産灰釉平瓶、13は刀子である。住居跡に共伴する遺物は、1がカマド燃焼部とP3から出土し接合、P3から5と13が、2・8・9がカマド燃焼部、4・6・7・12がやや床面から浮いて検出される。11は床面から5センチ程浮いて出土するが混入遺物であろう。12の灰釉平瓶は坂野編年でⅡ期古相であることや、回転篋削りのロクロ土師器坏のタイプから、本住居跡は稻荷台Ⅱ期－aの9世紀第2四半期に帰属するものと看取される。

50号住居跡（第114図）

A地区南西側のBL－E6・E7区にプラン北に48号住居跡、東に49号住居跡が複合して検出し、南側は市道で調査区域外となる。平面形、規模共に不明瞭で、床面と思われる一部の硬化面と共に焼土と白色粘土が点在しているだけである。遺物等の検出も無く帰属時期も不明である。

51号住居跡（第115・116図）

A 地区南西側のN2-E7・N1-E7区に単独で検出する。規模は、主軸長3.58m (3.70m)・副軸長3.14m (3.30m)を計測する。床面積は10.71m²を測る。カマドはほぼ北壁中央に設置され、袖や燃焼部は床面側でおさまり、袖部は下末吉層の白色粘土でしっかり覆われている。煙道部は僅かに突出し、突出長0.3mを測るだけである。主軸方位はN-18°-Wを指向する。平面形は、四隅に主柱穴を有する特異な形状で、縦長の均整な方形を呈している。床面標高は27.78mで、確認面からの深さ30cm程を測る。ピットの深さは、P1-63cm・P2-63cm・P3-62cm・P4-67cm・P5-39cm・P6-20cmを測る、主柱穴はP1・P2・P3・P4の4柱穴で、P6は階段ピットであろう。階段ピット6の南側床面は硬化し中央床面より5cm程高い。壁溝は検出されない。床面はカマド周辺から南壁にかけて凹凸があるものの比較的堅緻である。

出土遺物、1は土師器甕、2は頸部直下に平行叩き目を残す甕で土師質で千葉市域産須恵器と酷似する。3～9は回転篋削りを施すロクロ土師器坏、10は底部調整不明のロクロ土師器坏、11は手持ち篋削りのロクロ土師器坏、12は底部静止篋切り状の体部に稜を有するロクロ土師器坏。13～15は回転篋削りのロクロ土師器皿、15は内面ミガキを施し体部外面には「智」の墨書がある。16は須恵器甕片で転用硯である。17・18は釘、19は肉厚の円盤状の鉄製品、20は手鎌、21は刀子断片、22は刀子、23は棒状の鉄製品である。住居跡共伴遺物は、カマド燃焼部から14・17・19、床面直上から1・4・5・7・8・9・10・11・15・16・18・22・23が検出されている。これらの遺物から本住居跡は、稲荷台Ⅱ期-aの9世紀第2四半期に帰属するものと看取される。

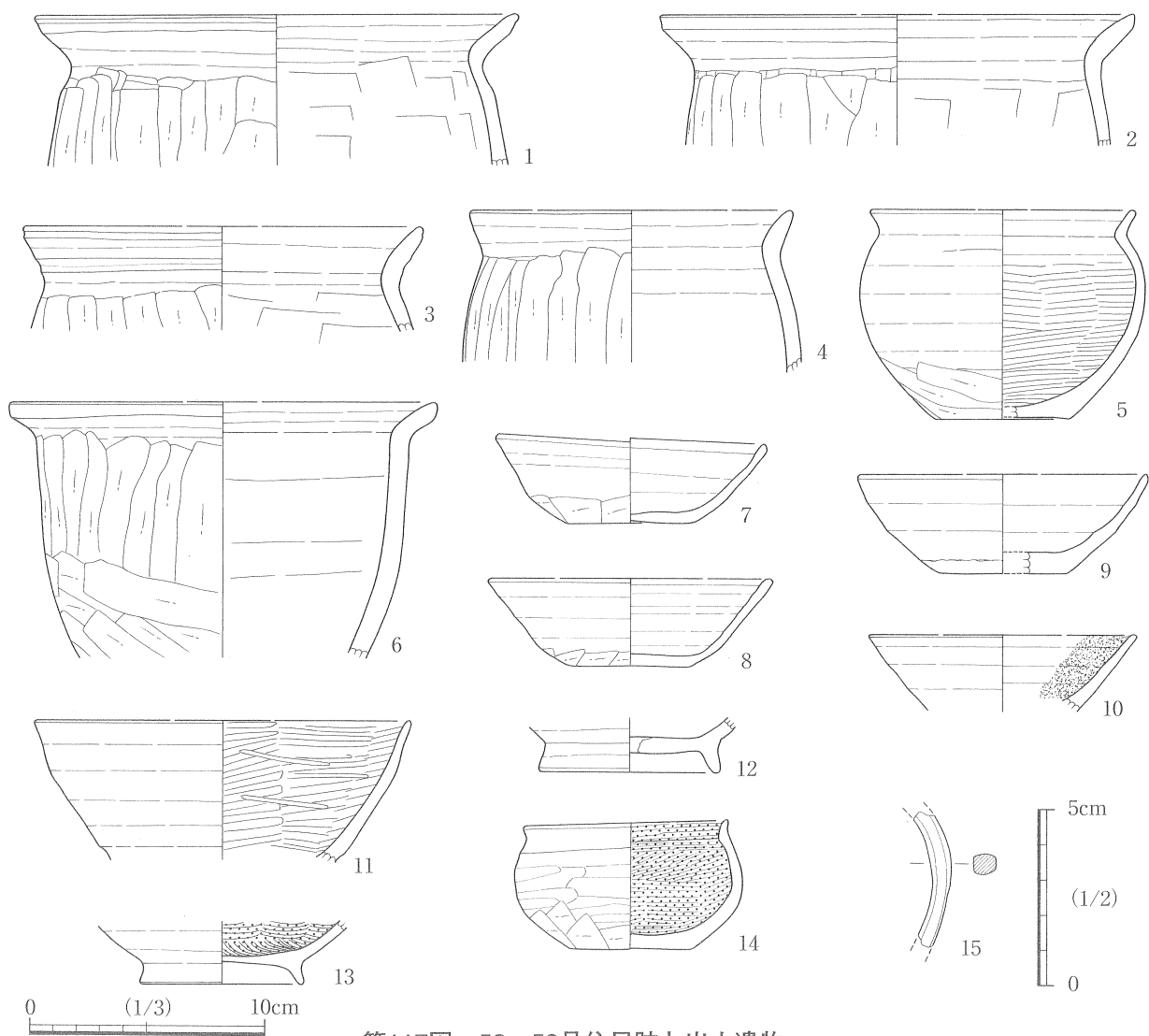
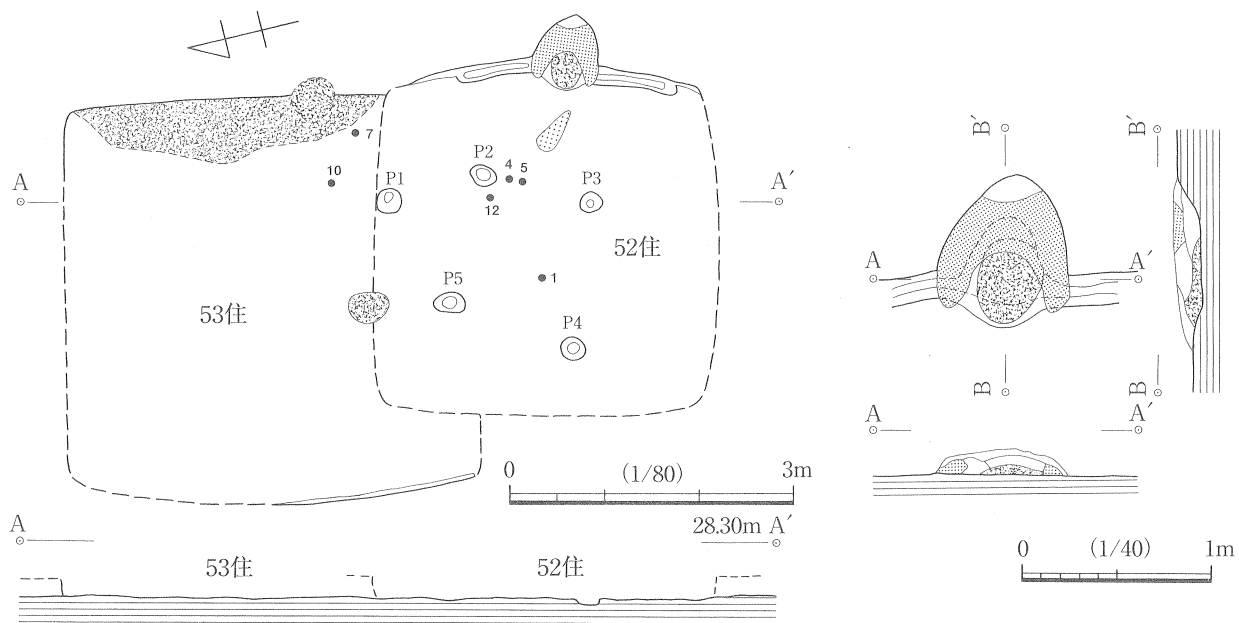
52号住居跡 (第117図)

A 地区南西側のN1-E5・BL-E5区に位置し、北側に53号住居跡と複合し、床面とカマド等でそのプランを推定するにとどまる。推定規模は、主軸長3.75m・副軸長3.64m程を計測する。床面積は12.28m²程を測る。カマドは東壁中央ほどに設置され、袖や燃焼部は壁から突出して設けられている。主軸方位はN-107°-Eを指向する。平面形は、残りの良い東壁がやや胴張りすることから全体に胴張りする方形を呈するものと看取される。床面標高は28.02mで、確認面からの深さ0～10cm程を測る。ピットの深さは、各ピット10cm程を測り、プラン内に複数のピットがあるものの主柱穴は明確にできない。壁溝は、カマド両袖に僅かに検出されただけである。

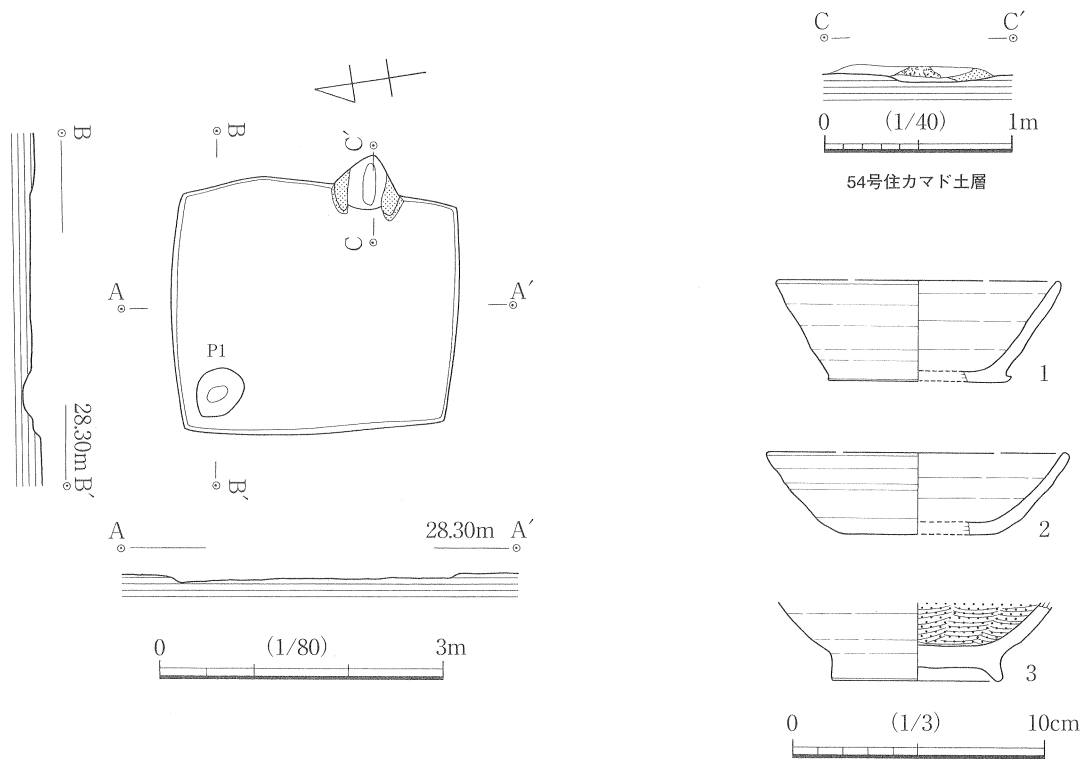
53号住居跡 (第117図)

A 地区南西側のN1-E5・N2-E5区に位置し、南側に52号住居跡と複合して、東カマドの燃焼部と東壁に堆積する焼土と粘土混じり土層や床面の残存でそのプランを想定するにとどまる。推定規模は、主軸長4.34m程を計測する。床面積は18.19m²程を測る。カマドは東壁の南寄りに設置され、壁から突出した燃焼部が残るだけである。主軸方位はN-106°-Eを指向する。平面形は、東壁と西壁が僅かに残り、方形を呈するものと看取される。床面標高は28.08m程で、確認面からの深さ0～5cm程を測る。主柱穴は検出されない。

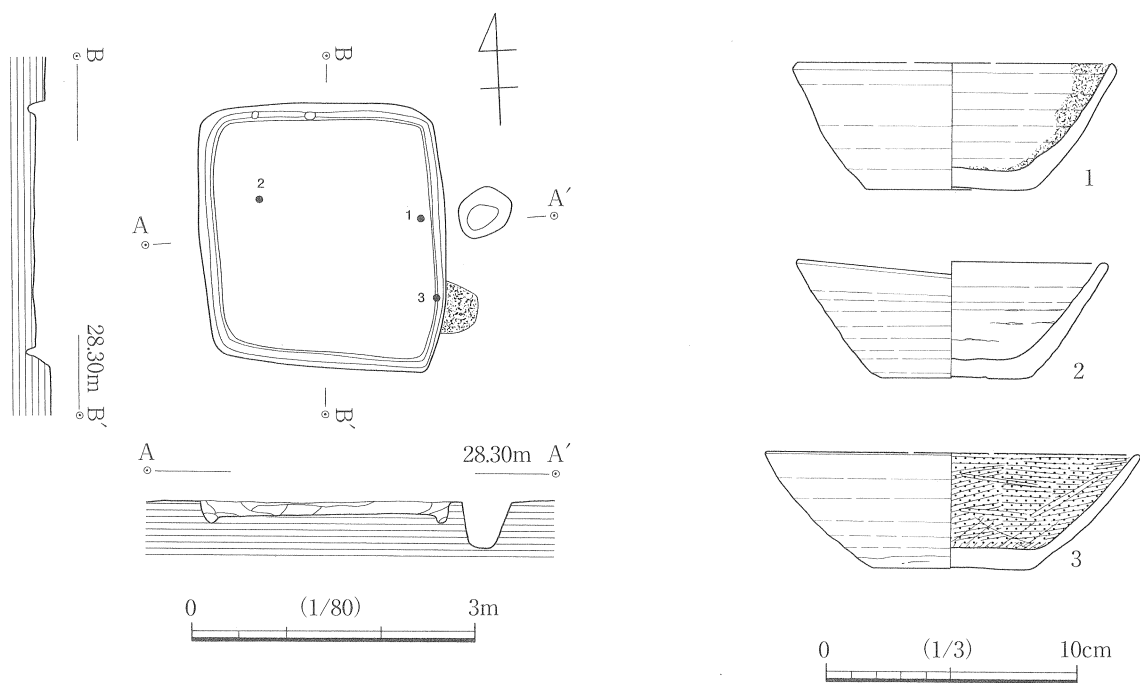
52・53号住居跡出土遺物は、平面プランが明確でなく、床面も連続しほぼ同一レベルにあることから大部分が覆土中の遺物として一括で取り上げられている。1～4は土師器甕、5は小形のロクロ土師器甕で内面ミガキを施している。6は土師器甕か、7・8は手持ち篋削りのロクロ土師器、9・10はロクロ土師器坏で、10の内面にはタール状のカーボンが付着し灯明坏であろう。11は内面に光沢の有るミガキを施すロクロ土師器坏。13は内黒ミガキのロクロ土師器高台付坏、14は内黒ミガキの小形壺。



第117図 52・53号住居跡と出土遺物



第118図 54号住居跡と出土遺物



第119図 55号住居跡と出土遺物

15は釘の断片である。住居跡共伴遺物は、1・4・5・12が52号住居跡床面、14がカマド燃焼部から出土し、7・10のロクロ土師器坏が53号住居推定プラン内床面から検出され、他は52・53号住居跡覆土からの出土である。これらの遺物から兩住居跡は、10世紀第2～第3四半世紀に帰属するものと看取される。

54号住居跡（第118図）

A地区南西側のN4-E5・N4-E6区に単独で検出する。規模は、主軸長2.54m（2.66m）・副軸長2.94m（3.02m）を計測する。床面積は6.94m²を測る。カマドは東壁南側に設置され、袖部や燃焼部は突出して構築され、突出長0.4m程を測る。煙道部構造は不明。主軸方位は、N-99°-Eを指向する。平面形は、北壁長2.55m、東壁長2.9m、南壁長2.3m、西壁長2.75mと各壁長が異なり、横に長い均整を欠く方形を呈している。床面標高は27.96mで、確認面からの深さ10cm程を測る。ピットの深さは、P1-11cmを測るが、主柱穴および壁溝は検出されない。床面はカマド周辺に下末吉層白色粘土を張り床するが、他の床面は軟弱である。

出土遺物は、1・2は小片であるが回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、3は内黒ミガキのロクロ土師器高台付坏である。何れもカマドから検出され住居跡に共伴する遺物である。1・2のロクロ土師器坏から稻荷台Ⅳ期の10世紀前半に帰属するものと看取される。

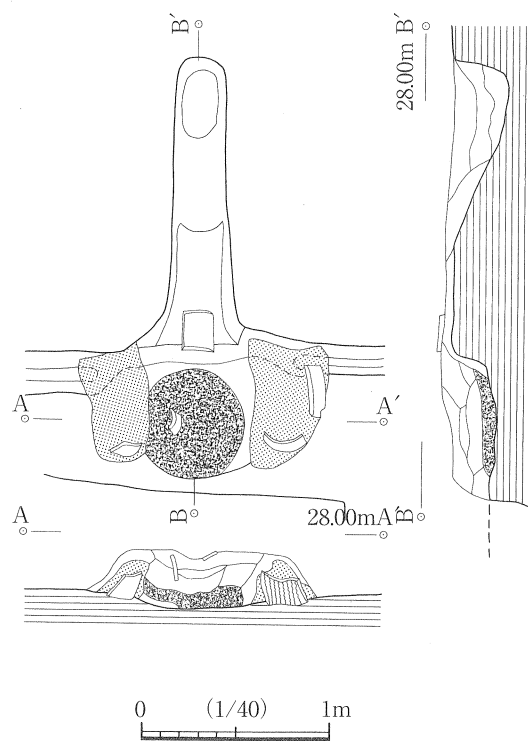
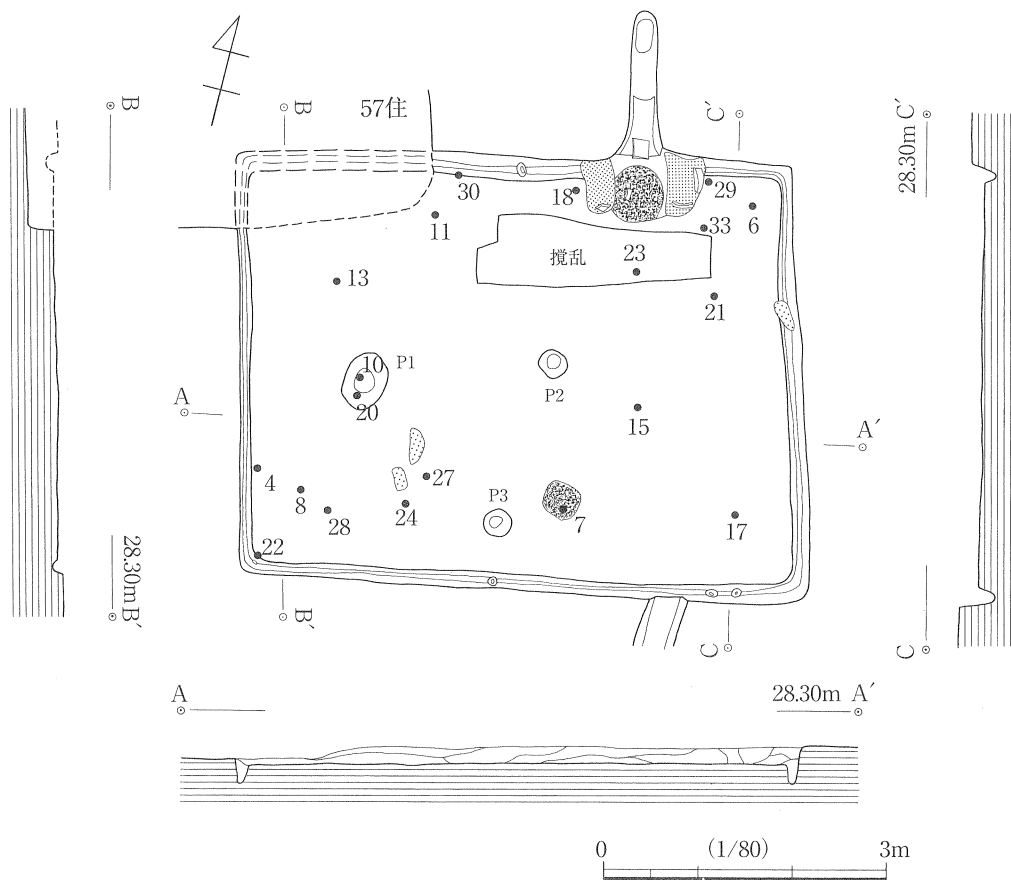
55号住居跡（第119図）

A地区南西側のN4-E4・N4-E5区に単独で検出する。カマドが無く主軸方位は不明であるが、南北長2.45m（2.6m）・東西長2.45m（2.6m）を計測する。長軸方位はN-4°-Eを指向する。床面積は6.22m²を測る。平面形は、各壁長2.3m～2.7mを測り異なり、また各隅丸身を有し、均整を欠く方形を呈している。床面標高は27.82mで、確認面からの深さ15cm程を測る。ピットおよび支柱穴は検出されない。壁溝は四周して検出される。床面は全体に顕著な踏み跡が無い。東壁南側に竪穴外に炉跡状の焼土堆積が観察されるが、本住居との施設との関係は無いものであろう。

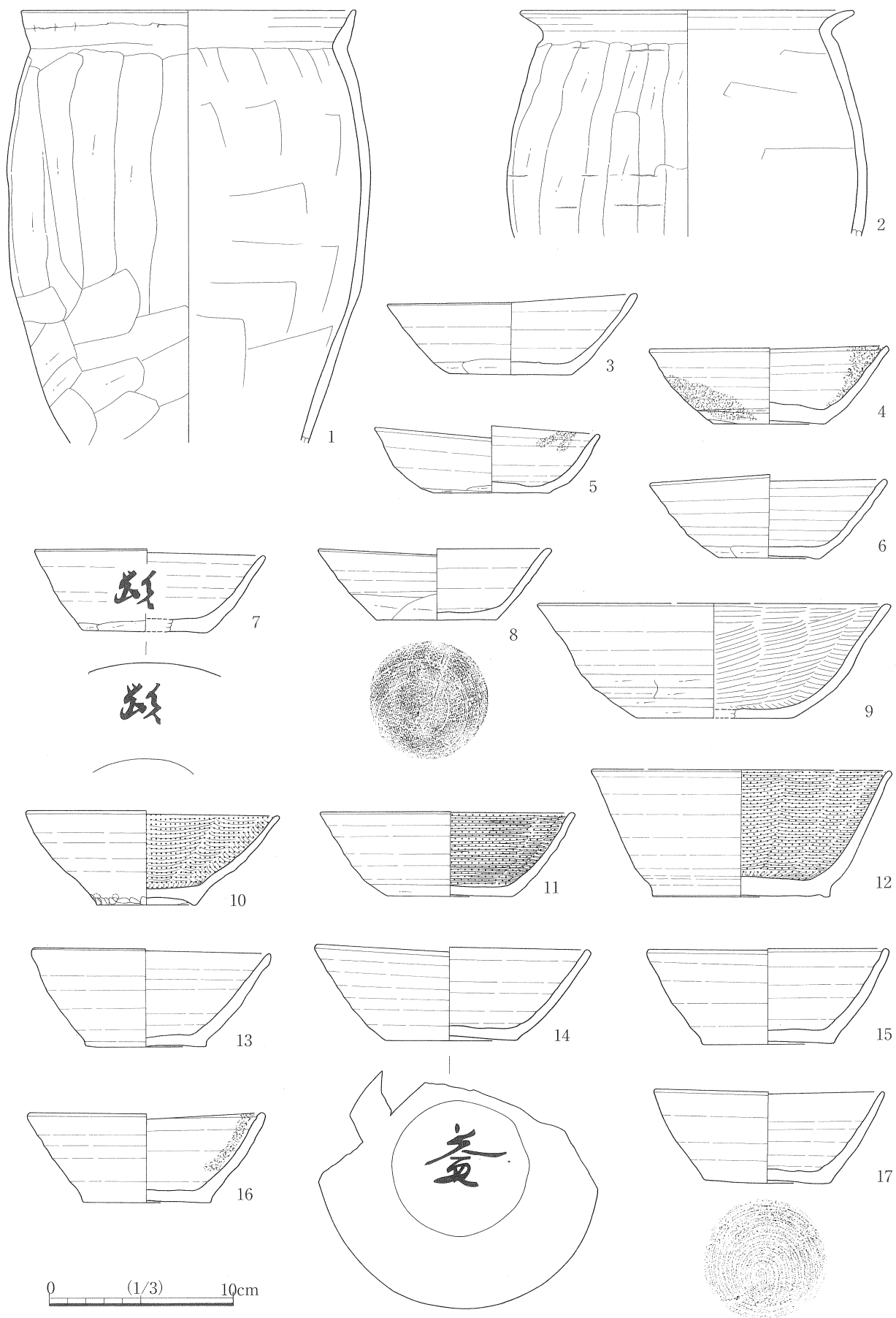
出土遺物は、1・2は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏で、1にはタール状カーボンが付着し灯明坏である。3は体部下端および底部回転篋削りを施す内黒ミガキのロクロ土師器坏ある。何れも床面直上から検出され住居跡と共伴する遺物である。また、覆土から承和昌寶（第269図24）が検出されている。1～3の出土遺物から、本住居跡の時期は、稻荷台Ⅲ期-aの9世紀第4四半期を中心とするものと看取される。

56号住居跡（第120・121・122図）

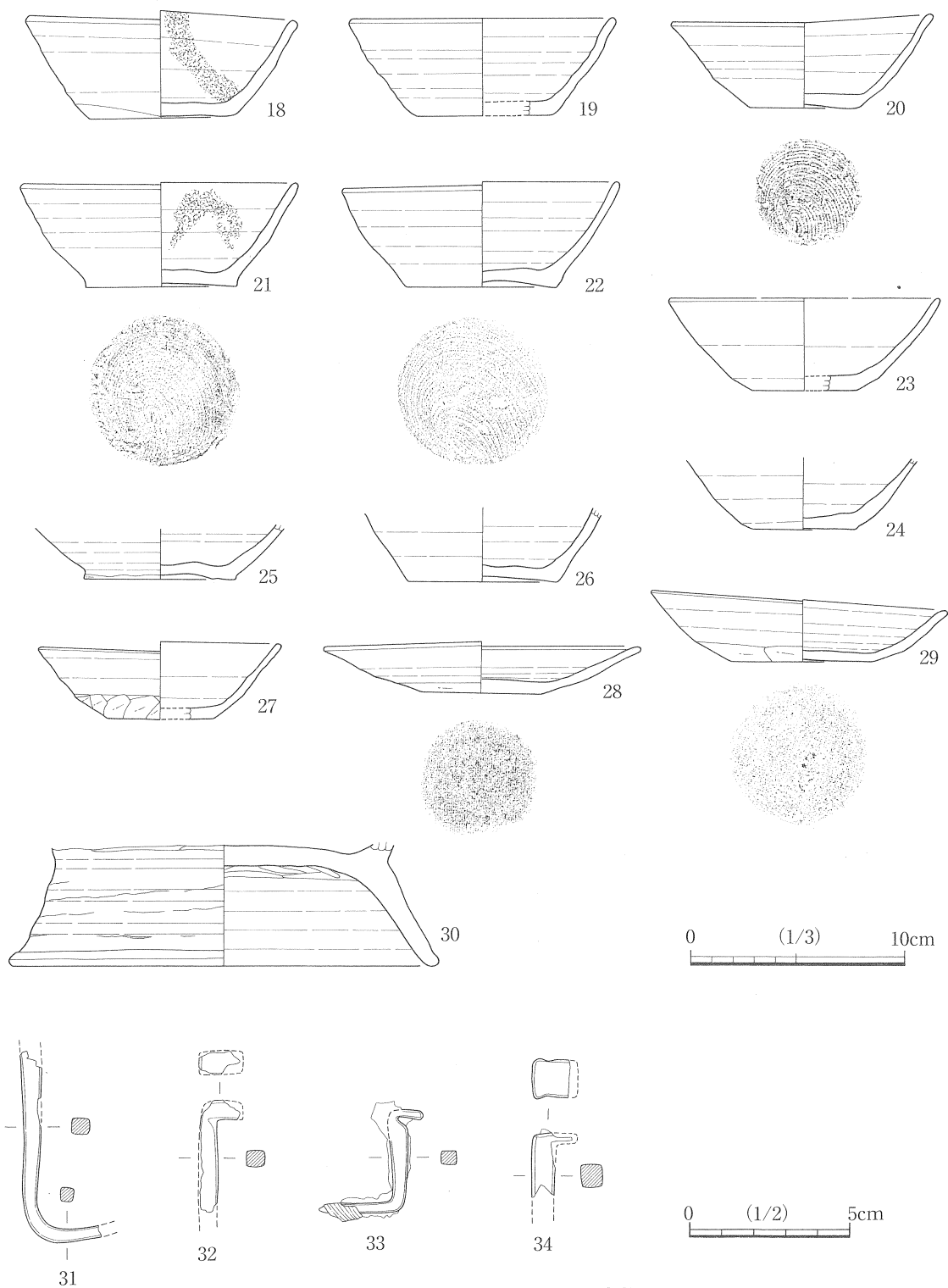
A地区西側のN4-E2・N5-E2区に位置し、プラン北西隅で57号住居跡の壁を掘り込んで検出する。規模は、主軸長4.42m（4.60m）・副軸長5.80m（5.90m）を計測する。床面積は25.70m²を測る。カマドは北壁の北東隅に近接して設けられ、袖部および燃焼部は床面側でほぼ収まっている。煙道部は長く壁から1.53m突出し、煙道部先端は深く掘られている。カマド袖部は下末吉層の白色粘土で覆われ布目瓦で補強されている。主軸方位はN-9°-Wを指向する。平面形は、北壁長5.88m・東壁長4.65m・南壁長6.05m・西壁4.47mを測り、横長のやや均整を欠く方形を呈している。床面標高は27.75mで、確認面からの深さ20cm程を測る。ピットの深さは、P1-25cm・P2-45cm・P3-8cmを測り、主柱穴は明確にできない。P3は出入り口の階段ピットか。壁溝は、四周して設けられる。床面は硬く踏みしめられた形跡が無く、床面南側に焼土と白色粘土が点在する。



第120図 56号住居跡



第121図 56号住居跡出土遺物



第122図 56号住居跡出土遺物

出土遺物は、1・2は土師器甕。3～9は体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器坏で、4・5の内面にはタール状のカーボンが付着し灯明坏で、7の体部外面に「□」墨書が、9は大形で内面ミガキを施している。10～12は内黒ミガキのロクロ土師器坏、10には断面三角形の低い高台を有し、12には削り出し状の低い高台がある。13～26は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏で、16・18・21の内面にはタール状のカーボンが付着し灯明坏であろう。14の底部外面には「益」の墨書が書かれてい

る。27は手持ち篋削りのロクロ土師器坏。28・29は回転篋削りを施すロクロ土師器皿。30は土師器大型台付鉢。31～34は断面角状の釘である。

住居跡と共伴する遺物は、1・3・5・12・4・16がカマド燃焼部、4・6・8・11・13・15・18・21・22・28・29・30・33が床面等から検出されている。7・9・17や他の釘も共伴遺物として差し支えないであろう。10と20はP1内から出土し、P1が後世のピットであることがわかる。これらの共伴遺物から本住居跡は稲荷台Ⅱ期－b期の9世紀第3四半期を中心とした時期であろう。

57号住居跡（第123図）

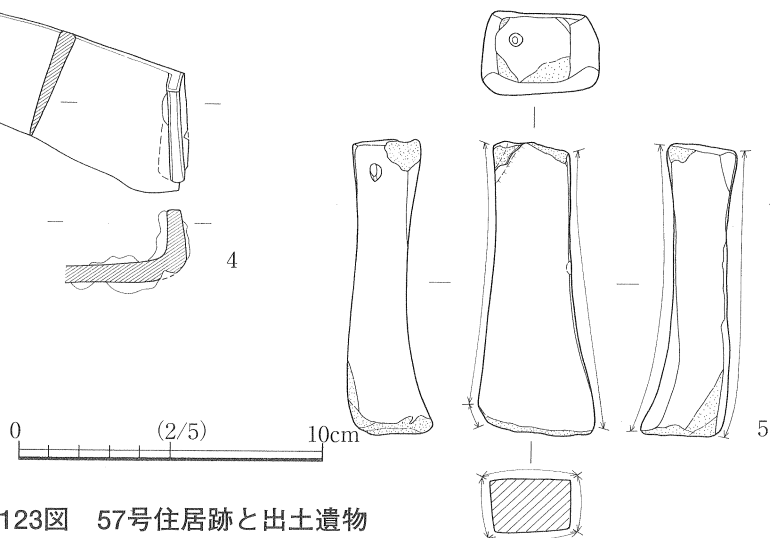
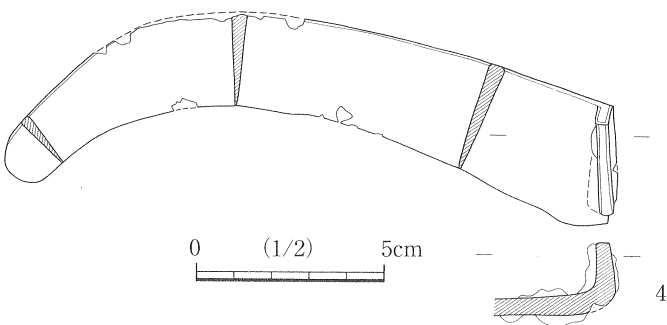
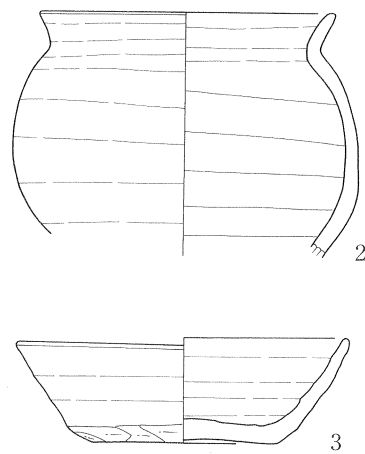
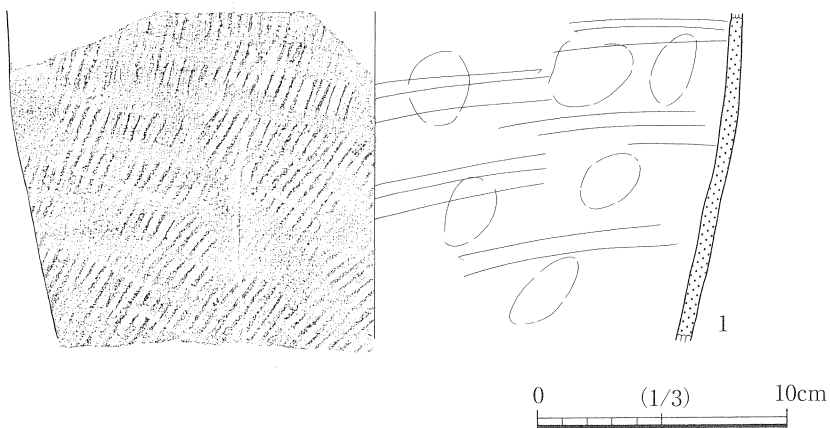
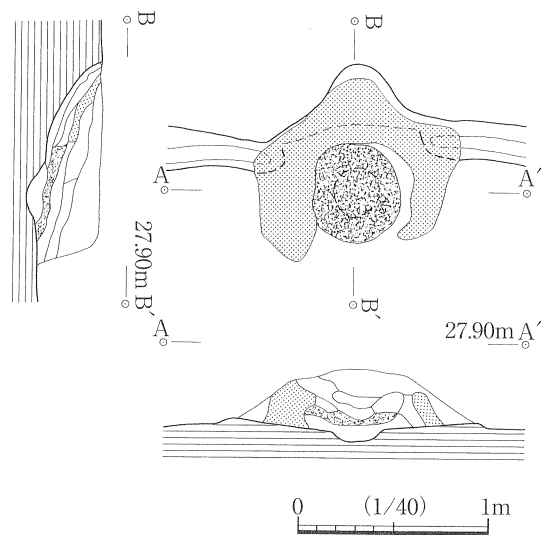
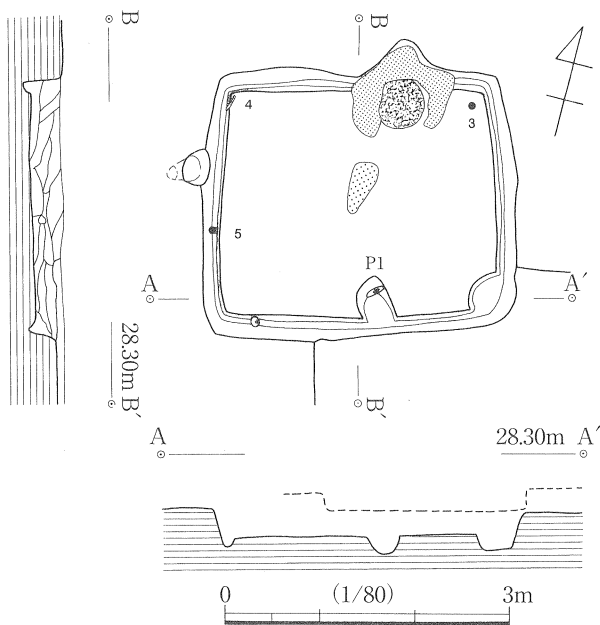
A地区西側のN5－E1・N5－E2区にプラン南西で、56号住居跡に壁を掘り込まれて検出する。規模は、主軸長2.62m（2.80m）・副軸長3.08m（3.32m）を計測する。床面積は7.62m²を測る。カマドは北壁の東側に寄って設けられ、袖部及び燃焼部は床面側でほぼおさまっている。煙道部は短く突出し、突出長0.3mを測るにすぎない。カマド袖部や煙道部天井は下末吉層の白色粘土で覆われている。主軸方位はN－12°－Wを指向する。平面形は、北壁長2.95m・東壁長2.7m・南壁長3.2m・西壁2.8mを測り、やや胴張りする横長の均整を欠く方形を呈している。床面標高は27.46mで、確認面からの深さ35cm程を測る。ピット1（P1）は段を有し深さ20cmと33cmを測り、階段ピットであろう。主柱穴は確認できない。壁溝は、カマド両袖下から掘り込まれ四周して設けられる。床面は平坦で堅緻である。

出土遺物は、1は千葉市域産須恵器甕でカマド袖部補強材として使用されていた。2はロクロ土師器甕で底部を欠損している。3は手持ち篋削りロクロ土師器坏で胎土に砂粒が多く焼成などから非在地（下総産？）と看取される。4は鎌。5は頭部に穿孔を有する砥石である。1・2がカマドから検出され、3・4・5も床面や壁溝内から出土する。2のロクロ甕胴部がやや球形を呈するものの、これらの共伴遺物から本住居跡は稲荷台Ⅱ期－a～bの所産であろう。

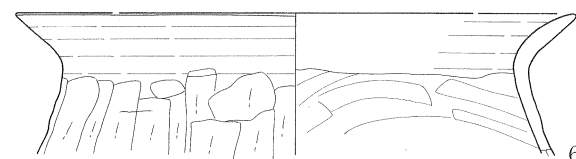
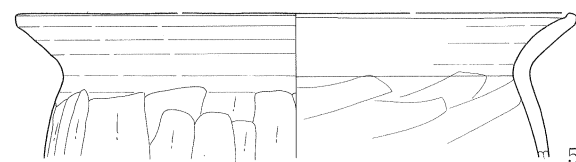
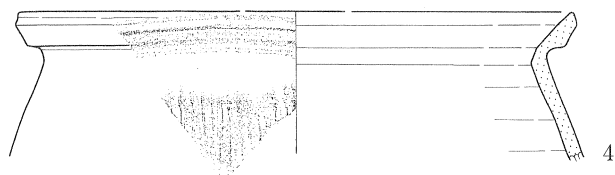
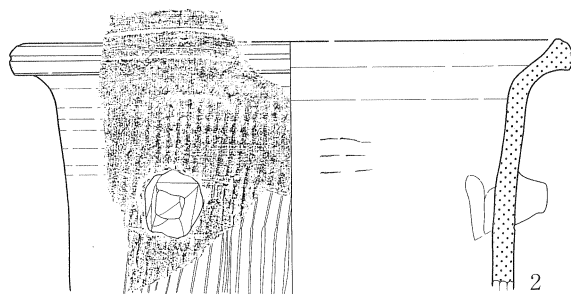
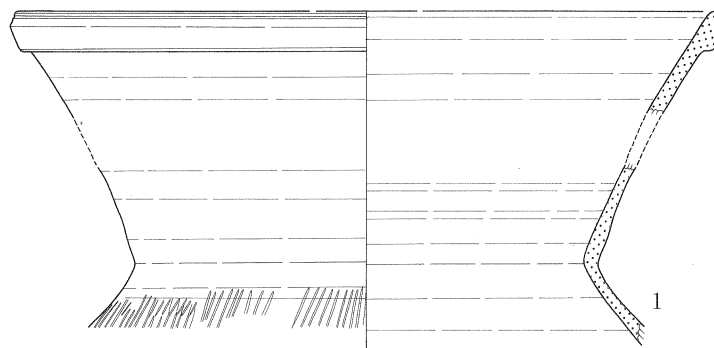
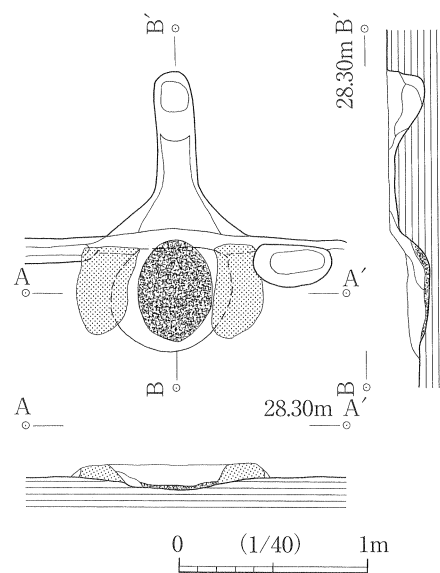
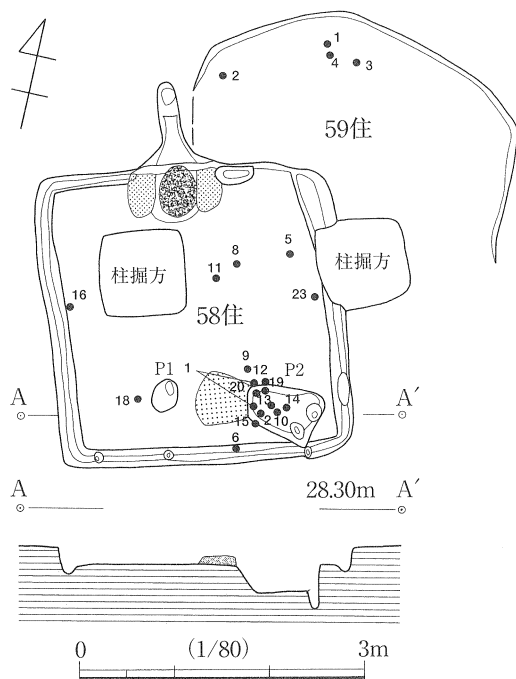
58号住居跡（第124・125図）

A地区西側のN5－E3・N5－E4・N6－E3・N6－E4区に位置し、プラン北東覆土上層に59号住居跡が壁を掘り込み、東壁と中央床面を掘り込む42号掘立柱建物跡と複合して検出する。規模は、主軸長3.06m（3.16m）・副軸長3.0m（3.12m）を計測する。床面積は8.88m²を測る。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、袖部及び燃焼部は床面側でおさまり、カマド袖部は下末吉層の白色粘土で覆われている。煙道部は0.8mほど突出し、先端部はピット状に掘られている。主軸方位はN－15°－Wを指向する。平面形は各隅に丸身を有し、方形を呈している。床面標高は27.70mで、確認面からの深さ20cm程を測る。P1は深さ36cm、落ち込み状のP2は30cmを測る。主柱穴は確認できない。壁溝は、カマド左袖で途切れる他は四周して設けられる。床面は比較的硬く踏みしめられている。

出土遺物、1は千葉市域産須恵器で甕、2・4・8は千葉市域産須恵器で甕が甑、3は千葉市域産須恵器で甑底部、5～7は土師器甕、9は底部のみの遺存で焼成の甘い須恵器高台付坏で内面にタール状のカーボンが付着し、時期が異なることから転用で底部を灯明皿に使用したものであろう。10は回転糸切り無調整で市原産の石川窯の須恵器坏、11は底部回転篋削りで内面に焼成後「×」線刻した市原産の永田・不入窯須恵器坏、12～16が回転篋削りロクロ土師器坏、17・18が手持ち篋削りのロクロ土師器坏、19が底部のみ手持ち篋削りの坏で内面にタール状のカーボンが付着し灯明皿に使用したものであろう。20は内黒ミガキの手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏、21は回転篋削りロクロ土師器皿、

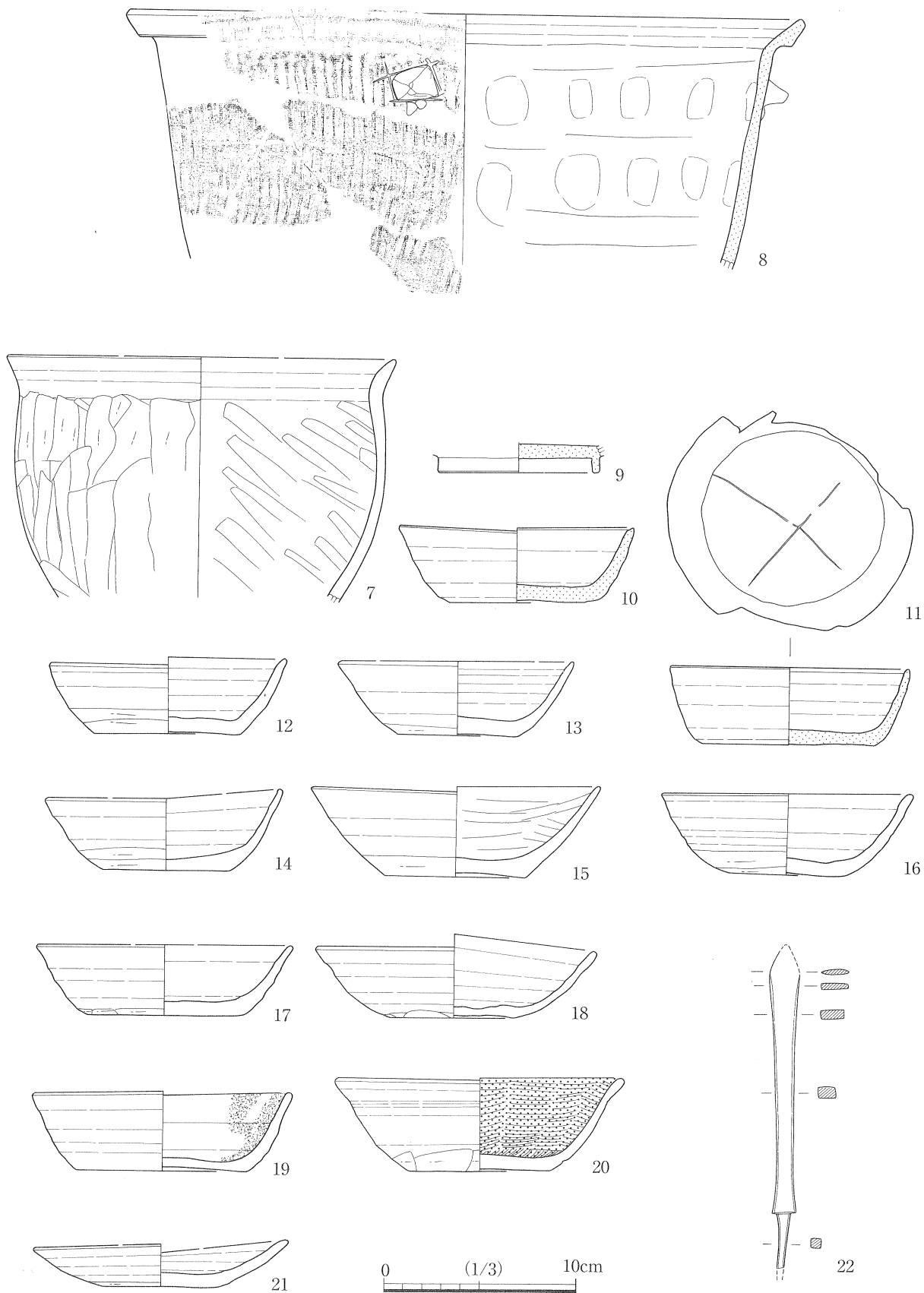


第123図 57号住居跡と出土遺物



0 (1/3) 10cm

第124図 58・59号住居跡と出土遺物



第125図 58号住居跡出土遺物

23は鉄鏃である。住居跡に共伴する遺物は、1・5・8・9・11・18が床面直上、2・6・10・12・13・14・15・16・19・20が床面よりやや浮いて出土するが15以外は共伴遺物と見てよかろう。10・11は共に市原産須恵器で共伴して出土することは稀である。また、12ロクロ土師器坏は、内面に明確な稜線を残し、底部と体部の境が明瞭である。本跡出土土器は古相と新相が混在する様相を呈しているが、これらの共伴遺物から本跡は、稲荷台Ⅱ期-aでもⅠ期を含んだ9世紀第1～2四半期の所産であろうか。

59号住居跡（第124・126図）

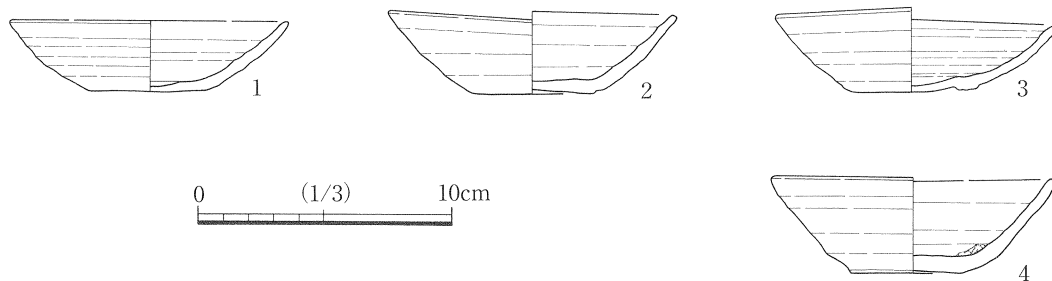
58号住居跡北東覆土上層に床面の一部を構築し検出する。床面と僅かな立ち上がりの壁の存在で平面プランを想定するだけで有る。規模は径3.4m程を測り、平面は不整な円形を呈する。

出土遺物は、床面から口径と底径の縮小化する回転糸切り無調整のロクロ土師器坏を検出する。これらの遺物から本住居跡は、稲荷台Ⅴ期の10世紀第3四半期の所産と看取される。

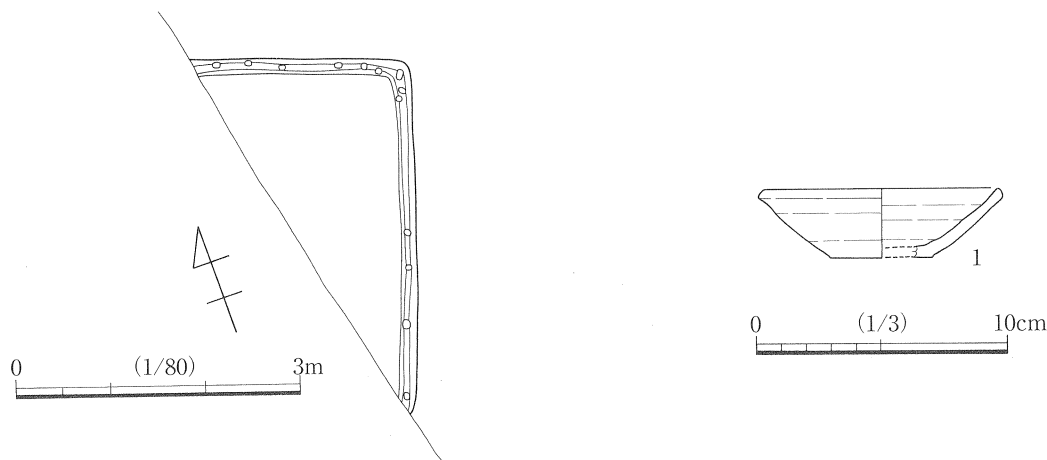
60号住居跡（第127図）

A地区西側のN6-E1・N7-E1区にプラン西側を調査区域外に置き検出する。検出は北東隅と北壁の一部2.3m、東壁はほぼ完掘でき3.7m程を測る。カマドは検出されないが、北壁にもその存在の痕跡がなく、カマドを設けたとすると西か南になろう。東壁の方位はN-25°-Eを指向する。床面標高は27.70mで、確認面からの深さ15cm程を測る。主柱穴は確認できない。壁溝は調査範囲では確認された。床面はあまり踏みしめられていない。

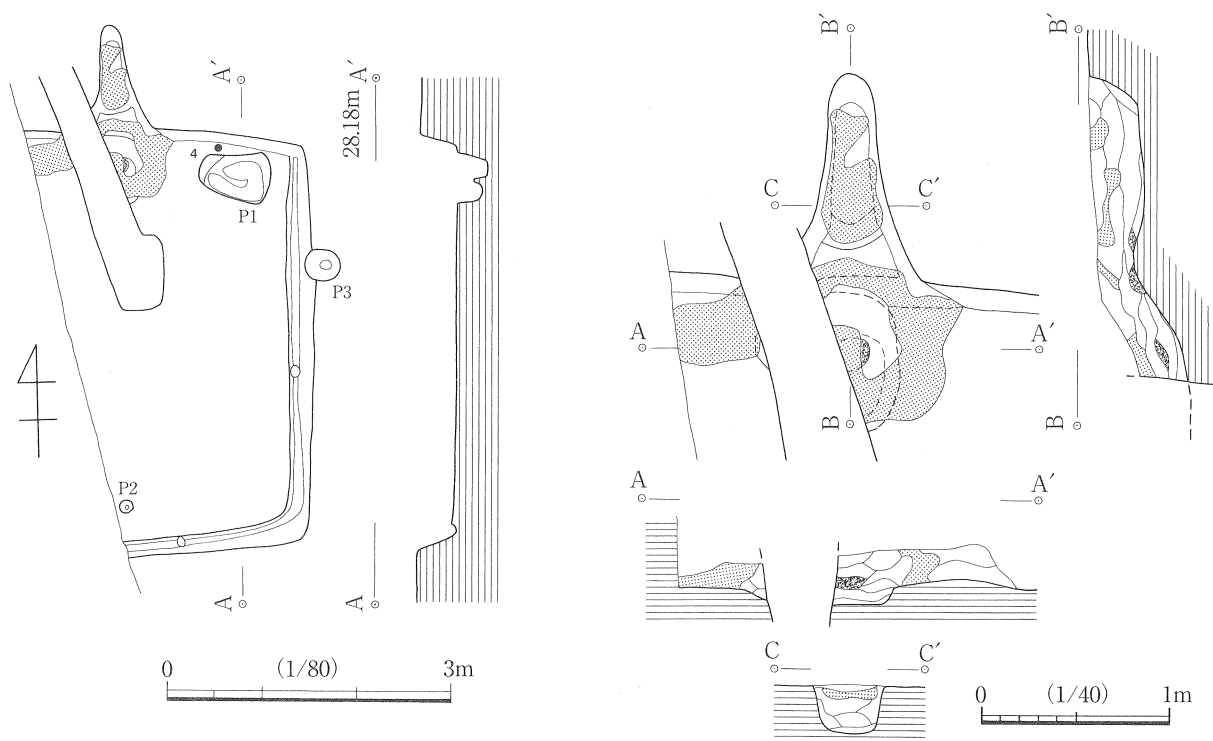
出土遺物は、覆土中の出土のロクロ土師器坏で回転糸切り無調整である。住居跡の所属を示す資料がない。ロクロ土師器坏の口径は極小となり体部も大きく開くことから、稲荷台Ⅴ期の10世紀後半代の様相を呈している。



第126図 59号住居跡出土遺物



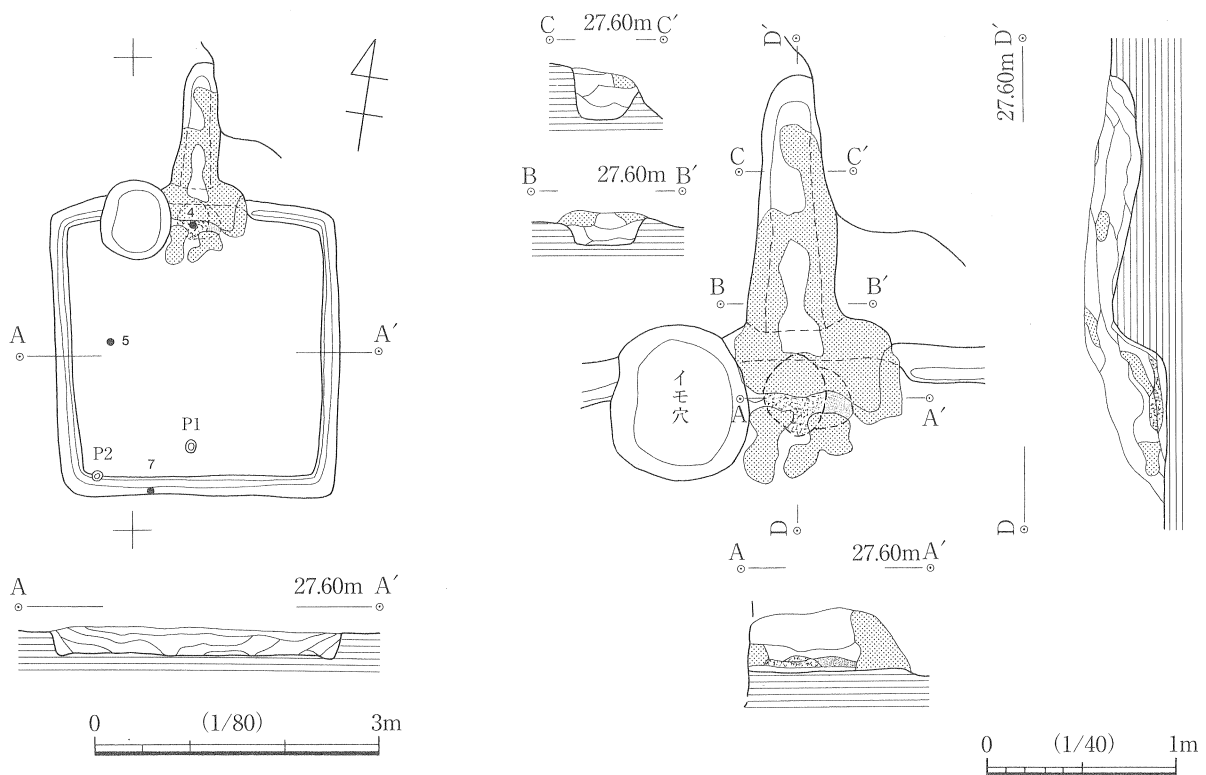
第127図 60号住居跡と出土遺物



第128図 61号住居跡と出土遺物

61号住居跡（第128図）

A 地区西北端の N8-E1・N9-E1 区にプラン東半分を調査区域外に置き検出する。規模は、主軸長4.38m（4.52m）を計測し、北壁検出長2.9m・南壁検出長1.9m、東壁は4.25mを計測する。カマドは北壁のほぼ中央に設けられたと思われ、左袖部は大きく攪乱されている。袖部および燃焼部は床面側でおさまり、カマド袖部や煙道部天井は下末吉層の白色粘土で覆われている。煙道部は1.1m ほ



第129図 62号住居跡

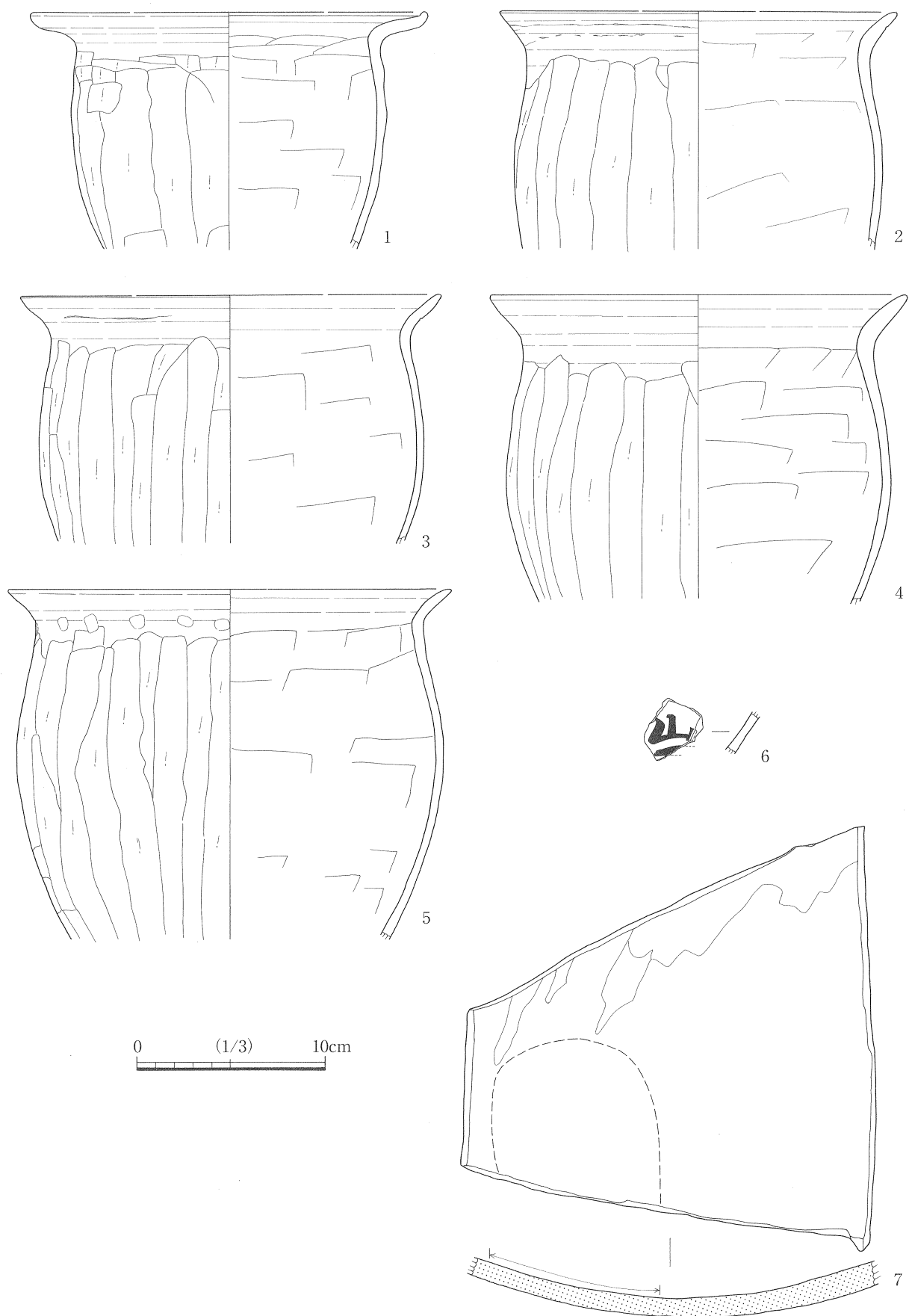
ど突出している。主軸方位は $N-2^{\circ}-E$ を指向する。平面形は北壁がカマドを頂点に胴張りするが、均整な方形を呈するものと看取される。床面標高は27.32mで、確認面からの深さ45cm程を測る。ピットの深さは、 $P1-30\text{cm}$ ・ $P2-9\text{cm}$ ・ $P3-33\text{cm}$ を測る。 $P1$ は貯蔵用ピットで、 $P2$ は出入り口の階段ピットであろうか。主柱穴は不明である。壁溝は、東壁と南壁では確認されるが、カマド右袖の北壁では検出されない。床面は平坦で堅緻に遺存している。

出土遺物、1・2・3は土師器甕、4は市原産須恵器坏で底部外面に「京」を墨書している。5はロクロ土師器高台付坏で底部外面に「□」の墨書がある。6は底部を匏削りと思われるロクロ土師器坏である。

住居跡と共伴する遺物は、1・6がカマド燃焼部からで、4はカマド右袖の床面から検出されている。これらの共伴遺物から本住居跡は、稻荷台A期の8世紀第3～4四半期の所産であろうか。

62号住居跡（第129・130図）

B地区西側のN1-W2・N1-W3区に単独で検出し、北壁のカマド左袖に円形のイモ穴の攪乱がある。規模は、主軸長2.92m (3.14m)・副軸長2.74m (3.02m)を計測する。床面積は 8.02m^2 を測る。カマドは北壁の中央に設けられ、袖部および燃焼部は突出して構築され、煙道部先端は壁から緩やかに傾斜し住居壁より1.45m突出している。カマド袖部や煙道部天井は下末吉層の白色粘土で覆われている。主軸方位は $N-7^{\circ}-W$ を指向する。平面形は、北壁長3.0m・東壁長3.05m・南壁長2.85m・西壁長3.1mを測り、北壁がカマドを頂点に胴張りし、やや均整を欠くがほぼ方形を呈している。床面標高は27.04mで、確認面からの深さ25cm程を測る。ピットの深さは、 $P1-9\text{cm}$ ・ $P2-18\text{cm}$ を測り、 $P1$ は階段ピットであろう。主柱穴は確認できない。壁溝は、四周して設けられる。



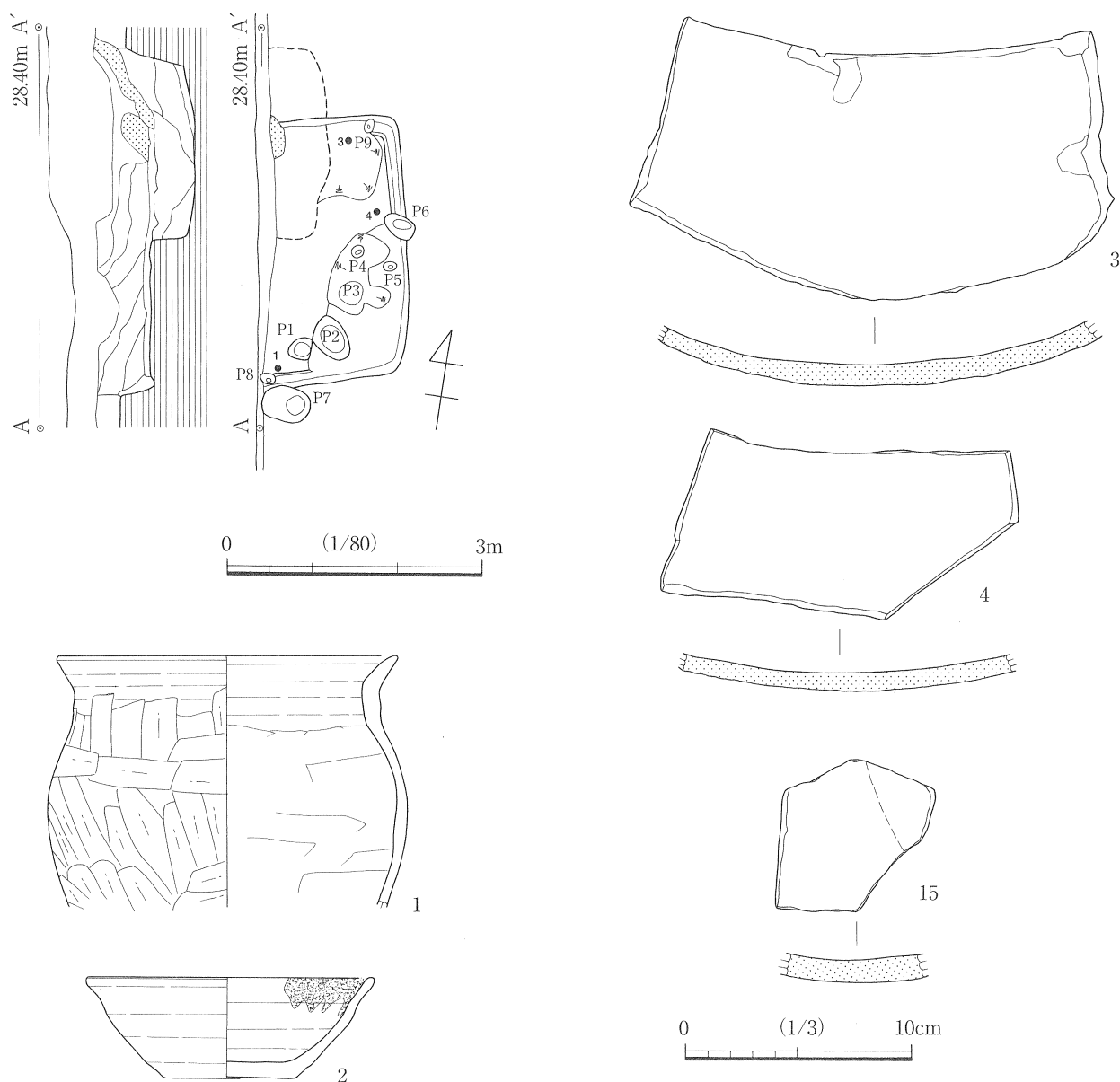
第130图 62号住居跡出土遺物

床面は踏みしめられていない。

出土遺物は、1～5は土師器甕、6はロクロ土師器坏の体部小片で「山万」であろうか墨書土器である。7は大型の須恵器甕の破片で凹面に研磨痕跡があり転用硯である。住居跡と共伴する遺物は、4がカマド燃焼部内、5が床面、7が南壁に張り付く様に検出されている。坏類の検出がなく時期を明確に判断できないが、本住居跡は稲荷台Ⅱ期の9世紀第2四半期を中心とした時期と看取される。

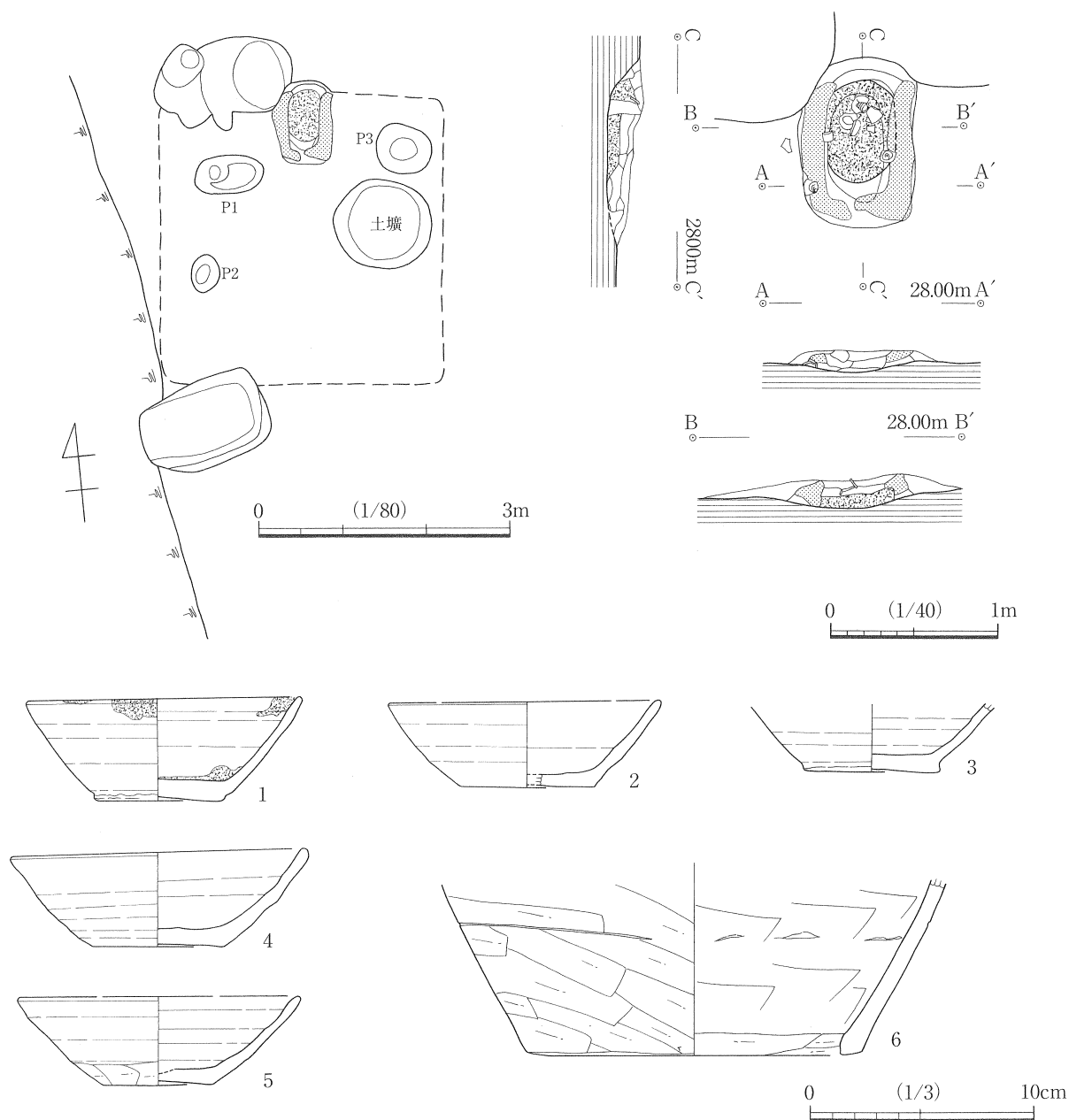
63号住居跡（第131図）

B地区西側のN2-W2区に位置し、西半分を調査区域外に置き、住居下層に25号土壇と複合して検出する。カマドは北壁に構築されるがそのほとんどが調査区域外に在り詳細は不明である。規模は、主軸長2.98m（3.16m）を計測する。主軸方位はN-11°-Wを指向する。平面形は、東壁と南壁が胴張り気味となり、方形を呈するものと看取される。床面標高は27.08mで、確認面からの深さ35cm程



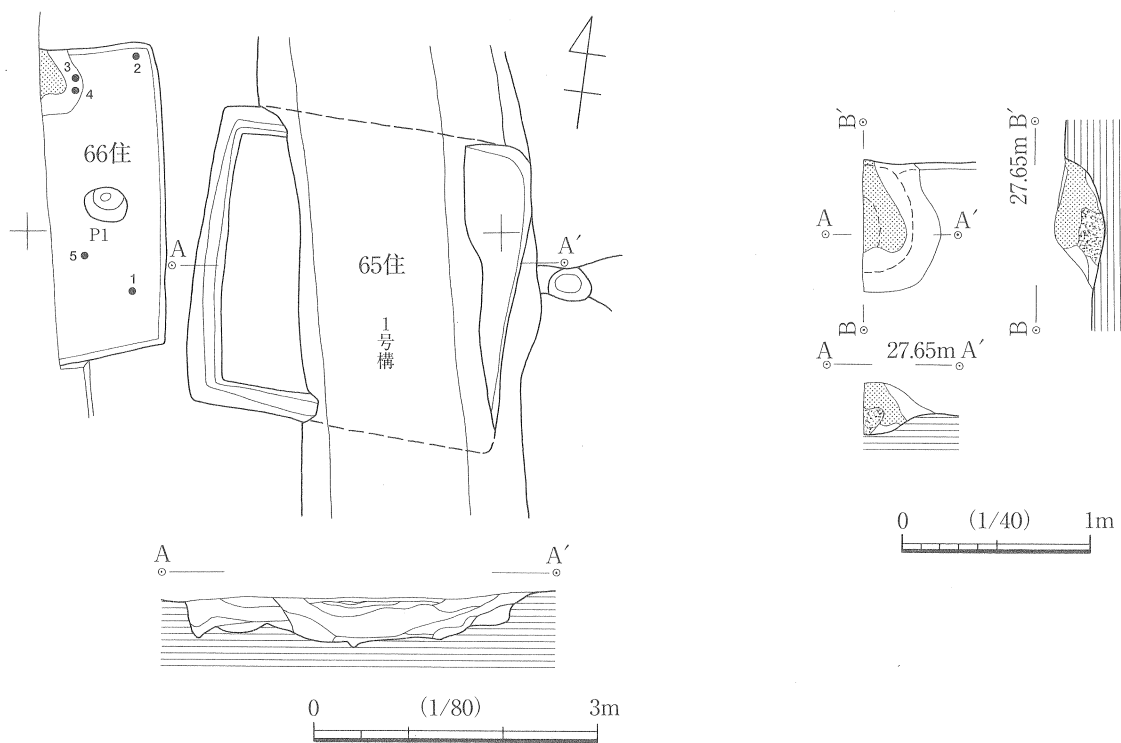
第131図 63号住居跡と出土遺物

を測るが、表土からの土層図では住居掘り込み標高が27.75mと確認でき、本来の竪穴の深さは70cmに達する。ピットの深さは、P1-23cm・P2-18cm・P3-16cm・P4-25cm・P5-15cm・P6-22cm・P7-42cm・P8-12cm・P9-20cmを測るが、支柱穴は不明確である。壁溝は、東壁と南壁に確認でき、北壁と東壁南半分は床面側に連続している。床面は凹凸が目立つが比較的堅緻である。

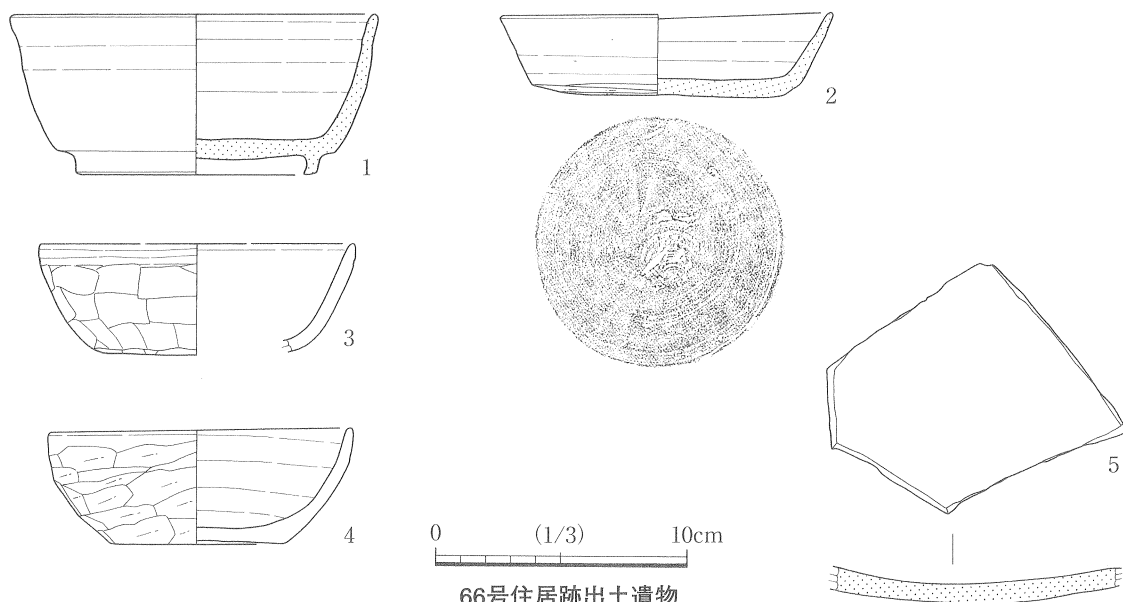


第132図 64号住居跡と出土遺物

出土遺物は、1は土師器甕、2は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏で内面にタール状のカーボンが付着し灯明皿に使用されたものであろう。3～5は須恵器甕片で何れにも研磨痕跡があり転用硯である。住居跡と共伴する遺物は、1が床面直上、3は東北側床面下、4も僅かに床面から浮いて検出されている。2のロクロ土師器坏が覆土中であるが、1～4のロクロ土師器坏を当住居跡の時期とすると稲荷台Ⅳ期-aの10世紀第1四半期を中心とするものであろう。



65号住居跡出土遺物



66号住居跡出土遺物

第133図 65・66号住居跡と出土遺物

64号住居跡（第132図）

B 地区西側の N4-W10・N5-W11区にカマドと硬化した床面を検出する。壁・支柱穴・壁溝等は明確にできなかった。床面範囲とカマドの位置関係から、カマドは北カマドで、袖部と燃焼部の検出である。推定規模は、主軸長3.54m・副軸長3.37m 程を計測する。主軸方位は N-6°-E を指向しよう。平面形は壁が検出されないため不明だが、方形を呈するものであろう。床面標高は27.72m である。ピットの深さは、P1-33cm・P2-25cm・P3-28cm を測るが、全て後世のピットで支柱穴は不明確である。床面は、やや硬さを保っている。

出土遺物は、1～4は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏で、1の内面にタール状のカーボンが附着し灯明皿に使用されたものであろう。全てがカマド燃焼部から出土し、住居跡に伴う遺物である。これらの土器から、住居跡の時期は、稻荷台Ⅳ期-aの10世紀第1～2四半期を中心とするものであろう。

65号住居跡（第133図）

B 地区中央の N5-W2・N6-W2 区に、中央に遺跡を区画する1号溝に掘り込まれ検出する。カマドは溝に掘り込まれたものとする、北カマドと推定できる。規模は、主軸長2.89m (3.17m)・副軸長3.20 (3.34m) 程を計測する。床面積は9.32m² 程を測る。主軸方位は N-2°-E を指向する。平面形は、僅かに横に長い方形を呈するものと看取される。床面標高は27.35m で、確認面からの深さ35cm 程を測る。ピットは無く、支柱穴は不明確である。壁溝は、溝に切断されたプラン西半分検出されるが東側にはない。床面は僅かに硬化するだけである。

出土遺物は、1は覆土から出土した千葉市域産の甕口縁破片で、当住居跡の時期をこの土器に求めると、9世紀代の所産であろうか。

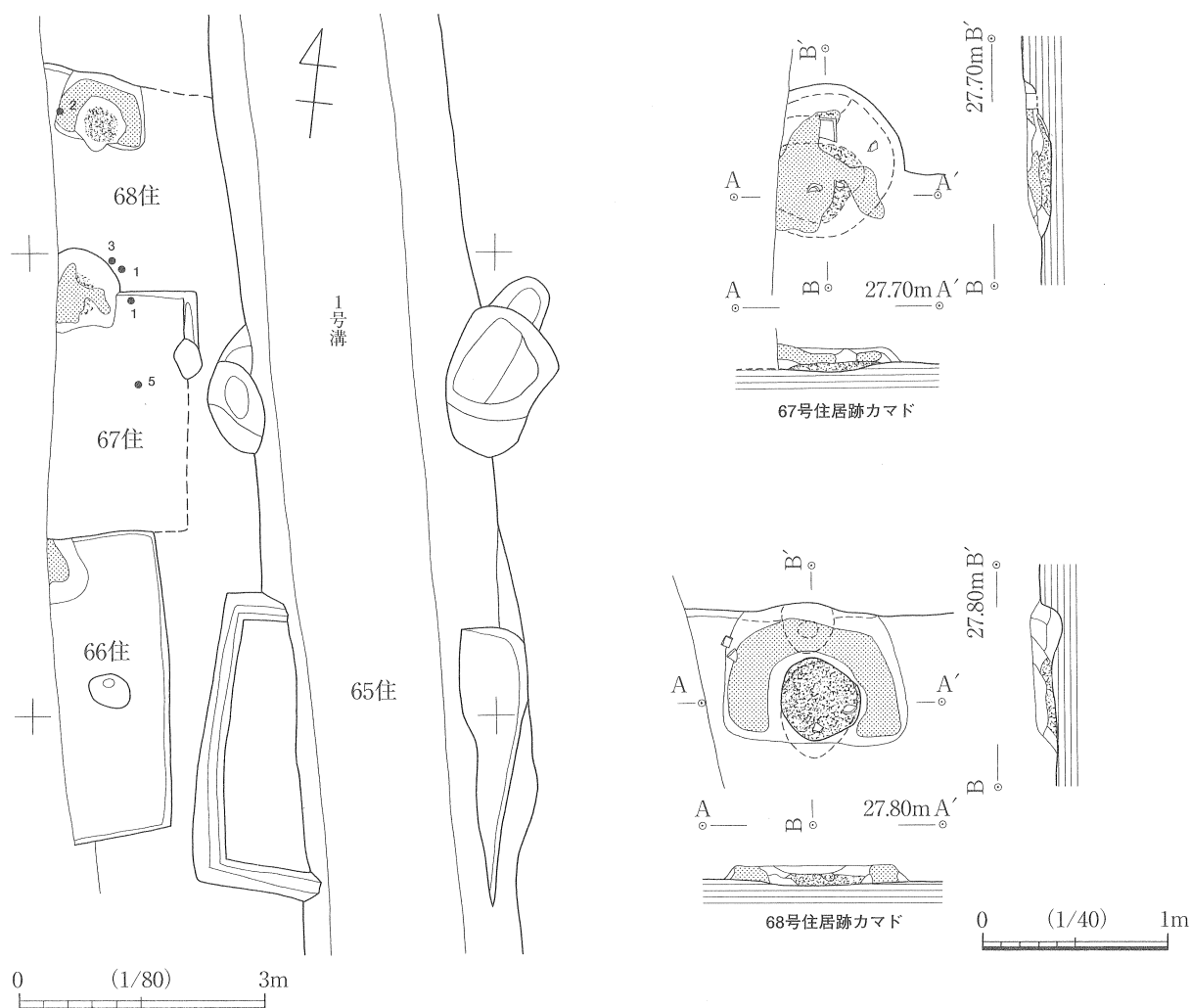
66号住居跡（第133図）

B 地区西側の N5-W2・N6-W2 区に位置し、西半分を調査区域外に置き、東に65住居跡が接して検出する。カマドは北壁に構築されるが、煙道部は67号住居跡に掘り込まれ、住居跡西半分が調査区域外に在り詳細は不明である。規模は、主軸長3.21m を計測するが副軸長は不明である。主軸方位は N-9°-W を指向する。カマド位置は、北東隅から燃焼部中心が1.2m の位置に検出され、北壁が東壁寄り極端に短いか、カマド位置が北壁の東に寄って構築されるかのいずれかである。平面形は、方形を呈するが詳細は不明である。床面標高は27.34m で、確認面からの深さ10～20cm 程を測る。ピットの深さは23cm で、支柱穴の一方で2本柱穴の構造であろうか。壁溝は検出できない。床面はカマド周辺が堅緻である。

出土遺物は、1は不純物が多く器表面に気泡の小孔の空く須恵器高台付坏、2は市原産須恵器坏、3・4は非ロクロ土師器坏、5は須恵器甕片で内面に研磨痕跡が有り転用硯である。住居跡との共伴は、3・4がカマド右袖のほぼ床面から検出され、1・2はやや床から浮いて出土するが共伴遺物であろう。これらの遺物から本住居跡は、稻荷台 A 期の8世紀第3四半期の所産であろう。

67号住居跡（第134・135図）

B 地区西側の N6-W2 区に位置し、西半分を調査区域外に置き、北側に68号住居跡を南側に66号住居跡カマド煙道部をそれぞれ掘り込み複合して検出する。カマドは北壁に構築されるが、左袖部の一部は調査区域外に在る。規模は、主軸長2.58m (2.67m) を計測するが副軸長は不明である。主軸



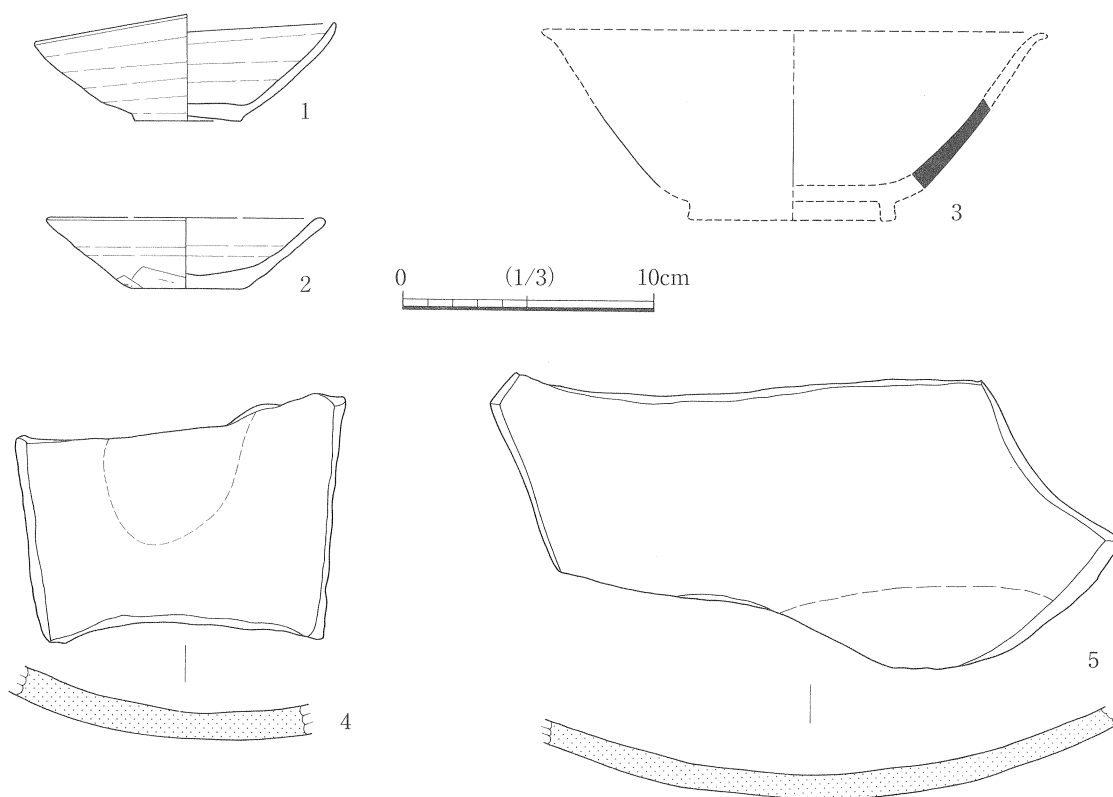
第134図 67・68号住居跡

方位は $N-7^{\circ}-W$ を指向する。カマド位置は、北東隅から燃焼部中心が1.3mで、ほぼ北壁中央に設けられたものと判断できる。平面形は、方形を呈するが詳細は不明である。床面標高は27.45mで、確認面からの深さ0～10cm程を測る。ピットは無い。壁溝は、残りの良い東壁から検出できる。床面は、カマド周辺が堅緻である。

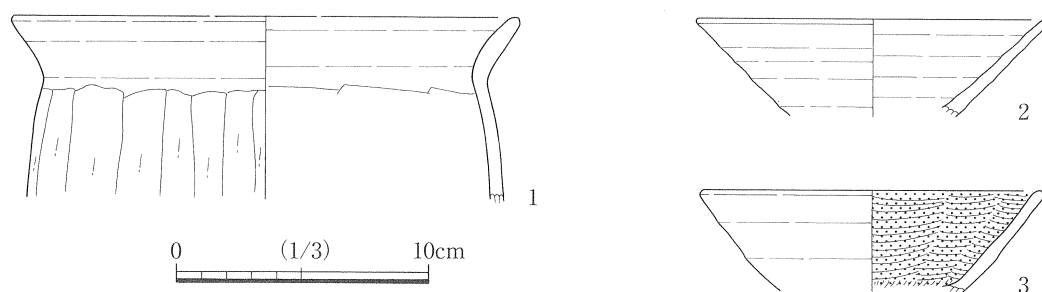
出土遺物、1は底径4.2cmの極小で回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、2は底径4.4cmの極小で底体部手持ち篋削りのロクロ土師器坏、3は青磁碗、4・5は須恵器甕片で内面に研磨痕跡があり転用硯である。住居跡との共伴関係は、1は北壁に接して床から9cm程浮き、4はカマド燃焼部、5はほぼ床面から検出されている。これらの遺物から本住居跡の時期は、稻荷台Ⅳ～Ⅴ期の10世紀第2～3四半期であろう。

68号住居跡（第134・136図）

B地区西側の $N7-W2$ 区に、西半分を調査区域外に置き、南側に67号住居跡に掘り込まれ、カマドと北壁の一部と床面を検出する。規模は不明である。主軸方位はカマドと残存北壁から $N-3^{\circ}-E$ を指向するものと思われる。平面形は、方形を呈すると思われるが詳細は不明である。床面標高は



第135図 67号住居跡出土遺物



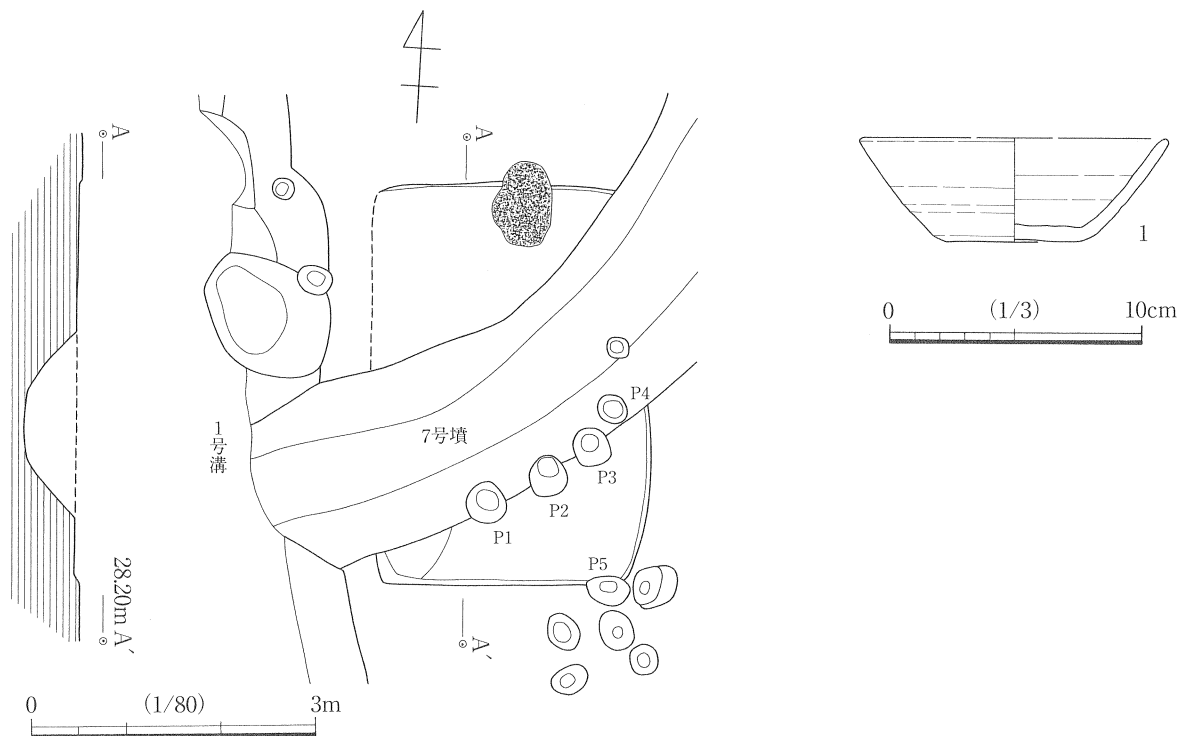
第136図 68号住居跡出土遺物

27.50m で、確認面からの深さ 0 ～ 5 cm 程を測る。ピット・主柱穴・壁溝は検出できない。床面はカマド周辺が僅かに堅緻である。

出土遺物は、1 は土師器甕、2 は底部欠損したロクロ土師器坏、3 は内黒ミガキのロクロ土師器坏である。何れの遺物も床面より僅かに浮いて検出されるが住居跡と共伴すると看取される。これらの遺物から本住居跡は、稻荷台Ⅳ期－b の10世紀第2 四半期の所産であろう。

69号住居跡（第137図）

B 地区中央よりやや北側の N 7－W 1 ・ N 8－W 1 区に位置し、7 号古墳の南側溝上に床面を置き検出する。カマドは、燃烧部の存在を示す焼土が僅かに残るだけである。規模は、主軸長4.16m (4.26m) ・副軸長2.84m (2.92m) 程を計測する。主軸方位は N－1°－W を指向する。平面形は、西壁が不明瞭だが縦長の長方形を呈する。床面標高は27.61m で、確認面からの深さ 0 ～10cm 程を測る。ピットの深さは、P 1－47cm ・ P 2－30cm ・ P 3－40cm ・ P 4－31cm ・ P 5－69cm を測るが、全



第137図 69号住居跡と出土遺物

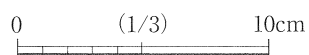
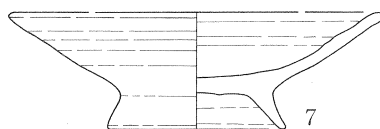
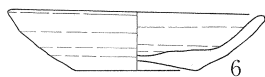
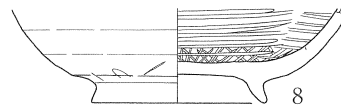
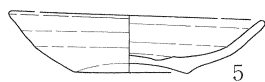
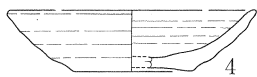
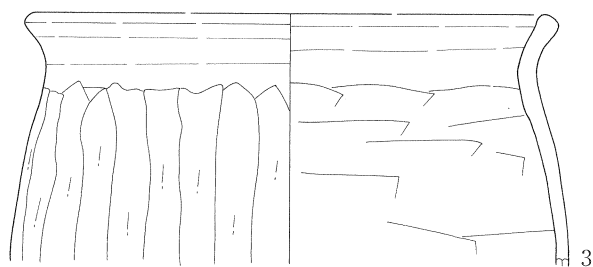
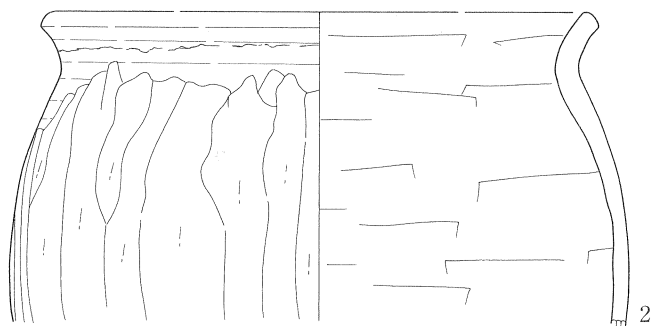
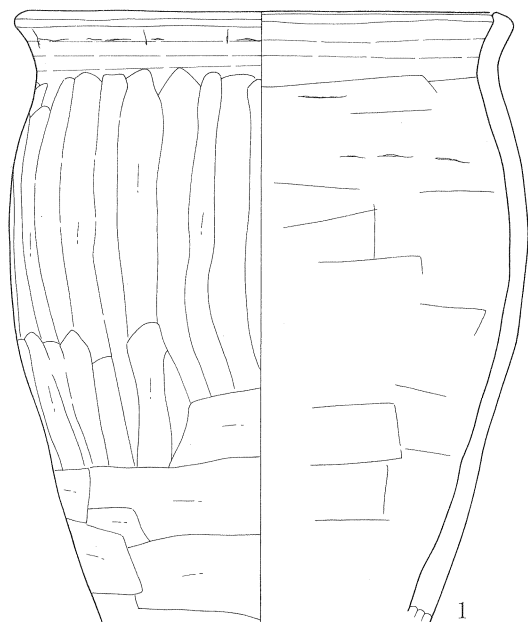
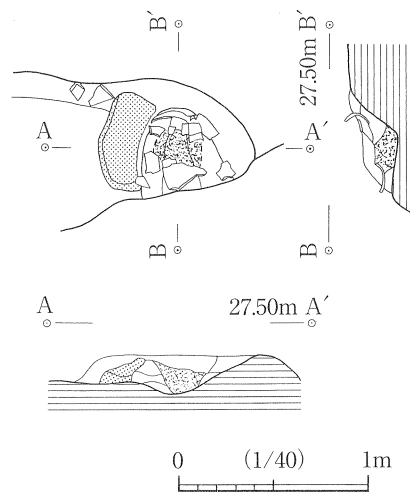
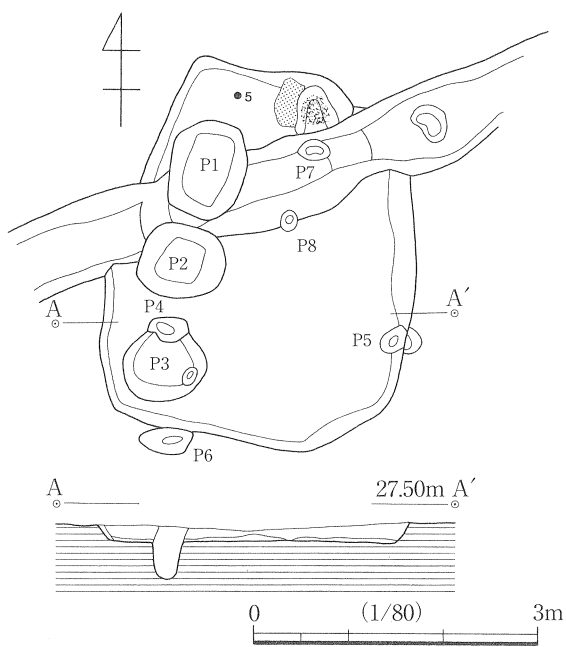
て後世のピットと看取でき支柱穴は不明確である。周溝も確認できない。床面は、カマド燃焼部周辺に僅かに硬化面を確認するだけである。

出土遺物は底径の縮小した糸切り無調整のロクロ土師器坏を、覆土から検出するが時期判定の資料にはなりにくく、敢えて時期を求めると、北西10mに検出された70号住居跡とプラン等に酷似点があり、70号住居跡に時期を求めても差し支えないように看取される。

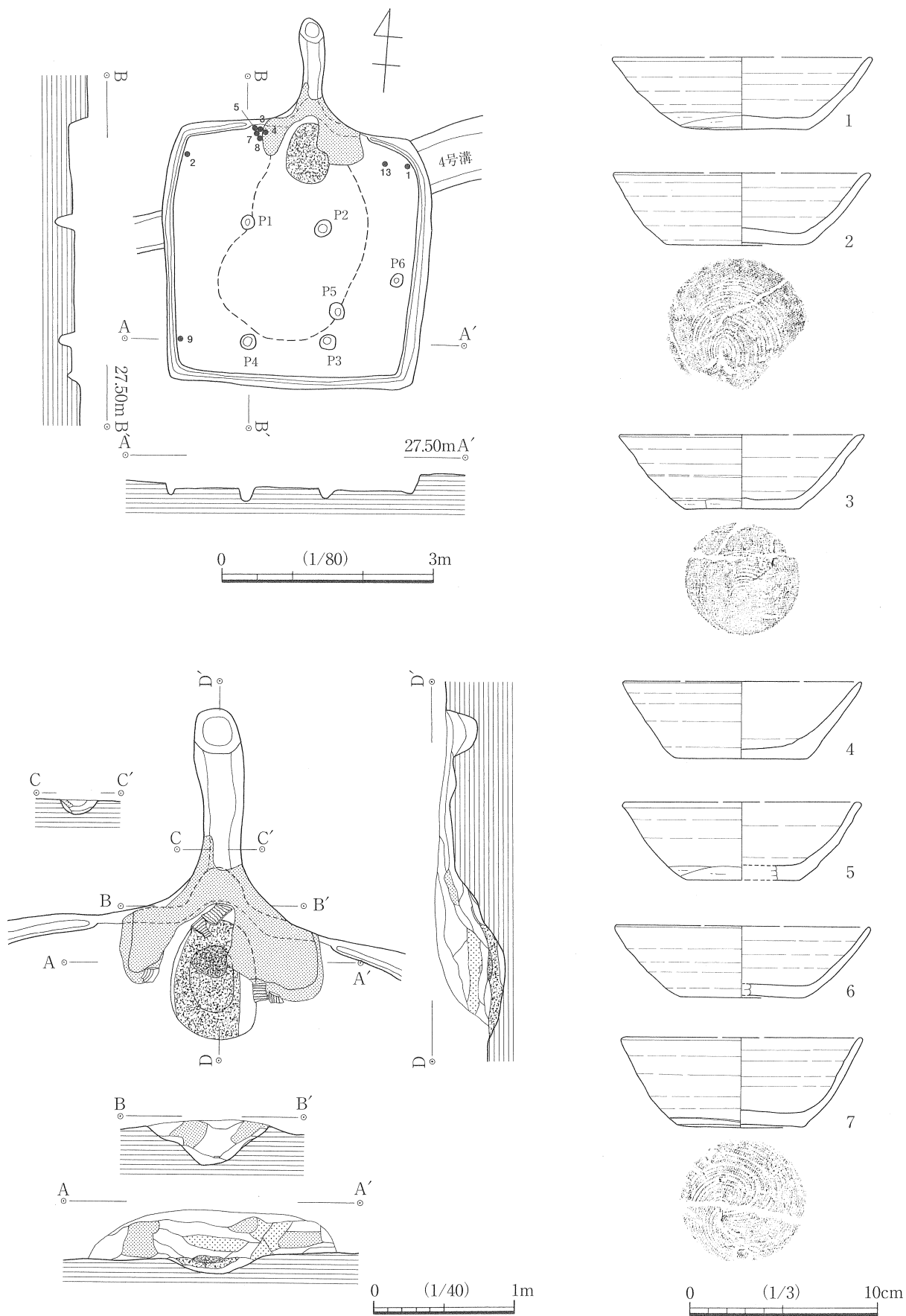
70号住居跡 (第138図)

B地区北側のN9-W3・N9-W4区に検出し、プラン北側床面とカマドの一部を4号溝に掘り込まれて遺存する。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、袖部や燃焼部は床面内で収まるが、煙道部は確認できない。規模は、主軸長3.62m (3.96m)・副軸長2.81m (3.13m)程を計測する。床面積は 9.34m^2 を測る。主軸方位はN-11°-Wを指向する。平面形は、各壁が歪み縦長の不整な長方形を呈する。床面標高は27.10mで、確認面からの深さ20cm程を測る。ピットの深さは、P1-31cm・P2-46cm・P3-33cm・P4-42cm・P5-10cm・P6-20cmを測るが、竪穴との共伴の是非については明確にできない。壁溝は確認できない。床面は、4号溝に切断された南側床面中央に顕著な踏みしめられた面を確認することができる。

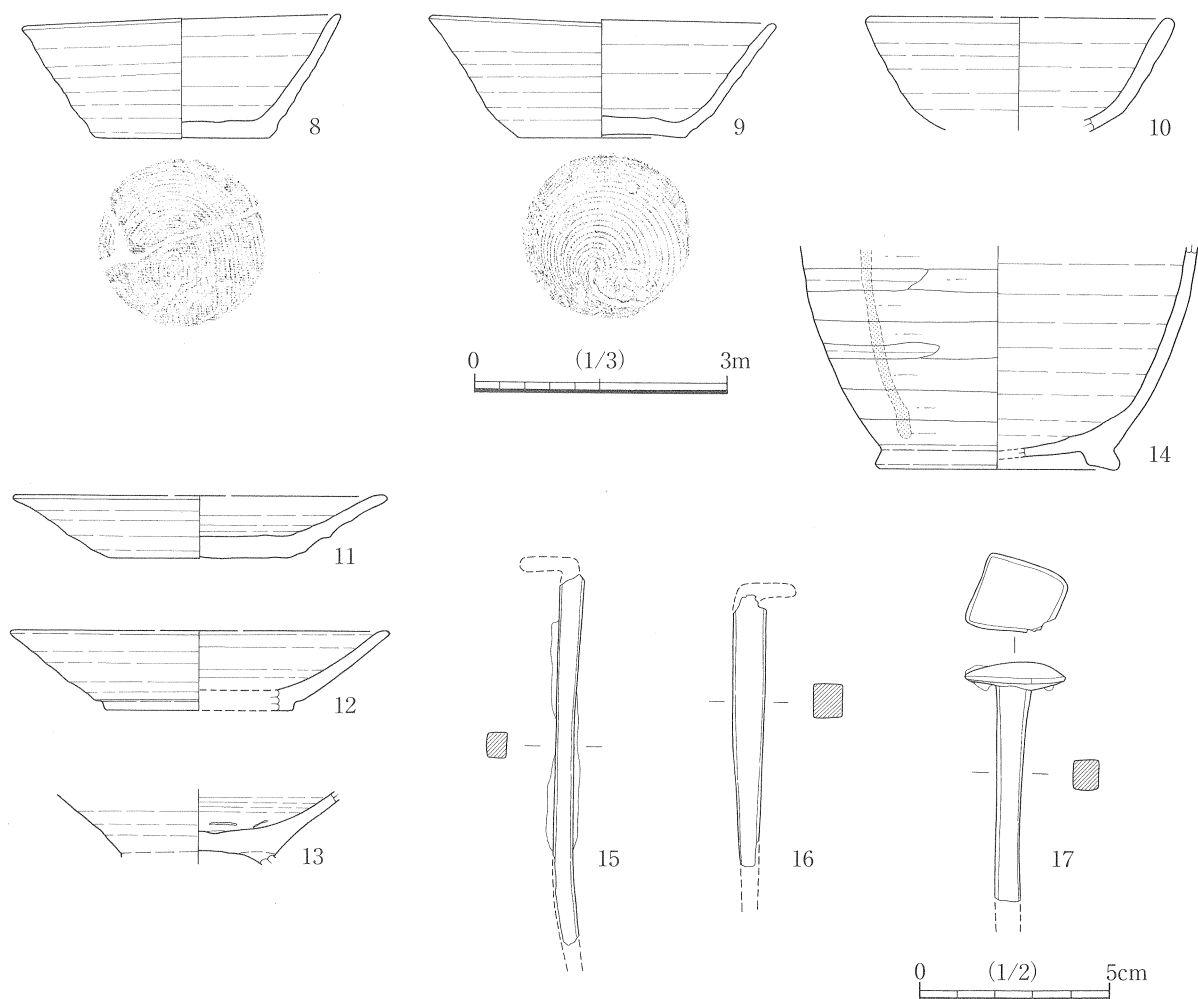
出土遺物、1～3は口唇部肉厚の土師器甕、3～6は口径・底径の縮小化した回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、7はロクロ土師器高台付坏、8は内面ミガキのロクロ土師器高台付碗である。住居跡と明確に共伴する遺物は、1～3の甕がカマド燃焼部、5がカマド左袖床面からそれぞれ検出されている。他の遺物は覆土内からの検出であるが、共伴遺物として差し支えないように看取される。これらの出土遺物から稲荷台VI期の10世紀末～11世紀の所産であろうか。



第138図 70号住居跡と出土遺物



第139図 71号住居跡と出土遺物

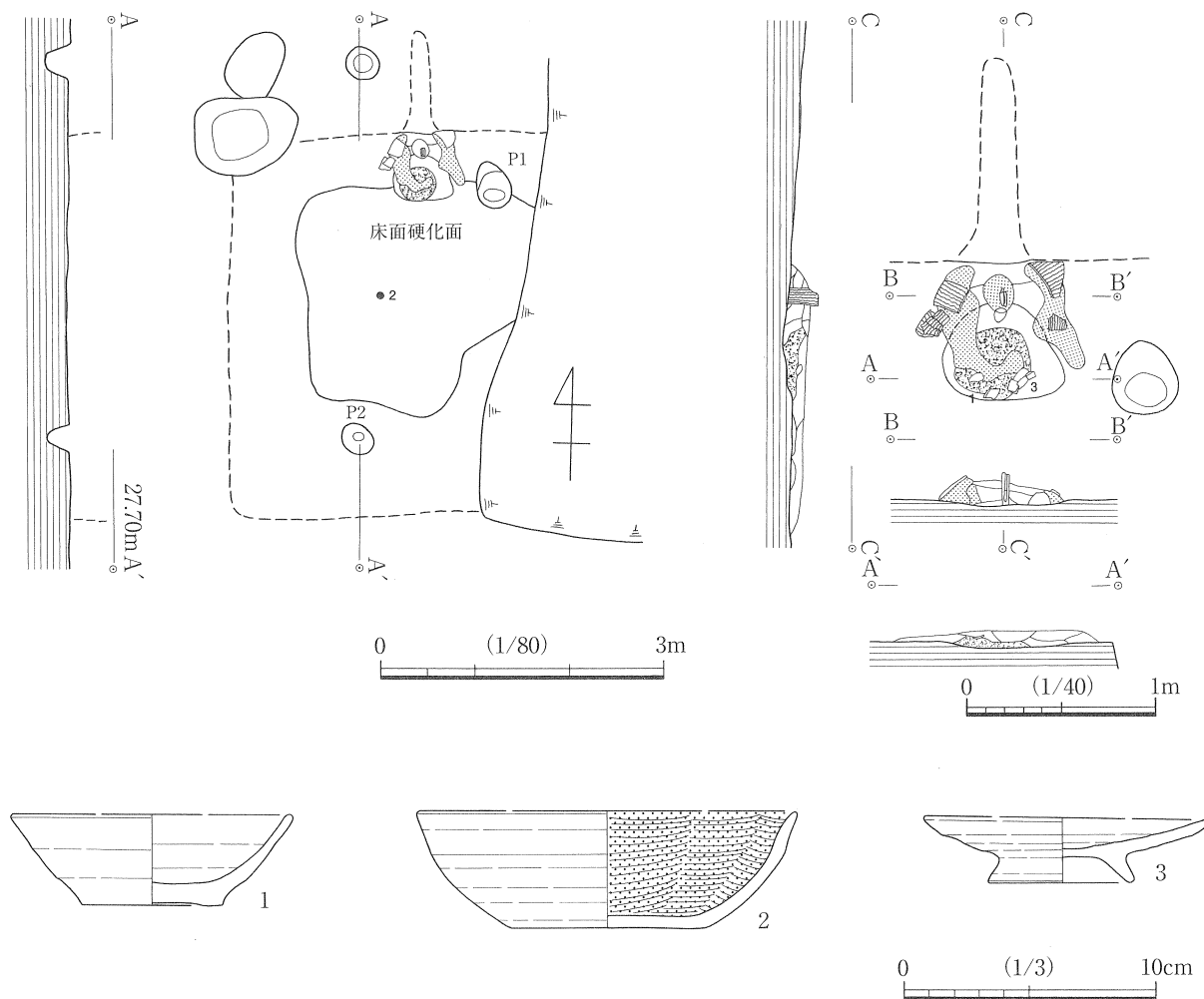


第140図 71号住居跡出土遺物

71号住居跡（第139・140図）

B地区北側のN9-W4・N9-W5区に位置し、4号溝に覆土上層を掘り込まれ検出する。カマドは北壁のほぼ中央に検出され、主軸を南北に置く。規模は、主軸長3.58m（3.80m）・副軸長3.62m（3.76m）を計測する。床面積は12.54m²を測る。カマド袖部は突出気味に設けられるが燃焼部は床面ではほぼ収まる。煙道部は壁より1.40m突出し、煙道部先端はピット状に掘り込まれている。カマド袖部や煙道部天井は下末吉層の白色粘土で覆われ、瓦を補強材として使用している。主軸方位はN-1°-Wを指向する。平面形は、各隅・各壁に均整を欠く方形を呈している。床面標高は27.13mで、確認面からの深さ9～24cm程を測る。ピットの深さは、P1-27cm・P2-17cm・P3-14cm・P4-18cm・P5-14cm・P6-32cmを測り、主柱穴P1～P4の4穴でやや不規則な構造である。P1-P2の主柱穴間1.1m・P2-P3の主柱穴間1.62m・P3-P4の主柱穴間1.12m・P4-P1の主柱穴間1.68mを計測する。壁溝は、カマド両袖から出て四周して設けられる。床面は、カマドから各主柱穴間に白色粘土が張られ堅緻である。

出土遺物、1～5は回転窺削りのロクロ土師器坏、6～10は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、11は底部に静止糸切りを残す手持ち窺削りロクロ土師器皿、12は削り出し状の高台を持つロクロ土師



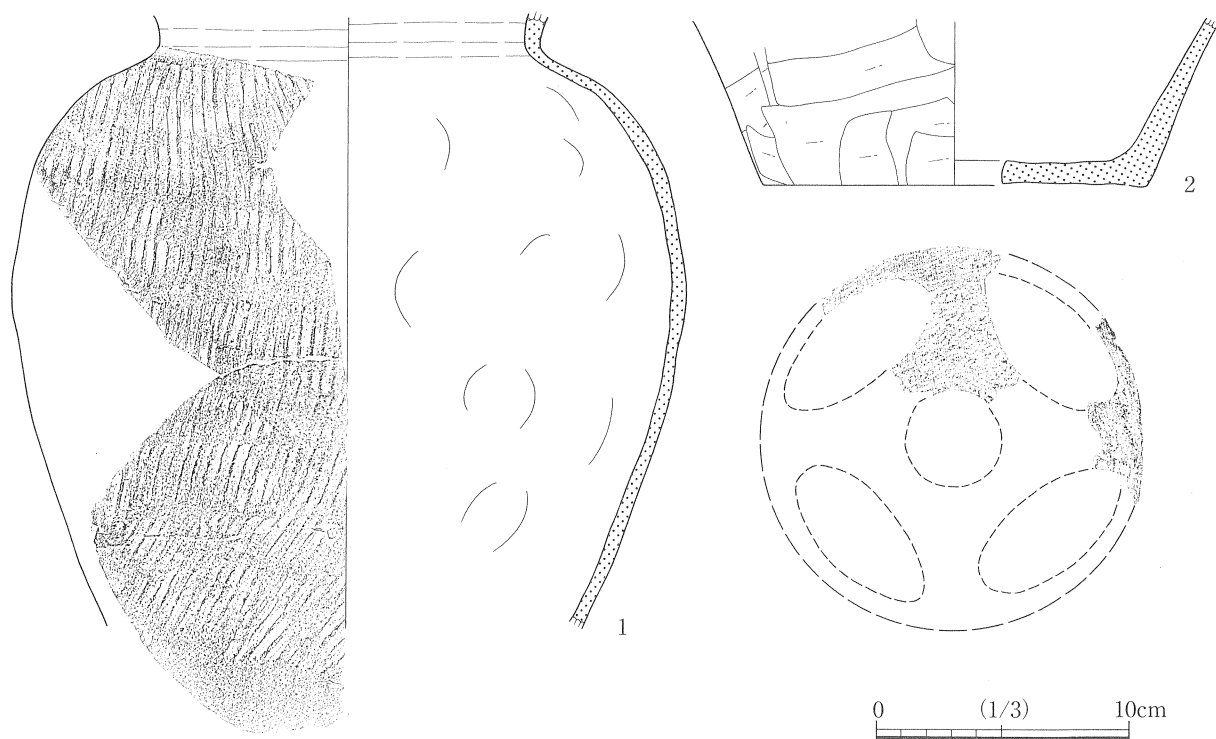
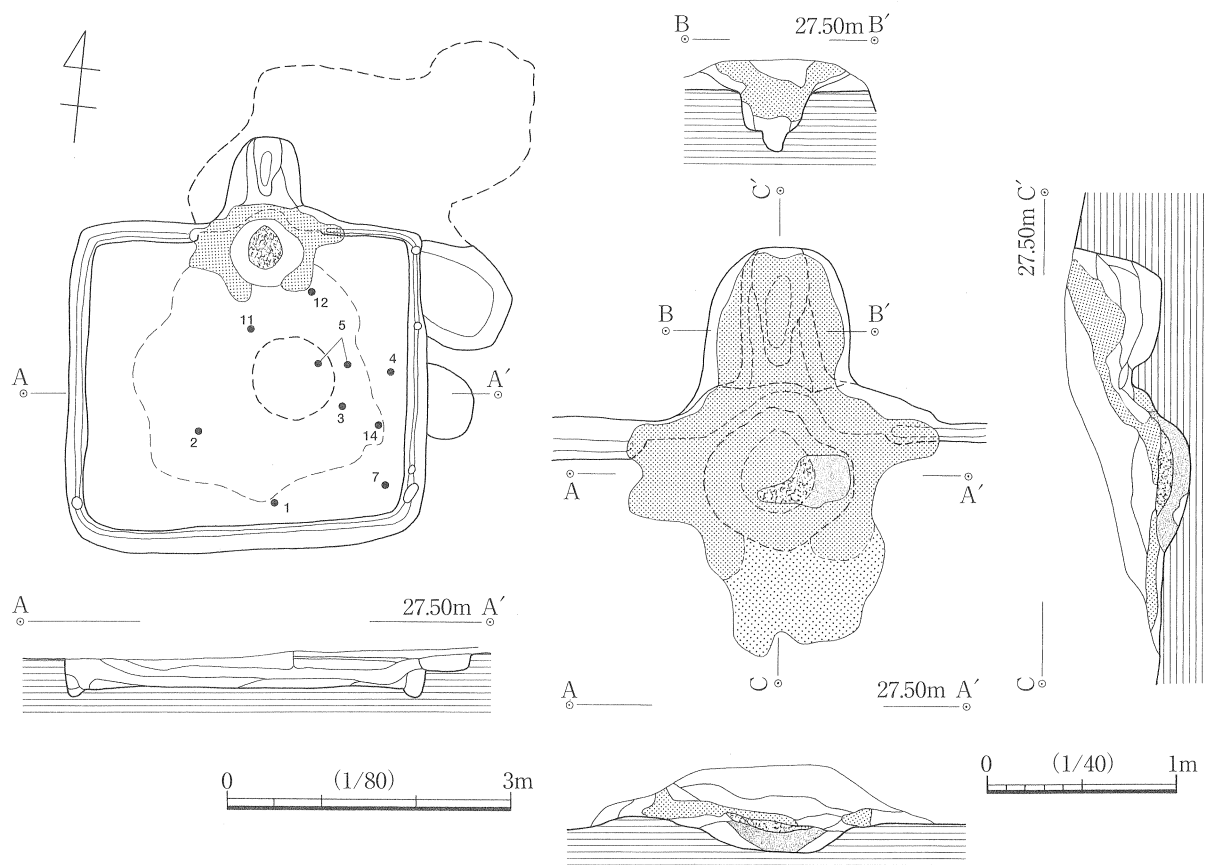
第141図 72号住居跡と出土遺物

器皿、13はロクロ土師器高台付坏である。14は灰釉長頸壺で、坂野編年のⅡ期古相で9世紀第2四半期に比定される。15～17は釘である。

住居跡と共伴する遺物は、3・4・7・8・10がカマド左袖床面、1・2・9・13が床面やほぼ床面から出土し、14が覆土やカマド覆土からそれぞれ検出されている。住居跡の時期は、14の灰釉長頸壺の出土状況が決め手となるが住居共伴遺物と断定しかねるが、この灰釉壺の時期を踏まえ、本住居跡は稻荷台Ⅱ期-aの9世紀第2四半期の所産と考えられる。

72号住居跡（第141図）

B地区北側のN10-W4・N10-W5・N11-W4・N11-W5区に、プラン東側を大きく攪乱され、カマドと床面の検出で壁を削平されて遺存する。カマドは北壁のほぼ中央に検出され、主軸を南北に置く。規模は、主軸長4.06mを計測する。床面積は11.7m²を測る。カマド上部構造を大きく削平され、袖部と燃烧部の検出で、煙道部は僅かな痕跡で壁より1.08m突出していたことがわかる。カマド袖部には下末吉層の白色粘土や瓦を補強材として使用している。主軸方位はN-3°-Wを指向する。床面標高は27.35mで、確認面からの深さ0～5cm程を測る。ピットの深さは、P1-32cm・P2-25cmを測り、主柱穴は不明である。壁および壁溝は検出されない。床面は、カマドから中央で白色



第142図 73号住居跡と出土遺物

粘土が薄く張られ踏みしめられている。

出土遺物、1は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、2は内黒ミガキで篋削りのロクロ土師器坏、3はロクロ土師器高台付皿である。住居跡と共伴する遺物は、1がカマド、2が床面中央、3はカマド上層からそれぞれ出土し、住居跡共伴遺物と言える。これらの遺物から、本住居跡は稲荷台V～VI期の10世紀後半の所産と考えられる。

73号住居跡（第142・143図）

B地区北側のN10-W5・N10-W6区に検出する。カマドは北壁のほぼ中央に検出され、主軸を南北に置く。規模は、主軸長3.24m（3.48m）・副軸長3.56m（3.76m）を計測する。床面積は11.18m²を測る。カマド袖部と燃焼部は突出気味に設けられ、煙道部先端は壁から0.9m突出している。カマド袖部や煙道部天井は下末吉層の白色粘土で覆われている。主軸方位はN-9°-Eを指向する。平面形は、各隅が丸身を有する横長の方形を呈している。床面標高は26.90mで、確認面からの深さ35cm程を測る。ピットは検出されないが、床面中央に下層の土壌状のピットがある。壁溝は、カマド両袖から出て四周して設けられる。床面は、カマドから各主柱穴間は白色粘土が張られ堅緻である。住居跡覆土上層に住居の張り床状の硬化面を検出するが詳細は不明である。

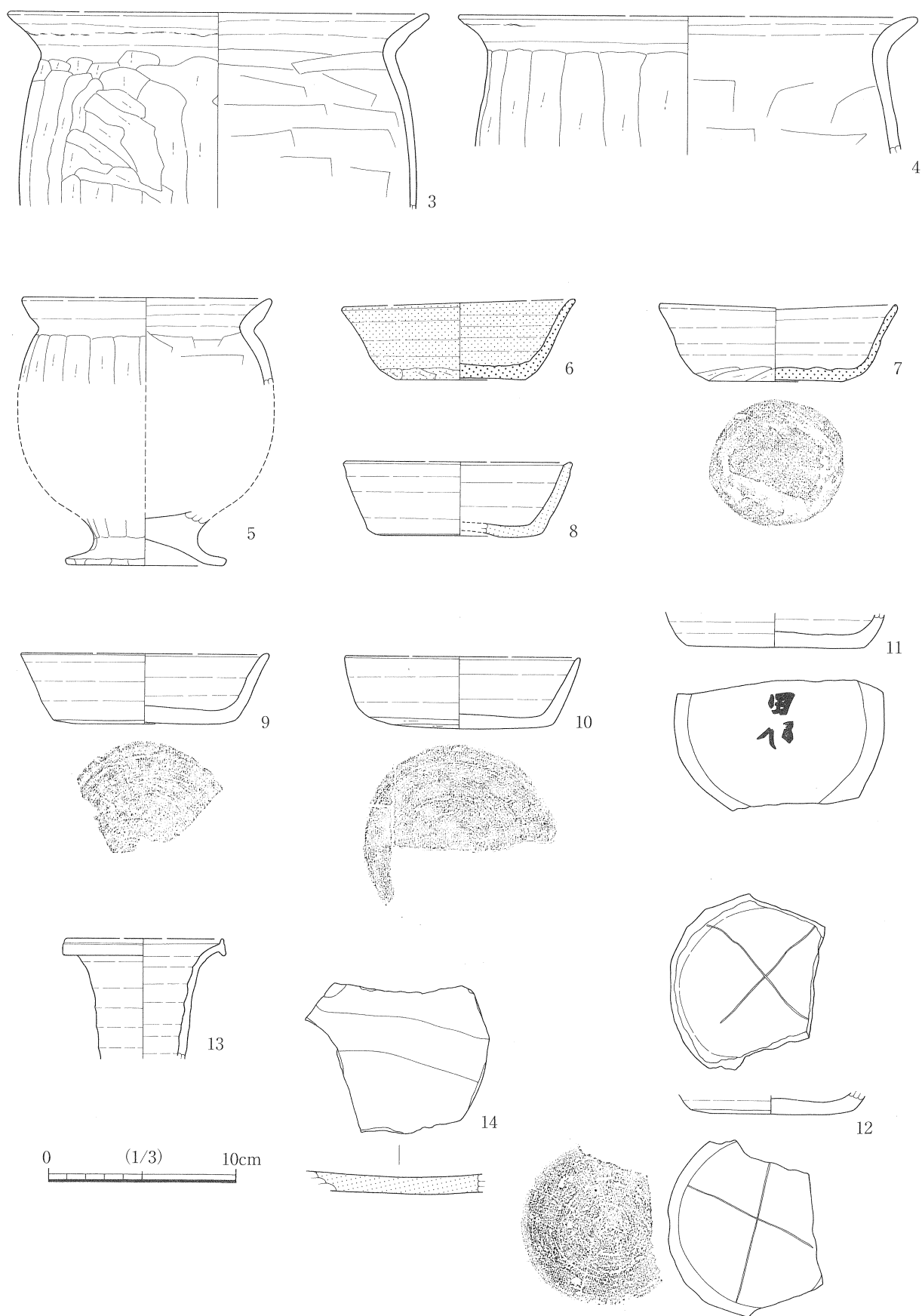
出土遺物、1と2は千葉市域産須恵器で甕と甑である。3・4は土師器甕、5は土師器台付甕、6は千葉市域産須恵器坏で内外面丹塗り痕跡を止めている。7は下総産須恵器坏、8は市原産須恵器坏、9～12は回転篋削りを施す整形技法が市原産須恵器と同様な箱形のロクロ土師器坏、13は灰釉長頸壺で坂野I期古段階にあたる。11の底部外面には「田伯カ」墨書があり、12の底部内外面に線刻「×」印を刻む。14は須恵器甕で研磨痕跡があり転用硯である。

住居跡と共伴する遺物は、1・7が床面直上、6がカマド燃焼部から検出されている。他の2・3・4・5・8・9・10・11・12・13の遺物はやや床面から浮いて出土するが、共伴遺物として差し支えないように看取される。住居跡の時期は、13の灰釉長頸壺の出土状況が決め手となるが住居共伴遺物と断定しかねるが、灰釉陶器の時期を踏まえ、本住居跡はA期～I期の8世紀末～9世紀第1四半期の所産と考えられる。

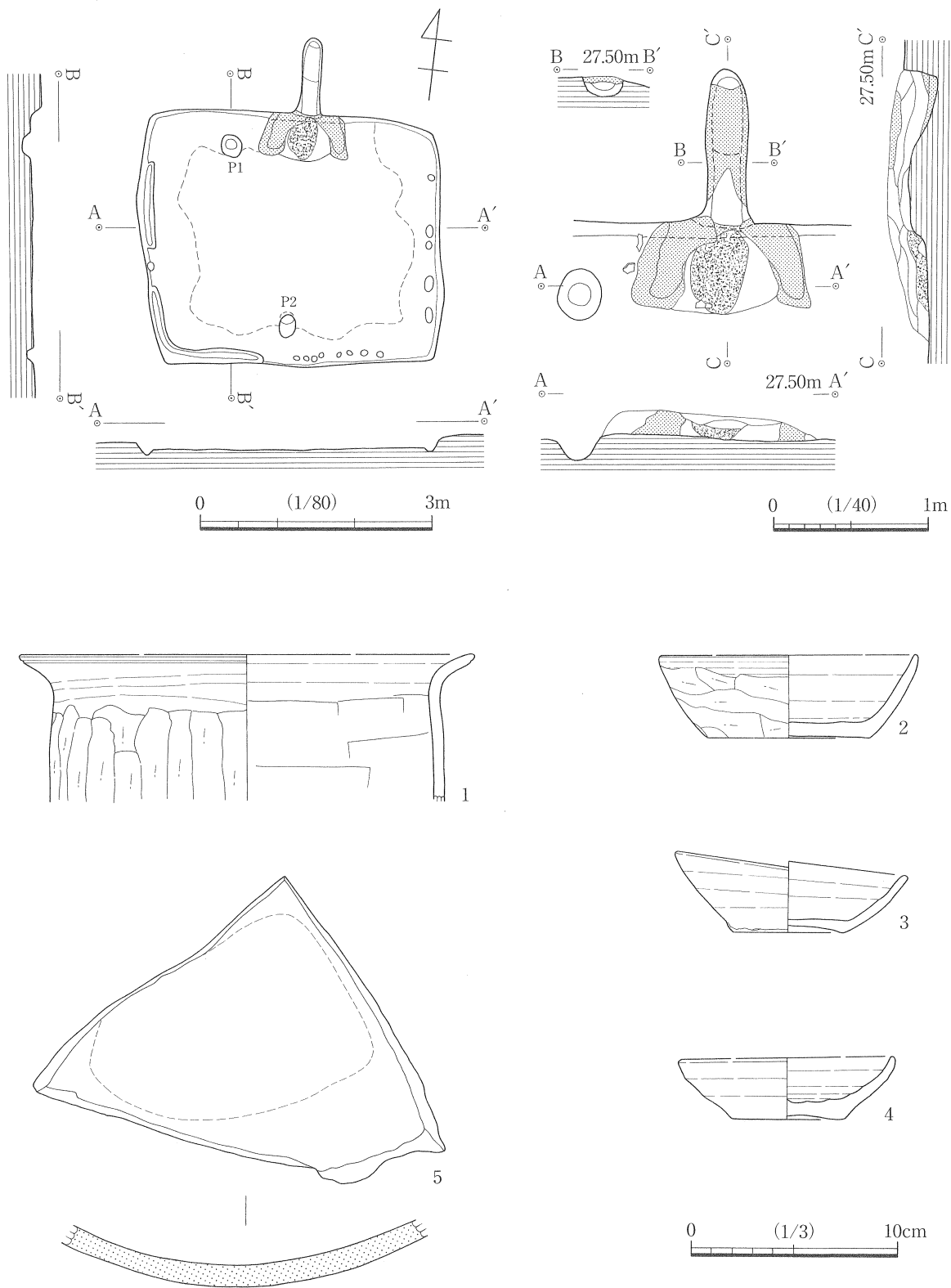
74号住居跡（第144図）

B地区北西側のN11-W5・N11-W6区に検出する。カマドは北壁のほぼ中央に検出され、主軸を南北に置く。規模は、主軸長3.10m（3.26m）・副軸長3.27m（3.86m）を計測する。床面積は11.27m²を測る。カマド袖部と燃焼部は床面で収まり、煙道部先端に向かい漸次深さを増している。煙道部先端では壁から1.0m突出している。カマド袖部や煙道部天井は下末吉層の白色粘土で覆われている。主軸方位はN-10°-Eを指向する。平面形は、横長のやや均整を欠く方形を呈している。床面標高は27.18mで、確認面からの深さ7～18cm程を測る。ピットの深さは、P1-16cm・P2-21cmを測るが、主柱穴は認められない。P2は出入り口の階段ピットである。壁溝は、西と南壁に部分的に検出されるが他は無く、東と南壁東半分の壁直下に小ピットを設けている。床面は全体に踏みしめた状況がある。

出土遺物は、1が土師器甕、2は非ロクロの土師器坏、3～4は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、5は須恵器甕で研磨痕跡があり転用硯である。住居跡と共伴する遺物は、1がカマド燃焼部、2と5が床面からそれぞれ検出されている。これらの遺物から住居跡の時期は、8世紀第4～9世紀1



第143図 73号住居跡出土遺物

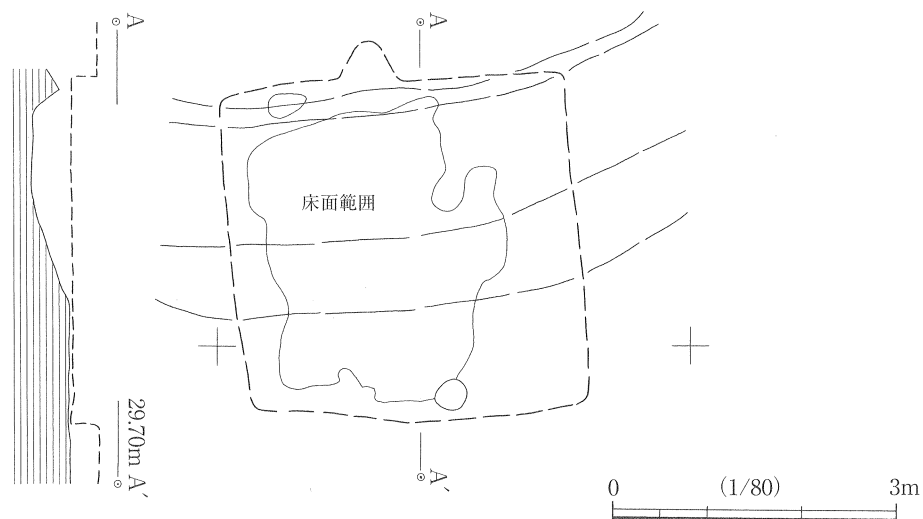


第144図 74号住居跡と出土遺物

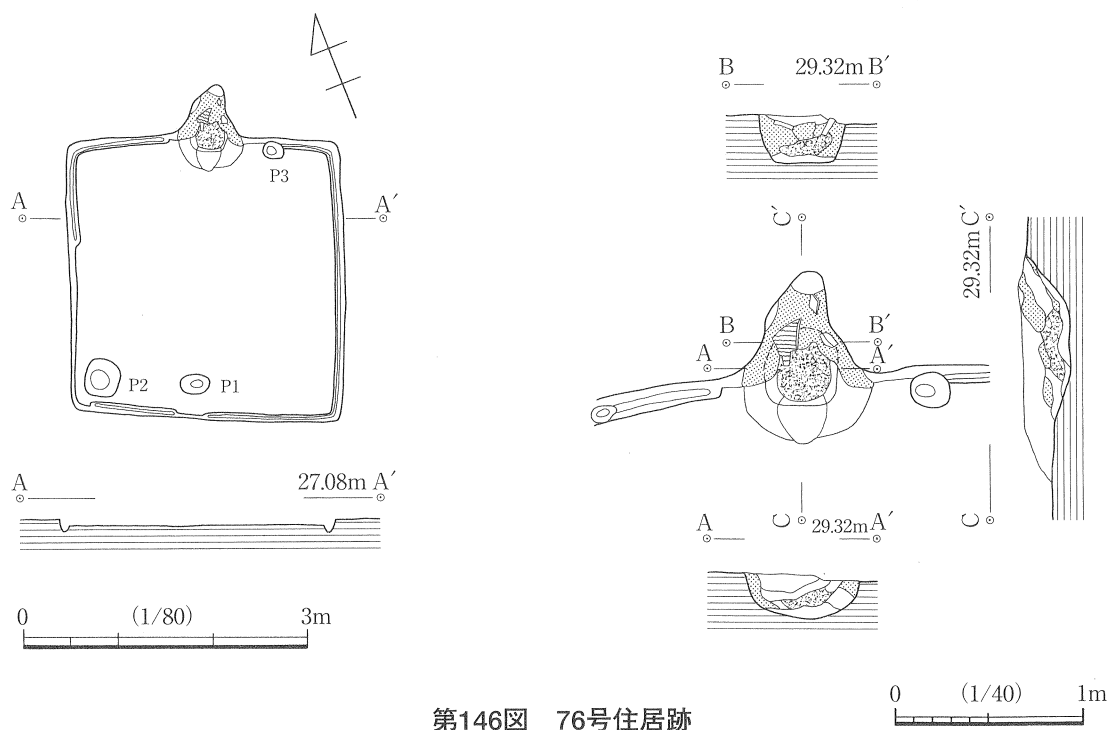
四半期の所産と考えられる。

75号住居跡（第145図）

C 地区南西側の S21-E15・S22-E15区に位置し、10号墳南側覆土上層に、カマドの痕跡と床面の



第145図 75号住居跡



第146図 76号住居跡

硬化面とを検出する。カマドは北壁のほぼ中央に検出されたと思われ、主軸を南北に置く。規模は、3.6mの方形プランを呈するものと看取される。推定主軸方位はN-11°-Eを指向する。床面標高は29.22mである。床面は凹凸を有し、全体に踏みしめた状況がある。

時期を明確に判断できる出土遺物が無く、時期は不明である。

76号住居跡（第146図）

C地区中央のS20-E9・S20-E10・S21-E9・S21-E10区に検出する。規模は、主軸長2.90m (3.02m)・副軸長2.78m (2.90m)を計測する。床面積は7.93m²を測る。カマドは北壁のほぼ中央に設けられ、袖部と燃焼部は突出気味で、煙道部先端で突出長0.5mを測る。主軸方位はN-21°-E

を指向する。平面形は、北壁長2.88m・東壁長3.00m・南壁長2.85m・西壁長2.82mと各壁長が微妙に異なるが、ほぼ方形を呈している。床面標高は29.08mで、確認面からの深さ10cm程を測る。ピットの深さは、P1-11cm・P2-9cm・P3-11cmを測り、主柱穴は検出されない。P1は出入り口の階段ピットであろう。壁溝は、西壁南半分と南壁に僅かに途切れる個所があるもののほぼ四周する。床面は凹凸があるものの全体に踏みしめられ堅緻である。

時期を判断できる出土遺物が無く、時期は不明である。

77号住居跡（第147図）

C地区北東側のS16-E14・S17-E14区にプラン北東隅を攪乱されて検出する。カマドは北壁のほぼ中央に検出され、主軸を南北に置く。規模は、主軸長2.66m（2.78m）・副軸長2.70m（2.80m）を計測する。床面積は6.84m²を測る。カマド袖部はやや突出気味に設けられるが燃焼部は床面側で収まり、煙道部は僅かに突出するだけである。主軸方位はN-3°-Eを指向する。平面形は、均整な方形を呈している。床面標高は28.84mで、確認面からの深さ10cm程を測る。ピットの深さは、P1-12cm・P2-11cmを測るが、主柱穴は認められない。P1は出入り口の階段ピットであろうか。壁溝は、四周して検出される。床面は全体に踏みしめられ、下末吉層の白色粘土を薄く張り床されている。

出土遺物、1はロクロ土師器甕の底部、2～5は底部と体部下端に回転篋削りを施すロクロの土師器坏、6は底部のみ回転篋削りを施すロクロ土師器坏、7・8は底部回転糸切りを残す回転篋削りで体部下端に手持ち篋削りを施す。9・10は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、11は底部外面に強い沈線状のロクロナデにより高台を意識する。12・13は回転糸切り無調整のロクロ土師器皿である。

住居跡と共伴する遺物は、1・2・5・6・8・13が床面直上やほぼ床面、3・7がカマド燃焼部からそれぞれ検出されている。2と6のロクロ土師器は重なって出土している。これらの遺物から住居跡の時期は、稲荷台Ⅲ期-bの9世紀末～10世紀1四半期を中心とするものと考えられる。

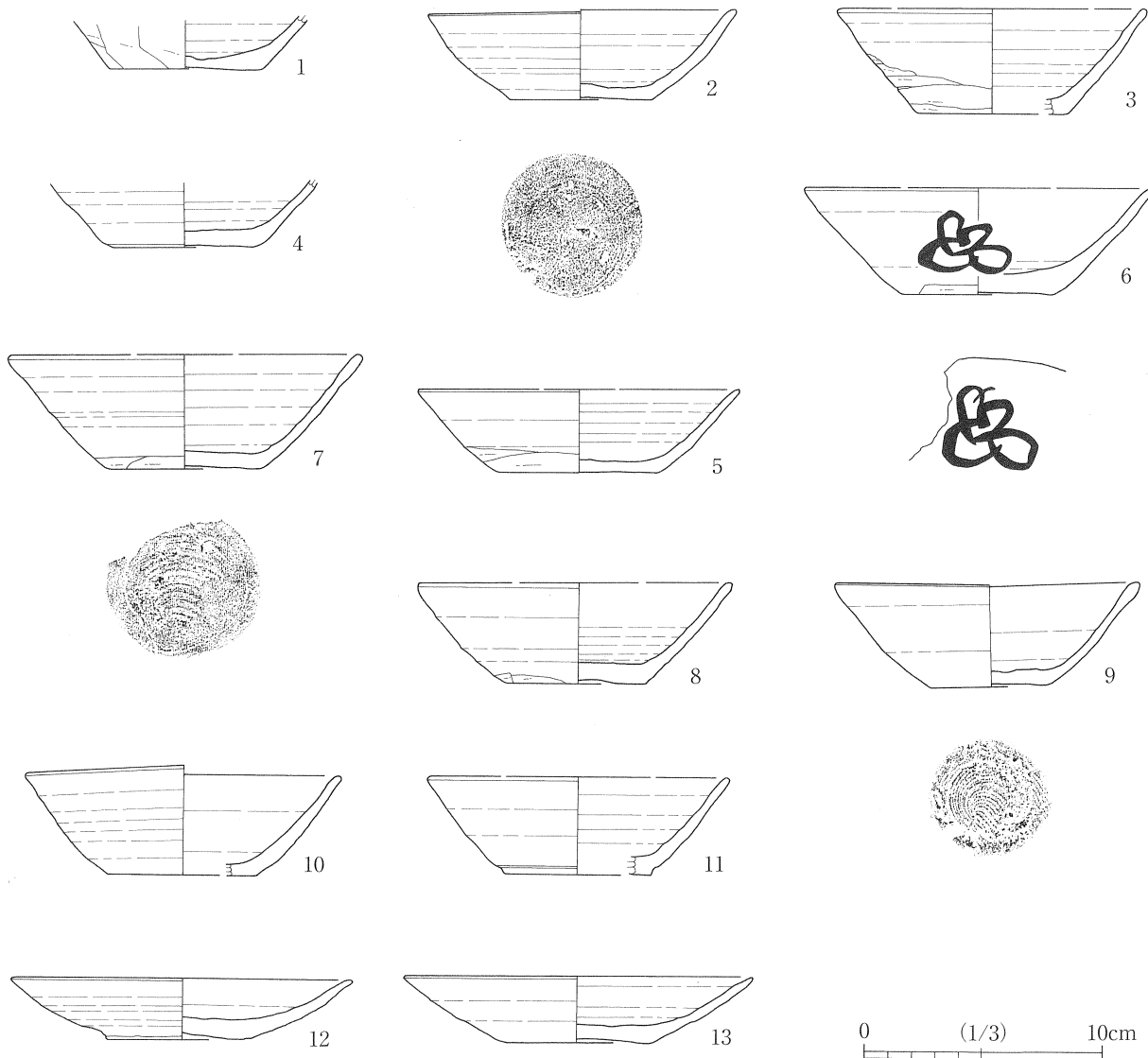
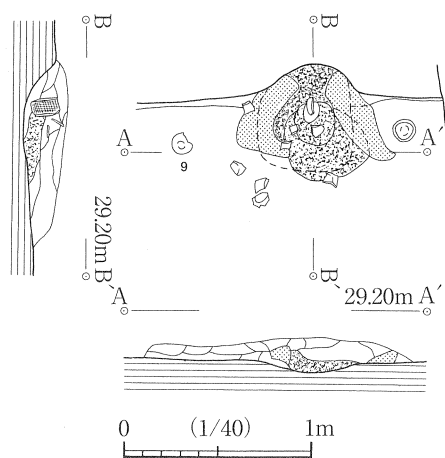
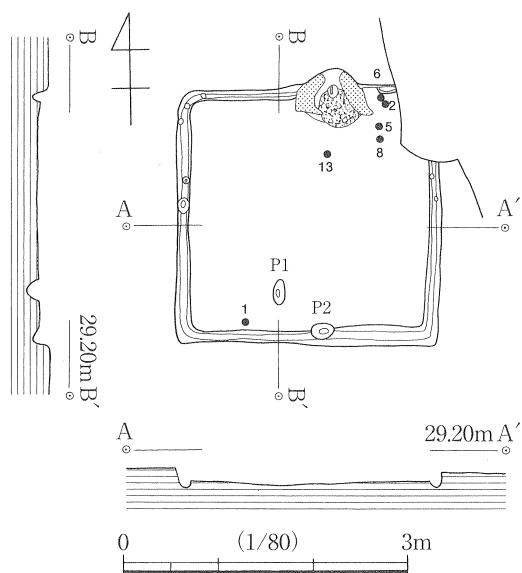
78号住居跡（第148図）

C地区S18-E12・S18-E13・S19-E12・S19-E13区に位置し、プラン北側半分が遺跡を区画する3号溝に掘り込まれて検出する。カマドは東壁の南側に寄って検出され、主軸を東西に置く。規模は、主軸長2.62m（2.80m）を計測する。カマド袖部はやや突出気味に設けられるが燃焼部は床面側でおさまり、煙道部は袖部と一体となり、逆U字形に突出する。主軸方位はN-84°-Eを指向する。平面形は、均整な方形を呈すると思われる。床面標高は29.14mで、確認面からの深さ8cm程を測るにすぎない。ピットの深さは、P1-9cm・P2-7cm・南西隅に張り込まれた貯蔵穴状のP3-10cmを測るが、主柱穴は認められない。P1は出入り口の階段ピットであろうか。壁溝は、カマド右袖の東壁の北側で検出するだけである。床面は中央に踏みしめられた跡が残るだけである。

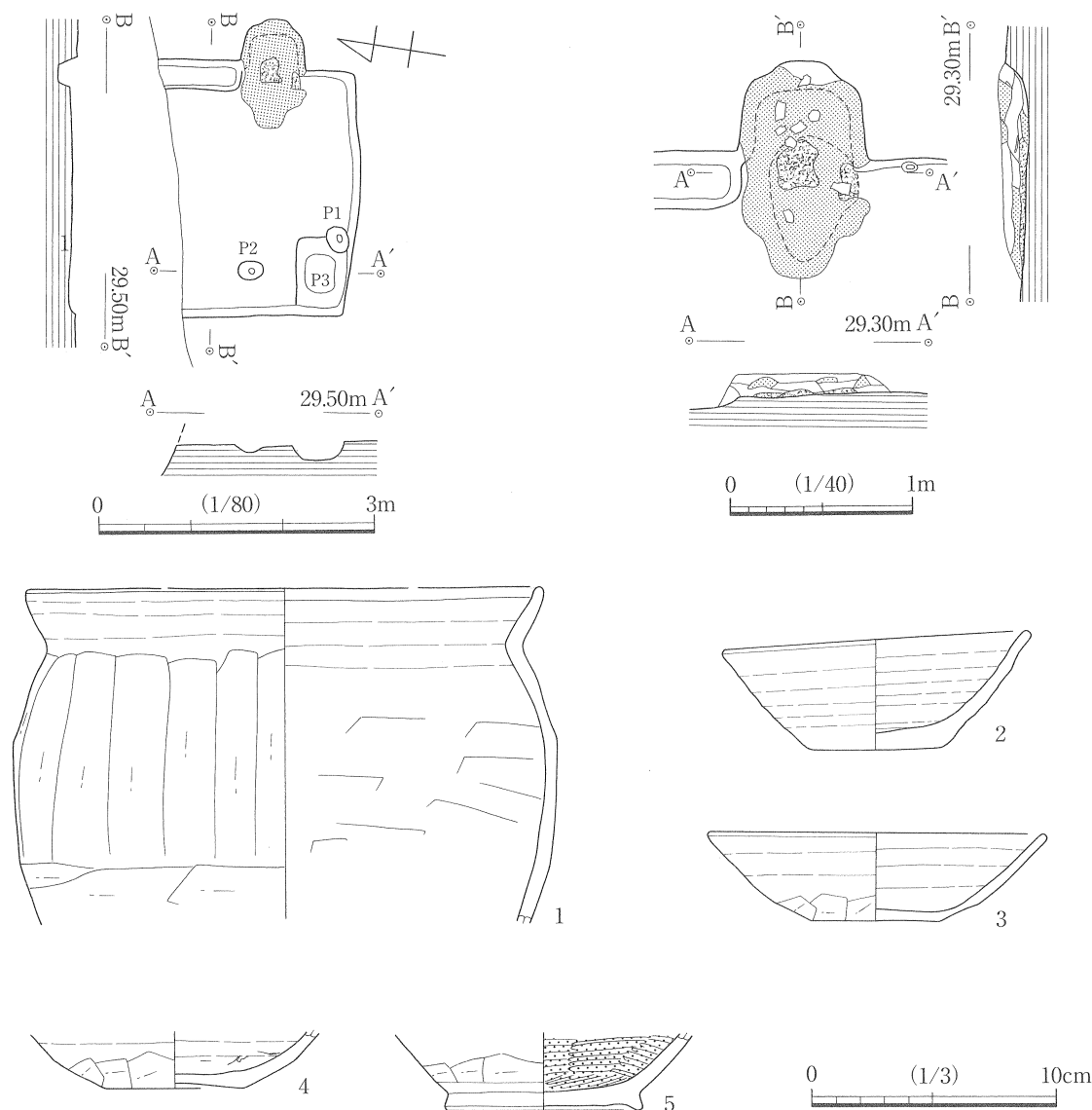
出土遺物、1は土師器甕、2は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、3・4は底体部手持ち篋削りのロクロ土師器坏、5は内黒ミガキのロクロ土師器高台付坏である。住居跡との共伴関係は、1～4がカマドから、5は床から10cmほど浮いて出土している。これらの遺物から住居跡の時期は、稲荷台Ⅳ期-aの所産と考えられる。

79号住居跡（第149図）

D地区南側のS10-E1・S10-E2・S11-E1・S11-E2区の緩やかに傾斜する台地端に単独で検出する。カマドは北壁の東に寄って設けられ、主軸を南北方向に置く。規模は、主軸長2.32m



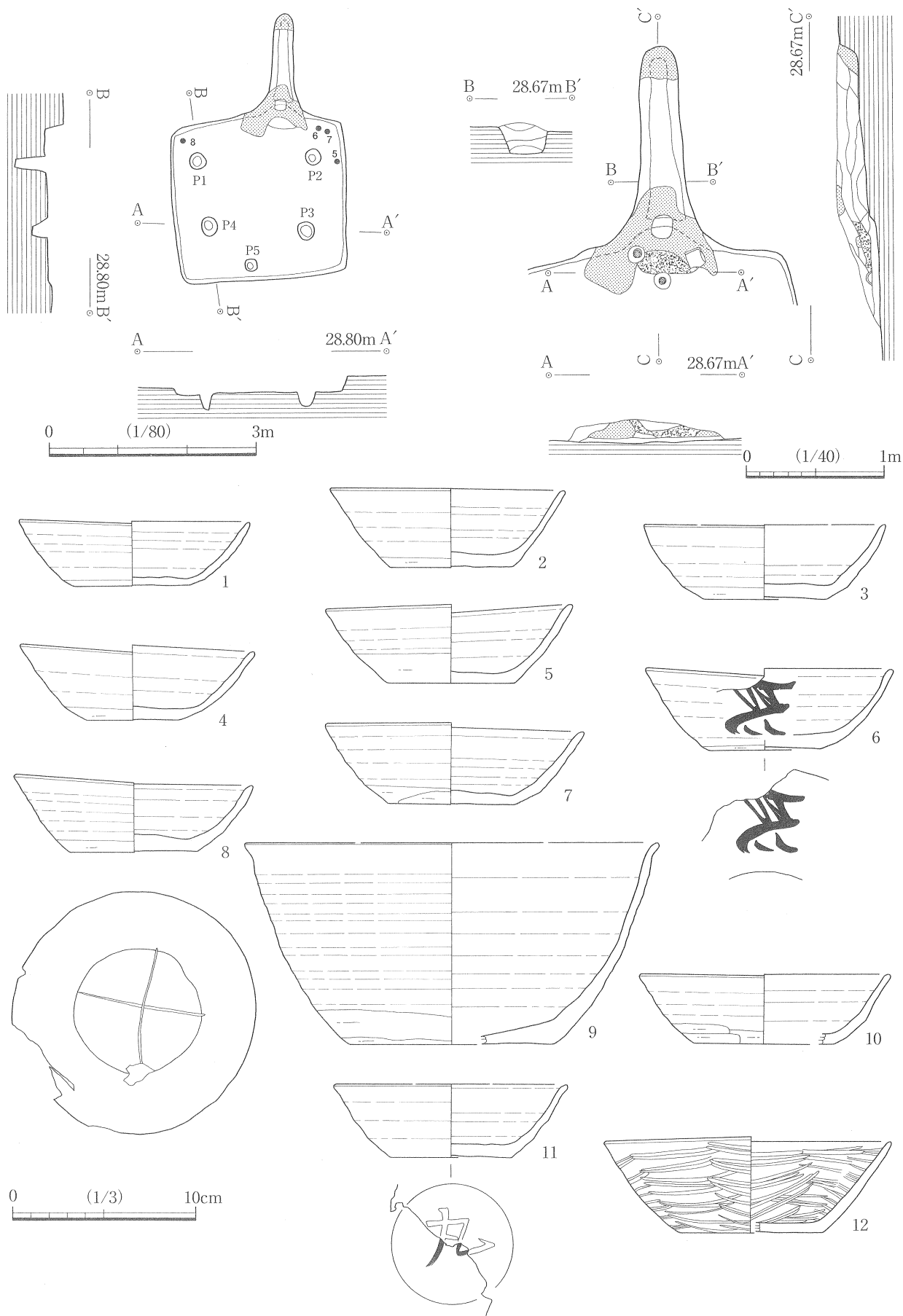
第147図 77号住居跡と出土遺物



第148図 78号住居跡と出土遺物

(2.44m)・副軸長2.40m(2.52m)を計測する。カマド袖部や燃焼部は壁外突出して設けられ、煙道部先端は壁から1.5m突出している。主軸方位はN-21°-Eを指向する。平面形は、北壁がカマドを頂点にやや膨らむがほぼ均整な方形を呈する。床面標高は28.20mで、確認面からの深さは0~36cmを測るにすぎない。ピットの深さは、P1-46cm・P2-71cm・P3-20cm・P4-26cm・P5-68cmを測り、主柱穴はP1~P4の4柱穴である。P5は出入り口の階段ピットであろうか。壁溝は検出されない。床面はカマド周辺に踏みしめられて形跡があるものの他は軟弱である。

出土遺物、1~9は回転篋削りを施すロクロ土師器坏である。6の体部外面には「□」墨書が明確に書かれる。8の底部外面には焼成前の線刻で「×」が刻まれている。9はロクロ土師器坏では最大であろう。10は底体部手持ち篋削りロクロ土師器坏、11は底部のみ手持ち篋削りで底部外面「丸」の墨書を有する。12は内外面ミガキを施している。住居跡との共伴関係は、1・2・9・12がカマドから、5・6・7・8・9が床面直上やほぼ床面からそれぞれ検出されている。これらの遺物から住居跡の時期は、稻荷台Ⅱ期-aの9世紀第2四半期の所産と考えられる。



第149図 79号住居跡と出土遺物

第2節 掘立柱建物跡とグリッド出土遺物

掘立柱建物跡は遺跡全体で、2間×3間が25棟、2間×4間が4棟、2間×5間が4棟、3間×4間が2棟、3間×5間が1棟、2間×3間の四面廂付建物4棟、2間×4間の四面廂付建物1棟、4間×4間の四面廂付建物1棟と規模が不明ながら建物の存在を思わせる数箇所を合わせると45棟を確認したが、他にも掘立柱建物跡の存在する可能性が有り、調査区域内にはまだ数棟の建物が存在したものと思われる。建物はE地区で集中して検出され、西側では複数の建物がほぼ柱筋を通しコの字状に配置される状況がうかがわれ、この様相は官衙的色彩を匂わせるものである。また、E地区中央から東側では、同一箇所でも四面廂付建物跡3棟と2間×3間1棟の建て替えが行なわれ、西側のコの字状に配置された建物群と異なる範囲に占地し、相互がそれぞれの機能を果たすための施設であったことを思わせるものである。四面廂付建物跡の周辺には、土器埋納・集石・土器廃棄遺構などの祭祀遺構が検出され、この建物群の配置と祭祀遺構は密接な関係を有している。言い換えると、西側のコの字状に配置される建物は祭祀を管理・運営のための施設で、四面廂付建物跡群は、祭祀そのものを執り行なった建物群とも言える。

(掘立柱建物跡の記載に際しては、柱掘方断面図と建物略図を記載した。断面図は、E地区詳細図に断面切断箇所を記載し、断面方向から見た建物跡番号と土層番号を記載した。例えば1号掘立柱建物跡断面④は1-④と記載した。掘立柱建物跡略図には、北向きで、断面箇所と断面観察方向を→で示し、桁行と梁間の柱間寸法を尺で示した。1尺は30cmとした。掘立柱建物跡の時期は、柱掘方内の出土遺物が、一括として取り上げられ不明な点が多く、また、切り合いの激しい本遺跡では有効な方法ではないと判断し、時期の明確な遺構との複合関係から、建物の向きが西から東に振れる事実をもとに、各掘立柱建物跡の時期を推測した。E地区以外から検出された42～45号建物の出土遺物については、そのつと説明を加えた。E地区検出の1～41号掘立柱建物跡の柱掘方内と建物範囲の出土遺物については、グリッド出土遺物として後記した。)

1号掘立柱建物跡 (第152図)

E地区西側中央に南北に並ぶ掘立柱建物跡群の最北端に位置し、A5・A6区に検出する。桁行3間×梁間2間の南北棟である。座標北を規準とする方位はN-10°-Wを指向する。桁行の南北列長は5.4m (18尺)、柱間寸法1.8m (6尺)で、梁間の東西長は4.2m (14尺)、柱間寸法2.1m (7尺)と復元できる。

2号掘立柱建物跡 (第152図)

E地区西側の北端に北柱列を調査区域外に置き、6号住居跡を掘り込み3号掘立柱建物跡と平面プランをほぼ同一場所に置き、A6・A7区に検出する。桁行4間×梁間2間の東西棟である。座標北を規準とする方位はN-8°-Wを指向する。桁行の東西柱列長は6.6m (22尺)、柱間寸法1.65m (5.5尺)である。梁間の東西長は3.6m (12尺)である。梁間柱は不明。北柱列の現地表面の土層では、地表面標高27.8m、柱掘方標高27.4m、平面での確認面であるソフトローム上面標高27.1m、北東隅柱掘方最深部標高は26.35mを測り、旧表からの柱掘方の深さは、1.05mと復元できる。

3号掘立柱建物跡 (第153図)

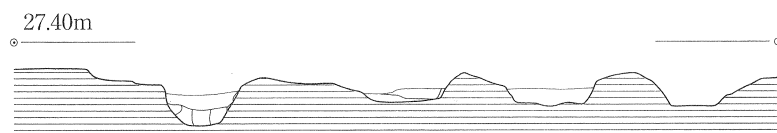
E地区西側の北端に北柱列を調査区域外に置き、6号住居跡を掘り込み、2号掘立柱建物跡と平面



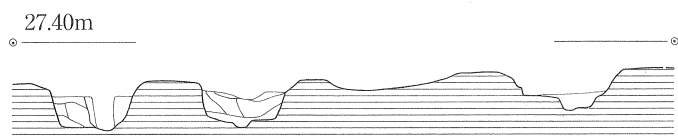
第151図 E 地区東側建物配置図

第2表 掘立柱建物跡一覧表

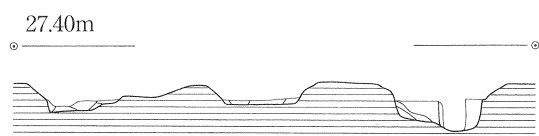
建物番号	位 置	棟方位	廊	規模cm (尺)		柱 間 寸 法cm (尺)		建坪m ²	備 考	時 期
				企 画	桁行 梁行	桁 行	梁 行			
1	a5/a6 A5/A6	南北 N-10° -W	無し	3×2	540×420 18尺14尺	180 6尺	210 7尺	—	22. 68	Ⅱ期 - a
2	a6/a7 A6/A7	東西 N-8° -W	無し	4×2	660×360 22尺12尺	165 5. 5尺	180 6尺	—	23. 76	Ⅱ期 - a
3	a6/a7 A6/A7	東西 N-7° -W	無し	4×2	660×360 22尺12尺	165 5. 5尺	180 6尺	—	23. 76	Ⅱ期 - a ~ b
4	a8/a9 A8/A9	東西 N-7° -W	無し	3×2	540×330 18尺11尺	165+ 165 +210 5. 5尺+5. 5尺+7尺	210+120 7尺+4尺	—	17. 82	Ⅱ期 - a ~ b
5	a8/a9 A8/A9	南北 N-8° -W	無し	(4)×2	(660)×420 (22尺)14尺	165 5. 5尺	210 7尺	—	(27. 22)	I 期
6	a10/a11 A10/A11	(東西) N-0° -	無し	3×2	720×(480) 24尺(16尺)	240 8尺	240+(240) 8尺+(8尺)	—	(34. 56)	Ⅱ期 - b
7	C5/C6 D5/D6	南北 N-7° -W	無し	5×2	780×450 26尺15尺	195 6. 5尺	225 7. 5尺	—	35. 1	Ⅱ期 - a
8	C5/C6 D5/D6	南北 N-12° -W	無し	3×2	495×330 16. 5尺11尺	165 (5. 5)	165 5. 5尺	—	16. 34	I 期
9	B6/B7 C6/C7	南北 N-8° -W	無し	3×2	480×330 16尺11尺	165 +165+ 150? 5. 5尺+5. 5尺+5尺	165 5. 5尺	—	15. 84	I 期
10	B5/B6 C5/C6	南北 N-12° -W	無し	3×2	510×390 17尺13尺	180 +165+165 北か 6尺+5. 5尺+5. 5尺	195 6. 5+	—	19. 89	I 期
11	B9/B10	南北 N-13° -W	無し	3×2	390×330 13尺11尺	120 +150+120 4尺+5尺+4尺	北165×165 南150×180	—	12. 87	I 期
12	C8/C9 D8/D9	南北 N-12° -W	無し	3×4	660×390 22尺13尺	165 5. 5尺	195 6. 5尺	—	25. 74	I 期
13	B10/B11 C10/C11	南北 N-6° -W	無し	3×(2)	630×(420) 21尺(14尺)	210 7尺	210+? 7尺	—	(26. 46)	13→14 Ⅱ期 - a
14	B10/B11 C10/C11	南北 N-1° -W	無し	3×(2)	600×(420) 20尺×(14尺)	210+180+210 7尺 +6尺+7尺	210+? 7尺	—	(25. 2)	Ⅱ期 - b
15	D11/E11	南北 N-8° -W	無し	3×(2)	720×(480) 24尺(16尺)	240 8尺	240+? 8尺		(34. 56)	Ⅱ期 - a
16	E11/F11	南北? N-1° -W	無し	3×?	600 20尺					Ⅱ期 - a ~ b
17	E4/E5 F4/F5	南北 N-2° -E	無し	3×2	540×360 18尺12尺	180 6尺	180 6尺		19. 44	Ⅲ期 - a ~ b
18	E5/E6 F5/F6	南北 N-6° -W	無し	3×2	630×450 21尺15尺	210 7尺	210+240 7尺8尺		28. 35	18→19 Ⅱ期 - a
19	E5/E6 F5/F6	南北 N-2° -W	無し	3×2	570×360 19尺12尺	210+165+195 165+195+210	180 6尺		20. 52	Ⅱ期 - b ~ Ⅲ期 - a
20	F9	東西 N-8° -W	無し	3×2	480×350 16尺11. 6尺	165+150+165	150+200 160+190		16. 8	Ⅱ期 - a
21	G6/G7 H6/H7	東西 N-2° -W	無し	3×2	630×420 21尺	210 14+(7)	210 (7)		26. 46	建て替え Ⅱ期 - b ~ Ⅲ期 - a
22	G7/G8 H7/H8	東西 N-3° -W	無し	5×2	930×390 31尺13尺				36. 27	→24 Ⅲ期 - a ~ b
23	G9/G10	東西	無し	5×2	930×390				36. 27	→22 Ⅱ期 - b ~
24	G8/G9 H8/H9	東西 N-7° -E	無し	4×2?	840×420 28尺×14尺				35. 28	Ⅳ期
25	G11 H11/H12	東西 N-8° -W	無し	3×2	630×390 21尺6. 5尺	210 7尺	195 6. 5尺		24. 57	20住→25 Ⅱ期 - a
26	H12/H13	東西 N-1° -W	無し	3×2	500×(360) 16. 7尺12尺		180+? 6尺		(18. 36)	25→26 Ⅱ期 - b
27	H11/H12 I11/I12	東西 N-8° -E	四面	3×2	720 510 24 17 1200×990	240 8尺	255(8. 5)	西250・東230 北240・南240	36. 72 118. 8	27→28 Ⅲ期 - b
28	I12/I13/I14 J12/J13/J14	東西 N-6° -E	四面	4×4	720×660 24尺 22尺 1075×1050	180 6尺	165 5. 5尺	西175東180 北180南210	47. 25 112. 88	Ⅳ期～Ⅴ期
29	I12/I13/I14 J12/J13/J14	東西 N-3° -E	四面	3×2	630×390 21尺13尺 1055×720	225+180+225 7. 5尺 6尺 7. 5尺	195 6. 5尺	西175東150 北180南160	24. 57 69. 72	→26→28 Ⅱ期 - b ~ Ⅲ期 - a
30	I12/I13 J12/J13	東西 N-2° -E	無し	3×2	630 480 21尺 16尺	210 7尺	240 8尺		30. 24	→29→28 Ⅱ期 - b
31	J15/J16/J17 K15/K16/K17	東西 N-1° -W	四面	4×2	850×370 28. 3尺12. 3尺	210+230+200+210 7尺 7尺 6. 7尺 7尺	185 ≒6. 2尺	西165東185 北180南175	31. 45	Ⅱ期 - b ~ Ⅲ期 - a
32	J16/J17/K16 K17/L16/L17	南北 N-4° -E	四面	3×2	860 370 28. 7尺12. 3尺 1200×665	270+300+290 9尺 10尺 9. 7尺	185 ≒6. 2尺	東130西165 北170南170	31. 82 80. 4	Ⅲ期 - a ~ b
33	L14/L15/M14 M15/N14/N15	南北 N-8° -E	無し	4×2	870×360 28. 3尺12尺	240+210+210+210 8尺 7尺 7尺	180 6尺		30. 6	Ⅳ期
34	N11/N12/N13	東西 N-15° -E	無し	3×2	660 390 22尺13尺	225+195+240 7. 5尺 6尺 8尺	195 6. 5尺		25. 74	Ⅴ期
35	L11/M11/N11	南北? N-16° -E	東・北?	4×?	720×? 24尺					Ⅴ期
36	H6/H7	東西? N-2° -W	東	3×2	520×?	180 6尺	210 7尺	東160 5. 3尺		Ⅱ期 - b
37	J9/K9	南北? N-1° -E	無し	3×2	?					Ⅲ期 - a ~ b
38	J8/J9	東西? N-6° -E	不明	3×2	?					Ⅳ期
39	M16	南北?	無し	?	?					
40	K18/K19 L18/L19	南北 N-1° -W	無し	3×2	510 360 17尺12尺	180+180+150 6尺 6尺 5尺			18. 36	Ⅱ期 - b
41	E6/E7 F6/F7	南北 N-5° -E	無し	3×2	440・450×300 ・360		北150南180		14. 52	Ⅳ期
42	A区 N6-E2/N6-E3	東西 N-4° -W	無し	5×2	1050×540 35尺18尺	210 7尺	270 9尺		56. 7	Ⅱ期 - a
43	B区	東西 N-1° -E	四面	3×2	660×450 22尺15尺 1020×810	240+180+240 8尺6尺8尺	225 7. 5尺	180 6尺	29. 7 82. 64	Ⅲ期 - a
44	B区	東西 N-3° -W	不明	4×3	800×600 ≒27尺20尺				48	Ⅱ期 - b
45	D区	東西 N-2° -W	無し	5×3	1050×(540) 35尺18尺	210 ≒27尺20尺	180 7尺		56. 7	Ⅱ期 - b



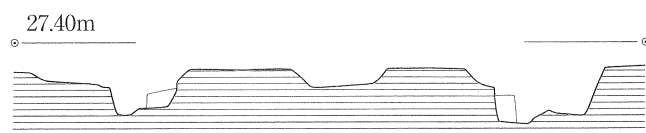
1号建物跡断面－①



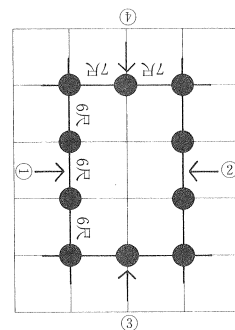
1号建物跡断面－②



1号建物跡断面－③

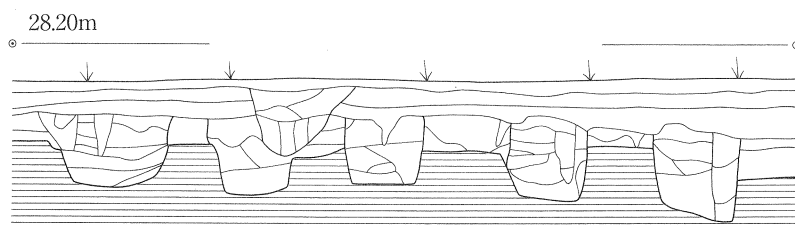


1号建物跡断面－④

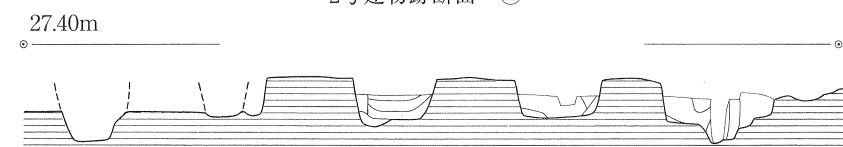


桁行 5.4m (18尺)
梁間 4.2m (14尺)

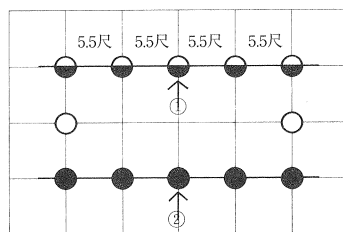
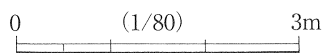
1号掘立柱建物跡



2号建物跡断面－①



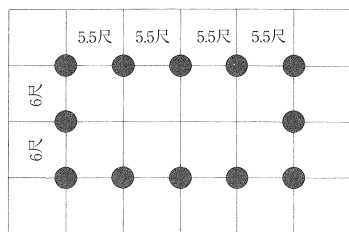
2号建物跡断面－②



桁行 6.6m (12尺)
梁間 3.6m (12尺)

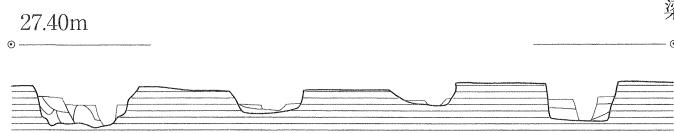
2号掘立柱建物跡

第152図 1～2号掘立柱建物跡掘方断面と略図



桁行 6.6m (22 尺)
梁間 3.6m (12 尺)

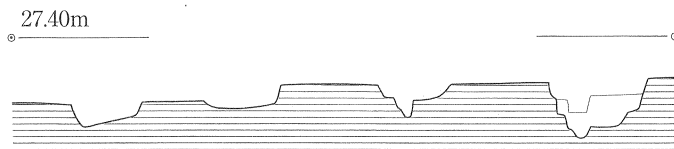
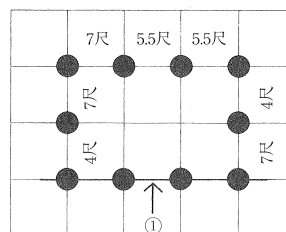
3号掘立柱建物跡



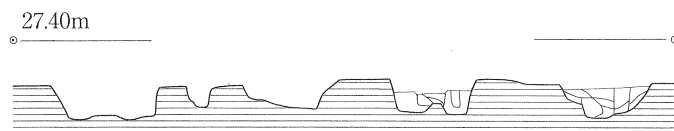
4号建物跡断面 - ①

4号掘立柱建物跡

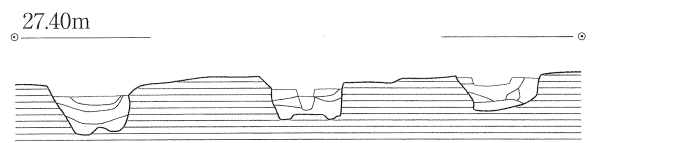
桁行 5.4m (18 尺)
梁間 3.3m (11 尺)



5号建物跡断面 - ①



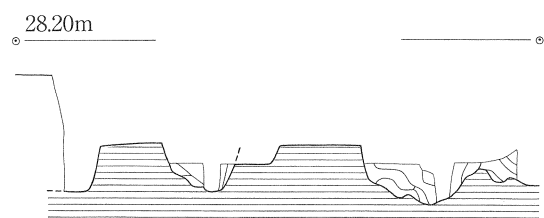
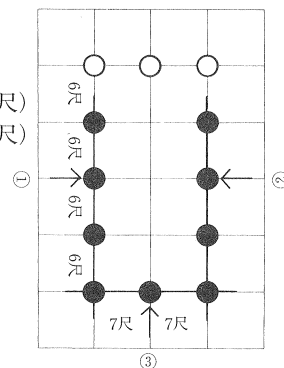
5号建物跡断面 - ②



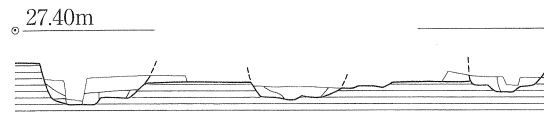
5号建物跡断面 - ③

5号掘立柱建物跡

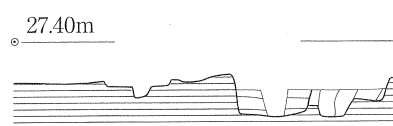
桁行 (7.2m) (24 尺)
梁間 4.2m (14 尺)



6号建物跡断面 - ①



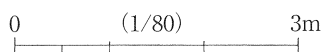
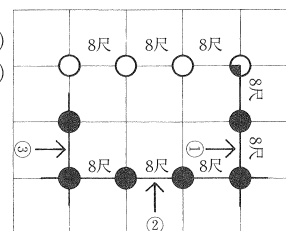
6号建物跡断面 - ②



6号建物跡断面 - ③

6号掘立柱建物跡

桁行 7.2m (24 尺)
梁間 (4.8m) (16 尺)



第153図 3~6号掘立柱建物跡掘方断面と略図

プランをほぼ同一場所の A 6・A 7 区から検出する。桁行 4 間×梁間 2 間の東西棟である。座標北を規準とする方位は $N-7^{\circ}-W$ を指向する。桁行の東西柱列長は 6.6m (22 尺)、柱間寸法 1.65m (5.5 尺) で、梁間の東西長は 3.6m (12 尺)、柱間寸法 1.8m (6 尺) と復元でき、ほぼ同位置の 2 号掘立柱建物跡と同一企画の建物跡である。

4 号掘立柱建物跡 (第153図)

E 地区西側の北に 5 号掘立柱建物跡と平面プランを重複して A 8・A 9 区から検出する。桁行 3 間×梁間 2 間の東西棟である。座標北を規準とする方位は $N-7^{\circ}-W$ を指向する。桁行の東西柱列長は 5.4m (18 尺)、柱間寸法は西から 2.1m (7 尺)・1.65m (5.5 尺)・1.65m (5.5 尺) で、梁間の南北長は 3.3m (11 尺)、柱間寸法は 2.1m (7 尺) と 1.2m (4 尺) で東と西の柱間が入れ替わっている。

5 号掘立柱建物跡 (第153図)

E 地区西側の北東辺部に北側柱列を調査区域外に置き、7 号・8 号住居跡を掘り込んで A 8・A 9 区から検出する。桁行 3 間以上×梁間 2 間の南北棟である。座標北を規準とする方位は $N-8^{\circ}-W$ を指向する。桁行の東・西柱列長は不明であるが、3 間で 5.4m (18 尺)、柱間寸法 1.8m (6 尺) で、梁間の東西柱列長は 4.2m (14 尺)、柱間寸法 2.1m (7 尺) と復元できる。

6 号掘立柱建物跡 (第153図)

E 地区西側の北東端に北側半分を調査区域外に置き、33 号住居跡を掘り込んで A10・A11 区から検出する。桁行 3 間×梁間 2 間の南北棟であろう。座標北を規準とする方位は $N-0^{\circ}$ を指向する。桁行の東西柱列長は 7.2m (24 尺)、柱間寸法 2.4m (8 尺) と復元できる。梁間の南北長は不明だが、柱間寸法 2.4m (8 尺) である。

7 号掘立柱建物跡 (第154図)

E 地区西側の南北に並ぶ掘立柱建物跡の中央の C 5・C 6・D 5・D 6 区から検出する。桁行 4 間×梁間 2 間の南北棟である。座標北を規準とする方位は $N-7^{\circ}-W$ を指向する。桁行の南北柱列長は 7.8m (26 尺)、柱間寸法 1.95m (6.5 尺) で、梁間東西柱列長は 4.5m (15 尺)、柱間寸法 2.25m (7.5 尺) と復元できる。

8 号掘立柱建物跡 (第154図)

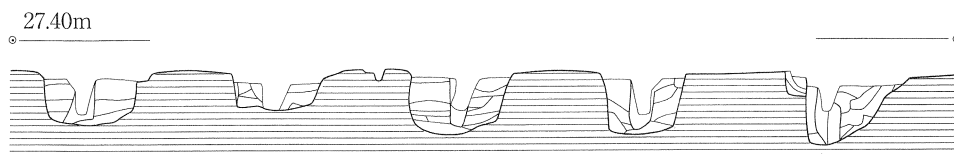
E 地区西側の中央に、7 号掘立柱建物跡と複合して C 5・C 6・D 5・D 6 区から検出する。桁行 3 間×梁間 2 間の南北棟である。座標北を規準とする方位は $N-12^{\circ}-W$ を指向する。桁行の南北柱列長は 4.95m (16.5 尺)、柱間寸法 1.65m (5.5 尺) で、梁間の東西柱列長は 3.3m (11 尺)、柱間寸法 1.65m (5.5 尺) と復元できる。

9 号掘立柱建物跡 (第154図)

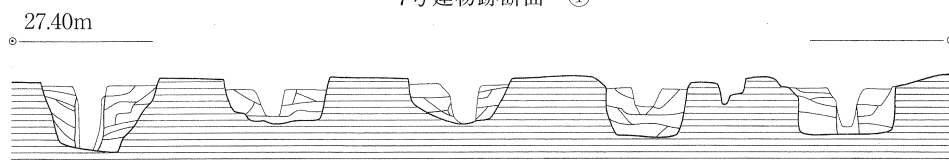
E 地区西側の中央に 8 号掘立柱建物跡の北東隅の柱掘方と複合して B 6・B 7・C 6・C 7 区から検出する。桁行 3 間×梁間 2 間の南北棟である。座標北を規準とする方位は $N-8^{\circ}-W$ を指向する。桁行の南北柱列長は 4.8m (16 尺)、柱間寸法は北から 1.5m (5 尺)・1.65m (5.5 尺)・1.65m (5.5 尺) で、梁間の東西柱列長は 3.3m (11 尺)、柱間寸法 1.65m (5.5 尺) と復元できる。

10 号掘立柱建物跡 (第155図)

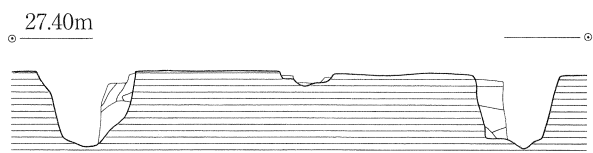
E 地区西側の中央に 7 号掘立柱建物跡と複合して B 5・B 6・C 5・C 6 から検出する。桁行 3 間×梁間 2 間の南北棟である。座標北を規準とする方位は $N-12^{\circ}-W$ を指向する。桁行の南北柱列長は



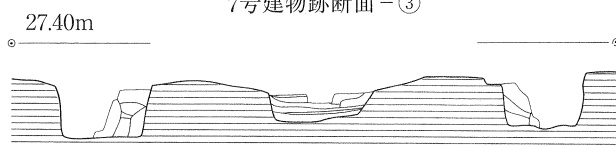
7号建物跡断面-①



7号建物跡断面-②



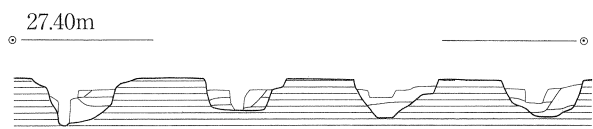
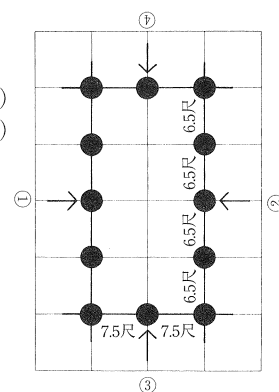
7号建物跡断面-③



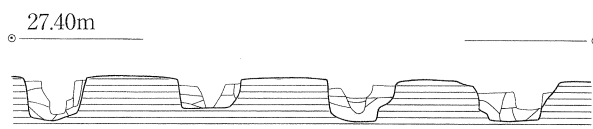
7号建物跡断面-④

7号掘立柱建物跡

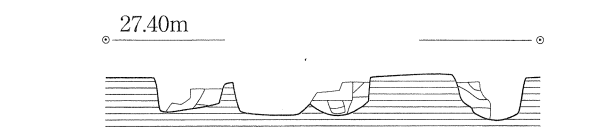
桁行 7.8m (26尺)
梁間 4.5m (15尺)



8号建物跡断面-①



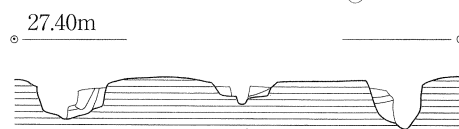
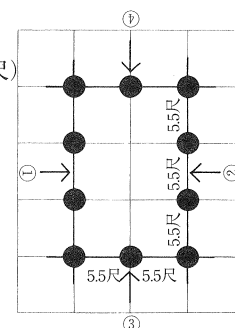
8号建物跡断面-②



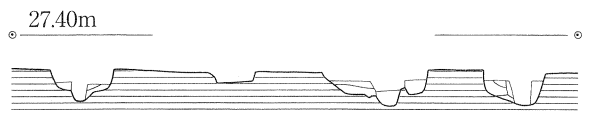
8号建物跡断面-③

8号掘立柱建物跡

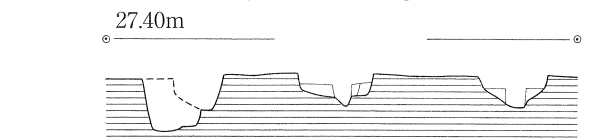
桁行 4.95m (16.5尺)
梁間 3.3m (11尺)



8号建物跡断面-④



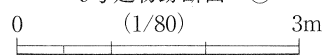
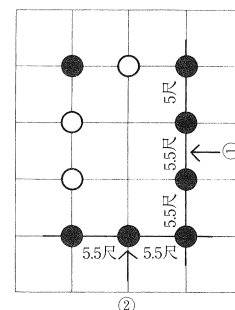
9号建物跡断面-①



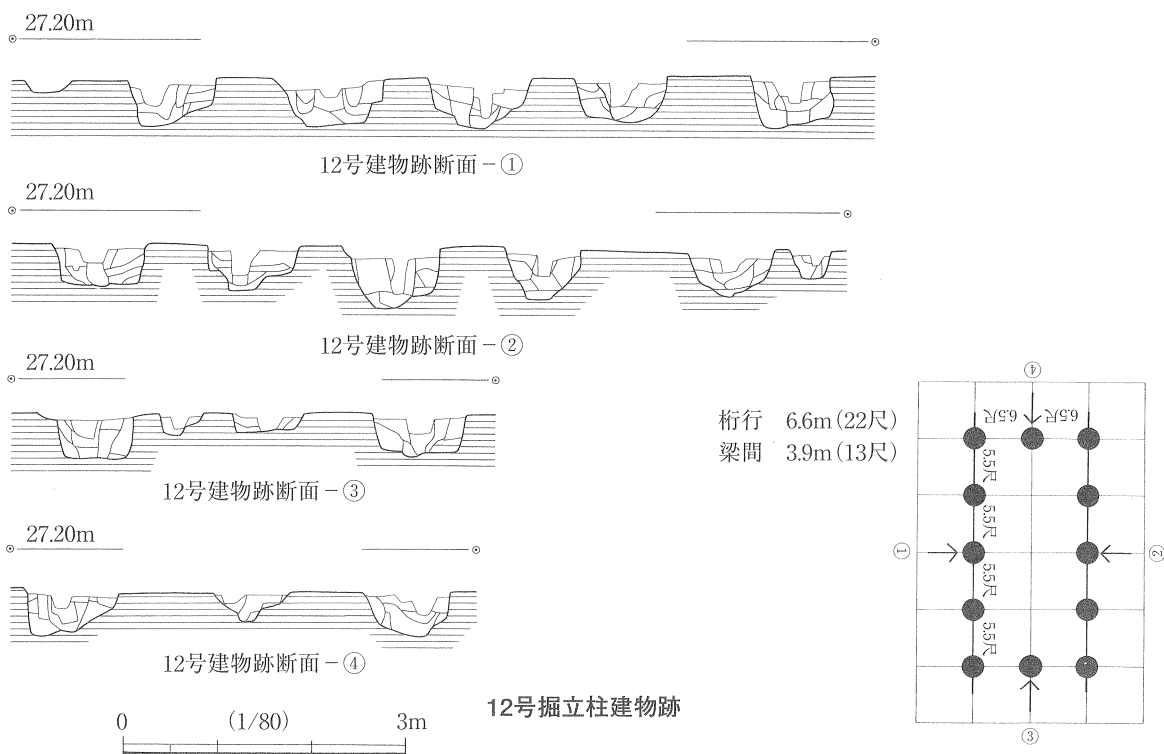
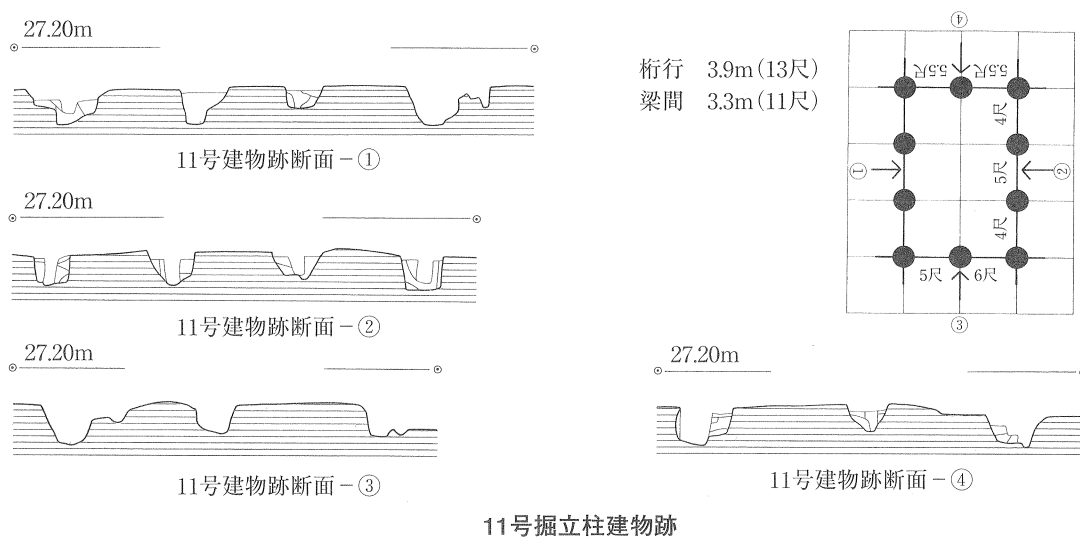
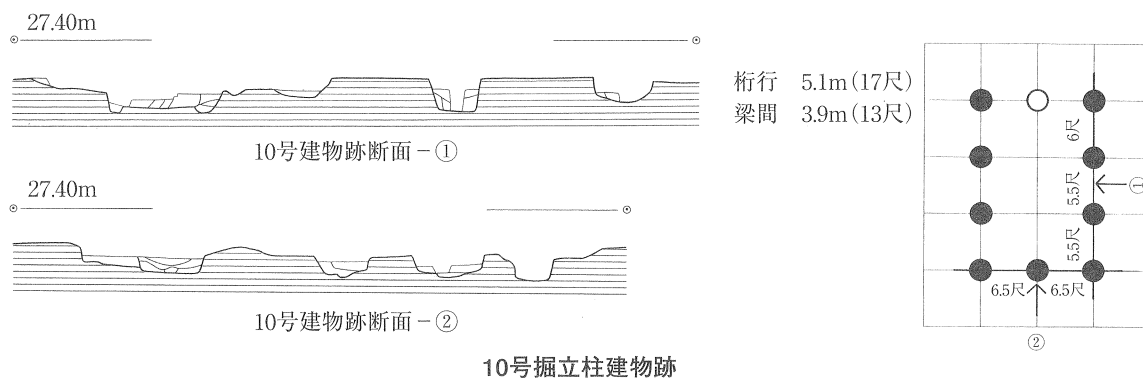
9号建物跡断面-②

9号掘立柱建物跡

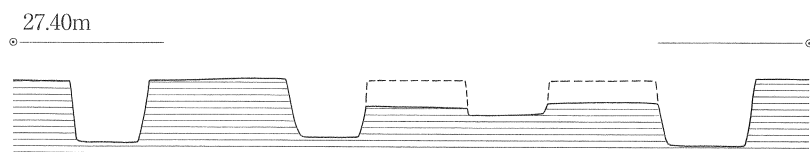
桁行 4.8m (16尺)
梁間 3.3m (11尺)



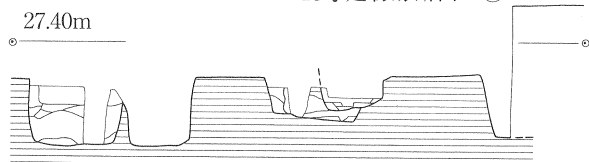
第154図 7~9号掘立柱建物跡掘方断面と略図



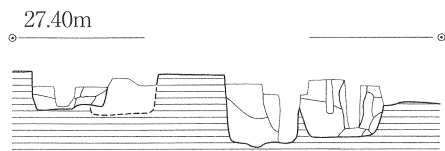
第155図 10～12号掘立柱建物跡掘方断面と略図



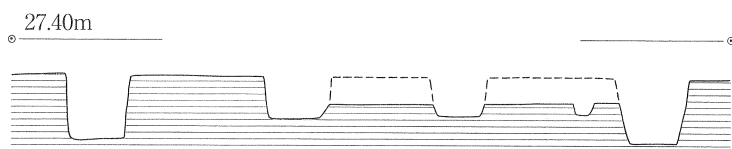
13号建物跡断面-①



13号建物跡断面-②

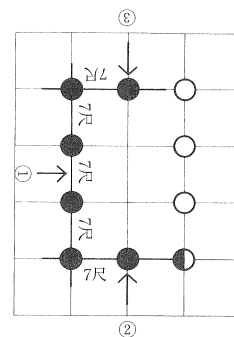


13号建物跡断面-③

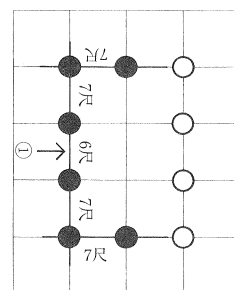


14号建物跡断面-①

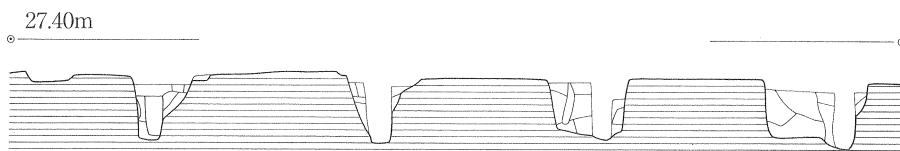
13・14号掘立柱建物跡



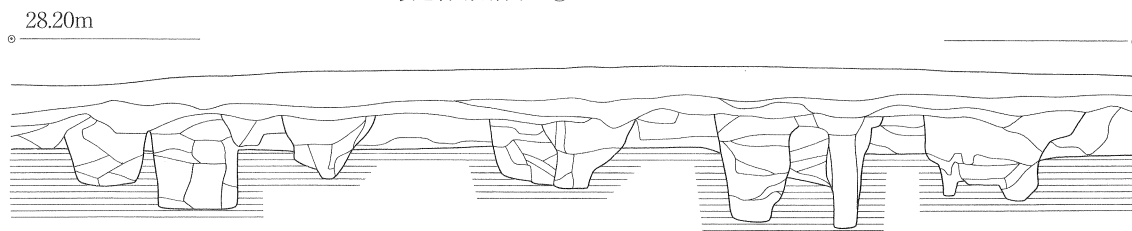
13号掘立柱建物跡



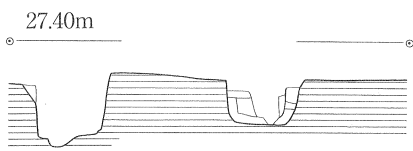
14号掘立柱建物跡



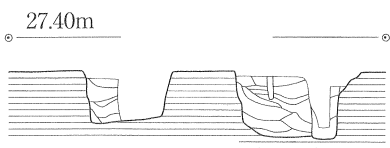
15号建物跡断面-①



15号建物跡断面-②

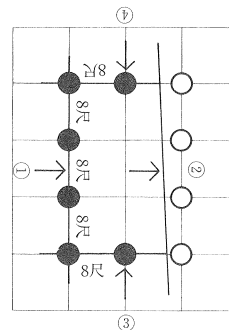


15号建物跡断面-③

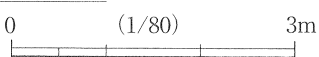


15号建物跡断面-④

桁行 7.2m (24尺)
梁間 (4.8m) (16尺)



15号掘立柱建物跡



第156図 13~15号掘立柱建物跡掘方断面と略図

5.1m (17尺)、柱間寸法は北から1.8m (6尺)・1.65m (5.5尺)・1.50m (5尺)で、梁間の東西柱列長は3.9m (13尺)、柱間寸法1.95m (6.5尺)と復元できる。

11号掘立柱建物跡 (第155図)

E地区西側の北東のB9・B10から検出する。桁行3間×梁間2間の南北棟である。座標北を規準とする方位はN-13°-Wを指向する。桁行の南北柱列長は3.9m (13尺)、柱間寸法は北から1.2m (4尺)・1.5m (5尺)・1.2m (4尺)で、梁間の東西長は3.3m (11尺)、北柱列の柱間寸法は1.65m (5.5尺)で、南柱列は西から1.5m (5尺)・1.8m (6尺)と復元できる。

12号掘立柱建物跡 (第155図)

E地区西側の北東部のC8・C9・D8・D9区に32号住居跡を掘り込んで検出する。桁行4間×梁間2間の南北棟である。座標北を規準とする方位はN-12°-Wを指向する。桁行の南北柱列長は6.6m (22尺)、柱間寸法は1.65m (5.5尺)で、梁間の東西柱列長は3.9m (13尺)、柱間寸法1.95m (6.5尺)と復元できる。

13号掘立柱建物跡 (第156図)

E地区西側の東辺部のB10・B11・C10・C11区に36号住居跡を掘り込み、ほぼ同位置に平面プランを置く14号掘立柱建物跡に掘り込まれて検出する。北西隅の柱掘方がⅣ期-b (10世紀第2四半世紀)の35号住居跡の東壁が僅かに切り合うが詳細な記録資料がなく前後関係を明確にできないが写真記録では35号住居跡が掘り込んでいのように看取される。桁行3間×梁間2間の南北棟であろうか。座標北を規準とする方位はN-6°-Wを指向する。桁行の南北柱列長は6.3m (21尺)、柱間寸法は2.1m (7尺)で、梁間の東西柱列長は不明であるが、柱間寸法2.1m (7尺)と復元できる。

14号掘立柱建物跡 (第156図)

E地区西側の東辺部のB10・B11・C10・C11区に36号住居跡を掘り込み、ほぼ同位置に平面プランを置く13号掘立柱建物跡を掘り込んで検出する。桁行3間×梁間2間の南北棟であろうか。座標北を規準とする方位はN-1°-Wを指向する。桁行の南北柱列長は6.0m (20尺)、柱間寸法は北から2.1m (7尺)・1.8m (6尺)・2.1m (7尺)で、梁間の東西柱列長は不明であるが、柱間寸法2.1m (7尺)と復元できる。

15号掘立柱建物跡 (第156図)

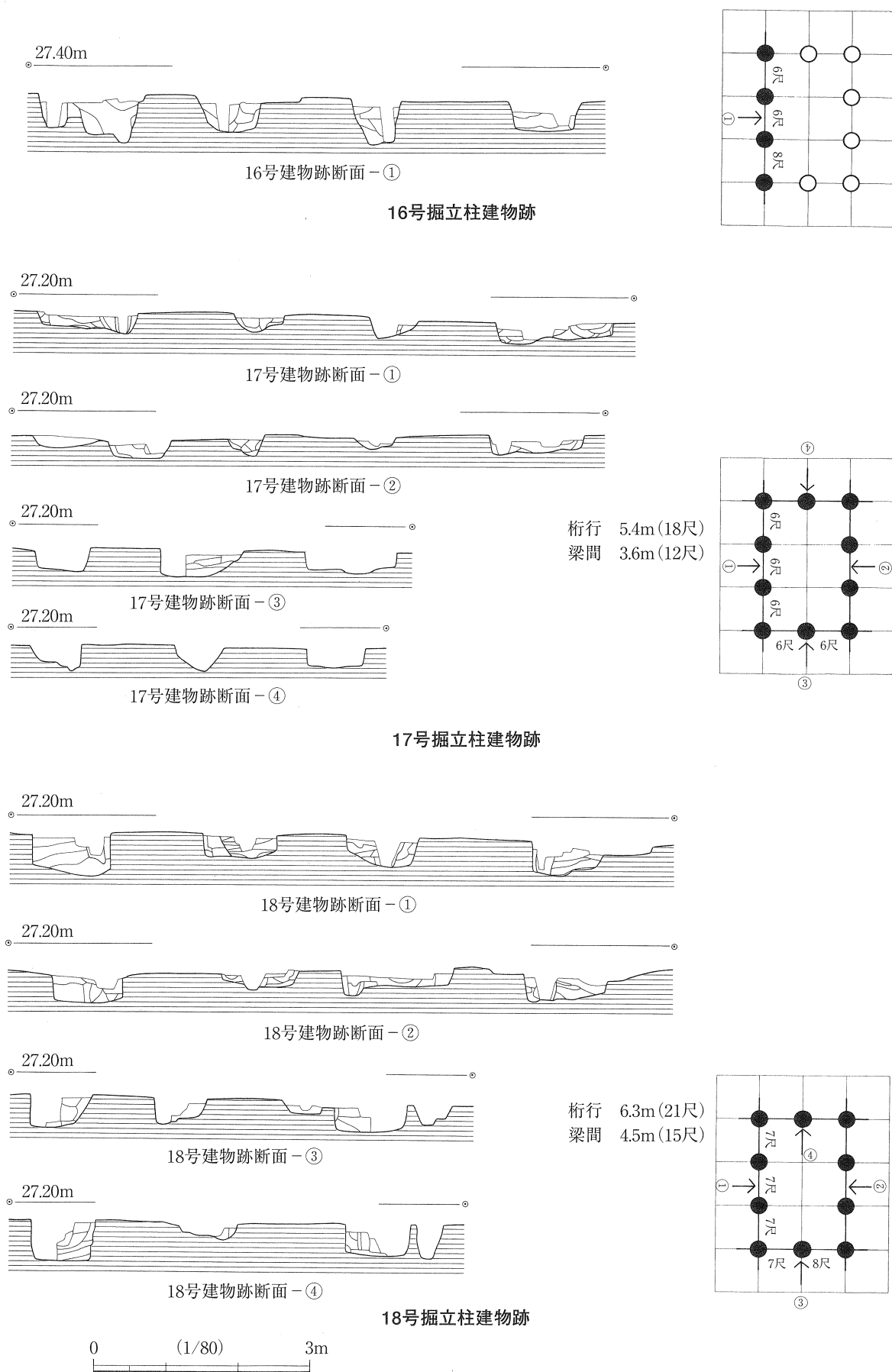
E地区西側の東辺部のD11・E11区に、東柱列を調査区域外に置き検出する。桁行3間×梁間2間の南北棟であろうか。座標北を規準とする方位はN-8°-Wを指向する。桁行の南北柱列長は7.2m (24尺)、柱間寸法は2.4m (8尺)と復元できる。梁間の東西柱列長は不明であるが、柱間寸法も桁行き同様の2.4m (8尺)であろうか。

16号掘立柱建物跡 (第157図)

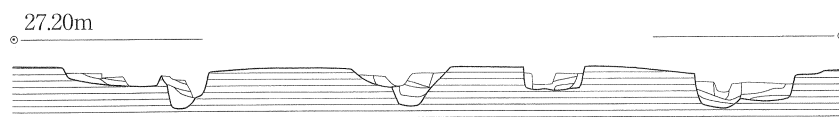
E地区西側の東辺部南端のE11・F11区に西側柱列だけを検出する。柱列桁行と仮定すると、桁行3間の南北棟であろうか。座標北を規準とする方位はN-1°-Wを指向する。桁行の南北柱列長は約6m (20尺)、柱間寸法は北から1.8m (6尺)・1.8m (6尺)・2.4m (8尺)と復元できる。

17号掘立柱建物跡 (第157図)

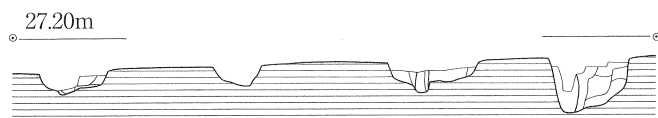
E地区西側の南北に並ぶ掘立柱建物跡群南端のE4・E5区に18・19号掘立柱建物跡と複合して検出する。桁行3間×梁間2間の南北棟である。座標北を規準とする方位はN-2°-Eを指向する。



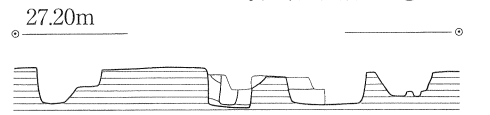
第157図 16～18号掘立柱建物跡掘方断面と略図



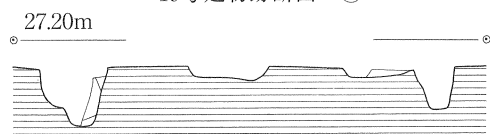
19号建物跡断面-①



19号建物跡断面-②

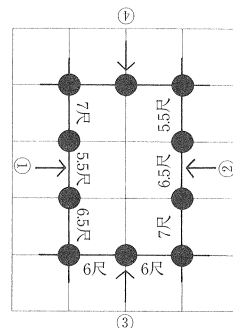


19号建物跡断面-③

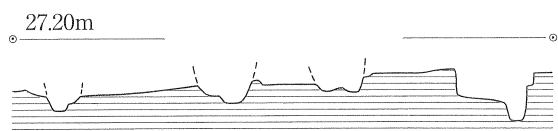


19号建物跡断面-④

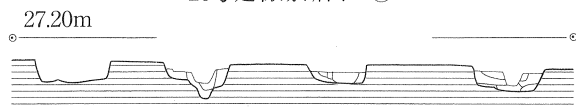
桁行 5.7m (19尺)
梁間 3.6m (12尺)



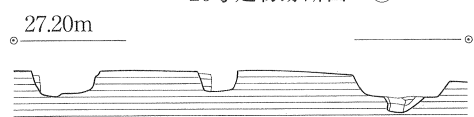
19号掘立柱建物跡



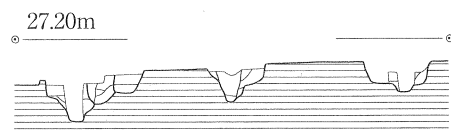
20号建物跡断面-①



20号建物跡断面-②

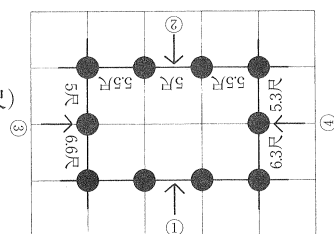


20号建物跡断面-③

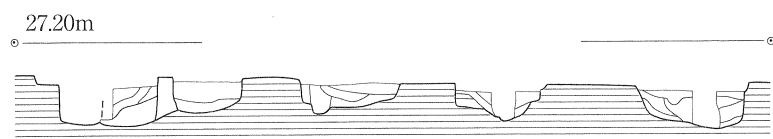


20号建物跡断面-④

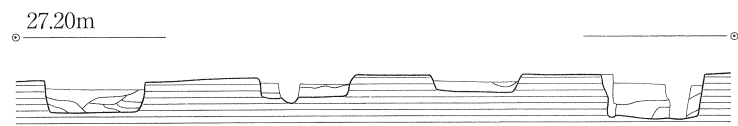
桁行 4.8m (16尺)
梁間 3.5m (11.6尺)



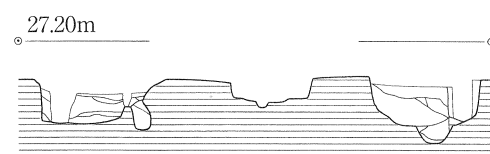
20号掘立柱建物跡



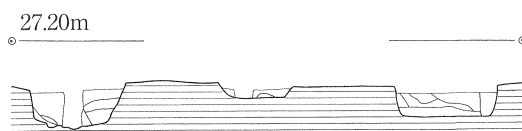
21号建物跡断面-①



21号建物跡断面-②

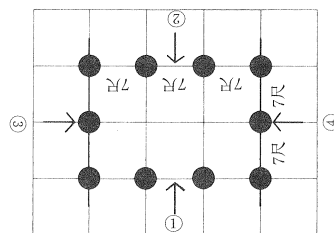


21号建物跡断面-③

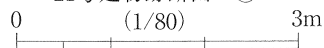


21号建物跡断面-④

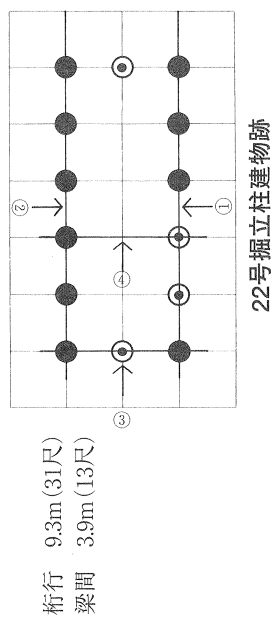
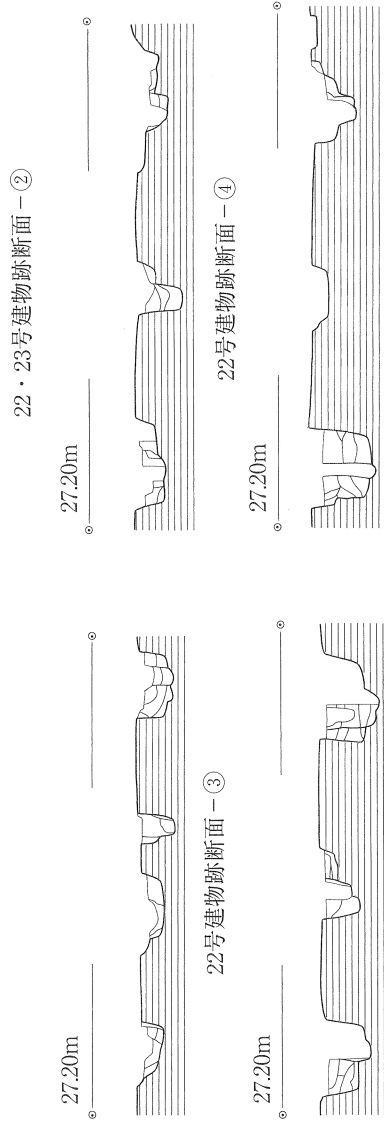
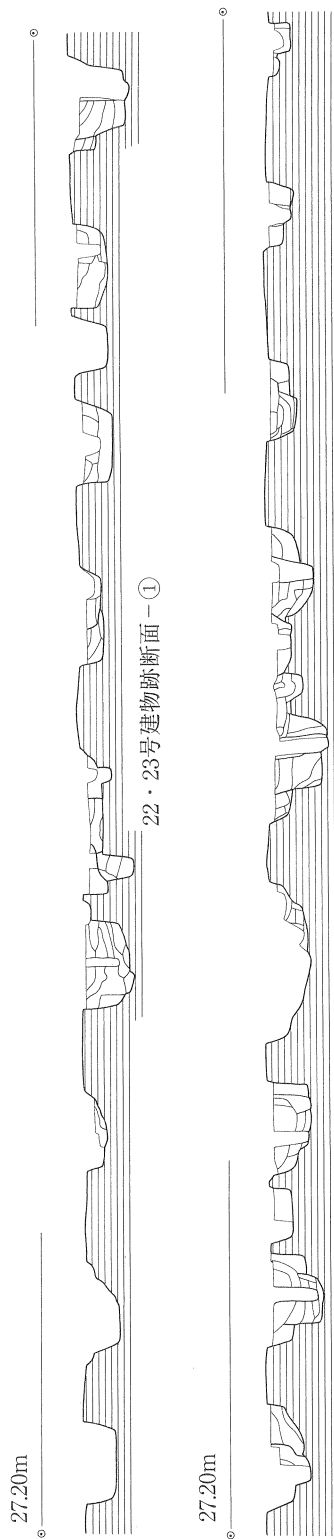
桁行 6.3m (21尺)
梁間 4.2m (14尺)



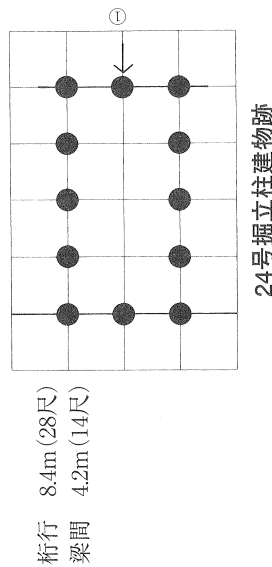
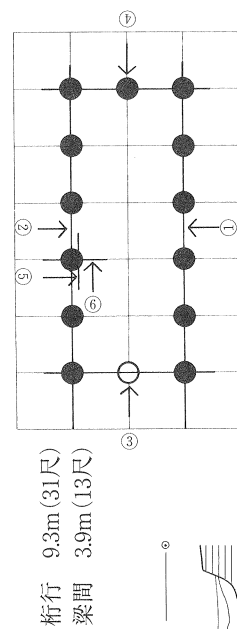
21号掘立柱建物跡



第158図 19~21号掘立柱建物跡掘方断面と略図



23号建物跡断面-④



23号建物跡断面-⑥

22・23・24号掘立柱建物跡



第159図 22～24号掘立柱建物跡断面と略図

桁行の南北柱列長は5.4m（18尺）、柱間寸法1.8m（6尺）で、梁間東西柱列長は3.6m（12尺）、柱間寸法2.25m（6尺）と復元できる。

18号掘立柱建物跡（第157図）

E地区西側の南北に並ぶ掘立柱建物跡群南端のE5・E6区に17・19号掘立柱建物跡とほぼ同一個所で複合して検出する。南梁間柱掘方を19号掘立柱建物跡に掘り込まれている。桁行3間×梁間2間の南北棟である。座標北を規準とする方位はN-6°-Wを指向する。桁行の南北柱列長は6.3m（21尺）、柱間寸法ほぼ2.1m（7尺）で、梁間東西柱列長は4.5m（15尺）、柱間寸法は西から2.1m（7尺）・2.4m（8尺）と復元できる。

19号掘立柱建物跡（第158図）

E地区西側の南北に並ぶ掘立柱建物跡群南端のE5・E6区に18号掘立柱建物跡と複合して検出する。南西隅柱掘方が18号南柱列の梁間柱掘方を掘り込んでいる。桁行3間×梁間2間の南北棟である。座標北を規準とする方位はN-2°-Wを指向する。桁行の南北柱列長は5.7m（19尺）、柱間寸法は西柱列が北から2.1m（7尺）・1.65m（5.5尺）・1.95m（6.5尺）、東柱列は北から1.65m（5.5尺）・1.95m（6.5尺）・2.1m（7尺）で、梁間東西長は3.6m（12尺）、柱間寸法は1.8m（6尺）と復元できる。

20号掘立柱建物跡（第158図）

E地区西側のF9区に検出する。桁行3間×梁間2間の東西棟である。座標北を規準とする方位はN-8°-Wを指向する。桁行の東西柱列長は4.8m（16尺）、柱間寸法は北柱列が西から1.65m（5.5尺）・1.50m（5尺）・1.65m（5.5尺）で、梁間東西柱列長は3.5m（11.6尺）、柱間寸法は西柱列が北から1.5m（5尺）・2.0m（6.7尺）、東柱列は1.6m（5.3尺）・1.9m（6.3尺）と復元できる。

21号掘立柱建物跡（第158図）

E地区西側の南のG6・G7区に検出する。桁行3間×梁間2間の東西棟で建て替えが行われる建物跡である。座標北を規準とする方位はN-2°-Wを指向する。桁行の東西柱列長は6.3m（21尺）、柱間寸法ほぼ2.1m（7尺）で、梁間の南北柱列長は4.2m（14尺）、柱間寸法は2.1m（7尺）である。

22号掘立柱建物跡（第159図）

E地区西側の南のG7・G8・H7・H8区に検出する。桁行5間×梁間2間の東西棟でプラン東側の23・24号掘立柱建物跡と複合する。座標北を規準とする方位はN-3°-Wを指向する。桁行の東西柱列長は9.3m（31尺）、柱間寸法1.8m（6尺）強である。梁間の南北柱列長は3.9m（13尺）、柱間寸法は東西で異なる。また、梁の柱掘方は桁行の柱掘方に比して小さく径0.4mのピット状を呈している。掘方の切り合いから23号→22号→24号掘立柱建物跡の順となろう。

23号掘立柱建物跡（第159図）

E地区西側の南のG8・G9・G10・H8・H9・H10区に検出する。桁行5間×梁間2間の東西棟でプラン西側では22号とほぼ同位置で24号掘立柱建物跡と複合する。座標北を規準とする方位はN-3°-Wを指向する。桁行の東西柱列長は9.3m（31尺）、柱間寸法1.8m（6尺）強である。梁間の南北柱列長は3.9m（13尺）で22号掘立柱建物跡と同規模と復元できる。

24号掘立柱建物跡（第159図）

E地区西側の南のG8・G9・G10・H8・H9・H10区に検出する。桁行（4）間×梁間2間の東

西棟で22・23号掘立柱建物跡プランと重複する。座標北を規準とする方位は $N-7^{\circ}-E$ を指向する。桁行の東西柱列長は8.4m (28尺)、柱間寸法2.1m (7尺) 程である。梁間の南北柱列長は4.2m (14尺)、柱間寸法は2.1m (7尺) である。

25号掘立柱建物跡 (第160・161図)

E地区の中央のG11・H11・H12区に北東部分の一部を調査区域外に置き検出する。桁行3間×梁間2間の東西棟で20号住居跡を掘り込み、26・27号掘立柱建物跡に掘り込まれている。座標北を規準とする方位は $N-8^{\circ}-W$ を指向する。桁行の東西柱列長は6.3m (21尺)、柱間寸法2.1m (7尺) である。梁間の南北柱列長は3.9m (13尺)、柱間寸法は1.95m (6.5尺) である。

26号掘立柱建物跡 (第160・161図)

E地区の中央のH12・H13区に北半分を調査区域外に置き検出する。桁行3間×梁間2間の東西棟と看取される。25号掘立柱建物跡を掘り込み、27・28号掘立柱建物跡に掘り込まれている。座標北を規準とする方位は $N-1^{\circ}-W$ を指向する。桁行の東西柱列長は5m ($\div 16.5$ 尺)、柱間寸法1.65m (5.5尺) であろう。梁間の南北柱列長は不明だが、柱間寸法は1.8m (6尺) を測る。

27号掘立柱建物跡 (第160・162図)

E地区の中央のH11・H12・I11・I12区に20・21号住居跡・25・26・29号掘立柱建物跡を掘り込み、28号掘立柱建物跡に掘り込まれて検出する。桁行3間×梁間2間の東西棟で四面に廂を有している。座標北を規準とする方位は $N-8^{\circ}-E$ を指向する。桁行の東西柱列長は7.2m (24尺)、柱間寸法2.4m (8尺) である。梁間の南北柱列長5.1m (17尺)、柱間寸法は2.55m (8.5尺) を測る。廂は西側に2.5m・東側に2.3m・北側に2.4m・南側に2.4mで東側が短い。廂を含めた建物規模は南北9.9m (33尺)、東西12m (40尺) である。この建物は、建物方向が西(古)から東(新)に振れる原則に合わない例外となる。

28号掘立柱建物跡 (第160・163・164図)

E地区の中央のI12・I13・I14・J12・J13・J14区に26・27・29・30号掘立柱建物跡を掘り込み検出する。桁行4間×梁間4間で四面に廂を有している。建物の柱位置等から南を正面とした東西棟である。座標北を規準とする方位は $N-6^{\circ}-E$ を指向する。桁行の東西柱列長は7.2m (24尺)、柱間寸法1.8m (6尺) である。梁間の南北長6.6m (22尺)、柱間寸法は1.65m (5.5尺) である。廂は西側に1.75m ($\div 6$ 尺)・東側に1.8m (6尺)・北側に1.8m (6尺)・南側に2.1m (7尺) と復元できる。廂を含めた建物規模は南北10.50m (35尺)、東西10.75m ($\div 36$ 尺) となる。

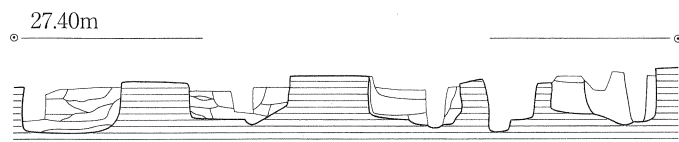
29号掘立柱建物跡 (第160・164図)

E地区の中央のI12・I13・I14・J12・J13・J14区に28号掘立柱建物跡の平面プラン内に包括されて検出した。27・28号掘立柱建物跡を掘り込まれ、30号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。桁行3間×梁間2間で変則的な総柱構造を成し、四面に廂を有し東西棟である。座標北を規準とする方位は $N-3^{\circ}-E$ を指向する。桁行の東西柱列長は6.3m (21尺)、柱間寸法は西側から2.25m (7.5尺)・1.8m (6尺)・2.25m (7.5尺)で、梁間の南北柱列長3.9m (13尺)、柱間寸法は1.95m (6.5尺) である。廂は西側に1.75m ($\div 6$ 尺)・東側に1.5m (5尺)・北側に1.8m (6尺)・南側に1.5m ($\div 5$ 尺) である。廂を含めた建物規模は南北7.2m ($\div 24$ 尺)・東西10.55m ($\div 32$ 尺)、と復元できる。

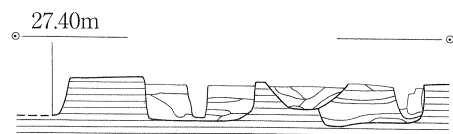
30号掘立柱建物跡 (第160・164図)



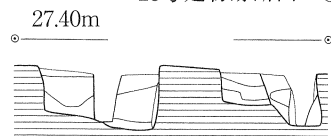
第160図 25～30号掘立柱建物跡



25号建物跡断面-①

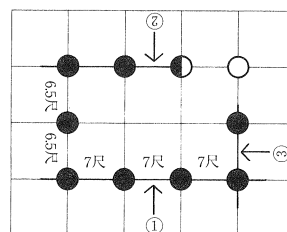


25号建物跡断面-②

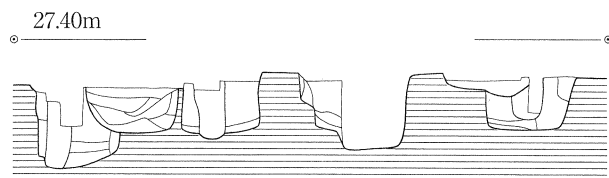


25号建物跡断面-③

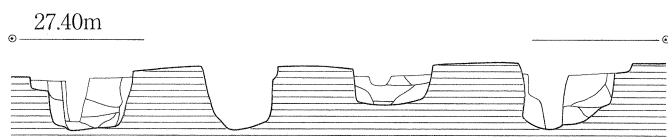
桁行 6.3m (21尺)
梁間 3.9m (13尺)



25号掘立柱建物跡

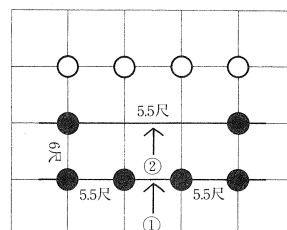


26号建物跡断面-①



26号建物跡断面-②

桁行 5m (≒16.5尺)
梁間 (3.6m)



0 (1/80) 3m

26号掘立柱建物跡

第161図 25～26号掘立柱建物跡掘方断面と略図

E 地区中央の I12・I13・J12・J13区に在り、28・29号掘立柱建物跡に掘り込まれ検出する。桁行 3 間×梁間 2 間の東西棟である。座標北を規準とする方位は $N-2^{\circ}-E$ を指向する。桁行の東西柱列長は 6.3m (21尺)、柱間寸法は 2.1m (7 尺) である。梁間の南北柱列長は 4.8m (16尺)、柱間寸法 2.4m (8 尺) と復元できる。

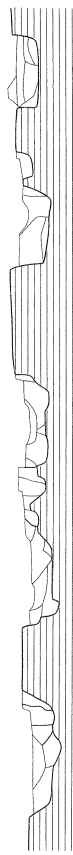
31号掘立柱建物跡 (第165図)

E 地区東側中央の J15・J16・J17・K15・K16・K17区に在り、32号掘立柱建物跡に掘り込まれ検出する。桁行 4 間×梁間 2 間の東西棟で四面に廂を有している。座標北を規準とする方位は $N-1^{\circ}-W$ を指向する。桁行の東西柱列長は 8.5m (≒28.3尺)、柱間寸法は柱痕跡が不明瞭であるが、西側から 2.1m (7 尺)・2.3m (≒7.7尺)・2m (≒6.7尺)・2.1m (7 尺) である。梁間の南北柱列長は 3.7m (≒12.3尺)、柱間寸法 1.85m (≒6.2尺) と復元できる。廂は明瞭な掘方を有せず複数のピットから成り、西側に 1.65m・東側に 1.85m・北側に 1.8m・南側に 1.75m である。廂を含めた建物規模は南北 7.25m (≒24.2尺)・東西 12.0m (≒40尺) と復元できる。



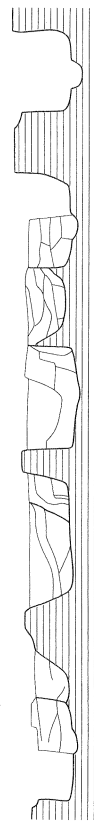
第162図 27号掘立柱建物跡掘方断面と略図

27.60m 27.60m

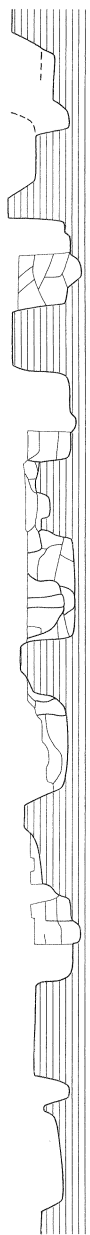


28号建物跡断面-①

27.60m

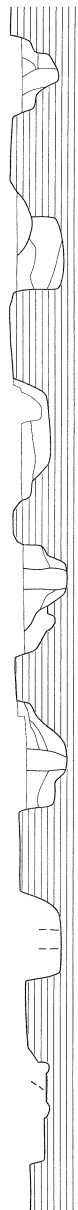


28号建物跡断面-②



28号建物跡断面-③

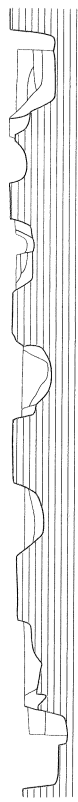
27.60m



28号建物跡断面-④

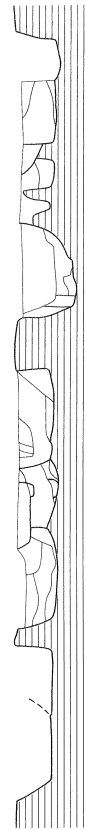
27.60m

27.60m

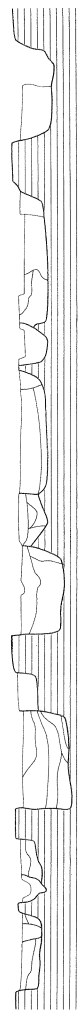


28号建物跡断面-⑤

27.60m

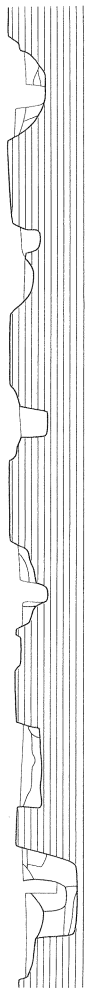


28号建物跡断面-⑥

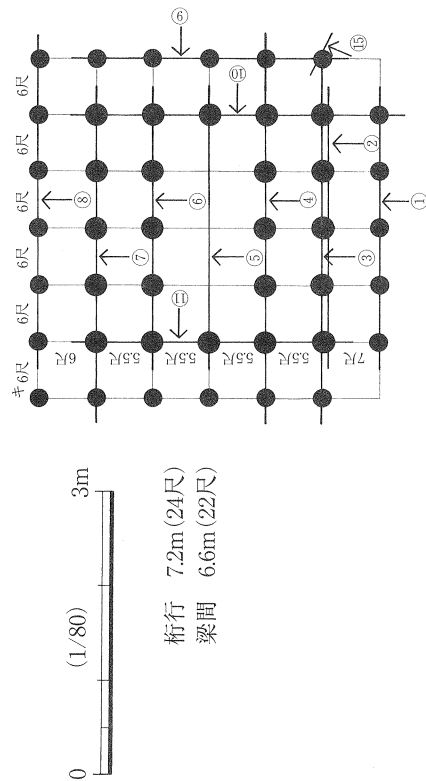


28号建物跡断面-⑦

27.60m

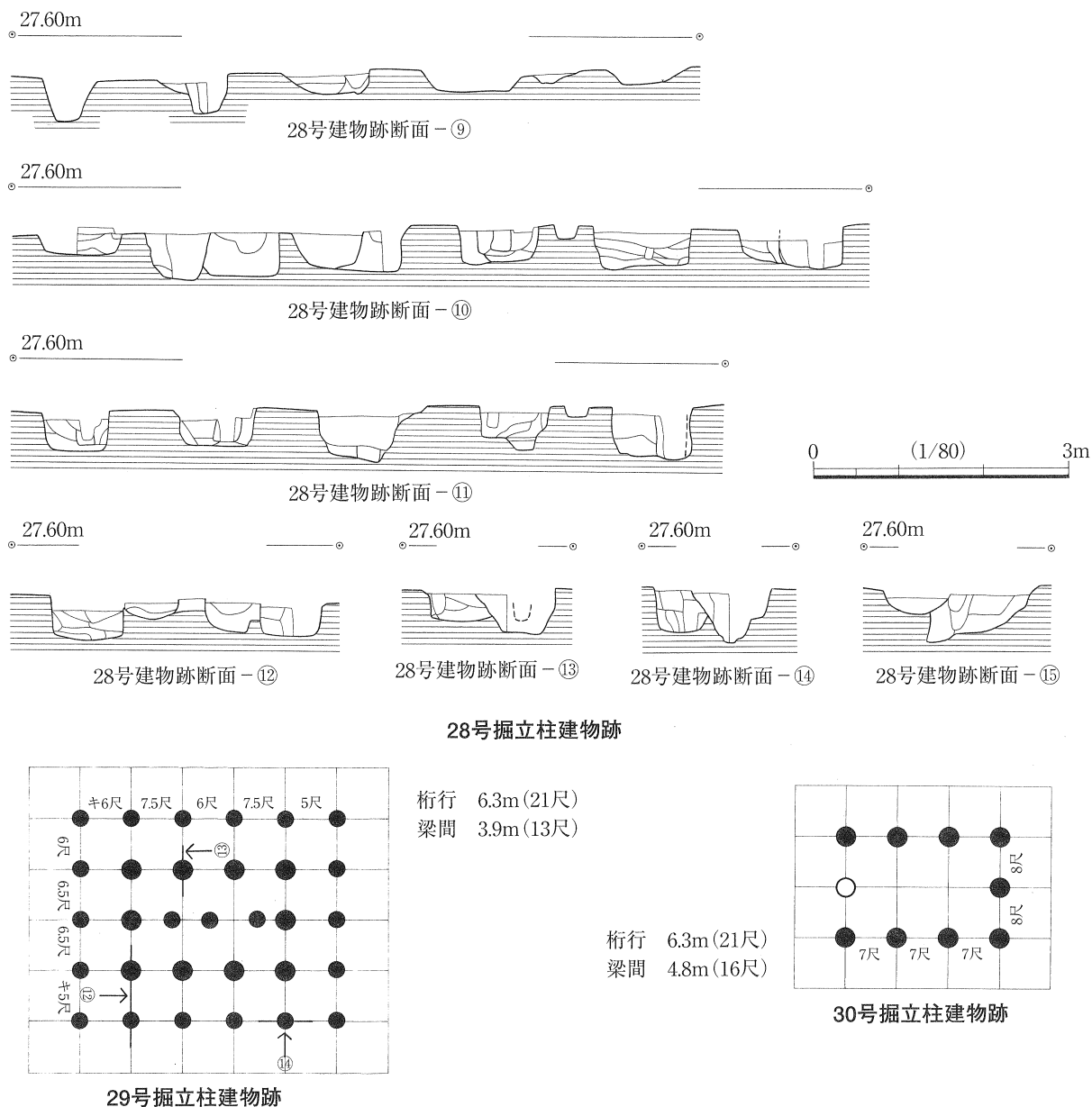


28号建物跡断面-⑧



28号掘立柱建物跡

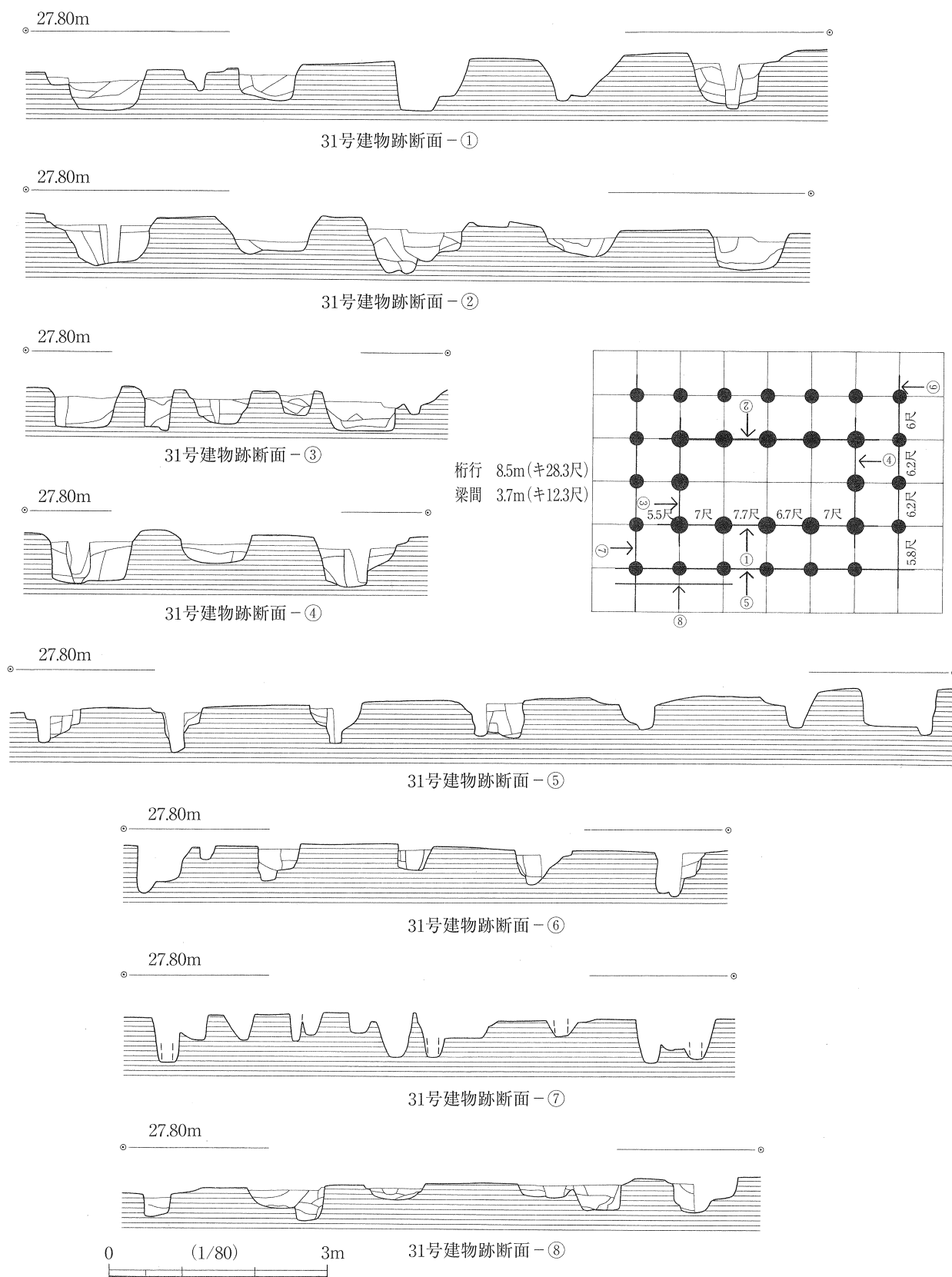
第163図 28号掘立柱建物跡掘方断面と略図



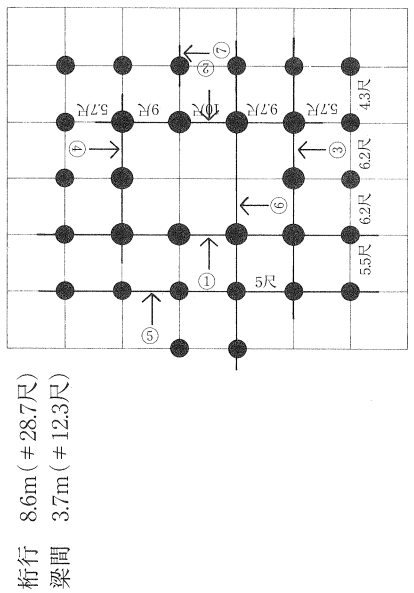
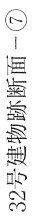
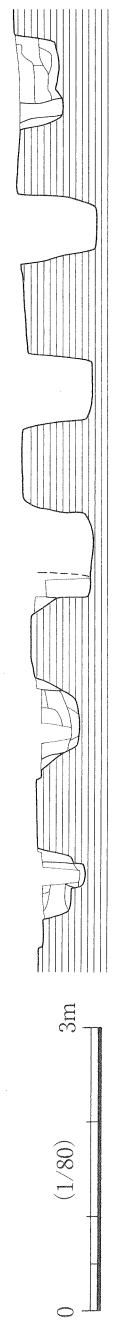
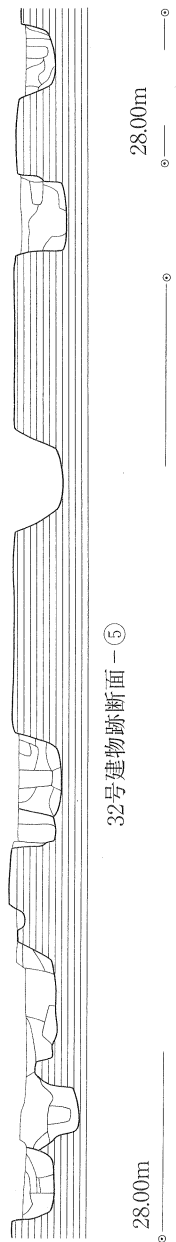
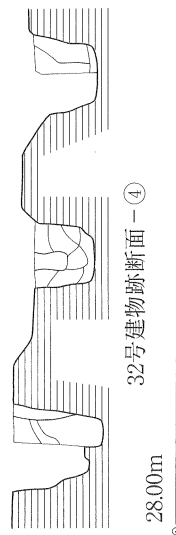
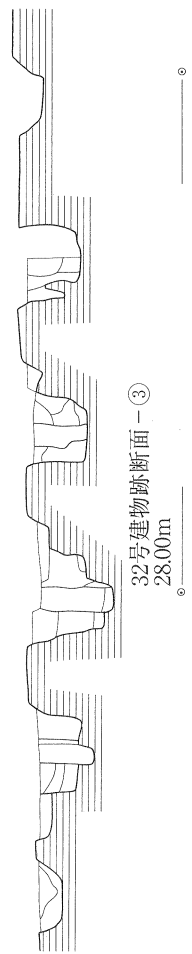
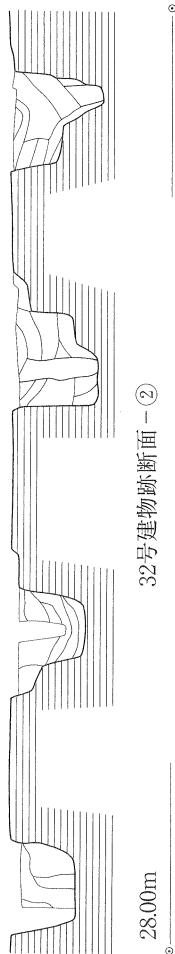
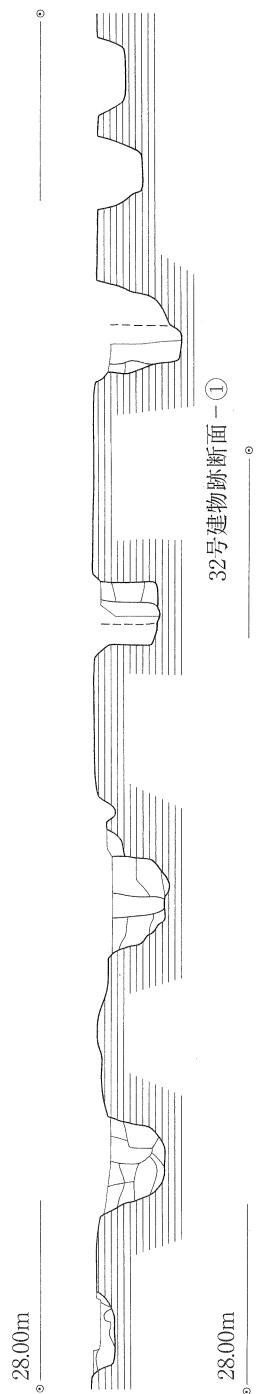
第164図 28～30号掘立柱建物跡掘方断面と略図

32号掘立柱建物跡（第166図）

E地区東側中央のJ16・J17・K16・K17・L16・L17区に在り、31号掘立柱建物跡を掘り込んで検出する。桁行3間×梁間2間の南北棟で四面に廂を有している。座標北を規準とする方位はN-4°-Eを指向する。桁行の南北柱列長は8.6m（≒28.7尺）、柱間寸法は北から2.7m（9尺）・3.0m（10尺）・2.9m（9.7尺）である。梁間の東西柱列長は3.7m（≒12.3尺）、柱間寸法1.85m（≒6.2尺）と復元できる。廂は、西側に1.65m（5.5尺）・東側に1.30m（≒4.3尺）北側に1.7m（≒5.7尺）・南側に1.7m（≒5.7尺）である。西桁行中央にはさらに1.5m（5尺）の廂を追加している。廂を含めた建物規模は南北12.0m（40尺）・東西6.65m（≒20尺）と復元できる。



第165図 31号掘立柱建物跡掘方断面と略図



第166図 32号掘立柱建物跡掘方断面と略図

33号掘立柱建物跡（第167図）

E 地区東側中央の南 L14・L15・M14・M15・N14・N15区に在り、13住居跡を掘り込んで検出する。桁行4間×梁間2間の南北棟である。座標北を規準とする方位は $N-8^{\circ}-E$ を指向する。桁行の南北柱列長は8.7m（29尺）、柱間寸法は柱痕跡が不明瞭であるが西柱列で南から2.4m（8尺）・2.1m（7尺）・2.1m（7尺）・2.1m（7尺）である。梁間の東西柱列長は3.6m（12尺）と復元できる。南梁柱の付け替えが観察される。

34号掘立柱建物跡（第167図）

E 地区中央の南 N11・N12・N13区に在り、43・44号住居跡を掘り込んで検出する。桁行3間×梁間2間の東西棟である。座標北を規準とする方位は $N-15^{\circ}-E$ を指向する。桁行の東西柱列長は6.6m（22尺）、柱間寸法は南柱列で西から2.25m（7.5尺）・1.95m（6.5尺）・2.4m（8尺）で北柱列は柱痕跡が不明瞭であるが、中央の柱間は1.95m（7.5尺）を計測する。梁間の東西柱列長は3.9m（13尺）で、柱間寸法も概ね2分の1の1.95m（6.5尺）と復元できる。南柱列南側3mにはほぼ平行する柱列が存在する。

35号掘立柱建物跡（第168図）

E 地区中央の南 L11・N12・N13区に西半分を調査区域外に置き検出する。不規則な柱掘方がやや規則性を有して並ぶものの建物構造は不明である。仮に南北の掘立柱建物跡とすると東西棟で桁行2間以上、梁間2間の廂付？建物の可能性がある。座標北を規準とする方位は $N-16^{\circ}-E$ を指向する。外側の柱列長は北側5m以上、東側で7.2m（24尺）を計測する。

36号掘立柱建物跡（第168図）

E 地区西側の南端の南 H6・H7区に南・西側を大きく調査区域外に置き検出する。南北棟建物の北柱列で東に廂を有する構造であろうか。座標北を規準とする方位は $N-2^{\circ}-W$ を指向する。北側柱列長は廂を含め5.2m以上で、柱間は西から1.8m（6尺）・1.8m（6尺）・1.6m（ $\div 5.3$ 尺）を計測する。南北柱間は2.1m（7尺）である。

37号掘立柱建物跡（第168図）

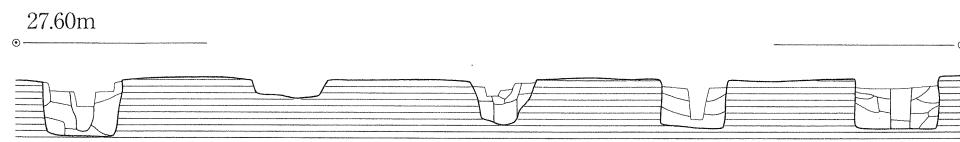
E 地区西側の南端の南 J9・K9区に西・南側を大きく調査区域外に置き検出する。南北棟建物の北と東柱列を検出する。座標北を規準とする方位は $N-1^{\circ}-E$ を指向する。北側柱列長は4.5mで、柱間は柱痕跡が不鮮明で不明である。東柱列長は6.2m以上を計測し、柱間は北から1.8m（6尺）・2.1m（7尺）・2.1m（7尺）程を計測する。

38号掘立柱建物跡（第168図）

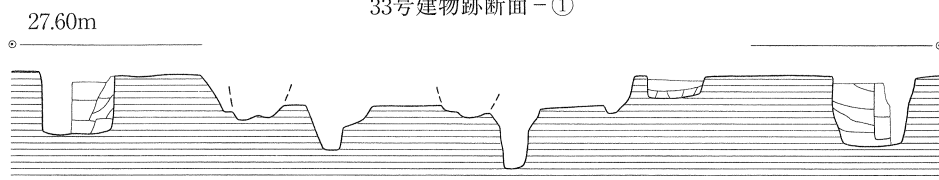
E 地区西側の南端の南に37号掘立柱建物跡に掘り込まれて J8・J9区に南側を大きく調査区域外に置き検出する。北柱列だけの検出である。座標北を規準とする方位は $N-6^{\circ}-E$ を指向する。北側柱列長は5.7m（19尺）の3間である。柱間は柱痕跡が不鮮明であるが、東側の柱間は1.8m（6尺）を計測する。

39号掘立柱建物跡（第169図）

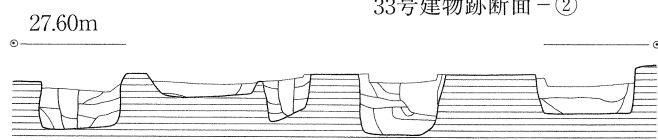
E 地区東側の中央南の M16区に不規則な柱掘方で検出する。北側には32号掘立柱建物跡、東には11号住居跡、南には12号住居跡が掘り込まれ、住居覆土中に未検出の柱掘方が存在した可能性があり、建物構造が不明な一群である。



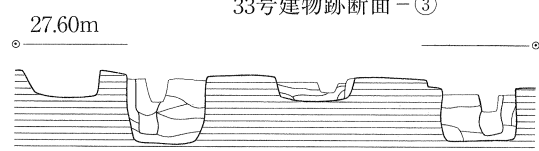
33号建物跡断面－①



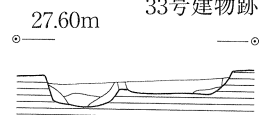
33号建物跡断面－②



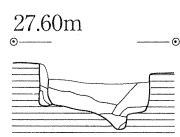
33号建物跡断面－③



33号建物跡断面－④

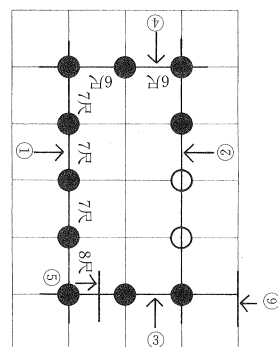


33号建物跡断面－⑤

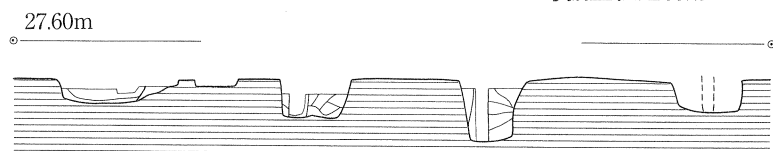


33号建物跡断面－⑥

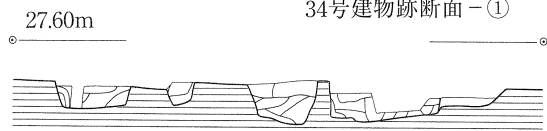
桁行 8.7m (29尺)
梁間 3.6m (12尺)



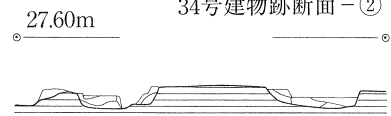
33号掘立柱建物跡



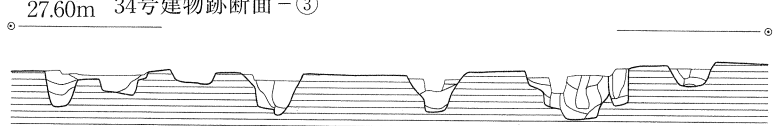
34号建物跡断面－①



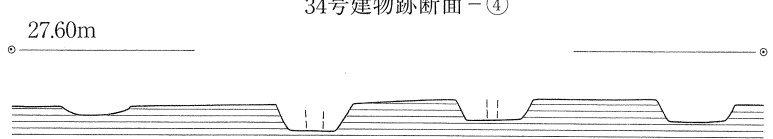
34号建物跡断面－②



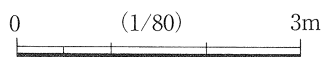
34号建物跡断面－③



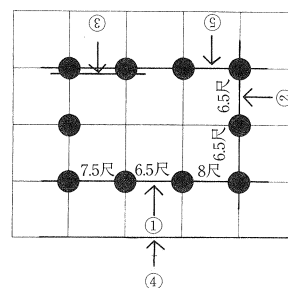
34号建物跡断面－④



34号建物跡断面－⑤

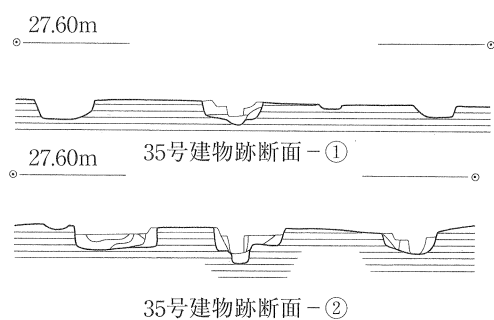


34号掘立柱建物跡

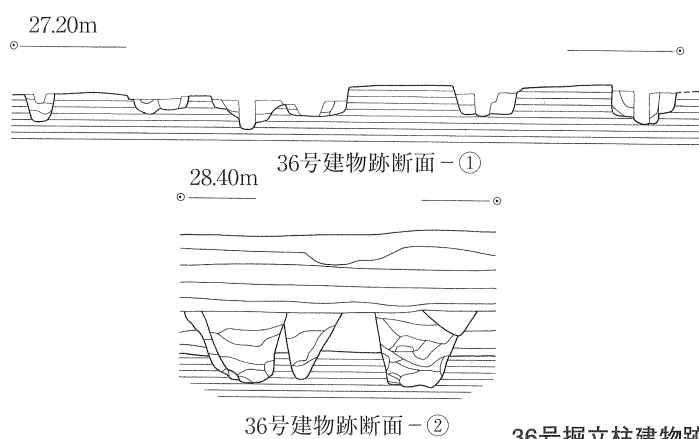
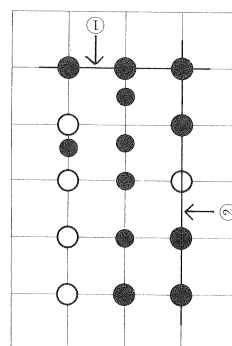


桁行 6.6m (22尺)
梁間 3.9m (13尺)

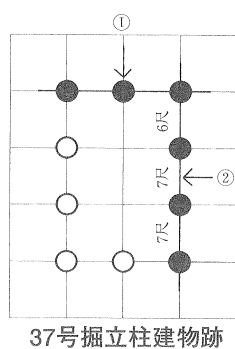
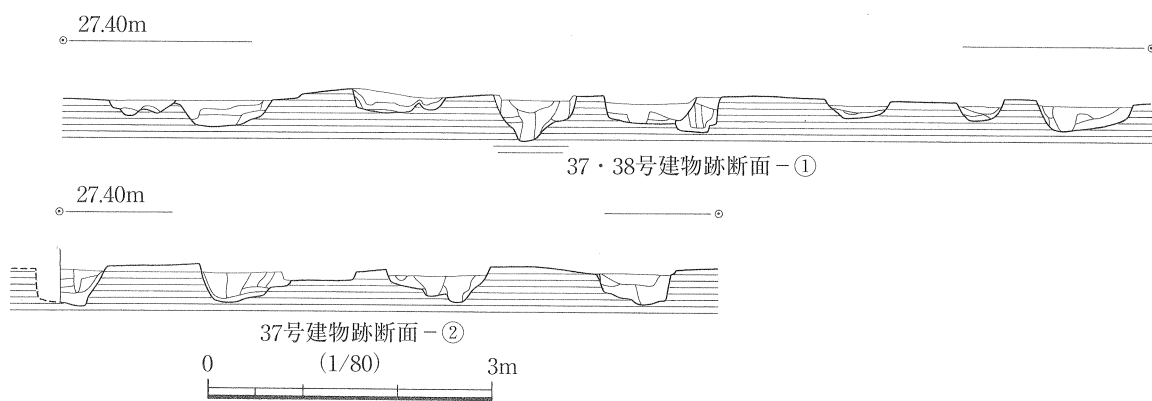
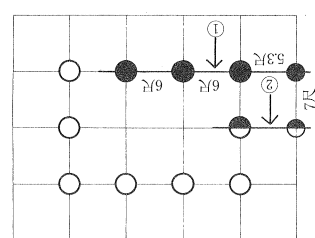
第167図 33～34号掘立柱建物跡掘方断面と略図



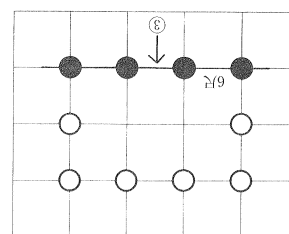
35号掘立柱建物跡



36号掘立柱建物跡



37号掘立柱建物跡



38号掘立柱建物跡

第168図 35~38号掘立柱建物跡掘方断面と略図

40号掘立柱建物跡（第169図）

E 地区東側の K18・K19・L18・L19区に23・24・25住居跡と複合して検出する。桁行3間×梁間2間の南北棟である。座標北を規準とする方位は $N-1^{\circ}-W$ を指向する。桁行の南北柱列長は5.1m（17尺）、東柱列で柱間寸法北から1.8m（6尺）・1.8m（6尺）・1.5m（5尺）、梁間東西柱列長は3.6m（12尺）、柱間寸法は不明である。住居跡との切り合い関係について資料がないが23住→24住→40号掘立柱建物跡→25住と思われる。

41号掘立柱建物跡（第169図）

E 地区西側の E6・E7・F6・F7区に検出する。桁行（3？）間×梁間2間の南北棟である。座標北を規準とする方位は $N-5^{\circ}-E$ を指向する。桁行の南北柱列長は東で4.4m（≒4.7尺）・西4.5m（15尺）である。梁間東西柱列長は南柱列3.6m（12尺）、柱間寸法は1.8m（6尺）、北で3m（10尺）で柱間は1.5m（5尺）と復元できる。均整を欠く掘立柱建物跡である。

42号掘立柱建物跡（第170図）

A 地区中央の N6-E2・N6-E3区に58号住居跡を掘り込んで検出する。桁行5間×梁間2間の東西棟である。座標北を規準とする方位は $N-4^{\circ}-W$ を指向する。桁行の東西柱列長は10.5m（35尺）、柱間寸法2.1m（7尺）である。梁間南北柱列長は5.4m（18尺）、柱間寸法は2.7m（9尺）と復元できる。柱掘方の形状や深さにムラがある。出土遺物は柱掘方から、回転糸切り無調整のロクロ土師器坏1と灰釉椀が出土している。灰釉椀は、坂野試案でⅡ期古相にあたる。

43号掘立柱建物跡（第171・172・173図）

B 地区最南端の S2-W1・S3-W1区を中心に検出する。柱掘方が集中し建物構造が明確ではないが、桁行3間×梁間2間の東西棟の廂付建物が復元できる。座標北を規準とする方位は $N-1^{\circ}-E$ を指向する。桁行の東西柱列長は6.6m（22尺）、柱間寸法は西から2.4m（8尺）・1.8m（6尺）・2.4m（8尺）である。梁間南北柱列長は4.5m（15尺）、柱間寸法は2.25m（7.5尺）と復元できる。廂は、東西南北に1.8m（6尺）張り出し、後に2.1m（7尺）廂の付け替えの可能性がある。廂を含めた建物規模は東西10.2m（34尺）・南北8.1m（27尺）と復元できる。

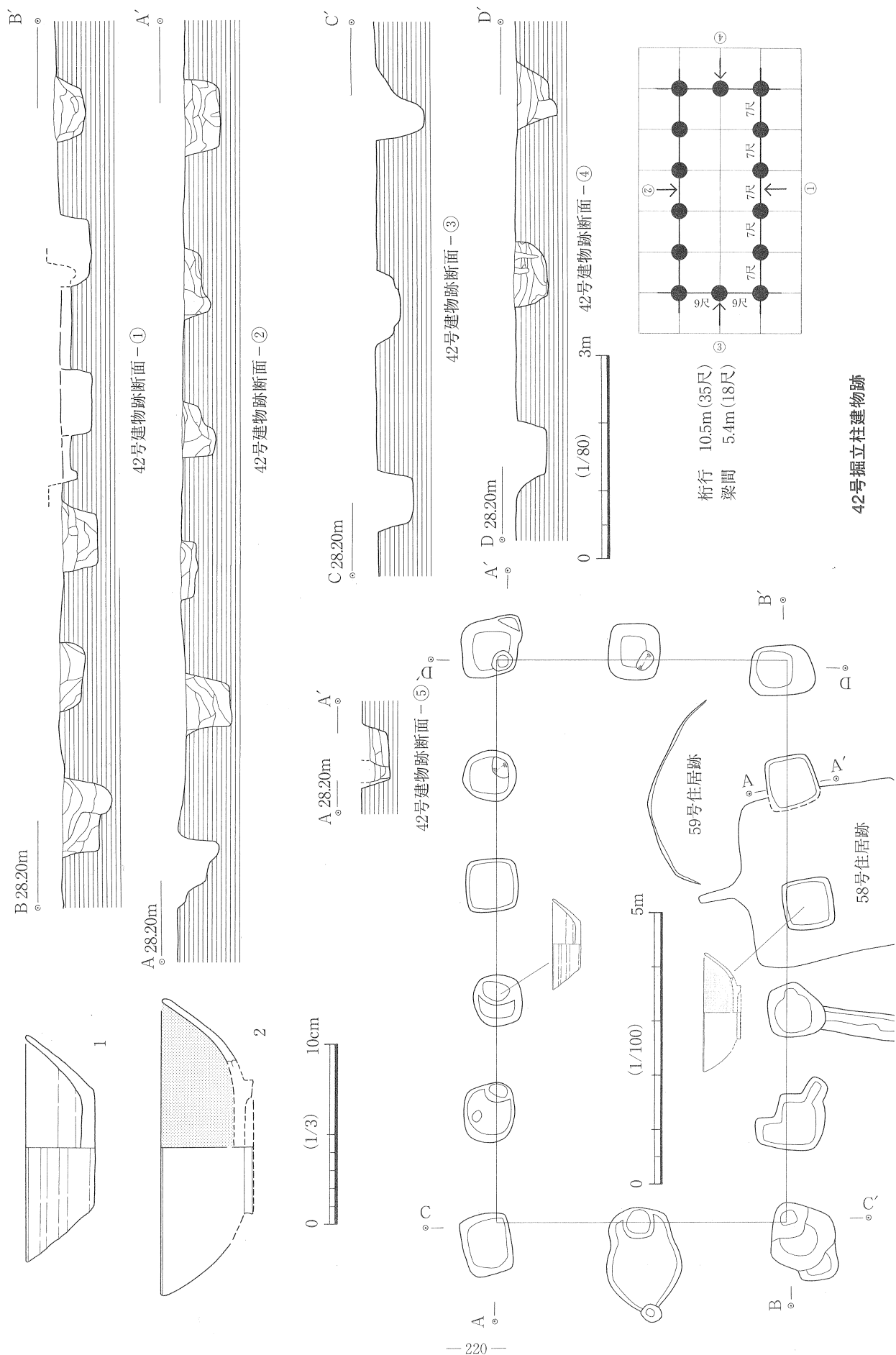
44号掘立柱建物跡（第171・172・173図）

B 地区最南端の S2-W1・S3-W1区に43号掘立柱建物跡と重複して検出する。柱掘方が重複して平面規模は不明であるが、桁行4間×梁間3間の東西棟の建物が復元できる。座標北を規準とする方位は $N-3^{\circ}-W$ を指向する。桁行の東西柱列長は8m（≒27尺）、柱間寸法は西から推定で2.1m（7尺）+1.9m（6.3尺）+1.9m（6.3尺）・2.1m（7尺）である。梁間南北柱列長は6m（20尺）、柱間寸法は北から1.8m（6尺）・2.1m（7尺）・2.1m（7尺）と復元できる。

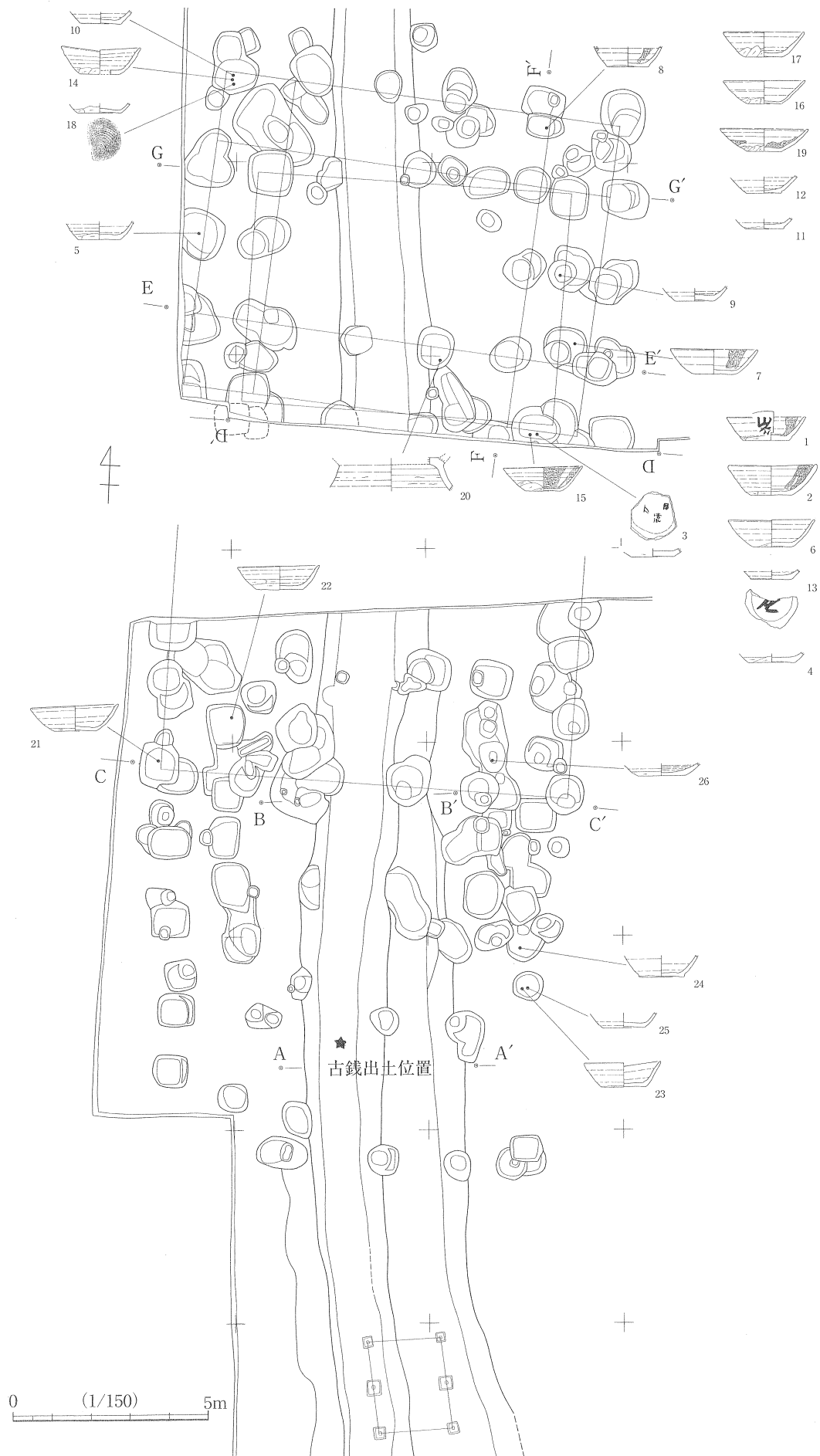
45号掘立柱建物跡（第171・172・173図）

D 地区北端の S6-W1・S6-W2区を中心に検出するが、43・44号掘立柱建物跡と同様に柱掘方が重複し建物構造に不明な点が多い。桁行5間×梁間（3）間の東西棟の建物が復元できる。座標北を規準とする方位は $N-2^{\circ}-W$ を指向する。桁行の東西柱列長は10.5m（35尺）、柱間寸法は2.1m（7尺）である。梁間南北柱列長は調査区域外に跨るため不明であるが、柱間寸法1.8m（6尺）と推定すると5.4m（18尺）と復元できる。

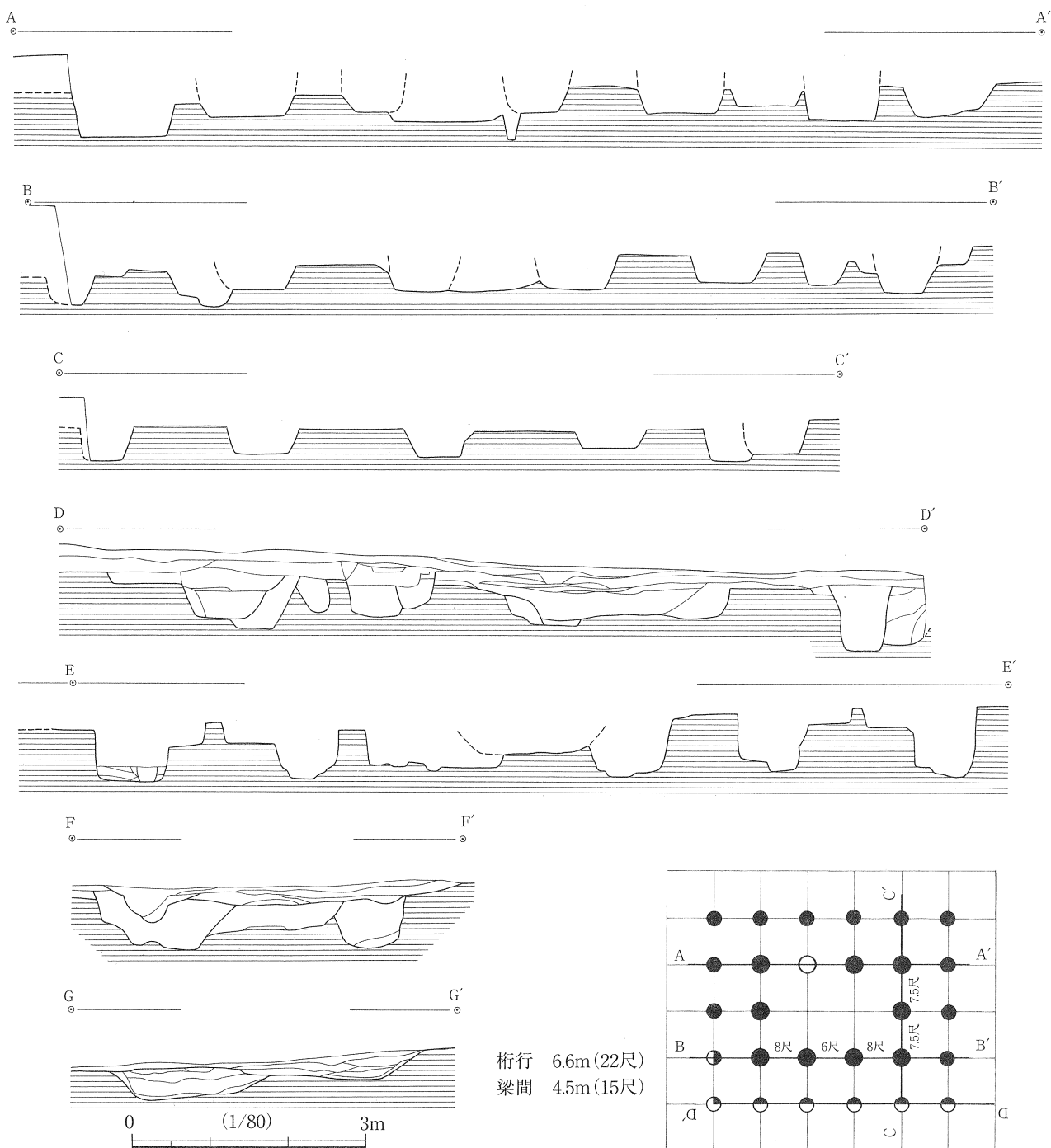
43～45号掘立柱建物跡出土遺物、1～20はB地区の43・44号掘立柱建物跡から、21～26はD地区の



第170图 42号掘立柱建物跡掘方断面と略図

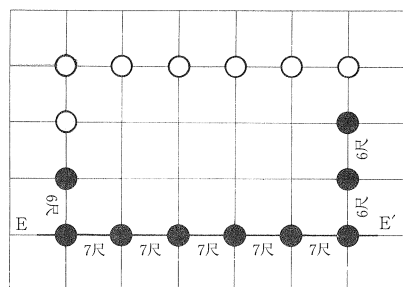


第171图 43~45号掘立柱建物跡平面图



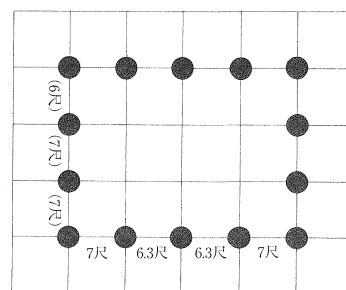
43号掘立柱建物跡

桁行 10.5m (35尺)
 梁間 5.4m (18尺)



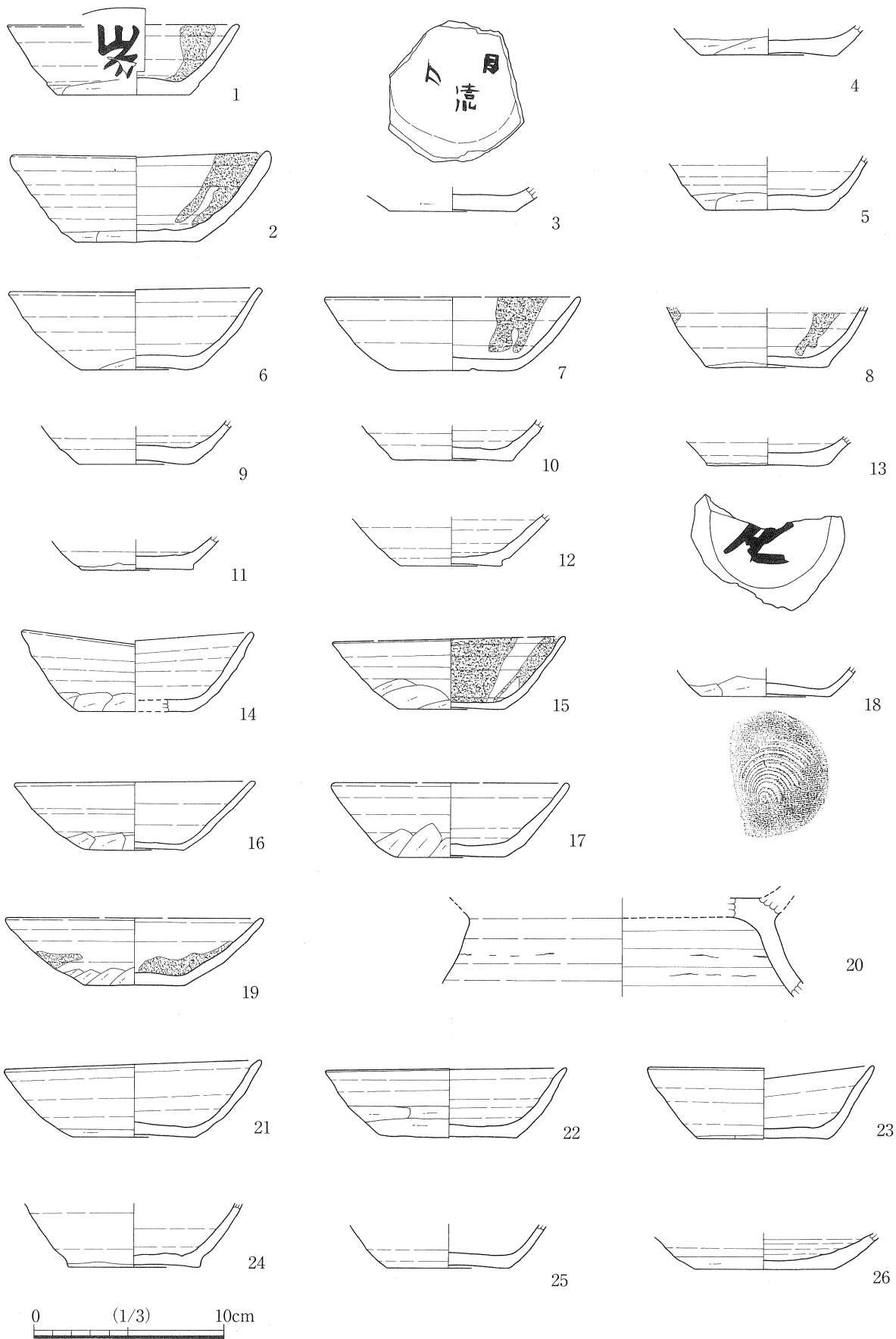
45号掘立柱建物跡

桁行 8.0m (キ27尺)
 梁間 6.0m (20尺)



44号掘立柱建物跡

第172図 43～45号掘立柱建物跡掘方断面と略図



第173図 43～45号掘立柱建物跡出土遺物

45号掘立柱建物跡から検出された遺物である。

1は、回転篋削りロクロ土師器坏で内面底部と体部の境がくの字を呈し明瞭に分かれ、体部外面には「山万」の墨書と内面にタール状のカーボンが付着し灯明坏である。2は体部下端および底部回転篋削りを施すロクロ土師器坏で、内面にタール状のカーボンが付着し灯明坏である。3は底部のみの遺存で僅かに残る体部と底部には回転篋削りを施すロクロ土師器坏で、底部内面にはやや不明瞭ながら「万」「月」「□」の墨書がある。4～6は体部下端および底部回転篋削りを施している。7～13は底部回転糸きり無調整で、7・8は内面にタール状のカーボンが付着し灯明坏である。13の底部外面には「丸」の墨書がある。14～19は、体部下端と底部手持ち篋削りを施し、底径がやや小型化の傾向にあるロクロ土師器坏である。15・19は、内面にタール状のカーボンが付着し灯明坏である。20は、土師器大型台付鉢脚部片で基部径16cmを計る。

45号掘立柱建物跡検出の遺物は、21～23が体部下端と底部回転篋削りのロクロ土師器坏。22と23では体部下端の削り幅に差が有り、22がより古相を呈している。24・25は底部回転糸切り無調整のロクロ土師器坏である。26は、体部下端および底部回転篋削りを施すロクロ土師器皿である。

43～45号掘立柱建物跡出土遺物は、1と22がロクロ土師器坏でも古相を呈し、稻荷台Ⅱ期-aの9世紀第2四半期の所産であろう。14～19は、体部下端と底部手持ち篋削りを施し、稻荷台Ⅳ期-bの10世紀第2四半期の所産であろう。従って、43・44号掘立柱建物跡復元範囲からは、9世紀第2四半期から10世紀第2四半期までの遺物が柱掘方内やプラン内から散見される。他にも、建物跡が1棟復元される可能性がある。45号建物跡範囲でも同様の事が言える。当範囲での建物時期は、稻荷台Ⅱ期～Ⅳ期までの9世紀第2四半期～10世紀第2四半期までの100年間に3棟以上の建物が建て替えられている。この建物は、南北に近接して建てられ、神社建築の拝殿と本殿のような状況が窺われるものである。出土遺物中に、E地区で多量に検出された施釉陶器が検出されないことから、E地区の建物跡とは異なった性質の建物跡群となる。その場合、ロクロ土師器坏の灯明坏が6点出土し、また20m北の28号土坑の南に接したピットから、15のロクロ土師器坏と同様の灯明坏が検出され、この建物跡群では、灯明坏を使用した何らかの祭祀行為が行なわれていたものと推定される。

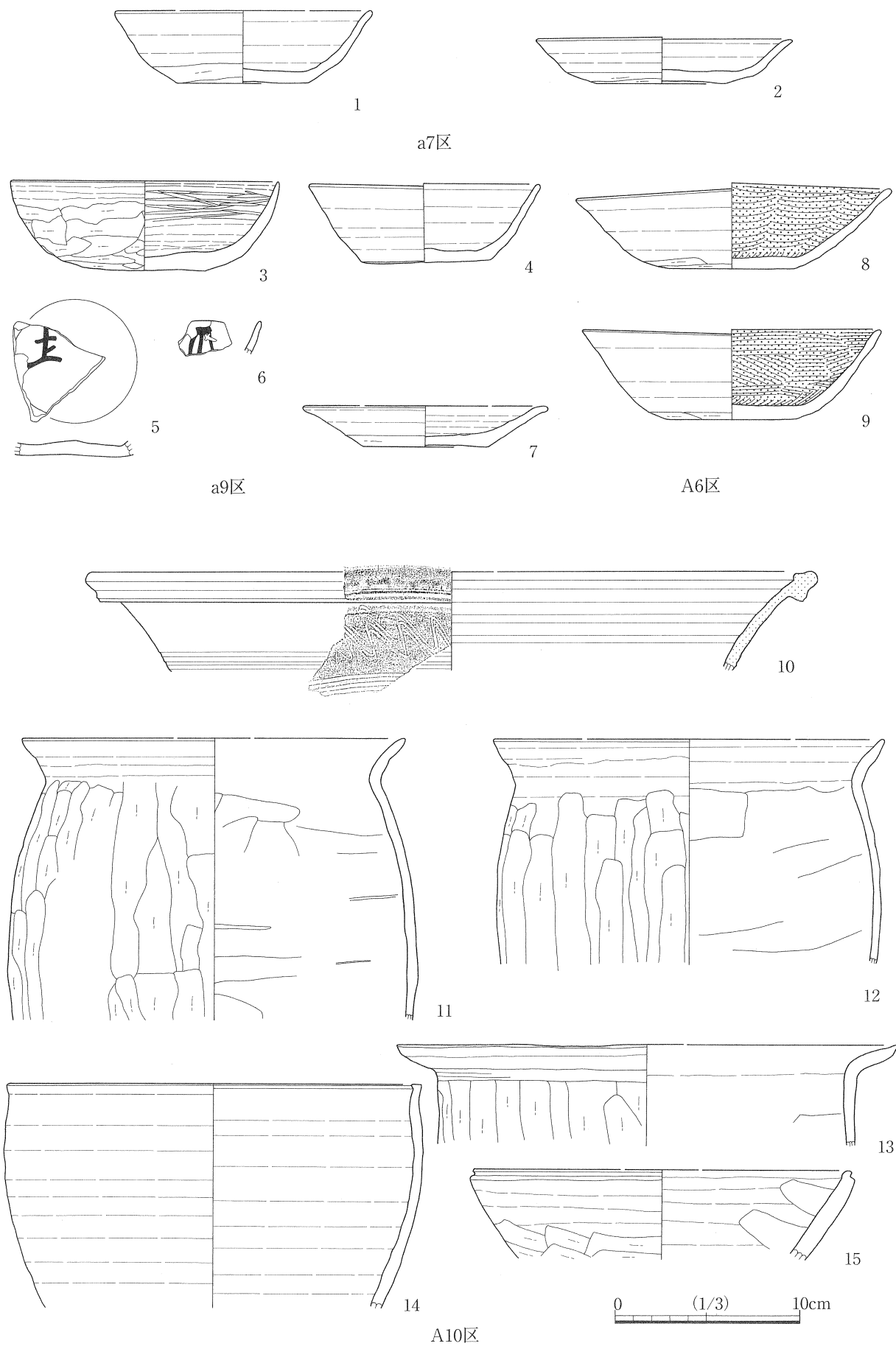
E地区グリッド出土遺物

本稿では、E地区のグリッドの出土遺物を取り上げ、掘立柱建物跡の時期の参考資料とする。施釉陶器については後述する。遺物番号は通しとする。

[a7区出土遺物1・2] a7区は、A地区西側北辺部の2・3号掘立柱建物跡が複合する範囲に当たる。1は体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器坏、2は体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器皿である。何れも稻荷台Ⅱ期-aの9世紀第2四半期の遺物である。

[a9区出土遺物3～6] a9区は、E地区西側北辺部5号掘立柱建物跡の北柱筋の範囲に当たる。3は非ロクロ土師器坏で丸底気味を呈し、A期でも古相の8世紀第2～3四半期の所産であろう。4は回転糸きり無調整のロクロ土師器坏でⅢ期の所産であろう。5は底部内面に「主」墨書があり、底部回転糸きりを残した回転篋削りを施すロクロ土師器坏で、稻荷台Ⅱ期からⅢ期の所産であろう。6はロクロ土師器皿でⅡ期-aに比定可能である。

[A6区出土遺物7～9] A6区は、9号掘立柱建物跡を中心とした範囲にあたる。7はロクロ土



第174図 E地区グリッド出土遺物(1)

師器坏口縁小片で不明墨書土器。8・9は大型の内黒ロクロ土師器坏でⅢ期に比定可能である。

[A10・A11区出土遺物10～29] A10・A11区は、33住・34住上層と6号建物の南柱筋に当たる範囲である。14はロクロ整形によるが土師か須恵器か判断しかねる製品で、口唇はシャープで内側の端部が僅かに内面に折れている。16は千葉市域産の須恵器坏である。26はロクロ土師器高台付皿で体部外面に「八万」の墨書がある。25は体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器皿で、底部外面に「主」の墨書がある。27・28は回転糸きり無調整のロクロ土師器坏である。29は内黒ロクロ土師器高台付椀でⅣ期の所産であろう。A10区の出土遺物は、大半がⅡ期-aの9世紀第2四半期の所産で、下層の33住の所属時期を示す資料と酷似している。

[B9区出土遺物30～34] B9区は、11号掘立柱建物跡西半分と12号掘立柱建物跡の北柱筋に当たる範囲である。30～33は体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器坏で、Ⅱ期-bを中心とした様相を呈している。34は内黒ロクロ土師器高台付坏である。

[B10区出土遺物35～38] B10区は、11号掘立柱建物跡東半分と35住上層に当たる範囲である。35と36は何れも体部下端および底部回転篋削りを施すロクロ土師器坏と皿で、Ⅱ期-bを中心とした様相を呈している。37・38はロクロ土師器高台付椀で下層の35住の所属時期のⅣ期-bの所産であろう。39は須恵器小型壺の底部小片である。

[B11区出土遺物40～50] B11区は、13・14号掘立柱建物跡北柱筋と34住上層に当たる範囲である。40は須恵器大甕の口縁破片である。41は体部下端および底部回転篋削りを施すロクロ土師器坏。42～44は手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏と皿である。45・46はロクロ土師器高台付椀でⅣ期の所産である。48は手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏の底部だけで、底部外面に「国カ」の墨書がありⅣ期の所産であろうか。49はロクロ土師器脚高高台気味でⅣ期の所産であろうか。50は土師器大型高台付鉢基部片である。

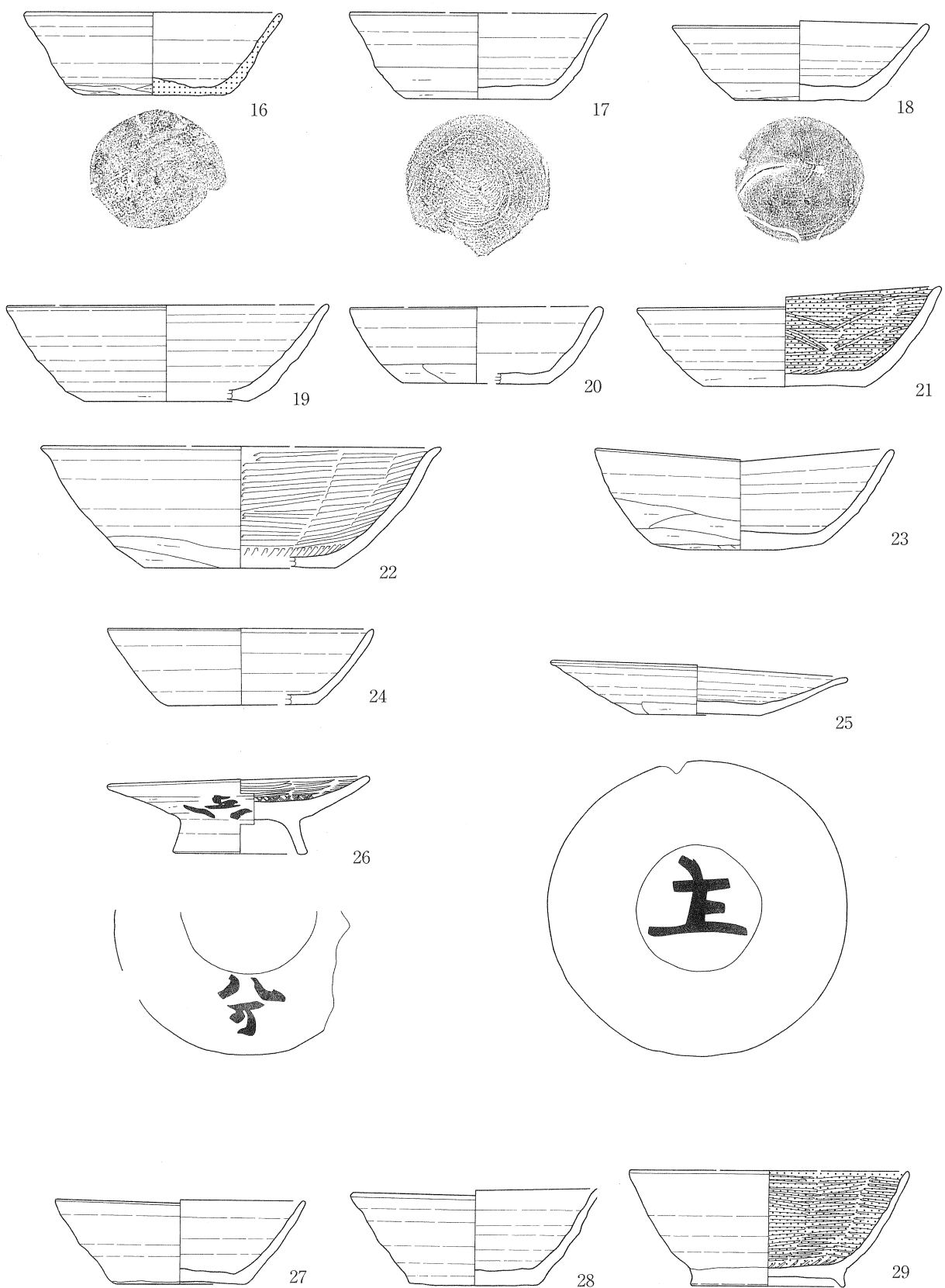
[C3区出土遺物51・52] C3区にはこれと言った遺構がなく小ピットを検出する範囲である。何れも回転糸きり無調整のロクロ土師器坏である。

[C5区出土遺物53・54] C5区は、7号掘立柱建物跡北側の範囲である。53・54は7号掘立柱建物跡北西隅の柱掘方内から出土する。53は須恵器高台付坏の破片でA期の8世紀代の様相を呈する。54は体部下端および底部回転篋削りを施すロクロ土師器坏で、Ⅱ期-aの9世紀第2四半期の様相を呈している。柱掘方内から出土した時期の分かる数少ない資料である。

[C10区出土遺物55～57] C10区は、13・14号掘立柱建物跡西柱筋と36住上層に当たる範囲である。55は底部回転糸切りで市原産の石川窯跡産須恵器坏。56は底部のみ回転篋削りのロクロ土師器坏。57は回転糸きり無調整のロクロ土師器坏である。

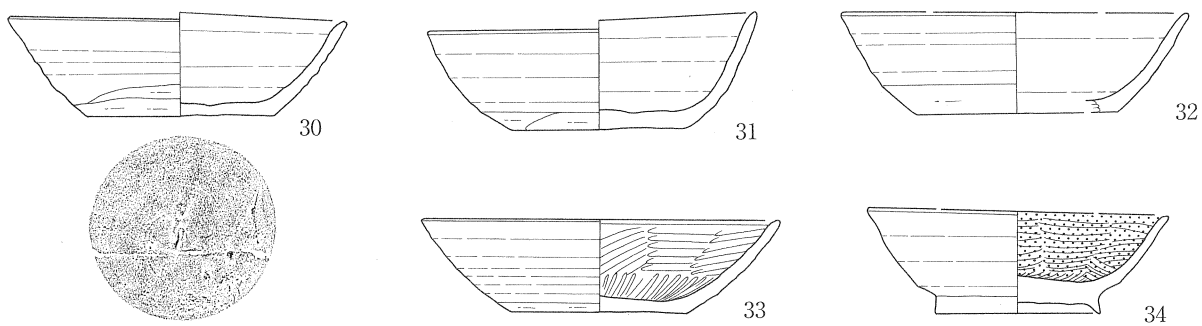
[C11区出土遺物58～61] C11区は、13・14号掘立柱建物跡プラン内に当たる範囲である。58・59は底部回転篋削りを施すロクロ土師器坏、59底部外面「□」不明墨書がある。60はやや大型の手持ち篋削りのロクロ土師器坏である。61はやや焼成の甘い須恵器高台付坏の破片で薄く「國厨」の墨書が読み取れる。

[D2区出土遺物62・63] D2区は、2号住居跡上層に当たる範囲である。62は須恵器コップ。63は千葉市域産の須恵器甑底部片で外面に焼成前の不明線刻がある。何れも下層の2号住居跡に帰属する遺物と判断してよい。

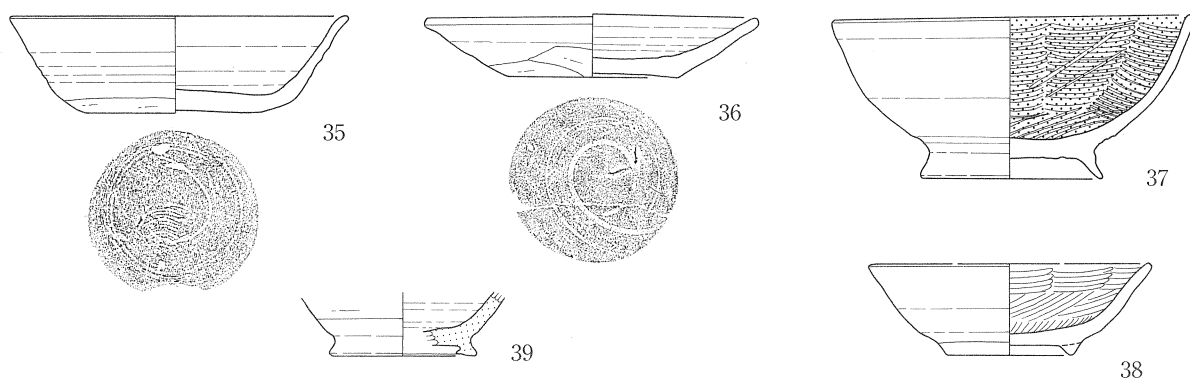


0 (1/3) 10cm

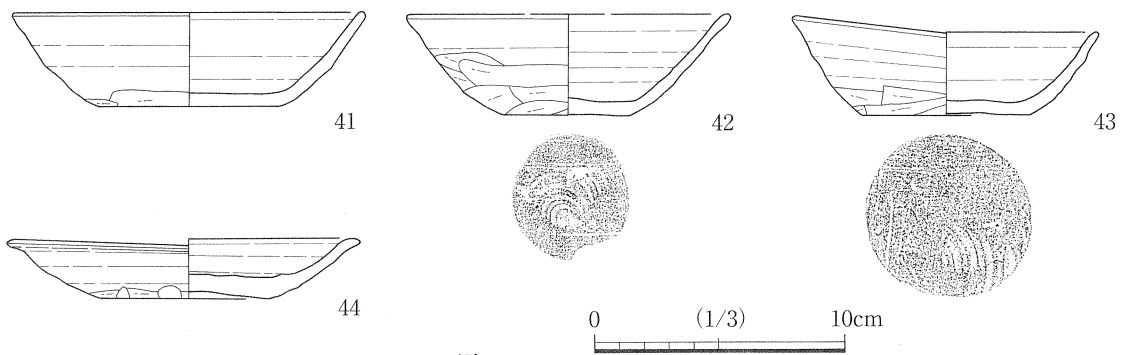
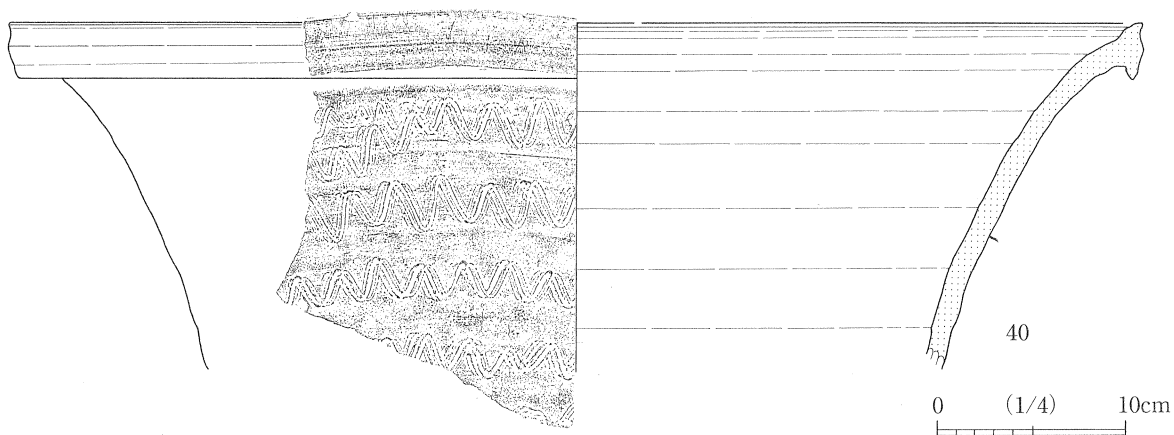
第175図 E地区グリッド出土遺物(2)



B9区

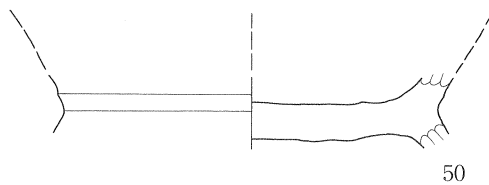
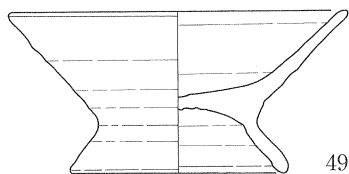
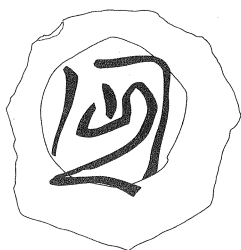
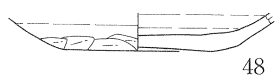
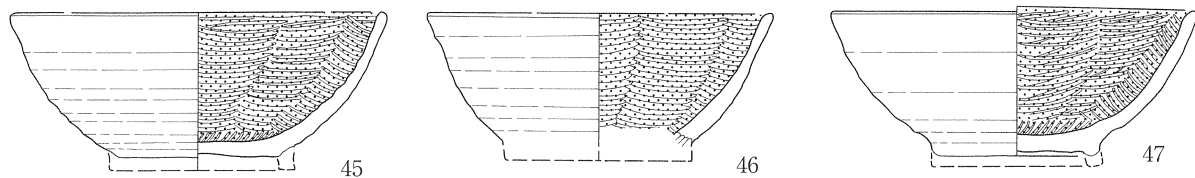


B10区

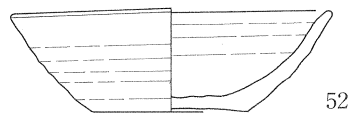
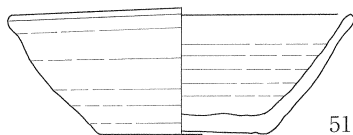


B11区

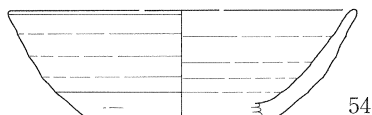
第176図 E地区グリッド出土遺物(3)



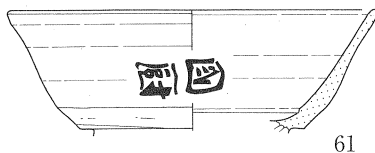
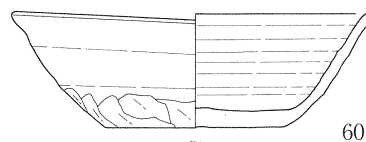
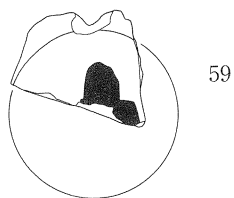
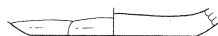
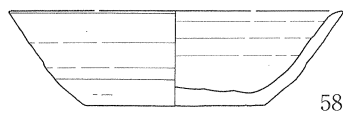
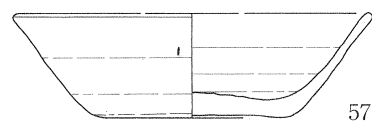
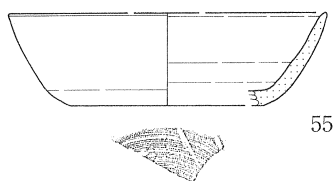
B11区



C3区



C5区



0 (1/3) 10cm

第177図 E地区グリッド出土遺物(4)

[D7区出土遺物64・65] D7区は、31住上層に当たる範囲である。64は底部回転糸切りロクロ土師器皿。65はロクロ土師器坏底部と思われ、底部外面に不明墨書がある。

[D8区出土遺物66～73] D8区は、29住上層に当たる範囲である。66は千葉市域産の須恵器甕底部片で外面に焼成後線刻「×」がある。67は底部回転糸切りで市原産の石川窯跡産須恵器坏。68は片口の付くロクロ土師器鉢？の口縁部小片である。69・70は底部回転糸切りロクロ土師器坏。71はやや大ぶりの手持ち篋削りのロクロ土師器坏である。72はロクロ土師器高台付皿で口縁部がシャープに灰釉を意識した強いロクロナデを施している。73は内黒ロクロ土師器高台付坏である。

[D10区出土遺物74・77] D10区は、僅かに13号掘立柱建物跡南西柱掘方が含まれる範囲である。76はロクロ土師器坏口縁小片で不明墨書がある。77は底部回転糸切りロクロ土師器坏で底外面に「土」墨書がある。

[D11区出土遺物78] D11区は、13・14号掘立柱建物跡南柱筋と15号掘立柱建物跡北柱筋を含む範囲である。78は手持ち篋削りのロクロ土師器坏で底部外面に「八万」の墨書がある。

[E2・E3区出土遺物79～81] E2・E3区は、2住～4住の上層に当たる範囲である。79・80は須恵器長頸壺の小片でA期の所産で、下層の堅穴住居と同時期を示している。81はロクロ土師器坏口縁小片で体部外面に「土」墨書がある。

[E6区出土遺物82～85] 18・19・41号掘立柱建物跡を含む範囲である。82は須恵器長頸壺の胴部片で8世紀末葉の所産と思われる。83は底部のみ静止篋削り、84は底部糸切りロクロ土師器坏。85はロクロ土師器坏口縁小片で体部外面に「土」墨書がある。

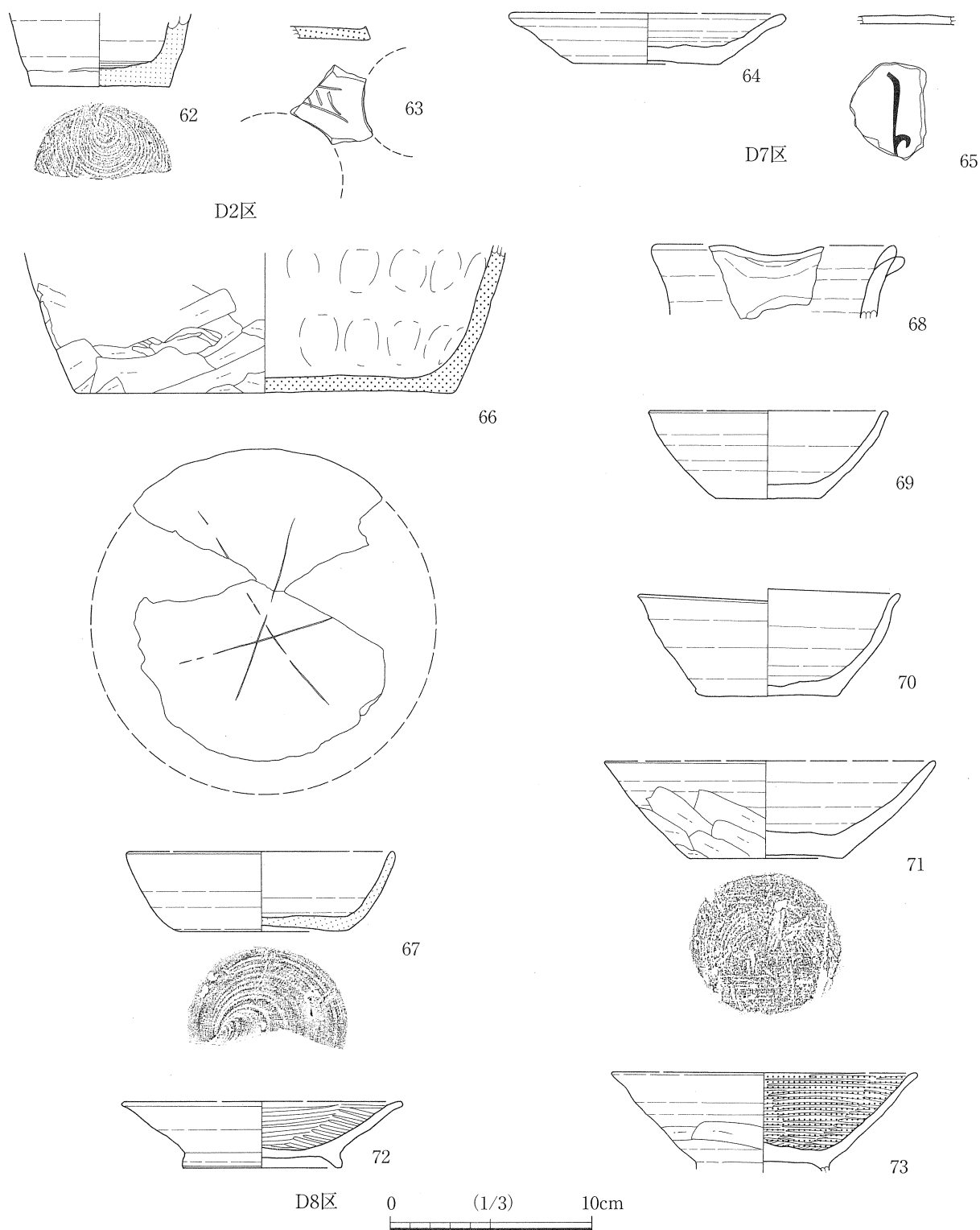
[E7区出土遺物86～89] 41号掘立柱建物跡と27・31住の一部を含む範囲である。86は在地系の非ロクロ土師器坏。87は底部回転糸切りで市原産の石川窯跡産須恵器坏。88は体部下端および底部回転篋削りを施すロクロ土師器坏、89は回転糸切りを残す手持ち篋削りのロクロ土師器坏である。

[E8・E9・E10区出土遺物90～94] E8・E9区は、27・29・30住の上層に当たる範囲である。90・91は手持ち篋削りのロクロ土師器坏である。92は回転篋削りのロクロ土師器坏底部で外面に「古カ」墨書がある。93は手持ち篋削りのロクロ土師器坏で外面に「八万」の墨書がある。94はロクロ土師器高台付皿である。

[F10区出土遺物95～97] F10区には、これと言った遺構がなく小ピットを検出する範囲である。95は須恵器長頸壺の口縁破片である。96は体部下端および底部回転篋削りを施すロクロ土師器坏で底部外面に焼成後線刻による「井カ」がある。97は土師器大型台付鉢の小片で、体部内面に焼成前後線刻による「井カ」がある。

[F11区出土遺物98～99] F11区には、16号掘立柱建物跡の西柱筋に当たる範囲である。98は非ロクロ土師器坏で底部はナデ状の篋削りを施し、底部外面には「道士」と読み取れる墨書があり、所属時期は8世紀後半代と考えられる。99は最小化したロクロ土師器坏で10世紀後半以降の所産である。

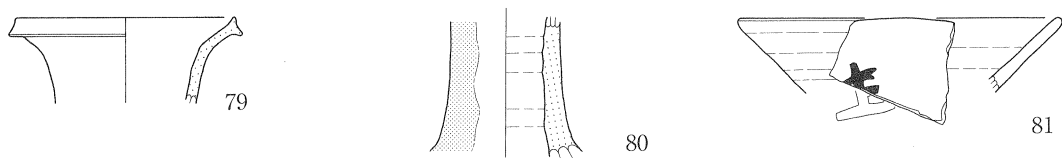
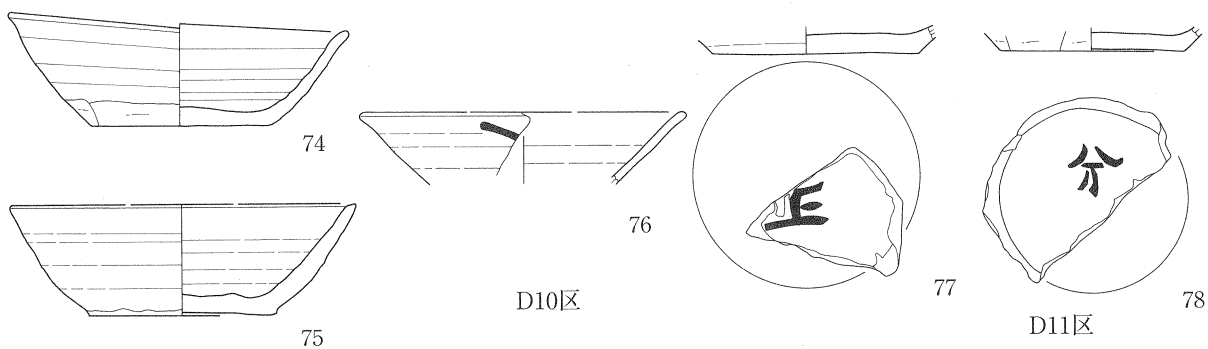
[G6～G11区出土遺物100～104] G6～G11区は、東西棟の22～24号掘立柱建物跡が建ち並ぶ範囲である。100は21号掘立柱建物跡南隅の柱掘方内から出土し、低い高台付坏の底部外面には、不明墨書「□□」2字があり、低い角型高台の模倣であるとするなら9世紀中葉に比定できようか。101は最小化したロクロ土師器坏で10世紀後半以降の所産である。102は須恵器長頸壺。103は体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器坏で底部が縮小していることから、9世紀第4～10世紀初頭の所産



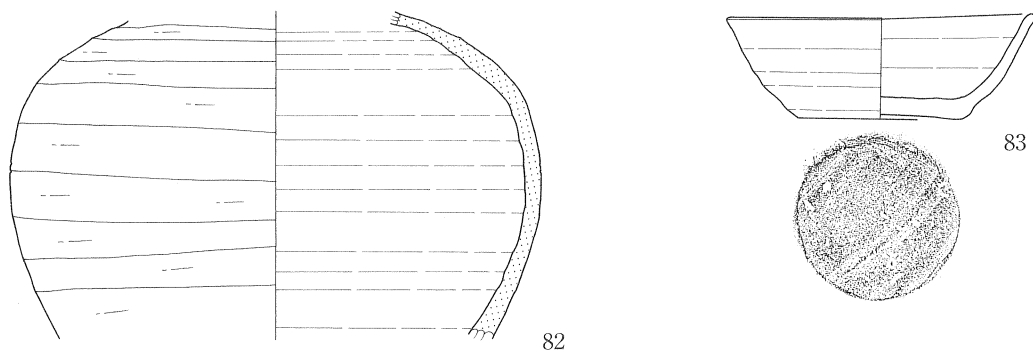
第178図 E地区グリッド出土遺物(5)

と思われる。104は縮小化傾向にある回転糸切りロクロ土師器坏で10世紀中葉の所産と看取される。

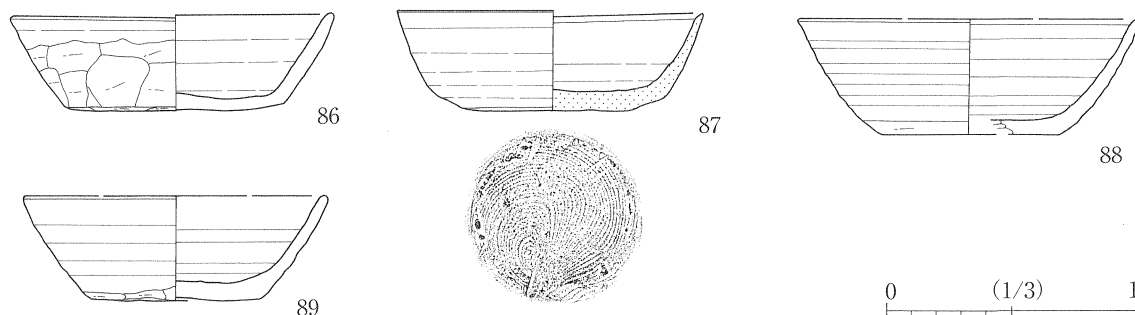
[H 6 区出土遺物105～111] H 6 区は、21号掘立柱建物跡南柱筋と36号掘立柱建物跡に当たる範囲である。105・106はロクロ土師器甕片である。107は体部下端および底部回転篋削りを施すロクロ土師器坏で、体部が大きく開き気味で9世紀第4四半期を中心とした時期と看取される。108はロクロ土師器坏口縁小片で外面に「ニカ」墨書がある。109はロクロ土師器坏底部片で外面に「主カ」墨書



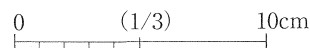
E2・E3区



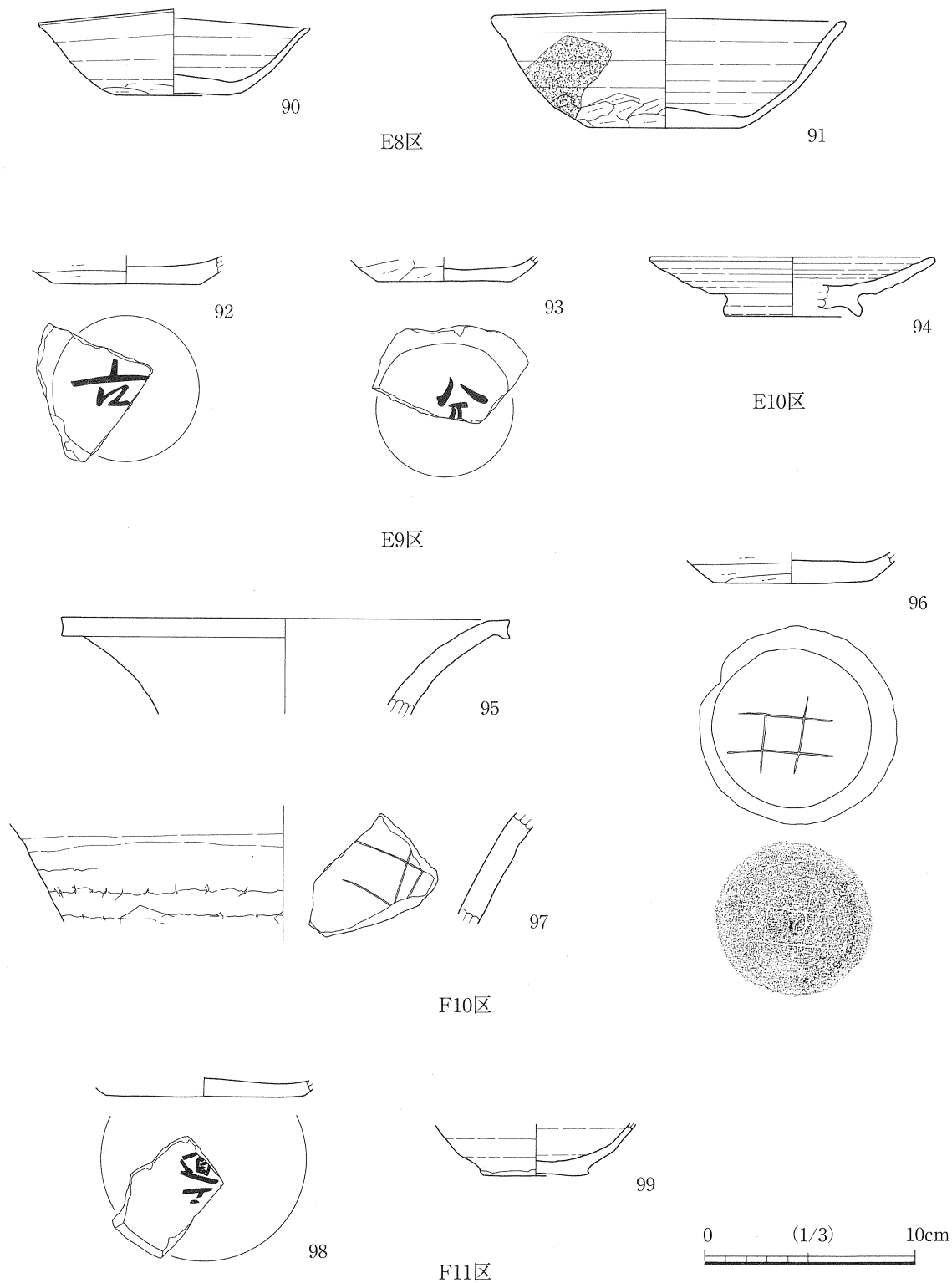
E6区



E7区



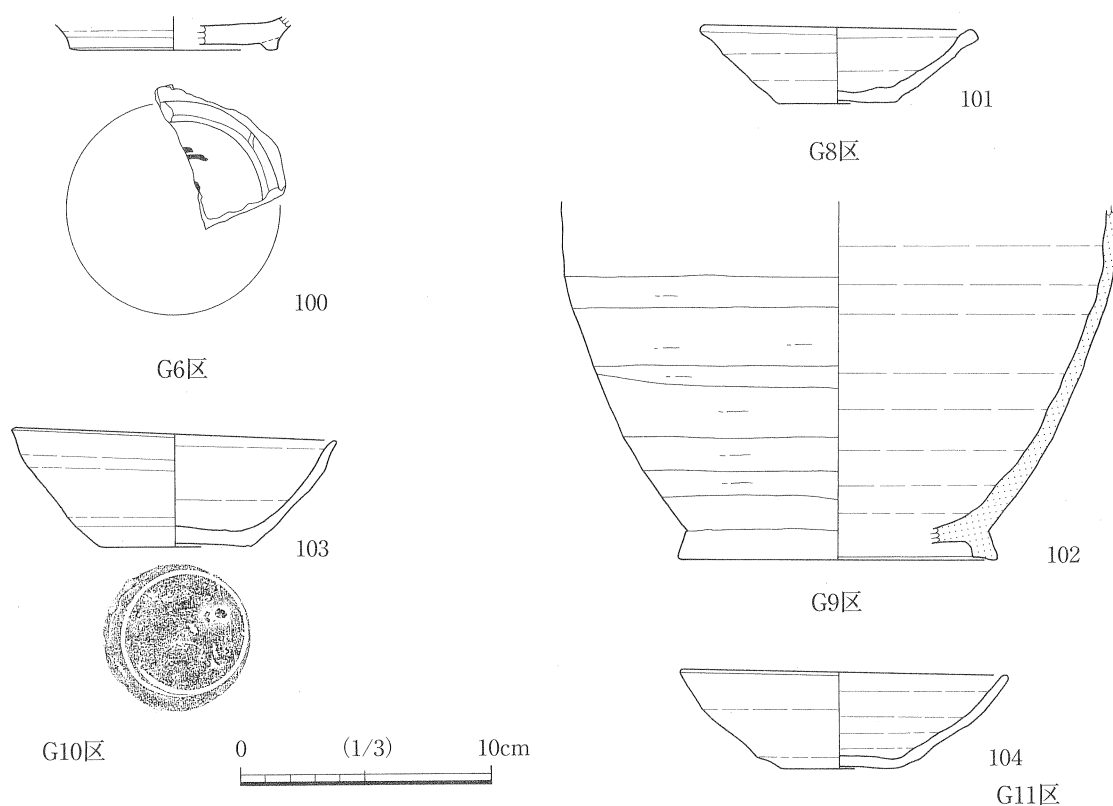
第179図 E地区グリッド出土遺物(6)



第180図 E地区グリッド出土遺物(7)

がある。110はやや大ぶりの体部下端に回転篋削りを施したロクロ土師器坏で、体部外面に「示」の墨書がある。111は大型高台付鉢の口縁部破片である。

[H7区出土遺物112～118] H7区も21号掘立柱建物跡南柱筋と36号掘立柱建物跡に当たる範囲である。112・113は糸切りロクロ土師器坏。114と116は21号掘立柱建物跡南東隅柱掘方内から出土している。114は内黒ロクロ土師器坏で外面ミガキ状のナデを施す。115は糸切りロクロ土師器皿。116は手持ち篋削りで、内面に「坏」の墨書がある。117は底部のみ篋削りのロクロ土師器坏小片で、体部



第181図 E地区グリッド出土遺物(8)

外面に不鮮明ながら「主カ」墨書が読み取れる。114と116は下っても9世紀第四半期を中心とした時期と考えられるが、建物向きから想定した21号掘立柱建物跡の時期Ⅱ期－bの9世紀第3四半期よりやや下ったものとなる。

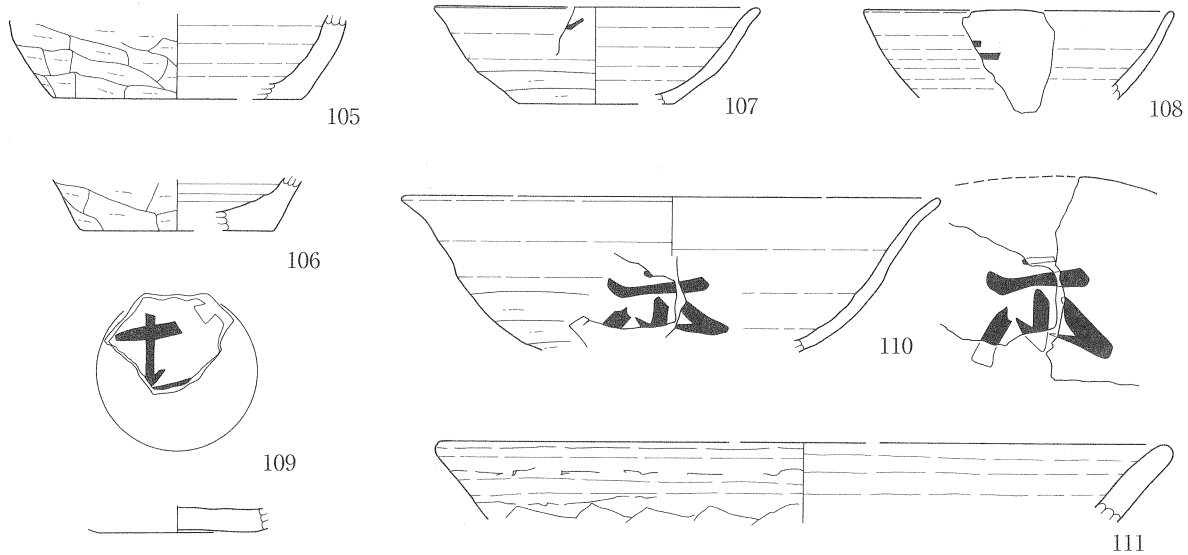
[H8・H9区出土遺物119・120] H8・H9区は、22・23・24号掘立柱建物跡南柱筋と6号溝に当たる範囲である。119はロクロ土師器坏体部小片で外面に「大カ」の墨書がある。120は大型高台付鉢の基部径13cmを計る。

[H11区出土遺物121] H11区は、25・27号掘立柱建物跡の北側に当たる範囲である。121は体部下端および底部手持ち篋削りのロクロ土師器坏である。Ⅱ期－bの所産であろうか。

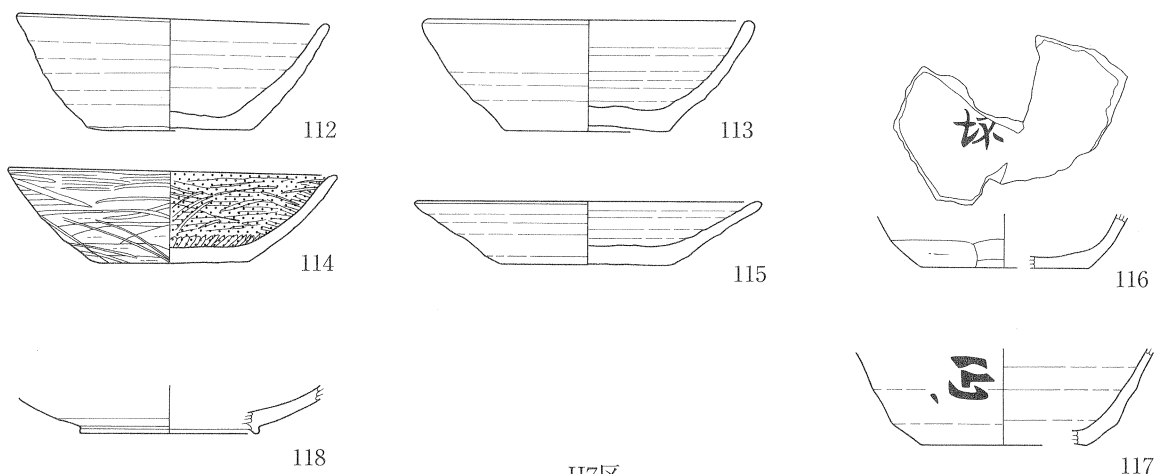
[H12区出土遺物123] H12区は、24・25・27号掘立柱建物跡が複雑に切り合う範囲で、Ⅳ期の10世紀前半代とした28号掘立柱建物跡廂の北西隅の柱掘方から出土している。122はロクロ土師器坏体部小片で外面に「丸」の墨書がある。

[H16区出土遺物123] H16区は、15住の北側の遺構空白地に当たる範囲である。123は体部下端および底部手持ち篋削りのロクロ土師器坏である。

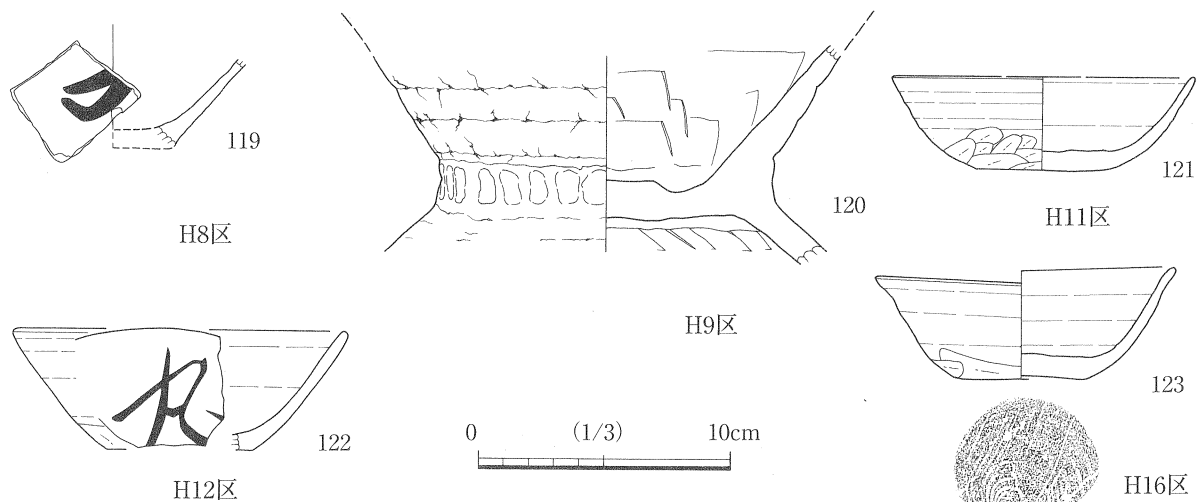
[I8・I9区出土遺物124～134] I8・I9区は、37住北半分と6号溝を含む範囲である。124～126は糸切りロクロ土師器坏で、126の底部外面には不明墨書がある。127は須恵器長頸壺口縁部である。128・129は回転糸切りロクロ土師器坏で6号溝内から検出されている。体部立ち上がりやや急であることなどを考慮するならば、37号住覆土中の土器群と同時期とも言え、L字状の6号溝は37住覆土の焼土を伴う祭祀に関連する区画溝であるともいえる。130は体部下端および底部手持ち篋削りのロ



H6区



H7区



H8区

H9区

H11区

H12区

H16区

0 (1/3) 10cm

第182図 E地区グリッド出土遺物(9)

クロ土師器坏である。131～134は高台付坏である。

[I10区出土遺物135] I10区は、27号掘立柱建物跡西柱筋に当たる範囲である。135は内黒で体部下端および底部手持ち篋削りのロクロ土師器坏である。

[I12区出土遺物136～141] I12区は、27・28・29号掘立柱建物跡が複雑に切り合う範囲である。136～141の土器は柱掘方内から出土するが、混在の様相を呈し建物時期の判断資料にはならない。136・137は糸切りロクロ土師器坏、138は手持ち篋削りである。139・140は回転糸切りロクロ土師器坏で、139底部外面不明墨書、140底部外面に「土」墨書がある。141は須恵器長頸壺である。

[I13区出土遺物142～145] I13区は、28・29・30号掘立柱建物跡が複雑に切り合う範囲である。142は何れの柱掘方にも属さないピットから出土し、回転篋削り整形でⅡ期－a以前の9世紀第2四半期以前の所産と言える。143・144は、30号掘立柱建物跡北東隅の柱掘方から出土している。何れも回転糸切りロクロ土師器坏で、Ⅱ期－bからⅢ期－aの所産といえる。145は29号掘立柱建物跡北柱筋柱掘方内から出土し、回転糸切りロクロ土師器坏でⅣ期－aを中心とした所産といえる。

[I14区出土遺物146・147] I14区は、28・29号掘立柱建物跡の東側プラン内に当たる範囲である。146・147は何れも回転糸切りロクロ土師器坏である。146は28号掘立柱建物跡の北東隅柱掘方内から、147は29号掘立柱建物跡の北東隅柱掘方内から出土している。146はⅢ期－a、147はⅡ期－bの年代感が与えられる。

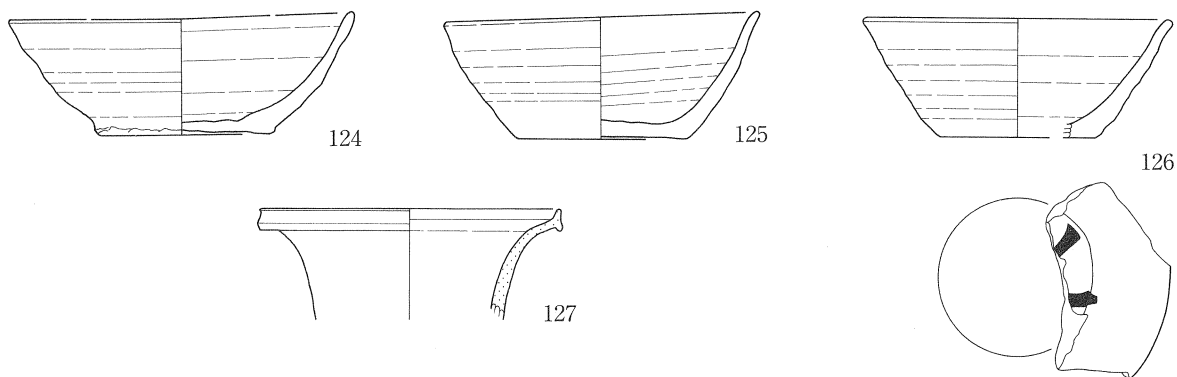
[I16区出土遺物148] I16区は、15住プラン上層に当たる範囲である。148は、回転糸切りロクロ土師器坏である。

[I17区出土遺物149～155] I17区は、31号掘立柱建物跡北側の遺構空白地に当たる範囲である。149・151・152が複合するピットから、150・153・154・155が単独のピットからそれぞれ出土している。151・152は何れも回転糸切りロクロ土師器坏であるが、152はやや特異な形状を呈することから、同一時期の遺物とするならば151からⅡ期－aの所産と考えるのが妥当である。150は外面に平行叩きの痕跡を僅かに留める鉢である。155は土師器大型台付鉢で推定口縁径34cm以上である。153・154はロクロ土師器坏体部小片の墨書で、154は「丸カ」と思われる。150・153・154・155は同じピット内から出土し、何れも祭祀的な遺物と思われる。

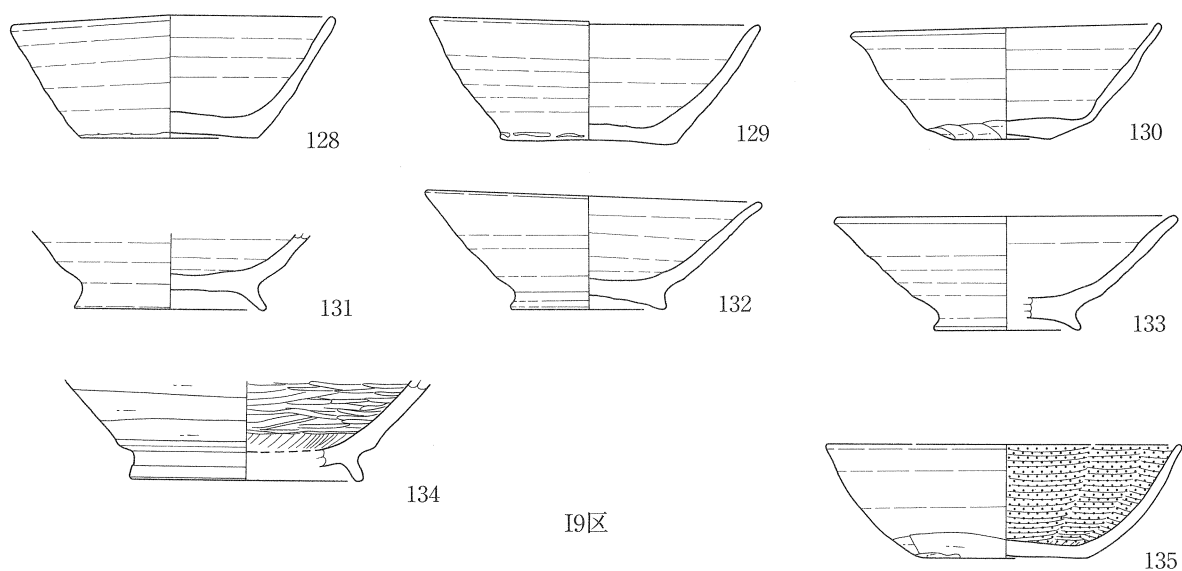
[J8・J9区出土遺物156～168] 37住南半分と6号溝を含む範囲である。156は非ロクロ土師器坏。157～162は回転糸切りロクロ土師器坏。163は底部のみ篋削りロクロ土師器坏。164は内黒で高台付碗と思われ、体部下端に不明墨書がある。165は回転篋削りロクロ土師器坏底部のみで、底外面に字以外の不連続な○であろうか墨書がある。166は回転篋削りロクロ土師器坏底部のみで、底外面に「九上」の墨書があり、下層の37住覆土からも同様なものが存在する。167はロクロ土師器体部小片で、外面に「丸」墨書がある。168は須恵器長頸壺である。

[J10・J11区出土遺物169～176] 遺構空白地と21住西プラン上層に当たる範囲である。169・170は体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器坏。171は底部回転糸切りで体部下端回転篋削りのロクロ土師器坏である。172・173は回転糸切りロクロ土師器坏で、173体部に「丸カ」墨書がある。174・175は土師器大型台付鉢の小片である。176は体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器皿で、底外面に「上」の墨書がある。

[J12区出土遺物177～183] J12区は、27・28・29・30号掘立柱建物跡が複雑に切り合う範囲である。

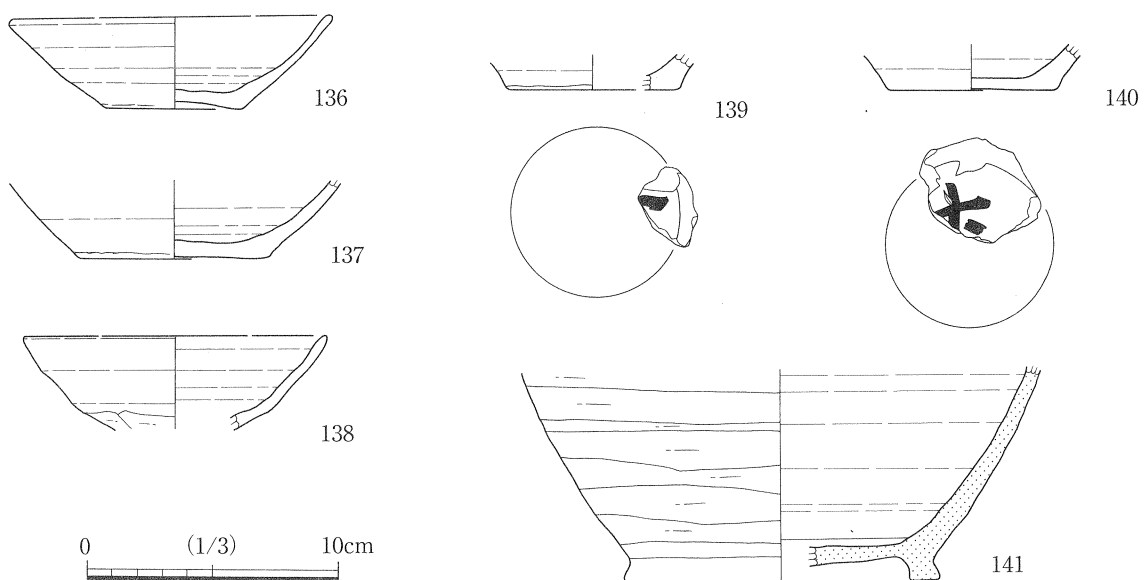


I8区



I9区

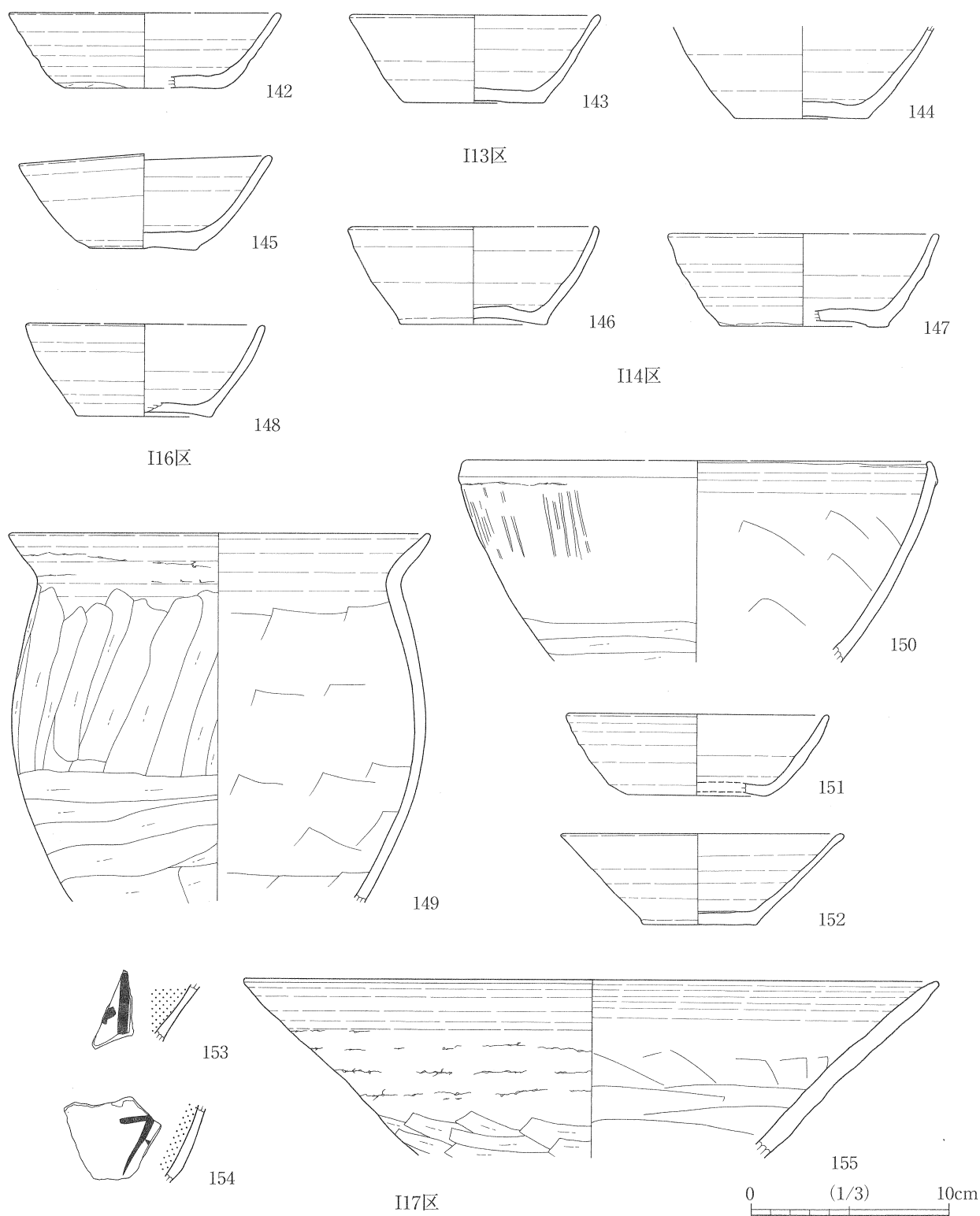
II0区



0 (1/3) 10cm

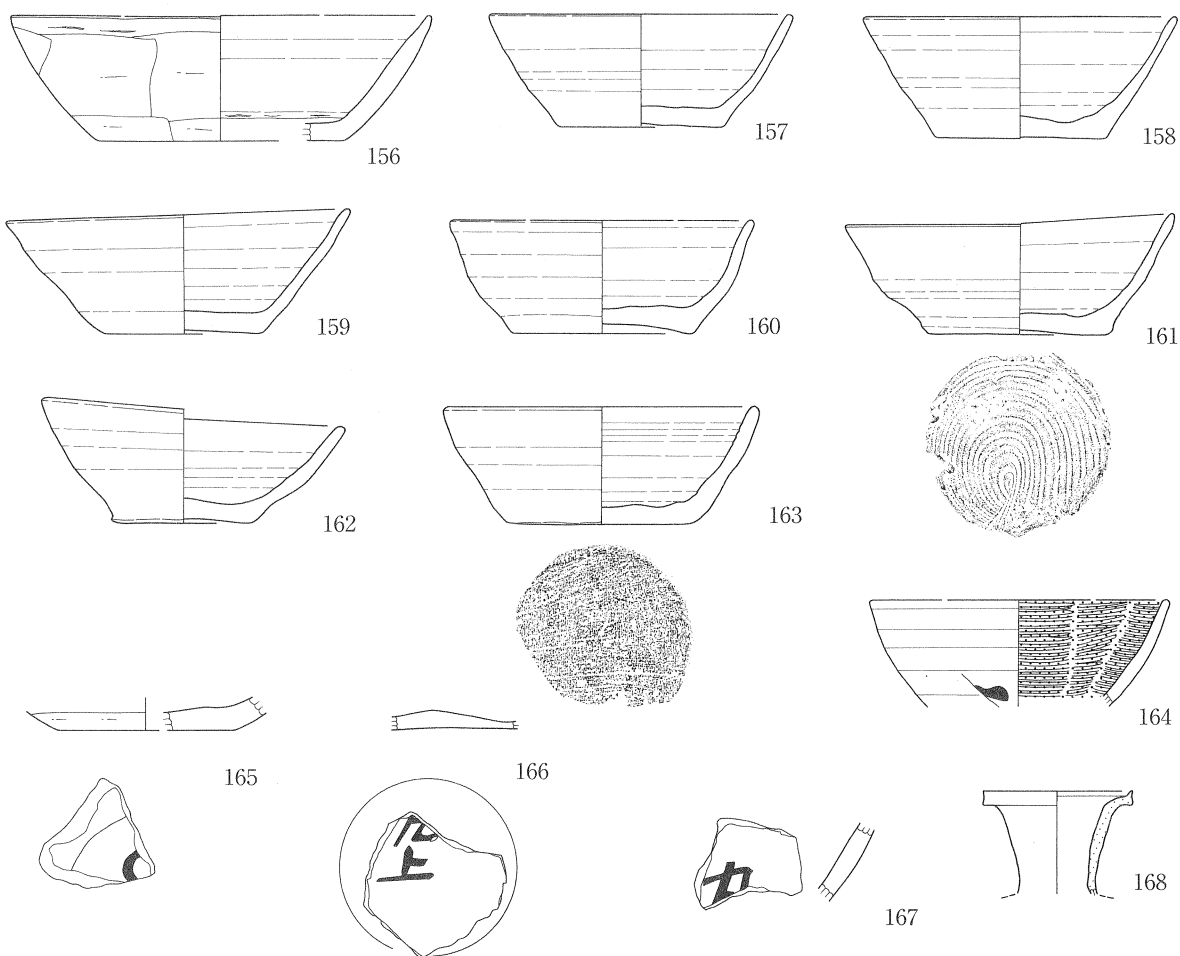
II2区

第183図 E地区グリッド出土遺物 (10)

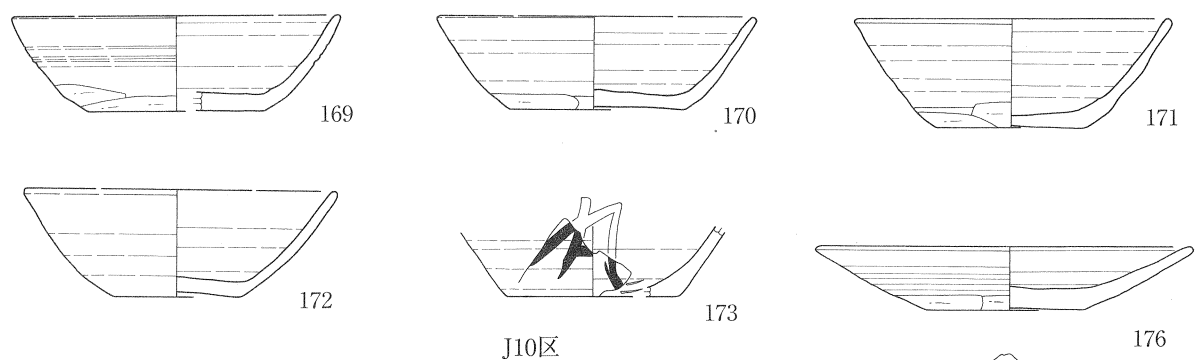


第184図 E地区グリッド出土遺物 (11)

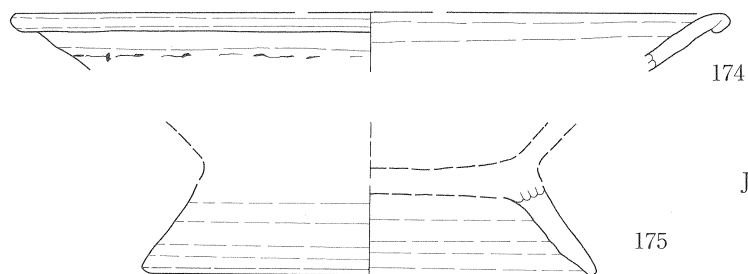
177は土師器甕。178の低い三角型の高台付碗の底部外面には、「井」の墨書がある。179は体部下端および底部手持ち篋削りのロクロ土師器坏で、口縁外面に「オカ粒カ」墨書がある。180は、30号掘立柱建物跡西柱筋柱掘方内から出土する底部回転糸切りロクロ土師器皿で、Ⅲ期-aを中心とした所産であろうか。181は内黒ロクロ土師器高台付坏である。182は須恵器長頸壺。183は大型台付鉢の口縁の一部である。



J8・J9区



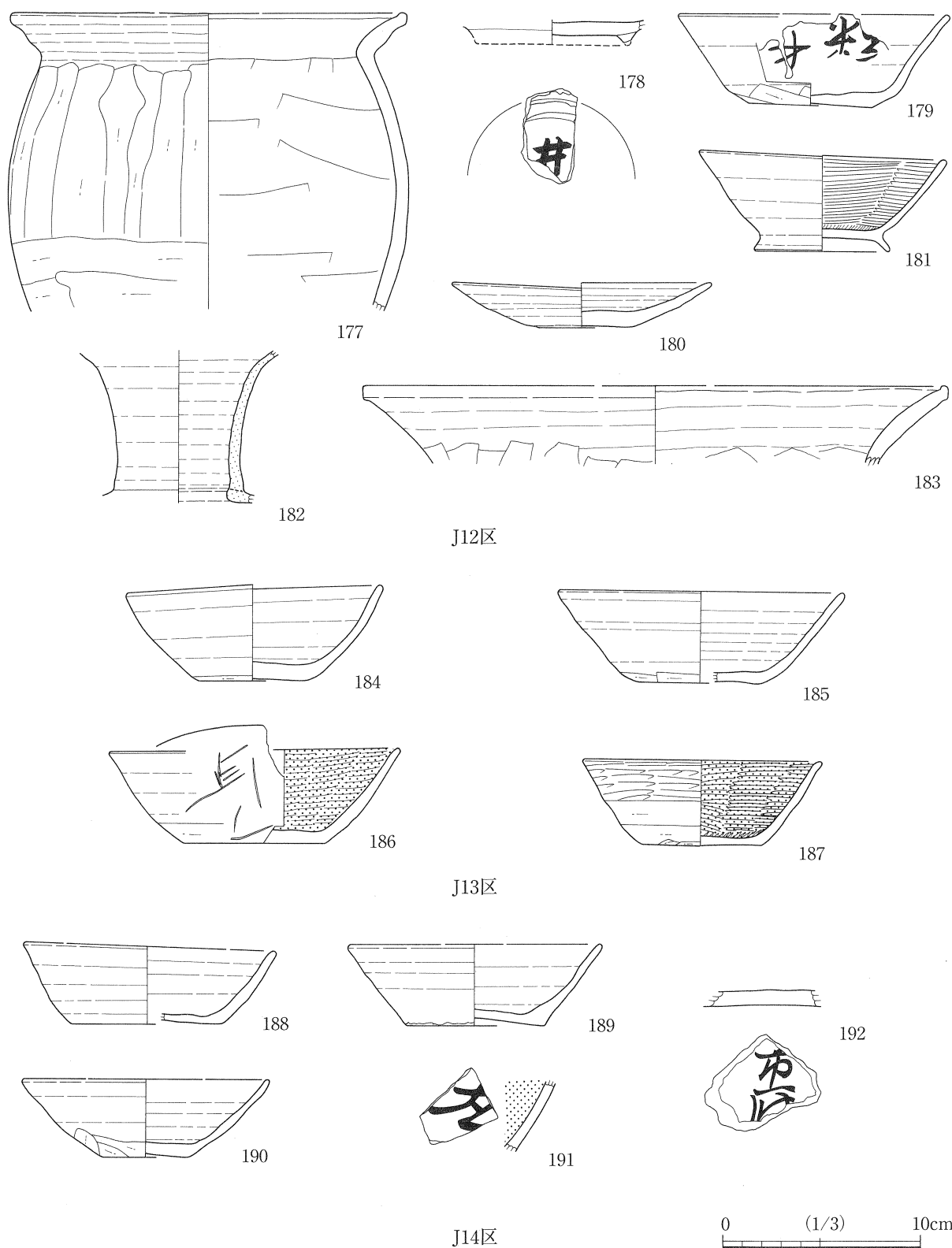
J10区



J11区

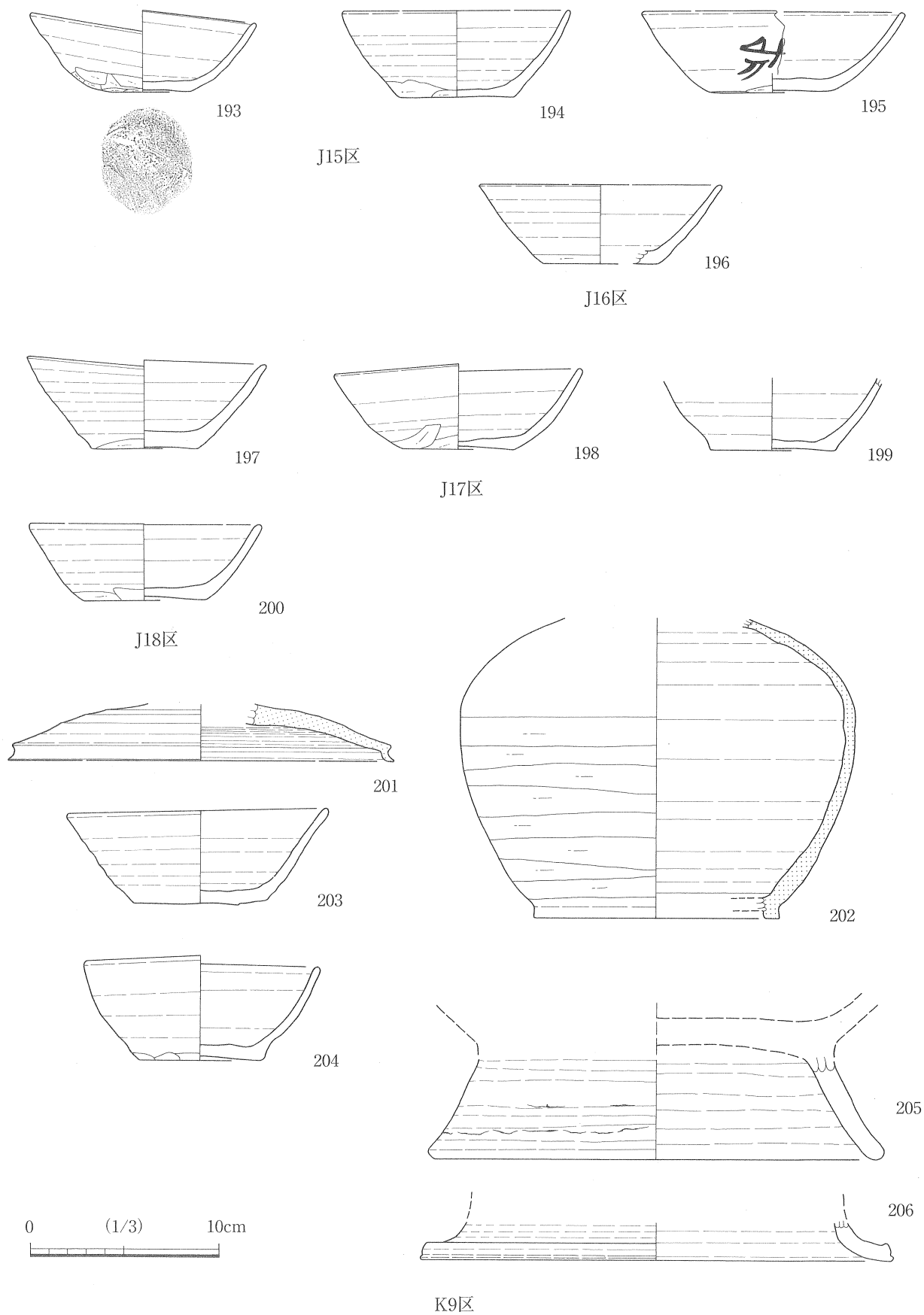
0 (1/3) 10cm

第185図 E地区グリッド出土遺物 (12)



第186図 E地区グリッド出土遺物 (13)

[J13区出土遺物184～187] J13区は、28・29・30号掘立柱建物跡が複雑に切り合う範囲である。184～186は、体部下端および底部手持ち鉢削りのロクロ土師器坏で、186の体部外面には焼成後に刀子などの切っ先を用いた鋭利な線刻がある。185は28号掘立柱建物跡柱掘方内、186は30号掘立柱建物跡柱掘方内から出土している。187は底部ナデ状の手持ち鉢削りの内黒ロクロ土師器坏である。



第187図 E地区グリッド出土遺物 (14)

[J14区出土遺物188～192] J14区は、28・29号掘立柱建物跡東プラン内と31号掘立柱建物跡西側に当たる範囲である。188・189は回転糸切りロクロ土師器坏で、188はピット、189は28号掘立柱建物跡東柱掘方内から出土する。190は体部下端および底部手持ち篋削りのロクロ土師器坏で、稲荷台Ⅳ期－bである。この土器は31号掘立柱建物跡西廂列の柱掘を切断するピット内から出土している。191はロクロ土師器坏体部小片で、外面に「丸」の墨書がある。192は土師器坏底部片で底部手持ち篋削りで、底径がやや大きく8世紀後半代の様相を呈する土器で、底部外面に「市厨」の墨書がある。

[J15～J17区出土遺物193～199] J15～J17区は、31号掘立柱建物跡プラン内に当たる範囲である。193は手持ち篋削り。194～196は回転篋削りで、195の体部外面には「山万」墨書がある。197～199は底部回転糸切りであるが、197・198の体部下端には調整の為の回転と手持ち篋削りを施している。193・196・197・198・199は31号掘立柱建物跡柱掘方から出土し、193は本区に存在した4号土器廃棄遺構の混入遺物であろうか。他の土器は稲荷台Ⅱ期－b～Ⅳ期－aに比定可能である。

[J18区出土遺物200] J18区は、22住上層に当たる。体部下端手持ち底部篋削りを基本とし一部手持ち篋削り調整が混在するロクロ土師器坏である。

[K9・K10区出土遺物201～219] K9・K10区は、38・39住の範囲である。38住はA期、39住はⅣ期－aである。201は須恵器蓋。202はA期の須恵器長頸壺である。203・204はロクロ土師器坏で、203は回転篋削りを基本とし、204は底部回転糸切り。205・206は土師器大型台付鉢の脚端部片である。207～209は回転篋削りロクロ土師器坏。209は大型のロクロ土師器坏で手持ち篋削り。211・216は回転糸切りロクロ土師器坏。212はナデ状削りのロクロ土師器坏。213・214は手持ち篋削りのロクロ土師器坏。215・216はロクロ土師器皿。217はロクロ土師器高台付碗で底部に回転糸切りを残す。218は土師器大型台付鉢である。219は須恵器長頸壺口縁片である。

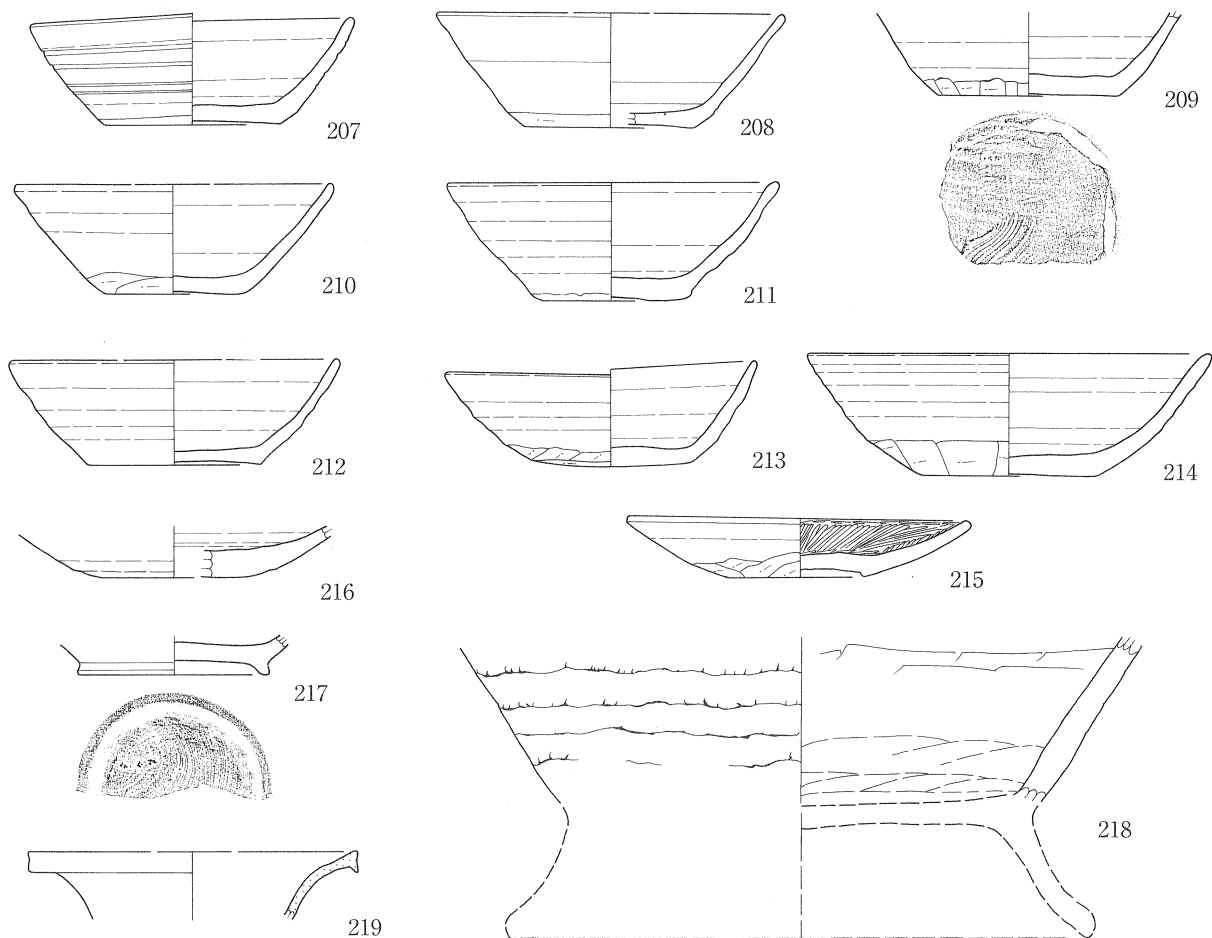
[K12区出土遺物220～222] K12区は、廂付建物の28・29・30号掘立柱建物跡南側のピット等が検出されるが遺構空白地帯に当たる範囲である。220・221は回転糸きりロクロ土師器坏。222は内黒ロクロ土師器高台付碗である。

[K13・14区出土遺物223～230] K13・14区は、廂付建物の28・29・30号掘立柱建物跡南側のピットが検出される範囲に当たり、グリッド南側からは祭祀遺構が集中して検出される地域にあたる。223・224・228は回転篋削りロクロ土師器坏、225～227・230は回転糸切りロクロ土師器坏、229は手持ち篋削りで底部外面に「三カ」不明墨書がある。223・224・226・227・228は共に小竪穴状の径0.6m程のピットから出土している。224は不明墨書であるが「三」とも読める。この小竪穴状のピット(K13-P2)は祭祀遺構の土器埋納遺構と看取される。時期はⅡ期－bであろうか。

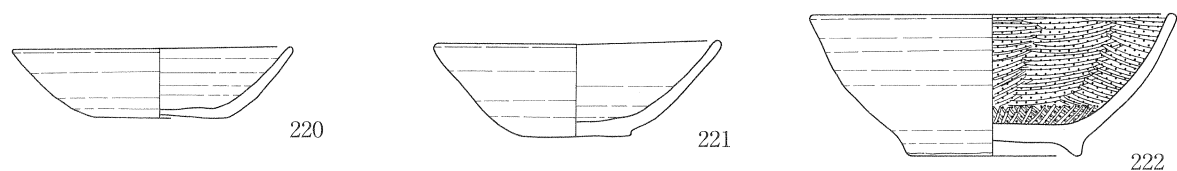
[K15区出土遺物231～240] K15区は、廂付建物の31号の南と32号の西側に当たり、グリッド南西には祭祀遺構を検出する。231～233は手持ち篋削りロクロ土師器坏、234・235は内黒高台付碗であろう。236・237はロクロ土師器高台付坏。238はロクロ土師器脚高高台坏である。239・240は土師器大型台付鉢の口縁破片である。

[K16区出土遺物241～243] K16区は、32号掘立柱建物跡プラン北側および14号住に当たる範囲である。241は、体部立ち上がり之急で底径7.8cm、K13-P2出土の226と同形を呈しⅡ期－bである。242・243は共にロクロ土師器坏小片の墨書で、243は「丸」である。

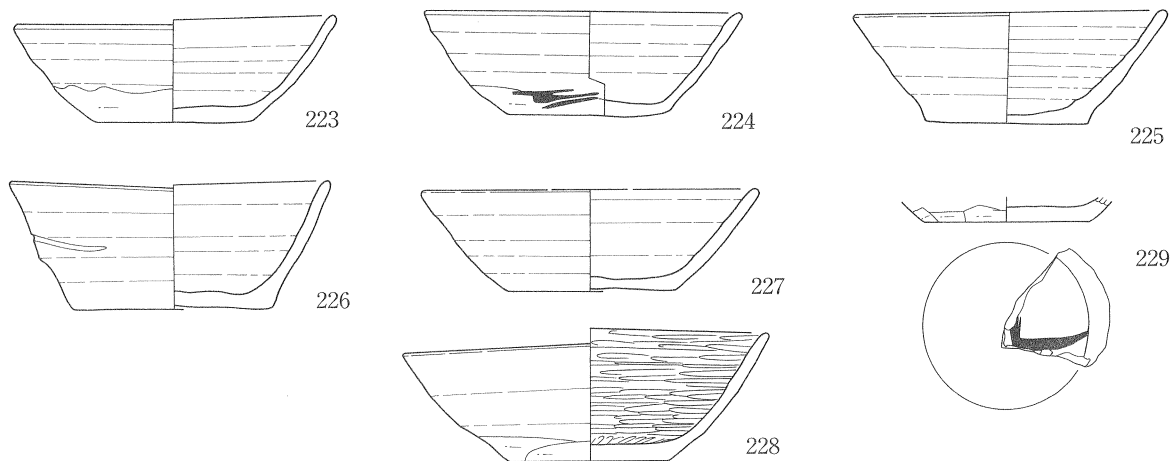
[K17区出土遺物244～247] K17区は、32号掘立柱建物跡東柱筋と祭祀遺構の1号土器廃棄・26住上



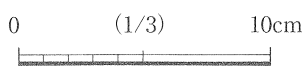
K10区



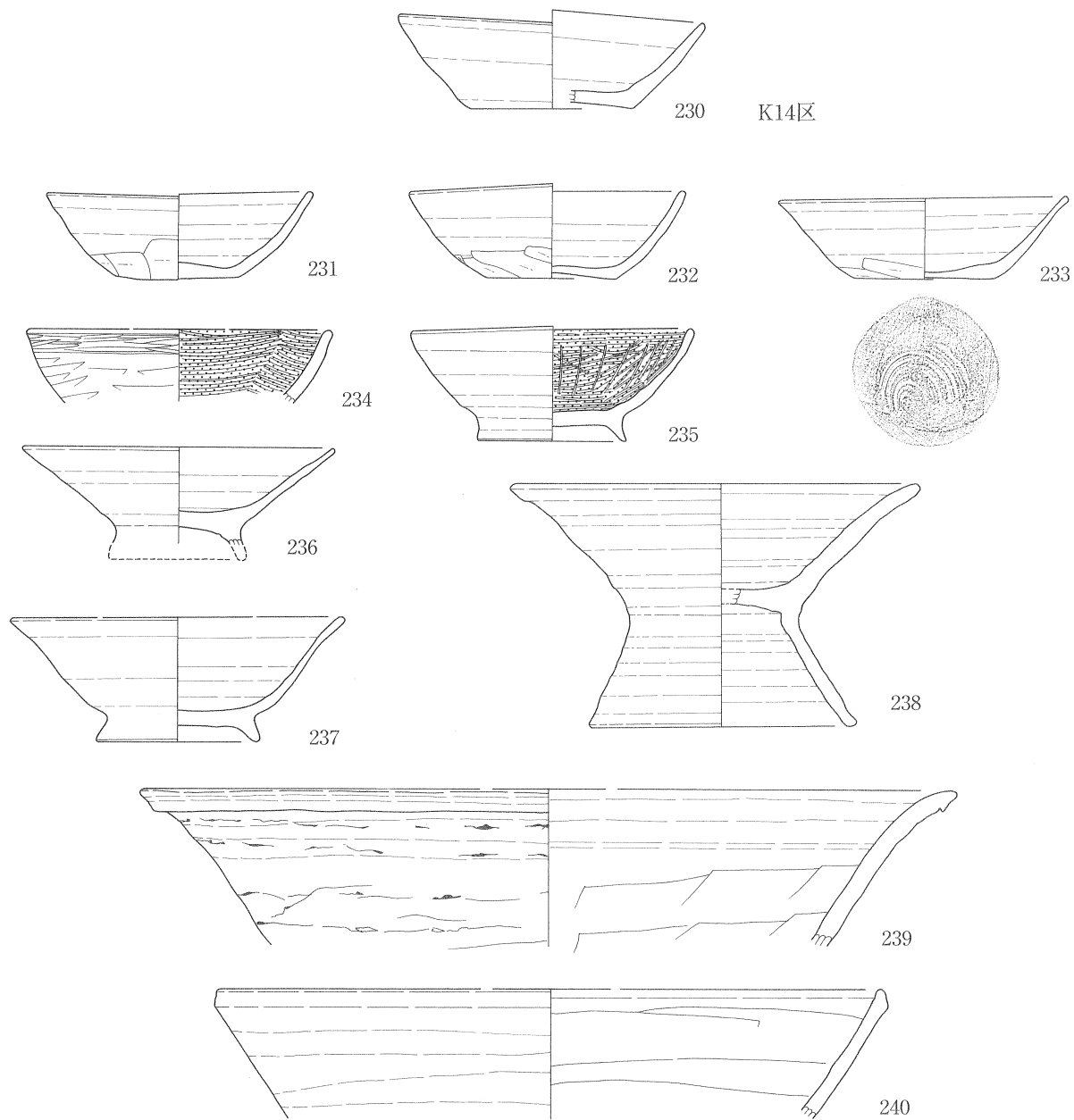
K12区



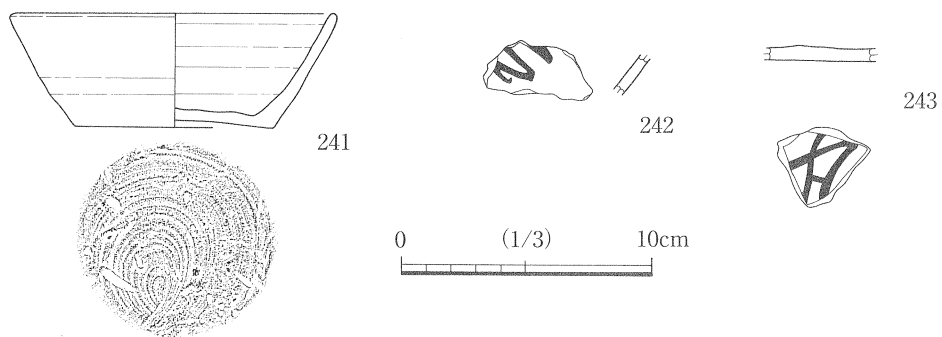
K13区



第188図 E地区グリッド出土遺物 (15)

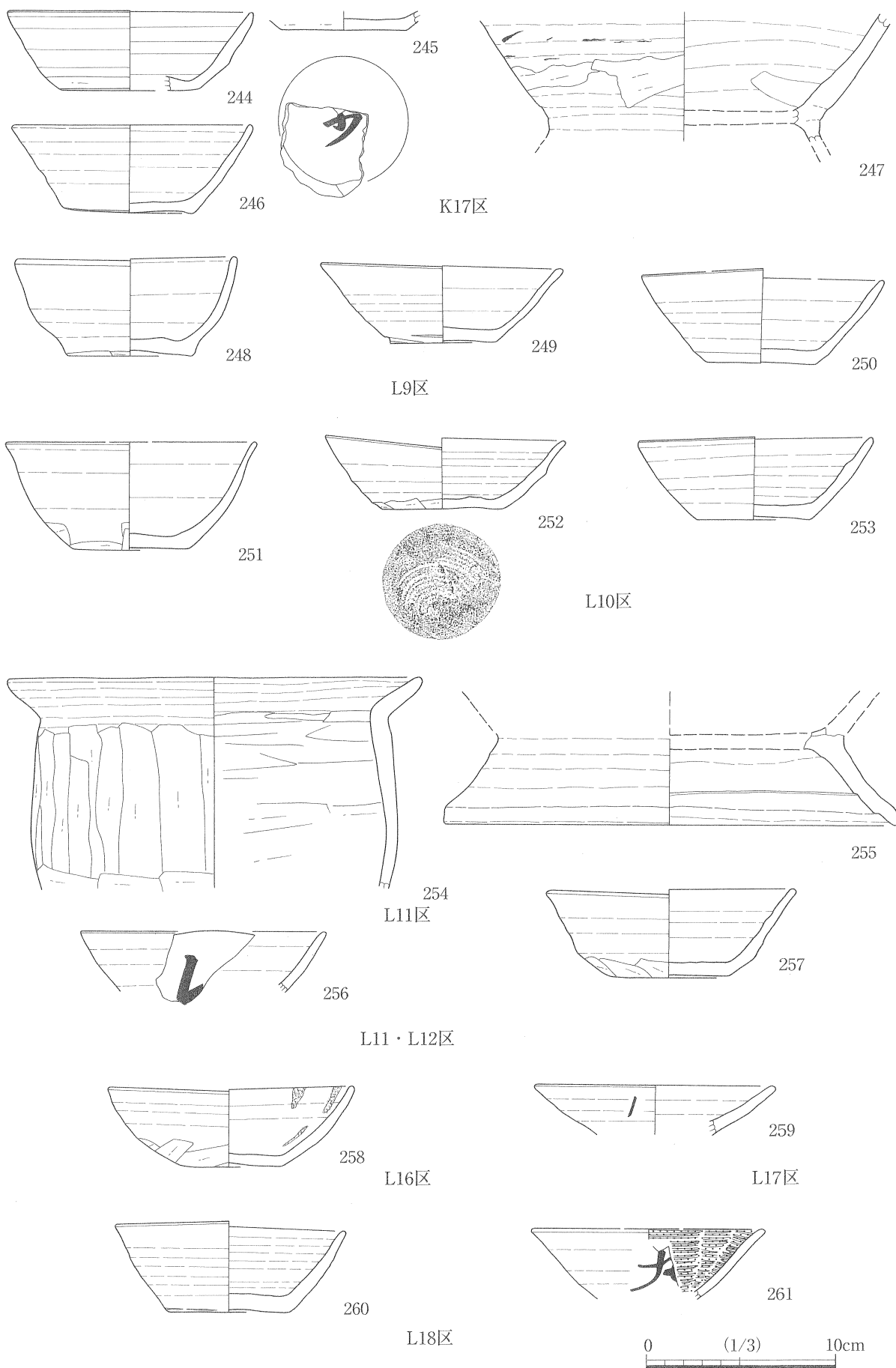


K15区

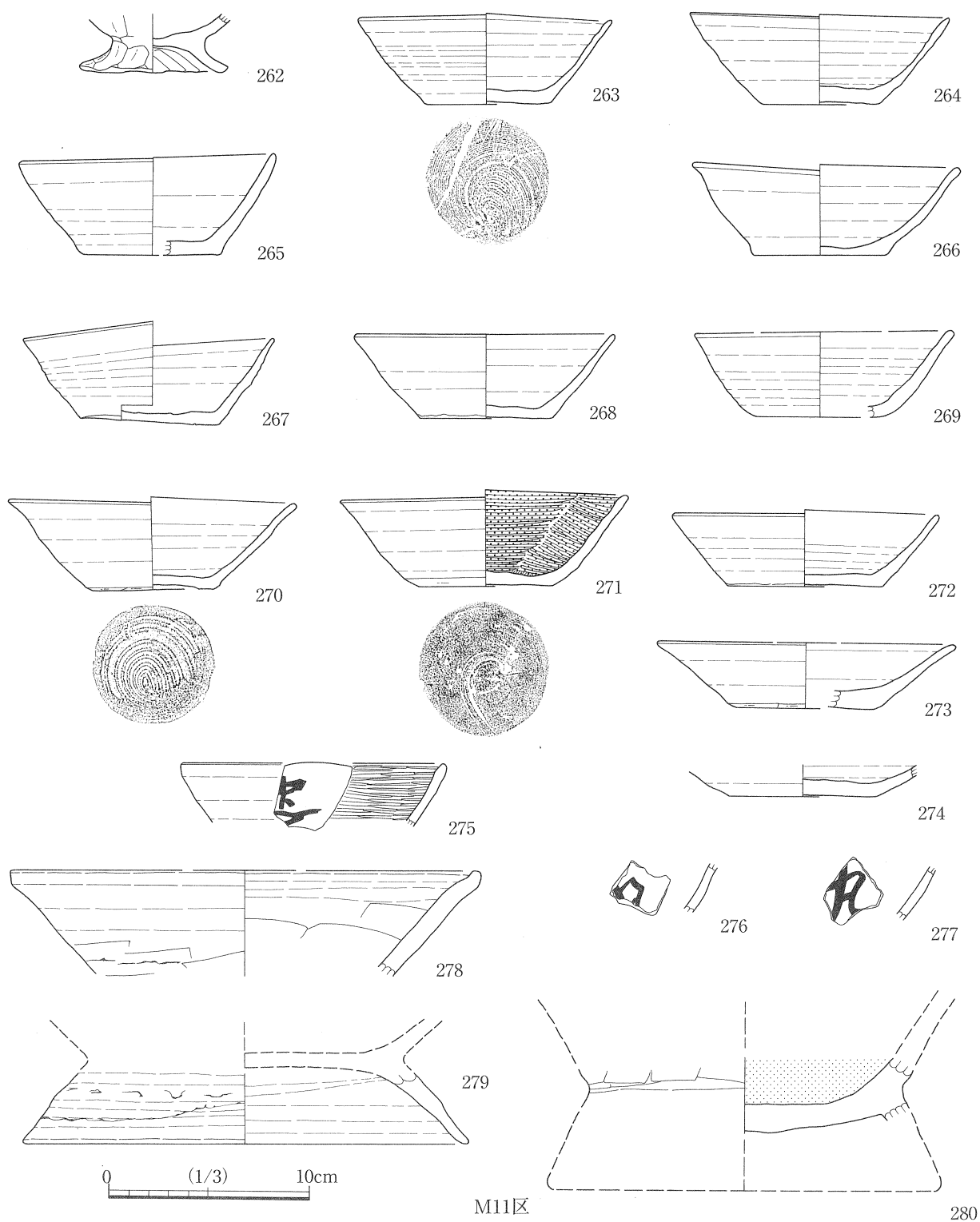


K16区

第189図 E地区グリッド出土遺物 (16)



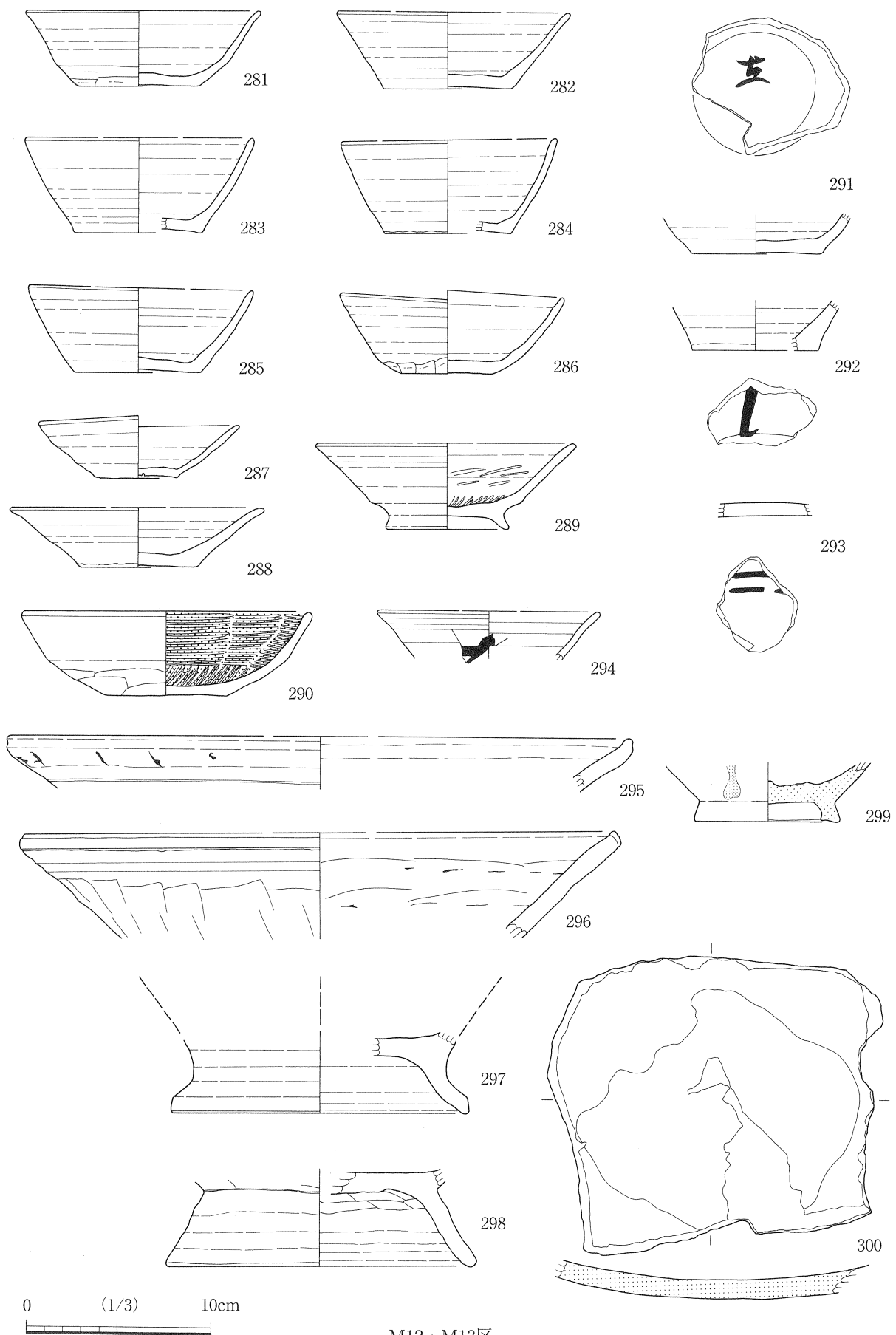
第190図 E地区グリッド出土遺物 (17)



第191図 E地区グリッド出土遺物 (18)

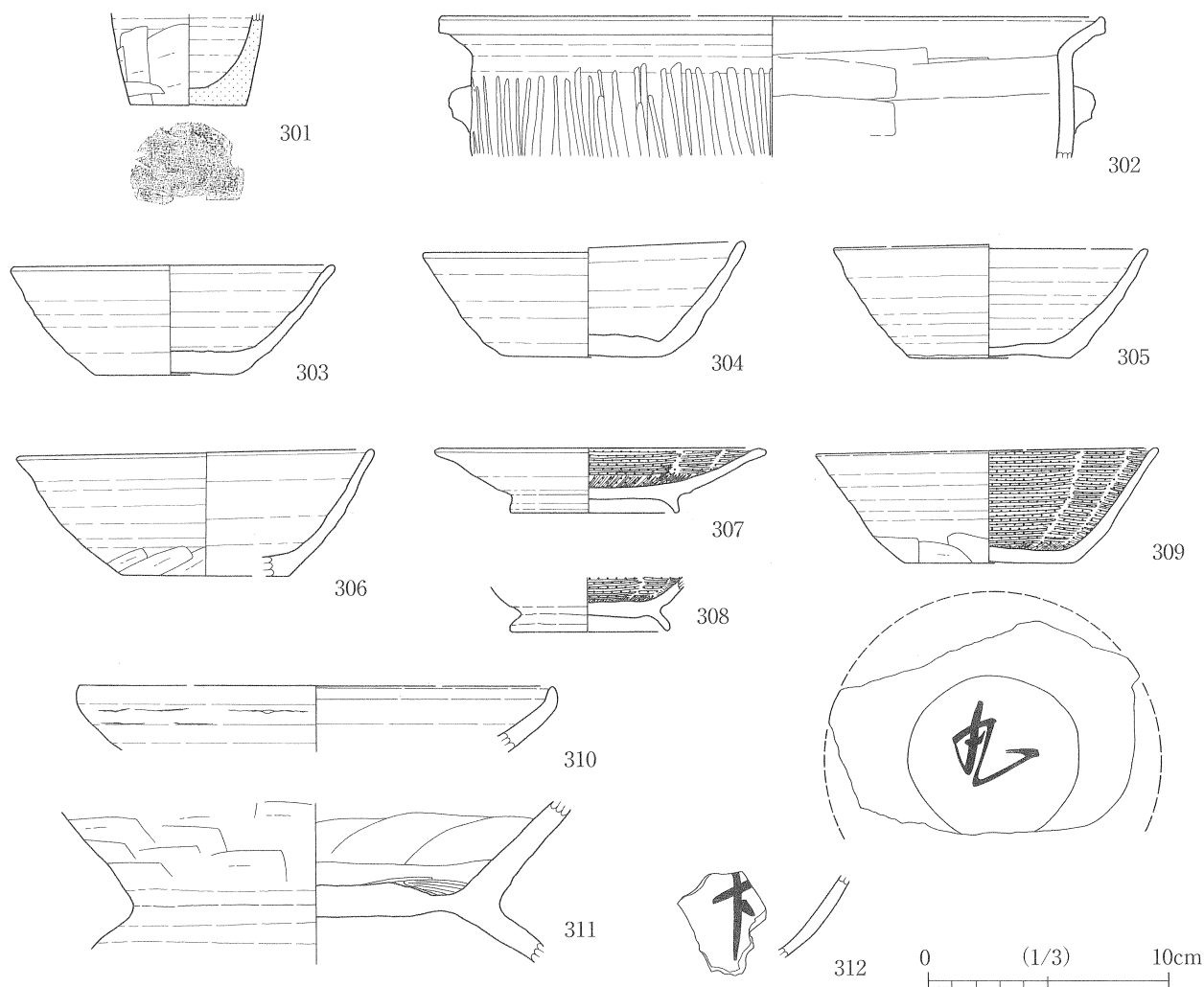
層に当たる範囲である。244は回転篋削り、245は手持ち篋削り、246は回転糸切りロクロ土師器坏である。247は土師器大型台付鉢で基部径14.5cmを計る。245の底部外面には「少カ」墨書がある。247は32号掘立柱建物跡柱掘方内から出土する。

[L9・L10区出土遺物248～253] L9・L10区は、37号掘立柱建物跡の一部と38住南側に当たる。248・249・253は回転糸切りロクロ土師器坏、250は回転篋削り、251・252は手持ち篋削りのロクロ土



M12・M13区

第192図 E地区グリッド出土遺物 (19)



M16区

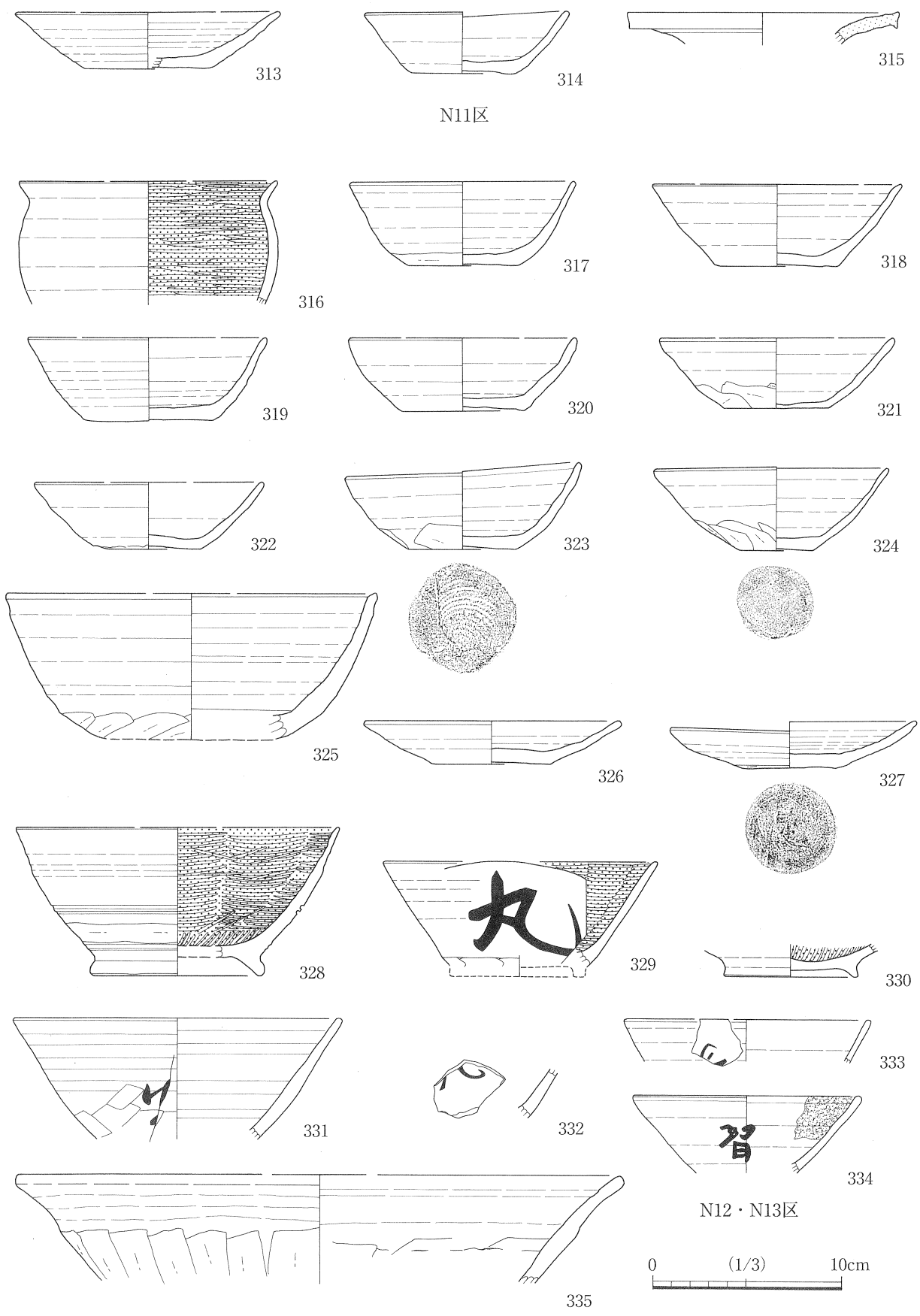
第193図 E地区グリッド出土遺物 (20)

師器坏である。

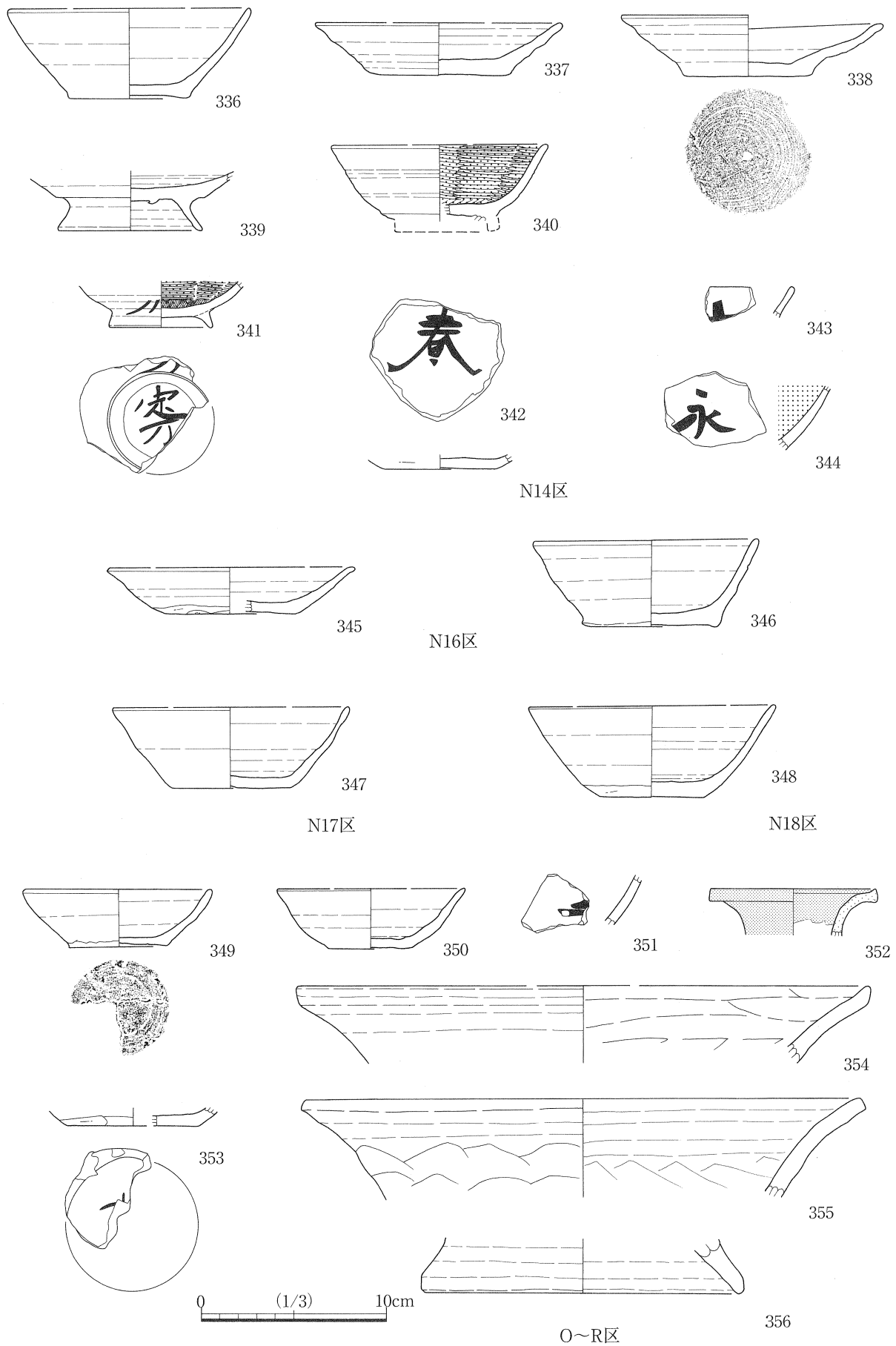
[L11・L12区出土遺物254～257] L11・L12区は、35号掘立柱建物跡の一部と40・41住に当たる範囲である。255は土師器大型台付鉢で基部径18.5cm・推定底径24cmを計る。256はロクロ土師器小片で外面に「丸カ」墨書がある。257は体部下端手持ち範削りで底部回転糸切りロクロ土師器坏。[L16・L17・L18区出土遺物258～261] L16区は、32号掘立柱建物跡プラン南側の範囲である。258は内面にタール状のカーボンが付着する灯明坏である。259はロクロ土師器小片で外面に不明墨書がある。260は回転糸切りロクロ土師器坏。261は内黒ロクロ土師器坏で体部外面「丸」墨書がある。

[M11区出土遺物262～280] 規模が不明瞭な35号掘立柱建物跡に当たる範囲である。262は土師器台付甕。263～269・272は回転糸切りロクロ土師器坏。270・271は回転範削りのロクロ土師器坏。273は回転範削り、・274は回転糸切りロクロ土師器皿である。275は内面ミガキのロクロ土師器坏で体部外面に「定万カ」の墨書がある。276・277はロクロ土師器坏体部小片で、276は体部外面に不明、277の体部外面に「丸」の墨書がある。278・279は土師器大型台付鉢で280の内面は丹塗りする。

[M12・M13区出土遺物281～300] IV期ーbの41・42住が複合し、規模が不明ながら建物跡が想定



第194図 E地区グリッド出土遺物 (21)



第195図 E地区グリッド出土遺物 (22)

され、また8号集石等の小ピットを伴う祭祀遺構が分布する範囲でもある。281は回転糸切りを残す回転篋削りロクロ土師器坏、282～285は回転糸切りのロクロ土師器坏、286は手持ち篋削りのロクロ土師器坏。287は縮小化したロクロ土師器坏。288は回転糸切りロクロ土師器皿。289はロクロ土師器高台付坏。290は内黒坏である。291～294はロクロ土師器坏で、291は内面に「主カ」、292は体部外面不明墨書、293は底部外面に「二カ」、294は「丸カ」墨書がそれぞれある。293の墨書「二カ」は途切れた線を意識したもので、欠損して失われる部分があるため推論はできないが、八掛の方位を表す記号に酷似している。295～298は土師器大型台付鉢。299は須恵器小壺。300は研磨痕跡が有り須恵器大甕片で転用硯である。

[M16区出土遺物301～312] M16区は、32号掘立柱建物跡プラン南に当たり、規模等不明な39号掘立柱建物跡を推定する範囲である。301は須恵器小型壺底部。302は体部に平行叩き目の土師器甕。303～305は回転糸切りロクロ土師器坏、306は手持ち篋削りロクロ土師器坏。307は内黒ロクロ土師器高台付皿、308は内黒ロクロ土師器高台付椀、309は内黒で手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏で底部外面に「丸」の墨書がある。310・311は大型台付鉢で、311の基部径は15cm 強を計る。312はロクロ土師器坏体部小片で、外面に「丸カ」の墨書がある。

[N11・N12・N13区出土遺物313～335] N11・N12・N13区は、34・35号掘立柱建物跡、43・44住や不明ピットが検出される範囲で、N13区東には2号土器廃棄遺構を検出する。313は底部回転糸切りロクロ土師器皿、314・322は縮小化した回転糸切りロクロ土師器坏、315は須恵器長頸壺である。316は内黒のロクロ土師器甕で内面にミガキを施している。317は体部下端に調整の回転篋削りで底部回転糸切りのロクロ土師器坏。318～320は回転糸切りロクロ土師器坏。321・323・324は手持ち篋削りロクロ土師器坏。325はロクロ整形の大振りの椀形を呈する。326・327は糸切りと回転篋削りのロクロ土師器皿である。328はロクロ整形の大振りで内黒のロクロ土師器高台付椀で、外面に2条に沈線を施している。329・330は内黒の高台付坏で、329は外面に「丸」墨書がある。331は大振りのロクロ土師器坏で体部外面不明墨書がある。332・333・334はロクロ土師器坏墨書で、334の外面には「智」の墨書である。335は推定径31cm を計る土師器大型台付鉢の口縁破片である。

[N14区出土遺物336～344] N14区は、33号掘立柱建物跡南柱筋と2・3号土器廃棄遺構が検出されている。336～338は回転糸切りロクロ土師器坏。339・340はロクロ土師器高台付椀で、341～344は墨書土器で、341は底部外面「定万」。342は底部内面「奉カ」。344は「永」がある。

[N16・N17・N18区出土遺物345～348] N16・N17・N18区は、11・12号住を含む南側の範囲でピット等が検出される範囲である。345は回転篋削りのロクロ土師器皿。346・347は回転糸切りロクロ土師器坏。348は回転篋削りロクロ土師器坏である。

[O・P・Q・R区出土遺物349～356] 同区は当初高圧線化の現状換地区域であったが、調査中に旧土地所有者により土取りがされた為遺存状態が極めて不良である。349・350は縮小化が終了したⅥ期の回転糸切りロクロ土師器坏である。351はロクロ土師器坏体部小片で外面に、また、353は回転篋削りで底部外面にそれぞれ不明墨書がある。352は須恵器長頸壺で内外面に降灰がある。